







中興俳諧名家集

装幀　津田青楓

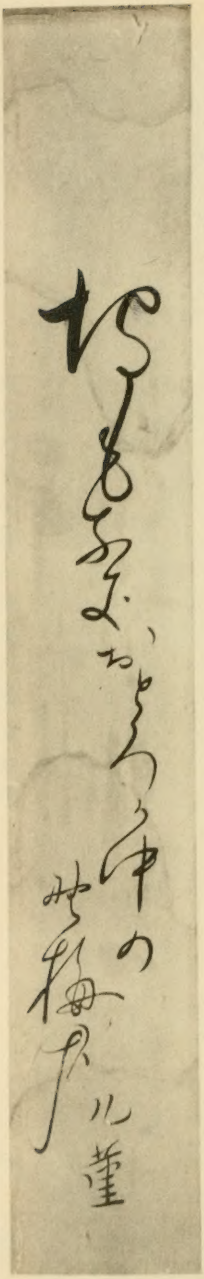
麥水短册



おもしろき鏡にやがて春の水

麥　水

几董短册

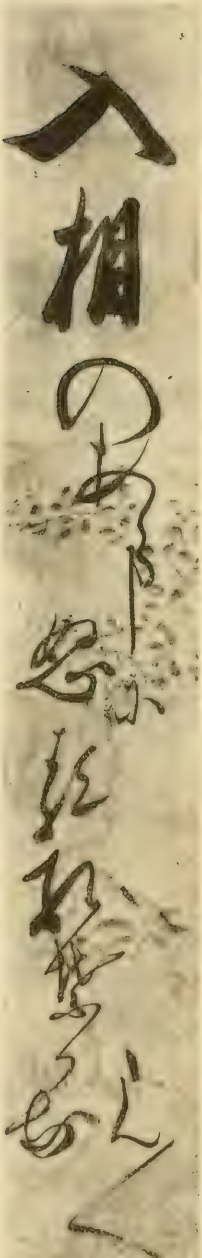


埒もなきおどろが中の野梅哉

几　董

淡々短册

（崎野平三氏藏）

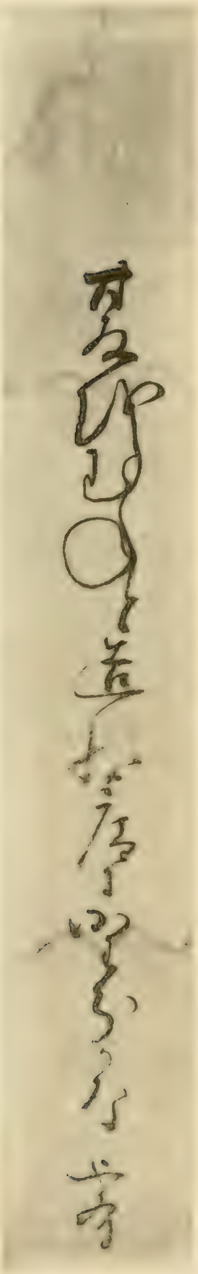


入相のあらしに怒る紅葉かな

たんく

也有短册

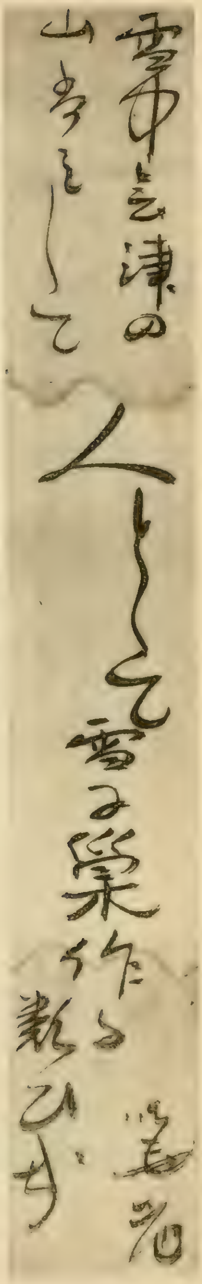
（同　）



夏たむれと造れば庵に野分かな

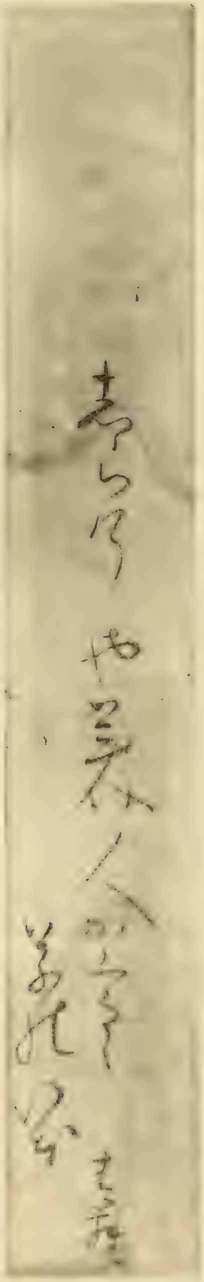
也有

曉臺短册　（崎野平三氏藏）



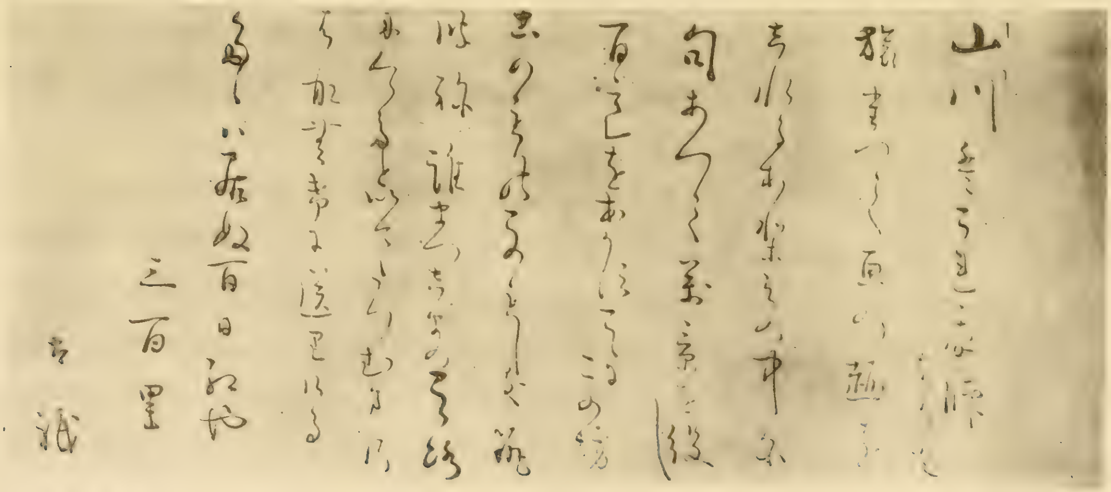
雪中會津の山ぶみして
人として雪に巣作る類ひ哉　曉臺

靑羅短册　（同）



しらけしや美人かくるゝ草のいほ　靑羅

太祇眞蹟



(川西和露氏藏)

解題

みかへり松

正徳四年板　　中本一冊

俗了した江戸座の中で、俳諧一道に堅固な人格を慕はれたのは祇空である。祇空は稲津氏、蕉門後期の一作者で青流と號し、京攝の間に流寓したが、たま〳〵旅中箱根の早雲寺を過ぎ、宗祇法師の墓前で事に感じて髪を落し、宗祇の一字を取つて祇空と改號したのである。この書は剃髪のことを告げて、知己より寄せられた發句を輯めたので、外題の『みかへり松』は宗祇同國のむかし、早雲寺中を佇徊して見還松と名附けた巨松の餘材を求め、文臺に製して愛用する事としたからで、詩人梁田蛻巖の跋文に詳記されてある。蛻巖は又俳諧を好んで龜毛と號し、共角に私淑してゐたので祇空との交際も深かつたのであらう。江戸藏前の俳人が祇空の人物を敬して、四時觀と稱する一派を擁立したのは享保時代になつてからであるが、祇空その人が江戸座と同一視されるのを嫌ひ、俗に法師風とよばれる俳諧を主唱した動機は、この時の剃髪にあるので、その記念出板である本書の歴史的意義は輕視し難い。祇空は俳道の凋落をなげき、宗祇より芭蕉へ不滅の傳燈をかゝげ、間接ながら中興諸派の運動に感化を與へてゐるが、川柳と同じような着眼點で「武玉川」を著した紀逸はその遺弟であり、紀逸の門から太祇の出たことに想到すれば、淡々よりも寧ろ巴人に近い立場に置いて、その中興諸派との交渉を考察して見る必要があるであらう。

花月六百韻　享保四年板　大本二冊

江戸座を上方化した淡々は世間的に成功したが、その系統の移竹すら「たん〱の色もはべるぞ種ふくべ」と一生を省みて自嘲してゐるように、決して心服されはしなかつた。年々厖大な歳旦帖を配り、青色の點式をつかひなどして、人氣策に巧みなところから中興前期の俳諧師として逸し難い位置を持つてゐる。俳諧の洒落と謎とを取違へた得意の作に、

うめの花こたへて曰くむめの花　淡々

の如くたゞそれだけの一人よがりに慢じてゐた風で、蕪村はこれを揶揄したものか、

梅咲くやどれがうめやらむめじやゝら　蕪村

と、「あらむづかしの假名遣ひやな」の詞書にかくれて、まぜつかへしてゐるが、俗世間的な人物には頗る潔癖な蕪村一門からも支・麥の黨のように嫌はれず、淡々門下との附合も二三殘つてゐる。『花月六百韻』は淡々の捌いた卷々に自註を施し、門人の大圭・李賦をして開板させたので、「或は故事によりてきこへがたく」とか、「淺くいひなして心ふかきも有」とか跋文に言譯をしてゐる如く、淡々の註解を必要としたところがその弱點でもあり、淡々の撰集中で最も理解し好いものとして世評のある理由でもある。跋の「延寶年中に花洛六百句有て序跋なし」とあるのは延寶八年板の自悅の著であるが體裁は相違してゐる。序者散雨は祇空の一號で、外題は花と月との題詠で百韻六卷を收めてあるから名附けたのである。

利休の茶の湯の誡を引き「何は道具也。點は商人なり」と喝破した其角の語に感激して、俳席にて點の勝負をばかり爭ふ江戸座の通弊にあきたらないで、作者五人の中の一人を判者と定め、歌仙了れば判者は點を合せ、作者は點の多寡に無關心でその結果をありのまゝ發表し、これを『五色墨』と題したのである。表向きの理由はさうであらうが、江戸座には系統による閥が行はれて、新人はいつまでも技倆をみとめられないので、反抗的に一致したのであるらしい。作者宗瑞及び蓮之は杉風門であるが後の採荼庵派は成立して居ないし、咫尺は嵐雪門であり、素丸は素堂系統ながら孰も雪門・葛飾兩派の勢力を張る以前であるし、長水は沾德門の江戸座と稱してよいが、後に伊勢風に變じたので見れば、『五色墨』の五作者は江戸座に對する不平組であつたに相違ない。殊に五歌仙の成就した竟宴の席に椒雨即ち人格者の祇空を招き、

うぐひすや大名座んより所　　椒雨

の發句で別に一卷を催してゐるので察しがつく。『五色墨』の主張は俳諧の本質には觸れないが、墮落した江戸座を向うに廻はして新勢力の出現する機縁となつて、たしかに成功を告げたものといつて好い。又この順番で判者を定めたのは『新撰六帖』をならつたので、俳諧には新しい試みであつた爲め、その徒の繼承者は孰れもこの形式を蹈襲する事になつたのである。

五色墨　　享保十六年板　　中本一冊

續五色墨　　寛延四年板　　中本一冊

『五色墨』と同一の體裁であるが『續五色墨』になると、作者も異れば周圍の事情も亦全く一變してゐる。即ち『五色墨』の徒としては素丸と寥和が存命するのみで、その素丸も俳統を二世素丸にゆづつての馬光となり、宗瑞は歿してこれまた二世宗瑞がその後をつぎ、寥和は隱居して表面にたゝず、別に江戸座に反抗運動を企てた雪門の一派が加盟する事になつたのである。『續五色墨』の發企者は二世素丸である。素丸は溝口氏、三世其日庵として葛飾正風の勢力を擴張した人で、その勸誘によつて加つた雪門の代表者は蓼太である。作者五人の俳系は二世宗瑞の採茶庵派である以外は葛飾派より二世素丸と、その推擧で同門の竹阿がはいり、雪門からは蓼太と斑象が手を携へて參會してゐる。寥和及び馬光の序があり、はじめに五子の點譜をかゝげ、互ひに判者となつて合點した形式は『五色墨』と同樣であるが、竟宴の卷はなく、雪門の吏登が跋を書いてゐる。『續五色墨』によつて世間的名聲を賣出したのは結局蓼太と二世素丸で、竹阿が一茶の師として名を知らるゝに過ぎないが、安永七年に採茶庵派の梅人が主唱して『三篇五色墨』があらはれたけれど、その徒は葛飾派の野逸及び柏翁・楚茗・柳門の如き第二流の人物であつたので、世間的にも『續五色墨』の評判すら得ずに了つたらしく思はれる。

夜半亭發句帖　　寶曆五年板　　大本二冊

夜半亭といへば蕪村の庵號に限らるゝようであるが、その老境に入つて文臺を開いた際に、亡師巴人の舊號を嗣ぎ、夜半亭二世と稱したのである。巴人は元文二年六月、江戸石町にて

我宿とおもへば涼し夕月庵

と詠じて、夜半亭を開くまでは郢月泉の號を用ゐて居た。豪放な其角に師事したので、その句も磊落であるが、嵐雪

にも亦私淑した爲め、江戶座の中に知己を多く持つてゐた。併し、その一方に偏頗せず常に行脚を事としたので、江戶座の俗臭はない。氏は早野、巴人は俳號で、享保十八年『一夜松』の撰を北野に奉納してからは宋阿の別號をつかつて居たのである。『夜半亭發句帖』は巴人の發句を門人雁宕が阿誰・大濟の同門と共に、亡師十三回の追善としてその筐中より搜り求めて開板し、「なに長き十三年を夏の夜　雁宕」の百韻及び巴人を追悼する人々の發句を附錄としてある。蕪村の跋によると、寬保二年六月巴人の歿するや「かの空庵に坐し、遺稿を探て一羽鳥」といふ文を作らんとしたが、流寓十年の後、雁宕よりの書信に接して、「さすがに淚もろく」その跋を書き送るよしを記してあるから、蕪村も巴人の師恩を永く忘れなかつたようである。しかし巴人の句境は蕪村一派の眼前致景とは別で、江戶座に近いのは全く時代の感化であつて致し方がない。原本は帝國圖書館の所藏である。

新撰武藏曲　寶曆三年板　中本一冊

家は札差、派手で金廻りよく仁俠であつた大口屋曉雨は、よし原を生活の全景とした十八大通の一人で、俳諧は藏前の四時觀一門であつた。四時觀派は同じ江戶座でも變つた祇空系統なので、曉雨が俠客に扮する役者の野卑なしぐさを蔑み、三升の助六を感嘆した逸話など、全くその俳諧の趣味的感化によるのであらう。曉雨の晩年、全史に望まれて表德をゆづり、曉翁と改名した時の發句、

ほうけたる尾花を人にまいらせん　　曉翁

によつて全史は「請けて濁さじ水盤の月」と附け、順次一卷の歌仙となつたので、これに諸家の月に寄せた發句を添へ改名披露のため配本したのである。全史は同じく札差の伊勢屋であつた。外題は跋に「此集の名附よ」といはれた夜の

夢に「雅俗をば月や知るらんむさしぶり」の句を得たが、千春の『武藏曲』に憚つて新撰の二字を置いたとあるので了解される。曉雨の俳諧は通人の旦那藝に違ひないが、全篇月の句ばかりを集めて見たのが曉雨好みであるらしく、作者には評判の役者や藝人、十八大通の人々も顏を揃へてゐるので、一代の俠客の俤を見る上にも面白いものであるが、實際は曉雨の特に目を掛けた四時觀派の心祇が代つて撰集したのであるかも知れない。原本は加賀豐三郎氏の所藏で、氏の好意によつて借覽校合したのである。

延享廿歌仙

延享三年板　中本一冊

江戸前の洒落か穿ちか滑稽か、たゞ人情味を現ふ事に關心して一卷の運びを忘れ、前句附に類似した流行となり、遂には川柳のごとく俳諧の發句から獨立するものが發生して、江戸座の主潮は雜俳化されるに至つた。『五色墨』は早くその傾向を察して起つたのであるが、江戸座自身としても安閑として居れない事情に漸く氣附いて、家元格の宗匠がその獨吟歌仙を持寄り、『延寶廿歌仙』の題名で發表したのが本書である。序に「延寶廿歌仙は芭蕉の翁の花なり」とあるのは、桃靑門下の俊才が延寶八年それ〴〵の獨吟廿歌仙を開板した事をいふので、「此廿歌仙は延享の年の花にして」まさに『延寶廿歌仙』に對峙するものであり、「誹諧の變化は時の花に流行すとも、正風のまことは霜にくちず、嵐にちらず」といふ主張で、江戸座を以て蕉門の時と共に變化したものに過ぎない辯解が、蓼太をして『雪おろし』に依つてその態度を難陳せしむる一理由となつたので、江戸座對雪門のはげしい論爭は此の廿歌仙を問題とした點から見て、いよ〳〵この書の重要さが知らるゝのである。作者の系統は左の如く

其角座——一世湖十門
- 二世湖十
- 石腸
- 秋風
- 木髮

沾德座
- 青峨門
  - 米仲
  - 存義
  - 謂北
  - 再賀
- 沾洲門
  - 祇丞

祇空系統
- 樓川
- 紀逸
- 馬勃
- 和推
- 和專

貞佐系統
- 超波門
  - 旨原
  - 買明
  - 蝸名
- 一世有佐門——二世有佐
- 貞佐門——平砂

宗因系統——一世盤谷門——二世盤谷

孰れも江戸座の門閥である事が解るであらう。發企者は二世湖十で深川氏、一世の養子であるが、巽窓湖十とよばれて湖十代々から區別されてゐる。

千代尼句集　　寶暦十三年板　　中本一冊

支考の徒と罵られた一派で、中興諸家にも交際してゐた評判の作者は加賀の千代である。千代に就いて後人の附會又は誤解した逸話の多いのは、彼女の世間に廣くもてはやされた爲めで、廬元坊の旅宿で一夜苦吟したといはれる

「ほとゝぎす〱とて明にけり」は『伊達衣』に同案があり、川柳子から「お千代さん蚊帳が廣けれや這入らうか」とからかはれ、その夫に別れた時の發句として有名で、フローレンツ博士の『落葉』にも獨譯されてゐる「起て見つ寐て見つ蚊帳の廣さかな」も亦千代の作でない。それだけ千代の名聲は諸國に聞えて、麥水は『鶉立』の序を乞ひ、蕪村も『玉藻集』の序を求め、白雄は加賀のその家を訪問してゐる。千代の發句集が生前既に板行されたのは世評の高い反映であつたとも見られる。卽ち『千代尼句集』は希因門の無外庵既白が千代の謙遜するを制して强いて編輯したのである。松因の漢文の序には過褒と思はるゝ位その人物を評し、闌更また「いでや句の姿はあはれにてつよからず」と女性の愼ましさを感嘆してゐる。此の續集は『松の聲』の外題で同じく既白の手で開板され、その後刷本には『續千代尼句集』とあつて、明治になつて刷出したものさへあるが、千代尼を貶する者があつてもその存在を看過されないのは、女流俳人たるが故ばかりではない。

蘿葉後集　蟻つか　明和七年板　中本三冊

『鶉衣』は也有を近世日本文學の大家としたが、俳諧にも四七の韻の如き歌仙の形式に囚はれない新體を提唱して、中興前期の作者たる位置を耻かしめない。たゞ也有の發句は美濃派の平淺な附合から脫化したので、その諷刺もその奇警も俳文のような輕妙な効果を收めず、平凡に落ち入るか、厭味を感ぜしむるかして、也有の俳諧思想を疑はするものとなつたのは惜まざるを得ない。也有の發句集は明和三年『蘿葉集』三卷の中に收めて板行されたが、俳諧の道に仕へた下僕文樵がその洩れたるを拾輯し、舊主の句稿に『垤草』とある題號を思ひ附いて本書を板行したのである。上卷には四季發句を類題とし、也有の生前常に瓢逸な畫を描いてこれに賛する事を好んで遺品も多い處から、中卷及び下卷

の大半を「前書贊物部」に充てゝあるのは、嘯山の『葎亭畫贊集』と共に畫贊のみの發句集として特異なものとされてゐる。『鶉衣』の俳文脈を承けた『ゑにふんで』の著者六林との和漢及び漢和の連句五卷を收めた附錄「戦洋篇」も、也有の餘技と見れば其の才藻のゆたかで自由に、輕快なるに敬服させられる。猶也有の發句集には天明二年の『蘿の落葉』があるが、此の『蟻づか』は流布本に乏しいので、藤井紫影博士の配慮で京都帝國大學所藏本より直ちに飜刻する事を得たので、也有研究者を喜ばすであらうと信ずる。

反古衾　寶暦二年板　中本一冊

江戸座は地方的に勢力を伸張しなかつたので、結城に阿誰・雁宕のやうな人物が現はれて、殊に雁宕の如き江戸座を排斥した蓼太と論爭して名を揚げた者のあるのはふしぎな位である。阿誰・雁宕共に巴人系統である緣故から同門蕪村の行脚を喜び、彼をして後年の素地をやしなはしめる爲め快く滯在させたのは、偶然の事情からであつたらうが中興俳諧史の上に興味ある問題を殘したものである。『反古衾』は巴人以後、結城の人々が百萬坊旨原を通じて江戸座と交渉を保つてゐたと見らるゝもので、蕪村の遊行柳のほとりにての吟、

柳ちり清水かれ石ところ〴〵　蕪村

を立句としての歌仙など甚だめづらしい。阿誰は箱嶋氏、その妻曾代、男浙江、女滿津の一家悉く俳諧を試みてゐる。雁宕は砂岡氏、江戸に出でゝ茅風庵を設けたが、遂に産を破つて流浪した人で、師巴人の爲め『西の奥』や「夜半亭發句帖』を出してゐる。『反古衾』は李井の序、百萬の跋を添へて、冬の發句若干と五歌仙を收むるのみで、俳諧の撰集では格別の内容もないが、蕪村と同系統の俳人が彼の初期に於て出板した意味で、その價値のおのづから他に異なる

ものを特記して置きたい。原本は碧梧桐氏が凸版で模したものがあるので、容易にその俤に接する事が出來る。

平安二十歌仙　明和六年板　中本一冊

太祇は嶋原に不夜庵を構へ、嘯山は長者町に葎亭を結んで、常に俳諧復古を志してゐたが、たま〳〵俳友の隨古が芭蕉・去來一紙兩筆の草稿を得た事を聞き、同道して隨古の長松下に至り、披き見て「すゞろ懷古の情にたえず、やがて三吟の發端となりて」明和三年十一月、嘯山の葎亭にて「白壁の月も細しや冬木立」の歌仙を發會として、翌四年九月長松下にて最後の二十卷を完備したが、「草稿のまゝ橘仙堂が棚架に打すてありけるを」蕪村が惜んで「あたら三吟なり、なんぞにしたまへ」と事の起りを序文として書き與へたので、それより三年の後に『平安二十歌仙』の外題を附して板行したのである。卷初には去來が浪化の發句に對する脇句に附けあぐんで、芭蕉の決裁を求め、芭蕉がその一句に加筆して治定せしめた一紙兩筆をそのまゝ模刻して載せ、蕪村自筆の序文をかゝげてある。嘯山・隨古・太祇の三吟は興行の月日と場所を記し、蕪村のいはゆる其角の体にも嵐雪の姿にも倣はず擬せず。當時の「蕉門とやらむ質をもはらにするにもあらず」三子のこゝろ〳〵に思ひ邪なきを以てしたので、個性を自由に伸し得たところに特色がある。追加に諸家の四季發句を收めて氣のきいた体裁のいゝ本である。原本は水落京二氏の藏架するところで、かつて追加を除き、『ホトヽギス』に覆刻された事があるが、今回水落氏の好意によつて直接原本から筆寫し、且つ校訂する事を得たのである。

新みなし栗　安永六年板　中本一冊

江戸座は俗了した。地方には美濃・伊勢の兩派が跋扈して卑淺な田舍蕉門となり了つてゐる。俳諧中興の運動は一人一黨の策略からでなく、當然成立す可きであつたが、第一にその叫びをあげ、具體的にその作を發表したのは麥水の『新みなし栗』である。麥水は堀田氏、樗庵と號し、加賀金澤の人で希因の伊勢風から入つて、その反逆者となつたのである。麥水の拮屈な『虚栗』への復歸に志したのは、かの集の跋に「後の盜人を待テ」とある芭蕉の一言に感憤したので、八水の序に「而して八十餘年、未嘗テ後盜を不レ聞、忽我樗先生なるもの起ツて」岐路に迷へる人々のため「よく其意を盜ミ得」てこの『新みなし栗』を撰んだのであるといふ說が、麥水の心事を了解したものゝ如く思はれる。

翻レ手成レ作覆レ手愚　紛々俳書何須レ數　君不レ見蕉門七部集　棄ニ盡糟粕ニ有ニ虚栗一

と、貧交行に擬した一作が麥水の抱負と、さうして其の慷慨的な口語を寫し得てゐる。麥水の新調は漢詩的な表現を事としたようであるが、蕪村の如きも「宗祇我を戀ふ夜眉毛に月の露を貫」の虚栗調を詠じて麥水の主張に同じてゐるので、多大の反響を起した事は疑ひない。四季發句の悉くが虚栗調のそれであるのみか、隨所に挿入した歌仙も同一で、附言「みなし栗の譯」に芭蕉・其角兩吟「詩商人」の卷に就いてその格調を說き、その主張の全篇に一貫せる點に感動されるのである。

其雪影　明和九年板　中本二冊

今春流の太鼓を打損じて俳諧師となつた其の事が人物の奇なるを思はせる几圭は、「はじめ巴人菴の門に遊びて」宋是と號し、「かたはら半時庵の徒と交りて」京都に居住したが、巴人の眞率も淡々の贅牙も几圭の俳諧を煩すところとならず、「ひとり俗談平話をもて、たくみに姿情を盡せり」と蕪村の評せるごとく、人情の美しさ、世態のをかしさを

寫す特別の技倆を持つて居た。その孝子几董が亡父十三忌に就き、師蕪村の描いた芭蕉・其角・嵐雪・巴人及び几圭の子弟相承の遺吟に「その雪かけの古ことを見」の脇起し歌仙を行ひ、師蕪村の描いた芭蕉・其角・嵐雪・巴人及び几圭の子弟相承に因む座像を得て、卷首蕪村の友情溢るゝ序、几董の亡父の附合を以てつくれる百韻、獨吟の歌仙その他連句二卷を掲げ、卷尾は書像を口繪に、同門知己の發句を春夏と秋冬の二部として編輯したのである。追善の集といへばその人を悼む心に支配されて、內容の洗練をかくが、さすがに几董の撰だけあつて、蕪村傾向の俳諧をよく代表するので、『蕪村七部集』の中に採錄されたが、七部集中のそれは杜撰甚だしいので、水落京二氏の藏本を借覽するを得て、原本と同一の體裁、字句通りとして本集に收めたのは校訂者の深く喜ぶところである。

雪になるつらだましいや松の風　　几圭

あけ烏　　安永二年板　　中本一冊

京都の俳壇から全國的に鳥瞰すれば、大多數は蕉門を口にするのみで沈睡してゐるが、既に尾張には曉臺の『冬の日』を高調するあり、加賀には麥水の『新虛栗』を主張するあつて、「今や不易の正風に眼を開るの時」こそ到來したので、師蕪村より常に「國〱の蕉門」なるものは「やゝ翁の皮肉を察して、其の粉骨をしらざるもの也」と語れるを想起し、同門馬南、後の大魯と、一夜「庵中に今古を討論し」て、臥すかとすれば忽ち、

ほとゝぎす古き夜明のけしき哉　　几董

の感慨を逆して、その日の兩吟を發表せん爲めに几董の企圖した集である。蕪村にその事の內諸を乞ひ、「惟ふに汝が信ずるや晋子也」とて「それよりして夜明烏や子規」の句によりて「此集の題號を明烏などよばんも可なるべし」と

の言葉を取つて標題に附した次第が、几董の自序に詳しくあるので、その序自身を解題として贅言を要しまい。本文は穎原草雨氏が原本と對校されたものであつて、氏の格別な好意を感謝したい。原本題簽には蕪村の筆にて『あけ烏』とある事を氏より告げられた時は印刷に着手後なので、『明がらす』と假に記して置いたまゝ差換をなし得なかつた以外に原本と相違ない事と思ふ。

續明烏　安永五年板　中本一冊

前集は几董の若い躍るような心で、その躰得せる新俳諧を表現したのであるが、續集にはつの期待が酬いられて、道立の序に「今や蕉翁の教化、人ゝえたりとするも、また氣運のしからしむるか」とあるので、几董の喜べる顔色が覗はれる。師蕪村と樗良との三吟は『附合手びき蔓』に引例して、

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

の發句に對し、樗良の脇句「山もと遠く鷺かすみ行」を以て「此ワキは只粉骨もない句のやうに、しらぬ人はおもふ句なり、されど發句に至極かなふたワキ也」と評し、その附意を解いてゐるので快心の作と見るべく、甲・乙の二卷に蕪村一派の四季發句及び連句十二卷を収め、連句は「表六句」より「歌仙」に至る諸形式に渉つて、蕪村を提敬させた几董の連句に關する技倆の進境を見るによい。その中に二柳が几董の亡父と嵯峨の雅因亭にあそび、灯さぬ堂上にほとゝぎすの啼過るを聞き、螢の飛ぶを見て、几圭の「涼しさや闇の野づらも訪られ」の句があつたといふ昔話に感をなして、「共さまおもふ柿のかたびら」と繼ぎ、たゞちに兩吟を卷いた如き几董の連吟を思はせるものがある。原本は「蕪村七部集」に載つてゐるが、板下に疎漏があるので、これ亦水落京二氏の提供された原本により嚴密に覆刻

したのである。

寫經社集　安永五年板　中本一册

洛外一乘寺村の金福寺にその蹟の殘る芭蕉庵再興集である。蕪村はその再興記を書いて「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」は金福寺にての作なるように、松宗和尙の物語を傳へてゐる。『嵯峨日記』にこの句は「ある寺に獨居していひし句也」とあるに一致するが、鐵舟といへる大德が寺中に一室を構へ、芭蕉の句を聞て「あなたうと、亡機逃禪の郷を得たり」と流涕しつゝ、芭蕉庵とその室に號けたといふのが事實であらう。再興發企者は蕪村門の自在庵道立で、寺中の殘照亭に會して再興を記念する爲め、安永五年四月、

植かゝるはじめはひくき田うたかな　道立

の發句にて一歌仙を行ひ、それより寫經社とよぶ蕪村一門の結社が成立したのである。『蕪村七部集』に收めたものゝ全部は「花櫻帖」を除いて、几董の撰集ばかりであるが、此の『寫經社集』は道立を後援して、蕪村手づから板下を書いたものなので殊に珍書として喜ばれる。帝國圖書館の藏本によつたが、刷り違ひの個所があつて文脈の接續しない爲め、乾木水氏の覆刻本にて校訂すると共に、席上探題の發句を補つて原本の體裁を完からしむる事を得たのである。

五車反古　天明三年板　中本二册

人に接するに冷然淡如たる性向の蕪村をして、その死を哭して「我俳諧西せり、我俳諧西せり」と再語させた春泥

舍召波の十三回忌に、その子維駒の追善出板した書である。蕪村の序によれば召波が「筆まめに書あつめたるものを、よゝとねぢこみたる帋の紐ときて」見れば詩あり、文あり、歌仙の半にして罷引けるもの、人々の發句等があつてそれを首尾の二卷としたのであるようだが、實際は維駒に代つて几董がその遺稿を整理したのであらう。外題は卷中の脇起俳諧に、

冬ごもり五車の反古のあるじ哉

とある召波の遺句を取つたのである。蕪村その序を諾して病の爲め果さず、維駒の督促を「明日を待チて脫せむ」と言ひ逃れて、病小閑なる時に漸く序文を書したと序文に記してあるが、蕪村はその年十二月故人となつた事實を思ひ起せば、師弟の因緣の淺からざるに感動せざるを得ない。「曲水や江家の作者誰〳〵ぞ」の召波の句に對する脇起しの歌仙を卷初に置いて、その他の連句亦悉く脇起しであるが、諸家の發句は蕪村一門に限らず中興の諸派に涉つてゐるので、當時の風調を知る好箇のものである。原本は川西和露氏の藏するところで、每卷氏の援助によつて校訂に便宜を受けてゐる通り、本書もまた直接原本と對校したので『蕪村七部集』に誤れる個所は悉く訂正されてゐる。

續一夜松前集　　天明五年板　　中本二冊
同　後集　　同　六年板　　同　同

北野の聖廟に夜半亭一世巴人がその著『一夜松』を奉納したのは元文十八年であつた。門人蕪村は或人が宗匠たる可く勸告せるに、同門几圭の子几董が「我門に在て永く先師の敎を守らば勸に應ずべし」といつて、夜半亭は几董に繼承させる考であたが、明和七年三月その夜半亭を京都に移し、みづから二世を嗣いで文臺を開き、『續一夜松』を撰んで

再び北野に納むる意圖を抱いたまゝで故人となつた。几董は師蕪村の遺志をついで天明五年江戸に下り、彼の石町の巴人舊庵の邊りに旅亭を設け、『續一夜松』の撰集に着手した際、知己の蓼太はその意中を察して几董にすゝめ、夜半亭三世を嗣號させたのである。几董歸洛後、旅中に關東の諸家と興行した二十二巻の連句を以て、先づ稿をとゝのへ、北野に奉納して板行したものが『續一夜松前集』である。かくて翌六年の九月に、京攝に於ける一門と特に交際の深い諸家との連句に、奉納發句の短冊を添へて三度北野に納めて、その後集に充てたのである。前集には蓼太の跋、几董の跋とを附して、全篇歌仙のみであるが、後集には重厚の序、道立の跋を錄し、且つ前後の集を元・亨・利・貞の四冊として、兩者の聯絡を保たせてある。同門の勢力さへ一致して居れば、夜半亭を相續するのにも蓼太の後見を要しなかつたらうし、『續一夜松』にしても前後の集に別けず、同門との連句のみで完成したであらうが、蕪村一派の世間的聲望は蓼太に及ばず。一門の結束も多少にぶく緩んでゐた結果、不本意にもかうした事情の下に嗣號・撰集の業を果したのであらう。原本は川西和露氏の藏本にて筆寫し、更に水落京二氏の藏本を借覽し、兩本を對照しつゝ校訂したのである。

骨書　　天明七年板　　中本二冊

中興諸派は互角の勢力であつたから、提携してその運動を促進はしたが、霸者となつて全體を統制する人物とてはなかつた。さしあたり蕪村がその實力を備へて居るようで、一門から敬慕されたのみで、比較的蕪村に接近した樗良・青羅といへども同格の交際をして居たに過ぎない。樗良は三浦氏、志摩の人で、伊勢の山田岡本町に無爲庵を構へ、俳諧は無系統であるが、伊勢風のあまりに卑俗なる爲め新風を唱へたので、青羅は江戸の人、松岡氏、美濃派の玄武坊

門下であるが、播磨の鹿兒に三眺庵を結んで、獨立したので、兩者の俳諧的境地は多少類似したところの無いではない。樗良、かつて鹿兒に行脚の杖をとめて青蘿と兩吟を試みたが、兩者の氣分が融合して殆んど同調の如く思はれる。『骨書』は青蘿の門人李雨が、その時の兩吟七卷を祕め置いたものを樗良の歿後、追憶の爲め一集としたので、撰者はその李雨の名義であるが、青蘿の著と見なして好いので、本集には青蘿及び樗良の俳諧を代表するものとして收錄したのである。樗良にはその七部集もあつて著書にも乏しくないが、俳諧主として連句の力量は『骨書』の七卷を通じて略了解し得るであらう。

春秋稿　天明五年板　中本二冊

關東正風を開拓した白雄は人格者と信じられて、多數の歸向者を得たが、その「姓氏を隱して」偶たづね問ふ人あつても「たゞ微笑して更に」答へなかつた隱逸の士で、白雄を敵視した烏明側では淺草の下駄店の甥であると蔑んでゐる。加舍氏、春秋庵は安永九年江戸の附木店に結んだので、「春秋稿」の初編に巣兆の父竜齋は「もと春秋の風物に目を委ねし」ために、斯く呼んだのであると記してゐる。白雄は希因系統の烏酔の門であるから伊勢風を信じたので、蕉門の寂栞を提唱するまでは世間的にその名を知られなかつたのである。『春秋稿』は蓼太の「探荷集」にやゝ似て、白雄が年々撰んで一派の風調を示したもので初篇以後、第五篇に至るまでは自筆の板下であるが、余の藏本初篇はその一部を缺く爲め、乾坤二册の完備した第四篇を以て、その體裁と俳諧の傾向を察知する事にしたのである。關東正風の名のごとく江戸近くの國々の作者が多く、「榧の實の落る露だにひとつ哉」の白雄門の女傑星布の興行した卷以外、道彥や巣兆等の八弟子は寬政時代になつて崛起したので、此の集には一向あらはれて來ない。雜淳な言葉を以

て遒勁な線をたすのが白雄の俳諧の特色である。

秋の日　　明和五年板　　中本一冊

麥水の『新虚栗』と前後して、『冬の日』の古調を主唱したのは名古屋の曉臺である。『冬の日』が蕉門開基の一集として定評のあるところから、曉臺はその門人駅六の家に傳來する芭蕉と尾張蕉門との俳諧一卷を得て、これに擬せる新作四卷を附して此の『秋の日』の五歌仙を發表したのである。曉臺は久村氏、暮雨巷と號し、美濃派の白尼に門入して人となつたので、『秋の日』を板行するころには同派の也有に序を依囑し、敢て獨立の一派を起す考もなかつたらしいが、その調の四方に反響して共鳴者を多く得たので、遂に京都の蕪村一派と氣脉を通じ、中興運動の一成功者となつたのである。駅六の家に藏せる一卷は貞享五年七月、長虹亭で興行されたので、其坐の荷兮が執筆せるものである事が也有の序文に見えてゐる。曉臺の俳諧は江戸の蓼太・白雄と共に多數の同好者の間に行はれたが、流石にその着眼の高い爲めに卑俗に落る事がなかつた。『秋の日』は片々たる小冊子ながら、曉臺の態度を決定せしめた意味に於て閑却し難いものである。

幣ぶくろ　　安永三年板　　一冊

『秋の日』によつて識見並に力量を認められた曉臺は京都に龍門を構へ、蕪村もその勢望の高きに服したようで、兩者の興行した俳諧は中興の格調を力強く表現してゐるので、此の『幣ぶくろ』を『曉臺七部集』の中から選定したのである。曉臺門の士朗・都貢の上洛日記であつて、他の撰集とは少しく趣きを異にするが、曉臺・蕪村が門阿彌亭にて會

し、蕪門より几董・大魯、龍門より士朗・都貢が同座して、蕪村の

夕風や水青鷺の脛をうつ

を發句としての歌仙は作者の緊張した氣分が一卷に溢れてゐる。『幣ぶくろ』は此の一卷ある爲めに内容價値を高からしめてゐるが、單行本の所在を知らないので、『曉臺七部集』を底本としたのである。『蕪村七部集』の如き杜撰の書でないから信頼して好いように思はれる。紙數さへ許せば『曉臺七部集』全部を覆刻して、彼の俳諧を大觀するようにしたいのであるが、蕪村を中心として編輯する都合上その一部に止めたのは遺憾の至りである。

七柏集　　天明元年板　　中本四冊ノ中

田舍蕉門として輕視された美濃派の俳諧を、逆に取入れて江戸座に對抗したのは蓼太の一見識であるといはねばならぬ。これは太祇や蕪村のような江戸座の落伍者が京都に到つて、新俳諧を發展させたと同樣に中興時代の興味ある現象であつたのである。三間棒の駕を舁せて權門の邸に出入し、俳諧に俗的趣味のある爲め、後世から月並者流の代表者のように酷評されるが、蓼太の附合の技巧に至つては決して蕪村の及ぶところではない。殊に『七柏集』に載する擬古七變の歌仙は蓼太の手腕を充分に發揮したもので、貞德の頃、檀林の頃、次韻の頃、虛栗の頃、續虛栗の頃、未來記の頃、炭俵の頃のそれ〳〵の連句の特徴と變化と流行とが、獨吟を以て甚だ巧みに詠じられてゐる。附錄の歌仙はそれとは別に蓼太が門人を相手に卷いて行つたもので、彼の連句技倆はその中にも認められる。『七柏集』は卷の一を上下として、これに卷二・卷三の四冊で一部となるのであるが、卷の一の上下を以て單行されたものであるので、全冊を收容しては厖大に失する爲め、卷の二・三は割愛して、卷の一の二冊のみを覆刻する事としたのである。此の點に就

き讀者の諒承を望んで置きたい。蜀山の漢文序及び月巣の讃辭、貞德の指合歌、附言に俳諧の變化と流行を論じて、實に堂々たる內容を具備してゐる。

氷餅集　安永三年板　中本一冊

溫厚な人物で各一癖ある中興諸家と交際して爭ふ事なく、大坂に不二庵の一派をなして居た二柳の歲旦帖である。舊年中に歲旦の吟を詠ずる例は芭蕉時代から行はれたので、歲旦帖は新年の挨拶として新作の三ツ物又は發句に、その派及び平素風交する諸家の吟を引付けとしたものであるが、此の歲旦帖は撰なかばにして二柳病臥し、おくれ〳〵て四月に至つて漸く出來したので、題名を『氷室餅』とする旨の跋が添へてある。但し題箋には『氷餅集』とあるので本集はそれに從つて置いたのである。『氷餅集』は二柳一派の俳諧を見るよりは寧ろ諸家の發句、就中蕪村一門の歲旦を知り得るのが興味のある點で、紫狐菴社中に蕪村をはじめ、几董・月溪の句あり、芦陰舍社中に大魯・芙蓉花の名を發見する事は、研究者の見遁しがたいところであらう。但し挿繪は組版の都合で原本通りになつて居ない。原本は贄川他石氏の所持されるもので、本集の爲め覆刻を許されたのはありがたい。（勝峰晉風）

日本俳書大系 第九卷 中興俳諧名家集 目次

筆蹟

几董・麥水・淡々・也有・曉臺・青羅――短册　太祇

みかへり松

祇空

一信士稲津氏懐風月才而慕蘭
種玉庵宗祇之遺風今也來登宗祇
塔院就予薙髪身稱祇空其志豈
不淺乎隨喜之　餘作偈以示之

追慕祇公來拜塔　剃除白髮出紅塵
本非世客君須祕　種玉庵中無價珍

甲午小春廿一日　金山柏州叟粛草

祇空翁落髮有偈呈似

得失心空吾門塞翁
落髪圓頂灸日曬風　浪華陳人　萬畔中具

青流洞主の剃髪を慰。句て聯歸還速にまかす

打はらへはじめて居士衣袖の雪　岸紫
されば此の富士の姿を丸頭巾　東里
雲をかぬ頂きよし雪の不二　茱萸
雪霜をはらへば松のみどり哉　郷鷹
千度梳く手を隙にして火桶哉　國器

茅屋を敲く祇空さいへるは、むかしの青流子、剃髪の一偈まことに宜なるかな。

この野老髭はもたねど伽羅法師　賦山

聞稲祇空叟一変素ト善作詞第六句故云

利名場上懶驅馳　老去剃除雙鬢絲
有弟有兒身且健　非儒非釋跡何奇
兩三間賃中茅屋　十七言成絶妙詞
一段調高超俗遷　野雲皐鶴是相知　鳥山輔門帥

甲午の冬、祇空翁の薙髪を賀して

糸を見ぬ鏡に千代の綿子かな　才麿
駿河なる年ふる雪や丸頭巾　李天
うば玉のかみな月にも花ぞ有　蘭桂
胸やなを木葉くもらで富る月　序周
風月に塵なし棲の村かしは　爲仗
剃屑やおなじ池塘の冬の草　甘泉
青山を枕屏風に峯みぞれ　潤樹

さらに時雨のやどりと稱し、尊師の跡を追ふ。

旅の旅是かや人の冬牡丹　　三惟

ひとり時雨のふりゐぼしきて　とは宗祇・宗武兩師の出合、おもひ出て

笠の端やきのふにも似ず神な月　　文十

宗祇の蚊屋に三年とは、ふるくもいひ傳て、是等さへおかしきに、こたし稻津のぬし、こゝふる郷にのぼり來る序、早雲寺に馬よせさせて、旅衣ぬぎもあへず、剃髮の本意を悅び、石上に坐して一偈を作る。陽々たりや〳〵。誠に工みてもたくまれまじ。風情かな〳〵。其因緣こそおかしけれ。

旅櫛筲明てえむらん神無月　　來山

乙未元旦

天王寺聖德太子の廟に詣す。諸宗の僧侶未明よりむらがれり。かの宗隆翁のことに悟心の詠を感ず。

初御膳淡の入日を朝日かな　　祇空

舊冬老母のいたはりにて、春來上京の折ふし、一桂亭にて當座の句と、早雲寺に宗祇尊師の墓あり。向て剃て青流洞祇空となるを賀。

芦の芽や一夜は月の丸はしら　　京 珍舍

春の月櫛はとらでも昔の水　　翠柏

逢見ての春の飯銅ゆづり合　　里右

剃刀の影もうつくし霜ばしら　　水色

籠業を捨てまことの厄おとし　　竹宇

襟もともすぐに三ヶの椿かな　　一桂

向後は髭を大事の柳かな　　也長

梅見にも事すくな也萬仕宜　　魚輔

宗祇のしぐれ、芭蕉の宗祇、青流の剃髮

世にふるもさらに祇空のやどり哉　　淡々

青流洞祇空と變名して、庵崎に一宇有。園に香爐、几はあるにまか

せ、花・ほとゝぎす・月・雪に富て、詩あり、誹あり、客に俗なし。たゞたらざる物ひとつないはゞ

世のうさを知らぬ無休か髭の雪　仙鶴

和ス祇空叟ノ偈ニ

看ニ破ノ塵世ヲ一爲ニ無事ノ翁ト一
畢竟作ー麼　仝グ舊家ノ風

紫野雲外道人草

剃髮祇空子を賀す。

むづかしき角をかくすや花の龍　大坂 伴身

東都千山子にも一言のかたりなく、湯本祇公の廟前にて、髮をおろし祇空と號し、故鄕なにはに來る。又東武にかへるを、落髮・餞別をかねて贈り侍る。

こそばさを何とこたへむ糸櫻　何巾

方圓の枕や閑を花のかげ　榛國

五月十八日のたよりに來る

玉櫛笥あけぬ心底飛ほたる　呑江

大坂逗留の中、興行の佳席、餞別の句々・紀行等みな別集に是を用す。仍てこれを略するもの也。

祇空叟落髮を慰す。到來次第句々記之

京竹のす行者逢たり坂の雪　千泉

かるかれや世を雪の下笠の下　千江

冷〳〵と睡もかるきふとんかな　鳳子

新居士衣朝のひだを枇杷の花　巴人

枕かる山はなでずや霜の神　郁文

唐元ー結が怪松の贊にならふ。

風呂吹の煮こぢれては居士衣哉　龜毛

今はむかし、はせをの翁剃髮の時、わがくろ髮を環頭巾さ申されしも、おほよそ四十年にも成べくこそ。一生清貧に佗て、風雅の富貴世にたさく、門葉國〳〵に口さとく云のゝしるも、先生の德光ならずや。友人青流子、去年の冬故鄕なにはへのぼる道すがら、三冬のつめたきにもかまはすて、そより〳〵し

たまふも、また誹子のよきたぐひなる事をこさぶき申侍る。これより後は衫衣たるべし。

ひとつなる下地は赤し小忌の袖　専吟

冬の柳その上をまた心やす　百里

山茶花によその目覺す姿かな　秋色

又いかに剃て見る不二冬牡丹　琴風

剃落す身やこがらしの隱れ里　在色

旅思

いちじるし笠下さむき烏帽子山　浮生

胸紐を解もあへず水仙花　沾竹

扇とは空鞘ごゝろ霜がまへ　格枝

君見えしこよひの月の初氷　菊畹

移し置て竹に奪きしぐれかな　尺樹

植かへて其髮の香やかへり花　素雪

三十年來、知己のかはらぬはむべなり。

枕撰る人の姿は冬ぼたん　瓢海

閑坐

薫物の髮こそ匂へ冬ごろも　山夕

元結の明日も濁らず關の雪　貞佐

旅の身にかくても霰鶴の衫　和風

前帶や試あられに染紙子　薇牛

雲うづむ冬のしるしや土の酒　同波

木葉猿といふ茶入にて

五步にひとつ木葉もなくて猿戸哉　宜雨

髮入らぬ硯めでたし冬がまへ　和推

早梅や美濃と近江の茶事にも　雨亭

後にたゝん事をかすられ冬木立　睡足

薙髮を祝して、なほ交の淡きをしたふ。

とてしもの霜よりぞ茶に水ごゝろ　楓江

落髮

髯をはなれずはなれ石蕗の花　如蒿

口多き世をかしこしや室の梅　立志

留守〳〵の嘸な宿にはむら千鳥　玉全

笠着すと心やすさを村しぐれ　玉厚

てう〳〵しからで目出たし冬牡丹　宇都宮 立鴨

先年入湯の折から早雲寺に過て、
その舊識の因縁をこゝに嘆ず。

もとゆひの箱根におゐて神な月　沾洲
湯本山入にさはらぬ頭巾かな　青峩
達摩忌や跡先見ずに祇の空　白雲
木枕の跡はくはしき千鳥かな　沾石
木に餅の身をかへてけり雪の枝　蓮子
印判も入らぬ心や冬牡丹　拾翠
驢に乗るや人はよそ目の大根引　在長
上書の名もよくやすし神無月　方就

稻津氏靑流、近き頃より身をやす
ふし、豆州早雲寺宗祇の古墳に至
りて、落髪のよし聞侍りければ

髭の香に移れ野服の霰笠　露沾
器世間や自由な富に炭せゝり　昨非

閑行

笠の鉄時雨と申絹地かな　堤亭

七十年・百四十年といひしも、只心
氣をやすんぜよとの事なるべし。

丸腰の氣儘頭巾ぞ世一倍　盈尺

賀剃髮次一偈韻
夙出浪花老海東　好遊塵外有無翁
一朝剃落多年事　竹笠蒸節日與風
鹿嶋 栢十稿

祇空子、ここし庵崎の有無庵にか
へりすむ。その庵のさま、一石を
繩床とし、數竿の竹を友とす。安
眠高臥、白鷗の江南にあそぶがご
とし。噫たれかこれを羨ざらむ。

鶴にまかせ斧をともなひ居士頭巾　園女
廣袖の世や水鳥の水ごゝろ　蘭砂
成駒は平砂の霜につめ手かな　李投
塗骨や垢つかぬ身のはつれ雪　東也
手箒の自剃はやすし松の霜　李郷
熊笹や環螺にくはらりと玉霰　北川

本意とげて來ませと申たりし餞別
の一句、剃髪のほゐに賀して、行

の字にかゆ。

本意とげて行や馬上の綿帽子　湖十

舊知黄流子、去年冬のはじめ、箱根山早雲寺、宗祇師の墓所の前にて髪おろし、みづから名を祇空とあらためらるゝとなん。我聞、宗祇師は香をさめん爲に、髭をたしなみ給ふよし。

剃からは髭も惜まじかみな月　素堂

湯本あり宗祇をおこす冬椿　序令

空輕く落葉けづる峠かな　虎月

辛味にて頓てたづねん冬の庭　錙立

剃髮

氷る月はしゆろに剃間のひゞき哉　錙鱗

杖曳は雪も川なり鳩の峰　露貫

大椎のはじめて寒し伊豆の海　風業

角と丸とひつぱる物や禪頭巾　只尺

重ねてやみづからさむき五十鈴川　喬谷

兀として我影うとし冬がまへ　又魚

きけんよく櫛をゆづるやつはの花　海宇

こんにやくへ古元結の霜ばしら　澤雉

太刀の紐とくが上なり冬の月　水石

おもひきや鐘と梟ふゆの月　南畝

夜明なば田毎の坊主初しぐれ　我兄

空門の友はいくたり薹の桶　千山

ひとりは醫者獨なでずや室の雪　沾德

居士稱津氏。大坂人少覩國史。從烏山君碩老學詩。又自
工于俳諧歌。曩至江戸托別所子千許數年。甲午冬。以省
毋西上。居士雅崇佛。輙發淨命。是行也道經豆州早雲寺。
寺有崇（宗カ）祇歌并墓弔古興湧。裴回不忍去。乃憫然有感會與
寺主柏長老有舊。因受戒剃髮。自號祇空。作一偈。言其
所得副以諧。既而入攝上京日與故人游。俳諧不已。是歲
春東歸。抒其詠及諸名士所贈。爲一局。請余爲跋。且語
曰。初發早雲寺。聞寺西地藏堂旁有松樹。大數圍。相傳
宗公經廻時。欲寵□□再三而去。因命之曰見還松。後有
故爲土人所斫。作版十數枚。藏作在正顯寺法庫云。乃固
乞得二枚。因行李馱。及上京夫工製爲文台。以充文房鎭
寳。今命名斯集。示不忘。可乎。余嘆曰。崇其人。而存
其遺爱。居士眞信人哉。於是乎略陳顚末。傳諸好事者。

乙未三月

龜毛菴主人梁蜺翁題

佐文山書

花月六百韻

花・月 淡々

花月六百韻（花）

敍曰、心は廣大無邊にしてこと〴〵く備れり。この廣大なるや、風流に過たるはなし。上尊きより、しも下〻の又下のとわざまで、熟すにもるゝ事なし。ときに花明なり千万戸、三〻百〻の句成。もつとも清なり。大圭・李賦可なるもの也。せよ。我さらになにをかいはむ。

青流洞　敬雨

享保四年十月八日

（文選　於顏樂都既一字を得ん）うるはしや牛万疋の花盛　大圭
　日は紐をとく川嶋の春　淡〻
薄霞四季に背かぬ窓明て　百丸
（地の利）　逮す土の香を含むなり　封菊
（鳰に三枝の禮といふより見）雨は呼び飛に禮なし枝の風　乙澄
　程ふる旅も脱でたゝませ　時輔
錠なれや竹を縮て簀戸の月　孤松
　なでしこ合せ負方に秋　几山
（撫子合ハ七月七日にあり東三條院皇太后宮と申ける時　ウ）
（ケハイ　形勢花には黄玉）露は黄に園へ入ル籔形勢あり　冬持
　したゝかにして根の淺き石　執筆
（遊なの情）只早う鎰の提たき願ひなり　丈雪
　敷キなしに灶うらへかたやき　雲鼓
（肩ヤキ七占なり香に嗜しこ後の句也　五もじにて恒馬と聞べし）柳ごり二見の浦の湯いり船　淡〻
　又庵室の塩を費す　百丸
（高ねより禁の里に落きたり　下略　驚の妻をこゝろふる心歟）羽ならしの君に己が山颪　封菊
　賢者の耳の小サかりけり　乙澄
（用ト体をのぶ句）わけて見ん月夜の松と松の月　時輔
　便宜はじめの冷じき朝　李賦
裁縫ぬはらゝ子の衣皆い也　几山
　老朽ながら佩て田面を　大圭
（上州などの田ずのありさま）薄うして厚きに還る冬紅葉　敬雨
　黑方上手堀ちらし堀ル　孤松
（黑方いまだ灶ぬ句なり何かたやきにかまはず　二）夜を訪ふにはづれがちなる朔拍子　百合

風呂の道閑古田織部弟子
揺流しつゝ道閑が君　仙鶴
塊と見て讀かける雨の脚　水色
老杜が句より歟
庫裏を建れば森一ッ兀　冬持
雲の峰手吹にふかす脇の下　大圭
舜林の竹にて舟を造る事
參河に入レど竹の舟なし　几山
いらひとう髮結ふうちも呼つられ　乙澄
ヤム病
神ぬしの目のぬきかたくやむ　時輔
さしくみダンテキク心也引哥ニ不及
さしくみに師走の雫の戸はひづみ　孤松
隣家をちなむなり食物
近サは盛ッて送りあふなり　封菊
剪春羅は眼-皮也
扱足が剪-春-羅-花といふもの歟　百丸
濱へ上ガれば淨土なき國　淡々
坐して立ッ月の夕の男機　丈雪
賤する句
秋霜冴て樹に遊ぶ熊　吐絲
ウ
盃とれば江戸塩梅の露の玉　時輔
彌生のきぬたはら這ふて助ヶ　孤松
春の闇鳥の空音はもう喰ぬ　冬持
考レ美
鼻にもかけよ梨花一枝二枝　百丸
氷筍はツラヽなり軒の字にて聞ユ
あふ中カへ軒の筍解わたり　淡々

馬を蔵て香の圖に鋤ク　龍谷
蘐の余情
籟事は堪能ならず笛集め　封菊
けゝらなく心なき也甲斐の詞
けゝらなくもぞ借人から葺　几山
紅-線イトスジ
くれなゐの線減らす月の蟬　共光
鎧たてたる乞食也けり　丈雪
安きこと泰山のごとし
御針して身は名山に打もたれ　雲鼓
逸早イチハヤキ あのゝ早速なる心也
死なせぬ筋をいちはやき品　釣雪
欠た事かづきすげ笠庭の花　乙澄
歩々の句
歩々皆青しさらば〳〵　大圭
尾体フ草見ルニ 踏青心一との字を詰て前を補ふ格
三
とこそ見ゆれ巣にゆられたる時鳥　孤松
富士歟
屛風のうらは甲斐の御家中　冬持
巽タツミ
いたゞひてしやんとたつみの神供船　几山
姿のねたみ
直さるゝ日に今ひとり來る　凌波
たつ石の矢車の紋おもしろき　丈雪
鷺
靜に憩い草を押鷺　封菊
猪養イカヒ椋橋クラハシともに岡ノ名大和
明わたる猪養椋はしまだくらき　百丸
豆ふきこぼれ經早うなる　乙澄
房ヘヤ替に行もなぐさみ川向　大圭

稀に化粧ひを植つけの壁　時輔
張ものに分入たまふ御こゝろ　仙鶴
賣ともいひそ寢たといふまじ　敬雨

みきとないひそ人のきかくに
月に千ノ名アリ以かげをとゞむ

それと名の柳に影は千の中チ　吐絲
櫻の瀧に添ふて茶を煮　淡々

ウ
さかさまを直ホに住ふ蜂なれや　封菊
庄屋へたのむ狩のほころび　澗水
まじなひの跡を兀して岸の浪　冬持
いくたび晴て苫の花塵　丈雪
つかみあふ中をあつかふ一重切　時輔

町〳〵に

階子に箱はみやこなりけり　吐絲

擬陽の風流を

嵐吹野良の詩集今日は霜　淡々

さゝらおと鳥は鴫なり

招ルともなしにさゝらをと鳥　孤松

思惟則これ句

落馬とは合点のゆかぬ女良花　乙澄
月の枠にかけてほうまい　大圭
壺折を立派に着るぞめでたけれ　杜龍
竹を鏡にうつす朝毎　百丸

入佐山但馬澤庵の舊跡の句なり

花あれば入佐は枚の數キ瓦　几山
蠶榮て波の音きく　春樂

ナ

酒

季を重ね呑を隠して宮仕　吸月

蜜なり

猪のあぶらの雷に減る　封菊
おつひらき徑をゆくは戀薄し　丈雪
折によすがを絹にて捧る　時輔
さらさつと茂りへ降て味はつく　東歌
日々橋を替る養生　几山
乳母二人秋の夕暮ぞべ〳〵と　孤松
名古屋の御堂桔梗鷄頭　淡々

秋-蝶

新月の隈ともならず蝶しぼむ　百丸
山の井一荷ぬすむ塩やき　冬持
後の朝足袋を封じて戻しかね　呉舟
つら〳〵おもん見れば業道は　卓々

風賦

桐植て常に飼れぬ鳥を待　大圭
さはすほとりに蟻のかたらひ　乙澄

ウ

突直しは鞠

落日をまねき返さず突直し　冬持

前に出たる瀧はよそへなり

袖入込んで瀧ならぬ水　丈雪
しげ〳〵とすごき劣れる畫の犬　几山

いやしき斗拭たてし寺　百丸

越菅原佐渡也
あらがねの越の菅原背負行　時輔

明はなれた歟世間鼻かむ　淡々

去冬一陽集のことを今會譯ある歟
一陽の陽たり花の唐むしろ　封菊

共に其集の脇の句をむすびかへて祝ス
ふたゝび揃ふ餅しのぶ菊　孤松

つくにのこのこやさも人をいふべきに下略泉式部たゞ京の皆也
誘へ我八重葎もなし花の山　釣雪

天のたまごをむすぶ苗代　大圭

家中割ㇼ石樓雲臥雪解て　百合

覗くと扉にもどりたる顔　凌波

品を替紗を織たつる薄氷　杜龍

一種而已にて鹿の約束　吸月

タ郭橐駝ナリらへ木屋ノ句
又けふも駝に植させて庭の月　澗水

時なく暖ヲ得ル
秋をわすれて酒に春買ㇷ　春釣

安藝に心なし只紫花の地ヲ云ウ
裝束を脱で見返す安藝海　千調

はゝこの良やぬりちで
いたるけしたるくらかけに覈　古連

曉のしぶきを挾む竹瓦　執筆

言外の言なり戀の句也
どこを惚たと求ればなし　百合

ひやらし
松ふかく忍ばせ置て置まどひ　大圭

韓
何かせぐ帆のさはぐ夕照　釣雪

ヤナイバ柳葉アセリ鑿ハ俗ニ釘ナシ堂
柳葉をとり廣げたるあせり藏　凌波

鷹を飼のは造作也けり　杜龍

間違ふて安宅にまぜる料理人　春釣

一世帶干ス那須のしの原　澗水

無味　有情
いづれ色香もなかりけり四日月　吸月

遙々寺に入て秋水　八香

すまふ
御存知の老の前髮哀れなり　竿秋

竹ノ病を竹米ト云
くらはれもせず竹の米垂　一口

音信山上總也
うつぶひて音信山もきかぬふり　古連

最恨年々叢金
人の嫁入を身は嫁で縫ふ　吸月

尻屏風は馬ガ數多九く寢ルとなり
子を思ふ夜の野飼の尻屏風　吐絲

相あひ持佛年忌さし替　凌波

故事によらず
白き絲の行衛を笑ふ若楓　杜龍

寒ノ字老タリ
一字直して天下寒がる　大圭

川尻つのくに也
川尻の裾に引ずるたまり水　釣雪

遊君しろ女歟
はしらにこめて祈るなるらん　如江

ツマヅク 造
造くはもし(原註)間とひをると山櫻　澗水

又興
汐干の沖に鎗を決せば　味冬

のら猫の男狂ひは翁さび　百合

かけのたれ尾 鷄也
かけのたれ尾にはしこかけさる　春釣

江戸
艸の月さすがに坊主禿也　八香

サクガク 祈額 眉に手をかざすと也 祈手ヲ ウ
祈額もうき霧の海づら　千調

十念のうちに巾着きりぐす　吸月

ガク 樂
先キの道具で樂を教る　古連

舟からは本氣にてなしもとひ扱　千調

クソ あふむの屎は三人答への不同をいふ
鸚鵡の屎と晝はやく暮　澗水

むかしの謎 謝を町に
我町のものとは見えぬから長者　春釣

あたまの形リを譽る炎天　杏川

常の口を遊ばせて置わすれ草　凌波

スク 梳ウミスケ也 兎は時えぬ句なりかゝる万句に一はよく當エなり 時此格多し
うらなる鶴とかへしては梳　百合

猿よりは腸を先猿まはし　蝶我

孟宗竹に甲斐もなき月　一口

白良ふきぬげ 紀國ナリ 茶人ノ句たり
刻めどもきざめども尙像の鼻　大圭

しらゝ吹上灰を額めば　八香

左伝論語
百姓の社は右にし花の雲　杜龍

雛の夜更を人たがひ分ン　釣雪

「雛の夜「春の風 今の戀の句
三
戻たといふにてはなし春の風　淡ゝ

なぐさみ鍛冶緞子着たさに　吸月

三軒屋 大坂也 つのくにの芦刈聲のたかければ宮源律師琵 文者と切ソてよむ句
三軒屋芦かり聲のあなかまと　澗水

文者まくらの形リを覺らす　凌波

網の句 詩ノ歌を打かへして
かくて世は網を蹴切し鴻の色(聲カ)　釣雪

だまをくるればあちらから又　春釣

玉の緒はたえなばたえねあさはつね我わくなみは人にしらせじ 元方 あさはつねははづかしき事也
まくられて朝日をかざすあさはつね　古連

あたれる船のとしの中カ　大圭

九重や藪より外は急に冬　八香

產ムと律師はかへられにけり　杜龍

是はさて鵜はまりし葛たまり　百合

水の花 蓮也 園の松水の花こそ涼しけれ 觀當か發句せ
水の花へと月の這入ル　千調

乘ものは横にきれゆく御乘物　一口

なきをも隱す唐櫃の埃　玉立

ウ　知て居てよそにあしらふ頬かぶり　千調

（緬鈴（メンレイ）大極丸モ五雜組ニ出ス　戀也）
この緬鈴ぞいのちなりける　百合

（氣味）
蟹の目の雲と成たる枯尾花　吸月

（田ト池ト岡ト野ト字對ノ句）
田守池守何ンぞには來る　古連

（岡野左内　武藤叢話）
寢はら這ふて岡野左内と金を干ス　春釣

灸二十万末のまつ山　一口

（情）
かなふても逢ぬ間は秋の月　如江

（おどり聲歟）
罪もむくひもはつあよいやさ　釣雪

（釋）
惘然と露をはらひて野牛散リ　大圭

魚喰す寺花紅葉けり　凌波

ましくと釘に盗人引ッかゝり　杜龍

（額（ヒタイ）に柴矢瘤　小原）
ひたと額に置習ふ柴　吐絲

（寫-景）
見えて又かくるゝ流涯の艸　味夕

くたびれもせず元日の馬鹿　淵水

ナ　うぐひすのくけぬをよごす袖疊ミ　八香

（嶋ほしの影月なり）
勘ざへもんに嶋ほしの春　杏川

（打こしの嶋勘左衞門古筆見也）
見る度に品のかはりし女にて　古連

（星野にあらず）
ふつつりわすれさせて稽古矢　大圭

わたし呼聲で答し臺所　百合

巣にさしかけは鶴（タヅ）の五月雨　梧山

（ヒゝラギ　杠谷樹猶日本記　若葉の句にて夏なり）
杠-谷-樹猶ものいはすやはらかに　一口

（耄（フケ）　老女など也）
御謎（原註）使づかひ耄てやさしき　吸月

施し湯嘗たき斗句らん　釣雪

民の雪踏の鳴し大坂　春釣

（きくべし）
見ぬ者も同じく夢想くとて　淵水

（さまみしは寒き心也　万葉　見ル心ナシ）
さまみしいろのなきは鮪たり　杜龍

（旅の句也遊人はしらるべし）
六十の海道下り袖赤き　凌波

（地より飛といふ）
茯苓は飛ビこかれ忘るゝ　千調

ウ　（味爽（アケグレ）夜明のことなり）
あけぐれの神をいさめの塩俵　吸月

論ずる時は大兵と見え　大圭

ありくと霜に立ぬる淺茅原　古連

よけても車とにめんどき　釣雪

黄蘗は咄し伽こそすくなけれ　杜龍

（孳（ツルミ））
蝶の孳みの水こしに僻　百合

（十九日は正底記などによる歟）
家の花作例吟味十九日　春釣

（檀紙（マユミ）　みちのく紙とも）
檀紙より萱にたつ波　淵水

（ぬき出たるたからなそのわたりの山にほわれるところ）
代々を根に筍つよし花の宿　氷色
蠶眉にしかじ蛛の五百機　淡々
（「閑文には春の野山霞とも横笛田にし汁なり）
吸にくき吸壺汁を吸すらん　仙鶴
帆のあるわたし照ながら降ル　渭橋
（楔クサビ）
鴉となり楔ともなる車百合　呉舟
はじめのたくみ皆にする文　半秋
風に乗高笑ひ哉朝の月　共光
池にあぶらをこぼす隼　竹宇
（後瀬山若州也　後ノ字結びて秋）
ウ
昔めく雛は後瀬の山の腰　牛刀
望人多し竹の立枯　執筆
（助レ嬌花ヨビテ桃也　天寶遺事）
部屋先キは嬌を助る花の風　淡々
土佐の三日も契るむらさき　水色
（吹レ雲ニ　淮南子）
時をとも雲に吹たる水祝　渭橋
團もとらず將の將たり　仙鶴
（たゝきしは影のうつる事をいへり）
颯と晴淵をたゝきし塔の影　竹宇

賣るゝ猿の目には訴へ　呉舟
玉味噌の軒に九年母向ひ合　半秋
踊の埴のあしたおもなみ　共光
（暮相而朝クレニアヒテアシタ　面無美ヲモナミ　万葉　おもなみは面目なきなり）
水の月光る還俗ものがたり　青主
（韓）
老犬の尾のゆゝしくも卷　指山
折釘も心にかける紙袋　蟻我
（名人の意）
竹書覺え外をどうらく　味夕
（世上かく）
二
邯鄲に着にけれども寢入れず　里右
この戀とかく岩割む程　牛刀
ふまるゝが渡世となりし斗也　淡々
日中過て句ふしら土　珍令
（豐太閤が樂みたる陶穀にかたる姿がこと葉句中にあり）
淺く斟み低う諷ふて緣の先　水色
開帳寒く雨にむすばれ　仙鶴
下帶に添て出したる赦免狀　李賦
（餉飯ケイのうみ　越中　哥略之）
見透すこゝろけいのかり菰　渭橋
いつとても合羽の似合ふお若衆　呉舟
（鏡中人）
鏡の中に亂にし体　青主
ほとゝぎす車めし櫃押やらず　共光

沖へ出やるは祕曲成らん　雪点

鶴が岡の神具　楯に穴あり
むかし楯あなめづらしき神の月　半秋

シノニ壁苑　ランニ蘭の句歟
にとよまれたる卵の曉　竹宇

ウ
よく拂ふ武士はなさがらとし灘　牛刀

ポイ
六千尺とほいと吸ながら　半苔

自鳴鐘　土圭の事なり
玉寒く自鳴りし鐘の聲　青主

日本の圖をよごす風花　孤松

鴨に鷺心有べく濟わかれ　竹宇

田舍の美男根付新し　几山

大造な座敷あやつり岩と浪　渭橋

キレ小車の裏　伊勢兩宮にあり
いたゞいて嗅小車の裏　共光

切ﾘ西瓜夕月まねくあふぎ也　味夕

豈よくせんや僧のたなばた　水色

龜の背にうなぎの眠る隱れ潭　仙鶴

もどればもとへ訛るなりけり　淡々

へ撰留ニ閣月ノ
脫替て閣の花に引ッはづし　吳舟

花一　戎屋　おかた本や　坂陽
おかた本屋は柳したがふ　半秋

三
春の雪老さらほひて扨訶る　大圭

・ずりやうへ手入歸帆あぶなき　吳舟

可ならず
どふ見ても名所めかざる家居ども　共光

無益の益
一生二日捨しつめもの　渭橋

都ぼこりは京(原註)塵　ちかき也　土佐日記
つむ類ひ都ぼこりの桙の花　半秋

血をあやしたる神田の蛭　仙鶴

老莊のこゝろ
人間の箱は長持とぞおもふ　杏川

友にもかたりかたる句むかしは戀にあらず今專ら戀の句也
友にも語りおつ晴て瘦　牛刀

逢ふてあはぬ裏式臺の鶺鴒　水色

月下の質は急な戀なん　我道

わすれ川甲斐
蔦の葉の藥にかうやく忘レ川　百合

閃ニ紅一絹一　いなびかり也
・さあひらめかす紅の絹　竹宇

不仕合せ面へとまりし蚊の心　淡々

天知ﾙ地知る木食の四花　青主

一名葛城木綿　いとになくは　一すじの事
ウ
廣といふかづらき木綿いと二なく　吳舟

藏を樂屋になされたる旅　里右

きよつとして價貴し冬ざくら　青主

伊川　程伊川也
伊川喜撰は只一首とぞ　水色

きり原の後
八朔の跡をつゝむ京の空　渭橋

鱸の齒並うつくしき外　半秋

我おもふ雪隱建て風の月　牛刀

油つぼより散茶買ヒなり　仙鶴

きくべし
小右記ニ曰長保元蔵猫ノ御乳に馬ノ命婦爲レ乳ブことあり

うきもなし猫に御乳ある世でもなし　乙澄

碇は蛸を茹たるがごと　大圭

なま壁じや心して打テ大鼓　共光

蓉

借るや衣の黄竹の霜　椿山

十月歟

留守遣ふ人は出雲の花の波　竹宇

ゐのころの日もあけぼのゝ空　玉秋

三歩は柳公權也世に七歩のみを

ナ

三歩とはうたはれもせず詩貧乏　大圭

心たはめて鴨居詠る　牛刀

巒山長崎の遊君なり趙允康と云唐人に逢ふ江談あり

巒ー山が袖の湊のさはぐ哉　梅隴

筆耕百人立ならびけり　青圭

スハリヒユカネ馬蘭莧ミツウチ汞を取ル事有よし

とりやうになやみぬれつゝ莧の汞　仙鶴

一錢所禱前も後もいさ　涓橋

あふみの君の哥にて聞ユ

常陸なる富士の卷狩いかゝ崎　雁山

師走の四月椀けぶりたつ　呉舟

笹の葉や狂ひはじめに烏帽子買　半秋

面影くさし雨の飈　竹宇

ぐわた〳〵と着クと居風呂腕と食　水色

スジ 系

天女の系の見せぬ物あり　共光

古今
秋かぜの聲を帆にあげてくる雁は

雁の帆の月を横にし更ぬらん　一枝

あふぎのうみ 琵琶湖の一名

扇の湖をあふぎたる秋　春桑

ウ

さめやすきうはの空成花槐　淡々

榮螺一ッで寺破却せり　竹宇

一ー騎紅ー塵

それそこの白き籏になめくじり　牛刀

はつもの飛脚塵を蹴たてゝ　水色

メンマ
蒭を蒿き所にて粉をひく磨

さら〳〵と麪ー磨の音の北時雨　呉舟

海もほどよく畑の御秡　仙鶴

花の香の三百韻に三日の月　涓橋

時の中にはもろこもろ人　共光

童蒙のため筆を加レば、又熟達の人笑ン。

花月六百韻花卷終

半時庵淡々書

（花月六百韻　月）

何某が誹諧は、付事はつかざれども、そのさまよしと法印玄旨は沙汰ありけると、丹後の日記には書殘したまへり。尤まなこをつくべき事なりかし。いでや一道に師弟の名有て、師に似たる俤なし。今此卷〻を味ふに、付ヶどころ遠にあらず、又近きにあらず。あるは似たるなし。似ぬあり。誰かいふ、古人今人流水の如し。只時のよろしきをもて、うつりゆくわざならん。それ撰者の花は月は、たゞちに方寸の胸中よりなれりといふべし。何ぞ風雨もかれをさゝゆる事を得ん。なを千歳の好士翫ぶべきもの（こ）ろ。

白鷗老人
漫書

享保四年十月十一日

（芳草甘木郊野之富　賦ノ語）
野は富て雫を結ぶ月夜哉　李賦
品數まへよ花の弟　淡〻
秋の聲松を書時波を見て　敬雨
鹿のさかりは年にこそあれ　雫点
鼻との癖になりたる料理人　半若
坂に轍は誰や住らん　白扇
（凱風　南風也　詩）
凱風に四季の長春晴渡り　卓〻
（淵に漆あり）
うるし沈る水鳥の息　春樂
ウ
みちのくや咄しに行もはだせにて　玉立
（奥羽の心をよせたる歟）
先祖をつゝむ家に常燈　龍谷
としてかく雲の縫たる松柏　執筆
おどろく斗墨色は照ル　杏川
寒からぬ日は免されて一二町　白扇
伊達と見ゆるは愚成伊達　敬雨
（ヨウショク　妖燭　燭也）
妖燭のなくて埒明ヶかり枕　春樂
つぶしに來るな茨の花垣　李賦
（稚子門）
たらちをの着ヶ日は机取ちらし　淡〻

在分限にて椀に入ル月　梅隴
〔示云且句ノ序（シカイヘンカツ）〕示云ン且遊たる雫の擔子　丈雪
〔あかゞりふむなしり成子催馬樂〕しりなるこがら踏な猛（タカ）神　半苔
領内に畑より多し山の花　雪点
三月かけて殘る筆屑　卓ゝ
〔近き附ケ方を句作りにて隠ス句なり此頸ひ中興多くあり〕二 から人も雛譽に出る軒づたひ　梅隴
芝をふとんにしたる稽古場　丈雪
〔氣味〕顔に似ず葎のごくすさみかけ　龍谷
どふもいへぬと女見送る　春樂
隨食になれとせぶられ雪を待　卓ゝ
ひそかにふしを國をうたはす　玉立
〔諫風なり〕乘て賣ッ乘て買たる鞍心　李賦
老打まじり帆に纜をあて　孤松
〔巫山をとりまはして〕二階にて雲と雨とに添寢する　半苔
桐の花咲いかめしき文　白扇
〔寵（チヤウヂヨク）辱は爵祿ヲ得て時にあはぬこゝろなり老子〕寵辱の泪は嶋の埼となり　敬雨
やしろも掃ずしやあ〱として　淡ゝ
からくりの仕舞を付る雲の月　杏川

〔たつた姫〕姫御を拜む龍田海道　雪点
〔室（ムロツク）を築粹室なり八カ月これをいとなむ〕ウ 室を築ク口儒の姿上古有リ　淡ゝ
書そこなうて膝高うなる　李賦
〔「書そこなう「養子吹ル共に縁也〕添寄レば養子吹出し夜は明ル　雪点
〔鶯　二名〕世界ふたつにつばさ玉とり　龍谷
〔無頭一字ノ格〕時去リ時來りけり家具の音　丈雪
〔こも僧ノ句（フキ）籟〕籟つくさせて御無用であす　梅隴
寺境波とわかれて聰なし　春樂
松を見すれば待ッ支度する　大圭
夕月に賣らぬ野良ぞ凉しけれ　玉立
あほう一人公事に補ふ　半苔
〔腐儒のこゝろ〕孔雀貝太平御覽あればこそ　白扇
〔情〕八枚屏風世にも厭たり　敬雨
初花や面はゆがらせ根はきらひ　卓ゝ
余所に焦れて親子出替リ　百合
ウ 紅塵に春の湊のおろし汁　李賦
〔雨微ナリ〕下駄借る間溪頭にたつ　白扇
中上り鼻のかみやう輕からず　如江

犬と四人丈山ノ詩の心をかゆツイバム啄ハ字いやしからず寓言さほにぬ見ずはしかと向はぬ句
犬と四人になりし節分　玉立
朝日影絲に啄むうす氷　龍谷
まほにも見ずに膝を居られ　春樂
あたゐぐう呵ッては又寢入リかね　敬雨
氣へツク衝レ天ヲ碧嚴
はなたちばなの氣は天を衝　雪點
谷ゝへ昇せて出る藥ほり　半若
ヘヲ條鷹のへた也　利なり
かくて都に條打チをきく　東哥
名月の降ル換骨
名月の降を照也ばくち好　丈雪
棚の高サを笑れにけり　淡ゝ
空体
かけて來てとりも繋ず樹に嘶　梅隴
厄歟
祝ふて捨る子に香爐添へ　卓ゝ
ウ
長柄津國橋本は宿ノ名引キは響キ也
長柄より向ひ橋本鐘の引キ　乙澄
釘打に出て新まくらする　淡ゝ
燒みそをいなむも戀の富貴なり　雪點
御駕籠かたつて名所とは呼　李賦
但馬は秋に柳苗を植ル
刈中カに柳早乙女植わたり　春樂
月は二夜の不時に顏見せ　八香
人よりめ心のかぎり詠めつる歟
凄じき心の限り壇の聲　白扇

國口に必
三十俵を高に赤壁　龍谷
ともに飛猫の兄弟豆の花　卓ゝ
妙
笛一しきり人を眠らせ　丈雪
賴んだとしらぬ返事をいたゞきて　玉立
精進日には引通路の番　梅隴
雪こかしあ花に
散花をあつめて獅子に作りかね　半若
たていれの句稀には
明て高藪入江迄舟　敬雨
ナ
きかぬ氣な姿ゝを樂しむ村の春　李賦
畫工の盜み米元章歟
畫工の盜み下手に稀也　逸山
寢覺猶鷹有ル近所こゝろよき　春樂
かけがね一ッ小夜の中山　卓ゝ
「カケガネ」「コシヤク」二句とも昔は戀に不用今戀也
こしやく者いき過ものと相釣瓶　梅隴
興歟
夫レ假名で書クこんにやくの花　吐絲
瘂そくふ旅の衣は五六千　敬雨
はじめて雷を聞て消渇　玉立
轉
くれな井を配りし爐の水かゞみ　淡ゝ
神の午房は引ぬ河内路　雪點
著聞集いろは連歌
世を以常を流き行風の月　龍谷

だゞ廣う建テ喰さざりけり　共光

むざんやなかこはれ男咳キとなり　淡々

伊豫の二名の山鳥も畫　半苔

伊豫の二名の嶋也嶋の字をワリテ戀のあしらひなりウ

夜とゝもに明る訴詔訟の榧　卓々

車にはしら行衞ゆかしき　李賦

はつあられ強チにさす人もなし　梅朧

棒屋の漁火に心とまらず　雪點

折リ句には讀れぬ橋と踏ならし　淡々

嵐の雀つかねてはさけ　敬雨

四面花花に眞は花ごろも　春樂

松にかしづく田をかへす袖　白扇

良夜の句

夜こそ寢ねかゝる月人男山　珍舍

めかれしてあはほきりすなきたかしこ鳴棹あちてましらたへうたひ秋也

嵐に語り猛き鳴ル棹　李賦

所望鍜冶池をめぐりて花荻に　東哥

當時みやこの蕎麥を訶らず　逸山

晬を鐘にふり切烏の衣　有風

引ヤむら在所ヲ替ろ付也

まだ若楓淺キ引村　玉秋

どなたの賀一艘に積迎傘　竿秋

燒タキつくるにもこめかしき休　指山

コ圧めかしき大ャらなる躰ウ

北東繪馬評判風となり　松泉

掃れて迷ふ曉の蟻　執筆

鳩車のたはぶれ

あいらしくはぢけば走る帆かけ舟　李賦

十一人の笠は脱よし　珍舍

鶴の脊を下に見おろす杣の橋　渭橋

顔色に奪ル

をのれに惚れて笑すくなき　東哥

賴たる戀は博士の先達テ　指山

板まきちらす岸の臍立　有風

月ハ晷毛錐烟ハ足帚

瞻望は雀出ゆく雩の紙　一口

松が崎の句

經を普頭にとりぐの尻　竿秋

百年にあまりてもらぬ權の月　玉秋

ミし顧「うつろふかたやふかき成らん總角卷

うつろふ方へ袖とめて顧　里右

吸花露

醒て後花を吸にも供廻り　逸山

風情に遣ひ減らす春の日　乙滄

へノ卷二遠来の塩香ニて一ふく申べくゆ宗旦々り

亭桶より卷纒を延してたつ雲雀　敬雨

若狹ものにて霜の一炭　松泉
デわかさめのといひまはして　不便さを勘略はじめ暇出す　珍舍
よと押へたる山おろし哉　逸山
にとよまれたると云句とは心かはれり人をはつせの　竹の葉の衣桁とも成行水場　竿秋
しことゝいふ詞得て聞べし　しこほとゝぎす八日から寢ず　百丸
タレ垂ノ字可レ笑　哀れ知れ垂レたけれども荒井船　卓々
情　わすれぬ時は女郎花見る　李賦
秋好ムに對して春ぎらひ秋に用ユ　春ぎらひ良の住居も靜也　有風
鳴ノ字雨道　世以月に哥口で鳴ル　一口
尖頭奴有五兄弟 求レ硯詩　筆結の五兄弟猶うつぶきて　東哥
おじやれといはず打敷キは借ル　指山
たかし山遠江　凌霄の雫の音もたかし山　里右
さもしき名には似ざりけり脉　玉秋
からす　片おゝひおほおそ鳥をたゝき立　指山
すがりをきくが物のたらずめ　珍舍
再興は年きれの有松の風　玉秋
犬のかどみとなりし山の井　東哥
苔翁ノ句　葛切の跡も手づよき雲の峰　一口
夏の句に越ノ字冴たり　はだしで走る越の八乙女　淵水
經絡を我ものにして疊さし　逸山
古きを慕ふすさみけだかし　竿秋
心にて水の出ばなをつめる也　李賦
しやに押かまへ佗る朝腹　百合
得　そこらうち春の形を切こかし　松泉
トキ鴇　人をも裂て鴇(マヽ)ならび飛　八香
月高し茶にも煮れず花の雪　有風
聞キに來をらぬ柳植ても　封菊

三

寶引の雨はさながら鼻へ降　東哥
もの狂しき程のもてなし　玉秋
とり離し連理の場迄やりたてぬ　松泉
朔日ごろの心先ー月　雁山
灞陵ノ西　舟底の石にあたれば故園今　乙澄
ケヤキ柜　柜のあらし稀に指さす　逸山
北ー嶺を晴下りたる神の戸樋　竿秋
今度の借リ人扨訛る尼　李賦
醫者に成て初に出る日はづかしき　珍舍

花並ノ驛（ウマヤ）近江
驛の鮨の黄也花なみ　淡々

無何有
かまきりは終に思案をむすびかね　有風

相撲は着ぬが衣裳つきなれ　指山

氷輪月也
氷輪は城に蝘ﾘて明離れ　凌波

とりかへしたき一言もあり　一口

ウ
かきつばた下人を主に戀ごろも　吐絲

出家をいぢる迄のもの入　敬雨

[illegible]
十月の翡翠は來て杭に寢ﾙ　雁山

紙帳切ぬくしら梅の花　釣雪

盗人の煩ふ中ﾁにこはげつき　逸山

波の花
莭の替ッて海の咲みゆ　東哥

「韋駄天「狗賓 江談ヲ以二句一句の心也 卷中ノ興
韋駄天の鼻は參河の物語　玉秋

それは狗賓を返したる寺　李賦

やま濯われはふねなれや
一二枚岡漕ふね歟桐の葉の　指山

みだかれたがる髮も星合　珍舍

元日ノ句遊所の句にて尤戀也
元日の通りに雜煮是はやくたい秋の月　百丸

春秋心對の句
拜む旅やな蘭に鶯　有風

もろこしの間違とても花心　竿秋

ことにやり句
さら〳〵さつとはら〳〵と葩　松泉

ナ
春雨にうかゞはれたる軒の牛　梧山

荒玉川 遠州
荒玉川の石に甞飯　逸山

竹とりもの語のこゝろ歟
掛乞に逢日を避れ山を見る　大圭

大ｷな誓ひ杉もまがへず　竿秋

遮莫（サモアラバアレ）字意 辞林玉露ニモ 慈鎮もよめり
さもあらばあれは慰ﾐ燒なれど　東哥

もとの心を
野中の清水のら止ﾐてけり　百丸

壁一重なくばとおもふ瀧籠ﾘ　李賦

王思怒レ蠅ニ 蒙求
蠅に怒て海の繪も山　玉秋

渡（コス）ち 花のかた
あはもりの花をこしゆく朝嵐　有風

折には喰すふり袖の脩　雁山

中はとく飛ンだともいふ兵足櫃　松泉

宇治拾遺 盗人ノ袴垂名也
月入かたに袴だれ出る　我道

驢年（ロチン）ハ會スル期なきなり
驢年とはいはず田の花打詠め　珍舍

罵スヲ粕ト古風ノ一体歟
香も新しく六龍に粕　指山

ウ
籠（タカ）
きむすめの證據也けり籠を呼　淡々

灌頂の葉にあふとゝ投　李賦

寓言
つのくにを今離れゆく風の箔　珍舍

思ひがけなき所にも錠　逸山

内チの折リ橋ハ内宮の僧尼道也

星の照り家々の寒衣にとゞきかね　竿秋

拭たるごし内の折橋　有風

十つらの馬ならねども君の御後れど　乗綱　俳儀抄

御後見車も的に花の中　指山

野-鶏は雉也

野-雉たしかによくうたひけん　玉秋

徵祥記大概不失細微則受ヲ之

萬物のはなれ所や竹の月　里右

鯉魚風起芙蓉老　九月風ナリ

さくらきたなく鯉の風吹　淡々

新きぬの句也

織おろし郡-新しく匂はせて　氷花

馬につけたるあつらへの馬　柳岡

今此句ひやらしあり

瀧にてはなかりけり岩結び水　湘流

講釋もどり世上とは成ル　巾車

あたゝまれ焙炉の下の土龍　仲三

コヨリ纓

職の工夫に纓より捨　我道

羯-鼓

ウ天滿より石山寺は御城なり　一枝

ヤライキ追

さらで扇に鷺を追　執筆

日のくれの晝寢の君に草木降　雲鼓

生れは京の句なり　戀

生れは京と孤峰詠る　里右

熊の膽の水に糸書ク中なれや　淡々

ひめふくは秘スル也

町人大工ふほしひめをく　湘流

大和に出雲と云所ありやまとなるてふ美作の池とも次郎百首にあり

大和なる出雲美作痒がらす　柳岡

地をよう踊ル風のかるかや　氷花

喰立て歸れば月と坊主のみ　雁山

轉

初汐高く猪息をふく　仲三

鉋字眼

此戀は先キへゆかれぬ鉋鍛冶　巾車

關-雎毛詩

關-雎うたへば投うちはやむ　一枝

煮燒せぬ原に一本花盛　我道

夜は明にけり菜種二千里　雲鼓

二

持をつて内廣がりの紙雛　梧山

繩に約束山の井土替へ　巾車

雪國の夏はさながら拍子なき　湘流

猿ゆへ時をうつす盜人　百合

相思枕ハ君がために懷を以寄ス心

目錄の外に餞相-思-枕　里右

はしらを咬ぞ淺き心ぞ　我道

花と實の境をいふ句

返-照の風を愛る梅もど木　水色

米葊和尚はマイスル　ペイフン　膺僧なり　文徳實錄
米葊和尚雁にあふのく　淡々
そこらうち脫散したる秋の暮　指山
富士の鳴澤也
遠く湯貝の鳴澤の月　吐絲
かまはらひ也　關東にてかま　つぱらひこい　ふ京のおばら　のたくひ
品もなく竈ッぱらひを翫び　仲三
漏一雫硏でやらかす　柳岡
あひみまく干場へ上る桐の花　雲鼓
畝火山　大和
畝火をうけしおもだかの魚　雁山
ウ
乘もせず斉ヤブサカ翁旅ごろも　我道
分ンじ　舍利也
分ンじ給ひて酒は賣出す　龍谷
活句
穴一の果は小便しまひなり　乙澄
蝶をうらやむ籠よりも鳥　仲三
杜甫ガ母ノ名海棠ト云事何之書ニモ不レ見ト謝疊渊ガ一評ヲ句にして海棠の花をのべて春ふかき心これらは今の誹諧の一附ケかた
母の名と故人誤る春の枝　柳岡
去年降殘る杈に燈明　里右
うきとも有ッたに今は(原註)來うせ次第　巾車
光源氏ハほつくしの心ハ今日のうへに
光源氏を笑ふけいせい　氷花
天地の中に風蘭咲となく　一枝
夏夜の淸凉歟
蚊さへをらねば秋の夜の月　雲鼓
ひやうし
どんな時どんな人來てとんくさい　雁山

ニ宗　湖に志賀の句ヲ附るは今の作者の古風にはまりてする事多し
湖に烟の沈む黑やき　蝶我
觸レどの古き都の花の町　湘流
頓死が有ッていかのぼり引　淡々
ウ
宜レ讀レ書　この句粧ひにたとへて甲斐の家中の付ごけかはれり
表具師の燕子日永くたはむらん　味夕
甲斐と駿河へ打かけの裾　一枝
書おふるはむかしの文の詞
書おふる身にしなればともがゝする　仲三
至極ひだるう成て覺る　柳岡
天冠に杉の螢ぞかひなけれ　雲鼓
一輪切リに卒都婆にて棹　雁山
茶を養る一休
さは〳〵と入レて寢ころぶ朝日影　淡々
蓮也
かたみを見ればなむさんぼ牛　大圭
今は只風にしたがふ枯(同)蒲萄　竹宇
解がたしふかき戀の句
江を岡にして知らすとのは　我道
さまではたはさやうに又也
世間へは新まくらとてさまではた　里右
東ダヾイ足モ關東コトハ
あづまおどいを蹴上にて待　巾車
閏月
名月の三ッ有年の紙遣ひ　龍谷
柿の心にあらざればしらず
衣がへとはしらぬ廿干　湘流
ウ
大太夫は令春也
鶺鴒に習ふ事なき大太夫　我道

（情）
やけどの肝にあたる流星　八香

（よしのよく見よ　聚蝶体ノ哥に）
はでなもじ妹より又よしのよく　雁山

紐むすばぬは禮の用たり　仲三

（和寓レ貴）
忍び端の工夫とも成水車　一枝

痢病はやつて雨陣を引　雲鼓

（間ニ髪ノこと　韮子房ニ稱ス　傳に出ス）
「間」に髪と五月朔日二日三日　巾車

瀧見觀音おもながに見え　杏川

（マ　間の字大に心かはれり何テ打こしても）
何もかも一間でしまひ小言こく　湘流

やう〳〵狐つきに追つく　孤松

（ツラ　面がまへ　鐘つきの常）
藝にして撞にかゝりし面がまへ　李賦

まれ人ありと海の水汲ミ　里右

（ヤマノイモ　蹲鴟　ふくろうとよみこ取違へたる故事也）
鳥の花いかにまがへて蹲鴟　柳岡

香炉峰より月のすゞしろ　水色

（「香炉峰　八幡山の一名　野上の里ナの哥より歟）
やぶ入ッに來ては大寝し力持　玉立

名を付る事上手也けり　一枝

（むかし密シ座敷ト云事有）
おし入レを明れば座敷取肴　里右

（秋萩の下紅葉するあらたまのとしをよめり）
あらがひかねてあらたまの萩　我道

（「這た歟）
這ふた數凡千人の池の月　杏川

（「聲なき中二句遊也　戀の句以上四句）
聲なき中や鉢たゝき秋　柳岡

塗たので朝タいやしきうどん桶　淡ミ

垣ね凉しく蚰詠やる　竹宇

浴フ室ロ使肩を脱せて返事書　一口

（赤貝年　武陽にて云事　やすらひの哥も）
赤貝としと皷うつ也　雁山

元服の相作ながら剃髪し　呉舟

價もとらず苦竹幽艸　雲鼓

煤掃をひそかけにぬけて水鏡　春釣

雷丸一壺やりてたしなむ　李賦

ウ
不動にも順禮哥で都入ッ　大圭

（鶏またぐ岐邊）
鶏またぐ胡麻はすげなき　里右

（註事ミ誤り　ある事をや　ヤイツ　林希逸ナリ）
人ひとり見ると希逸を呵ッ出す　柳岡

時はあけぼの空へ雨うつ　淡ミ

（わかむらさきの巻良清がこと葉より歟）
肥過て海龍王の后には　我道

合壁戀て這入りよき内　李賦

（かゝる類ひの花の句は若き人のこのむところにあらずひとへに年を以てすべし）
この結納新羅の春風けづり花　雲鼓

享保四年佐保姫も咲　巾車

延寶年中に花洛六百句有て序跋なし。今此集ぞ、花には敬雨のけざやかなる紫毫を乞、月には百丸の霜兎の明なるを需、束ねて花月六百韻の名あり。卷〻粗或は故事により、きこえがたく淺くいひなして、心ふかきも有。中にも戀の句、むかし・今のたがひめ、また四時の句に修練をもて春とし、作意をもて秋とするあり。あるは哥により、詩により、物がたりの心によるといへども、國〻の初學のためには敢聞えがたし。是をわきまへんがために、師範、半時庵に入て、まに〳〵句の頭にその心を書添ん事を乞者なり。

享保四己亥歲冬十月

錦綾室　大圭（住改圭）

陌楊舍　李賦

花月六百韻月卷終

京竹屋町油小路西へ入町
柏屋安兵衛　板
大坂心齋橋筋淡路町
坂口太兵衛　行

五色墨（しきずみ）

宗瑞

（五色墨）

或師の云、利休の茶の湯にあひて事を好むともがら、其折ふしの道具どもを、是は古しこれは新シなどゝ、目をはりて擧あひければ、利休散ゝ不興にて、新古の目利はあき人にこそあれ、道を好むともがらは、たとへ欠摺鉢なりとも時によろしく、茶の湯に用ゆると、用ひられざるとのさかひを辨まへて、物數奇をほむべき也とありしとかや。誹諧もさのごとし。句は道具也、點は商人なり。誹諧過ての點なれば、その席にまじはりて、これは長、是は丸、珍重などゝ、點にあてゝ目利せらるべきは本意なるまじくや。打越のむづかしき所か、席のしぶりたる時に、宜しく付流したらば、たとへ無點の句なりとも、是用也。點者のこゝろをかねて、句ごにあらぬ工ミをめぐらし、人の前句をばひあひなどせんは、無下に口惜きはたらき也。用無用の境・新古の分別、こゝろざしを高く守らば、自然の風流あらはれて、幽玄の一句もいかでおもひはつしぬべきや。

寶晋齋其角述

右文章其角雜談集之所載而角沒二十五年俳道日盛但亡作者若用心者或以腹藁或甜糟粕爭點勝負以媚當日判者無意于雪月花其臨席前句未陰了競唱自己句以其所豫也予五子締交有年暇日慣新撰六帖意輪爲判者而加合點書既成無意勝負互難陳以相娯也角之言寔可貴焉豈非斯道之師哉讀之者其有取于此

點譜

蓑章二十點　七字十二　五字十　三字七　朱五　長三　丸三　白兎園　宗瑞

花君子二十點　集十　魚貫十五　三字十　二字七　朱卅　長十　丸三　檮巷邱　蓮之

敲露印面　長三　柳隣　咫尺

崑山美玉六點　三圓十五　雙圓十　一圓七　朱五　長三　絢堂　素丸

六湊歌二十點　南客水十　臨岸水七　朱十　長三　鷗心亭　長水

紅梅に青く横たふ筧かな　長水
朝寐もさせぬ櫻戸に誰　蓮之
雀の子机のうへに口明きて　咫尺
茶臼の餅を挽直さばや　素丸
ひか〳〵と月の出しほの釘隱　之
風のうねりも萩二十間　尺

ウ

夕露の尼の身にだに御扶持方　丸
この刺刀(剃カ)のけふは不機嫌　水
花楞木綿さらさに咲そめて　尺
餞けたば粉しめるほど泣ヶ　之
門立に猪の毒の雲が出る　水
かたちの小野は盆に眉掃　丸
金持のあそび殘して川靜　尺
乞食も起て至極よい月　水
佛道の遣入口には虫の聲　之
野山の色もしらぬ木地挽　尺
浪人のうち傾いてはな謡　丸
仕舞物屋の纖の夕ぐれ　之

ナ

春風の聖護院樣御通り　水
みつちやな顏の戀にかしこき　丸
紫蘇漬の箸迄染る才はぢけ　尺
あるじも出ぬに兎かけ出る　水
水瓶の大き過たる艸の庵　之
正月ちかき膳所の日當り　丸
山歸來旣軍をはじめけり　水
後住の器量よく通る錐　尺
人並に膳へ居りし物狂ひ　之
疊床ふむ關の岩かど　丸
夕月夜先ッ煤掃も近祭　尺
地帒瀧井の影もなよ竹　水

ウ

高き屋にのぼりて見れば生鰯　丸
けふもちろりを提て出る妻　之
嶋原の張かへ長柄一からげ　水
名代垢離は淺み〳〵と　丸
船頭の黑い背中へ花の雪　之
參勤輙遠かすむ也　尺

判者宗瑞

是五鳳樓手 二

聖護院　膳所の日當り

席上珍 四

この剃刀　むしの聲

紫蘇漬　ちろりな提て

朱 五

ワキ　眉はき

金時のあそび　物狂ひ

夕月夜

長 八

丸 四

これは〳〵這子立たり更衣　宗瑞
生ふるが中に夔の小利口　咫尺
鹿架村は淋しく見えて分限にて　素丸
船湯の顏の風もよい程　長水
有明は必鍛冶の影なれや　尺
ひとり冬瓜の肩さむげ也　丸
ウ
ほつたりと熟柿の落る黄屋敷　水
やら腹立の櫛も通らず　瑞
後朝の袂から出る馬の糞　丸
端居して居る地藏經好　水
椎の闇搔ヶばふくれるたゝずまる　瑞
夜る〳〵よりぞ年は寄らん　尺
緡の錢はらりと切れて川千鳥　丸
あの柴の戸は狂言の眞似　水
ともすれば渠も風引爐の名殘　尺
京鴛釣らせ春おしむ月　瑞
おとゝ女の豆腐よび込花の奥　水
うまれ男律義千万　尺
ナ
汐風の津に飜がへす緋縮緬　瑞
おもしろ狸双六に來まゝ　丸
鴛に二色たらぬ繪の具皿　水
老黨若い黨大宮司の顏　瑞
黄牡丹ぼたんは花のまうけ物　尺
玉屋の奥次にふたゝ庭石　水
盲子のおもへば〳〵怪我もせず　丸

泊り大工の戀の世がたり　尺
奈良漬を包捨しは誰が文　瑞
髮はへ葉もや〳〵の鬮　丸
桂男は壁一重なる寒鼓　水
霜よけ物にたれて行犬　瑞
ウ縁の下木の賤からも珠數を切　丸
植字の間へは入事なかれ　尺
住よしへ粥の力で行れう歟　瑞
獨り家來にすがれ咲せる　水
いでや鞠暮るゝ花の日紅葉の日　尺
眞砂に交る浦の貝屑　丸

判者蓮之

魚　戯一
熟柿の落る
千里香二
泊大工　誰が文
青　錢四
後朝　柴の戸
すみよし　獨り家來
柴七

發句　四句目　川千鳥
緋ぢりめん　首子　もや〳〵の鬮
花の日
長九　丸六

×薺や不斷見て居る顏も扨　蓮之
淺井の魚の一葉おどろく　素丸
門の月天のあたふる財布にて　長水
走ればはしる猿の中よし　宗瑞
米つきに立並びたる藍の臼　丸
知れぬ笞殺鷄の卵かな　水
ウ古塚に錐が障れば熱さして　瑞
河内女のよい縞を着る　之
我賴む七の色菓子片手つき　水
更る揭屋に桶のしたゝり　丸
物凄や小柄は失てほとゝぎす　瑞
久しぶりにて鐃鉢が出る　水
餅草も同じ誓ひのさしも艸　之

我儘いふて花の老乳母　丸
御家中を谷とあなどる雉子の聲　水
　はらばふて居て繪卷物見る　瑞
金春が弟子も一ふし竹の月　之
　いざ宮めぐり芋煮へる內　丸
ナ
窓每にこの八王寺きりはたり　瑞
　あほう娘の相談を聞　水
麥こがし我も付木の穗に出て　之
　御葛籠馬の通る暑き日　瑞
ゐいやつと首にかけたる扣き鉦　丸
　弓師の座に居る大兵　之
顏見せの友はもとより雪の友　水
　祝言前はなを盡しをる　丸
稻荷の田舍でも先ヅ手を握リ　之
　榎が辻へ踊り追〻　瑞
弟もともに足輕月の影　丸
　鬼灯賣りはちやん袋うり　之
ウ
木母寺はいつ來て見ても萱が軒　水
ひろふて捨る鳥さしの笛　瑞
石招りのけふはたま〻玉襷　丸
　晝寐の夢は山伏の聲　之
訳て寒し落花の麓町　瑞
　朝日いたゞく茶摘手拭　水

判者㕝尺

十五吳姬莧下無一
更る揚屋
十丈蓮一
古據に
七香車四
ワキ
　七の色菓子
御葛籠馬
五鳳樓四
　雪の友
雉子の聲
　八王寺
弓師
　山ぶし
長十二

名月や顏は節句の人通り　㕝尺
　空も鴈がね挑灯の紋　長水

炑の田の例シに刀免されて　宗瑞
弱碁ながらも日を暮しけり　蓮之
素麪を上手に喰し水主の者　水
鵜に降る雨の南明るき　瑞
ウ
木のもとに虫を痛がるぬけ参　之
扉はれ神子の膝の淋しさ　尺
さゝやきに寄ッもつかれぬ横日影　瑞
家うちの灸をすへるふり袖　水
紫陽花の晝もくだれる蒲團猫　尺
佛きらひの隱居涼しき　之
江戸流の肴ゆはえる銫屑　瑞
うつけに登れ金の役人　尺
夜なくの塀の敵は磯の波　水
言葉訛ッて寺の愛敬　瑞
花の日は椀もかせ山三日の月　之
雛抱て寄る古い町内　水
ナ
小息子のうそも初めて穴の蛇　尺
當れば解る川竹の髪　之

冬の日にこちの思ひは飯三度　水
雪駄からげる法の場人　瑞
松が枝に戻るもはやき親鳥　之
蕎麥は黒いをもつて此君　尺
開捨にする妙藥もありそ海　瑞
一年増に鴻の臺兀ゲ　水
どくくと仙に通ずる冷茶碗　尺
雪の吏(使)に先ッ草履とり　之
影はなを階子へ落て破鏡　水
乙鳥の羽織暇乞なし　尺
ウ
やまのいも堀にかゝれば追風吹　之
けふは麁相の多き品玉　瑞
金ン入のはな帋袋春の伊勢　尺
花かいらきをうれしがる母　水
鰹とや藤の盛りの廿日過　瑞
彌生の端居上戸なるべし　之

判者素丸

三圈一

ありそ海
双圍一
冬の日に
一圍四
ぬけ參　横日影
法の庭人　蕎麥
朱七
六句め　余役人　寺の愛敬
川竹の髮　仙に通ふ　春の伊勢
花かいらき
長八

×年わすれ座頭ひとりの朝日山　素丸
冬はかくれる下屋しき梅　宗瑞
むく犬の水のむ池は靜にて　蓮之
手盥艮のぬき足にけり　咫尺
稻垣の空解したる月の露　瑞
羽織ひらつく烌の初風　之
ウ文珠會をこゝろ當なる御宿老　尺
道三殺しつたなけれども　丸

五月雨の金谷は低く鳴る斗　瑞
すがたの十二ゆらぐ玉の緒　尺
おそろしい曲輪で河豚も喰習ひ　之
正別當の雪を詠めに　丸
焦れてもならの葉ごしの古燈籠　尺
遁世をして病ひぬけたり　瑞
本丸からに火三の山の判はんじ　丸
武士大瞑にかすむ夕月　之
かりそめの社なりしに花所　瑞
聲はや井手の親によく似る　尺
ナ眞實な友達ひとり春の雨　之
借座鋪へも合点する君　瑞
さなくても瘧ふるひの戀衣　丸
蛇さへ見れば寺の小調市　之
草蒸の七日鳴原腮たれて　尺
養子に來たいほどの妾中　瑞
酔はせぬ酔はせぬこそ酔たなれ　丸
隣をきけば鹿戀さびしき　尺

腹立る時も三味線大事がり　之
　けふより寒に入相の鷺　丸
幸阿彌が影もして置玉兎　尺
　妹海棠は蕎麥の葉かも　之
ウ
あめ牛のたま〳〵生れ秋の色　瑞
　燃るや穴の調なるらん　丸
花雪吹看主はすみを切幕らし　尺
　鍋の鑄かけの歸る永き日　之
手習ひの時も洗はぬ地虫釣り　丸
　とまり〳〵て辻菓子に蝶　瑞

判者長水
　南零水一
寺の小調市
　臨岸水三
四句目　井手
安中
　朱四
第三　さみだれ
入相の鷺　手習の時
　長八

今の世に誹諧せぬものもなく、よく此道にふかくこゝろざしあるものすくなし。たゞ點とりによき点あれば、自由に成ものとおもひ、一二年にて上手と、我のみ自讃いひちらして四道さへしらず。これきりとしてやむともがら多し。それゆへ名ある作者も出ぬは此故也。むかしはまとのこゝろをもて識を主とし、一句・一字にこゝろをつけ、前句・うち越の心をうかゞひ、心の玉をみがき立たり。そも此一集はみな久しき作者にして、こゝろばせの鋒をとぎ、管城をかため、故事をつかへど故事につかはれず。死句・活句のさはり、無常迅速をわすれざり。この點もたがひにこゝろにあてるわたくしなくして、自然にのつとる。是實にして虚、虚にして實を相兼る所は、一般清意の味なるべし。

玉笥山人述

竟宴

うぐひすや大名産んより所　敬雨
柳の瞑に旅人の鎗　長水

川風に彌生は胸を押明て　宗瑞
鮒釣る顔の壽さよ　蓮之
酒ふねの舌も掻なる朝の月　素丸
手はつたなくて菊の先生　咫尺
ウ
露の身歟富澤町の暖簾出る　水
鼠に角はいはけなき撥　雨
戀敵めぐり〳〵て公事相手　之
袖ほしあへず八軒屋飯　瑞
茨咲く日蓮消しのそれも夢　尺
はなし雀の晴わたる空　丸
住つけば寐て吹く石鹼(シャボン)海見えて　雨
二日三日を抱守の月　水
風のみ歟烌の一聲猫の妻　瑞
いとゞ貧家に露の靈棚　之
淺草の吉野は淺し造り花　尺
朧夜かるた我名もらすな　丸
ナ
春若衆巨燵の側へ寄つかず　之
天下泰平穀つぶし殖　尺

吹矢筒絕て奴のなかりせば　水
佛のたねを蒔繪乘物　雨
此寒さ右に居つゝ手洟かむ　丸
やき餅麼の奥によい藏　瑞
皆〳〵と山は新樹の佐玄龍　尺
男が琴を彈もの歟扨　水
一枚の鏁投込んで歸りけり　雨
黒藥押す法のともし火　丸
飛脚笠波にとられて月の猿　瑞
稻妻の出る古郷の山　之
ウ
扇より置捨たりし蕃椒　丸
ちつとの寄じや道明寺あれ　雨
守宮とはどう當られう七ッ鉢　水
二臺所恨ミてしより　瑞
手折らんと瞽女仲上る花の陰　之
春遊五人一人ッ珍客　尺

享保十六年
辛亥菊炑

彫工
下柳原同朋町
芹澤彦七

書肆
江戸日本橋通二町目
戸倉屋喜兵衛

續五色墨

素丸

續五色墨

序

〔規矩菴〕

享保十六亥年五色墨といふ小冊を作りしは、素丸（變名馬光）・長水（變名柳居）・宗瑞・蓮之（別號珪琳）・咫尺（別號蓼和）五人なり。柳・宗・珪三子は卒しうして、いま殘れるは馬氏と我のみなり。一トふたむかしの内にかく變化せし事常の世のならひながら、老後におゐて心淋しきに、夕可菴にゆゑむある若き人々かの墨を次で、續五色を製せんとなり。然らば彼墨色のわか〳〵とならむも入興ならめ。兎まれ角まれ烏の跡たへまじき事のうれしさに、規矩菴の窓下に闕殘りたる墨をならして筆を添ふる。

寛延四未孟春　（蓼和）

叙

古視銘にいへるにひとしく、墨の命もかぎりあればにや、五色の墨のとり〴〵に折れ、すみの行衛もなく、殘りし墨の摺ゆがめたる、扨此後は朽もやすらむ、今は世の人の手にだに取べくもあらずぞ成たる。しかりけるを爰に五子の輩、ふるき趣向やしたはしかりけめ、かたのごとく互に判者に替り合て、たゞかりそめにいひもて集たるを、つゐに一帖とはなりける。そのあらましは規矩菴老人の申述られしかば、我また分て何をかいはむや。人々の望もせんかたなく、筆をそふる物ならし。

夕可菴　馬光　（馬）（光）

點譜

文呉星廿點倍　五字十▲　三字十▲
朱廿▲　長二▲　丸二▲
白兎園　宗瑞

南浦雲廿二點　三字十▲　二字七▲
朱廿▲　長三▲　丸六▲　蛸一點倍
絢堂　素丸

物がたり十五點　四字十▲　三字七▲
二字五▲　長三▲　丸六▲
石中堂　斑象

醉中觀廿點　翠蓋十五▲　四字十▲
三字七▲　二字六▲　長▲　丸二▲
雪中菴　蓼太

崑山美玉十六點　三圈十五▲　雙圈十▲
一圈七▲　朱五▲　長三▲
北窗菴　竹阿

鵑や一聲にしむ花の雲　竹阿
鐘ふりかへる春のあけぼの　素丸
わたし守心の水もぬるみ來て　斑象
宿へ〳〵と鯛もいはしも　蓼太
月も肌ぬいで照たるきのふけふ　丸
蚊遣りに篩ふ烋草の露　象
ウ
礁やら爼板やらに賃仕事　太
あの子が玉の輿を明暮　阿
我見ても久しき繪馬の鑓踊　象
枯たる木にも入梅の菌　丸
うちかえの小粒わづかに七在所　阿
其序にと居はる月代　象
冬知らぬ沖の口受の遊び寺　太
つりそこないの畏の盛かへ　阿
取卷て文の手管をなか居迄　丸
都は戀のさくら最中　太
月は見へながら雲雀はまた暮す　象
彼岸の殘りなりと燒ふ歟　丸

二
たま〳〵に顏もつて來て揚リ端ナ　阿
小家がちなる早稻田せきぐち　象
節季ゆを雪にしづめて八ッ下り　太
ちろりの底のかはく間もなし　阿
御内義の先安〳〵と男山　丸
星もはら〳〵鶏もはら〳〵　太
是や此關に行烈(列カ)立直し　阿
やたらに瓜をむきちらす也　象
雨乞を聞かぬふりにも夕月夜　太
葦替前を鳩もつぶやく　丸
誰かある〳〵とてすゞり水　象
五條おもけ(てカ)に尼のたをやか　阿
二ウ
植木やも笹のしをりに丸折　太
宵の雹のまゝに明行く　丸
數の子もふやけぬ年の淺瀨川　阿
ふたり遣へば外山烋篠　象
廣袖の紙衣に花を狩け(くカ)らし　丸
まねけばまねく舟に青柳　太

判者宗瑞
文昌星 一
男山
是五鳳樓手 一
節季い
席上珍 五
遊び寺　おがり端
すゞり水　外山秋篠
句の花
朱七
發句　きぬた　玉の與
やり踊　文の手くだ　櫻
淺瀬川
長十　丸八

初聲に傳受もいらず郭公　宗瑞
苛まくら見に越る夏山　斑象
風そよぐ氈に菜飯をこき交て　蓼太
是はと蜘に裾ふるふなり　竹阿
桂男の朝露分て染暖簾　象
うら枯かゝる芝橋の色　太

ウ
袖引ヶば茜堀にとふり切て　阿
彼の人の名も知て居なり　瑞
葭簀洩る風に糺の竹床机　太
螢の華の咲とおもへば　象
駒下駄の友達かはる小學文　瑞
何ぞと問へば菓子の白玉　阿
葬の晨鐘に明る別座敷　象
月見も荒れに田面さゝめく　太
前髪も一番員に行たがり　瑞
貧乏鍛冶屋の炭も消えゝ　象
暮近き花の雪吹の戸塚越　阿
笠さへ持てば雲に入鳥　瑞
二
雛の日も佐藤兵衛は後ロ向キ　太
鯛はあれども塩にしら弱　阿
氣のつかぬ透間を通ふ風の神　瑞
雜魚寐して行年の淀舟　太
漢楚やら三國志やら聞はづり　阿
ぱつ〳〵と伽羅をくれる撥鬢　象

山姥のやり手もあれば禿あり　太
　世は黑小袖淺黄かたびら　阿
中堂もむかしながらの松の聲　象
　虱にこりぬ艸まくら哉　瑞
立消も二日三日の影早し　阿
　霧に花の火を焚て居る　象

二ウ

關守も新酒に崩す膝がしら　瑞
　治郎廻しもそれあがり也　太
千本の借し傘も觀音寺　象
　走り井かゝる狙板の上　瑞
身に餘る御意をいたゞく花の陰　太
　風をわすれて勇む陽炎　阿

判者素丸

西山雨一
走り井かゝる
朱簾三
前髪　年の淀舟
山姥の遣り手
朱五
ワキ　月見　白粥一點增

松の聲　花の陰
長八　丸四

名月や夜更は水に居こゝろ　素丸
　亭へ戻れば庭の白露　蓼太
紅猪口鼠黑皮さま〳〵に　竹阿
　三里にたらぬ便折〳〵　宗瑞
薄氷にむすび捨たる竹笩　太
　鴉の聲のいと寒氣也　阿

ウ

雪駄はく江戸の息子を闇ならで　瑞
　手の吹聽も狀の吹聽　丸
三四十八夜袋をくゝりつけ　阿
　頭巾の顏はまたやつし事　太
汲ちらす酒は御居間を晝にして　丸
　白う成り來る比良の根颪　瑞
さゞ波はさつと千鳥はちりとこそ　太
　端綱片〳〵馬士の小便　阿
操へらす珠數も平家の恩迯　丸

出其春の月のこん立　太
花に明ヶて花には暮ぬ山一ッ　瑞
浮世の外はなを長閑さよ　丸
二 今朝からの留主とは見えず濡柄撈ホウ　阿
早産時の汐もそこまで　瑞
今おもへば夢は吹ちる艸枕　太
遠寺の鐘に木の葉はら〳〵　阿
何ンぞかぞ古風な神の物とがめ　瑞
戀に酢をさす姉のぬつぺり　丸
蝙蝠にうはの空なる長ぎせる　阿
宿はあれても御朱印の宿　太
何事も頼まれ参らするからは　丸
親にてゆものは舟長　阿
片われの鱸も飛んで波の月　瑞
蔦も這はせず城はそびへて　太
ニウ 藍やらに似た身の脈をふり返り　丸
公事の相手は女なりけり　瑞
物影の鏡に落る拭ひ椽　太
繪馬からしらむ鷗むら鳥　丸
杖に笠花にもめたる麻衣　阿
ころも彌生の風こゝろよし　瑞

判者斑象

元日晴霽 一
頭巾の顔
秋風簾 九
月の獻立　浮世の外
濡柄撈　產時の汐
物とがめ　蝙蝠
御朱印の宿　何事
繪馬
籤盤 十
ワキ　第三　竹筏
江戸の息子　御居間　さゞ波
舟長　公事　拭ひ椽
句花　長 九　丸 三

拾人に小袖戻すや雪の朝　斑象
都がたりの土産に榾の火　竹阿
松杉も五日〳〵の聲ふりて　宗瑞

あら面白の月は浪より　素丸
菅笠に霜はしへは雨あられ　阿
藪入とこそ人も見るらめ　瑞
ウ
敎てもさに揃子木の取廻し　丸
夜はほの〳〵と欅の燈明　象
看經の水に積たふ慶養寺　阿
のる駄そる駄の金の一件　丸
罷出て晦日を照す兀天窓　瑞
取ちらしたる海老にうら白　阿
町中の塵にまじはる宮ばしら　象
あやしの軒に袷かたびら　丸
戀種も秤にかゝる月の露　阿
醉のさめたる齋日の鐘　象
物闇く花まつ山の冴返り　瑞
犬公が手より鳥は古巣へ　阿
二
正月の幞をむしろにさ干スとて　丸
壁の鼠もあれかゝる藏　瑞
井の水に汐のさし來る葭の奥　象
だまつて居ればいゝ迄も降　丸
おそれしや兜の中の長まくら　阿
つかみ面なる鉀セ憎かる　瑞
草がはに揃居しはむたゝき掃　象
今は鳴渡駄今朝の走り帆　阿
御袋も臍へ落たる因果經　丸
雪駄からげる法の場人　瑞
木屎に梟一ッ月一ッ　象
硯屛一ッ萩も一トもと　丸
炷込メていたはる髭に添の霜　瑞
よしよの中も片旗籠也　象
さりながら心の動く紅のうら　阿
忍び返しの松に三味せん　瑞
稀人の短冊もらふ花の雪　象
只君が代の田打畑打　丸

判者蓼太

百花嬌語一

いつまでも降

弄晩涼 三
あはせ帷子　卸にくかる
片旅籠
探 葛 五
第三　金の一件　うら白
宮ばしら　長まくら
長 六　丸 四

年忘洩り來る椴の木の間より　蓼太
雪にあかねの門の有明　宗瑞
鷹羽織日傭かしらの帳提て　素丸
所すゝめの茶賣餅賣　斑象
洗濯に遣はぬ川の花かつみ　瑞
西の返しの久しうて照ル　丸
ウ
熊野路を京に和らぐぬり枕　象
宗旨違ひも脱ば中よし　太
かつたいと末にはうどん蕎麥切か　丸
七ツ入子に漏りも七所　瑞
ばせを葉に幾汐風の通ひけん　太
越の飛脚も今朝は初雁　象
出來綿の色に凍ゆる斗也　瑞
野分も知らぬ萱の葺口　太
姑の闇に月夜の御法談　丸
重のからしに泪こぼるゝ　瑞
供舟はまた椎の木に花の雲　象
家中〳〵のひばりうぐひす　太
出替りのおもたひ尻に帆を懸て　瑞
彼あて事を雷盆にまで　丸
從弟からはとこに續く八軒屋　太
幟あやめに早いあけぼの　象
かゝる世は沖も青田になびき連　丸
振らせて來るは例のけぢ〳〵　太
法事鐘天も響けと撞出したり　象
檜も匂ふ華籠の追風　瑞
懷に折まつ文の片こゝろ　太
しのぶ小もんに都商人　丸
浪の花ちらす月夜の[illegible]網　象

二ウ

稲に大氣な神のまします　瑞
鼻先で嚇す仲人の蜻蛉とも　丸
旦那も乳母が寐せ起し也　象
爰踏ばかしこに霜の家鳴して　太
猫でなくんば狸なるべし　丸
みよしのゝ吉野ゝおくの奥の花　瑞
雪解の水のけふはとく〳〵　象

判者竹阿

雙圏一　折まつふみ
一圏五
ぬり枕　うどん歟
七ッ入子　出替り
霜の家鳴
朱六
第三　宗旨違　花
八軒屋　げぢ〳〵　狸なるべし
長九

跋

一天春回て万花匂ひ、秋風そよ吹て菓色づく。享保いつの年歟、交友哥仙を綴て五色墨と題し、今も世に翫ぶ。ことし新に夕可庵下と予が門人五子、ふるきすがたに寄、相互ひに判を添やりて續五色墨とよばふ。風流は天にあり、地に有、おのれ〳〵が心にありて、是を觀ずる時はすゝみ、瞑時は退く。宋の東坡は句を作す毎に門前の卑嫗に問、和朝の何がしは河獺のはたらきを見て鑓術の奥意を悟れりと。たゞつとめて怠る事なからまほしきは業也都て當時の俳風、知るも知らぬも芭蕉流とぞよめきあへるといへども、誠の付合を辨へず。打越にからみ、一折の運び・地酘・皮肉骨の境ひにうろたへ、終に一卷成就調ざる卷〳〵多し。今の五吟、新古を差別し、道に曲れるをもて己が姿を正し、就而手爾葉に油をそへて俳燈をかゝぐ。實に深志のいたす所也。はた馬光老人と予俳談、やゝ四十年に餘る。甚親しからず、又疎からず。烌の胡蝶の野らにへろつき、九人はなしといへる十人目の友にこそとうなづき、今此催を聞て共に笑ひを添。若人の長

月やながからむ交りを、淺生の淺からず賀して、燈下に筆を握てうづくまる。

吏登齋　嵐　雪

寛延四歳辛未春三月

彫工　　　　　　　　芹澤彦七
仝　　　　　　　　　谷村權六
書林　京堀川錦上ル町　西村市郎右衛門
仝　　大坂心斎橋順慶町　澁川清右衛門
仝　　江戸本町三丁目　西村源六

夜半亭發句帖 上・下

巴人

（序）

喋ゝたる諸子の笑談、いかんともせざる事あり。白眼にしてうちに和するものはいにしえの隱士なり。さあるだに、云へば合ひ、默すれば通る友、二三子に過ずとかや。早野氏なる巴人、老來宋阿と稱す。叟はやく寶永の始に名有けり。いでやそのころは才子星の如くに群をなしつるも、晋子・雪中去て忽ち一變するは、馳驅せらるゝものゝ速かなるや。踏とゞまるもの雷堂と巴人のみなりしに、百里物故して獨あぢきなくや有けむ、異鄕の客となりて難波に遊び洛に停りて、むち〳〵と京にとゝせを降くらしたる獨吟あり。道に於て信ありけるにや、一夜松の俳風に和して一片ならしむ、誠に孤ならずといふべき歟。宕、丙辰の春、西に遊ぶ事侍りてかの草庵を訪ひけるに、懷古おほかたならずして、約する事ありけることの葉のつゆをやかけられけん、翌乙巳のとしの初夏、花つみ・加茂祭につけても、宮古の名殘もかへり見がちにて、東都にいりて舊地を尋るに、老婆のかたくなことのみ殘れりとて、つりがねのもとに蓬たかく荒たる屋のありけるにはひいりて、やがて夜半亭と名づけて、つきもるほどの穴もがなと、みとせよとせの春秋を詠めくらされしも、うつゝの夢のいたづら事となりて、ことしははや十三回と聞え給ひぬ。茲に宕、ためにはかりて追福せん事を思ふといへども、新曲を諷ふ事の得てなしがたきを知りてせず。阿誰大濟が共門に親しみ深かりけるに志を合せ、阿師の筐中の物をわづかに授得て帖となし、黨情をしてながく祭らしめ、且古意を需る人の手にもふれなんものとおもふなるべし。丙戌六月正當日慕として嗚呼をわすれ、鴈宕書。

夜半亭句集（上）

春之部

改正

寳初日鳥の袴鷺の太刀

唐人のこゝろはしらず明の春

我としの寄をも知らず花の春

名の高き遊女聞えず御代の春

雌雄の花咲け〳〵と初かゞみ

鳥虫の願ひは安し着そ始

耕さず織ず雜煮の三笠山

はじめて京師に春を迎て

花咲樹ならびし中の青によろり

このうへに何か都の華の春

其明るさしも京にて

舟に聞へば古郷がよし花の春

日の光り一聲花の明鳥

鳥既に闇り峠年たつや

異郷に客たる事十余年、ことし漸く古郷に春を迎て

あたらしき友の中にも花の春

うちいづる涙や春のはつ花

松風や氷に穴を明てはる

天地のいでもの見せむ福壽草

樸や共もゝとせの梟の下

鍋ひとつとりまく雪の若菜哉

人日

書生達貴舟をかけて薺賍

しづけさや白馬拜みの京生れ

夢に見てさへ、さ朝戸にうたふな

はる駒のさらさに春の日影哉

題米字

やそ八は子共の名也若みどり

伊勢丹生奉納

山彦や千代の粲を守る椿

睦月はじめ北野に詣て

天津香も殘るや雪の一夜松

伯英讃

隱るゝや世をさわらびの月日影

枯芦のかれなりけりに春の雪

題時圭

うぐひすか聞の夕日や牛の聲

梅

水流の日影や梅の片庇

梅さくや餝のかしらの臺所

天の川梅にはじまる月夜哉

臥龍梅

白くたつ梅の烟や方一里

何某どのゝ小性すきせらるゝを

持そへて立や力にむめの花

んめさくや宿行過て餅の音

北野奉納　江戸より

遙拜や扇のうへに梅の花

達磨の二幅對に賛のぞまれけれ（ミ）

日の影や春ともしらぬ壁の梅

里かれて障子に達磨んめの花

欲でなしとおもふも欲歟梅の雪

羽織着て子を憐や梅の花

半弓に鼠の巣あり梅の花

柳

うまく眠る鷺や柳を星月夜

一方、名も改られし時

伊勢鯉や柳の流の朝日影

飯蛸や薄紫の一しぼり

草庵を訪ひける人に

白魚や裸で見する塵の中

小娘の五つばかりなるに

はてゝは鳥とそひ寐の木芽哉

いせ鳥羽の湊にて

かくれ簑鬼の娘かおぼろ船

題鐘

宇治橋の網にもれたる胡蝶哉

初午　二句

初午や五條の雲の遠干潟

はつんまや千住へのぼる樓ぶね

晋子十七回

ふり行や二月の末の顔は嵯峨

上巳

花鳥や木ずゑにはこぶ雛の食

足跡のおぼつかなくも汐干かな

月の色中野は桃の花ざかり

花

花咲ば坊主は民の道具かな

上野にて

觀音は佛にあらず花ざかり

大佛の顔をかくすや櫻雲

庭鳥の毛衣ふるへちりさくら

鎌倉の穴に花さき誰が家

宿引の宿を指さすさくら哉

さくら狩泊る手紙は女房まで

夕櫻島に遊ぶ龜釣らん

歸るさの夕日さくらや胸に杖

嵯峨に日くれて

仲國が實もある花の袂哉

ある人一口と云ふ花生をもとめて句を乞けるに

是は其口に入日の花曇

淡々が隱居の時に送る。

又願ひ芳野新田花の聲

下舘大游が家にて

釣舟のさくらにかゝる旅寐哉

嬰利が剃髪の時

樂みの巣をこしらへて花の丸

藤

藤浪の池にたゞよふ夕日かな

しら藤や風に吹るゝ天の川

肩ぬぐは女道者か藤の花

若年の頃和階堂に遊ぶ事をおもひ出して

常盤木の藤やむなしき書狀さし

夏之部

京より下る時

古鄕をふたつ擔ふて袷かな

久米の仙人墮落せしを、里人先の仙とぞ呼しとなり。

先の仙と人に云れて袷かな

春過てかゝる物あり初鰹

上野にて

耻かしき都たよりや初松魚

衣着た出家かはらぬ若葉哉

多賀祭

誰ための祭りか嫁のかし小袖

ほとゝぎす

忠臣の髮さかやきや郭公

坐舖干風もさすがに杜宇

鳥銃の雲井はしらず子鵑

加茂紀宿に寐もして杜鵑

子規月落烏鳥の聲

夜更て草庵に歸る。

挑灯の三ッ四ッ別れ蜀魂

欄橋や杖にうたゝ寐蜀魄

嗚呼と云し雪はさもあれ杜宇

輕業の親に聞たしほとゝぎす

大濟亭にて

おしかけて來るに罪なし子鵑

元文二年四月十九日京都を發して、同三十日江戸に入る日記あり。おほくの俳友泉路にかへる。十余年の變化、なみださとめ難し。

指を折數にも入らんほとゝぎす

祇空三回忌に

ほとゝぎす聞に出しか今に留主

雁宕が京より歸を送る。

言傳よ我知人は若楓

杜若

衣張のした行水や杜若

ゆかしさや柳がもとのかきつばた

かきつばた何ものおもふ犬の舌

病中の吟、衰老終焉の年也。

かきつばた水に杖つく姿あり

若竹や築（筑）波に雲のかゝる時

きぬ〲の捨挑灯やけしの花

おなじ國上の山ちかき邊りに、赤土さかやいへる郷あり。かたへにおかしき遊女有よし。此所のならはしにて、遊女白女の子なもさめて、またゆふ女となし、或は田な求て末をはかり、假に長がもとに身をよするのみ。

藻の花も咲ぬ遊女の水田哉

下舘高峨にて

能見ればこがねなりけり麥埃

雁宕亭にて

しもつけや奥底もなき花の形

追福、童害へつかはす。

飛ほたる淋しき闇の遊びかな

敵牛七回

石切の見に來る苔の花衣

石切の火かとこそ見れ草百合

端午

大津繪のまとを見たる幟哉

髪結は後から見るちまきかな

粽ゆふ鴉のうき巣や膝頭

笠翁はやく訪ひける。

菖蒲ふく宿の假寐や夢幾つ

加茂かけて走る子の日のあやめ刈

提て行僧は憎けれあやめ草

賣馬や五日を吐すかんこ鳥

燈籠の木ゝに風なしかんこ鳥

ともし

ともし火の草の主や照射狩

早苗

ふところに土をかくすや早苗打

早乙女の唄の稽古やくらぶ山

旅中

新樹高く吉田の橋もつくる也

旅意

さみだれや死なぬ木曽路の丸木橋

五月雨

さみだれや夜の心のをもしろき

獨吟一夜松

むち〳〵と京に十とせを五月闇

楚田日待

白水や入梅左ェ門が臺所

入梅既に明るか雲の峰作る

忍摺の石見むとてわけ入けるに、山崩れて石面を埋み、草覆ひて虫の聲猥籍たり。

しのばずに良ふりあげよ蝸牛

みちのくにくだりし時、桑折佐藤何某が許にて

山伏の帶解すてゝ清水哉

渾北來りて兩吟

山姥の二人出合や清水影

膳棚へよする鰒鰌の鯨波

納涼

夕山を見とれて眠る涼かな

一かしら殿こそ見えね夕すゞみ

水無月十日の頃、鐘樓の邊りに彼荒たる家の侍るを露月、いさゝかしくしつらひ、調度やうのものとり揃て、旅の勞をいたはりはかられけるつま、ここに友がきの隔なき交りなるべし。されば此舍を夜半亭と號て、しばらく膝を入るあるじとなりぬ。

我宿とおもへば涼し夕月夜

京なりける人の許にまねかれて

風薫る家に入間の里の馬鹿

境凍泉日待

三味線に月を彈出す扇かな

羅人萬句 願寄帰帆

風聲水音都の不二を扇かな

千之の妻、水無月頃と聞えしないたむ。

夜は嘸ひとり園の明遅き

函星亭の二三子、予が門に遊ん事を乞。席を同うしてよろこびの章を諷ふ。

菅菰の皆寐て咄す園哉

嘉詳(祥)、丁固(岡カ)改名につかはす。

まんぢうに十六夜月や穴かしこ

六月廿七日、深川吏登にて

宵月夜門に添乳の暑かな

題眞桑瓜

氷にも中やたえなむ眞桑瓜

鳥羽畫の讃

御祕藏の若衆老けり眞桑瓜

蟬

鳴ながら川飛蟬の日影かな

葉を落て嵐や蟬のつかみ啼

兎足老人、六月五日死去。茶人なりければ

路次の草蟬も心のありけ也

蟬の花咲や梢の雪園ひ

あら悲し大工のねらふ蟬の蓋

御秡

夏秡割子の中のとうがらし

秋之部

立秋

廣庭を淋しくまはる一葉かな

京百和一周、千虎へ申遣す。

驚くは秋のこゝろの水車

七夕

ふくろうの文や烏の星使

風むすぶ星はいづれの哥かるた

海邊夜

たなばたに灯火ひとつ舟のため

牽牛の瀬田をわたるかたばこの火
灯火の施主あり星の汐見坂
鵲や雨の支度の供廻り
梶の葉に飛つく鯉や瀧津川
さがり蜘ふらりと風の星使
白露のむすびとまるや琴のうへ

題朝顔

蕣や木ずゑに星の一二りん
朝がほやたゞ此花に實のおほき

草花

夜る〳〵はらにゝつちかふすき油

上州高崎にて

糸による市のこがねや花の秋
女郎花折や觀世が駕のうち
ひとつ干す枕は寒し萩の露
日の影の石にこぼるゝ瓢かな

池の秋といふ題をとりて

黒髪もかくや蓮のみをつくし

七月七日氷花十三回忌

草すりのたゞいまきるゝ暑哉　と
長谷川久藏が繪馬に題せる句、猶
都の人口にありて千載の記念也。

俤のたゞ今殘る暑かな
あるはなくあるは捨られ團哉

難波三蝶妾、身まかりけるに申遣
し侍る。

見わすれぬ櫻の舟も秋の風

得白字

蜻蛉や棹にとまりて唐冠
芦の温泉の石に精あり秋の風

踊　はねと

袖振や引ぬをはねと村尾花

留別

拍子よく歸りあふみやいせ音頭
むさし野の果もありけり高燈籠

花火　舩にて

闇をかりの顔や花火の水鏡

盆會

浪よ船よなをかきたてよ影燈籠
送り火や今宵定むる娵もあり

我尙・淳北三吟、江戸川舟中夜泊

やどり木の松と寐てけり草の種
いまだ留守拾ひにまかる草のたね
伊勢近し尾花がうへの鰯雲

月

蜩のふいと一聲月夜かな
おもふ事ありや月見る細工人
見ればこそ月夜の外の月（原註）闕字
忘れたり起て又行月の舟
更科の商人通る月夜かな
名月や明日は風きれかゞみ
荒海はすべてをそろしけふの月
名月や（一字缺）なまはりの舟子共
無分別おもひ出せばけふの月
名月や富家に花なく（原註）闕字

古郷にて

とても寐ぬ月もるほどの穴もがな

巣父の畫讚

牛ひゐて来よや糺の水の月

落鮎

落あゆや水に醉たる息づかひ

菊

白菊や既に夜明の離れぎわ
はやぶさの地にさす影か風のきく

題しらず

しらぎくや露とは神の名なるべし
前うしろ夜こそ見ゆれ菊の花
今ひとつある名は呼てからすふり

貞佐一周忌

念佛ほど咄して歸る月夜かな

十三夜

みの虫の家のしまりや後の月
枯草に螢の売や十三夜
川〱の橋のしたくや十三夜

物事の滿るはいやし十三夜

鹿

波風のうへをわたるや鹿の聲

あかつきのかねにつきけそしかのこゑ

しか笛としらで旅寐の涙かな

鹿鳴や比山寺へ女中駕籠

庵室のはやく古びて鹿の聲

我何た悼む。 雁宕父

見わたせば紅葉の日あて定らず

九月盡

四十から男ざかりや薄もみぢ

行烋や心の幣んめの花

夜半亭句集（下）

冬之部

時雨

一夜づゝ淋しさ替る時雨哉

枯て鳴かけ菜の垣や片時雨

一しぐれつゝかくれ行岡の松

小夜時雨船え鼠のわたる音

時雨るや軒にもさがる鼠の尾

畫賛 般若の面を自在にかけたる

面うちの宿にしぐれの旅寐哉

ものゝふの宿は時雨やかゞみ立

ぬしは誰時雨かたまる小長刀

閑居時雨

既に來る足音余所へ小夜時雨

しぐれにてはなかりける夜の悋氣聲

夕日さす波の鯨や片しぐれ

立よれば禰宜はしる人時雨の火

枇杷の花

夜嵐の雨に日たけぬ枇杷の花

木がらしに塔は鎧ふて立にけり

十夜

治郎子を引や十夜の旅衣

心ぞさまる古草の

迯る蟹水には遠き落葉哉

焚ほどは夜の間に溜る落葉哉

嵐雪七回忌

鏡立それも枯行高柳

雪中庵卅三回

俤の柳を見るや霜ぐもり

霍梅老人愛子を失ひ給ふを

冬草にちからもつけず涙哉

初霜や何に冬瓜の花ひとつ

題葱并大根引

葱洗ふ五十の川のゐほし髪

月ともに氷れる葱やうす衣

鉢卷でことの葉もなし大根引

千鳥

刀もつ女子の供や小夜鵆

火の氣なき家のあるじは鵆哉

橋と船たよりも嬉し友ちどり

惠びす講

ゑびす講侍ひとりつくし人

畵賛

はし鷹や雪吹を己が花衣

鴈宕 兩吟

鷹居て供の圓居や寺の門

題しらず

日は迯て軒の蒲團を入れずもあらなん

題頭巾并紙子

吹れ行や富士の裾野の投頭巾

若おとこ目ばかりふたつ頭巾哉

しづ機の名たてがましき紙子哉

顔見せ

顔見せや此二丁町明の春

髪置

髪置や苧のしだり尾の肩車

かみ置や腰元丁雅稚うはの空

所意

百姓の年をおぼゆる寒哉

炭

炭竈や鹿の見て居る夕煙

火爐

埋火や野をなつかしみ蕗の臺

埋火や老てしたがふ蝸牛

有がたき晰ぞ殘る桐火桶

石女の寐ぬ夜の友は火桶哉

遊龍安寺

みめわるの妻やおしねの水狂ひ

鴛どりの中え投ばや小さかづき

鮟鱇并鰒

安鱇の君待頃や翠簾の口

切掛に唯今河家の初音かな

鯨

うちかける鯨の波や峯の松

妻も子も波の出しほや初鯨

雪

初雪や雪にもならで星月夜

はつ雪や一枝折て硯盞

降ためて大地へ落る雪の音

酒屋まで兵ひとり夜の雪

水口正覺夫婦、法躰しけるに

雪を掃てみどりをめぐる夫婦哉

東登に送る。詞書略す

幾とせもつもれ〳〵や雪の丸

竹也を悼む。

雪水の水にもつるに煙かな

氷

乞食の岸の柱は氷かな

節季ゆ

せきぞろのいつの穗に出て蓼の花

臘八や浮世を夢の朝寐坊

鉢たゝき

先にたつ子の聲高し鉢たゝき
嶋原のうらへもまはれ鉢扣

寒聲

寒聲や晝は見しらぬ橋の反
寒垢離の躶衣や入ほくろ

万劫、父の喪に籠り居けるを訪ひはべりて

世の別れ月や師走の机
雪竹の師走すがたや混本歌

煤掃

江戸の煤波數一筋黒かりし
すゝ掃にねるやねりその江戸奴

餅春

山彦や臼の飛出る餅の音
投るとも蘭にさはるな餅莚

病中吟

夜〳〵の枕に來る餅の音

歳暮

一とせも暮たり猿の綱わたり
鳥に鬼秀たる蘭年手に業
何事で二本きめたる師走かな
行としや其落書の橋柱
仕よしへ寐に行除夜の烏哉
狐火の矢橋は日和としの花
隙奴子吉原かけて年詣
宿引の東に向ひとし暮ぬ
誰寐たる跡ぞ師走の草枕
行としや兜頭巾の大和尚
馬車さはらぬ江戸の師走哉

年内立春 三句

年もはや鹿の敷寐の草青き
としのうちに春を〳〵と拔參り
枝川へ盗まれにけり雪の山

懐舊之俳諧百韻

なに長き十三年を夏の夜　雁宕
蝸も動かず來ます夢人　大済
玉手箱あけて嬉しき反古にて　阿誰
嗽の後に禁中の餅　李井
幕うちて烏帽子素袍の大茶の湯　百萬
埒にとゞいて松を嚙む馬　宕
割竹を月の一時〳〵に　済
噺に乘て氣で角力とる　誰
ウ
烋ふりて鮭を喰せぬはゝき擠　井
行脚坊主を居る毛氈　萬
前髪の手代も末に畏り　宕
長柄ひさげの稽古なきせく　井
襖たつ冬は何所にも忍れて　誰
笑ふ鼠を終に追勝　済
爲替着く元日なれど大晦日　萬
惠方柱に人の鼻筋　宕
土佐を出る花の古木賊鰹節　井
櫻や見つる須磨の干飾　誰
売にして藏を吹する春の風　済
禪物好く河岸の者ども　萬
鳴燒を月宮殿も嗅やらん　宕
院〳〵へ散る塔の蝙蝠　井
（三）
胴突の柱はによいと樹ゝの中　誰
殿の根間にこまる鶺鴒　済
乞食の聲はかはらぬ遊女にて　萬
關の淸水の濫は鉄漿　宕
勝手知る小便擔荷の笹くろめ　井
庭に遊んで坐鋪掃する　誰
此あたり風引ほどに景のよき　済
沖で拾ふた舟〔船〕頭が妻　萬
きよろ〳〵と隱れ歩行の色好み　宕
ひと夜番する公の箱　井
松の績は背中に兀て古杉戸　誰
喰やう知らぬ饅頭の汁　済
酌取も聟がふりをおかしがり　萬

更行月に人を脇息　宕
ウ 蜂の棚の皷へあたる音　濟
敵の髪を葬に梳く　誰
腹の子に利ぬ藥のやよつらき　井
守はられて變化通はず　萬
古池え流込たる杉の脂　宕
瓜のさかりは小柄はなさぬ　濟
ひろけ置書にて紙魚を打にけり　誰
碁盤あがらぬ病後くやしき　井
大國にかならず出る大男　萬
舟橋繫ぐ浪の夕照　宕
風寒く魚の皮干す軒の月　濟
振袖着たる有王が旅　井
花笠の紐を汚さぬ結びやう　誰
殘春ばかす錢の曲抜　萬
三 陽炎に口をならぶる池の鮒　宕
上屋鋪から放す飼鶴　濟
亡人を寄ては譽る親仁ども　井

山の止りの出羽の山形　誰
味噌樽に小判を漬て旅なれや　萬
殘らず游ぐ川端の犬　宕
篠竹に苫の棚かく夏神樂　濟
だゞで泣子の聲はめでたき　井
適〱に寐酒忘て夜の長き　誰
中風も澄す胸の月影　萬
案山子にも小袖着せうぞいざ娘　宕
哥の骨牌に業平を抱　誰
百造の局もうつす鈴廊下　萬
好色庵の沈の本尊　濟
ウ 恨くさ髮もしを蛇に遣ひけり　井
雷怖き行水の暮　宕
ひよつと來高野聖を名付親　誰
鳥で膾をつくる山人　萬
白妙の雪もふすぼる煙出し　濟
机のうへに眠る三年　井
世は蝶の喧嘩をすると見ゆる也　宕

紀の路の春を仕廻ふ順禮　誰
こき捨たやうに花なき彌生山　萬
雀ほどなる雁に入相　濟
桴とりの月待暮よ手をあけて　井
忰霧滿る宮嶋の町　宕
買て置く蟹の迯込椽の下　誰
馬や奴を浪人の夢　萬
ナ
片枝さす榎の陰の凉み臺　濟
沼へ熱入大筒の玉　井
長持の蓋に肴を盛て出す　宕
誰いとし子を判取と呼　誰
店下を猿曳て來るけふの雨　萬
むごくからげし室咲の把　濟
念佛は前垂かけて誦し安し　井
夫は腰ぬけに塒守る鳥　宕
つけさしを十四五人の盗人に　濟
羣雁卷舟や家ほどな浪　萬
朝月夜一度にのぼる塩煙　誰
冬まで待たす嬭のつく石　井
松紅葉硯が有歟小屋の者　宕
駄荷を解せて遠目鏡出　濟
ウ
細引に浴衣干置く伊香保風　萬
無人聲にてたべるそば切　誰
憶病は衆道の味方かたらひて　井
きみしらず出る楊弓の膝　宕
八疊へ渡る便の二疊敷　誰
買かぶりもの笑ふ中立　萬
禪法花眞言門徒華の友　濟
柳つゞきに並ぶ寺〳〵　井

懷舊

常談あり、頻に句を吐べし、汚たる中よりぞ清き姿を産べし、と。

師の供の泥膩洗ふ淸水哉　大濟

作善

備ふべし手に於葉の飯枝さゝげ　文樓

卜居の句にたよりて

其むかし思へば凉し夜半の鐘　希凉

松陰にむかし語らん地帋賣　岱呂

今一ッある歟夜半の蟬の聲　專砂

雲のみね表(裏カ)を見るらん西の奥　宋雨

すゞしさや噂流るゝ紀川　其雷

桃さくらむかしながらや夏木立　楚山

笠興遙間孤雲上

紫や江戸より西の雲のみね　阿誰

扨は夢夏草しげき鐘の下　風篁

繪に書ついづれ形チの團かな　高峩

水無月に師の影うつす水も哉　桃彥

夜半鐘聲蒲燒きえて夏の霜　文羽

かの翁の老は子に似て枕蚊屋　鵑兒

ことさらに白き扇や寺もふで　田洪

むかし憶ふ長雪隱の團かな　東宇

冷水の砂糖にめぐる月日かな　燕之

先師、我住ける郷な、方一里さ、夏影な見はやし給ふ句あり。

紫蘇蓼の那須野に續く手向ぐさ　巴鵝

追福

水無月の日も名號の六字哉　解糸

跡ふりて其名凉しや夜半亭　少川

蚊の聲もともに念佛の加勢哉　赤鯉

今は舊宅のみ殘りて

西に鐘蓮見に誘ふ人もなし　少我

夜半亭主人十三回の遠忌さて、門人俳句な以せらる。予其頃は嬰兒にして、なぼろげにもおぼえざりしかども、此法莚につらなり侍りて

夢にだに花のむかしを蠟(スクモーシ)　阿誰男 浙江

過つるを氷室によゝと淚かな　大濟男 淞江

末の松山さ名づくる文臺あり。標題は冷泉爲久卿の御筆にして、裏書は陰陽頭泰邪朝臣の書せ給ふさかや、年頃祕め置れしな、露の身のはかなきな觀じけるにや、ある時

予に傳えて、其ふみのはしつまに、

なきすえの影見よ松の花がたみ

さ生前の一句を殘されたり。過つる春秋の夢うつゝに向ひて、かしこき鶺鴒の轉りにはあらねど、師の恩恵、一字をもて聊報ふのみ。

なきすへの影見る松の花筐　阿誰

宋阿叟の諱忌、其形容をおもひ出て

腰にふくさ今見る樣や麻羽織　有佐

面影のさまで皺なし夏羽織　平砂

蟬がらや聲はのみして發句集　米仲

薫風今も位牌の光かな　祇丞

石丁の鐘樓に蟬を聞日かな　買明

陽春の曲を心に知りて、下里巴人に生涯をやすうせん。今は昔を思ふ忌日なるをや。

なつかしや蓮見の文の紙魚見ても　樓川

夜半亭懐舊

めぐり來る空や蚊の聲鐘の聲　渭北

往昔を語り出すや唐扇　湖十

夢なれや十三年も一夜酒　紀逸

追福

九人はなし句は有にしたる土用干　再賀

夏念佛の宋あみだぶとなへけり　珠來

泉(マヽ)黄に質それよりは十三年　萬立

むし干や今に感ずる古人の句　超雪

筆の跡むかし硯や土用干　秀億

投頭巾涼しき國に遊ぶらん　吉門

六布七布釣手にしたふ昔かな　嘉廷

宋阿居士の表徳を弔ふて

夏を宋あみだの笠の姿かな　栖雀

みじか夜や人一むかしそれも夢　書永

其時の雲さへゆかし夏の月　雞口

すこしづゝ身を知る雨や土用干　柳尼

巴人庵十三回の忌なり。昔おける

發句を集さなして、訪ふ人に申侍る。

書ものに見る佛はかんこ鳥　庭臺

宋阿いまぞかりしとき、雪中庵唐の蚊を吟じて、かゝる風流を社さ常〳〵に語出されしもまのあたりのやうに覺しが、はや十余りみつの春秋を過て、又その人をなつかしむ。

虫ほしや唐の蚊の其後も売　由林

宋阿古人、隣るよしみに清三郎さいへる者あり。渠かもさへ老くたる尼の折〳〵尋侍るを聞ば、亡士の久しき召仕なりさて、今に音信るゝよし語りけるに、夫よりして予も折節は手のうちなど入て懷舊を訪ふ事あり。其句爰に書す。

古婆ゝとおもへば暑しうちはなる　清泉

桐の木に見返る年や夏の霜　田社

、

巴人齋宋阿遠忌を祭るに、おもしろや松ふく風颯〳〵として涙の聲茫ゝたり。

蟬なくや十三絃の風の外　春來

追加

身の後の月の有家やところてん　京 竿秋

十年余三拜の日や明の蓮　、宋屋

法の道飛もちからやほとゝぎす　、臨雪

阿師沒する後、しばらくかの空室に坐し、遺稿を探て一羽鳥といふ文作らんとせしもいたづらにして、歷行する事十年の后、飄ゝとして西に去んとする時、鴈宕が離別の辭に曰、再會興宴の月に芋を喰事を期せず、倶に乾坤を吸べきと。其言をよしとして翅書さへまめやかにせざりしに、ことし追悼編集の事を告來るにぞ、さすがに涙もろく、齋園扇の上に酬書し侍る。跋とすやしらず、捨るやしらず。

釋蕪村

（寶暦五年亥二月　江府松葉軒　萬屋清兵衛）

新撰武藏曲（しんせんむさしぶり）

曉雨

一日全史、吾に酒殺なすゝめて、願ひあり、かなへよとある。ふりたる曉雨に何の望みぞ。身に任するとならばといへば、その曉雨といふ名をゆづりねといふ。おこがましくいなむべきにもあらず。其上武藏野のゆかりとはなまめきたれど、いさゝか内縁も侍れば、其望に任せ侍るとて、一句を添侍る。

ほうけたるおばなを人にまいらせん　曉翁（曉雨改）
請て濁さじ水盤の月　全史
十日ほど立怺ながら夏に似て　心祇
旅の酒屋は木陰也けり　兎圓
隔さへまばらに編るよし簾　全史
一掃はいて風を見て居ル　曉翁
ウ
たまさかな便にとゞく塩肴　兎圓
聞てさへよいものは孝行　心祇

女房の蓬も廊のともかせぎ　曉翁
かけ寄つて問花車の高聲　全史
珠數見せて身の衰へを合點させ　心祇
味方揃へる喰物の賭　兎圓
在番は外へ出られぬ隙ばかり　全史
また譏られし初冬の月　曉翁
いにしへと今を机に味ひて　兎圓
なんぞに祭れ貫之も神　心祇
雪の外咲散花の見立なし　曉翁
莚も嬉しき春の土べた　兎圓
名
藪入の宿に御恩はあまる供　心祇
茶をかけてとはめしの愛相　全史
朝夕も今に隱居の下司近し　兎圓
夫々のかわりに呵られに行　心祇
戀をせぬ人もある世歟高利かし　全史
師走の廿日過の分別　曉翁
淋しさに普の出來たる寒念佛　心祇
堤の家も年寄にけり　兎圓

父母の顔を見に行旅をして　曉翁
小風呂敷にはあまる嬉しさ　全史
暈きても雨にはならず夏の月　兎園
錐は持ぬ歟むら草の丈　曉翁
院守も通りの方へ出て住居　全史
初瀬もどりの車引込ム　心祇
美しくさつと濡たる石の面　曉翁
大盃に一座和らぐ　全史
名は實のこと葉忘れし華柵　兎園
物あらためてよき日よき時　執筆

年頃望みし名を乞得て、表德を改む。よて其趣をいさゝか申侍る。
大笑呵々了也。

武藏野は我に過たる月見かな　望雲亭全史改　曉雨

時なる哉全史この夕、曉翁の前の名を得て曉雨となる。吾又全史の名を繼て、兄弟にひとしき交りを結ぶ。

交りの證據に立んけふの月　速水舍兎園改　全史

左の人々に、改名の句々を乞ひ侍べき事ながら、とかくしからんもいかゞなれば、折からの月の句々を乞て、此册子の面目となし侍る。其中にも此と聞知給ふ人は、其心ばへを句面にのべ給ふも侍れど、是は見給ふ人に、見分ケて給べさて、一つらに書並べ侍る。穴賢々々。

句順任到來

名月や簑笠をぬぐ今朝の雨　空翠
晴る夜や月のうね〳〵波の數　機夕
月ぞ今宵淺草川や氷るらん　蘭明
來ては行夜あかし須磨の月見哉　金翠

ヌたぐひ四本の中に月一つ　祇南
名月は猶妻乞ふ歟鹿の聲　蘆貫
名月や滑ヵで流るゝ隅田川　錦車

〇更科にて

一見の倫あり月の都方　祇德
名月や欲に一聲ほとゝぎす　宗吟
暮かゝる梢や月のかたみの間　福來
草に置雫ぞ月の化粧水　來德
名月や水のこがねの禁制　完二
しかもこの武藏に生れけふの月　宗成

〇

名月や少し衣類も改めぬ　草室
江戸川へ月やゆづりて武藏原　沾羽
下戸の名も一つでゆるせけふの月　芙祇
名月や人に薄を買はせけり　泮水

〇

名月や浮世せわしき鐘の聲　信夕
名月に見せたやかゝる磯の波　汶水

芋の葉の露を算へんけふの月　山曉
名月やあまりに晴ておそろしき　祇貞

〇

月今宵燈す狐も寐入けり　北支
名月や五十四卷の道しるべ　圓舍
新月や是も遊びの三ヶ日　覺輔
名月やさくら借りたき松一木　菊宇
名月や瀬田へ寄來ル蜆船　斗宴
世は丸く人に角なき月見かな　調宇
かならずと月の出しほの待乳山　律山
盃におくの手見せん月今宵　船步

〇

伏猪とも朝めしねたる月見哉　春來

腰に万貫な帶て揚州に遊ぶさや。

鶴に乘る亭主もあらばけふの月　米仲
名月や深き心のさしむかひ　平砂
名月や闇は心の持かけん　湖十

〇

二夜ませ鷹の尾上のけふの月　正與
池水や晝にかわらぬ月今宵　仙路
十六夜の鴉聞ばやけふの月　正川
名月や夜も消つゝ御垣守　李趙
むさし野に不二は負たり今日の月　烏皮
名月や座は三味線の駒むかへ　五鱸
虫の日にあかるき露やけふの月　正里

○

春歟秋歟月の宿かる櫻川　柳雪
名月や鵜も水底の欲はなし　花明
愛相を人もあやかれけふの月　牧ゝ
名月は山なき里の手がらかな　松窓
名月や外のけしきも常ならず　如月
名月や常にも行ぬ高根まで　心存
名月や影も千年の梢より　祇雲
艸毎に咲かと見へて月の露　子功
賤が家も夜の音なしけふの月　魯澤
名月や舟借させせん向ふまで　德澤

桐の葉や月にさはらで落仕廻　五嶺
伊達染は今宵のはれ歟月の舟　文秀
袷まで妻の氣の付月見哉　擔山
盃もこぼすな月の一やどり　連城
名月や晝さへ常の晝ならず　豐艸

晋子の句にすがりて

十五なら男の數ぞけふの月　牧十

○都に侍りし頃

目に通ふ武藏の月や京の月　永芳
世の中のはしか仕廻ふて芋の月　永市

○

名月や數さかづきの華もみぢ　如岡
名月やおもしろき物月一ッ　由義
くだけては空へ戻るや瀧の月　鷹佐
三味せんも聲もたかねや月の宿　秀吟
水さしに蹔(暫カ)く月のやどり哉　蘭洲
たまさかに拜む人ありけふの月　心來
實下戸も一つは過せけふの月　魚舟

○

稲妻の消る水有けふの月　溪粱
名月や千種の星の野邊に咲　森羅
名月や鯉のかたちはいさぎよし　窓房
名月や椿衣着て見ん二十山　萬幹
二千里の月の枝折や一ッ松　秋巴(照カ)
名月やうらの笘屋〻の梅櫻　五民

○

月夜よし今宵を空の紅葉哉　宗梅
棹さして橋の雲越月見かな　希明

○

海山や光も匂ふ望の月　乾什
何萬里ありともよしや庭の月　万英
影ともに案山子も二人月見かな　尹督
明月は枕に塵のつもる夜ぞ　賢仲
名月や空は今宵の機嫌かい　長隱
名月や空へ投出す舟のあし　鯉門
山からも梅(海カ)の物買ふ月見かな　晋阿

○

岡雨を曇りといわ(は)んけふの月　魚貫
名月や旅寐も不二のちからあり　共白

貞德翁の書簾の種といへる句なおもひ出て

書簾にもいひ分有やけふの月　守中
名月や月のとゞく文明はなし　机睡
仇人と浮名や立ん月の露　玉樹
名月や尻のすはらぬ料理人　寛祇
名月やかけ樋に餘る水の音　貫車

○

名月や心の猿のすはり所　魚沾
傀儡も客の數や今日の月　氷魚
タァ〱あらたまり又けふの月　墓水
稲妻の出る山もなしけふの月　英布
君達も人によるべや月見もの　魯文
名月や師の影に氣の付ヶ所　偉之
手の届く遊びして居よ月の猿　祇貫

○

名月や世はおしなべて猿の智恵　（松本）塞驢

名月や瀬田の夕日のうしろ前　（同）如蟾

名月や筏へはねる魚の音　（同）青雨

千金は春に鹿相や月今宵　（駿府）一路

日まはりのねぢもかへずやけふの月　（同）竹臥

名月の出汐や雲の丁子引　（相州）祇堂

むさし野に名乘出けりけふの月　（野州）蒼洲

○

文臺を野にして月の道いくつ　心水

新月の遊び仕出せり酒杜氏　鶯十

○

此畫を望れてしるし侍る序に

覺へ置け最中の月のすみかげん　李山

見る物の皆馨しけふの月　祇來

○

廿五の曙はいざ月今宵　百蕋

名月や五色の外の波の色　一鳩

名月や今宵最屓の男山　諫子

帆を下ゲて波を休めしけふの月　百太

名月や片欄干は水の上　芝光

○

名月や重荷と見ゆる松の枝　玉娥

名月やいで物見せん五つ紐　春藤

摺物に改名月のあるじかな　塵匝

墨色の森の深さやけふの月　木雪

戰にうさぎ嬉しや月今宵　鷲長

澄のぼり庭白くなる月今宵　鯉十

名月や黑いに白い道のかげ　蓮谷

○

新月と改めし名や十五日　東爲

名月や松を軒端の鶴が岡　友以

○

入相の心づよさよけふの月　寥和

一ひらも散とは見へじ月の華　黑露

名月の空も波路にかゝろかな　半山

草も木も寐入らぬ江戸ぞけふの月　古雁

○

二千里にかぎれるは古人の小氣、唐土までもさは、俊成卿の取ひろげたる幽玄ならずや。

はなの雪それはきれ〴〵月の雪　沾山

寄依脩に揚屋を見せる月見哉　社袤

○

唐崎も傘ほせやけふの月　栢筵

○

名月や更てうす茶の薬降　買明

むさし野にて

野にまけて夜の短さやけふの月　樓川

五月雨によく生て居てけふの月　紀逸

姥捨や月は浮世に捨られず　栖鶴

古き世の下手うらやみて月見かな　雛口

釣鐘に闇は仕廻ふて今日の月　巽籬

○

照も降も雲の上人月見かな　袖娥

月になれ今宵水(晶カ)昌そんからす　全枝

岡雨のうしろ備へに月見かな　超草

姨捨の道おしへけりけふの月　鳳尾

名月や二人行なり四人連　都十

○

いつとなく夜は明にけりけふの月　河東

名月や笑つてくらす人もあり　河洲

蓬萊に染たき物はけふの月　半洲

○

月の友けふぞ誠の魚と水　舊室

名月や笛を拾て嵯峨近し　貞室

名月の空も同じく雁の橋　貞風

名月や常にはくらき髪の上　貞腐

名月やうかれて越る橋一ッ　園二

○

名月や雲の織物敷て待　冠子

名月や帯かくれ行小柴垣　雀董

名月や撥は空にて行違ひ　舞鶴

名月のちからや夜の不二筑波　藤橋
名月や雷しける峯に出　故一
○
代々の月名といふ文字の新しき　訥子
名月や二段に醉て明近き　仙魚
名月や一ツの影を二町まち　十町
名月の眞正面や須磨明石　魚樂
○
月しりに昔を問んなを今宵　一共
○
名月や日の影ならばねぶからん　來雨
名月や鐘の下闇凄からず　雪齊
名月や雨にはうとき渡し守　長鶴
○
名月や瀨戸物寒く更渡り　洞水
名月や曙の帆も見て戻る　雪嶋
月も三五角のとれたる夜遊哉　以一
月の名や登る入江に楫まくら　露十

名月やさらしな／＼に美を盡し　如嵐
名月や給仕は岡に池の船　卜賀
星は何所月は今宵ぞ名の譽れ　佐常
岩角に波の白さやけふの月　染之
うば玉の髮梳がほやけふの月　寛子
月の名の梢に高き今宵かな　梅素
月の名もけふを三五や硯の壽　如貢改 烏嘯
○
名月や外の濱まで江戸の息　桂州
名も幅も武藏野廣しけふの月　閑江
呼かへて新しく見るけふの月　杜光
照りまさる名も高砂やけふの月　虎鉢
下總も武藏の月や橋の上　龜遊
みよしのは東にも有けふの月　壽夕
飛雲の末になりけりけふの月　車向
海原も照り埋てや月の雪　斗志
月の富夜や若がへる峰の雪　劍尺
○

三井寺の鐘の透間もけふの月　何江
新月やはね込魚に放す魚　何亮
挽ぬ木も今宵ぞ廻る月の友　何文
名月は二日の中のおもひもの　家橘

○

其軒の枝も殖へけり月のぬし　原富
海面に海老も照れりやけふの月　孟津
名月や豐かに傳ふ舞扇子　夏若

○

名月や能登殿初め樓船　沾古
名月や民は夕飯外で喰　大漁
武藏野や月の鏡の天下一　丈園

○

頬づえをかへる雲間や庵の月　子鳳
名月や彫音もせぬ三位殿　尾谷
よしつらも田鶴鳴渡る月見哉　雨谷
名月や波より出てひわた葺　東里改 桃李

仙家の侘のしたわしければ

松かぜに琴を彈せて月見かな　里潮
名月や初てかゝる松の露　雨娕
名月や鏡に息のかゝる雲　如畔
幾久し名は世の中にけふの月　左竹
月夜よしよし原雀聲しける　里曉
うろくずも同じく照るや月今宵　史泰
いろ／＼の枕して見ん月今宵　觀瓠
名月や裏は鏡の天下一　觀花坊
百草にもれてや月の華すゝき　止水
慈悲の爲買ふ遊女あり月今宵　沾風

○

今宵月照るや大臣の腮の先　存義
明月や夫婦二ツのたばこ盆　書永

○

みかさと申せ宮城野ゝ、といへる
歌に依て改名を賀す。

萩原や長柄の下のから錦　見指
名月や指をさゝれぬ物狂ひ　誘虎

分別も二つは出ずけふの月　水絮
名月や三井寺諷ふ外長屋　野染
名月や網にうつろふ川柳　祇哲
秋のうさ忘るゝ月の今宵かな　祇文
月今宵おもわ(は)ぬ賤がやどまで　楓賀
岸へ捨て月まだ若し波今宵　祇十
翌は翌庇もとれよけふの月　四猿
薄賣月を配つてかへりけり　千里
むさし野や枝に耻たる杣も有　河梁
名月の夜はさま〴〵に明にけり　東橋
濁らじな名の月影を宮戸川　馨響
潮花も十分盃や最中月　鶴樓
晴渡す月に姿や江戸男　和平
樓へ雁の影さす月見かな　青牛
名月や又涼所の若がへり　鶯歌
陸を行友をまねくや月見船　鷺十
草も木もなびく名はありけふの月　此桂
まくり手に是見よ江戸の月見もの　桂夕

世盛りに男盛りの月見かな　栽二
句を賦せん筆よこたへて月の興　自來
夫をまた弓張月やおとこ山　功孝
名月や醫者に一馬場所望せん　雁阜
君ならとかざす牡丹や傘の月　砂光
打ならす物なら響け月千里　文季
けふの月心よく見ん二はしら　蝶也
名月や薄の影の座敷なみ　千ゝ
山も里も丸くめでたやけふの月　文丈
名月や夕飯早く過にけり　波聲
名月や新に家も守こゝろ　砂明
あり〳〵と柳うなづく月今宵　白李
家どにあづま遊びやけふの月　虎文
名月や買て配らんはなすゝき　百府
名月や堅田のよけい水の上　花礫
賑やかを秋といふ事けふの月　八公
盃も珊瑚や月の花紅葉　心生

○

名月や不二の近所に山はなし　君李
いづくに欺取落してや三井の月　風葉
名月よやすまば松の影ばかり　敬和

○

家〳〵にむさし野少しけふの月　少長
古き月を新しく見る今宵かな　桃朝
旅寐せん花なき里もけふの月　盛府
兎ならちと出て遊べ月の中　八町
ほど〳〵に心儲けの月見かな　里郷

○

性善の見附所や忝の月　海丸
月にさへ日本ばれの今宵かな　梅幸

○

王子の川邊に遊びて

山川もかじか(原註)杜父魚のうたやけふの月　竹素
見る人はみな我友よけふの月　醉江
名月に冬瓜ははやき霜夜哉　五溪
番組も心拍子やけふの月　宗周

だんごにて兎をつくれけふの月　文治
八景の數に入る夜やけふの月　文旅
一つらの雁もくもりや秋の月　南林

○

荒海も靜に照るやけふの月　雪堂
名月や隱されはせぬ蟻通し　此君
日のみやは月も本なる秋津島　地久子
哥よむと人な思ひそ月の前　曉松

○四季之月詠

おそろしき顔を見直せ朧月　心祇

此日は志賀の山越して、つかれ侍れば、ひたやこもりと思へども近江の海は、と人の云置給へれば

打出て水海すゞし月と月　仝

所思

名月やまだ(原註)未ひとり見る身にならず　仝
こがらしのとゞかぬ月のかつらかな　仝

○

名月や今宵夢見る人は誰　人十

名月やありのまゝなる空一つ　心牛

松立ぬばかりぞ月の三ヶ日　正朔

○

夕暮の枝に月咲く今宵哉　曉翁

此集の名附よ、といひおこせたる夜の夢に、

雅俗をば月や知るらんむさしぶり

よて武藏曲と名附んと思ふに、古集に此名の侍れば、新撰の二字を添て題號となし侍る。

寶曆三癸酉仲秋　喜隱子

延享廿歌仙

湖十

（延享廿歌仙）

延寶廿哥仙は芭蕉の翁の花なり。此廿哥仙は延享の年の花にして、なをまじはりの實を結ぶ。されば誹諧の變化は時の花に流行すとも、正風のまことは霜にいたまず、嵐にちらず、百世に趣を殘しながら物あつて褒貶これに隨ふときは、みづから讃して後へにそしりあるとも、いさゝか悔なかるべきか。おほよそ一とせの詞華・言葉を四時の誹林となして、今こゝに諸花を束ぬるは、彼山中不材の無用なるを除きて、あまねく梅柳のこまやかなるに及ぶ。しからば心を江戸川のひろきにとゞめて、風情は比良の高根の花にあるべし。

第一

梅折ればをのれも動く月夜哉　　湖十
初いなびかり雲やりの末
大名のさき荷の小鳥囀りて
鳥を見ればむら雨の跡
一艘と二艘と渡し濟わかれ
いつまで草やいつの眞砂
干瓜を明けて颶の笊を卷
三味線の音のわるき深川
十五からはたちの間の其長さ
中が見たさに漏刻を買
大盃の折〱出來る下屋敷
青いへちまに忍ぶ藪入
たなばたに貸して間のなき後帶
月俄晴て藏の囘南
高い足袋大坂人の履詰て
子にさまさるゝ元朝の夢
花の春酒呑うには僣だらけ

戀に廢らす灰毛猫あり
ナ
惣仕廻無駄をなくすばかり也
口待の所化を寐かす紅閨
氣のぬけた蠅とりもちに五月雨
廊と童のそだつ信濃路
大男杜秤を見ると只置ず
灯心買て元船は出る
御秡の古びに冬を待れけり
名もいろ〳〵に下のゆみはり
あづまがた在番城の夜半の烁
腎虚にあたる富士の頂上
誹諧はゆるさぬ親のよみかるた
袖も木こりも内かたの人
日の軒の雫に降らるゝ中禪寺
菩薩にもせよ焚出しの飯
脇ざしが重さに猿の立すがた
毛氈二枚借り物と見え
老松の御恩の門を華の杖
春の瑞籬に大吉の幕

第二　　盤谷

明星とむかひ合たる蛙かな
艸の若葉も結ぶたそがれ
濱燒の鯛も櫻の名をかりて
鵜の骨眼鏡はさむ鼻紙
晝中を玉の兎や眠るらん
へりとり笹に秋ぞしらるゝ
朝がほの花にはあらず茄子漬
宇治の焙炉は庵室の伊達
閼伽桶も手にふれ給ふ八の宮
蟬と鐘とに暮惜む也
はづかしくはな血のかゝるすべり莧
屈かぬ竿へ爪立る妻
つのもじのいの字もこひに書れたり
四十にしては若い國夏

播磨路を半分打に遊山網
耳を引出すきさらぎの刀
華の山ふもとの寺は皆ともし
千羽鳥も雲に入鳥
ナ
濡もせめ加茂侍の歩行わたり
試立に乗る朝倉の産
妙閑や狂言袴淺茅山
ゆきはふりつゝ海原の松
哥まくら名所へ向ける馬の鼻
小娘ひとり苧をひねる見ゆ
いつとなく賣れて鮑も片おもひ
ふりゆく社町もにぎやか
彌陀たのむ隱居は西の御門跡
はなし雀の錢も飛ほど
咲ながら蓮も涼しくくれの月
荒た垣根に刀豆の蔓
宣命の庭は寐る夜もなかりけり
花にしても嵯峨丸太哉

嘘つかぬ人も少しは京戻り
藥包みに伽羅も一炷
大名と向ひ合たるはなざかり
楓もわかくむすぶ夕陽

第三　和推

出代や枕の夢のをきどころ
急に返詞の果ぬ春の夜
名の高き花を昔に旅だちて
引盃へはさむ蒸菓子
淸〳〵と昔は陰行水の月
藪柑子照る揚石の側
米つきに江戸へ趣く雁の聲
鐘つたはる寺の山風
我ながら身には泪のあるもの歟
立て出て來る傾城の樹
姿鏡へ向へば直に卯淸し

　轡の音に起る末の子
筧にて自由の足りるたのしさは
　越べき峯の翌の漬物
本服のうつゝに謡ふ弓八幡
　好んだやうに降晴る雪
脱捨る月の入さの借し小袖
　白きが上の新豆腐なり
ナ
きのふけふ窓暗からぬ桐の影
　塵さへをかず留主の柴の戸
菅笠で風にもまるゝ其すがた
　月に七日の法の遠道
親の氣の休も一つ藏を建
　物よく賣れて片側は武士
産めば取罪おそろしき寒卵
　供も着かへる夕ぐれの鐘
辻駕で前渡らする言名付
　髮を惜めば容儀こほれる
夏の月浴衣へかゝる伊豫簾
　むすぶ心の冷やりと顔
律僧の裸でひとり糸と針
　書物を借しにへんとしてゐる
山川の風も靜に茶釜燃
　馬の上から無事を訪ふ
先達の聲おもしろや花盛
　耕鍬も道のはじまり

第四　存義

弘法のこゝにも一字山ざくら
　杜杖にむすぶ瀧のいとゆふ
長歌にながくも春を味て
　前歯二枚は象牙なりけり
兒醫者にふり袖着せて月の興
　ほそ江續きの庭の初汐
臍を崩せば出るたばこ入
　誰やらに似た事觸の面

廊つきも夏の間は伊豫簾
うたはれたがる後家の黒髪
けふ二日箒もとらぬ物思ひ
鴨はいやかと敲く枝折戸
しばし着て人にも享ん雪の簔
吹戻さるゝ谷の小便
能うは住む輩もくら馬の木ゝの奥
花にも下司の小言たら〱
御末から末は筧もおぼろ月
餘寒の狐そゞろ鳴する
ナ
ものよしと共に名古屋の關こえて
酒呑ぬ日は馬鹿といふめり
ほとゝぎす蚊喰鳥又かんこ鳥
佛間に寐たる夢ぞ佗しき
およすけて紅ゝの二布に我を泣
芝居をはらむ濱の商ひ
捕者のさはぎに飯がなくなりて
白髪天窓の悴なるらむ

鍱師の名乘は人も覺えたり
狼吼る遠山の月
松茸があればこそあれ松ふぐり
家のひづみを直す露霜
下禰宜も一つは(原註)持もちぬ古ゐぼし
今はと見えて元日の灸
花とのみ孫彦玄彦並居つゝ
藤のしだれをかけし旅籠
迯ながらわざとも濡る磯の波
日和かたまる鐘の塩梅

第五

賤の女の切火に淸し藿棚
よい茶の匂ひ奥深き春
筏士は花ある藤を帯にして
あまねく泊る五十三次
旗竿のかるく涼しき風の月

有佐

葉の箒の一たまりなし
井戸堀の岡へ上れば水くらき
裂た羽織の屋守寄合
綸旨前委は持薬の入所
姉の生れた年の大雪
當世の可愛らしいは額付
立た甲斐なく的の灯が消
森川は怖く覺えず一里塚
五色の網に瓜や李の
萱の刀桐の釣手を玉襷
細工に小錢たまる足輕
染革の裏はうらみぬ花ざかり
笑つて暦借る出かはり
ナ
大鳥は天に遊びて地虫釣
十二三なる孫を持故有
西側は女の通る淺草寺
眞似るばかりは出來る取楫
飴賣の暖簾は杖の下を吹
甲陽軍はいろはにて讀
人しらぬ盛は白き柿の華
去來が身持めつたにはなし
分量は日の性による刀の影
囃子の跡をむしの夜すがら
當盞が平皿になり龍田姫
死とも取た伽羅は放さぬ
育菜は有べき湯屋に其外は
風に衣は臼に帆をかけ
湯鶴なるお七が繪馬を掛けり
夢とやいはん今のむら雨
旅の花寐間から草鞋履て出る
さとくも乙鳥塵つもる山

第六

平砂

山〳〵は雲こそ圍へはつ鰹
十里の梢の向ふ卯の花

巖普請千引の石を手につけて
　よし逃るとも下座はする筈
諷ひ消しうたひ消されて月夜さし
　猪狩は濟む芋を荒さん
角力取取上婆にめぐり合
　敵のしれた聟が大水
こゝも亦博奕で神や飛ぬらん
　有かひなしの破鐘の聲
妻ならぬ妻はぬからず帶を抱
　たばかるも戀罰は眼の前
水際は是ぞ桑名の詞つき
　有明さむく帆の虫をとる
雪隱に御運つたなき筈掛て
　人參引かせ仁王祈らせ
五器を忘れ皿を忘れて花に飯
　小紋見よと賊蛇かはじめて
ナ
立前に出入屋敷を願の峰
　供を歸されしかも樽酒
角下りて拾子の詮議取紛れ
　蘭はをのづから寐ながらに咲
雨だれの斯うしたはなし浮御堂
　手なら足ならまめな音信
磨けとの萱の黒燒名は立ず
　千話する窓に靈祭る窓
秋の夜の矢文放さば五六通
　三十臺と見られたい月
入唐の支度は爪に灯をともし
　禪たゝく瀧の音きけ
茯苓に松の歸もかたまりて
　勝はうき世の金を待らん
此吹雪請身かならば所望也
　鮪の隣にて便船をする
花の頃江戸といふ字はよい字形
　たいかとあればひかぬ大風巾

第七　米仲

若竹のあたまくたしや雷の音
　かまきりの子も這まはる句
おしまづきいかなる哥をなさるらん
　万につけて北向の家
月見れば先五六升景氣上げ
　岸も此頃ひくき秋汐
禪に命かぎりの屓ずまふ
　衣をぬぐといきる小坊主
古疊殘らずいとま下さるゝ
　姨捨山に續く松本
犬槇の葉末そろへて立並び
　見知りを付るどろぼうの面
來ぬ晩は猶月雪をいとしまれ
　品ものさだめ聞しこる也
大坂へたんだ流れの十三里
　朝は各別うぐひすの引き
さすが又花はちらさぬ使番
　人形つるす春の御みやけ
ナ
龍宮の出現佛ときくからに
　いぶりを見せて男ほしがる
捨扶持にうちからしたる物思ひ
　風の袋敷丑寅の雲
きろ〳〵と濡身でありく嶋烏
　ゐしれぬ草を膏薬に干
茶漬飯ざつと仕廻ふてつき出し
　こんな祭はをれがもらをふ
名斗もことに久しき藏造
　大豆をとり込む會津海道
わすれては闇かとおもふ十八夜
　蚯蚓にかはる蟀の聲
寐冷した腹はつく〳〵口おしき
　諸方の狀をひとりして書
ばらついて何のけもなきはこひ雨
　にらみ合にもまけぬ黑犬
花盛宵から舟をきはめけり

たばねたまでの藤ぜんまい

第八

祇丞

鳥影の花の中行牡丹かな
上手の建し新御所の夏
狂言師柿の染物覗くらむ
大臨差の鮫に呑れて
くれの月峠をひとつかゝへけり
芋も地酒も入渡るころ
秋風に軒端とらるゝ弱法師
幕の物見に犬の鼻づら
昔から指もさゝせぬ松ばやし
願ほどきまで輕く濟む神
大門をざんざめかして玉の輿
潮古が胸はみな人の戀
月雪に疵のつくほど震かへし
鴨を四角につゝむ風呂敷
我願ひ袴ばかりも五くだり
大橋流は此度の贔
山寺に砂糖をたばふ華心
てふの日當を吹ちらす風
ナ
藪入を釣う〳〵と永の日を
いろは短哥に似たる俤
醒井も番場も義理の有所
どの大木もけなす山伏
雜兵に古金買の叩られて
つく〴〵汁に柄杓たづねる
水瓶にながらへて佳鮒の泡
留守を預る支離にこ〳〵
張上る喧嘩の聲は忉利天
月洩る橋や車つり行
すゞだまを六万坪の草結び
秋もわづかに角力もめたり
毛蒲團に老の膚を打まかせ
自筆を見せる川からの状

折〳〵に在家の役の赤豆飯
　片鬢付るみどり子の愛
花に來て木隱に行供廻り
　小田の蛙の對につくばふ

第九　　　　　　　買明

石川のほとほりさめて螢哉
　枕の方へ曲る瓜小屋
首引に笑ひ上戸を招くらん
　木馬ほぐせば釘だらけ也
夕月に角ドなき桐の葉のそよぎ
　小角豆の緣も紫の秋
初汐にはなれて眠る鴫の驚
　二階住居は氣も僻む筈
腰繩を付ぬばかりの娘にて
　八坂あたりは谷へわかれ路
物賣も五月は雨をかつぎつゝ
　今に眼醫者の顏も覺えず
活鯉のおどろく人を追はらひ
　ふいご祭に風休むらし
漸〳〵と八日に冴る月のもと
　瀧前町チも泊りたい町チ
此うへを吞がいやさに花めぐり
　杉菜の節も蟻の手掛り

ナ

蛙鳴鳥丸殿御留守なれ
　藥の湯氣の疊這ゆく
失ふて高の知れたる拂物
　口和は能うて今月も小
〆出して寐耳へ聞けば薄明
　一登りして戀にかしこき
松が根にわすれし箒靜也
　目の働らきも水車守
思ひ出て氣の改るとろゝ汁
　胴人形の白〳〵と立
露の月岩も絞らばしぼるべし

もやひ捨たる舟の蝉
晉頭とり倒た杉を踏へもの
二筋に醉追分の酒
やが上へ下ゝの火傷の哀さよ
きり〳〵〳〵と至る小鼓
花の主八十八の亭主ぶり
常盤の國へ戻ふて行春

第十　秋風

柴の戸も閉かねにけり雲の峰
からすの聲の低き日盛
千代もとや惠比須大黑布着せて
四條通は覺え安さよ
雪洞へ松もろともに月の影
辛味大根のにほひ冷し
隣人の祭かぞへる江戸の秋
少したほけて當る呉服屋
雷にいよ〳〵すくむ飼兎
佛逢き由の手の井戸
質ある文はまことに小煩く
立出て月雪の夕暮
深川や椚さびしき藪ほうし
下戸の卑怯はほろ苦い顔
念佛にかさを取るゝ智者學者
かりに借着の袴折こむ
葛籠馬上り下りの花の聲
露の葉かげで日をいとふ魚
ナ
問とはれ今は九十の春に逢ふ
しのぶ邪魔する森の野衾
荒れ行や御法度以後の賑ひ町
聲むすんで垢離の水製業
白雨のしそこなふたる此夕
はやり物也木ゝの鉢植
高聲の噺の内に古哥の沙汰
精進嫌ひ惠心太右衛門

桐河岸の月は隈なき廣小路
　すだく蚯蚓のひゞく太平
酴醾流といふ名は人にまぎれけり
　寺代官の早き縫針
山鳩のなれも妻こふ雨の中
　材木を引木遣おかしき
天滿橋天神橋や難波橋
　肴にはさむ舟盛の箔
大庭は親の讓の花の陰
　麥ふむそらに匂ふ噂

第十一

山畑や鹿のふりむく番椒　樓川
　土橋のへりをわたる秋風
旅のそら座頭を月の友にして
　羊羹までは奢る城下
志津磨やう紺の暖簾に染崩し
　引舟めくぞさらし井の網
伏見なる喧嘩噺に又喧嘩
　弓矢八幡山の百姓
揚屋にてなら漬に醉若輩さ
　十九の年はよく夢を見る
あさがほの糊うり婆も死にけり
　寺の街は盆前のもの
瓦やく橋場も月は萱が軒
　灯の來ぬうちに探題とる
佐殿は素湯を呑ても高楊枝
　醫者がはだしの娑の別當
音に聞唐樹手折れば華の雪
　建た大工のしらぬ櫻戸
ナ
曲水に吐血流るゝ下屋敷
　三味線もつて逃る朗詠
銀の櫛折ぬかはりに落やすき
　惚て男の鼻の先智惠
物干に蜩のつりたい夕凉

川向ゆく一寸の馬
なめかたに市女も財布はたくらん
始から嚙む道中の蕎麥
今もつて芦の湯くさきゆかたにて
庵の後住といふは浪人
臥待はなるまい月の庚申
たばこ入なり繪行器の果
烏帽子屋も懸にはこりた司召
塀の落首を洗ふあけぼの
兄御より兄御に見ゆる近眼鏡
小僧の名にはまけぬ狆の名
藪一重あちらは神の花盛
雨に清めて芳しき艸

第十二

人ひとり通らで雁の水鏡　渭北
葉にてたばね稲荷ふ髪

くれぬ月物買ふ窓へかたぶきて
連る聲なし國元の唄
赤貝の氷くはへておもしろや
春待薪に俵打着せ
此沖ですたる碇もいかばかり
咳に蓋する墨染の袖
たれかけて逆行猿の足の裏
屋根から石の落る四阿
つかもない時に寐覺て又おもふ
にほひ袋を引ほどくなり
筑波より吹てわか葉の虫が降
卯月の影の登る棚橋
主従の小尻かへしは腹こなし
銀かすがいの拂い尺八
けふばかり春のさびしき花の雨
しだれ柳の正面もなし
ナ
百千鳥稲屓鳥呼子鳥
紫宸殿見て吼る旅人

むめ過て素湯に甘みはなかりけり
　散るやはつ雪日はいつか閑
こそぐればころりと轉るやさおのこ
　添ん／＼と返す書にも
翌浮る船より戻る肴籠
　神酒一雫しみる土器
打立た新身の反の見事也
　追へども起ず門口の鹿
朝の月度紋はすごく我斗
　もさるゝ芦の穂は空へ飛
松島や象潟かけて死次第
　塩を踏で還入居風呂
尾を立て努すり寄る友鳥
　見は書院の障子から貞
袖にほふ花見車の揚簾
　なまめきあへり野は艸の春

第十三

木髪

鳴時に男鹿は角をかつぎけり
　笛もたばねる草花の中
盜まるゝ月夜の釜の輝きて
　しるしの墨のぬける風呂敷
鶏の抱れて足を打違ひ
　階子を入る藏の棚台
楊梅の核を投ればふりかへり
　太夫を二つつら當に買
御内儀に白眼廻さるゝ草履取
　下卑た事問淡嶋の神
付木屋のからげて渡す貝杓子
　しほらしく明く日蓮の口
川の月吹ちらされて鳴衛
　蛇籠の割の五文六文
身代の憔に見ゆる熨斗包
　京九重の桶に小便
花の山乞食に廲はなかりけり

大が流れて仕廻ふ曲水

ナ
八重霞酒屋の門も釣道具
　頬摺をして赤子わかるゝ
おそろしきまむしの戸二莚
　尺八ぬけば四橋は闇
むすび髪しやんと世帯をもしほ草
　亡八の弟役にして寐る
石灯籠直段につれて哀なり
　心の猿の虱見てゐる
どろ坊に田づら若やぐ夕間暮
　水は呑れる三日月の鎌
脇差の今年もたらぬ盆踊
　きぬたにこまる郡内の町
艸の戸や鼠をそえて捨物
　精進落に禅をする
一門の外聞になる喧嘩して
　旦那の留守と見える楊弓
釣鐘の責口出来て花ざかり

こぼせばはへることい葉の程(腫き)

第十四

　　　　　　　　　　　　　　菅原

投られし角力や砂に松の影
　背中もたする土手の猜
雨ながら海山動く月しろに
　挙句が済とすぐに旅だつ
馬に酒ひよつと飲せて案じけり
　おとがい包む霜の市人
夜のうちに梵天たてし河の中
　橋と芝居の損じくら也
六ッ七ッ下の男を誘ひ出し
　死なば共にと臍を押へて
帷子の暁さむくよれあがり
　木の枝折に無造作な箕
芋頭すこしは我にて好れけり
　當妻郡の綿をふるふ年前

宵月に風を送れの鉦太鼓
　一町入レば三囲も賤
花さして苞の持よき千住餠
　藤の盛に正月の禮
ナ
疊には何かこぼれて暮の春
　盲たゝきに女房追出す
花さかぬ冬野ゝすゑに思ひ臥し
　盃洗ふ闇のたまみづ
獵師まで平家の船を射たりけり
　朝日夕日に屬託の金
府中とは暖簾に見えし町續
　餠をさゝいてまいる神明
此頃のうさ忘れにはほとゝぎす
　今夜奴のしれし傾城
大雪の月になりたりあるかばや
　俗で衣のきよひよんなるらん
三味線の撥かくばつて鳥部山
　簾おろしてかるたうつ茶屋

印籠にさびしく入レし鬼の豆
　あばたな兒も供奉にめでたき
華の奥手拭ほどの瀧見えて
　喰れぬ頃に蕨繩なふ

第十五

和専

杉の葉の淺き焚火や夜蛤
　百坪たらず月の露草
馬工郎の鶉衣に風落て
　いつかゆるみし小刀の鞘
甘い物余り多くて身がもえる
　打水ほどのつゝ井筒なり
横雲に明石の宮は飛のいて
　取上婆の引ずられ行
胡羅蔔を力と思ふ青物屋
　雪になる日も拍子也けり
若息子印籠などの入らばこそ

ちいさい橋をわたる移香
松が根に寺から建し假番所
花を酌なら黒い盃
月と日の下にこがるゝ雲雀籠
春やむかしの畑の畑右衛門
腹病の杖にはなれて狂ふらむ
ふり向かたの虹をふき切
赤饅は眞さかさまに提られて
しばらく外科にかゝる日蓮
蜘の圍に朝まで星の残るころ
御ぐしそろへの已が痒さは
雛形に戀といふ字をべたと書
何になるやら檢校の金
京の町鐘を當ぬはかりなり
神の傳に猿太彦立
砂糖水人の命を引のばし
知行使の細長い箱
此月に眠れ〳〵と琵琶の音
澁の香のする杯の夜すがら
渡鳥はや羽箒と成にけり
よい帶をして小僧動かぬ
鷹といふ名ばかりの人このましき
一むら雨の入江つかへる
牛の子の寂う遣はれる花の下
きつと揃へて參る早蕨

第十六

風ひかぬ人の日頃やあじろ守
寄つきもなくあられふる空
持にさへ素鎗は少し淋しくて
晝で臼に仕廻ふさむしろ
いなづまの手際に折る樹ゝの月
野分のあらさ垣も籬も
太刀佩た使もぬれて袖の露
かなはぬ戀に神を抱入レ

紀逸

こま廻し投て引く手の奇麗也
　二吹限でとまる木がらし
夷講ゑびす斗に鯛をすえ
　江戸の目で見て京の人間
あすか川帶にも今はうら表
　月の梢にかへる花鳥
摘草も笊と出ては詠なし
　やぶ入隙をまつが岡でら
瘧病起請の罰もあたる筈
　さし向ては凄い行灯
ナ
ほとゝぎす年〳〵沓くなりにけり
　八日の鉦のおもひ入れ打
馬喰町敷居の上を草まくら
　虹もうれしい物の數也
我書ていたゞく文の行所
　かざし勝手の匂ふ檜扇
朝貝はあはれ六方へ氣をはりて
　眞孤一枚つゆやをくらむ

更る月上戸の額さめかへり
　文算盤を竪にして見せ
葭の根に淡のさゝやく湛へ汐
　車来てゐる約束の松
曇日に墨の袂のさびし過
　阿蘭陀提刀おもしろい物
うき鯉に山葵が添へば淡路嶋
　春を送に去御屋敷
新しく羽織仕立るはな衣
　かすみも八重に朝機嫌よし

第十七　　再賀

柴漬に獺の子乗て上りけり
　葱大根に低い水際
輪違は素人がましく思はれて
　親紋のない足輕の柄
盛砂へ座頭踏込門の月

　角力太鼓にまだ雨が有
初茸は位牌の下に轉とまり
　幾つ借ても切れぬ鋸
水牛はおかしい角のはへた奴
　哥のさまさへ辰之助哉
眞土山花なき木〳〵も折からや
　組飾にてかこふ苗代
水縄におとな揃ひのいかのぼり
　肴賣にも先は一聲
縞に倦小紋にあきてくれはとり
　事もおろかや伊勢の嘘つき
月師走すさまじけれど用がたり
　何におびへて宿鳥崩るゝ
袖褄に血も奇麗な敵討
　餅屋の杉のなくばない分
川嶋の先で行逢ふ物詣
　縮の襟のよはき言譯
山鳥青き羽風のほの〳〵と
　和韻の側に茶はこぼれけり
旅好の腹も合点歟とことはに
　桐油着るなら手は遊び物
枇杷の樹に京はつましい花が咲
　少しゆがむを燭臺の振
三日月や繼子の顏も似れば似る
　菊も頃日地の新も出る
萱葺の奥ゆかしさも文庫藏
　我に惚て歟瞳すはらず
死ぬ所さすが男のよいはづし
　奉書にたばこ袖かほる也
獨吟は慶光院を花の影
　巣だち雀のあそぶ瑞籬

第十八

顔見せや人の往來も六ツの汐　石鵬
　笘もたはゝに霜の花咲

土手藏の今度の松は慥にて
　いくら呑でも色に出ぬ月
漏刻の水せはしなき秌の風
　戸の明立に雁わたるらん
癪の內溫泉へはいるほどに成
　泣く子も飯の有難さ知
雷に疊四五疊引かへし
　けふは夏書の二日振やる
うらの時きつい證據を見せて置
　小姓出て待花の衣〳〵
田樂に舌を焦して三春行
　風を引ても永き日のかげ
大勢はならぬ〳〵と新渡し
　雨落て來る市の濟際
月もはや段ゝ附に冬枯て
　器量がよさに盜まるゝ猫
ナ
高安をろくにいふものなかりけり
　けたゝましくも經水の吟味有

さつき雨茄子の安いばかり也
　千貫樋の上の松原
横腹へ廻る所をたゝき鉦
　直に隣の家をこはされ
しづかなる鶴に突棒刺杈は
　三社の詫を讀で聞せる
算盤のたま〳〵人に成あふせ
　二百十日の跡が大事
此邊はむかし繩也渡月橋
　椿の花の殘る水入
別當もいくたり替る七面
　おろし大根の茶は淋しき
是ほどの長屋に爐が一つなし
　鵜の內に見える行末
道連もたしかに華の廿山
　男むすびに野路の春草

第十九　蝸名

白妙にみじかき瀧や雪の上
　枯木しだるゝ猿猴の曲
うつかりとちんたに鼻をはぢかれて
　夜は髭なき奴なりけり
二階から晴行月のざんざ降
　藻まで動く初汐
花薄鍵座建よと招くらし
　一升泣に泪あてがふ
朝夕の汁の實替る飛鳥川
　つる手の屆く門の鶏
賜をふほしに入てしのぶらん
　心あまりて文に繪を書
さびしくも石屋の松に涼みけり
　是も破船の茄子流るゝ
南無大慈大悲と續く口の内
　景清通る春の夜の月
人間の分別さかりはな盛

ナ
　御秡箱を背負て出替
肝心の熊野松風を貸なくし
　留守に寐て行親の友達
雷に焦た小舟を引上て
　朝つかみ合野嶋金澤
飯に酒かけて喰ふも伊達なれや
　元けいせいと誰かうたはん
枯野見に春の殘の染火繩
　晦日に繋ぐ賽錢の砂
又しては連歌〳〵の人あつめ
　黄粉をつけて挾む南瓜
宿の月明石の殿に追はれけり
　出合がしらの波と稲妻
帶をして寐ねば寐られぬ世捨人
　余所の囃子の煮燒する也
何を見て一羽の鳥やかましき
　花のあたりの廣徳寺前
長き日に古き手本の店ざらし

詩に作らるゝ春の給

第廿　　馬勃

百年の日の數閊ん厄拂ひ
　寒紅梅の生れたる色
俵から直に喰れる扶持取て
　庭鳥分で置や鶏
行月の手に合ふ筆屋いづくに歟
　何着てもよき秋と成けり
華草のいたゞく幣は氣の藥
　江戸はじめての岱を見おろす
身すがらで胴突の繩引に行
　乳母に出ぬ歟と他人からいふ
びいどろの鞴は音もかすかなる
　門は泥道背戸はしら雪
入聟を古い小唄であてこすり
　金が溜ると猪牙を一艘
夕月に又活かへる竹婦人
　腹を見ぬいた吸物を出す
首筋を虱の登る花奉行
　藪入が來て枕洗はせ
ナ、
拭ふとも撫づとも盡ぬ嵯峨の釋迦
　十町四方沙汰の秘
針の錢深き奥より持て出る
　家鴨の卵いやな炎天
虫干に并ぶ拔身の刄も青葉
　施行の垣のたつた一日
駕を今下りてはだしのぬかり道
　箱根の關で解た墨(マヽ)髪
遣る命貰ふ命の日が延て
　拜まれたまふ雨の弓張
亭主の氣知れ安きもの庭の秋
　くはらり／＼と椎のほうろく
墨繪にて何ンぞ一ト色習はばや
　聲低ならば天晴な醫者

少し夜の有に起ると物を蹴る
中に着たのが此頃の綿
我子にてゆへ花のうつぼ猿
囀わかく引わたる春

春

散花や一田〱のおとし水　羊素改 柢完

夏

馬の尾に蝿のうたるゝ暑さ哉

秋

葬はよい迎ひ也月一夜

冬

濡を見る心の裏や神無月

栖隱之吟 二句

夜坐の机のうへに、忽然と油むしひとつふたついで來て這わたるに、つく〳〵と見ゐたれば、あるひは硯に入、筆をつたひ、墨を味ひ、朱を甞め、はてはうつはものにとゞまりて、すこしの糊飯をむさぶる成べし。かれが爲に一句を憐む

かうろぎの膈をかぢるやあぶら虫　默齋

寐つかぬ子終には寐入るきぬた哉　七十翁 常仙

跋

今いふはた卷の哥仙は、をの〳〵志をあはせ、予が梅に起て、この花百華の魁となれば、四時の花のはじめなるをや。やゝ春ふかくうらゝなるに、小田の蛙のゆふべをさへ、出かはりの名殘はさら也。さくらは花の名に秀て、白妙のそら青みわたれば、照が鐘のむしろをならべ、手中のいとすぢといへるも此糸なるべし。されば鰹といへるものは、價に嚢中の錢を惜まず。まことに詩酒の媒ならむには、若竹の人をして俗ならしめざる、いとよし。牡丹は李唐の風流をうつして、こゝに遊子のこゝろを動かす。さるは夕殿の螢いとあかき暮は、雲の峰のさま〴〵なるかたちもおかし。やう〳〵初秋の日をかぞえて番椒色づくころ、初雁の聲・小鹿の音、いづれかあはれならざらむや。さるが中に角力は秋情をはなれておかしき物にこそ。夜蛤呼さびしさ、柊の名殘もつきすまじきを、網代もる小春の日さしあたゝかなるに、柴漬のもふけ事あらむも、文王を釣る翁ならで、漁村の夕陽ぞ思ひ出らる。都は顔見せの興をつくして雪の花も色そえ、春まつ宿のきよらなるに、しなどの風ののみことして厄拂ふいはけなき業まで、其姿情をつくせる誹諧の自在をあつめて、ことし延享丑の長月、歌舞徑の陽居に筆をとりぬ。

巽窓

延享乙丑歳秋九月

日本橋南三町目
吉田魚川彫
江戸本町三町目
西村源六版

千代尼句集

乾・坤

既白編

句集敍

載籍所レ傳。女而秀峙者。其有レ之矣。至二其修辭一也。少也。微也。勿レ論下如二班氏曹大家一者上。自レ此以還屈レ指可レ彈。難哉辭也。夫純樸不レ彫。熟爲二犧措一。白玉不レ琢。熟爲二珪璋一。其斯謂二之死不一レ朽。古君子其猶病レ諸。況女子乎。日本自二紫式部小野町之倫一。至二清少納言儕一。開レ口成レ珠。下レ筆爲レ章者。于レ朝于レ野不レ匱二其人一。豈氣運令二之然一乎。千代尼少ゝ。清淡簡暢。土二木其形骸一。枕石嗽流。卒意嘯咏。遂斷レ髮從二釋氏之教一。自號二素園一。而益寓二意匠於風月一。振二奇藻於林澤一。抑雖レ非二和歌者流一。實可レ比二其悟賞一矣。每レ得二一句一。知與レ不レ知。皆無レ不レ曰二某所有一。若三人勉ゝ相二傳口實一焉。其斯謂二之死不一レ朽。然而道聽膚受。前者唱レ于。而隨者唱レ喁。則異同不レ爲レ不レ多。是故所二與親善一者。將輯刊二定之一。而請二之尼一。辭曰。我得二之造化一。卒歸二之造化一乎。何勞レ之爲。是以不二上木一者久矣。白法師悲二其終焉墜一レ地。探レ篚僅得二若干首一。躬自校二正之一。將レ屬二剞劂氏一而語レ予。我雖レ未レ識レ尼。既欽二其風韻一。猶且感二白法師賞心之切一。以二此言一冠レ之云。

寶曆十四年甲申初春

南越 藤勝松因撰

遠き所 わざ〳〵とのせうそこ、あさからず よろこび入り〳〵。やくそくの一おり、ほ句はよそよりとや。げにもをとこめきゝ候。御わキ殊之外宜候。をくら堤の句は、人にも聞およびてなされ候や。外山あきし野ゝ雨のけしきも、只見るやうにおもしろく候。其外もしほらしく、附合は是にてよく候。かならずや、人になをして御もらひあるまじく候。とゝなはぬ所あるを、をなごの本情とほめ申事にて候。ほ句の事も、藤の花すぐれて面白候。末略

三月盡　蓮二

千代様

傳三千代女二書

墨の江の松は、幾世經ぬらん老木のさかへ、いまに久しく、武隈の松は、千とせの秋や過ぬらん、名のみ傳へて跡もなし。こゝに一木のまつあり。やゝ廿とせの春秋を經て、千代の翠におひさきしるし。いまだ高砂の尾上に、相生の名もあらずとかや。其聲高くひゞきて、芭蕉葉のやぶれひさしき不傳の妙音をうたふ事、自然の天籟にかなへり。されど凄ゝ凜烈のつよみなき事は、姫小松の風姿なるべし。ある時、漂泊の蓮二法師、その聲を聞ていへる事あり。必これに斧斤を加ふることなかれ。大道すたれて仁義あり、智惠いでゝ大僞ありと。これこの謂なるべし。おもふに木鐸に閑園の笠をかざり、針鉄に屈曲の縄を張べからずのこゝろならんか。たゞ敷しまの風にさらし、寂ゝは花柳の妖艶をわすれ、亭ゝは荻薄の柔弱をはなるべしと。これ時千代の功をまつの葉のながくつたえむと、其心を知らしめむと、いさゝかしるしを顯はさむに、

　冬からの皺もぬがばやころもがへ

百日の皺もぬがばやころもがへ

寒かりし皺も脱ばや更衣

此ふたつの中に、初韵はおとこまつのかど〳〵しく、一句のつよみともいふべく、寒かりしといふ聲や、衣の皺を引かへて寒苦の皺を脱たれば、一作の針鉄に曲節ありて、これを松風の上手とはいふべく、これを妙とはいふべからず。冬からの音は姫小松のよはみにして、天然の風聲なれば也。むかしも衣通姫のながれに、小野小町なん此妙音を得たるとかや。抑上手は人を敎ふるに尊く、名人は天理をつたふるの靈なり。玄又玄衆妙の門といへる人は、八十章に万理を通じ、明德をあかし止善にとゞまる聖人は、十三經にひろまる。こゝに南無妙法蓮華經の妙は、五千余卷に上ぬりして大自在を得たり。せばむれば芥子の中に入、ひろがれば那由他の大身を現ずるがごとく、颯とも、瑟とも、風とも、凛とも、四時に流行し、千歳に不易せばこれを蕉門の虚に居て、實にはたらくといふ一傳なりと知るべし。これは是不知して、かしこかれといふにはあらず。しりておろかなれと、そらうその調子をあわせたるのみ。

享保十孟夏上浣　　不五舍人宇中誌之
老ぬればやがて死ぬべき身なりき、
すへの世の記念にしるし侍る。
片われのいの字書聞や夏の月

いせのふみ
キ様が句、別々に書付たがめ入候。
山吹や御に水のよどむ比
此句よし
朝がほの花や木陰のおそろしく
今少言たらぬやうにて又おかし。
木にものゝこぼるゝ音や秋の風
此句よし。
秋風や仕廻ふて萩に來ては居り
この句は慥ならぬ作にて候。
病後ものに退屈候まゝ、あらまし愚評申進候。かさねて
と申殘候。以上

卯月廿七日　　麥林
千代様

對加陽千代女
國の名の笠に芳はし花の雪　麥林
とをき日影も水ぬるむころ　千代
うぐひすに雀の朝寐起されて　蒼紫
机の塵を笑ふ羽箒　風二
栗柿に月下の門のたのしさよ　東菜
薄着の人に冬は近よる　茶 乙良
雁がねも乘合せたる渡し舟　峯
元三大師横川ともいふ　代
灯をとほす間を狀の筆とめて　林
牡丹の筒も庭の薮から　二
啼そめる日和せはしい蟬の聲　紫
虹も涼しき紅の乗掛　峯
　　　　　　　　　　菜

千代女の許にやどりて
おしむなよ芙蓉の陰の雨舍り　蓮二
もさよしの道すがら、千代女さつれだちて
紅葉や老人葉も杖の友　盧元坊
千代女の許にて
凉風の配りや萩の亭主ぶり
千代女の許にて
髮水の手染もはやし庭の蔦　暮柳舍 希因

千代尼句集　乾

歳旦
福わらや塵さへ今朝のうつくしさ
よき事の目にもあまるや花の春
初空や鳥はよし野ゝかたへ行
我裾の鳥も遊ぶやきそはじめ
かざらぬは初音も來よし庭の竹
松竹や世にほめらるゝ日の始
竹も起て音吹かはす初日哉
福わらや御所の裾にも袂にも
鶴のあそび雲井にかなふ初日哉
布袋の賛
初空や袋も山の笑ひより
初霞
まだ顏の空へはおもし初霞
木のもとは翌の事也はつ霞

地に遊ぶ鳥は鳥なり初がすみ

文臺のうら書

初がすみたつや二見のわかるほど

若水

わかみづや流るゝうちに去年ことし
若水や藻に咲花も此雫
若みづや迷ふ色なき鷺の影

万歳

万歳やもどりは老のはづかしく
萬歳の口や眞砂は盡るとも

人日

七草やつれにかえ合ふ草もあり
道くさも數のうちなり若菜摘
人あしに鷺も消るやわかなの野
若菜摘けふより花の道廣し
七種のひゞきからある水の音
仕事なら暮るゝおしまじ若なつみ
手の跡を雪のうけとる若菜かな
花までは出惜しむ足を若菜哉
ひとつ家も摘出す雪の若菜哉
七くさや翌からは目の地につかず
七草やあまれどたらぬものも有
一いろのあまりは白き若な哉
七くさや都の文を見る日數
なゝくさや我は背戸にてよみ盡し
風の手にけふまで入ぬわかな哉
七草や雪を拂へばそれでなし
白い手の鳥追もあり若菜畑
山彦はよ所の事なりわかな摘

鶴の畫贊

人音を鶴もしたふて若菜哉

梅

梅咲や何が降ても春ははる
梅が香や風のあいあい木にもどり
梅の花咲日は木々に雫あり
むめがゝや石もかほ出す雪間より

梅が〻や戸の開音はおぼえねど
咲事に日を撰ばずや梅の花
梅が〻や尋ぬるほどの枝にさへ
梅が香や鳥は寐させてよもすがら

文臺のうら書

梅の月浪の間に〳〵二見かな
梅が香やとに月夜の面白し
梅が〻や谷へむかいに行戻り

仇を恩にて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るや梅花

追悼

梅ちるやまつのゆふ邊も秋の聲

梅花佛手向

なごり〳〵散までは見ず梅の花
梅が〻や朝〳〵氷る花の陰
梅咲や水さへ水にならぬ折
梅が〻や何所へ吹るゝ雪女

大黑の繪賛

右手からこぼれ初てや梅花

繪賛　三章

もどかしや香はとゞけどもんめの花
梅が〻につれ立日さへまだ寒し
鶴ひとつ何のこゝろや梅の花

鶯

うぐひすや又言ひなをし〳〵
鶯はともあれ爰の初音かな
黄鸝や聲からすとも富士の雪
うぐひすや都ぎらひの竹の奥
鶯やよし野ゝ沙汰に氣もつかず
うぐひすや初音に聞くは幾所
うぐひすや冬共儘の竹もあり
鶯や梅にも問ずよそ歩行
黄鳥のものに倦るか竹の奥
うぐひすは人も寐させて初音哉

柳

みよし野に闇一結び柳かな

晝の夢ひとりたのしむ柳哉
青柳や地の果もなき水の上
うぐひすは起せどねぶる柳哉
青柳は何所に植ても靜なり
結ふと解ふと風のやなぎかな
ながれては又根にかへる柳かな
青柳やどちらの世話で水の音
柳から殘らず動く氷かな
おそろしき根を耻入て柳哉
手折らるゝ花から見ては柳かな
根を置てけふもどらぬ柳哉

惠び壽の贊

釣竿の糸吹そめて柳まで

八十の賀

百とせに最一眠り柳かな

桑名のわたしにて

見るうちにわすれて仕廻ふ柳哉

かすみ

青柳の朝寐をまくる霞かな

春雨

もえしさる草何〳〵ぞ春の雨
春雨やうつくしうなる物ばかり
春雨や土の笑ひも野に餘り
春雨にぬれてや水も青う行

蝶

蝶〳〵や何を夢見て羽づかひ
夢ながら蝶も手折や花戻り
蝶折〳〵扇いで出たる霞かな
たんほゝや折〳〵さます蝶の夢
蝶〳〵やをなごの道の跡や先
わが風で我吹おとす胡蝶かな

飛しうの人に對して

蝶〳〵や裾から戻る位山

五百年の法會

をしなべて聲なき蝶も法の場

猫戀　淡雪

聲たてぬ時がわかれぞ猫の戀
ふみ分て雪にまよふや猫の戀
淡ゆきや幾筋きえてもとの道

風巾　霞　山吹

吹〳〵ど花に欲なし鳳巾
鳥は音に跡先さそふ霞かな
山吹や柳に水のよどむころ
山吹のほどけかゝるや水の幅

祖師五百年御忌法會　二章

ながれ合ふてひとつぬるみや淵も瀬も
すゑの世にながれてぬるみ增りけり

櫻

あしあとは男なりけり初櫻
初はなやまだ松竹は冬の聲
明ぼのゝさくらに成て朝日かな
どち見むと花に狂ふやよしの山
けふ來ずば人のあとにか初櫻
唯かへる心で出たにはつざくら
見て戻る人には逢ず初櫻
むすばれて蝶も晝寐や糸ざくら
明ぬれどいよ〳〵白し初櫻
影は瀧空は花なりいとざくら
月の夜の櫻に蝶の朝寐哉
何にすれて端〳〵青し山ざくら
潜るとて剃はせねども山櫻
晩鐘を空におさゆるさくらかな
短冊は風をあつかふさくら哉
花は櫻まことの雲は消にけり
見る人も麁相ななりや初ざくら
ふか入のした日の脚や山ざくら
花もりや人の嵐は晝ばかり
だまされて來て誠也初ざくら
女子どし押てのぼるや山ざくら
見ぬものを見るより嬉しさくら花

奉納

うち外を鳥の仕事や神の花

畫賛

道くさに蝶も寐させぬ花見哉

桃花

富士の笑ひ日に〳〵高し桃の花
それほどにかはかぬ道やもゝのはな
よし野から鳥も戻るや桃の華
桃咲やよしのゝこゝろ捨てから
里の子の肌まだ白しもゝの花
桃咲や幾度馬に行あたり
隱れ家も色に出にけり桃の花
もゝさくや名は何とやらいふ所

富士見にまかる人に

桃の色目におさまりて富士見哉
戸の開てあれど留守也桃の花

汐干

青柳のけふは短きしほ干かな
拾ふものみな動く也塩干潟(過)
海士の子に習らはせて置汐干哉
蝶〳〵のつまだてゝ居るしほ干かな

雛

鐺もちや雛のかほも戀しらず
轉びても笑ふてばかりひゝな哉
とぼし灯の用意や雛の臺所

朧月

穴の明松風もなし朧月
おぼろ夜やそれではなふて人は人
拂ふ事松もかなはず朧月
朧夜や見屆たもの梅ばかり
おぼろ夜や松の子どもに行あたり
言さして見直す人や朧月
朧夜やうたはぬ歌に行過し
世の花を丸うつゝむや朧月

雉子

きじ啼て土いろ〳〵の草となる
若くさや尾の顯はるゝ雉子の聲
耳遠い事でもあるかきじのこゑ

隱すべき事もあれ也雉の聲

雲雀

ふたつみつ夜に入そうな雲雀哉
折ふしは雲のうしなふひばりかな
てふ／＼は寐てもすますに雲雀哉
草むらの留守に風置雲雀哉
あがりては下を見て鳴ひばりかな
ある折はうそにも落て雲雀哉

畫贊に

身あがりや雲雀の籠も地に置ず

燕

乙鳥來てあゆみそめるや舟の脚

畫贊

舍りして筈とはならぬ燕かな

蛙

雨ぐもにはらのふくるゝ蛙かな
鳴雲雀呼戻したるかはづ哉
踞はふて雲を伺ふ蛙かな

蓑生濱といふに

蛙鳴てその蓑ゆかし濱つたひ

若草　畫贊

若くさや駒の寐起もうつくしき

送別

若くさや歸り路はその花にまつ

祖師五百年御忌法會

地も雲に染らぬはなきすみれ哉
駈出る駒も足嗅ぐすみれ哉

松花

吹つもる塵出なをして松の花

あいさつに

二むかしつもる目はなし松の華

隱居をとぶきて

囀りを世にや讓りて松の琴
閑かさは何の心や春のそら
下萠や水仙ひとり立しざり

送別

見送れば墨染に成花になり

藤花

藤のはなながふて連におくれけり
鶯の聲もさかるや藤の花
おそろしのよりやもとりて藤の花
まつかぜも小聲になるやふぢのはな
あそびたい心のなりや藤の花
地にとゞく願ひはやすし藤の花

更衣

花の香にうしろ見せてや更衣
綿ぬきや蝶はもとより輕〳〵し
わたぬきやはじめて夜着のおそろしき
綿脱やまだ朝〳〵にうそもあり
脱捨の山につもるや更衣
おもたさの日にあつまるや更衣
冬からの皺をぬがばや更衣
二日三日身の添かぬる袷かな

餞別

日はながし卯月の空もきのふけふ

卯花

うのはなは日をもちながら曇り皃
卯花や垣の結目も降かくし
うのはなの闇に手のつく若葉哉

牡丹

垣間より隣あやかる牡丹かな
水に添はゞまた名もあらむ白ぼたん
蝶〳〵の夫婦寐あまるぼたん哉
指折ば翌へもかゝる牡丹かな

衣通姫の賛に

ゆふかぜに蜘も影かる牡丹かな

杜若

水の書水の消したり杜若
萍の身はまだおもしかきつばた
行春の水そのまゝや杜若

なうなの身まかりけるに

雲のゆかりそれかとばかり杜若

灌佛

灌佛や蔦の若葉もあゆみそめ
蚊屋つりの草もさげてや花御堂

若葉

晩鐘に雫もちらぬ若葉哉
日の脚の道付かへる茂りかな
葉櫻や知らぬむかしのものに成

行々子

むさし野に聲はこもらず行々子

諫皷鳥

淋しさは問人にこそかんこどり
分入ば風さへきえて諫皷鳥

笋　若竹

竹の子やその日のうちにひとり立

餞別

若竹と成て千里も遠からず
風毎に葉を吹出すやとし竹
若竹の風は日に〳〵かわりけり
わかたけや雀の耳に這入る時

婦人の追悼

そのわかれ浮中の花けしの花

郭公

鶏の聲つもりし耳やほとゝぎす
ものゝ音水に入夜やほとゝぎす
あすの夜は寐させてくれよ蜀魂

畫賛

音をいかに雲井にむすぶ郭公
起あがる鳥もあるべし子規

風人にたづねられて

木々の闇植ても置ず杜宇

あいさつ

道〳〵に殘した聲や蜀魂
きぬ〳〵のあちらにはなしほとゝぎす
男さへきかれぬものをほとゝぎす
唯置て枕の塵や杜鵑
おもひ切てこちら向時ほとゝぎす
唯もどる道なか〳〵し時鳥

子規聞入の口もとぢて置

百合

姫ゆりやあかるい事をあちら向

ひめ百合や姿見をする子共から

水鶏

水音は水にもどりて水鶏哉

螢

下闇に居りわすれてや飛螢

しのゝめやとめし螢を置忘れ

川ばかり闇はながれて螢かな

茨

花と針の心問たき茨かな

菖蒲

降らひでもぬるゝ名のあるあやめ哉

音ばかり覓失なふあやめ哉

澤にあるうちは名だゝぬ菖蒲哉

風よりも雫のものぞ軒あやめ

五月雨

短夜のうらみもどすや五月雨

田植

まだ神のむすばぬも出て田植哉

つれよりも跡へ〳〵と田うへかな

田うへ唄あしたも有に道すがら

けふばかり男をつかふ田植哉

早乙女やわかな摘たる連も有

夕顔

ゆふがほは朝〳〵もどるさかり哉

夕顔や女子の肌の見ゆる時

ゆふがほや物のかくれてうつくしき

あいさつ

ゆふがほの宿や茶の香も水くさき

紅花

あつき日や指もさゝれぬ紅畠

涼風の道入て見えぬ紅畑

こぼれては常の水也紅の露

短夜のつのる花かや紅ばたけ

山蔭やこゝもとの日は紅の花

暑

あさの間は空にしられぬ暑さ哉
塩竈のほそふ立日はあつさかな
晩鐘に散殘りたる暑さかな
來て見れば森には森のあつさ哉

萍　藻花

うきくさや蝶のちからの押へても
蘋を岸に繋ぐや蜘の糸
浮中に我は根の付涼みかな
萍やとりおとしたる咲所
藻花や濡ずにあそぶ鳥は何

氷室

涼しさや氷室の雫〳〵より
蓋とりてつめたきかざや氷餅

蟬

初蟬や風にも用のある日から
せみの音やからはその根に有ながら

松風もをのがのにして蟬の聲

納涼

松の葉もよみつくすほど涼けり
涼しさや梢〳〵の吹あまり
涼風や押れ合たる草とくさ
すゞしさや手は屆かねど松の聲
涼しさやあるほど出して鷺の首
影坊の森ではぐるゝ涼かな
唐崎の晝は涼しき雫かな

送別

道もその道に叶ふてもの涼し
涼しさや耻かしいほど行戻り

八十の賀

涼しさやとに八十年の松の聲

ひよ子の贊

子の闇に鷄も迷ふやゆふ涼

あいさつ

涼風の植所なき住るかな

伊勢の人に對して

あいさつはうちとの風でしまひ皃

白雨 越の日和山にて

ゆふだちの道よりもなし日和山

夕立や卒爾な雲の一とをり

雲峯

眼にさわる鳥は消たり雲の峰

松風を植て聞たしくもの嶺

あいさつ

仰むけばきれいにあつしくもの峰

送別

何里ほど我目のうちぞ雲のみね

清水

山のすそ野ゝ裾むすぶ清水かな

青〳〵と見えて根のある清水哉

暫の旅に赴さし人へ

道くさも手のうつくしき清水哉

紅さいた口もわするゝしみづかな

行さきで又我に逢清水哉

手あくれば結びめのなき清水哉

近道を來て日の足らぬ清水哉

目にむすぶ谷間〳〵の清水哉

都のかたへ旅だつ人に

おくらばや清水に影の見ゆるまで

近道によき事ふたつ清水哉

結ぶ手にあつさをほどく清水哉

眞如平等

清水には裏も表もなかりけり

夏の月

釣竿の糸にさはるや夏の月

千代尼句集　坤

初秋

蚊屋の浪かほにぬるゝや今朝の秋
秋たつやきのふのむかし有の儘
これこそと何も見初めず今朝の秋
荻の葉のもの言かほやけさの秋
琴の音の我にかよふや今朝のあき
秋たつやはじめて葛のあちら向
初秋やまだうつくしい水の音
はつあきやまだ顯はれぬ庭の色
秋立や風幾たびも聞直し
かたびらの襟にはくさし荻の音

殘暑

荻の聲のこるあつさを隙で居る
秋の部へこぼれてはへる暑さ哉
朝の間はかたづいて居る殘暑哉

はじめてのあいさつに
文月や空にまたるゝひかりあり
文月の返しに落る一葉哉

七夕

荻も穗に出るやほしのあそびより
ほし合や心して行雲の脚
かさゝぎや別れの橋は懸ねども
朝がほや星のわかれをあちら向
夕顔も寐るやくそくぞほしまつり
ほし逢や月入までは何の蔭
鵲もねぶたき管の八口哉

朝顔

牽牛花やまだ灯火の影も有
あさがほや鳴所替るきりぎりす
朝がほや起したものは花も見ず
朝顔は蜘のいとにも咲にけり
蕣の花や木陰のおそろしき
あさがほはその日に逢ふて仕廻皃

牽牛子やをのが蔓かと蔦に咲
あさがほや誠は花の人ぎらひ
朝がほや裾は日もまつ草の花
あさがほや草臥直る夜は持ず
朝がほや夏の夜ならば夢の内
朝顔に釣瓶とられて曬らひ水

稲妻

いなづまも鴉の聲にわかれけり
稲妻や何にしるしをつけて行
いなづまの裾をぬらすや水の上

草の花　花野

蝶〳〵の身の上しらぬ花野哉

畫賛　二章

芦間から風の拾ふや捨小舟
芦の葉にすはらぬ尻となりにけり

文臺いうら書

よしあしの穂に顯はれて二見哉

千種貝の題にて

波のうへに秋の咲なり千種貝

送別　三章

日和〳〵道は薄の雫まで
下冷を咲あたゝめよ道の中
見送るに目のはなされぬ花野哉
どう見ても春散種や草のはな
秋風のいふまゝに成尾花かな
草の戸や手によごれたる花も咲

畫賛

雉子のつま隠し置たる薄かな
晩鐘に幾つか沉む尾花哉
桔校(梗)の花咲時ホンと言そうな
川音の晝はもどりて花野哉

あいさつ

千秋を咲むすびてや草の庵
秋の野や花となる草成らぬ中
明てから蔦となりけり石燈籠
鶏頭やならべてもの〻干て有

鶏頭やまことの聲は根に遊び

剃髪の人

塵と見て露にもぬれそ萩の花

秋風　虫

木からものゝこほるゝ音や秋の風

行水にをのが影追ふ蜻蛉哉

虫の音に心も置ず降夜かな

脱捨の笠着て啼やきり〴〵す

虫の音や野におさまりて庭の內

良夜

名月や人に押合ふ鳥の影

明月や雪(霧カ)間につもる水の音

名月やよし野ゝ葉にも咲あまり

名月や行ても〳〵よその空

名月やはづかしの森いかばかり

明月や白きにも似ず水の音

晩鐘の耳失ふやけふの月

名月や眼に置ながら遠步行

畫賛

きぬ〴〵は月にもありて明をしみ

名月や手屆きならば何とせむ

何着てもうつくしうなる月見哉

名月や鳥も寐ぐらの戸をさゝず

月見にも陰ほしがるや女子達

名月や闇を尋ぬる鳥もあり

月の夜や石に出て啼きり〴〵す

人中を潜る欲なき月見哉

名月の舟やあそこもこゝもよし

舟からはちかしとむかふ月見哉

名月やあかるいものに行あたり

名月や何所までのばす富士の裾

名月や留主の人にも丸ながら

うら町の軒あかるしけふの月

名月や唐崎の雨明てから

あかるふてわからぬ水やけふの月

硯の題

名月やそのうらも見る丸硯

石山満賛

名月や雪踏分て石の音

十六夜

いざよひや今あそこにて見ゆる雁
十六夜や呼く人のうしろより
いざよひやいざよいと言果ぬうち
十六夜の闇をこぼすや芋の露
いざよひの闇や恥かく人もあり

初鴈

はつかりや通り過して聲ばかり
初雁やならべて聞はおしい事
はつ鴈や山へ配れば野に足らず
初雁や聲あるものを見失ひ
はつ鴈や見捨た花を草の時

鶉

聞人の口の色狂ふ鶉かな
賣られても秋をわすれぬ鶉哉
雑物に針のこぼるゝ鶉かな

蒲萄

雫かと鳥もあやぶむぶどうかな

菊

蘭の香にあそぶ日はなし菊の花
菊畑やけふ目に見ゆる足の跡
咲花をいくらか捨てけふの菊
菊咲て餘の香は草に戻りけり
白菊や紅さいた手のおそろしき
菊咲てけふまでの世話わすれけり
きく畑や花の行衛は雲井まで
菊の香や茶に押合ふも此日より
朝〳〵の露にもはげず菊の花
菊畑や夢に彳む八日の夜
けふばかり見てすむものを菊の花
しら菊や寒いといふもいへる比
けふに成て草臥おかし菊作り
今日のきく獨咲ではなかりけり

しら菊や日に咲ふとはおもわれず
子ども手にかなふ盛りや菊の花

後　月

影坊も出ては隠るゝ后の月
しかられた畑も踏よし後の月
のちの月始めてせばきいろりかな
とり残す梨のやもめや後の月
たち盡すものはかゝしぞ后月
山彦は宵に戻るやのちの月

瓢

夕顔の身は持にくしあきの風

三界唯心

百生や蔓一すじの心より
約束を何〳〵持や種ふくべ

一瓢菴にて

九十九をよ所に持たる瓢かな
花や葉に耻かしいほど長瓢
行烁の聲も出るや瓢から

紅　葉

木陰から出て日の暮る紅葉哉
ゆふぐれを余所に預けてもみぢ哉
折〳〵は霧にもあまる紅葉哉
色に出て竹も狂ふや蔦紅葉

餞　別

闇からぬ空はともあれ初もみぢ

鹿

水の色赤うなりてや鹿の聲
夕ぐれを引あつめてぞしかのこゑ
獨聞我にはほしき鹿の聲

砧

音添ふて雨にしづまる砧かな

案山子　鳴子

冬瓜の枕さだむるかゝしかな
風の口は余所の仕事を鳴子哉

鴫　追善

鴫たつやよ所のわかれに暮まさり

遠忌

百とせのその日も鴫のゆふべ有

暮秋

行秌や持て來た風は置ながら

山代の温泉にて

溫泉の山や秋の夕部はよ所の事

行秌やひとり身をもむ松の聲

時雨

降さしてまた幾所か初しぐれ

柳にも雫みじかしはつしぐれ

日の脚に追はるゝ雲やはつしぐれ

その中に唯の雲あり初時雨

水鳥の背の高う成しぐれかな

松風のぬけて行たるしぐれ哉

此うへは白きものとてしぐれけり

初しぐれ風もぬれずに通りけり

まだ鹿の迷ふ道なり初しぐれ

京へ出て日にたつ雲や初時雨

九重の人も見え透しぐれ哉

田はもとの地に落付や初時雨

きのふけふあしたは只のしぐれ哉

畫賛

仰向て見る人もなきしぐれ哉

歸花

みよし野はよ所の春ほど歸り華

春の夜の夢見て咲や歸花

明ぼのも暮の姿やかへりばな

寐た草の馴染はづかし歸り花

咲〱も果はうそなり歸花

落葉

見るうちに月の影減る落葉哉

落葉まで風の物とや持歩行

水のうへに置霜流す落葉かな

寒山の賛

降り〱わからぬものは落葉哉

冬枯

冬枯やひとり牡丹のあたゝまり

枯野

鷺の雪降さだめなき枯野哉

いろ〳〵を石に仕あげてかれの哉

枯野行人や少さう見ゆるまで

枯尾花　決定心

根は切て極楽にあり枯尾ばな

安心

ともかくも風にまかせてかれ尾花

大根引　蕪

道くさの草にはおもし大根引

降ものに根をそゝぎたる蕪哉

手のちからそゆる根はなしかぶら引

凩　小六月

こがらしやすぐに落付水の月

似た事の三つ四つはなし小六月

紙衣　火燵

待暮も曙もなき紙衣かな

尼になりし時

髪を結ふ手の隙明て巨燵哉

冬の鳥

こぼれては風拾ひ行衛かな

三つ五つまではよみたる千鳥哉

池の雪鴨やあそべと明て有

花にとは願はず雪のみそさゞゐ

吹たびにあたらしうなる千どりかな

山彦の口まね寒きからす哉

拂はぬはをのが羽とや雪の鷺

鳥影も葉に見て淋し冬の月

霜　霰　寒

夏の夜のちぎりおそろし橋の霜

水にうくものとは見えぬ霰かな

朝の日の裾にとゞかぬ寒さ哉

水仙

水仙の香やこぼれても雪の上

水仙は香をながめけり今朝の雪

水仙は名さへつめたう覺えけり

冬梅

冬の梅咲やむかしのあたゝまり
折〳〵の日のあし跡や冬のむめ

雪

初雪や見るうちに茶の花は花
聲なくば鷺うしなはむ今朝の雪
初雪や鴉の色の狂ふほど
はつ雪やほむる詞もきのふけふ
はつゆきや落葉拾へば穴が明
初雪や麥の葉先キを仕廻かね
はつ雪は朝寐に雫見せにけり
はつゆきや子共の持て歩行ほど
初雪や水へも分ず橋の上
はつ雪や降おそろしう水の上
初ゆきや風のねぶりのさむるまで
初雪や根の付さうな竹の間
はつゆきは松の雫に殘りけり
そつと來る物に氣づくや竹の雪
しなわねばならぬ浮世や竹の雪
吹事をわすれて見るや竹の雪
靑き葉の日にたつ比や竹の雪
花となり雫となるや今朝の雪
雪の有ものにきかすな松の聲
つめたさは目の外トにありけさの雪
手をうちていやそちでなし竹の雪

あいさつ

取あへず塵に敷けり今朝の雪

五百回御忌
東御門跡へ上る

菜も塵もひとつ臺や雪の花

鉢扣

山彥をつれて歩行や鉢たゝき
鉢たゝき夜每に竹を起しける

臘八

臘八や流るゝ水も物いはず

煤掃　餅花

けふばかり背高からばや煤掃

散事を待とはおかし餅の花

歳暮

行としやもどかしきもの水斗

閏月のそのめも見えず年のくれ

朝起もひとつに年はくれに鳧

行としや連だつものは何と何

としの尾や柳に青ふ結び行

年内立春

としのうちの春やたしかに水の音

年のうちの春やしらずに行もあり

着よごしたなりに春とやとしの内

十のもの幾つの春ぞ年のうち

春めかぬ詞づかひやとしの内

おもひ出した様な春なりとしのうち

帶も袂も裾にひとしく、又平が繪に藤の花もたせし比より、其名あまねく、あめがしたに聞へければ、しらぬひのつくし人も、鳥が鳴あづま人も、此尼の風流をしたはぬはなき世とはなりけらし。いでや句の姿は、あはれなるやうにてつよからず、いはゞよきをうなのなやめる所あるに似たりと、古人の詞のごとく、つよからざるはをうなの句なればなり。今老の身のおぼろけなるすゐまでも、かく蕉風のいとすじをみださゞる事を、つねづねかんじあへる中にも、無外菴のぬし、したしみ深く、遠近にちりみだれたる句を書あつめぬれば、をのづからすける人々のかゞみともなるべき事おほければとて、しきりに櫻木にちりばめて、千代尼句集と題するもの也と、法師の物がたり有しまゝに、後序に筆をつく。

寶曆十三癸未初冬　加州金陵　半化坊

皇都書林　二條寺町　橘屋治兵衛
東都書林　銀座二丁目　山崎金兵衛

蘿葉後集

蟻(あり)つか

上・中・下

也有

俳諧蟻都嘉序

宇宙有大洲六。其一曰亞細亞。亞細亞之中丘崐崙。崐崙東南謂之九丘。又東而有國。國人自稱曰日出處。稱九丘曰日沒處。日之出沒處各盡爾志東之歌。西之詩。一也。其歌之有連歌。猶其詩之有聯句。有歌。有連歌。然後各有其俳諧體者。俳諧歌。升世紹紬諸名家不必作雖惡紫之奪朱哉。抑大雅之衰也。俳諧連歌。世專謂之俳諧。俳諧也者。貞德宗鑑二子者爲之倡。及芭蕉氏起一洗二子者醜。若肌雪膚面日緊焉。於以掉鞅乎文圃。圃之廣袤不知幾萬里。見焉而知者有去來焉有丈草焉。加旃許六其角支考之徒。抗衡一世。當今之時聞焉而知者。獨有吾也有翁。翁者張之藩頭橫井氏。吾藩著姓也。致仕之讀國制。公二十命。太夫諸命。太夫二十樞要。又加五。翁嘗爲樞要。世宦與祿。嘗昇不良臣風月長者也。學而仕仕而優吏事精明不遠不求渾厚沖和之氣粹。然益乎甫背。後以多病遜賢路。飛遯舞津。自少壯書劍餘力俳諧是嗜。年德高邵。句句彌峻。絶驚人。自欲金玉其什與世相忘。而人人不斷與翁相忘。覃及其什。翁三辭上木不能免。又不欲乖崖與物絶祇以異。於是乎蘿葉集行于世。今後續者出。名曰蟻塚。蓋其門士文樵之所爲也。夫蟻塚垤也。詩云鸛鳴于垤。文樵其爲鸛乎。嗟乎。俳諧之爲々。々滑稽諧笑。如未敢放破俗耳。亦足以鼓吹吾曹膵腹。雖曰不混雅頌。乃正妃之音。無能存乎。世之嗜俳諧者。求諸日出處張州舞津也。有翁在。有則雖不中不遠。僕辱翁之不鄙。何賤賤耶。序以爲垤之標云

明和庚寅冬十月狂生河登撰於無何有鄉

印　印

凡例

○羅隱君句集、既に世に行へる羅葉集に洩たる物あり、上木の後成れる吟あり、拾ひ合て後編とす。

○隱君梓行を許したまへる意趣は、前集に載てこゝに贅せず。

○隱君嘗て句稿に自題して垤（アーツカ）草といふ。今是を用ひて題號とす。

○世に出て稿に留ざるも少からず。二集を以て盡せるにはあらず。されば他の耳口にある物、集に載らざるを以て作にあらずと定むべからず。

○漢和の卷若干ある中に、兩吟にて峩洋篇と題せる一小册附録し、集の模樣とす。

垤集（上）

半掃庵也有著

送月堂文樵輯

春部

松のある里を初日の名所哉

けさよりは梅の雪なり雪の梅

門松や酒屋も杉はありながら

松風の里どこ迄ぞ門かざり

干物によごす里なし初日影

生キばやと又おもひけり初暦

わすれては眼鏡拭ふや初暦

いらぬとし又拾ひけり戻り道

若水や井戸にもとしは流れける

春もはや兩の手に摘む若菜哉

その袖も雪はふりつゝ若菜賣

うこん着て花いそがせよ若菜摘

七種の夜を根深煎る隣あり
色よりはおとに春めく薺哉
七種や火燵に水鶏聞夜あり
錢出せば雪は寐て見る若菜哉
つむけふも我は蒲團を佛の座
薺祝ふ夜も門蔵く人はなし
燕のくゞるも待たず松納
春寒しまた月のもる楷とも
点つけて梅とよめたる苔かな
戀をする猫より寝て梅の花
餅を焼く匂ひは奥に梅の花
灰部屋にたかぬ匂ひを梅の花
梅咲ぬ根深は鼻に遠ざかり
禮札のちらばふ門やむめの花
梅が香や篤し鼻にも春のかぜ
薄らがい一身にかけれふかぬ梅の花
春はあれ東風吹なで北隣り
むめの咲春戸や草閑に浴老の嶽

張物に足袋ぬぐ日あり梅の花
凍とけや筧も脉の通ひ初
鶯やそつと物干す縁の先
うぐひすの亭主の留主に初音哉
鶯や凪をひがしへ啼まはす
うぐひすや町で聞音も竹格子
黄鳥や炭賣聲の啼勝れ
鶯もこゝろに啼か朧月
うぐひすの寐言聞たし朧月
鶯や歌に氷を和らぐる
うぐひすを下手でうけとる初音哉
鶯や床几に眠るくすりとり
星まではうつさず池の朧月
月の出る間は星に借す朧哉
洗ひ手も水に逆ふや朧月
借かた傘さゝずに戻る朧月
鼻出さぬ背縮の様やおぼろ月
物おとし拾ひかねやおぼろ月

ふらぬもの降とも見へて朧月
忰塞の日や來合せる疊さし
紅梅や白いは餅も仕廻ふ時
船からも自由に手折柳哉
屋根葺を一日撫る柳哉
風は今斯ゥかはつたと柳哉
釣らぬ糸たれし川邊の柳哉
風止で本氣にかえる柳哉
鳩一羽居眠る雨のやなぎ哉
まだ寒き清水に青む柳哉
無事で居る常世が春戸の柳哉
雪隱の出口にもある柳哉
裏門は二王もなくて柳哉
門〆て花見の留主を柳哉
猶霞む月や遠寺の大(太)鼓より
野に山に筆捨させる霞哉
かげろふの人にも二日灸かな
二つ三つ星見出す夜や啼蛙

乞食にも手をつく嚔の蛙哉
魚ひとつ釣らで開あく蛙かな
僧正の榎木のあとやなく蛙
から堀へ龜相飛ンだる蛙かな
ちる花にあへられて啼かはづ哉
花生に葉は悄然と散る椿
老僧に大工が習ふ接木かな
若艸に蝶待つ程の雨間哉
はる雨や石と成たる餅の果
是からは鶺もどしけりつく〴〵し
下りるには口手間いらぬ雲雀哉
聲と羽を一度に休むひばり哉
虚無僧のあふむきたらぬ雲雀哉
黑ひ星晝中見出すひばり哉
關守の晝の寐覺や雉子の聲
虫までは遠さよ艸に雉子の聲
き娘の袖誰が引て雉子の聲
あれまでも寺のかまへやきじのこへ

大磯も虎はむかしに猫の戀
首玉や一寸ゆるむ猫の戀
帆柱に配る燕やひとつづゝ
つばくらやふとひ杖つくみほつくし
燕や酢の看板をぬけて行
こちへ來て隣から出る乙鳥哉
田植程笠はさはがぬ茶摘哉
又の世を鴉と成な田にし取
畑打の影は田にある夕日哉
平皿に海をちゞめて海雲哉
蝿一羽海人の逆手やもづく汁
足跡の田に減る鴈の名殘り哉
ゆく鴈や堅田に殘る鷺一羽
白魚や富士にかけたる鉋屑
たんほゝや葉はむしられて花盛
大根の花や見しらぬ都人
菜の花や村は未進に荒にしを
宿借さぬ人の垣根や木瓜の花
木瓜の咲野や佐保姫も針仕事
蜂の巣や山臥にける野雪隱
あたゝかな千鳥は啼ぬ潮干哉
寂そふな物の賑ふ潮干哉
海士の子の雛譽らるゝ汐干哉
店へ出る雛に桃のつほみかな
摘菜よりさすがにぬれる潮干哉
餅につむ蓬や雛の君が爲
よもぎつむ日やあへる葉は見のがされ
桃さくや芳野の便りまだ寒し
梅櫻あと先白しもゝの花
案内にも杣は頼まじ山ざくら
遲いのが手がらにも成さくら哉
賣花や錢より先に散りたがる
躑躅見の山に拾ふや遲櫻
肌ぬいだ人やつゝじの山戻り
山吹や影のとゞかぬ手水鉢
春もまた棚は仕廻はず藤の花

棚有て松は樂なり藤の華
行はるや山の蕨も手をひろけ
行春や過し佛の別れより
鶯も出店仕廻ふて春暮ぬ
ゆくはるや梅に來てゐる夏の色
行春の裾に糸やいかのぼり
空に滅る春の名殘りや風巾
行春の湊やさはぐ麥の浪
ゆくはるや夜道に灯す木瓜の花
ゆく春や花の名殘りの樽拾ひ
行春や藤にとりつく人心

夏部

世の中の人の痩たる袷哉
夏たつや空にも仕廻ふ小袖風巾
朔日を蚤の出代るあはせかな
菜の花の嚢衣もふるふや衣がへ
先キがけぬ心や老のころもがへ
花つゐに柳にまけて若葉哉
木の下の暗さよ夏のはいり口
鶯は四十を啼て若葉哉
ひばりとは雲置かえて郭公
夜の衣耳にかへさむほとゝぎす
夜の闇にも似せはなし時鳥
隱居屋にこたつ殘れり時鳥
待事にして子共迄ほとゝぎす
朝飯の菜は雲井にほとゝぎす
口に見たき願ひは低し時鳥
待うちは心に雲やほとゝぎす
夏もまた夜着の寐覺や杜宇
待耳へ蚊の來て啼や時鳥
折足らぬ初音の指や郭公
まつ耳へ出水の沙汰や時鳥
ほとゝぎす忽野山おもしろし
灌佛も指さす空やほとゝぎす

六月や又待ほどのほとゝぎす
卯の花の垣や朝日の消して見る
卯の華や黄な玉川は散仕舞
うのはなや足袋ではふまぬ雪の庭
卯の花やてふはたとへの雪知らず
卯の花や屋根にしられぬ庭の雪
うの花に鳥は啼かぬ月夜哉
葉櫻や餌さしの見出す花一ッ
咎のなきさくら淋しき若葉哉
ひら／＼と蝶の白さよ木下やみ
風巾の果残る梢や夏木立
秋までは長い一夜や木下闇
みじか夜や戀と夢とはかねられず
何がなと客をふすべる蚊遣哉
出女の口に蚊のよる夕部かな
喰れたる蚊を見送りて晝寐哉
雨げづく里や蚊遣の初けぶり
内にかと問ふに這入る蚊遣哉

芦間から火を見る舟の蚊遣哉
山の人里に雲見る蚊やり哉
青梅や貰ふ隣の微生高
竹の子や厠に生へてきたなまれ
笋や和尚に角を折られたる
刈られては蚊屋釣艸も蚊遣哉
心なふ子も生れたり麥の秋
麥焼やあふち出さるゝ鉢坊主
お寺からひとつ尊し初茄子
初なりや鄕にも麥の秋なすび
畠から珠取得たりはつ茄子
世の人にまだあへられず初茄子
宮奴の跡に世話なし青嵐
我影の目鼻に植る早苗哉
風はもし袖から出るか早苗取
笠うりの在へ廻るや田植前
荷をもたぬ日を草臥に田かき馬
伊勢を見て來た笠もあり早苗取

蟬もまだ經はならはず佛生會
風にまだちぎれる蟬の初音哉
はつせみや蝶は見限る梢より
初蟬や墻根に見出す蛻一ッ
又一里來て蟬をきく榎木哉
日盛りの蟬や千鳥の寒さより
ひとつ家に火を貰ふてや行螢
蚊は追ふて螢をまねく團扇哉
水を出て艸に流るゝ螢かな
油うり待つ日は暮て螢かな
目に一ッ隣へ送るほたる哉
いかゐ手に抓むもひとつ螢かな
湯あがりの濡手でつかむ螢かな
呼かけてほたる貰へば乞食かな
最ちつとで螢へたらぬ團扇哉
挑灯も尻にとぼして螢がり
出女の一夜とめたるほたるかな
細いとて喰はぬが延てことし竹

すゞしさを八百屋はしらずことし竹
わたましの雀の聲やことし竹
若竹や寐よげな比は雪も來ず
帆を掛た舟も走らむ靑田かな
米搗のうしろにはまた靑田哉
まだ殘る角か鐘樓に蝸牛
羽ね蟻や小町が休む卒都婆より
衞士の手におもはぬ罪や夏の虫
藻の花に釣りせで人や歸るらん
藻の花を縫ふて廻るやかいつぶり
もの花や錢出して見る渡し舟
澤瀉や藻にまきれじと延あがり
夏菊や麥から讓る秋のかぜ
なつ菊の露や不老の似せ藥
制札は魚の事なりかきつばた
長雨にみじかく成ッぬかきつばた
美しい釣の邪魔あり杜若
白い手にこがるゝ船や杜若

横笛が尋ねても來ずけしの果
米搗のこだまあぶなしけしの花
乘らずとも佛もかざせ蓮の華
あだな世を花盗人やけし畠
露で足る慾か上見ぬ百合の花
雨に咲ても干反けりゆりの花
笠のぞく蝶の身ぶりや百合の花
山守の棒もさはがず栗のはな
堂守にまがふ名もあり凌霄花
夜こそはかぞへし戀を百日紅
紫揚(陽)花や果も黑には染かへず
出女に隙な晝顔〔咲〕にけり
晝顔の花や虵籠を籬とも
ひるがほやあしたの原に這ながら
晝貞を誘ひてひらく扇かな
松風のおとを繼足すのぼり哉
鬼瓦にらむ幟の鍾馗かな
髮結を雇へば下手な粽かな

鶯の卵作るやさゝちまき
水に近き人のこゝろや葦(ヨ)簾
漏る所にはふきもせで菖蒲哉
かんこ鳥啼や六日のあやめより
佗た巣の世帶も見たしかんこ鳥
夕顔や遊ばゝ蝶もとまりがけ
夕顔や立し車はとゞけ状
夕　顔　や　乳　持　尋　る　都　人
繪に書けば夕顔ものる團扇哉
苅減らぬ聲や眞菰に行〻子
鳰の巣や情をのこす眞菰かり
負まいと鍋かくおとや行ょ子
うる聲の鹿に似もせでなら晒
簷に啼く巣立鴉や桐の花
花で居る瓢に叩く水鷄哉
さみだれや山は屛風に見る計
五月雨や鳥のとまるもがり竹
梅雨晴や蓑着ぬ人を久し振

つゆばれや溜て置たる蟬の聲
梅雨ばれやきのふの淵はけふの庭
鷄の身を干す屋根や五月晴
艸の名に釣らねば暑き紙帳哉
物中にうごく朝寐の帋帳かな
日の長い冬見て來たか氷室守
茶に湧けばあついも譽る淸水哉
影法師の柳を結ぶ淸水哉
もらはるゝ井戸もあれども淸水哉
葛水やうらみる秋もやゝ近し
風鈴は鳴らで時計の暑さ哉
籥入の筵引ずるあつさ哉
蟬の來て風鈴にとまる暑さ哉
うせ物の見へぬ納戸の暑さ哉
聟の物聞たがるあつさかな
旅人の蠅を着て行暑さ哉
辻君の戀にしたがるすゞみ哉
橋向ひ入かわりたるすゞみ哉
質屋へも通ふこゝろや土用干
石ひとつ馴染が付てすゞみ哉
目のとゞく秋や御秡の川向ひ

秌部

魚うりの聲にちからやけさの秋
脊中から秌たつ灸の匂ひ哉
蚊屋を帆に吹せて來たり今朝の秋
うたゝ寐の裙に秋たつ袷かな
探る題皆手にすゞしけふの秋
けさの秋ひとつまけゆく茄子うり
夏の裏秌と見せてやちる一葉
さし竿に鳥はのがれて一葉哉
ちる日とて芭蕉も一葉破れけり
猶も田に螢はのこせ虫おくり
おが屑もつもれば秋の蚊遣哉
折角と蟻のぼらせて一葉哉

冰もまだ手に持ッ醫者の羽織哉
葛の葉の表に殘る暑さ哉
似せて似ぬ人の柄杓や草の露
晝はまだ拾ひ人のある扇哉
朝顔や垣根はつよき蕨縄
蕣の垣やあるじは狐釣
朝顔や鏡に足らぬわすれ水
雨に四ッ開く朝顔の命哉
あさ貝やまだ莟には夕すゞみ
かたまつて殘る暑さや辻芝居
猿も手を星に延すか天の川
瓜の直もよはるや星の別れより
稻妻の夜ごともあるを天の川
七夕や瓜の枕に明の露
鵲や醉人のわたる橋でなし
あすまではうたはぬ星のうき名哉
月も課ふ文のあだ名や星の戀
牛でこそあれ七夕にくつは虫

誰が呵るとて數律儀に別れ星
蓮の葉も味噌の濁や魂祭り
揚屋へも無常の客や魂祭り
棚經や泣人も雇ふ葢
生た客交りてせわし魂祭り
灯籠や哀れは下手が作り勝
盆もまだ行灯にてらす命哉
蕣も哀れとられて魂祭り
蓮池や盆の佛にあらさるゝ
おどり子や秋の哀れもふりちぎり
うつかりと盜(スリ)も見て居る踊哉
晝は出る螢もなきを燈籠賣
稻妻や内からたてる後架の戸
稻妻の灶(キ)がら白し明の雲
いなづまや川迄とゞくは更てから
市中やなれぬ西瓜もあたま數
貝ひとつ野分の跡や蟬の聲
箱へともどらで秋の扇哉

扇おく日は夕顔もふくべ哉
垣間見の顔に似合ぬ瓢かな
蜻蛉や醉ふ程花に名は立ず
掛ものゝうしろに一夜きり〴〵す
雨の日や夕飯比のきり〴〵す
二階までとゞかぬもあり虫の聲
にぎやかな乞食の床や虫の聲
狛犬の尻で啼けりきり〴〵す
むしの音や水汲うちを止て居る
住かはる螢の籠やむしの聲
物ぐさの畠に多し虫の聲
聞て行舟路やもとの虫ならず
泊り人にかくす事ある夜寒哉
雪隠で覺へて來たる夜寒哉
蒲團着て袖を尋る夜寒哉
木枕の襟になづかぬ夜寒哉
泊り人に鍵さはかせる夜寒哉
さゝぬ蚊の行灯にとまる夜寒哉

艸刈に淺瀬問ひけり霧の海
葛の葉の恨つのりて野分かな
すゞ風の願ひの果はのわきかな
雲の峯崩して作る野分哉
ほゝづきや人に啼せる虫の聲
くもらせぬ秋の手持や鏡山
いつ蜂の我に似よとて蘭の花
淵明が籬も西はふくべ哉
留主に來て名を書垣の瓢哉
惟光がもらはぬ所ふくべ哉
沙汰なしに雨に成夜や鴈の聲
芦の穗の綿にも寒し雁の聲
雀ほど田には憎まず渡り鳥
初鴈や何を見捨て越路から
飴うりの鮓に更たる相撲哉
給が出て純子投たるすまふ哉
聞にとて奈良へはゆかず鹿の聲
聞捨にしておく戀や鹿のこゑ

鹿なくや山にうつぶく人心
ひよ鳥に鳴子や風の管すだれ
蝶の羽にそよりともせず鷄頭花
戸を明てきけば打止む碪かな
碪に交りて晝のきぬたかな
蚊屋仕舞ふ跡や芭蕉は破レ次第
一枚で窓の蓋する芭蕉かな
虫ひとつ蟻に引せて秋の暮
物もふも隣なりけり秌のくれ
柿一トツ落てつぶれて秋の暮
分別は豆腐にありて秋の暮
蠅飛んで琴に音あり秋の暮
稻かるはよそに詠て鶉かな
飯粒で障子張りけり秋の暮
優曇華は見た人もなし蕎麥の花
夜咄の約速遠し蕎麥の華
盗人の闇に抱つく案山子哉
豐年に木綿も着せずかゝし哉

さびしさに出て見る顔のかゝし哉
柿の木に住持の作の案山子哉
淋しさを田に苅殘すかゝし哉
古藁の又田へもどる案山子哉
木つゝきや桶屋は飯に休む間も
鯊釣に針仕廻はせて三ヶの月
大工増す亭の作事や小望月
あすの目に寐ぬ癖付む小望月
芋莄（ズイキ）煮てこよひは足りぬ小望月
摺木さへまだ寐ぬ音やけふの月
晝顔もかへり花咲けけふの月
名月や寐ぬ夜を蚊屋の仕廻しほ
木兎よわらへ月見ぬ小鳥ども
名月や野は虫橋は人の聲
酒いれぬ瓢は垣にけふの月
天にあらば鳥とならむけふの月
短尺の雲はいとはず今日の月
物干さぬ竿に夜ありけふの月

人の日を蟹や笑はむけふの月
名月や霜おきわたす海の面
名月や日を見て戻る舟も有
海にひとつ露にも一つけふの月
名月やつもれば屈む影ぼうし
十六夜や一うね減りて芋畠
いざよいや耳には欠ぬむしの聲
十六夜や山にきのふの海の人
立待や座禪は休む寺の月
立待の月知り顔や石地藏
夜の錢乞食も貰ふ月見哉
乞食にも閏もる月や橋の薦
又六が軒はあれても新酒哉
菊咲て野心しまる垣ね哉
袷には留る香でなし菊の花
名月はまだ沓なりけふの菊
竹の千代迄結そへてけふの菊
東籬には掛らず菊の蠟障子

もらはずに濟程はありけふの菊
一もとや蝶と相合ふ今日の菊
山田にも雲刈果て後の月
夕鴉にも月ありて十三夜
けふ限りの人の端居や後の月
玉に少寒い瑕あり後の月
裏かえす月見や葛もかれぬ内
栗うりやまつ山を出て后の月
うしろから闇の寒さや後の月
猿曳も手はふところに後の月
菊の香の柚味噌に殘る月見哉
落椎のあたまに飛ぶや石佛
山寺や足らぬ香車に柿の核
落栗や橋に音して水の中
毛見の目もこちら見たがる花野哉
照れ降れも是せふとての田刈哉
氷にはそちで成れとて落水
油斷せぬ鷺のこゝろやおとし水

船頭の薪して行崩れ築
酒に焼く枯木捜さや初紅葉
はつ紅葉鳥居にとゞく梢より
星も今わたらぬ橋に紅葉哉
犬ひとつ鹿めく庭のもみぢ哉
寺よりは宮に染勝つ紅葉哉
ちるもみぢ雪にも似ぬを手がら哉
紅裏の伊達ある寺の紅葉哉
海に捨る雨や野山の染あまり
初茸やつなぐ尾花の袖土産
茸狩や本ゝの道行野風呂持
茸狩や取かと見れば足袋の紐
松茸や華ならぬ身に蕾あり
松だけや山では殿もかゞませる
見送るや秋を尾花の波の上
露霜や八百屋に暮る秋の色
追もせぬ烁や鳴子に暮て行
行たがる烁や鳴子のひかへ綱
朝起に月見る迄や暮の秋
ゆく秋や掃かぬ心の栗のいが
行烁や今種蒔の若菜畑
霜と成らむ露にも秋の名残り哉

冬部

聞つゝも欄摺る軒のしぐれ哉
銭出してぬれる渡しの時雨哉
小戻りをして傘かへす時雨哉
他の傘干すもきのふのしぐれ哉
親の名に傘借してやる時雨哉
照隣もたぬ野寺のしぐれ哉
松の色しぐれにすねて猶青し
近道をならふてぬれる時雨哉
木がらしや詠ぬ月に兼ゝ夜有
こがらしや馬かる心駕に成る
凩や材木町を吹てゆく

ちるおとはせで掃く音の木の葉哉
木がらしや手ぬぐひ壹つ藪の中
あたゝかに犬の寐て居る落葉哉
雪隱へはだしで通ふ落葉哉
掃く度に日影廣がる落葉哉
鷄の足おと寒き落葉哉
堂守のけさの烟もおちばかな
辻うりの餡にとりつく落葉哉
掃く中に草履も片し落葉哉
馬かたの烟捨行かれ野哉
下りそふにして鴈のゆく枯野哉
落馬して歌によまれぬ枯野哉
新田の慾もへ出る枯野かな
朝市や小鮒に交る初氷
まだ上へちる紅葉あり初氷
他宗へも時雨のかゝる十夜かな
丸ふ成月をかぞへて十夜哉
ぢゝばゝに佛が付て十夜哉

麥蒔や年のあちらに刈日有
鴈にくむ種を蒔けり麥畠
麥蒔や何して來たる跡もなき
箒目の下繪も消へず今朝の霜
耳におく霜や夜明のかねの聲
耳にさへ白酒うりの霜夜かな
鷄の息見る霜のあした哉
雪の來る下地や霜の柱立
水仙や藪に少しの埒論
水仙や都の店にはしり咲
水仙やちらぬかはりに折れたがり
水仙や片手は寒き文使
惠比壽にも緣あり冬の廿日艸
時雨ふかとて傘かれば霰かな
艸枯や少し野守が大根畑
つれ引の隣もありて大根畑
大根引畑は尾張の名所哉
盜人の捨たもそへて大根引

花の骨紅葉のほねや冬木立
脩は薄く茶に汲む水の氷哉
辻番の羽織で作るこたつ哉
凩に人は火を吹火燵哉
悋氣からまくられて居る火燵哉
とまり木やしばし摺木に鷦鷯
薪部屋へいつたて込てみそさゞゐ
群て啼千鳥もあるをみそさゞい
とまる木の雪もこぼれずみそさゞゐ
鶯に冬ばかり似てみそさゞゐ
夜啼けと吹寄ておく千鳥哉
浦風の又蒔直すちどり哉
海へちる程はないとて川衛
須磨に暮明石にあける千鳥哉
顔洗ふ手に曉くもる月夜哉
三の宮や今も闇に火たき鳥
森間に紅葉捜すや火たき鳥
其後は猫にこりたる紙衣哉
寒菊や今は東籬も干かぶら
雪と寐る竹より苦しぬくめ鳥
むしらるゝ夢は明たりぬくめ鳥
市中にはたらく鍬や雪の朝
野に山にうごく物なし雪の朝
箙にはさゝで大根に冬の梅
薬喰夜は喰へども晝見へず
鉦にすね木魚にすねて鉢叩
山雀の宿はと問はゞ鉢敲
又ひとつ皿破らしたる寒さ哉
雪隠へ下駄はく脊戸の寒さ哉
脱だ間も供にもたせぬ頭巾哉
献立に目鼻は付て海鼠哉
節季候や一つら渡る雪の朝
年の夜や門たゝくもの風計
身に着るとしらぬ紙衣や青屋
いらぬ身の果は年守る巣山寺哉

垤集（中）

半掃菴也有著
逵月堂文樵輯

前書讀物部

江戸にて歸國の春待得たる前書あり
福はらや頓て草鞋にして踏む

四十九の元日に
いそ近きとしほだはらに明にけり

江戸にて歳暮に
行としの山は見へけりむさし野も

霞とはあちらの名なり年の關

四十二の暮
厄どしもくれて入日や西の海

隣に酒屋近き前書あり
たのもしや酒屋と春を雨隣

閏二月の有ける前年の暮に
花に閏そへては安し暦うり

深川長溪寺、翁の墳に詣て
物いわぬ石には寒し春の風

五百羅漢へ詣て
羅漢堂乙鳥の迯る顏もあり

龜戸天神へ詣て
御製より以前から飛ぶ蛙かな

眞福寺にて
世の葛に濁さで涼し池の水

淺茅が原、鏡が池にて
池水や今も木下の親の闇

柳居へ狀の端に
我夢やくるなと成りて君が門

竹里へ餞別に
卯の花や合羽しらずの雪の旅

三股釣舟といふ八景の題にて
すゞ風や三筋にわけて釣の舟

病後の吟
いざ借さむいらぬ杖あり菊の花

曉吾が子を失へるを弔ふ。

なすがたもなしかや鈎の艸の陰

商家へ招かれて

池水や花におし合藏の影

女の片手を懐にして、片手につまをとりたる繪に

雪を持つ片手は寒し梅の花

瓢より三味線の駒の出たる狂畫に

その駒をつなげ三筋のいとざくら

桑雨五十の賀 梅の畫讃

月も日も是から遲し梅の華

うき世繪の讃

鴛に寐て夜半にや君が露時雨

兩兒日を諍ふ畫に

日の近さつもらむ智惠の鳳巾

團扇の贊

うらおもて見る月を手に團扇哉

蓮に鮎の繪に

若鮎や鵜もまだ知らぬ笹の影

讃 繪は句中に見ゆ

風のなき日も燕はなびきけり

染て干す紅葉や神の旅用意

いざ柳ちれとて舟の一葉哉

西行もしらぬ橋あり柳陰

箒に鼠の畫に

すゝ掃の跡や鼠のさびしがる

宇治螢の繪に

茶畑には遊ばぬ宇治の螢かな

畫讃

蓮の實にまけじと飛ぶか魚の音

秋艸書たる扇に

野にさけと扇にはたゝむ秌の花

鹿の啼繪に

をのが毛の筆に書れて鹿の聲

水邊に竹の畫に

釣竿にせぬ竹すゞし水のうへ

竹に鶴七羽書たるに

賢人の數とて鶴も竹の陰

大黒の贊

豐年やしかとふまへてことし米

夷の讃

あたゝかなだかへ心やさくら鯛

信國の劍を祕藏しける人の、其句を乞れて、銘を句中にかくす。

家の風のふくに增す香や蘭の花

十月、先二子剃髮を賀す。

剃屑に拾てのこらぬ暑さ哉

瀧に鹿の繪に

白糸の瀧も細れと鹿の聲

業平、風ふけば沖津しら濵、の畫

立聞をこちの事かとむしの聲

白藏主の讃

行秋や裙に尾の出る花薄

慶竹子、東行の餞別

やがて見ん山を手にまつ扇哉

布袋頭巾着たる畫に

木がらしに腹は吹せて頭巾哉

芦丈子へ餞別

鶉すゞし尾花と見せて蠅拂

琴鼠の繪

琴の音に猫ねぶらせよ秋の暮

蝶、莚にしたる畫に

傍らるゝ添や寐て待藥の床

竹に雀の畫

竹に寐て踊わすれな千代迄も

竹の横に成たるに

雪に寐た辯あり竹の月の夜も

師走廿三日は先考の廿三回に當りたまへるを、さはる事ありて取こし、佛事いとなみけるは九月十三日なり。

綿畑に雪とりこして後の月

和欸、東行を送る。

神にあれて人の旅には小春哉

菜亭即興

月を一ッ雪を二階のこたつ哉

菜が宅二ッ間のもてなしに

月や見ん時雨や聞む二座敷

東行旅中吟 二句

水かれや蛙きくべき大井川

また寒し霰とちらむ十團子

深川某が別莊にて

ふけや風人を柳に夏の月

大聖院にて

すゞしさのさゞ浪寄る青田哉

鶴千年の友といふ題にて

千代迄も鶴と中よし根芹摘

百枳、母の悼に

あの世へも佛生るゝ四月かな

巴靜へ餞別

別れても又まつ虫の秋近し

三月四日、東行旅中

きのふ干たその顔もなし潮見坂

大聖院にて

夏木立よく〳〵見れば櫻哉

江戸にて

後の名の月の光りや日本橋

五月、其雄へ餞別

ときちらす粽にならへ艸枕

餞別 二句

初鴈と泊り合せやとこの宿

かや仕廻ふ旅寐や夢に關もなし

定光寺に一夜泊りて

草枕より木まくらの夜寒哉

木曾路を江戸へ下りける留別

手から手へわらびに山路送られん

辨三を哭す。

散てもこたへぬ人を水鷄かな

江戸へ下る人を賀して

花は身に咲けと柳に別れけり

十月、人の四十の賀に

時雨から老を高ぶれことし竹

久しぶりにて逢たる人に

虫の聲咄の切れ間たづねかね

六々庵七回忌に

月日又西に流て、愁人の傷にさゝまらず。一別已に七回になん〳〵とす。つばなまじりに、さいひけん古墳、むなしく春の艸青し。

此道やその人なくて菫艸

猩々の盃に雪をうける畫

酒の名も竹の葉ならば積る雪

西國巡禮に出る人に餞す。

よき旅ぞ山も千手の蕨時

波に日の繪に

なみの上に兎やすゝめて朝日哉

閑居の竹に題す。

竹うへて世を内外にしきりけり

富士の夢見たるさて畫に寫し、讃を乞はれて

さめて殘る夜着の裙野や富士の夢

菊見に行て

手をこめて千代をこめたり菊作り

布袋の贊

時しらぬ腹うらやまし衣がへ

牡丹にてふの畫

猫はまだ知らぬ牡丹の胡蝶哉

大黒の大根を抱たる畫

小松よりよづる子の日や大根引

牛飼の車の上に寐て、牛にひかせて行繪に

蝶のゆめ牛に引せて花野迄

鍾馗の畫に

草刈の手にはわたさじ鬼薊

長ふくべの花生に

草臥て蟻のもどるや長ふくべ

竹に葬の畫讃

朝顏や猪口にうけたる竹の露

書初の梅の畫に

梅を畫く日から氷らず硯水

病中上巳

餅にさへつまれぬ髮の蓬哉

病に職を辭して

糸しまふ我も四月の鳳巾

佐屋の水鶏塚に寄す。

その人をしたへば冬のくゐな哉

破傘さしたる畫に

月のもる爲にもならで破れ傘

畫讃

角もじの岩とよむべしかたつぶり

月に鉢叩の畫

月寒しよそにもたゝく納豆汁

福禄壽の繪

祝はれば長さあやかれ芋がしら

雉に鷺のとまりたるに

白むくの寐起や鷺も室泊り

橋に蝙蝠の畫に

かはほりは捨た扇か橋すゞみ

八十の賀

百へ手のとゞく蕨や老の坂

不二の畫に

四方山を暦に見るかふじの雪

柳に烏の繪に

雪を待つ柳に黒き鴉かな

西王母の繪に

桃咲て見たし仙家の雛遊び

布袋の月見る畫に

月いかに滿ても缺けぬ袋あり

同じく三日月を指さす繪に

ふとい手におしへて細し三ヶの月

うづらの畫に

猿丸も野に聞く秋は鶉哉

養老の瀧の繪

瀧の水湧さば老の湯婆にも

臥待の月の題にて

猿も寐て月まつ肘や長まくら

九月十三日、伯母のもとよりつるし柿を給りけるに口すさぶ。

名月や捨ぬ伯母からつるし柿

張果郎の畫に

共瓢も日本にあらば鉢たゝき

同じく繪に

酒の出る瓢なら雪に借らふもの

駒の瓢へ入る繪

まだ寒しとや春駒の中もどり

野馬の畫に

をのが尾の尾花に秋や送り馬

僧の笠を背負ふて時鳥を詠る畫に

ほとゝぎす啼やうしろに三笠山

女の扇にて蝶を招く繪

とまれ蝶花に寐た夜の夢問む

布袋の空に指さす繪に

ゆびのさすかたは雲雀か三日月か

獅子舞の雨に逃る畫

獅子舞や足も尾はなき村時雨

波に月の繪

猿の手や蛸にゆづらむ海の月

柳に鞠を蹴る繪

まりや又ゑもん流るゝ柳かげ

唐子の布袋の耳を引く繪

なくかたへ耳引むけよ時鳥

霜月、鳴海蝶羽十三回忌

蝶の魂まねく其口や雪の花

山の下に野馬の繪

野に山に錦はあれどはだせ馬

ふくべの花生に

出る駒を華で止めけり瓢の口

長ふくべに乞はれて

山がらに裏行長き宿借さむ

娘の梅の陰に羽ねつく畫

羽ねをつく妹もありて花の兄

瓢に書つく。

駒が出ば將棊さすべし秋の暮

布袋のふくろにもたれたる畫

こたつかと見せて袋に冬籠

墨繪の梅に

雪を出て墨に咲けり梅の花

門傍に雀の畫

としの朝初ねは軒のすゞめにも

山水の繪に

最一棹出せ月まつ船ならば

坊主の牛に乘たる畫

牛からは落た沙汰なし女良花

木の葉かきの繪に

花ならば掃くべき物を木のは掻

壹人は子なり、一人は甥なり、共に辱き 命をかふむりて、江戸に下る初旅を見立て

初霜の塩ふめと旅を見立けり

澤に鷺の畫

鳴よりも鷺たつ澤は夏すゞし

牡丹に猫・蝶の畫

猫に蝶に賑ふ花の富貴哉

瓢の花生に

壁にふくべ許由が耳もさはがさず

三輪の簡宜の落葉はく畫

蜘の園のみわけや冬の杉さびし

枯木に梟の畫

耳すます風に音なし冬木立

長ふくべの繪に

千なりを我身ひとつや長ふくべ

松に夕日の畫

そまらぬと時雨は止て夕日哉

翁の木像に題す。

俤を木に拜みけり翁艸

蟹の畫に

蟹の目に先しむ風や浦の秋

蛤に雀の繪

はまぐりの夢やむかしの花に飛ぶ

冬木立に稻つかの畫

ことし藁屋根にふけとて時雨けり

龍の繪に

雨にせう吟じて花はくもるとも

布袋の畫に

万歳のあやかりたがる俤かな

鍾馗に追れて鬼の風鈴にかくれたる畫に

追れ來て鐘にかくるゝ時雨哉

汀に鶴の畫

是もよし鴫たつ澤の烁の暮

松に錦雞の畫

鳥の錦かりてや松も秋の色

年内立春の題にて

春ははや先へこぼして暦うり

寶珠の畫に

露は玉たまは露にも似ざりけり

布袋笛ふく畫に

野遊びにそれた子どもやよぶこ鳥

海老の髭に燕のとまりたる繪

髭にあそべ海に柳の髪はなし

唐子の玉を翫ぶ繪に

なでし子や手にもて遊ぶ露の玉

芦に船の畫

鵜の篝鼓は消つゝ拾小ぶね

竹に虎の畫

竹の陰虎嘯けば夏もなし

寶舟の繪、梅もあり。

船で來る春の先荷や梅の花

人の訪ひ來て、中戸にも掛て有けりかたつぶり　と有し卽座の返し

敲かれて落けり門の蝸牛

椶櫚の畫に

しゆろの葉はもとより破れて秋の風

柳に燕の畫に

青柳のいとに機へる燕哉

山水の畫に

山幾へ筆の間に〳〵春霞

大黑の袋を開く中に寶珠のある畫

としだまの數や袋を明の春

枯柳に鷺の畫

遠目には雪かと鷺の積りけり

橋の雨に挑灯持て行人の繪に

宵は月にわたりし橋に時雨哉

蟻通の畫、宮司の傘に下駄はきたるに

下駄迄は神も咎めず五月闇

女郎花に月の畫

眉は月の空に作りておみなへし

黒木うりの繪

黒木うりも白粉かふやとしの市

稲に月の繪

月によし稲刈によし秋日和

瓢に蟷螂の畫

かまきりや五條わたりに痩て住ム

鴈一羽落る畫

琴柱ひとつはづれて雁の落にけり

雪に蓑笠着たる鐘馗の畫に

鬼狩るも隱野心や雪の中

雪の竹に雀の繪

雪の日や子猷が朝寐よぶすゞめ

十四歳の女の書たる菊の畫

莟から下にはおかず菊の露

竹に鶏の畫

桃の日や合せぬ鶏は竹の中

古今俳諧宗匠とて、柳の陰に八人書たる圖に

世々の風繪には一木の柳哉

梅に若菜つみの繪

梅を折る手の隙はいまだ若菜摘

羽箒の繪

寒山も炉に遊ぶ日や羽ね箒

三笑の圖、上に山あり。

三人のあまりを山のわらひかな

鍬の柄に鶏の畫

鶏や見たてる竹のうへ所

女の綿ぼうし着たる繪

菊に増る綿の着ぶりや女良花

七十の賀に、瓜茄子の繪に讃を乞はれて

王母から桃にそへてや瓜なすび

白芙蓉の畫に

玉にたまかざるや露の白芙蓉

大黒と惠比壽とすまふの畫

勝た方へ花さいらせむ福壽艸

秋葉社奉納

鶯や先づ奉る音の初穂

墨竹の畫に

墨いろや千代經む後もことし竹

東行の人に餞す。

着て歸れとて野は錦仕廻けり

木兎のうしろ向きの繪に

木兎や顔わらはれてあちらむく

浦嶋の畫に

玉手箱ひらかぬうちや花心

松に雪の畫に

最一たび始皇も雪に松の陰

竹に鶴の繪

うぐゐすのねぐらも鶴のあるじ哉

柳かげに馬の艸喰ふ畫に

遲き日やしばし艸くふ隙の駒

布袋の團扇をかざしたるに

かざす葉に腹はかくれぬ瓢かな

貝を苞にしたる畫に

藁苞にのこるきのふの潮干哉

冬田にかゝしの畫に

田はかりて夏のすびつや鳥おどし

石燈籠に雨の繪

灯籠に火は照りながら時雨哉

梅の繪に

むめ淋し籬に折るも壹人前

紅葉に蝸牛の繪

鹿も來ぬもみぢに角やかたつぶり

夷・大こくの万歳を舞ふ繪

万歳の舞臺は高し恵方棚

帆柱の畫に

帆柱や花ももみぢもなかりけり

中秋無月

行燈見る目のほゐなさよ雨の月

馬の瓢を吐たる狂畫に

其ふくべ又馬にせん魂祭り

布袋の珠を拾ふ畫

慾な手や椎ひろふ子に笑はれん

我隣家熱田の北なれば、重陽に

手がはりや海を南に菊の華

俵の上に雛の風に吹れたる繪

狂はする米の空直や秋の風

柳の陰に舟を乗よせる畫

糸たれて人釣る岸の柳哉

月に髑髏の畫に

朝顔の人わらひけり暮の月

睡猫の畫に

思ひ寐の猫にかげろふもへにけり

風の竹の畫に

若竹のそよぎや虎の鼾より

枯木に鴉・朝日の畫に

木がらしの跡や朝日にちる鴉

松に帆柱の畫

帆柱や松に交たる冬木立

うづらの畫に

野のにしきまた着破らさぬ鶉哉

若竹の畫

すゞしさも生れまさりてことし竹

山水、帆かけ舟の畫

船一葉さては海からけさの秌

大黒の槌を両手にて、ふり上たる繪

槌でさへ餅搗顔やとしの暮

波に日の畫に

浪たてぬ海におもしの初日哉

俵の上に鷄の風に吹れたるに、ふたゝび乞はれて

豐年をうたへと鷄に秋の風

寒山睡　繪に

すゞかぜの晝ねや夢にちる一葉

尾張の名所に夏の句を乞はれて

阿波手さへ名のやかましや行ゝ子

かゝしの畫に

人に似ぬかゝしを筆の手がら哉

往来の松に句を乞はれて

仙人のゆきゝか松のかすむ時

蓮の葉の陰に五位鷺の畫

身を五位の客か蓮を日傘

垣に小角の繪に

なすびにはかゞめた腰をさゝげ摘

榮螺からに百合を植たる畫に

さゞゐからすはらぬ尻やゆりの花

辨慶、勸進帳をよむ繪に

一聲に網のがれけりほとゝぎす

梅に鶴の畫

鶴に似て日あしも長し梅の花

猿のうつぶきて居る繪に

月にさへあふむかさるや物おもふ

竹の讃　雜の句

心あり杖に成らじとまがる竹

布袋の舟に睡りたる畫に

人寐てや舟をのづから横時雨

箒に蝶の繪に

春の香の箒に殘る四月哉

富士と鷹と茄子と夢に見たるよし

にて、三幅の繪に寫して、讃を乞はれて

富士からは丁固が夢の三保低し

初ゆめや梅の拳にすへて見る

駿河より夢には早し初茄子

瓜二つに茄子を書たる繪

枕ふたつ茄子に針の悋氣あり

葡萄の畫に

てふ／＼の吸ふ事しらぬ葡萄哉

官に就て初而江戸へ下る人に

先づ告よ行に如じとほとゝぎす

岐阜の人へ贈る。

嘸鵜ぶね余處は闇とて捨る夜も

山水のすみゑに

胡粉まつ顏や墨繪の冬木立

八月十三夜、人の許にて

花で居る豆や葉月の十三夜

山谷蘭を見て居る圖に

歌よりも詩にしむ蘭の匂ひ哉

亡父の五十回忌とて、句をもとめられて

初汐やいそぢに満て濡るゝ袖

萩に月の水に移りたる畫に

露の外にくだけぬ月は河に有

塔にふくべの畫に

瓢青き頃は何して鉢たゝき

秋の百日紅といふ題にて

かぞへこむ星の一夜や百日紅

あつたの人より初春の句を求られて遣す。ならずの梅は社中に有

最ふ雲も雪にならずの梅咲ぬ

竹に朝顔・かたつぶりの繪に

蕣に這負じとやかたつぶり

六々庵が墨跡の末に乞はれて

消もせぬ手の跡寒し雪丸け

女の、櫻の枝へよりたる浮世繪に

その手なら折れたいとて櫻哉

蒼頡、鳥の跡を見て居る圖に

其後に筆ゆふ知恵やつく〲し

松に三番叟の繪

松に舞ふ胡蝶や花の醉さまし

鳥居に紅葉の畫

手ついでに華表も染て龍田姫

万歳の畫に

まづひらく扇や梅と初暦

竹の畫、八十の賀

千代経よと引かぬや竹は子の日にも

草刈の笛ふく繪に

ふくといはゞ笛にもなびけ夏の艸

水仙に古傘を覆したる畫に

雪ふらば雀もたのめ傘の下

翁の讃

賣らば買む雪なきとても檜笠

柳の枝に鷺の畫

雪の日は又鷺に借せその柳

神農の像に

此君や道つけ初て若菜つみ

竹に雀一羽の繪

竹に寐る鳥さへ一羽秋の暮

樓閣の畫に

いつはりの時雨やしゆろに風の音

雲中に鍾馗の畫

雲寒き夜や初霜も劍から

茶筅うりの畫

鉢たゝきたゝかぬ時は月に寒し

莊子蝶夢の圖

夢は蝶鼾も蚯の花ごゝろ

帆柱の繪

帆柱に鳥もとまらず秋の暮

大黑の牛に乘たる畫

丑に乘や子祭りの夜は明の月

鍾馗の馬にのりたる畫に

馬に飼へ鬼うち豆の煎のこり

朝良の畫に

朝顏や筆に咲てはもろからず

庭鳥の畫に

庭鳥の尾や靑柳の取廻し

竹に雪丸げの畫

藪陰や手持に殘る去年の雪

鳥居に鷄の畫

夜かぐらをうたひ織けり明の鷄

鉢の木の圖、僧の雪の門に立たる繪

僧は敲く月ならねども雪の門

雪の繪に

鳥の來ぬうちは疵なし雪の枝

六歲の童子の書たる水仙に

水仙や雪より外に六つの花

墨繪の松に

墨の繪の松ともこれか若綠

おなじく松の畫に

引かで猶松は日出たき子の日哉

子禮を悼

魂ばかり秋來む雁のうき別れ

ふくべの花生に

蓮阿、上京を送る。
啼かねば鉢とはいわずふくべ哉

木賊の畫に
送る目にのこる四月の霞哉

營地を通るとて、おさづれしたる俳人に
みがけとて置くか木賊に露の玉

大黒の牛に乘たる畫に
だまつても通らでうれし時鳥

鐘馗の馬に乘たる畫に
福つけてゆく牛どこへ年の市

新婚を賀す。
秣にも飼ふか鬼ゆり鬼あざみ

舟の棹に蜻蛉の畫
家の風もかほれ連理の若葉より

其の畫賛たる扇に
どんぼうに日和見せけりかゝり船

すゞ風の時にあるか木のは猿

薄に鹿の畫

三夕を一幅に書たる畫に
草の穗も穗に出ぬ夏の薄哉

蓮に翡翠の畫に
三つ寄せて見てさへ淋し秋の暮

竹一本書たる畫に
かわせみに蟬の暑さはなかりけり

布袋のふくろをひらく畫に
幸崎の松と餝らむ一つ竹

僧の嵐に笠取られたる畫に
虫干や邪魔な子どもの居らぬ時

墨竹の賛
木がらしや坊主をなぶる神送り

ゑぼし山に句を乞はれて
雪ならで墨にも竹の雨白し

紅梅の繪に
三笠より名は月によしゑぼし山

猿に猿の畫
紅梅は北におくるゝ枝もなし

猿ざるといふ猿はなしむめの花

茶の炭とりに

白炭やすこしゆかりの花のいろ

女の繪讃

繪に見るや桃李の姿物いわず

柳に鶯の繪

鳥が來て琴ひく糸の柳かな

天神奉納

散交て葉にも梅の匂ひ哉

俳諧八仙の像さて人の求に

竹林に最ひとりそへて花の陰

菜に蛙の畵に

花ちりて蝶は來ぬ菜に蛙哉

人の七年忌に

七年もおもへば夢の一夜酒

六月、巴雀七回忌に

盆待たで先づ魂かへれ蓮の華

生姜の畵に

論語にも捨ぬ沙汰あり若生姜

七月三日の立秋に

もし一葉上へおつたか三日の月

瀧の本に鶺鴒の畵に

凩じとや岩うつ瀧に石たゝき

岩に蘭の繪に

蘭の香をとめるや岩の苔衣

水仙に藁の覆したる畵に

わらやして雨も聞かせじ水仙花

鼠の瓜をくらふ繪に

かゝしより猫に守らせよ瓜畑

雪の山水の畵に讃を請れて、

上筆成ゆへ辭して云贈る。

跡つけば人やにくまん雪のうへ

落くるみに山雀の畵

落て名はたゝぬや鳥に姫くるみ

むら猿の畵に

山は霜散ぬも淋し木のは猿

正月六日に卒す有齋を悼む。

十くだりに足らでなき身や初暦

百枳を悼。

霞にもまがはで悲し野のけぶり

濃州翁の若葉塚へ贈る

塚に來て拜む若葉や冬木立

梅に月の畵

月丸し梅を蒔繪の鏡立

鶉貝た花生にして句た請る。

さては知る海鼠や化して鶉貝

櫻に官女の畵

こき交に來てや櫻に柳髮

むめの畵に

室も何筆に咲せて梅の花

節季ゆの繪

節季ゆや身を賣物に年の市

人の像賛に

物いわず笑はずとてもかえり花

狼猴の畵に

秋の夜や曲けて寐たらば長まくら

病中に雪の降りけるに

ころばずに寐て見る雪の恨哉

芭蕉の畵に

ちらぬ葉のもろい名に立芭蕉哉

李白、瀧見の繪

竪に見るや星も憎まぬ天の川

時雨に日の繪

しぐるゝや染ぬ入日の先赤し

布袋の空へ指さしたる畵

ゆび先もぬれねど涼し天の川

臼に豆ありて鼠の喰ふ畵

臼の豆ぬすむ鼠も后の月

箕にひゝこの物くふ畵

もゝの日や庭でもてなす雛も有

大こくの俵の上に立たる畵に

最ふそれで春は屆くべし惠方棚

大黑俵三つふまへたる畵に

いつよりも一俵多しことし米

大こくの俵にもたれたる畵

まだふまぬ俵新しことし米

茗荷の子の畵

名にたてど味はわすれずめうがの子

惠比壽の繪に

閑はどやかな鯛を釣る日もありそ海

正月の餝繪に鼠の畫

鼠さへむくや惠方の棚さがし

石燈籠に木兎の畫

木兎の留主もる顏や神無月

人丸石に句を乞はれて

人丸のお膝の下やきりぎりす

反香舍に別れしは壬申の夏にして、
こぞしの中に指折れば、已に一紀
のむかしさは成れり。

楊梅や來て啼さるの一めぐり

女の螢籠に文よむ繪 二句

戀の闇照らしてくれる螢かな

文月の闇に火を借す螢かな

柳に鶯の畫に

梅の鳥一日借りて柳哉

岩に鵜、下に水流るゝ繪に

水すゞし鵜の眞似やめて啼鴉

松の間に月の繪

山は出て松はまだ出ず宵の月

[illegible]さしたる傘のうへに、鬼の
畫たる畫

傘重し鬼の赤さは雪ならで

岩に夷の讃

市に遊ぶ廿日や岩は神無月

大こくの俵ひとつふまへたる畫

最一俵足らず打出せことし米

秋の柳に鳥の畫

啼ぬ鳥淋しき秋の柳哉

竹に虎の畫

おどろくや虎嘯てけふの炑

松の畫に

松にまさる花も紅葉もなかりけり

達磨の贊

佛とは何其壁のかたつぶり

寶ぶねの畫

寐ごゝろもよし追風の恵方から

冬の柳に鷺の繪

しばしとて留るも寒き柳哉

花に蜻蛉の畫

とんぼうや花見る日にも塩はなき

龍の畫に、元日の心を以て賛せよと請れて

元日や龍吟じてもはつ霞

塩がまの繪に

藻塩やく手よりや浦の初霞

呼續の浦の題にて

海士の聲呼つぐ千鳥〳〵哉

小角豆に虫の繪

十六の名もとしよりて虫の秋

農事の題にて、雑の句の祝をのぞまれて

君が代や瀬から田と成る飛鳥川

なた豆の畫に

なた豆や木を割木魂うなづきぬ

大黒に白鼠の畫に、正月の句を請れて

先白し棚より春のはつ鼠

達磨の賛

月花や壁に九年の影ぼうし

布袋のあふむきたる繪に

一聲もうれし眞うへのほとゝぎす

布袋の尺八ふく畫に

すゞ風につれてや竹をふくの神

枯野に鶺鴒畫

初霜に足あと寒しみそさゞる

さうがらしに蟷螂の畫

かまきりの斧も向はずとうがらし

早春剃髪の人に贈る。

剃捨てしばしは春の頭巾哉

六祖の讃

碓をふむ夜や休むきゝ〳〵す

刈田に雁の畫

早稲も刈おくてもかりの聲寒し

雪中梅
春もはゝや隣のむめの匂ひ哉

壽老人の跡に鶴龜のつれたる畫
福祿壽の繪
出代らぬお供や千代も万代も
折てかざせ長さつもらむ藤の花

窓の蔦といふ題にて、句を請れて
染てちりて張るべき頃や窓の蔦

蒲公英の句を望れて
万歳の寒さは過て皷草

鐘馗の袖をかざしたる繪
袖笠にぬるとも折らむ鬼薊

瓜畑の畫に
盗人や枕に忍ぶうり畠

大黒の繪に日出たき讃を好まれて
踏あまる俵は藏にことし米

布袋の背中を掻く畫
蚊の口や灸は知らぬ脊中にも

埣集 下

富士・三保・清見に帆かけ舟書たるに、雜の句を讃す。
積あまる景や田子行帆かけ船

淵明の賛
五斗の米捨て柳の枝輕し

万歳の畫に
舞ふ蝶や一羽はとまる皷草

相撲の畫に
ゆく秋やすもふの闘も頼れず

貞徳の像に
世にのこす御傘や道の初時雨

新婚を賀して
千代もそへ末は尾花の白髪迄

白幣の畫に
神はお留主風の間に〳〵白幣

傳昌寺に遊ぶ。

佛には腰折るもよし菊の花

寒山箒持たる繪に

ちる紅葉掃けど染らぬ箒哉

雪に鷺の畫

鳥羽に文字書鷺や雪の中

萩に雉子の繪

鹿の妻乞ふ日や雉は名も立ず

蝦・貝・蟹など書たる畫に

鰭のない物を潮干の土産哉

假ご根深な書たる畫

隣へも鯀は匂はず根深汁

月に竹の繪に夏の句な乞れて

月と寐よ雪迄は遠しことし竹

橋に蝙蝠の繪に

かふもりや月待人に行あたり

惠比壽の笠着て釣戻りの畫

釣すゞし笠に入日も西の宮

達磨の讃

かげぼしの壁にしみ込む寒さ哉

山簡倒騎の畫に

歸るとも雁も跡むけ山の華

西王母の畫

三千とせに一度雛にも桃の花

小槌ご寶珠の畫に

たまの御出槌で庭はく花の宿

蔓に鬼の取付て下りたる繪

葉は散て鬼又赤し蔦かつら

梅の繪に

君が代の盗人やさしむめの華

梅の雪の畫

はるの雪空にしられぬ匂ひあり

六祖の畫

碓も何うなづゐて秋の暮

獅子舞の繪

狂はせん獅子に牡丹の十二銅

萩な書たるふくろ戸に句な乞れて

宮城のゝ秋あり露の奥座敷

雛の稲束にとまりたる畫

巣に作る慾なき鷄やことし藁

雪の妖たる畫に

妖物やいづれの尾より秌のくれ

節分の繪に

福と鬼の出代り時や年の暮

芦の陰に雁一羽の畫に

あしの穂に友招かせて雁一羽

福祿壽の笠持たる繪に

笠紐の長さくらべは柳かな

柳に馬の畫に

駒は猶象さへつなぐ柳髮

流れに蟹の繪に

すゞしさは蟹も脊の立ッ流哉

八十の賀

越て飛ぶ氣の若鮎や八十瀬川

牛の川渡る畫に

牛に先づ瀬ぶみさせてや星迎

柳に鷄の畫

鷄の尾も垂れそへて柳哉

寒山拾得の畫

四ツの睡ふたつはさめて郭公

木曾路を下る人に餞す

聞てゆけ茲も寢覺の時鳥

福祿壽の讃

掻くも手の屆かぬあたま蚊や喰む

茄子二つの繪

二つからちぎり始る茄子哉

梅に手習ひ双紙かけたる畫

寺子には最ふ日も長し梅の花

事紅子父の喪にあるを弔ふ

梅雨ばれは知らじ袖にも心にも

七十の賀に

國につくも氣の若竹や老の杖

船に鷺のとまりたる繪

橋と成らぬ鷺や舟にて星迎

茄子に蜂の畫

ぬすませぬ蜂のおとしや初茄子

晝顔に鎌の繪

日盛りの野や艸刈も休む時

蚊屋に鼠の畫

時鳥鼠にさめし目も嬉し

麥に蟷螂の繪

麥秋やむしも手傳ふ鎌の數

月にむら鴉の畫

月にかふる塒はとこそ村鴉

奴の唐がらし抱へたる畫

豆腐ともならで奴に唐がらし

月に郭公の繪

此うへに何か月夜にほとゝぎす

岩に雉一羽の畫

長〳〵し夜をひとり寐る雉も有

麥の畫に

野も怺や一もと麥のこぼれ種

万愚和尙弊廬を訪ふ。世をいとひ頭なる草の戸も、何のわきまへたる事もなき身を慚て

のがれ得ぬ暑さ知れ庵の蟬の聲

鐘馗の袖くゝみに劍を持たる繪

鬼もなき春や花待つふところ手

蒲萄の繪

その花の藤ともさかで蒲萄哉

中秋廿日過川並の亭にて

草臥て横たふ船か月の後

曉音を憚。

減る友を泣く身もあるを渡り鳥

九月十四日其鴒亭に招かれて

また捨し後の月見の後の月

茄子二つの畫

三人の客に思案や初なすび

柳に燕の畫

ちらす咎なしと柳に燕かな

竹の子を荷にしたる畫

孟宗も荷時や一荷ひ

月に鮎の畫

頃日の月夜を鮎の命かな

梟と雨のふる畫

梟の目や星ふたつむらしぐれ

松茸の畫

松茸や笠を着つれて市へ出る

箒に鶺鴒のとまりたる畫

けさの霜先はくなとや鶺鴒

天王奉納

たのもしや雪間もはこぶ歩より

熱田奉納

藻屑にも交る和光や放生會

白山奉納

露清し祈らぬ葉にもけふの月

新婚を賀して

おきかはす露や連理の菊の枝

鳥居に鴉の畫

夜かぐらも明の鳥居や啼烏

先以が父の喪を弔ふ。

老萊か袖も錦の野にかなし

扇に夕顔をのせたる繪に

夕顔はのらぬ眞晝の扇かな

柳に燕の畫

かへる時ちれと柳に燕哉

山姥の畫に

里芋の月見知らでや山めぐり

橋に鴉の畫

辨慶が足跡寒しなく鴉

秋のすへ和亮亭に招かれて

また市へ買るゝ日あり秋茄子

十一面觀世音へ奉納

顔さびしからぬ佛の花見哉

福祿壽の贊

綿つみの手に借りたがるあたま哉

芭蕉忌

仰げ又此十二夜の冬の月

福祿壽のあたま、破れ傘より出たる畫

傘破れて上へも漏るや村時雨

山水の繪に

海山の秋やいろはにほかけ船

雪の山水の畫

まだ飯の烟も立ず雪の朝

芋の畫

暮ぬ間は芋に見る秋の半かな

雪の柳に鷺の繪

つむ雪やこゝが足らぬと鷺一羽

雪の山水の繪

雪にけさ誰が友とひし捨小舟

冬の松杉の畫

さらぬ木に寒さは多し霜の朝

冬の始來りて、扇をわすれたる人
にかへすとて書付

十月の扇や人のわすれ花

大坂の几掌より始て文通して、句
を寄ける返しに

啼かわせ難波鳴海の友衛

鉢敲の畫讃

繪にうつす京の寒さや鉢たゝき

牛にのりて川を渡る畫

牛でわたる怺や下界の天の川

其西子隱居を訪ふ

世の塵の逃れ時よし煤佛

福祿壽の馬に乘たる繪

鹿を馬にかへてや華に遠あるき

元服の賀に

破魔弓の雅氣とれて梅の花

官事によりて、暫く東武へ往來の
阿三を餞す。

早歸れたはふて待ぞ遲櫻

文臺のうらに

見ぬをさへまして見る世の友衛

傾城の門松の傍に羽ねつく繪

遊ぶ里にもあそぶ日や松の門

柳に蜘の巣の繪

蜘の巣や柳にかゝる無分別

雪に鶺鴒の畫

誰かとわむ足る一枝も雪の中

紫山子が書たる文臺の裏に

かゝしにも見よ寂しみとおかしみと

福祿壽の賛

くらべたき物垣にあり長ふくべ

暦の日切の畫

其鳥や足もおし入て石たゝき

たま／＼市中に遊て八百坊に半日の客となる。此は彌生も近ければあるじのもてなしに、たはむれて

雛に似ぬ二月の客や置火燵

福祿壽のあたま、餘の破れより出たる畫讃

山はぬつと出たり麓の村時雨

垣ねに猫の寢たる畫

梅うへて見たき日なたの垣ね哉

蕨の粉を貰ひて謝す。

わらび餅蓬の臼もさはがせず

滴涙に鶴の繪に雉の句を望れて

鶴の巣や四五百年は磯の波

隆正寺にあそびて

鐘つきにとはゞやいつを花盛り

豫讓が橋下に衣を刺す畫

葛の葉のうらみも果は秋の霜

梅に鳩の繪

鷹化して先來て啼や梅の花

米布採をもふけて、三月三日、七夜に當りければ賀して

七夜祝ふ日や桑の弓蓬餅

碓に雛のとまりたる繪

鷄のふむ碓は音なし秋の暮

淵明、籬に菊を生けて見る繪

籬にうつゝ日あり東籬の秋の色

松に鳩の畫

つゆ晴や妻よぶ鳩も久しぶり

秋の山路に旅僧の草鞋をいらふ畫

落椎の足にはさかふ山路かな

玉川に駒とめて歌の心を書たる畫

川上やわたらぬ方になく蛙

業平、時しらぬ山はの歌の心を書

たる畫
見送るや雪の下行ほとゝぎす
三月廿二日、駿州の阿音に餞す。
結ぬくも待たで別れや旅の袖
松に睡鶏の畫讃
晝寝るや月の夜比の山がらす
枯木に鶏の畫
木がらしの絶間をねぶる鳥かな
岩に木賊の繪
秋風や岩にも木賊かけて見る
大黒の俵にもたれて眠る畫
よりそひていねつゝ添る俵かな
三福神、一ツの巻引な寄ゝ見る畫
よみ初やあつまる顔も三の朝
所々に招かれて
又も来て見る日は鐘に若葉哉
高砂謠舞ふる繪
影ほしは烏帽子も着たり叟草
曳猿の畫
大名もなじめば花のうつぼ猿
湖に塩釜の繪
うち出て富士見ぬ田子の霞哉
あばら屋に月の畫
いざ借らな漏る宿こゝに月の旅
春駒の畫
若艸やつながぬ駒の置所
鶴の畫に歳旦の句を望れて
春明ぬ鶴に千とせの幾つめぞ
柳に燕六七羽書たる畫
二三羽は花へも配れむら燕
千なり瓢の繪
四角なもなふて千なり瓢かな
鳥羽に入庵を訪ふ。
夏をむねと先聞恋や時鳥
夜の櫻に灯さして見る繪
千金の道もわすれ木や闇の花
雪の山水の畫
江天に捨たてまたし情の雪

新宅を賀す
千度ふく軒やことしを初菖蒲
牡丹に鳥の繪
鳥が來て猫に罪なき牡丹かな
大黑の餅つく畫
餅に搗はふまへた外か年の暮
蓮の畫に
蓮の花ひらくや筆の苔より
神前奉納
和らけく照る尊さや朧月
西行、柳陰の畫讃
心とむなとよみもせぬ柳哉
朝がほに月の畫
蕣や見送る月のうしろ影
自在鍵を鼠の上る畫
狂ひあかす鼠や竹の長き夜を
茄子五つ書たる畫
獻立もつとまる數や初茄子
人の許へ蓴菜を送るとて
うき草や心ばかりの花すこし
座頭の繪に
ない物を借せとは無理ぞ啼蛙
鬼の鉦たゝく繪に
大江山跡とふ春や何年忌
鐘馗の鬼を抓ふせたる畫
つかむ手の角にあぶなし花棘
瓢の畫に
惟光が貰はぬ所ふくべ哉
蓮の畫に
葉は鯖に濁すも知らじ蓮の花
夏木立に月の繪
月の夜や空にしられぬ木下闇
野に牛の寐て居る繪
草刈は笛やわすれて中戾り
人の追善に
蓮にとまれ此世は蝶の夢の果
柴垣にほとゝぎすの畫
野の宮に名は忘れずや時鳥

文臺に
文臺を見て増す梅の匂ひ哉
鰹ぶしに鼠のつきたる畫
長き夜や鼠に瘦る鰹ぶし
孟宗の畫
笋や梅も我を折る雪の内
新庵へ贈る
垣の草先むしのねのうへ所
雁の繪
雁の橋最一度わたせ天の川
八景の畫に二句を以て賛す。
雪はれて夕日帆にふく嵐かな
哀いづれ月に聞鴈雨の鐘
蚫と蝶蝶の畫に
友待つやあわひさたをか秋の暮
梅に鷹の賛
梅をふむ足にはいらずぬくめ鳥
長ふくべに書付
猿の子に底探らせん長ふくべ

おなじく
鰻とも成らばやならん長瓢
宮居にほとゝぎすの畫
拍手やそらにこたへて杜鵑
東行の人に餞す。
首途よし何か袂に露時雨
碁をうつ畫に
中よくもはま爭ふや友衛
阿三亭へ招かれて
市中に人のこゝろの花野哉
妻におくれたる人を弔ふ
蚊屋仕廻ふにも思ひ出す泪哉
竹羽を悼
かほるにもはかなき風の便り哉
乗合舟の繪に
なれ合ふや人をふしみの一夜鮓
琴の繪に
風もなき松捨てあり秋の暮
薄に蝶の畫

かひるには招かぬ手あり花薄

柳に馬の繪

撫る手の馬へとゞかぬ柳かな

山故へ婚を賀して

又の妹は栗のこもちの名も聞む

桑人十三回忌

琴の緒の數うき妹や松の風

靈照女籠に錢のちりたる繪

等閑に籠の價もちる柳

破傘の畵

芭蕉葉にあやかる傘や秋の果

俵を高く積たる上に、大黑の乘たる畵

いつも春俵の上の笑ひ顏

封じ文に作りたる楊枝指に句を乞はれて、〆と書たる封じめの下に、

封じめや文をたのむの雁一羽

双紙の間に入るしなりといふ物に句を請れて

あすの目に殘すや奥の山ざくら

梅に月の繪に

にくからぬ隈あり月に梅の花

渡唐天神の像に

鶯や通辭を啼て梅の花

朱達磨の畵に

皆赤し向ふ壁にも蔦紅葉

壁の繪に

はさむ物なくてや蟹も秋の暮

狐の妖て踊る畵に

盆の人が狐に附ておどり哉

柳に蛙の飛つく畵

露を餌に蛙釣たる柳哉

浦嶋が龜に乘たる繪

春明てまだ筥あけぬ顏若し

竹の子の畵

藪からの捨子か厚着きせながら

印籠を鼠の引く畵

印籠につくや鼠もくすり喰

鳥居に杉の畫
お留主にも梢は透ず三輪の山

菅笠に蝸牛の繪
前立の笠にもあいくかたつぶり

長柄の橋木を持たる人の句を求めけるに
能因の跡ふむ人や橋の霜

藻の中に鰹の畫
初の字は藻にすむ内の名にあらず

不山翁を訪ひて
むかし語るけふや老木にかへり花

七十の賀に
手間いらず百はかぞへむ大根引

頭陀袋に句を乞はれて
月花の襟垢ゆかし頭陀袋

藻の中に蝦の畫
藻がくれて蜆子の網も逃すまじ

我栖に程近き松濤庵に寄る。
庵と葷香を通はせん根深汁

波に日の畫
新しく洗ひて波に初日かな

社頭に禰宜の傘をかたげて、時鳥を詠る畫
千早振雨もはれ間やほとゝぎす

秋草の畫に
うら枯や草につれたつ虫の聲

梅に四十雀の畫
とし明て梅にや老の四十から

蟷螂の畫に
かまきりも斧伏て秋の別れ哉

雨に蛙のあふむきたる畫
蛙さへ晴待つ顔や五月雨

布袋のふくろの上に立たる繪
木がらしに腹を吹せて岡見かな

鐘馗の笠を着たる畫
手には霜笠は時雨の空ながら

石燈籠に木兎の畫
木兎にともさで借すや石燈籠

馬に俵付て、大黒の乗て、人家へ入畫に

馬に餘る荷や跡からも寶舟

冬木立に月と鴉の繪

見へすゝや寒こき鳥も冬の月

福禄壽の手に亀を持たる畫

老の春万年とてもお手のもの

薬師奉納

陰たのむ者撫ふとて柳かな

秋葉山奉納

身に入むや祈る葉山の秋の色

琴弾松といふに句を乞れて

秋風の松に琴柱やわたり鳥

立和を悼む

迎ひとは跡で氣つくや歸り花

立白に鶏の畫に

麥搗ぬ日は雞のうたひけり

古俳師六人の像を書て、雑の句を乞れたるに

筆に招き寄れば近し世ゝの人

羽箒母の喪を弔ふて

なき跡の嘸目に寒き夜着蒲團

黒白の鼠行違ふ体書たる畫

白が來て黒は出代る鼠かな

布袋の繪に

山も梅も春は笑ひのつれ多し

寿老人鹿にもたれたる畫

幾千たび落すも見てや鹿の角

落雁の畫

雁一羽晴たつ澤に入かわり

梅に鳥書たる扇に句を望れて

捨ぬ扇とてちらぬ梅啼ぬ鳥

繪扇に

繪はおもて何かうらみん秋の風

擂鉢に鶺鴒の畫に

すり鉢に何かいもせのおしへ鳥

風吹の竹の畫

木がらしやからさぬ竹をさはがせる

大黒の臼の上にあがりたる絵
踏た俵餅に搗日や臼のうへ

梅に明俵の絵
鶯の巣に引け炭の明たはら

福録壽の絵
書初によき名の文字や三ツの朝

一風へ褒な弔ふ。
渇い世話のたんほゝ夢や手向水

夷の畫に
けふも鯛世は鱸釣る秋風に

維摩の繪に
世の人を蝿と拂子の冬籠

枯木にむら鴉の畫
黒ひもの雪より寒し冬木立

盆に水仙の畫に
水仙に手を借られけり生姜擂

篭に鯰の畫
行歳の鯰や一葉ちるあらし

白魚を贈たる人に
白魚の友待得たる雪もあり

万歳の畫
万歳やまだき雪間の鼓草

恵比壽の鯛に乗たる絵
仙の乗る鯉は磯なり櫻鯛

山水の畫
書そへる手あらば見たし岑の月

東坡下駄はきたる絵
竹は青し下駄はく程に時雨ても

万歳の畫
万歳の蝶先舞ふや花の春

大こくの絵
福わらに、ふむ大黒の俵かな

匡衡月に書をよむ絵
酒は嘸油さへなき宿の月

傾城の禿に文を渡す絵
手から手へ忍ぶやかよふ文遣り

猩猩の盃なせる畫
樽なくば月とり得ても何かせむ

枯野に馬の駈る畫

野は枯て隙行駒の猶早し

瓜の畫に

星に借す枕にも足らで瓜一つ

芭蕉翁笠を携たる畫

裏書の花世に高し檜笠

摺鉢すり木に鶺鴒の畫

冬枯のすり木や留主の臺所

榮螺といふ題にて、歳暮の句を乞れて

世に多しさゞいの尻のとし仕廻

養由、空に向ひて弓を引たる畫に

其まゝに放さでおとせ花の弓

長瓢の繪に

くらべては蔓の短き瓢哉

唐の山水の繪に

松江に釣ものゆかし秋の風

二月の半、八十の賀に

八十の春とゞくも近しもゝの花

二月十五日發途して、江戸へ下る人に

月までも丸めて花の首途哉

睡猫に蝶の畫

夢に牡丹見て居る猫の晝寐哉

橋柱に鳥のとまりたる繪

跡つけじとや初霜の朝がらす

猿猴の蔓に下りたる畫

霜寒し正木のかづら長き手も

三月三日東行の人を餞す。

潮は干る日に浮艸の別れ哉

芥子に雨の畫

うろたへて芥子もちらぬか俄雨

かゝしの笠に鳥のとまりたる畫

ふまれても弓矢は捨ぬ案山子哉

布袋の畫

栖にとる袋の陰や冬ごもり

白藏主のわなに狂ふ繪

身にかゝる露や異見も忘草

石に菊の畫

此石を硯にすらむ菊の露

梅に木兎の畫

木兎の得手やあやなき梅の闇

桐羽・娘におくれたるを弔ふ。

俤の雛と立らむうき別れ

羽州樗窓より消息を得たる返事に

便り聞く日やひとへ減る八重霞

羽州青蔬を上巳の日に餞す。

立盡す見送りぶりや帋雛

東國より長者松といふに句をもとめられて

長者松こぼすも露のある手から

福祿壽の賛

袖すゞし杖も團扇も持たぬ日は

不爲老師、三月三日の夕始て訪れしに留主にてあはず。又の日、いひ遺す。

あわぬ貝拾ふ潮干のうらみかな

野竹、年八十の春に身後の眞似して法事を營、且賀の句を求けるに

生てとへ猶我花の百年忌

笠の破れたるかゝしの畫に

笠までも破れて不破の案山子哉

大蕪の繪

八景の外にも近江かぶらかな

梅に鳩の畫

うぐひすに朝起似たり鳩の聲

醉人を抱たる畫に

杖と成る下戸あり花の山もどり

馬に乘たる人の繪

馬の目も道はかのゆく枯野哉

半隣子へ四月招かれて

華は人の心に殘る若葉哉

竹に菊の畫

皆酒のゆかりや菊も竹の葉も

七十の賀に

老に老の年にかざへよ百千鳥

地藏奉納
花の香や尊きかたの道しるべ

岩に竹の讃
さゞれ石に苔見る竹の齢哉

三ヶ月に鹿の繪
なく鹿や弓と驚く三ヵの月

化光子七年忌に
猶茂る野や七年を忍ぶ艸

阿文十七年忌、その子の爲文へ寄す。
雲の色そへて手向よ杜若

扇の地紙に　二句
骨折らぬ扇や秋も捨られず
折るといへば扇も花の名殘り哉

柳の繪に
糸にまだ葉の付足らぬ柳哉

蟹の繪に
月に日にかざすも蟹ははさみ哉

鷄の畫に
庭鳥の春や巣作る世話もなき

夷の鯛と鱸を荷ひたる繪
鱸釣る惠比壽の竿も秋の風

布袋の背中に灸すへる畫に
灸やく背中や山もにが笑ひ

羲洋篇

（校訂者曰、板本の柱に見るに、「坤下三十九」より、たゞちに「羲洋門十ノ四十三」につゞきて、その間に落丁ある如し。仍つて寫本を以て傳はれる羲洋篇小序を添へ、原本の体裁を完からしめたり。）

羲洋篇小序

栢梁也築波也濫觴於和漢而一變牡丹再變芭蕉其道直如髪筋然於此處建一追分石連俳各異其岐矣且夫漢和之休亦一洋道也抑此海道者平仄之山阪熟字之滑道雲助馬夫之合詞俗以換雅處以爲實其險阻不一故到于此者久絶矣于茲蘿隱先生之於從也忝虛左之惠有年僕屈仕途久不期面拜此秋偶因一書令啓之誘引欲夜遣日遣探其境泝其源也兎也角也雁飛魚躍句餘脱稿和漢混交五巻成矣一日翁歌曰高山兮望潤下憐爾兮走金馬卒和曰此漢流水伊左屋川吾名勿洩若獨相憐不知何言矣是以名篇者翁知吾知而已其他何爲知乎

明和三年重陽前一夕

護花關燈下醉書

未足齋散人

和漢歌僊

物もふの聲にもの着る暑さ哉　也有

寢過愧讃顔　六林

干麥は浮て流るゝ村雨に　、

怪我させるなと余處の鷄　有

月未離高藪　、

露何染兀山　有

立場新酒薄　林

入海出船閑　、

賴むぞと袖へ投込む状ひとつ　、

尾はなかつたか今の坊主に　有

物數て門に涼みの女子ども　、

人日密夫關　、

宵月夜忍ぶにはよき黒小袖　林

踏すべつたは熟柿成けり　、

咄噎相撲負　、

噫歎奉行頑　有

可惜花無幕　、

二　京も遠のく丹波路の春　林
　薄ー霞孤ー雁暗ク　、
　古ー寺二ー王斑リ　、
　そこに寐るなと順禮の呵られて　有
　物いふ振の夫婦でもなし　有
　推量の本が違へば皆違ひ　、
　儒ー佛五ニ相訕ソシル　林
　乘合も淀の小橋に四つの鐘　、
　雨ほろ〱とぼんのくぼから　、
　了簡もない居風呂の立所　有
　木ー賃泊リー人慳シハシ　、
　月ヘ者名アリニ明ー石ニ　、
　秋ナレヤ兮波タツニ白ー菅スガニ　林
二ウ　鳥渡る空は墨繪の如く也　、
　湯治に厭アキもせぬ二階住　有
　碁ー打チ毎イツモノ時ニ聚ル　、
　鉦ー敲キ何レノ處ニ還ル　、
　垣の花ちるは雪かと犬吠て　林
　岸ノ柳水瀞ーゝ　、

漢和六々韻　六林

　男ー星凡厚ー髮
　月も鏡に足らぬはつ秋也　有
　近道じやとて粟稗の中分て　、
　墜レテ錢ヲ無レ處レ求ルニ　、
　馬ー離テ騷ガセニ問ー屋ヲ　林
　鷺ー泊テ抑スニ虛ー舟ヲ　、
ウ　さは〱と凉しさ配る葭のおと　、
　晝寐せふとてけふも逗留　有
　異名にも樣を付るは男だけ　、
　飛脚が腹をたつは尤　、
　冷ー飯茶且ー澁シブシ　林
　蝶も大かた脊戸の小休　、
　雪ー空開ニ月ノ暈ヲ　、
　砰ハノー道似タリ人ノ喉ニ　有

捧為怖追剣　、
盃難巡座頭　、
幕たゝむあわたゞしさも花の雨　林
東風に啼あふ憎い山鳩　、
二
出代漸馴染　有
病揚猶物憂　、
温飩恥切麦　、
太布妬織紬　林
そろ〳〵と人立も減る年の市　、
迷ひ子呼ぶか鉦も幽に　、
二つ三つ螢飛ぶ夜のその暗さ　有
後架もどりにふむ蝸牛　、
深案将棊手　林
何か唱歌はしれぬ鼻謳　、
約束の戀やら月に頬かぶり　、
所化に夜寒のうき名流ル、　有
二ウ
書出しを婆ゝがもて來る節句前　、
九條京片隅　林
小家請酒薄　、
長局好喰優　、
藪入期花發　、
閏二月に春も悠ゝ　林

漢和四九韻　六林

垣狐五升願　、
月も霜げて冬近き空　、
鹿聲迷屐歯　、
猫望在肴籠　也有
雪隠に居るか返辭の遥なる　、
ウ
百でやとふて高い侘倜　、
持鎗奚失鞘　林
並木の松にかゝる夕虹　、
捨子啼村雨　、
葺師騷落風　有

寺ー高山半ー腹　、
月ー少海眞ー中　、
豐後からのがれて露の玉かづら　林
殘暑に瘦の見ゆる頬紅　、
厄ー年憚十ー九　、
願ひの一は出ぬ御鬮筒　有
朝風に吹込む華のうしろから　、
すはりのわるひ雛の不細工　、

二

わづか來て伏見海道は春遲し　林
縕ー箔表貧ー窮　、
晝は顏かくす平家の落こぼれ　有
魚荷にたのむ狀の一通　有
旅ー商銀ー設少　、
辻ー祭笛ー吹終　林
そよ〳〵と若葉そよぎて月涼し　、
土藏三つ四つ宗豐　也　、
落付れたか隱居から世話もなし　有
產にさはがぬ醫者の老功　、
雪挑ー燈走　、
潮時櫓桶忽　林

二ウ

戀すてふ庄屋の二番むすこ殿　、
里ー見若言聟　有
耽箋ー疊身ー代　、
厭刀罷奉ー公　、
野山花喚友　林
鷯の笛にうそ鳥の焦桐　、

同

梟目奈名月　也有
桐も大かたちりあらす　六林
行秋憐驛舍　、
或ー日樂山池　、
草ー外笛親耳　有
道は二筋どちと疑　、

ウ

盜人の跡にぬかつた棒そろへ　、

夜は短いぞ鐘は六つ時　林
陸荷備牛馬　、
島臺飾鶴龜　、
媒譽支度速　有
使毀返辭遲　、
蕣も凋むは腹が減たやら　、
露さへをかず雨の降り罷　林
只三日の月ぞ殘れる下手の鞠　林
高笈各抱願　、
何奴か花に付けたる哥一首　有
隱者は留主の窓に東風吹　、

二

餅堅春雨夕　林
すゝめられたる灸の生皮　、
此子婆ゝ育　、
彼僧嫁ゝ持　有
小挑灯かきけす如く失にけり　、
一口ながら聞けぬ上瑠璃　林
入かはり髮ゆふ床の青すだれ　、
頃日沙汰の山子規　、
弓名源頼政　、
笠識旅宗祇　有
乘合月如書　、
西へと天の川も移ル、　林

二ウ

新米の初穗そなへる神祭　、
砂雜路傍餡　有
重い駕風にもまれて休む也　、
偶招城下醫　、
對花新設席　林
樽を寝させて永い日を知ル　、

四七韻

老蝶猶狂菊　也有
秋の野山のうかぶ盃　六林
月光如時鐘　、
香爐遺寒灰　有

引たてた露次をのそけば留主にして　林
人の盗まぬものは青梅　有

ウ

けふ限に日傭も揚る大掃除　有
柝觸一時來　林
吃守楠城郭　、
よい知恵出して餅をうる哉　有
藥師專賑夜　、
大黒毎汚楪　林
年を經て花も盛の門屋敷　、
まづあたゝかなうそを媒　、

二

潮干には笠さす程も降らなんだ　有
失物向他猜　林
いかつさも上げます乳を後栖　、
大きな尻でこがす燭臺　有
被覗初埫殿　、
爲振御徒魁　林
月のこる日本橋の朝あらし　有
忘乎燕未回　、

二ウ

盆過て留主への文の便りなき　林
垣も崩れて脊戸は一枚　有
雪似燒鹽積　林
炙憑煎豆催　有
花听知彼岸　、
漢和の春に遊ぶ杖臺　林

文樵子、此集稿成て、余に淨寫せん事を求らる。もとより手の拙きを以て辭するに、樵子あながちに云、前編蘿葉集は其師暮雨巷の筆に成りぬ。師の身に代りて跡を繼ぐもの、門人ならで他には求めじと。こゝに於て再辭せず。毫を來鷗亭の窓に採る。

蓬南磨三

來鷗亭

三磨

反古衾

阿誰

序

鷲の翅にたとえぬるは、我身ざまにしのばるべくもあらず。ひきかむりて西來意をしらんは、うらやましけれど、おろかにしておもひもたゝざりける。爰に雁宕・阿誰のつくれるあり。ひろぐる時は、山あり、里あり、友よぶちどり、森のこがらし、たゞその面にぬいものせるがごとくなりけり。これはいかいの反古ふすまにして、我家の仕業なりければ、など不細工を耻んやとて、序の手傳ひに加りはんべるかし。

宰　井

反古衾

初冬や氷て晴る空のあや　超雪

行先の分別かわる時雨かな　祇丞

柴賣の能ほと濡るしぐれ哉　昔永

枕をそばだてゝ聞ば、いかなる旅客の過るならん、あわれなきにしもあらず。

おも楫ととり楫の罡や小夜時雨　米仲

轉寐の母へ伺ふしぐれかな　阿誰

むらしぐれ猫の瞳子(ヒトミ)もかはり行く　旨原

せわしなき日を出そこのふ時雨哉　嘉廷

初時雨覗くや富士の後ロより　阿誰門　浙江

夜話の時

蠟燭の煮ゆる音あり小夜時雨　春來

ほつちりと漏音嬉し小夜時雨　阿誰妻　滿津女

有明も町屋もうせて時雨かな　旨原

たゝかれて猶時雨るや馬の髪　渭北

雪のあしたはさらにもいはず。

しぐるゝや憎き烏も濡羽いろ　阿誰妻 曾代女

鶏の足で物かく時雨かな　湖十

愛宕

止ば降る時雨の坂や五十町　存義

彼國の人〻と對話に及ぶ時

我發句出雲で沙汰や神の旅　旨原

何を持空ぞ小春の日のおぼろ　蔦立

うかれ越せ鎌倉山を夕千鳥　釋 蕪村

汐風越してと歟

出洲入江ほぐれて寄りて千鳥哉　浙江

玉川に訛らぬものは千鳥かな　再賀

枝川の枝まで傳ふちどりかな　木啓

楫とりの寐る小便歟小夜千鳥　旨原

枯野原小町に似たる乞食なし　書永

とも色に枯野かくすや縄簾　平砂

ものに着(ツク)狐のからもかれ野哉　旨原

猪の寐所捨しかれ野かな　山林

旅行の吟

凩や富士と居並ぶ峯の寺　阿誰

野渡の夕陽

こがらしや乘合を待ッ人の顔　滿津女

凩の笛かもしらず蟬のから　旨原

誰聲と枕なぐれば落葉哉　阿誰

皆散りて折ぬばかりの梢かな　渭北

世を何とうわの空なる落葉哉　阿誰

名も知らぬ木の葉散しく野寺哉　浙江

横に這ふ蟹の身を引く落葉哉　有佐

古池にあまりなるまで落葉かな　珠來

古寺 二句

塔たをれ二王もたれて落葉哉　存義

落葉して幾日になりぬ後ロ堂　同

伐たをす木は其儘の落葉哉　蕪村

埋る氣の藥もあるかに滿落葉　常仙

十月の梢おかしや木の葉猿　湖十

一寸も動かぬ水に落葉かな　渉十

城餅ニメ門開ヲ晩シ

静さも家老の城や冬木立　旨原

いろ〳〵に鳥の居るや冬木立　同

冬川や鳥のさがす舟の內　同

冬山や帶ひろげなる瀧の音　阿誰

野は人に踏捨られて寒さ哉　買明

飯時をはるかに聞や冬ごもり　由林

氣に入の調度ありけり冬籠　存義

我臑も火箸に似たり冬ごもり　有佐

埋火やひとり寐ながら捨言葉　平砂

埋火や物書ほどに箸は燃　再賀

埋火のおぼろに酒の匂ひかな　阿誰

隱士をさむらひて

草の戸にちいさき藏や納豆汁　旨原

四布五布身のかくれ家の蒲團哉　存義

うつゝにて留守を遣ひし巨燵かな　庭臺

留守遣ふ人を巨燵の蒲團哉　阿誰

戀しりと我のみ思ふ紙子かな　存義

埋木にひうち貰はん帋子哉　旨原

松風をこまかにもみて紙子かな　湖十

はたちから坂を覺て帋子かな　春來

よい馬を買て戻るよ投頭巾　淸泉

傾廓

顏包む其頭巾又見知りけり　旨原

大黑に惠美須にかむる頭巾哉　同

かく老て壁に影見る頭巾かな　存義

前髪の舊地荒けり置頭巾　萬立

口切やたしか內儀は小むらさき　春來

口切や左右にしたる知者福者　萬立

口切や地赤はいつの稚ぶり　山林

炭取に殘る北斗の瓢かな　阿誰

ひとり見る我ならなくに冬の月　旨原

家原に人をかくすや冬の月　同

御車に惟光かこつ冬月夜　秀億

冬至

凩の側から作る木の芽哉　存義

詣宜雲寺
一箇半身無雙眼ともあるに即興す。

達磨忌や皆睨まれて齋につく　萬立

てる月だ見ざらましかばうば玉の
夜は物へもゆかずぞあらまし

月影にわかきも籠る十夜かな　旨原

寒梅や冬にかついで見せて咲々　會代女

初霜や寐ながらあふる舟の底　鵬岩

羇旅

川越のわたせる橋や霜の色　珠來

撫てしれ哀れ霜夜の栖袋　春來

老僧の咳には餘る霜夜かな　阿誰

八橋の名所に尋て

田は枯て水に一輪鴨の首　木啓

鴨飛やすこしおくれて妻の鳥　春來

家をつがするものに奴なむかへし
よろこびに、いさゝか詩經のおも
むきを申侍る。

別ありて程よき鴨の夫婦かな　阿誰

鴛や下々行水に八重のいろ　存義

水鳥に狐がついて寐ぬ夜かな　紀逸

川舟につかの間鴛の別れかな　巽羅

名所の水鳥

浮鳥やすがたの池の犬はりこ　旨原

又水に戻るもはやし初氷　超雪

顏見せや一番太鼓二番鷄　湖十

髮置・袴着・帶解とて酒魚の往來、
誠に吉日なり。

霜月の十五の冶郎涌にけり　米仲

掛に檜ゐふぎかざしたるわらは姿
を、物語の繪そらごとかと思ひし
に、諸禮者流の古實にありて、今
世なを行ふ事とこそ。

袴着や千とせの坂を碁盤にて　旨原

題待戀

入相のかねてうかるゝあられかな　阿誰

噞から飯喰こぼす霰かな　旨原

賀新宅

屋根葺の音はおとにて霰哉　同

寒念佛知らず昔の己が門　旨原

春といふ極樂はあり寒念佛　存義

雨袖は上へ疊むや冬牡丹　紀逸

うかれ出て藻につきあたる生海鼠哉　阿誰

北風の酢に猶さむき生海鼠かな　樓川

天窓から蒲團かむりし生海鼠哉　清泉

身震は生海鼠にぞあれ酒先生　秀億

魚に西施乳あり、草に想思草あり、
されば不依人依經と說かれしを、
我又、不依形依味とざれごとして

肥た身をつゝむよ鰒のうすごろも　蔦立

氷る夜や鰒と書べき硯まで　雞口

一狐疑了テ一狐疑ヲ。

鰒汁に行燈くらきこゝろ哉　旨原

新養坐といふ所に住侍て

曉や氷らで寒き沖の音　同

懐の子につねらるゝ寒夜かな　阿誰

いざ立よりて

炭賣や名も黑主がかゞみ山　旨原

炭燒の隣の竈で囀けり　同

炭燒や己がかまどの薄煙リ　再賀

初雪や手燭に廻る木々の影　乔來

はつ雪やいまだ枯葉にしまぬうち　阿誰

兵と先ほめけらし雪の客　存義

初雪に文字ふるへたる文ぞよき　旨原

川の雪材木屋かな梢かな　清泉

雪の日や常は見ぬ洲のいく所　巽籬

戸は內へはづれて雪の寐覺哉　渭北

橋も今朝雪にたはめる氣色哉　蔦立

はつ雪や御先キ揃の合羽なし　米仲

畫賛　佐野のわたり

太刀持は雪にころんで見へぬなり　旨原

葦を夜の鼻唄せめて雪の人　秀億

降れや雪跡は野となれ麥畑　木啓

雪降て今朝は眞に浮世かな　貫明

くるしみて竹のもてなす雪見哉　平砂
高からずひくからず雪の中禪寺　浙江

緒方何某が家系物語の
云太郎になりて

雪の趾ちぎりし人は狐かな　珠來
來る春を眞向に見たり暦賣　滿津女
煤掃や鼠に迯てはづかしき　曾代女
山鳥に長口上やとしの暮　買明
猿曳の唄を投込む師走哉　栖鳥

いつしかさあけて見たればはま千
鳥あさあるとにあさのなきかな

蜑人の喧嘩相手や磯千どり　阿誰
篩に黑む松が枝の雪　李井
玉琴の柱のなきかたを枕にて　百萬
猫のこゝろに鏡見せけり　誰
十日から番くりかへてけふの月　井

鱸にめでゝ余の椀を出す　萬
ウ
懷にかされぬ金の肌寒し　誰
伏見の船に似た戀を聞　井
寐ぬ夫婦蚊は腰元にとまるなり　萬
取得し陶酢とはつれなき　誰
うちしきる板屋は雨の古骨牌　井
鬂に唾をゆるす神垣　萬
若草に檜扇ならす衆徒もあり　誰
心の花に連歌して遣る　井
鴈北に靈苻をまつる本簞笥　萬
女嫌ひの掃く塵もなし　誰
尺八の名にも聞へしいわて山　井
甜て茶に汲む三俣の月　萬
二
盆にまた參らぬ寺の遠景色　萬立
棊に打ほれて瘧落る秋　井
塗板に夜食竊ふ暮の鐘　誰
妾をひとり傾城で置　立
目隱しにつきはなさるゝ戀の闇　萬

井筒に影や或はまゝと　誰
繪のやうにあやめ葺たる京の町　井
道具を箱に辻の舞ゝ　萬
うちかづく弓に割篭の友そゝり　立
むくと起たる狐いぶかし　井
月雪に常念佛のねぶるらん　誰
乞食をぬけて默ゝの菴　立
ウ
門（ド）の外しらふと留守とまがひ貌　萬
玉子とられた鶏の眼の色　誰
夢にさへ木曾の旅寐は山を見て　井
笠に記念をやどす小太郎　萬
我側に馬も休むる花の陰　立
賢く立て蜂にさゝれず　井

阿誰 十句　李井 十一句　百萬 十句
萬立 五句

獨無外物李

木がらしの我竹へ來る間かな　雁宕
障子の穴に寒き人の日　百萬
駕土圭關も靜に打越て　萬立
所ならひの段の塩濱　阿誰
起て出てぬすみ踊の月の秋　李井
霧かと思ふ饂飩屋の湯氣　宕
ウ
茅厚く芝の神明葺かへて　萬
旅へも時行る神のト巫　立
走り來て盞あけさせぬ玉櫛笥　誰
馴染も訪はず五尺降る雪　井
双六の勝負を側で書とむる　宕
屎をあびせて名ある正成　萬
人の秋案山子に舌の染足らず　立
鮭突はづす月のむら雲　宕
長き夜も挑灯見へぬ山ン家にて　井
佛取られし和尚泣らん　誰
花守の醉たを人の拾ひ來る　萬

萌黄にあかぬ松の鳶の巣　宕

二　春風に供奉の老懸ひるがへり　誰

並居る中に經知らぬ僧　井

旱魃に桶からこぼす龍の雨　立

底で草鞋を作る早川　萬

野場の酒殿に茶碗はめづらしき　宕

證據の箱を中に置く公事　誰

傾城に娘をしても醫は意なり　井

下手の源氏は式部恨ミん　宕

梶の葉を鉄細工の帋の色　萬

月は入たり寐に敲く友　立

秋の山帶にぞ鹿は廻りけり　誰

五位をして聞く當年の葎　井

ウ　我鼻の低きを謳にとよまれて　立

扇をきると痛い首引　萬

餅搗も花びらなれば面白し　誰

年ぞ暮ゆく振袖の娵　宕

傘に弱ハめの靈の鼠喰ヒ　井

故郷の文に身はまかすべく　立

雁宕 八句　百萬 七句　萬立 七句

阿誰 七句　李井 七句

神無月はじめの頃ほひ、下野の國に執行して遊行柳とかいへる古木の影に、目前の景色を申出はべる。

柳ちり清水かれ石ところ〴〵　蕪村

馬上の寒さ詩吼る月　李井

茶坊主を貰ふて歸る追出シに　百萬

ざらり〳〵と納屋の鯿(コノシロ)　村

大汐に足駄とられし庭の面　井

枕かいつで起す邯鄲　萬

ウ　餘所へ出ぬ土用の中も冬に似て　萬

陳皮一味に藥研ごし〳〵　井

墨の手で拭ふ泪の手習ひ子　仝

死ンだ雀を竹に埋けり　萬

萩すゝき鯷の墖(ミエ)に色ぞよき　仝

休意とついて藥〳〵の秋　井
釜の坐にやつを隱して後の月　仝
酒で嗽も床のたしなみ　萬
三途川たばこに醉ふて渡る也　仝
花には去らぬ毛氈の蛇　井
山吹に莚下ゲたる厠の戸　仝
つれ〴〵讀の笠も幾春　萬
ニ
橋守が人形賣も古風なり　井
振らする跡へふらぬ大名　阿誰
清水も十日の上野とさらに　萬
唐縮緬をすみ染の尼　井
松風と共に經る世のゆがみ形ッ　誰
面ンをかぶつて掛乞に逢ふ　萬
酒毒とて中盆ほどに出來にけり　井
眠るうなひに神おはします　誰
夕蟬に土間で糸とる藥庇　萬
泣せて戀をしたる說經　井
月影を積ともおもふ仇まくら　誰
鎧のうへに米を背負ッ露　仝
ウ
道閉る我境の岩もみぢ　萬
筵折敷て坐禪する僧　井
剃刀に反古の文字の錆付て　誰
波も俗なる湯屋の彫物　萬
芝居見む花にと云し雨のひま　井
小鮎を詰てぬぐふ重箱　誰

蕪村 二句　李井 十四句　百萬 十三句
阿誰 七句

漂泊

夕やけや何歟降べき冬の雲　百萬
大根ばたけに舟人の路　蕪村
二十年酒うる家をおとづれて　李井
胡蝶に似たり團子取ル犬　萬
杖つきに植木責はん春の月　村
出かはり近き門の小廝　井

ウ
鉢米メを賭土器にあはれなり　萬
余りの事に迯ぬ盗人　村
松風も不二より落す甲斐の城　井
襷をかけて神カン書フミを書く　萬
馬鹿聟の馬の駈出すとよみにて　村
しはすの市に棒も侍ふ　井
雪隠にエヘンの聲もかくれ里　萬
乾のかたと浮ぶうらかた　村
ましら鳴く女房達と連ぶしに　井
月やむかしの雛どもを燒く　萬
池上の塔詠やる花の雲　井
春待得たる川崎の溫チ泉ユ　萬
二
長持に仕(注7)連いかめしき大神樂　仝
草のはづれに豆腐賣る門　井
行燈のこゝろと闇き五月雨　仝
史記一冊をとらまへて寐　萬
常うたぬ蘚の碁盤音絶て　萬
戰國の世に建チし古寺　井

五六里はおこしさへなき松の濱　仝
眉にしらるゝ傾城の旅　萬
縮緬は角ドたちかぬる頰かぶり　仝
お講の霜に並ぶ珠數廓　井
埒もなひ喧嘩に月のしらみ鳧　仝
冬瓜ばかりも脇の入る舟　萬
ウ
沖に吹く鯨の汐も露しぐれ　仝
紀の路に減らす山伏の杖　井
蘇生した亭主の敲く己が門ド　萬
一番鷄に起る粥焚　井
かまはねば鼠あだけぬ花の春　萬
扇子投込む禮もしたしき　阿誰

百萬 十六句　蕪村 五句　李井 十四句
阿誰 一句

むかし或翁は、うば玉の夜のまくらに女の名な付て、老の寐覺たなな

ぐさまれけるさなん。予も又寒夜
のつれ〴〵に、この物を愛して

前うしろありや火桶の撫ごゝろ　李井
客の頭巾のかゝる折釘　百萬
古池に楠の雫のしづむらん　蕪村
もの呼ぶこだま日は落に鳧　井
鴛鴦の袖ふる影も薄月夜　萬
問屋衆中の提重に菊　村
ウ
行秋に足袋の白きも初心也　井
千疊鋪に一寸の釋迦　萬
唐人に詠むで聞ヵする家の風　井
旭の外は何もなき海　萬
强飯に寒き濱名もわすれめや　井
鷹おとなしう帽子着て居る　萬
そこら中吉次が目見金ぞかし　仝
やはり肩をも敲く檢校　井
春の夢赤前垂の膝まくら　仝
影繪おぼろに信田妻やる　萬

惜そうに寺ひらかるゝ花ざかり　仝
薪をくらふて足引の犬　井
二
探出す蛸の天窓の嶌からす　萬
ねりは手傘でわたる祭禮　井
振袖を抱た男のよろ〳〵と　萬
みだれし鬢にきぬ〳〵の酒　井
白菊とぜうもう炷(タキ)も利とりて　萬
忘れしシテに耳こすりする　井
虛空(オホゾラ)を天狗と來ぬる國いくつ　萬
木の葉落しに青錆の塔　井
案内の錢取からにかき消へて　仝
塩屋に入つて鯛を煮さする　萬
文臺に是が成ろふ歟けふの月　仝
しら鷄頭もいつ迄の色　井
ウ
呼出して狸を見する秋の暮　仝
破レ障子になくて有る不二　萬
煤掃に草摺切るゝ古具足　井
ごつちやに成し我子乳母が子　萬

神主へ三百疋の花の宿　　井

彌生でしいる十二盃　　萬

李井 十七句　百萬 十七句　蕪村 二句

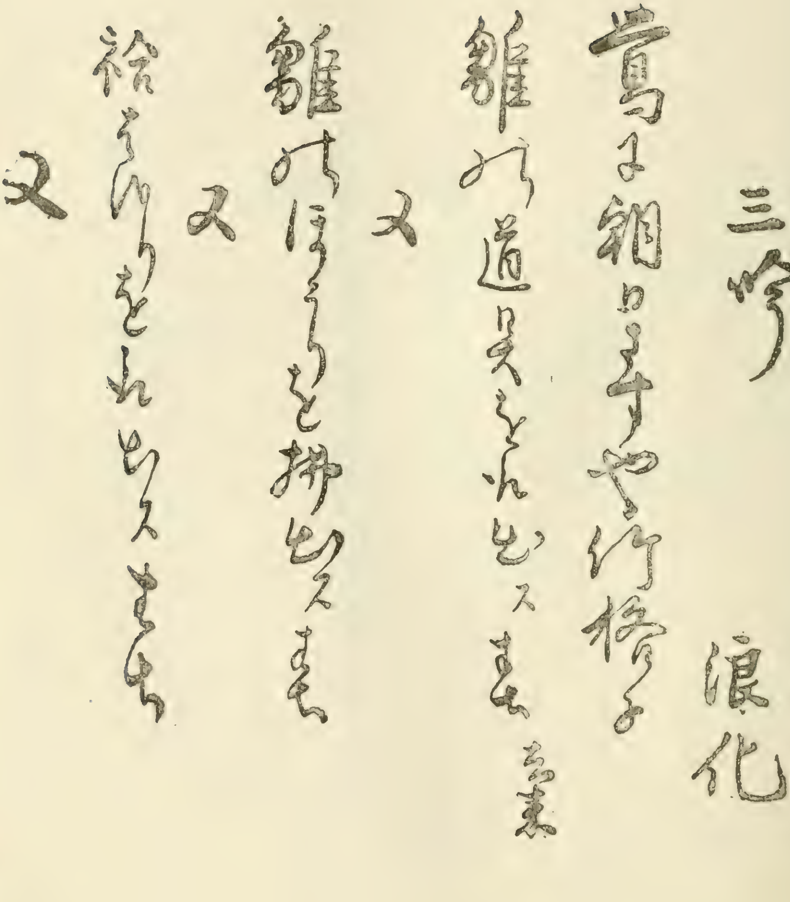
いかにしたりけん、反古の白きところありけり。其所にもの書くゝめよといふ。曰、余、俳諧の外にしるとなし。俳諧のおもむきたる。自つとめてみづから知る。自求てみづから得。その深遠なるに至ては、稿をして梁をさゝゆるとも、いかで其辭を書盡してんやといふ。曰、その辭をもて其はしに書付よといふ。即しかし侍る。

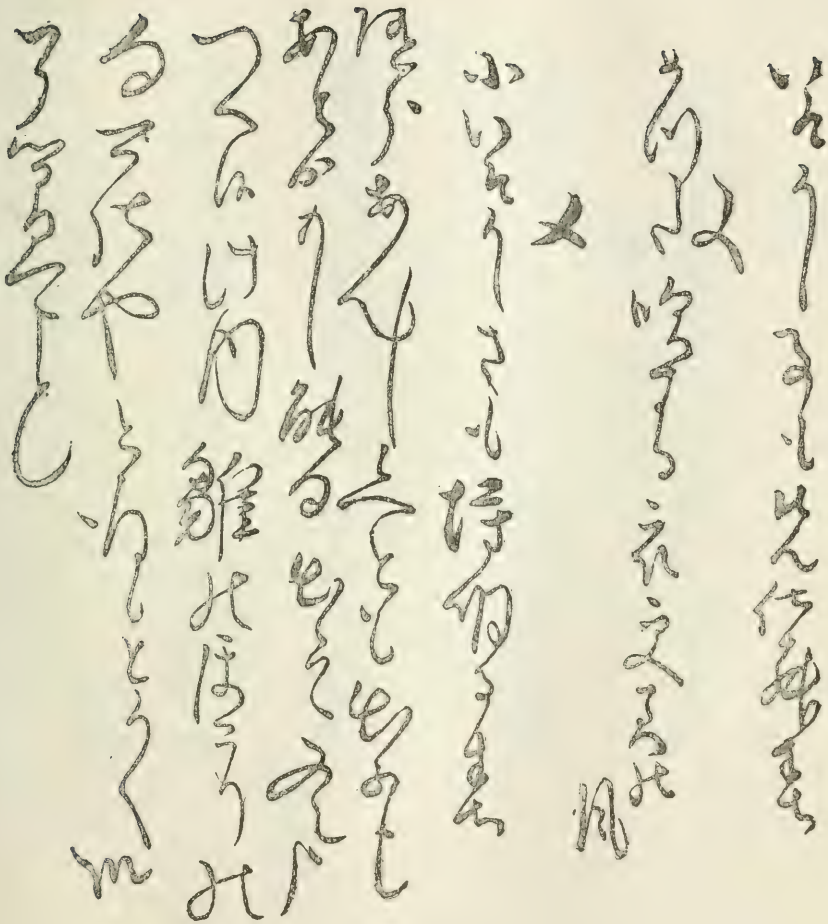
百萬

寶暦二申初秋　松葉軒　江戸通本町　蔦屋清兵衛

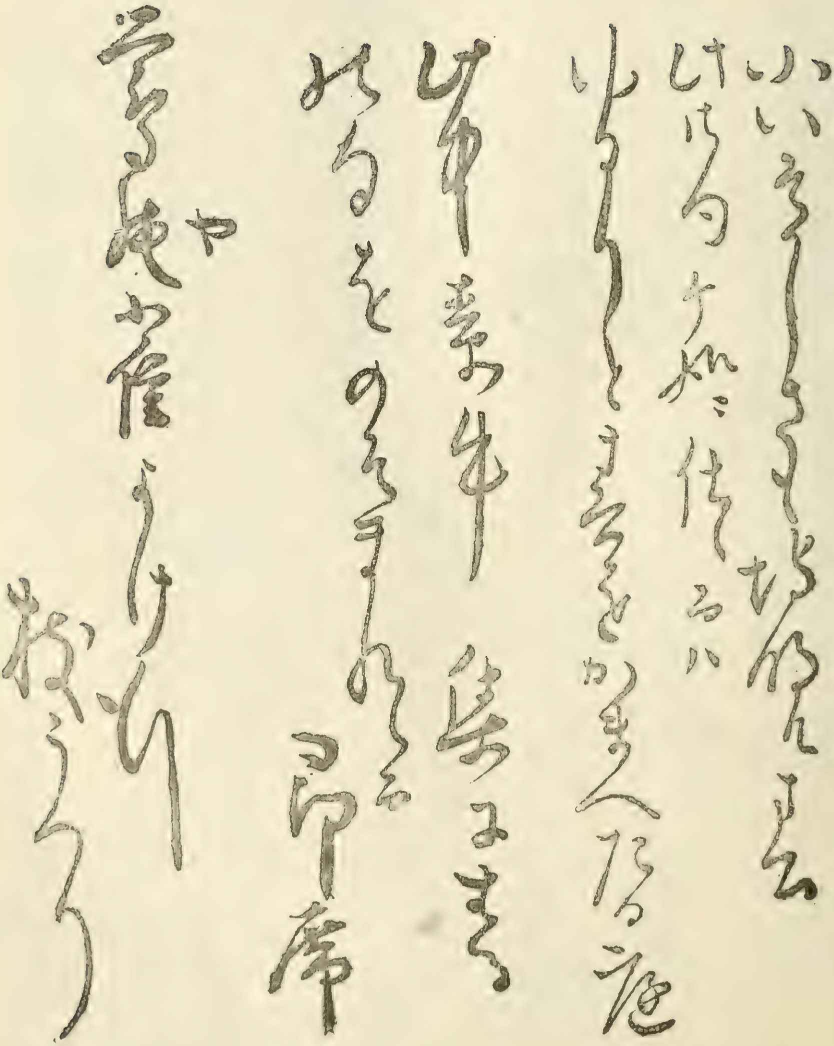
平安二十歌仙

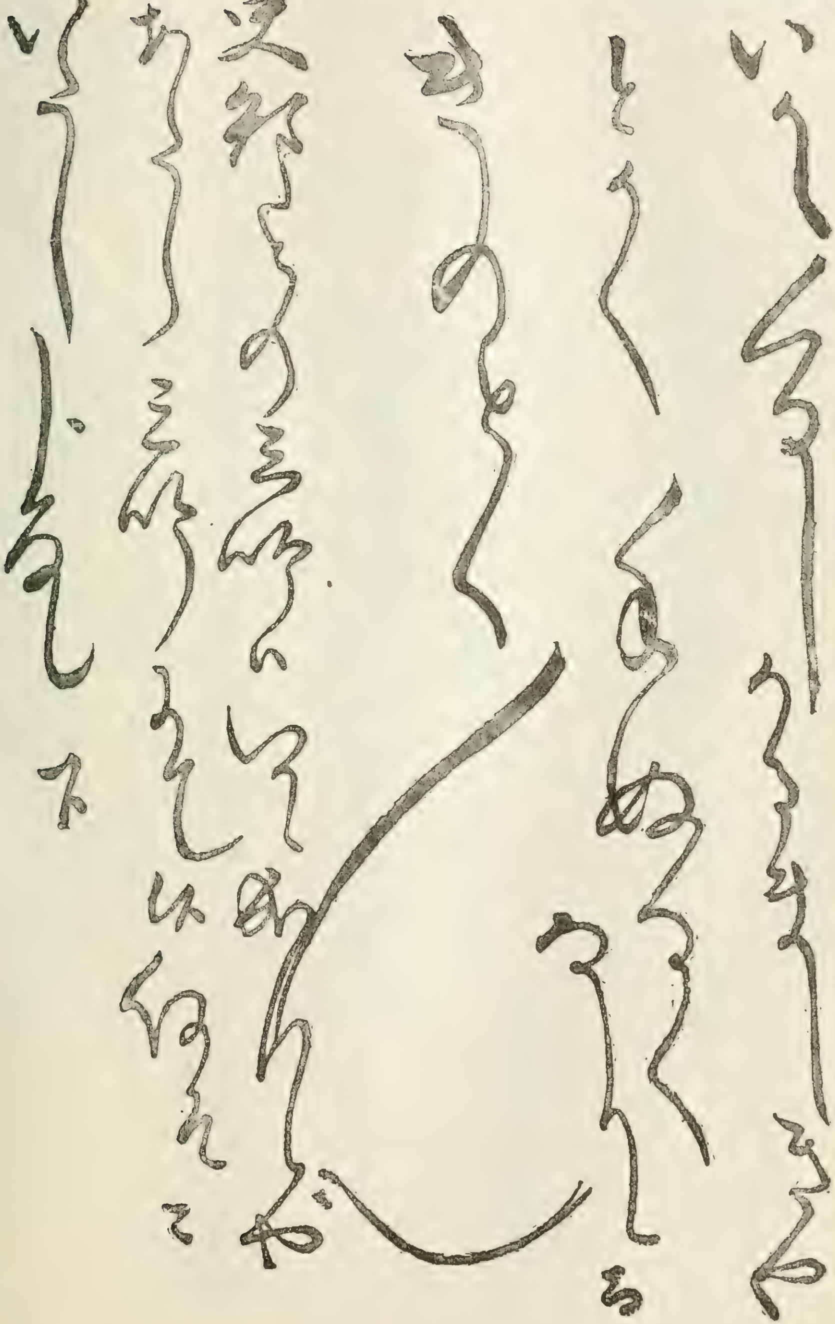
太祇





是ヨリ蕉翁ノ書ナリ





蕉翁・去来一紙雨筆ノ書ハ、向菓ヨリ菊屛ニ傳來ス。屛叉、長松下隨古ニ讓ル。屛ハ古ガ叔父ナリ。向菓ハ去來ガ通家也。

右一紙雨筆のふみは、長松下の藏るところにして、げに稀有のものなり。其比去來はさうなき作者にして、蕉翁も、このおのこ歎きがたしと、つぶやかれけるとぞ。さある人のかゝる脇なむどせんに、いとたやすかるべきを、自らの臆にことはりかねてや。翁の沙汰をこひもとめにける。殊勝の事にこそ侍れ。さてこそ翁も、かくやなどひねり直れけるも、なをこゝろゆかずや侍りけむ。「禮者うすらぐ春のしづかさ　と砥並山には聞へにける。一日太祇・嘯山、長松下を訪らひ、この書をひらき見て、いにしへの人の道に深切なること、かばかりに侍れば、すゞろ懷古の情にたえず。やがて三吟の發端となりて、廿チの席をかさねて、はたちの歌仙なりぬ。しかはあれど、其角が月に嘯く体にも倣はず。嵐雪が花にうらめる姿にも擬せず。まいて今の世にもてはやす蕉門とやらむ質を、もはらにするにもあらず。たゞ己がこゝろのさま〴〵に、思ひ邪なきをのみたとぶ成べし。もとより三子の意に得たりとする俳諧にもあらねば、人の見んこともいとくるしとて、草稿のまゝにて、橘仙堂が棚架に打すてありけるを、あたら三吟なり。なんぞにしたまへと序して、三子を催すものは

三菓散人　蕪村書

第一

明和三丙戌年十一月十八日
蒋亭會

白壁の月も細しや冬木立　嘯山
粉糠こぼれし庭の薄氷　隨古
下部等にいたく醉そと酒もりて　太祇
鼠ほどなる胴亂の象　山
日直れば橋からもたつ夕霞　古
大きな几巾を持出しにけり　祇
ウ
二番はへ天窓に春や滿ぬらん　山
廓がよひの供を預ける　古
白き手を火鉢の上で握るなり　祇
論語今川伊勢物語　山
古しへを見透すための眼鏡かは　古
老のむせびに膝へ湯を吐く　祇
余所の伯母礎の槌を借に來て　山
送りの小馬道遲き月　古
露しめり砂の金をこゝろむる　祇
鼻の高さも地頭成けり　山
脩堂に藪買付て花紅葉　古
光りしづかに古きともし火　祇
ナ
半時は早ふ暮ぬる五月雨に　山
田うへがすむと子にもらふ沙汰　古
手に顏に手拭の藍移りたる　祇
讀できかせて腹を立さす　山
伐竿の木をそれなりに小一年　古
踏ンで身に添ふ蛇の影　祇
いかな事還城樂も出來ばこそ　山
水羊羹の寒き齒あたり　古
月の漏る軒賑しき入院也　祇
はた〱と促織が飛ぶ　山
童等につけ廻さるゝ烏瓜　古
住すて歩行名醫有けり　祇
ウ
銀づくはへかこ安部川帋子にて　山
雷狩に霰たばしる　古
くされ儒者うまれ在所へかへり住　祇

續けばつゞく春日和かな　山
船玉へ湊の花をたてまつり　祇
蛙可愛くいたゞかす幣　古

第二

明和三丙戌年臘八
長松下會

御次男は馬が上手で雪見哉　太祇
けむる木葉の焚くさき亭ッ　随古
唐様の湯殿雪隱物好ミて　嘯山
言に訥きをうち守る也　祇
月ほのか樓船の風のとぎれより　古
洗ひ鱸のちりゝ〱と　山
ウ
つくばへばこける斗にふとられて　祇
小錢商ふ町宿の御師　古
あたゝかな冬に伸たる福壽草　山
人嚙む犬を狩たつる聲　祇
布織を荷主の伽に突付て　古
掛流しなる筐なりけり　山
走り書ちと讀メまひと思へども　祇
打つけ〱蛸をかぞへる　古
明石潟武備花やかに城建て　山
淋しき月や正月の旅　祇
先〱の餅かびかるた碁双六　古
又しつぽりと雨が降なり　山
ナ
文點それ弓に肩ぬぐ袂から　祇
星をさゝれて二度と出來る　古
とや角と四ッの時斗もはや打て　山
音仰山に牒の鼻かむ　祇
掬しても齒にしみわたる御供水　古
詩つくる少女月を憐（アハレ）み　山
梶はなし桐といふものゝゆへば　祇
鳴り來る鷲に藥堀すて　古
惠林寺や天目山の秋ふかく　山
墨の所の所のくちぬ壺文　祇
矢屛風の姿は夏の道具也　古
剃こくつてもまだ若衆顔　山
ウ
白〱と足袋脱であるまくら元　祇

あつめに廻る朝の行燈　古
くり返しぴいよろこひの鳶啼て　山
門の(原註)柱はしらや油揚の棒　祇
宿の染御室の花に世話ながら　古
大橋小橋蝶の飛かふ　山

第三　明和四丁亥年正月廿三日長松下會

江の梅や壇に踏ゆく貝佳　隨古
うつすり霞みひち曲る嶺　嘯山
春毎にむかしの友の問あふて　太祇
木馬の頬も撫られにけり　古
草の花雫たりたる夕月に　山
若きと云し銀山の秋　祇
ウ
とらまへた鴈を道では賣ぬ也　古
追手先なる海こそ見ゆれ　山
筋つけてをのが門のみうつ水に　祇
まけて歸るも親の氣やすめ　古
人の脊のいつともなしにのろ〳〵と　山
夜ふけの給仕すこし懸想す　祇
泊るにはよいかこつけの月時雨　古
一里晦なる太鼓聞ゆる　山
米借せと軍場よりの使來て　祇
物に馴たる社務の戯言　古
花見せてあからせて置く面白さ　山
井手の蛙の子の出來し池　祇
ナ
烏丸殿に巣をくふ鴉かは　古
神慮なる阿房日出たき　山
醉さめて旭涼しく起あがり　祇
一字讀ると譯がさら〳〵　古
中〳〵に若衆ごゝろの不敵にて　山
看病人の孕むおかしさ　祇
立様の田面を見遣る蚊屋の内　古
霧間に遠く鶴渡るらん　山
在國のけふの月はと仰有て　祇
下座は功者に(原註)太平記ちやるめらを簫　古
替らぬも唯朱子學をもてはやし　山

神田川こそ淺くなるらめ　祇

ウ

騎掛に遣はぬ錢の見事なり　古

師走の果の野はらふく風　山

寒念佛笠がよく似た大ッが　祇

名うて餅屋の曉の音　古

健に老ゆくぞ世の花なれや　祇

春闌に牡丹苔める　山

第四　明和四丁亥年二月九日 不夜庵會

居腐りて春を突込寒さ哉　嘯山

柳もいまだ手爐のてあたり　隨古

書の窓ひとりの童藪入て　太祇

時をおほえた雀むら〳〵　山

月はよし牛馬の舟も暮の景　古

ひそかにかこつ秋の參勤　祇

ウ

冷つきを先牀(眠カ)に覺たり　山

乘物醫者を腰付の門　古

うつりゆく日影のけふは日にたちて　祇

じやぶりと飛だ泉水の魚　山

細長い箱に大工の草履まで　古

文書眞似を仕て見する也　祇

やる瀬なくとん〳〵踊る胸先に　山

時こそうつれ城楽の鴉　古

片寄ッに埃吹ゆく風の道　祇

雲に入なる太神樂笛　山

一鎮しづめて遊べ花月樓　古

弟御達は官僧の春　祇

ナ

歸る雁胡(エビス)の國へうち連て　山

村は破船の樽酒に醉　古

鍋の湯の何かは蓋のならぬ迄　祇

明神様と狐をぞいふ　山

しろ〳〵と野川に露の動也　古

錢座の跡の土地譽る月　祇

秋の風五重の塔のあたりより　山

道者引むと口たゝくらん　古

あやまつて香煎多く振出し　祇

雪を丸めて何處へあてうぞ　山
節會の夜衣をかづいて並居つゝ　古
ねむさにたへぬ老も成ぬる　祇
ウ
日記操る手元も暗くさみだれて　古
こはふはないがいやな蛇へ　山
米藏の板の間くいと掃せたり　祇
三とせ滿けるしのび奉公　山
花の雲江戸出ぬけても江戸なれや　祇
筑波おろしにめづらしき蝶　古

第五　明和四丁亥年二月九日 不夜菴會

諫つゝ繫ぎ居にけり猫の戀　太祇
そぼふる雨に蝶の來る椽　嘯山
躑躅山庭の續きに買入れて　隨古
この國もつぱら武威に誇き　祇
月ふけて廣野ゝ末に雲かゝる　山
魚荷に着せし簑の露霜　古
女房を秋の風じやと聲高に　山
床より出て暮おしむ人　祇
銀閣や樹々も一際さび渡り　古
明朝やうの詩が流行也　山
積る雪それをも宵に言なして　祇
干ぬ搔餅を燒て見たがる　古
兎にかくに年より若い子福人　山
鋤の相に打むかふさま　祇
鶯に音呼殘らず氣をされて　古
月よ花よとこそおもひ者　山
ざれいふも自ゆるす老が春　祇
蝦夷の出馬に蝦を餞　古
ナ
霖のじりゝ〵と晴ぬらん　山
塩木の松葉くれなゐの暮　祇
什物のあをばの笛の籟たくて　古
下手な大工も得意なればや　山
炭團の火横へおこるもアナ佗し　祇
鷹見もどりの小言たら〵　古
腰の物ぐるめにほうと抱付て　山

しばし祭に遊女をく里　祇
田も晴も無して物に狂ふよや　古
こはいつまでの殘暑なるらん　山
取あげぬ髪を持なす旅の月　祇
祝ふてまいれ菊の酒じやに　古
草菴の明り勝手は思ふまゝ　古
扇で尺をとるの早さよ　祇
どう見ても春日は加茂に似た所　山
雲吹はれて餘寒すゝどき　祇
花の頃茶園は埃の溜りよし　古
春の流に樽のある舟　山

第六

明和四丁亥年二月廿二日
長松下會

錢蒔て通る駕あり山ざくら　隨古
茅花喰ふ子の圓居する岡　太祇
殊更に雉の雄伊達にして　嘯山
さつと表帋は澁の雲やり　古
貺して年の名殘に澄月夜　祇
嘉太夫節をほり出しにけり　山
鞠子とは天下にしれたとろゝ汁　古
落馬におもふ觀音の慈悲　祇
あの男尻で取たる知行にて　山
日の目を拜む幟一日　古
盃のうら繪見やうてついとほし　祇
意氣揚々と國ものがたり　山
菊守の仕たい事する咲せやう　古
つるがてんゆく秋にはあらねど　祇
月清く大江千里と書れたり　山
手に滿干の珠をこゝろむ　古
高きより詞の花のたねとりて　祇
病る梢に東風の吹らん　山
霞來る横川の鐘の夕暮に　仝
母のこゝろや待風呂を焚　古
から猫のぬれ來し雨を振ふ也　祇
長みじかある蝸牛の角　山
朝の間を牡丹の客のおとづれて　古

三升に似たる紋をうたがふ　祇
鎌倉は何角に付て出る處　山
乘かゝりたる船の夜走リ　古
星照や雨盡たりと見ゆる迄　祇
去年の日柄をかこたれし月　古
首筋へ出口の柳冷付て　山
文かく帋に紅葉うつ頃　祇
ウ
異な事で武士がすたるとこね廻し　古
羅理こつぱいなけふの雪消シ　山
手灯を一ト間張らぬに譯もこそ　祇
樵夫の道を柴の戸の歯ロ地チ　古
あが花といとも大事に守れけり　山
今生れたる蝶の散かふ　祇

第七　明和四丁亥年二月廿二日　長松下會

垂こめて二日灸や嫁御寮　嘯山
鶯といふ鳥の羽箒　随古
植足しの細き櫻ははや咲て　太祇

こゝらへ來ふぞ銀を持たら　山
街道をすこし入さの月の門　古
此鮭のする俎板がなし　祇
ウ
鬮取に思ひもよらぬ御家やう　山
一年などの旅は夢の間　古
かこち言かこち返すで果がなし　祇
隙ぬすみ來し妾宅の雨　山
藥酒寐ざま／＼に飲習ひ　古
冷る都へ老てもどりし　祇
そこばくの月雪も皆昔にて　山
八反がけの黄に匂ふらん　古
かゝり湯に元朝寒く濤スガ／＼し　祇
長ナがゆるし化粧文呼ヲ　山
花とさす紅は田舍の春袋　古
つゝしみ觸て鐘鑄近づく　祇
ナ
入るなら燒うか風呂を立やる歟　、
した／＼した／＼五月雨降　山
大名の初夜に泊りて後夜に立　古

鼻血こぼれて辷る板の間　祇
時めける匂ひにほつと吐息して　山
木隱にけり戀も是まで　古
我死なば彌陀や記念に殘らん　祇
暮の鳥の啼わたる空　山
聟に內を預けて今に留主　古
衣のかくれに光るかけ針　祇
未暑く月のある夜の嬉しくて　山
大津飛脚の笠もたぬ秋　古
ウ
樹のもとに銀杏の散も心あり　、
やれ珍しや頓阿在宿　山
そよ風に虫の涌たる米ほして　祇
朱鷺の光りに鷺は淋しき　古
霧籠る花の林の神垣に　山
松のみどりを摘て喰ぬる　祇

第八

閨情

明和四丁亥年三月十日
長松下會

春深く閨にくろゝ(原註)柾を落しけり　嘯山
朧夜ながら衣とふす霜　隨古
初花の植木賣かふ道もせに　太祇
身はちよんぼりと三間柄なり　山
月夕唐犬引てかへる家　古
けふや俵を積そむる秋　祇
ウ
出替りて來ぬれば紅葉柳にて　山
抑れまいと隱す物さし　古
火のついた裾で立まふ匂ひ哉　祇
雪氣に成て衢鳴たつ　山
際前に寐てはならぬと生姜酒　古
日ゝに餅買ふ人をあやしむ　祇
尻へたに踏馬御免書付て　山
鎌の行衛のしれぬ夏の野　古
弟子もなく隱れてすめる胸の月　祇
生たる如く江を渡る雲　山
きせるにて狐の畏をいらふ也　古
萬事若衆の子心をくむ　祇
ナ
つれなさも今朝初春のきほにゐて　、

表をうらに例のゆづり葉　古
降ながら何所ともなしに長閑也　山
三年かゝりし須磨の彩色　祇
茶嫌ひと沙門の身には言かねて　古
笋抄の黒みつきぬる　山
御遊びに世の業寫し出けらし　祇
眼薬ほどに乳をしぼる貝　古
煤を掃中へ女を捕へ來て　祇
おぞ毛立たる月のかほばせ　山
長の夜に七夜の護摩を燒返し　古
椎の雨よと時申シいふ　祇
ウ
加茂の水双六の簺御借金　山
和泉が染し緋綾緋綸子　古
賭なれば降せたがるもことはりや　祇
四度のなきこそ美しけれ　山
同行を旅に葬る花の空　古
氣だかく霞む月のたそがれ　祇

第九

明和四丁亥年三月十日
長松下會

出替の壘へ落すなみだ哉　太祇
空ゆく雁の聲もるゝ窓　嘯山
柿の粉に春の甘みや殘るらん　隨古
聟着べくと狀のみじかき　祇
移り來る芭蕉の月の凉しくも　山
すり込砂に水の道つく　古
ウ
下財共髪のみだれて顔青き　祇
なぐれ女良の太い取沙汰　山
かはる世の古き端哥をなつかしみ　古
悲しうて飲む酒と見えけり　祇
十月に夜の永ひのが癖付て　山
馬を追こむ篝火の中　古
耳なれて和語も聽得る長旅に　祇
西吹風の肌にひや／＼　山
紬織る結城あたりの月寂し　古
神踊をやわたしゆく覽　祇
かゝる事は芝居の花に有もしつ　山

面瘡かゆく春しのぶ躰　古
ナ 暮かすむ物見にこれは誰枕　、
どぶ〳〵と行金毘羅の造酒　山
御座船の龍輝て龍の聲　祇
來る日もあかぬ碁盤木偶　古
囀だ文流星槌とうちつけて　山
何所やら崩れの娘なるもの　祇
草鞋に藥をぬりて旅の空　古
晷がる牛がもふ〳〵と言　山
散一葉まなく焦れてちり〳〵と　祇
闇と月夜の灯籠の場所　古
稲妻とひとつになられ稲の殿　山
あはや引裂く文字の雁金　祇
ウ 無造作に勅使の渉る加茂の河　古
下着の綿ンのあやしからずも　山
宮仕へ同じ所に居合せて　祇
風呂敷で聞に髪と拭く水　、
よまずとも花見の題は探りたし　古
何處のたはけか夏を待とは　山

第十

明和四丁亥年三月廿五日 薪亭會

隨古

忠臣の老を隱すや更衣　隨古
されば扇の骨も一ト角　太祇
釣狐座中小便堪え居て　嘯山
心ばかりのにほふ杉折　古
鑿して壁こぼちける月の宿　祇
下手の砧をいかゞ詠らむ　山
ウ 黒柿の葉も赤〳〵と谷の戸に　古
僧死かはる木像の數　祇
公家の子と只ッ人の子の交ッ居て　山
沙汰のかぎりな蝙蝠のつら　古
夏木立夜の後架に灯影もる　祇
すね根性が旅で見えけり　山
おもふ事廻らぬ筆に言すらん　古
傍輩もなき遊女つとむる　祇
海上(背進)かをさ膜にかける其人に　山

彼岸になれば唯もやる魚　古
月花に重盛の松訝からす　祇
けふの昔と春ぞ隔たる　山
ナ
鳴盡す聲有たけの鶯に　、
仰げば空の高き野ゝ宮　祇
縞栖(柄カ)に國をさゝれる旅なれや　古
大勢(原註)使つかふ後家のいさを(原註)功し　山
四ツうてば寐ることゝ月もがてんして　祇
菓子に老たる猿の一生　古
御傍衆眞裸にて雪こかし　山
使もどりて留主の譯いふ　祇
露銀の手に半分も溜りかね　古
竹青〱と切し升搔　祇
蒸月夜水飲なれし腹を撫　古
地取にまいる去ル寺の庭　祇
ウ
桃うてば其薬匂ひて落かゝり　祇
何をじやら〱皆苦なし達　山
屋ぐら馬嬲と言字出來にけり　、
今度こそ見た伊勢浦の不二　古
樹を買に花の三月高ばりて　、
築地の外を廻る燕　山

第十一　明和四丁亥年三月廿五日 獲亭會

追戻す坊主が手にも癸哉　太祇
森の若葉を響來る樂　嘯山
駒の脊道を上手に履ぬらん　随古
川わたりてや物は喰べき　祇
三日の月いつの間にかは出て有て　山
茶筅の雨をかつぐ松虫　古
ウ
秋好む娘なるはともてはやし　祇
わざと負たる哥かるたにぞ　山
野の水を汲て慰む船かゝり　古
二尺ばかりの裏のほころび　祇
鳥居てあほ〱とこそ啼にけれ　山
人の脊たけは花表兀にき　古
刈穗干冬のはじめぞいさましき　祇

生蛸賣の聲の晴〳〵　古
門立の噺ゆかしき段の雛　祇
新笠揃ふ花の御家中　古
品川は有明殘り春日さし　祇
澤庵漬を二本喰けり　山
ナ
板の間にきつかり付し脚の跡　、
思ふたよりも象の鈍らし　、
紫の氣の立のほる雲井より　、
ちらと見合す横笛が振　、
鞘走る刀に衣紋繕ひて　山
汗や拭らん風薫らん　、
塩風呂の中に青木の實がこほれ　古
宮川町の新道の雨　祇
隱居して白髪も少し身の願ひ　古
百日法華伯母御なればぞ　、
宮仕へ月にうそむく年でなし　祇
露のかごとか哥に出來たり　、
ウ
柿を搗それも絹煮釜の前　古
捨育なる子の病なき　山
たび〳〵の愁何やら合点して　祇
牛王の水に旭うつろふ　古
ゆひなせる若和布の糸も花盛　山
胴築遠くうらゝかな聲　、

第十二　明和四丁亥年四月廿日　不夜菴會

山法師おとなしむ(きカ)世やかんこ鳥　嘯山
ふまぬ疊の夏の虫はみ　太祇
しめり取夜半に澁帋引はへて　随古
ねがふてもなき月の冴やう　山
聲遣ふ冬の日數の立やすし　祇
野風呂の湯氣の横へ吹つけ　古
ウ
淸らかな水つい〳〵と石走る　山
張文成や衣紋つくろふ　祇
岡崎の女良衆に三里すへさせて　古
能う持なせる胡弓成けり　山
箱の紙魚てる日の庭へ打はたき　祇

水賣聲の町はねむたし　古
猿樂と中樂あり此國に　山
明行燭のこゝかしこ消ス　祇
賀の餅はやり餘るほど搗すべき　古
舟百艘の常の働き　山
普請場へ來て月を言花を言　祇
借り子してゐる乳母の永き日　古
巢を運ぶ鳥にも心いためけん　山
老て艸座に大願の聲　祇
米に交る雜穀も人の志ン　古
藤原なんど系圖おごめく　山
白粉はたやすからずも燒ぬらし　祇
伊達の薄着もけさの秋から　古
合歡の葉にそよりと渡り露落て　山
よほど更ねば月さらぬ菴　祇
僧(洒カ)栖もさすが年ふる狐哉　古
奪合ふ德利捻ゆがめぬる　山
乘ッ取し城は若葉に明わたり　祇
今や西湖に棹の哥きく　古
呑ウ込だいつもの鶴の舞出て　山
跡で暦を見ても吉日　祇
參會が延て持出す山は花　古
ふら〳〵こゝやきりゝきり〳〵　山
我に付てはからんと也糸遊ぶ　祇
松茱杉茱は脂ヤニのある艸　古

第十三　明和四丁亥年四月廿日 不夜菴會

妾人にくれし夜ほとゝぎす　太祇
月の枕も天鵞絨の苔　隨古
土橋に柴の欄干ゆひなして　嘯山
およそ三とせの糧運ぶ也　祇
雪ながら籠を預る市の中　古
よろこぶ犬の尾にて挨拶　山
そよウ〳〵と闇に嵐の吹のこり　祇
咳氣の聲も親に其まゝ　古
透寫し罪深からぬ御下手にて　山

局の道に踏まじき品　祇
言ハさじと口を押へる最屓ぶり　古
あれが牽牛これが織女　山
家數にほこる城下の月夜さし　祇
秋は千鍋の山をつく〲　古
しら波のよする渚によい男　山
引裂もてる物のあふ緣　祇
花の暮飛鳥井殿は松斗　古
いとのんどりと來鳥の聲　山
ナ
春霞煙しるしにたつ煙　祇
菜種の船が又二艘着　山
追からし果は子を取馬やらん　古
國に餘れる野のぶきみなる　祇
似せ者の皇女莵や角かしづきて　山
朝逢ぬ口はうとき心根　古
百人が一所に伊勢へ詣る也　祇
海のみどりも樹々の綠も　山
赤蛙ちいさき畚の葉隱に　古
氣强な事を希中上　祇
後學に斯した月も見て置ん　山
着れば着るほど蓑の肌寒　古
ウ
脩になりて露のふる里よそながら　祇
濺ものする太郎兵衛が鼻　山
起し出す田のいさかひも元の水　古
あんまり熱い汁を吸かけ　祇
献る花の宰領請取て　山
柳を紐にむすべ藤笠　古

第十四

明和四丁亥年五月廿日
於松下會

狂はしやこゝに月見て又かしこ　太祇
新酒の醉に諷ふ三井寺　嘯山
こほれ萩箒もおのが枝垂て　隨古
沙地の岡の雨のうるはし　祇
半日は壹歩が錢の持重り　山
菴の休みに白粥致さん　古
初陞物も言さぬけしきあり　ヽ

波切る舟の作りするどき　祇
大將の御前へ召れ祿給びて　山
いで其頃よ若かりし長サ　古
慰メて旅面白く云成せり　祇
雪しつぽりと古き家作リ　山
この頃は主の機嫌も取にくし　古
假名の付たを貰ふ句双帋　祇
凉しくも月に照そふ顔の艶　山
御客の客にちよつと吸物　古
雛しまふ跡に掃るゝ花色よ　祇
新参古参這出出替り　山
ナ
麗さ笛をはなさぬ童(ヘツハ)にて　ゝ
那須野で思ふ嵯峨の隱家　古
暮る年雁の立居もさはがしや　祇
三代經たる公事の濟やう　山
かしこくも兒の本地は文珠にて　古
暑ひ所を味に住なす　山
毀して敗鼓の革も釣せたり　祇
鱠にむしる菊の朝月　古
忘ずも南へ鷓鴣の飛けらし　山
余所の國にて妻もてる秋　祇
惜からぬ命と文に書もしつ　古
夕の雨の嶺に渡れる　山
ウ
めくら馬馬士殿是はどふしや也　祇
墨に染ても鉄壁の袖　古
菴の花針の様なる飯焚て　山
手拭つたふ蝶も春の日　祇
大勢が小舟にわかれ霞み行　古
摩耶の笑の聲もなすらん　山

第十五　明和四丁亥年五月廿日　長松下會

明ながら日の色薄き野分哉　嘯山
漲る秋に筏くむ郷　隨古
露寒き頃より梢をさしくべて　太祇
二人の聟が月に誘へる　山
お好みの籤では御覧あれ　古

あやしき風の起る荒濱　祇
ウ神躰もしれぬ小祠をもり來つゝ　山
麥で調ふ高盛の飯　古
ばた〱と嫁に成けり娘共　祇
美ながらよい手嫉める　山
積る雪内裏普請の年越て　古
法の師いまだ出てわせぬ春　祇
ほつ〱としぶ茶に花の物語　山
山に酒蒔蝶の震動　古
松明のとぼし足らじと急ぐ道　祇
土用の末の北が落來る　山
月暮て夏の氣樂は下司にあり　古
研ば研ほどたゝぬ剃刀　祇
ナ鼻帋の何に濡けんべつたりと　丶
のろ〱來る鹿のうらゝか　山
大和路の春は參宮の下向なり　古
碑の銘たてし如月の岡　祇
借こそは隨涙〱と呼なして　山
尺八竊て通る關の戸　古
若き間は親の顏にも似ざりしが　祇
報恩講の古き肩衣　山
樹い朕の猪や兎に霜かゝる　古
勾引され來し岩窟の妻　祇
憂くつらき身の割なくも唯ならで　山
ひそみて出す盃の影　祇
ウ青豆の水何返も替るなり　古
殘る暑さにしやぼん吹らん　山
玉垣に往かふ道を石たゝむ　祇
しのび成ける里下りの輿　山
花なくば主の小唄も聞じ唯　古
春ほど晝のよき事もなし　祇

第十六

明和四丁亥年六月十四日
不夜菴會

花火賣暗き川瀬を通ひ鬼　隨古
北斗ゆら〱爽な天　嘯山
撥面に凡千年の月を得て　太祇

閑かさあかぬ高藪のうち　古
何人の馬や斜に繋ぎなし　山
御-劍ぅてるけふの雲いき　祇
ウ
酒臭き息を忍びて立まはり　丶
女を主に取レばむづかし　古
武藏鐙かゝる無理たもすべらせて　山
上總鞦の知りがひもなや　祇
可愛子の鱸藥にかしこまり　古
六月にたつ秋ぞ嬉しき　山
眞白に塵も居へじの藏の壁　祇
呑屬共に賀の多ひ年　古
八莊司古文辭なんど學び居て　山
咄せばたんと譯もある花　祇
春の月岩に大師の杖の水　古
起キ忘てや蝶の舞らん　山
ナ
巡見の殿上人の柔らかみ　丶
うたてつくばふ膝のゆらめき　祇
入梅花も美楊は折に折やすし　古
一間ッ仲てとまり笄　山
古寺にねう（原注）猫比丘といふおはしけり　祇
いつ煮た事ぞ鍋釜のさび　古
面倒を見て遣う也貰を也　山
貰を也とや親発しけむ　祇
牛の子の太鼓に付て何所迄も　古
終住變る寮の朝月　山
鳳仙花咲すがれてぞ立テりける　祇
とつた角力の長らへし顔　古
ウ
雨ながら明なば桑名桑べしや　古
蛙音づれ雁聲遠し　祇
待花に又爽風俗を吟じつゝ　山
小座頭が來て笑ふ春の夜　古
神ぞ在ス浪もて洗ふ洞の中　祇
振る松明も幣成らし　山

第十七　明和四丁亥年六月十四日 不夜菴會

いざ菊に茚何させなん抓ざし　嘯山

栗は休んで柿の生る年　隨古
俵積蔵中の秋を見せ顔に　太祇
十四五貫が雁わたる也　山
新月の空は晴ても濁り川　古
おもひ〳〵の町裏の垣　祇
ウ
燒立る圍爐裡の上の油竹　古
眉濃き娘人の結ばん　山
墨にしも引や心の色にそみ　祇
深編笠の御名を聞かね　古
待物は鎌倉山の雪ならで　山
鉢の子かける爐の火甲斐なき　祇
本數はいらぬものよとくれてやり　古
清談者流皆赤ひ胸　山
花代を共妹にさえ淺すらし　祇
秋の下リを契り行春　古
鶯の聲に隱るゝ月星に　山
宮中に古き者の呼く　祇
ナ
加持御符この頭臭のはやり事　古

瓜むきの刄の痛く利がらす　山
庭樹共古き都は陰深く　祇
内義に口をきかす織殿　古
博奕と素打は曾てしらざりし　山
方丈ふかくかじけ(原註)靺込たり　祇
枯柴の烟の中を舞ゥ紅葉　古
行遊ひざま傍腹を突ヶ　山
所々見せて天狗若衆を戻しけり　祇
月にむかつて呪を誦す　古
南鉢のさもにつとりと仕なして　山
千石舟の二はいする秋　祇
連哥師は流石行脚の多からず　山
昔の小笠もほくそ(原註)北叟付けり　古
夏のくれ未燒止メぬ竈の下　祇
南朝からの倫(綸)旨傳り　山
酒旗に斗略やある花の中　古
故人打ちる遠近の春　祇

第十八

明和四丁亥年八月十三日
菴亭會

御角力や流石下緒の濃紫　隨古
雨後に沙まく月の廣庭　太祇
大般若酔楊妃など合すらん　嘯山
年ふる酒の瓶に減り行　古
引ちらす書を其儘の明くれに　祇
頃ナの雪のしるきあれ様ゥ　山
ウ
殺生は免さぬ卿の打囃子　古
給仕に出たる姉不評判　祇
悪性に透間斗への名を取て　山
あした逢んと拔る鎌倉　古
蔦楓茂り子規など住ぬべく　祇
金をな持そ毒なものじやよ　山
三杵半唯古き世ぞ忍ばしき　古
神の心の杉の假葺　祇
隱し居る月の光りも大徳や　山
沙魚も西瓜も濱の商ひ　古
世の花の花おさまりし稻の色　祇
と思ふ所へ又日枝おろし　山
ナ
二丁(三カ)礫の喜平次大夫と名乗間に夜が深て　、
ちぎれ勝なる草双帋也　古
貧さの漏る雨さえも降續き　祇
ほたり〳〵と家主の栫　山
丈六の彌陀を勸る天が下　古
買油揚で朝飯は先　祇
いつとなく小説物をはやらかし　山
藏を建るも老が慰み　古
氣違ひに成た寺頭のふつと來て　祇
合ざる占や露斗ッだも　山
湊での月を都に歸りなば　古
和布刈の森に照葉見えけり　祇
ウ
時の鐘聞えぬけふのそよ風に　祇
墓も皆そこ睦じう住　山
狼としらで一ぷく黒薬　古
家の子登す和哥の師の許　祇
花の道不斷櫻と榮ふらし　山

春の埃の帆にわたる頃　古

第十九

明和四丁亥年九月廿五日
長松下會

水鳥の啼や月下の門の内　太祇
立來し冬に夜も稲磨　嘯山
縞桐を通す霞も霧もなし　隨古
舊きを起す道々の春　祇
櫻見に七日の旅と約し置　山
皿鴬は先笠の大さ　古

ウ

はしり書早く鄲の讀取て　祇
暑い樂屋におこる炭の火　古
煉藥を緒〆の匕のひた堀に　祇
馬士に抱れて鞍へかき付　古
柳ちり物さへ嘆て雨寒き　祇
濱の御殿とあてゝ置月見　古
くるしや妹が氣を露ぞむかしと　祇
いはでほならに紅絹の燃たつ　古
何所へやらきせるのゆきしたばこ盆　祇
春はかならず瀧の觀音　古
降ぬ雲花の色添ゆへかして　祇
木を持ゆくや雁の羽休め　古
鮹の皮漁父が一間に敷古し　、
義經王は大祭なり　祇
果々はしてやる熊を乳に育テ　山
髪付油なくてあらなん　、
素八好淨土法華に留メたり　山
京極通やよ初しぐれ　、
吹落し又吹上る葉のひゞき　、
御心しりの童ハ參れる　、
忍辱の餘り潜ミし思より　、
踊ノ宵ニ頤イト出ツ奔　、
流鑾スレ月ヲ東山　古
菊は久しく闘すらし　祇

ウ

俳諧師無理な熟字を遣ひるて　山
着ても見よかし(原註)還やむる頭巾を　古
嗽ぐ流に石の踏どころ　祇

嵯峨山にしも蜂の沙汰　、
惡日を恐れて居ける花心　山
重の土筆に野路の移香　古

第二十

明和四丁亥年九月廿五日
於松下會

牛二疋鵜に遣ひ行師走哉　隨古
年の瀬といひ年浪といふ　太祇
めでたしな太平御覽買に取て　嘯山
月細そりと黄昏る也　古
うち栗の久しき世より打馴し　祇
冷かに召す下の白無垢　山
ウ
老が身の染羽氣高く春風なして　古
哥とく出し酒の座に着　祇
頭に故實を傳ふ片田舍　山
行ー水の湯に桃の氣が立　古
よ所ながら顔見る程を嫉で　祇
取殺さふのいや付ふはの　山
火燵なき冬も忍べば忍ぶのに　古
天狗名を呼室の戸の月　祇
稻妻の突ぬくやうにぴかり〳〵　山
瀬田を下りに宇治川の秋　古
痛しや花の姿を搦め行　山
小庭に春のふかめたくなん　祇
ナ
鯖に青鳥羽の雪解は泥水也　、
立圃畫賛の貞徳の像　古
佛檀ちお福の面も碓も　山
祭のけふの幕の上風　祇
中楽とは難波の町で賣れた貞　古
はて其氣なら嫁にやろはい　山
此文や裂に惜て殘しけん　祇
みやげ物買旅の夜すがら　古
ちとも寐ぬ月人男尖ドにて　山
閨に秋の寂を竭せる　祇
栗の穗を尻に挾めば狐じやよ　古
百姓あたりよい國の守ミ　山
ウ
祠堂金都は遠く唐に似て　祇

あした夕に變る濱側　古
鷹の羽に寒き嵐の渡るらし　山
道中筋で顆のよい里　古
三人が花折べくと負ひ負れ　祇
五の菫つく〳〵しけん　山

追加（四季混雜）

行春や選者を恨む哥の主　蕪村
足跡を字にも見られずかんこ鳥　、
秋おしむ戸に音づるゝ狸哉　、
木の端の坊主の端や鉢たゝき　、
鼓子花に又一日の明にけり　武然
淵を淵と見る月夜かな　、
菜の花や思はず撫て通るなる　文誰
うの花や垣を隔し水の音　盛佐

馬盥にさみだれ傘や數十本　五雲
見たらぬを初雪とこそ中たれ　雅因
狩くらの行馬出來たり萩の春　召波
鳥の巣の朽る雫や五月雨　書輪
丑三ッも過て螢のしらけたり　雨田
船よせて聞ば遠のく衢かな　、
桃折ば皮むくれけり花ながら　士髮
流れ來てたつや螢の水はなれ　孤桐
朴(まき)たく畑さびしや夕時雨　雁背
踏つくるひとりは花のあるじ哉　富水
今少し向ふの寒き巨燵かな　珍志
雨待や野べも遣りたく蚊も減ん　孤舟
牛蝿に背中まかせて花野かな　、
拂ふても〳〵しだり櫻かな　蝶車
何處からに水の音する蛙かな　可幸
架を柳に迷す猫かな　佐貞
なつかしき苗代水や我肥滿　瓜流

虚無僧の物云懸る枯野かな　、
忍び來て母にあふ夜のこたつ哉　一兕
更る程野の近うなる蛙かな　喜圓
遣ふべき人の給はや魂祭　、
入相の鐘に障りし雲雀かな　岸指
禁足や花ある方へ遠めがね　燮鷹
散ながらやはり柳はしだれけり　卜志
螢見や此宵闇に舟早し　蛾眉
山伏の磯にたく火やさよちどり　芋秀
稲妻や梟の伏す所まで　季遊
きよろ／＼と行や師走の猿回し　、
鰒汁の後朝おかし良と良　赤羽
韮狩やへたがる下に又一ッ　士蝶
掃仕まい又拾ひ行落葉かな　楚瀾
麥秋に鶏の住居あれにけり　共流
鶯や障子一重の朝日影　兕流
糸遊やほこりにしらむ町の松　鼓舌
舞臺飛ぶ傘とも風の柳哉　巴東

邪魔な時取おく角や蝸牛　白芽
引板うちに寐られぬ祖父の代りけり　之房
神妙に梅見る人や野の往來　光江
橋を行子の足取や風巾　、
ひた濡にぬれて色濃き柳哉　可猩
燒筆を水に落すや杜若　文山
あらはなる藥家の庭や葉雞頭　麥翅
明るにもおかしき霧の扉かな　、
蝙蝠の散て出たる軒端哉　呉雪
南天の實に餘りたる赤さ哉　、
往ても／＼風の吹たつ枯野哉　晩平
雪に寐る竹引立る旭かな　志昔
春雨に儒者の若衆の投壺哉　省我
名月やよそに夜のある海の上　安里
笑ふ山見返る雁の行衛かな　子曳
夕顔や留主とも見えず人もなし　、
裾ぬるゝ昨日の雨や初櫻　几董
按摩呼女の聲や朧月　牛行

夏痩のもどらぬ顔や鉢扣　漣月
湖や富士にも一ッけふの月　田福
寒菊や似た身の上の垣隣　、
折時にいたく覺ゆるさくら哉　橙雨
川狩や橋守の子をたらし行　、
鞭提て歸る人あり夏木立　兎望
夕皃や焚よごされし庵の窓　、
どちらから吹も柳の姿かな　麗水
水に添て橋尋るや朧月　三峽
筧水や目に見ぬ秋を汲て居る　、
嵐には逃て行衞や北時雨　佐嵐
花守も折べからずと書添ん　鷺川
笹賣や谷の戸出る節句前　袖鼓
名月やとまりおくれしむら雀　文巴
曲水やわかれても又別れても　尚秀
洛外の物と思はぬさくら哉　秋竹
掛茶屋の出た日は暮る櫻かな　風子

青ざめて爪紅脂さすや若楓　遊女 瓜生野
巣の鳥の初聲おかし軒の松　慶子
わか草や東海道の松の陰　梅幸
膝立て遲き日見るや天の原　鯉長

鰒の毒にあたりて、やうやくにまぬかれたる友のかたへ申やりて、猶もいましむ。

それ見た歟全く鰒の蝶の夢　呑獅

霜月中の比、出口の門付かへて、内外によろづ事さゝのふりけるよろこびを

一陽來復南によりてむめの花　、
雛の狗子を蹴て孳みけり　栖雨
雪消て愛宕は杉も笑ひけり　風羊
鶯や旅だつ朝の右左ッ　帳齋
深草の夏來にけりな花賣等　五紅
稻妻に如來轉しと思ひけり　伏見 鶴英
一りんの無心もいへぬ淺たん哉　斗吟

若竹にとまるやいなや飛ぶほたる　鷺喬
饅汁やよい女房子を持ながら　、
春の夜や女笑はすつくり事　雨谷
一輪に花の波あるぼたん哉　阿空
啼た跡に耳傾けぬほとゝぎす　城北大石施 井ゝ
永き日や何してけふの夕間暮　城南岡牧 聽雨
笋や伏見便りの竹の苞　淀 富葉
蒔て行やうに野道の螽かな　岩田 泉紫
共中に嫁も見られし田植哉　大住 山地
無病なる人寄合つ薬喰　雨均
さや豆に月持添て盗けり　鋤月
奥の院拝み初けり山ざくら　奈良 丸可
早蕨や片山陰にみやこ人　富野 一風
月ばかり直に渡るや大井川　伏見 芦舟
櫻哉四百餘州をあなどらせ　浪花 几掌
いちはやく紅葉に負て入日哉　、
杖とめて大幟きく座頭かな　紋夕

生ぶしや礒家の烟見るがごと　春雨
紅梅や薬となる木とは見へぬ也　播福原 沙月
枕してあるく道あり涼舟　、
ちいさけりやちいさいなりに柳哉　貝錦
寒苦鳥酒呑ふとぞ鳴なめり　、
子二人に見せる一ッの螢かな　徳羽
開帳の札よみ残す寒さ哉　、
たつぷりと旭を請る牡丹かな　毛佛
鳥さしのしる事でなし時鳥　、
時鳥啼や歸帆の朝ぼらけ　嵐方
時晴の雲のうつりや杜若　、
鶯や南の方へ鳴てゆく　蛇谷
生残る罪は深かれはつ櫻　周它
朝寐とは心合けん春の雨　丹波 菫雄
夕立や人走りやむ跡の音　江戸 守愚

多病累年酒量比往日十僅二三

巳矣市に五夕の升あらば　、

鶯や竹に虎より雀より　卯雲

むつかしき要はもたぬ園かな　、

通園の前に笠ぬぐ茶摘哉　江戸 存義

通りよい歟薄の中の秋の風　買明

杣小屋に下駄挽音や鹿の聲　楼川

餅を賑す我又石を愛す也　旨原

大通寺の誕生水にて

うつる代の源清き泉かな　園大

四季

萬歳の子ども追ゆる羽袖哉　太祇

かゝびらのそこらちゞみて晝寐かな

芝居見る後佗しや秋の雨

人心幾度餒を洗けん

、

長橋をつれて回りぬ親雀　嘯山

短夜の富士に明たつ光哉

狸書賛

明ぐれや露ふる城の物の音

鰤一本陳平百に切なせり

右大将重良公、三月廿九日、桂川の漁御覧に成せ給ふ供奉つかふまつりて

追もどせ網に追るゝ魚と春　随古

見歩行てもとの座敷や花の宴

可愛子を人にあづける燕かな

さく花に乗てやふくむ梨の水

馬駕は伊勢の野飼や春の風

けふ限に客殿みせずくれの春

加茂祭の葵かけらるゝ雷除とすなれば

かけ葵冠のあとを軒端かな

是までとおもひ捨けり入梅の菓子

去來が住し紹巴町のやどりは、長松下の藪をへだてゝ、此あたり蚊の名どころ也。

嵐雪が唐の蚊もあり藪やしき

くらき夜に艶なる聲や涼臺

水底の散錢ふんで御祓かな

猪苗代宗匠の家に有けるいせの濱

荻をうつし植て、その秋

荻の脊も二十五の春歟穗に出けり

寐て語る旅の夜寒や障子越

にぎはしや新酒商ふ藏のまへ

鳴子綱しかけて風に渡しけり

鹿の音を指さす山や星の中

唐崎で舟に除遣る月見かな

祖父隨古が千鳥の句に往時を思ふ。

春迄は瀬もかはらずや啼ちどり

時雨た歟けさは絲の尉がひけ

初雪や五題の友の五所

こがらしや宙にぶらりと狸の火

脛高く小性も狩のそなへかな

明和六己丑年五月發行

書林京　室町中立賣上ル
平野屋善兵衛

新みなし栗

上・下

麥水

新虚栗集（上卷）

改正

梅の花天晴春をもてなしけり　嵐鶴公

酒雫かび行餅を山路ならん　華鶯

春唫

勢ヒあり氷消ては瀧津魚　芭蕉翁

此句今までの撰にもれたるよし。但州より告り。

大豆焼て二月の天氣下女博士　花谿

松立て僞リの今朝と成ならん　卓五

人たり男たり春を只居る男たり　女成

釋迦はやり彌陀も遣りいつまでも國の春　農布

一世花よおもひ斯ても飛鳥風　物赤

孫の聲や自ラ老ぬはつ鴉　杜呂

はつ門出我は松より産れしか　湖東 蘭杜

今朝春の海邊齒朶焚クした明し　元吉 素仁

はつ音皆心に對ふ是春か　麥水

梅咲ぬれど檢校どのゝうき世哉　洛 道立

人日

妹がりの河邊出直す若菜哉　琴柳舍 希因

蝶よやなれもはら立ッ日のあらん　千代尼 素園

餅あぶる青公家原の節會哉　丙穴

木草芽立已何せん春の色　其葉

大盞ノ曲世を夕山の花呑む　猿穴

花や世人此あだものに迷ひけん　素椿

よそながらおもふ山家の日や永キ　素連

花や問ハむ春柴に月を負し尉　平業

偶興

水朧魚のむ魚の口避ん　南廾

大船や花散ル世をば知らじかし　我橋

山焼ク夜生憎や月の照リ凄キ　十艸

蜆舟事のやすきと知らじそも　有貫

草の芽や一寸の我翌日を知ル　蝶化

生死ふだん人間知らず花の山　泥夫

花重し三ッ輪くみてし人いかに　女 清嵐

花に飢て風詩す斐枕　梅三

煙景

日渡れる山小松山よす霞　雲和
嶺の梅袖なほざりの日や過ん　梢波
塚あばきたくましく田を返す哉　食人
狩くれて花を朧の街かな　還兎
人常あり海棠我を侵しぬる　魚發
宜ならむ勾引て花の夕ト毎　立絢

月あはれなる夜ありける。

梅が香の誰ソや予室で吹れしな　湖山
けふのみとおもへば花の迅ちりぬ　尼　響夢
日を斜メ日をしさね來んはせすみれ　女　惠舞
鳥はつ音われや人待ッ日の霞　、　歌風
かげろふのあはれ我にもする代也　、　雨橋
春の雨あだにかげろふ小野に過グ　、　梨黄
かげろふの夕日は我に頼まなん　、　久遊
いとふべき日をいとゆふの移リ舞　一水
徒さおのれ厭はん花の日よ　里笑

樊捨て時たのしまむ花の咲ク　六臺
投雛の古びしとのみおもひけり　東以
浮ける鱒水かばかりを方便しな　左貞
人口をしうらなくさくら散にけり　眉彭
梅咲ク日術ミ興す人をみむ　里布
朧月君にしら波おもふ岡　社藤
世を忍ぶ幸の日ぐれや野芹賣　禹井
世にわたる心つくしや蜆取リ　涅町
世のはしや穴住蟬の花最中　花尺
花に吞メ雁金の五人晋ノ七　魚靜

花下十詠

舟を燒て花に後を誰見せふ　越後　漁曰
己レ花の尺蠖よ夙夜は
花美人田樂の刑に咲るかも
生悄や麪車懺ラス花の中
花雲雨蝶王夢やむすびてん
我意花宿世ゆ何を犯してな
常あらば誰欲すてふ花ミタリ

うき世宜花寸陰を競はしむ
頭日々茶花哭の雪を積やらむ
又たぐひ落花の烟茶旗の風

春初

促さん三日の酒に梅の月　大聖寺 八水
餅喰らふ詩人鈍しや神の春　洛 几董
露といふ身も玉の緒よ今朝の春　別府 宮 宙存
世は既に花一輪のおもひ哉　京 中 之丸
燕啼て夜蛇をうつ小家かな　京 蕪村
苗代の澄ぬは世こそ安かりな　水 門 和侯
青柳に智恵得て世こそ安かりし　水 嶋 川芦
翠日の若菜手寄の門田雁追はん　、 梅視
童女やくお菜流しそ小鮎なる　本 吉 亀選
花くれて鬼畜に面をぬがせけん　〃 左京
夢さかしよしや人知レ山ざくら　〃 歌汀
世に足らぬ物こそ花の夕部哉　水 嶋 麥司
高々踏ンで御見る日の何あらん　柏 野 河巣
礒馴松風賢しな春ひさし　〃 麥風

近江路やさくら見に来ル酒舟　松任 宜包
春の月上野の廊下つたひ哉　、 白烏
鶴鴨や故人の衣春を慰ス　、 夫水
白根川の稆の泡くみ小鮎なん　ツルキ 呂尹
あらし吹夜明のきどす蝶はやし　野々市 宇洪

耶須原といふほとりにて

花の雨青氈雨衣に飯ルかな　宮腰 琴市
風吹ケようき花守らじ泪に居む　、 百夫
拵の野のけしきぞ無為の初櫻　大野 浦京
我を見れば人のかたちやすみれ艸　小松 桃方
春小鳥巣になあらでやさそふ原　、 三九
此朧花てふ父の姿にて　、 魚笋
我世是菜の花盛リ出るのみ　、 蒲之

梅疲テ而秀石ハ醜ニクウノ而文アヤアリ

花寂ッ坐ハ龐居士が暘に似し　獅山 麥仙

虎畫テ不レ就ナラ還テ類ス狗

僕拙ク花にこけたる豆腐哉　漁好
桃晩花老女が陶やしほむらむ　〃 伎倍 如雲

後園

しれ者よ編笠着たる茶摘唄　山中會 蘇月
さくら咲ク世に腹たつる人あらん、大聖寺 不尤
裏道や花にほこりて花茨、甘谷
日和峠ぬるめ溜水人不レ去ラ、水文亭 友巴
世に不測なし盆のくわゐの動ク哉、加水
木曾に馴て春を寐餘ル野守が家、趙人
水緑ッなり春を流るゝ白根川、東岸
春簗や渦潜る魚の光ッ合セ、野水
百花鳥翁やひとり岩をうつ、呉天
花に醉て鄙なく巖の山鴉、史雄
心など烏朧を啼しより、何山
さらばひし老骸春になれ衣　柿陰舍 紫狐

光陰何ものぞ

三千とせになるてふ桃の昨日かは　金澤 驪堯
しらけ見ゆ花にぞ悲し妹狩夜　燕市
幽棲や天晴白キ春の月　北虹
去りし佛老人年をいふ涙　谷阿

原の水蛙鳴すむひるの風　白良

亭ニ負春色ニ

花を寐ば治世の糧を侵すめり　八何
於落花踏しだく人や道にうとき　枕水
わぶとなく花の非人と笑ふかな　柴扉
老よ掘レ野老にいつの富得しな　其夕
つばな摘鞍馬の兒の姓問はん　遊輪
獨活折し甲斐こそあめれ櫻鯛　芦敷
予は綾を重ねて寒ししどみ取ッ　柳翠

欄干の一望、おもふ事あり。

歸ル雁むべ心だも我に似し　僧 蘭慮
干鰈ミミ月あらぬ日は花あかみ　二夕
片蝶の佗らんなげにあらし吹　路扇
世や花の色は色てし我知らめ　市川
鶯句へり我よき人に交ッたき　其筵
蓜を啄去ル雁のこゝろせむ　楚江
昏の夜をうつの山邊に寐たき哉　二笑
さりにしや枕における春の月　一鴻

日のくれや親仁酒のむ桃の下　曲々齋

權現の赤松原や若みどり　峨水

行あたり弱けに落る夜の虻　流光

花にいざといふ人もなし旅の宿は　やさと

汀の女に道を問ふ。

磯菜摘奈胡のてこなのうら若キ　翁路

身やうかり商人多ク殘ル花　蓬臥

磨するて野鳥昏來るあすの聲　越鴻

櫻燒て山に招かざる客三人　霞亭

見ルや此一夜當千の春の戀　丸々

我鬢の春を黒げよ杉すがた　爲鈍

古戰歎歎目花樓に衣着ル　蒼梧

酒債乞顔諷に小ぶしあり野山吹　以文

さくら盡て汝が歸雁我なみだ　野曰

野や寒み苗代茱萸の新なる　求古

花のやまうつゝなや誰ツよくみべく　東門

春宮怨

花さま〴〵燃えて雨夜の夢長し　趙丈

題詠八句 春宮怨

守宮血猶あり人來とは鳥のそゞろなる　沒後追 木蘭

花亂散ッて塵欄にみつおもひ　生佛

梨花雨慘タリ鏡裏むなしく春老ん　總友

紅閨剪レ灯徒梅が香を抱キ臥ス　魯文

絲哀レ宮中花に和すあらん　五帛

帳洩レて花妬キ面四十也　山父

桃李不レ言待夜明行玉すだれ　百非

琴を抛ッて朧夜鴉我に迫る　志慶

題詠二章 春山

伐木丁々たり嗟心せよ山昏也　守大

花を樵ル僧却て酒を禁ずるや　二柳

仝五句 覽古

いで其瓦買はん飛鳥の野老掘　おなじく

人いづこ空しく志賀のさくらせり　魯文

漁夫に問へば風鎖す須磨の關　弄哦

礎霜成セリ猿に世々の荒問はん　有鳳

佛蟹に殘ル風に偃す声の花　百非

寓意

田螺とり貧い賤や安からむ　金城 雲川
かき曇る春雨鳥の諏訪はむ　汝麥
松青し志賀の三月嵐寐ん　如芳
帳深し幕や雛子の色に舞　一阜
梅白ク水すむ池をめぐるかな　松葉
蜆舟童(ワラハ)娟(カホヨ)クいとなめり　蘭江
春雨穿チ壁のみや徒(タヾ)に世の情(コヽロ)　吾角
春の野や宮女捨身の世を持チ　一依
日うらゝか桑麻說(トキ)合ふ髮黃也　水石
雁飯リ渺として無絃の琴を搔　丙穴
並松やむさし野の人と雲雀聞ク　社藤
蝶や飛君御幸なんうすつく日　女 歌風
梨の花月薄ミつよ斐をのこ　ミ 惠舞
它(ヒト)に問へば小家に咲て花瘦し　女成
魚羊我を名に諷ふ花のもと　鮮明
柳綠リ老女あやしの小謠唄(ウタ)　我橋
蕨折ル誰世はかくの身にくれし　滑北

人事皆夕かげろふと並びける　十卄
牧僮土笛含む朧日よ　八水
鷄潜(クヾ)る米庫人和し桃盛ル　卄谷
面瘦(ヤセ)し孤婦の吟ふ朧月　三笑連 池水
長生は瘦たる獨活に限るかも　漁好
他の爲に花見る顏ぞ哀なり　奚仙
月明クさくらもる夜や誰姿々　高岡 馬丈
陽に向ヒ老らく端山寐てもみむ　所口 南路
雁は行落花の雨よ我不レ死(シナ)　九江層 栗郭
あらましの世ならず蜂の巢作(ナシ)し　滑川 世卿
春三月けふや蛙の何得てん　仝 良明
消(ケ)なば消なん有らばあらなむ雪二月　仝 樂水
蛙聞て殆ンド丸寐せし夜かな　魚津 蘭夫
うき世かくあめれ蛙只鳴あかす哉　琴市
何見てや中に春中の乾(ヒル)蛙　長坂 寄耿
蝶むぐら廬(カワ)家(イヘ)ほとり立舞はむ　之丸
谷の田や若苗衣おくび形　中河內 後彫
道切ッて菜種の中へいたち哉　仝 柳卜

茶店穢レ壁ニ山吹うつる水呑ん　蘭杜
清キ口や白魚浮カば妙ならむ　川芦

閑庭

すは寐覚花に鬼女たり世に清し　元吉浦連 素仁
朧夜になきや寐てし志シ　斜獨
雨わくらは海雲老女の聲澄し　夏静
雁しばく誰江上の春明し　歌汀
藤の下に賤や夕部の齢知る　杜得
白魚の耍を篩の夜や果む　宜訪
早わらびを雨縣賣る聲清し　三谷改 芝水
斐なきに街春風春聞ふ　白虎洞 芦仙
縦他たづきに花の肘白し　暁鐘菴 蓬渚

話中の興を述ぶ。

月西ニ海おぼろ口下遠し　素仁
背興を乗セ薊北ノ櫻　宜訪
歸レ去來雁徐の聲だみて　芝青

筆朗き薄様を執ル　歌汀
世を樵ぬ夏山主のやまと琴　和佼
屯空しく白砂岸を蔭　夏静
口や剥る神にな名残ル忘レ水　素宿
奥の稚よ乳を泣ル娃　芦仙
文悪に綾のそゞろを思ひきや　芝水
雫に亂てあなおほをそ鳥　古角
閑寒し辛き骸や誓ふらめ　進山
さは瀧津雄のうたかたを經　價石
ましら啼月よ仰む風白ミ　馬勃
黎民たり砧五斗越ス甘　子敬
夢化し秋玉簾のはげしかれ　菊呂
さしも波濤よ何樋て鳴　蓬渚
就レ中ン一向花の陰リやは　訪
瓢寂さに翠なし彈　仁
春やむかしはだ衣晩し手束弓　汀
雨の旅行を叩ク橋立　青
風狂なば千々に名を乞捨野郎　敬

情世上の羽車を押ス　　宿

槇ふかく新羅訪日のをしかりき　　静

價燈のくつみてし宦　　水

あなめふる袖に衛のくれ皈リ　　仙

浦や漣鏡照ル幣　　山

よしや只無爲に天みつ雫せん　　石

木槿を黒ク僞や咲ク　　勃

鯷漬深山へけふの無事與ル　　角

有明に吹脛を悲歎ス　　攸

柯を採て古葉拍降る頃はやに　　仁

彼生親男の君命を擧ゲ　　呂

木綿襷曉不二の鈴淋し　　青

羊いにしを猶勾引らん　　静

花に東上天の香ほのかに遠し　　仙

几に興を乘す江南ノ梅　　渚

改夏

我何人不レ知我を鳴ものは子規　　晋子

前卷に出ヅといへども、氣凱を感じて又爰に乘す。

さみだれの降リはじめける哉桃の花　　小松　子皐

山瀉や止觀に夏の夕あらし　　仝　野ト

朝皃の調ならへりなゆふ薫る　　仝　狐千

一瓢の酒我曉キやほとゝぎす　　紫狐

あぶら木の花散ル下の番茶哉　　八水

朝風や栗の咲間の甘臭キ　　不尤

四ツ時のけしき也けり夏衣　　友巴

散ル牡丹一ト日二タ日は拾ひけり　　趙人

竹婦人夢に來ル美女妬ますや　　几董

蝦蟆と化して夏日荷葉に撃ン　　仝

彩翡翠いさら江盡セ我不レ去ラ　　八水

蜘の子やおの〳〵巧持去らむ　　麥水

蜘の子や共夜心のあらざるか　　素仁

あつき日やあから栢葉の風すけな　　之丸

行船や蕁うら照る波日陰　　麥仙

塩-衣夏のうき見る浦邊哉　漁好
浦-人心な藻の花も刈たぐりしよ　如雲
子規親の恩こそ知られけり　池水
哀レ鵜-舟浪のたゞれに火の移リ　如水
ほとゝぎす鳴音にすがた眼にうかぶ　江州八幡 十卯
うと〳〵と麻-刈ル嫗せこなきや　仝 可昌
子規君があぢ酒富ム一夜　洛 斗醉
いさな給へ玉江の藻-艸刈てみむ　仝 女 とみ

山行

啼(ナケ)慈-悲-心我鳥にだもしかずけり　漁日
蜀-魂波の松-影くれにける　宙存
うき世蟬まぼろし誰と身を暮ね　栗郭
おぼつかなくらぶの蝸-牛誰ガ山居　和佼
いたづらに夜を貪る世我すゞみ　福富 昆石
青梅や捧-心の人垣を間(ヘダツ)　蕪村
氷-室得て皮の衣のしほれみし　素連
水芭-蕉羅(ウスモノ)の女化し見む　燕市
日うすつく道-遙ことに家牡丹　う曉

獅山に寓(ヤドル)　此ノ地往昔作獅子の靈有テ、異民に祟ル。依ツテ是を埋メし所の山なりト云。

木獅-子の沈て氣-澄ム夏-夜哉　麥水
雨古-葉打椎花のとき　姿仙
音-堅ク坐-隱の二叟拱(コマヌイ)て　漁好
あらし遙のことぶきを抱(ダク)　池水
月-圓(マドカ)世を曳磯の舟欸-乃　如雲
蕣の夜-半(ヨナカ)あやにくを解　如水

守ル二小-屋ヲ一

黄-昏ル老の日媚ヨ小-笋　物赤
椎の花物の輕きを斯經(フ)らし　有貢
命思へ火ぶりの魚の闇-踏飛　班車
螢-飛貧を妨グは此-窓ぞ　馬骨
鹿の子影かくすばせをの哀レ哉　霞亭
いざ牡丹菴(ヘトニラ)に書酒-買ハン　貴川
乙-女等が小-櫛幾-日のあやめ艸　里布
葵-祭リ爭ひもなき日-南哉　牛司

おのれ打小あらし奇なり夏夜月　枕水
卯の花の色誰魂を喚つらん　葦雪
若キ人に嫩葉見せて試みん　仝
牡丹生ケて扇ひらかん日を得しな　三枝
白河のいとこ迅去ねかんこ鳥　左貞

所〻のならはし

麥よみす女や一聲の歌を刈ル　茂陵
小つばめの餌に味見てん〻巣立　女 久遊
蟬小聲姿と聞世我をかし　車萩

病後廬にあるの久しきをおもふ。

世なりけり經リ行夕日守ル水鷄　車萩
さみだれ結るさゞれ盞　茂陵
市に掛秋を荳中の窄からお物　赤
小女賢ク綿を副歌　女 久遊
狹莚の心斐しく月古に　陵
身を避る舟明日を䗛ッ　萩

ウ

おもひ出ぬやは唐土を紗簑吹　遊
ほそり薄の穗のすがる戀　赤
强すあかつき君が拈藻髮　萩
貧しく幣に年を經る粟　陵
西行がつれ〲憎ミ呼びし鳥　遊
世にこぼれたる一日の露　赤
汝を吹美濃の青野の月白し　萩
遠地鶉なむ秋を耕ス　遊
杵歌や御衣の子よ瘦　赤
いつしら波の有爲をたそがる　萩
花に我たのむ嵐も興ならむ　遊
春湖の脯かすかみをおぼゆ　赤

二

街さす漁夫がすて棹捨雉子　萩
漂零の長短謗を假ル　陵
戀坊や意を飾ル日のくらき　赤
忙たき宿の雨を繾綣　遊
吳竹の蜘蛛小風私語引　萩
琵琶曉キいうき魂を籤ル　陵

偖餓鬼や花の牡丹に踟蹰　赤
現芥の六原を泣ク　萩
よしせめてむかしの石を掌ロ　遊
今夥かへる月の忘レ井　陵
風狂ふや松露結ぶ年をなみ　萩
蝶ゝ秋の巾をかけろふ　赤
網代遊にいづれの腹や白からん　陵
呼朝三の煙ル狙公　遊
求得るうるまの菓世をうかれ　萩
日を北賣らん彼是の市　赤
蕎麥なら茶花や礬を盛るらん　陵
浴重ねて春の衣ス　遊

惜レ花不レ掃レ地ヲ晉子が題に取し
に予は、好レ酒ヲ不レ撰レ肴ヲし
饗守り忘り斷キ水夷臭し　夢楽

夏與

卯の花や見らく心にうつるべき　杜乙
肉に飽クけふを牡丹に嬖むらん　梨京
身の行衛誰ソ我追はん蚊遣たつ　山父
これや是非の嵐なき破る聲の蟬　丸ゝ
同じ世の夕部を奪ふ蚊喰鳥　白虹
苗代の鳥追ふ老の薄てゞら　琴市
小笹原風薫ルとて蜘蛛見セッ　噺昔
牡丹花幾日あたなき日に綳や　魚列
火串さす戀路の鹿の子に闇し　蘭如
けふを世の事たる芭蕉菩惡なき　路扇
洪水に巢有ルカさけぶかいつぶり　山中 芦雄

樗庵主白蒲戯を造　南京ノ将棊也印本廿ニアリ
予是を好む。局中に鷺・鯉・亀の三渡あり。此に楽しみて夏日の永キを忘る。

初渡　鷺
色白な瘦河ごしと九十川　吉谷子 桃市

二渡　鯉

琴高に乘味間はん皐月水　仝

三渡記

夕立や頷下の珠の命還　仝

近里

薯蕷ふとき越の小郷に夏したき　十卄
苫清水猿に肝かる夕ベ哉　八目
賣つきん世や此命虱肥えよ　可耕
我を舊ル世のさくら麻生ヒ佗ん　立甸
空蟬やうき世の塵を拂ふ風　珉水
蝸牛我友ならめよく來れ　虎束
野に歸れまりこ貧しき夏の宿　如意里
世は何にたづさはり行五月雨ぞ　馬蘭
住よしの踊や老のはじめなる　小々雄
孑孑虫おのれ世經ッぬ水荷ひ　趙丈
如斯ならば空蟬いつの名にあらん　二翠
水端や西日薄めり鵜舟漕　三枝
近江人と名殘ル岐や蚊やりたつ　左貞
木曾路行て胡蝶あはれや夏の石　馬蘭

旅硯世や曉の眞瓜畑　芝青
我はなど世は篁か夏の暮　野水
蚊屋を出て坐ス曉のあらし哉　昆石

題詠　採蓮四句

芙蓉脛高し楊家の女年及ばず　生佛
花を攀花や芙蓉のたはれ舟　龜友
荷池に遊ぶ此日茂叔が妻召ん　李康
蓮傾て露盛粧の妹に垂ル　秋屋

仝　苦熱三句

世の熱を倦ム予が腸を喰ヘ蠅　老山
群牛暑を負て涎輪なせり烏羽竹田　有鳳
つとめよや豹枕つとめよや竹奴　龜友

郊外感アリ　二句

昧盈り岡に蔓る瓜の濡　八水
おとろひや己に剛き鵜の競ひ　仝

田家眺望　有二所思一

孤よ青田江を裂小竹棒　不尤
空清し舟何大古星螢　大聖寺 柳下

化文に夕良告し裏の道　二柚
我は世のむべ面あかでかんこ鳥　呉天
篁くまける山の東さす　史雄
雨に聞夜ほとゝぎす汝を光　梅三
萍の世をくねる夜の月鴉　女升
白勝ず紅負ず夕牡丹　大魯
太液や嶋原小野の湯屋蓮　玉壺
狂歌坊世は蚊のどし草に眠　吾角
身は筏或ほとゝぎす月夜押　鮮明
世は誠艾虎戴く子や父や　桐江
薫我竹いさぎよく夏の聲　仙夫
朝日さすや小枝の蛙青山椒　九峰
渚淺鳥魚喰ふあつさ哉　水角
熊野歩よかれら五郡の百合をみむ　會呂
螢火や光の間四尺斗なる　丙穴

しられに禪定す。導く僧に戯れて

雷鳥は不知日は白山の夏を鳴　二翠
騷人雲を踏ンで涼まん　巫三
松荆千代經や國の器　南畝
みどり水晶髯を振ひし　杜呂
かばかりの我相遲々にめでし月　呂宙
左らば照射の業秋來ぬ　翠
朝ざれや雫潜鴨の是非問ン　呂
きのふをうつゝ玉垂と見し　三
いふならく奈落をさへに岐照　畝
唄はれ給ふ戀よ否星　翠
文字摺の媚納言坐佗　宙
さな葛城の標賣けむ　三
巨々等人よし純陽の桑に寄　呂
月隱井にかくれなす布　畝
掌の轉す從者の風情にて　三
身を大盃に言仰象　宙
花流す蘭亭の日に然すがも　翠

枝-折山-吹陰-山の簾　呂
イ-々と世を麗けに痩僧-都　畝
塩三斤を瓢-箪に入レ　三
物-非なり鞍に胡-坐の松-島や　宙
父呼-子-鳥風を呑む　畝
榾の闘漢-子二-十の肌をみし　呂
錢曙に神の習をなす　翠
酸ク辛ク酒-嚔を瑞-籬に　、
鎧を隠す正の弱-女　呂
頼めてし泪を袖にはふる哉　三
文を孕る鯉を切けり　、
吁-迷ヒ月の主水と朽ぬらん　宙
風寸陰に換る朝-貞　畝
ウ
樹-ゝ化して露を寂せる狐-山　翠
一ト夜沙-馬-大-刺香を衒フ泊　呂
賣らんとて浮世のたはけ發句撰ル　畝
氣-凱開ケて宗-鑑を飽ク　翠
花-々たり笑-去レそしれ熟ク寐む　三
香漂-泊の蛙聲なき　宙

新虛栗　上卷終

予ことし撰集半バにして、浪華に遊ぶ。浪華の風友敎へ一詞あり。依テ附言に類して、聊ノ多景を爰に載す。

晋子いふ、〽風よ世に拾はれぬみなし栗　むべひろへる人稀なるが、爰に是を拾ひ得て玉なりとするものは金城の樗庵主人乎。この頃智萠京攝の間に携へ来りて、やゝ其實をうつし植んとす也。予曰、風土いさゝか載ざる所あらんか。君先ヅ試にいへ、吾はた試に和せむ。和せむとして熟〻其書を閲するに、四味たゞ眼に苦ッ耳に苦し。なほ李杜も心-酒舌-嘗る事あたはず、寒山が法-粥口すゝりがたし。されば霜-鼎火-乏うして何熟せず、龍泉水濁りて文字鈍し。熟せず鈍きまゝに一卷成れり。さて新みあるべきならねば、こなた礎として梓にものし、新みなし栗と題せむといふ。夫-是菓のみなしぐりにして、菓に拾ふものなからむか。

浪華　二柳主人書

再會

山河三とせ霜葉玉を埋ミぬる　二柳
胡馬冬忘る風の陽　樗庵
あざけらく弓取世にや無キならむ　仝
人不レ住なりて家いくそばく　柳
槐枝たれて夜ルヽ月を雨ラス　ゝ
秋庭の記を半にし捨ツ　庵

ウ

さむけきや寸ン坊側の團扇裂　ゝ
雪は吾君のうき戀を打　柳
梅紅ク衣に蘭麝を手折けん　ゝ
哭の國二十年の陽炎　庵
酸暖氣吹送リてん春霞　仝
水や朝日の魚のたのしみ　柳
賢らに檜垣の女貧に富メり　ゝ
風呂敷露を打はおる道　庵
小家中の弧に鳥のさわぐ月　仝
秋聲森に供フ牲　柳
よき娘持ぬる児花と守て　ゝ
悪筆千束田舎氣を春　庵
蟪の背に灯星蒂ッ謡樣や　仝
驛浴ミ涼風を抱ク　柳
雲を燒ク斜陽西湖の浪に屬　ゝ
鐘遙けき石門に鳴ル　庵
錢投て瑞知ル手もと遠ク　仝
呑待遊女おのれ燕　柳
靡媚て琴よく人の雲を留　ゝ
木曾の朝寐と指さゝるなる　庵
秋蝿の遁心さます群リに　仝
蔦明月の窓を妨グ　柳
盞の黄花琥珀の影や凝　ゝ
七賢橋の嘯を獵　庵

ウ

虎の子をうき世にたとふ誰やらん　仝
撰集すでに羇旅の部を責ム　柳
槙の戸の透間星射る小夜更て　ゝ
南朝四百鐘樹ミを讓　庵
吟滿て貞享の花けふに暎じ　仝

安永ことし後の盗人　柳

二柳菴月次席

霜朝ぼらけ干潟の岸に凪す　秋屋
寒鷺一寸の魚を漁る　二柳
詩を眠る摩詰が童ハ側ラに　三曉
是に凝ル富の秋を白かる　有鳳
桑の木の荒なる月の徒ラや　李康
孝著き笠に雫さむ　弄哦
ましら鳴て姫腸に繍す　生佛
星良暗ク項羽を怨む　龜友
沽盡す世を江東の曝あらし　魯文
芦みだれ葉の細道を折ル　百非
衣〳〵の遲かる履に鞭タン　守大
苦藏人となぶられにけり　麥水
酒しらけ予を取圍ミ簾透ク　魚笋
悉のあらしに神渡ル月　屋
這槻の秋水鐙ぬるゝ哉　哦
腰刀鑄年魚を貪る　佛
訣ラはず乾坤よく我花を納ル　友
纔か十歩の小田の代かく　文

二

山を卷霞孤村の名を埋ム　康
松浦出船の潜なる舞　大
布太キしろたへ衣やよむかし　曉
戀闇思君の黑髮を剃　非
とても卿已に離行蓬生を　屋
御狩の皷ミ富士に魅ス　春
きえがての下の三日月下長屋　哦
異鄕の秋に十年身埋ル　屋
青天におのれ文字なす雁や文　柳
媚心なの夕ぐれを視ル　鳳
小鍋などあなや院の樂に耽　水
佐夜更ケ深雪松風を呑ム　曉

ウ

葛城や高間の仕業しもといふ　笋
加持狂亂の唄に及ス　康
斑鳩の聲夢殿に明しらむ　大

百済新羅の技見る春　柳
花捧寶ひらくる筆こゝに　水
何みなし栗實生葉　筆

漫興

佗禪師乾鮭に白頭の吟を彫　蕪村
小夜の霜夢の故人を逐てり　大魯

恐是五侯家ナラン

誰門ぞ雪に寐ぬ夜の魚の骨　晋明
わざくれの夜月しぐるゝ捨河邊　樗庵

樗庵主飯郷ニ

此叟歸レ郷ニ夜雨燭の火を焚思ひ　秋屋

全

雪はえや寒驢策たん灘の陽　生佛

（新虚栗集　下巻）

改秋

胡鬼の實の吹物梳にすはりけり　北枝
頬返しの成らぬほど柿喰ふ猿を笑はせん　乙由

此句山中集に見ゆ。調の違をいとふか。麥林集にはみえず。

何に吹て此あはれ添ふる秋の風　麥水
秋たつや古人をはかり夜をはかり　之丸

七箇の水にもの書さて

寐てさめて化待一ト夜やつれ星　不尤
うつろひ衣春よかさん秋　加水
人知らぬ思ひを休ふ蟋蟀に　甘谷
大進露を闕思ひ消し聲　八水
坐蔦に白しな月を遠恨ミ　何山
魚醤に沖ッ船のかこてる　柳下

ウ
債酒何妻帑に謀リ喰ふべき　友巴
　朱練の狐簺に戀寄リ　紫狐
みぞれ降ル足羽の宮の可愛しく　女 友子
　乞食常盤のうき寐見るめり　二柚
荊いつ斐十寸鏡磨グ日は　呉天
　黄金吉原ノ鑄ニ名月ヲ　東岸
はつ雛の媚文盲の俎板や　趙人
　霧吹味ミ富たはれけり　野水
春曙ほの西行が戀哥撰ル　史雄
　小女哲七種を汲ム　尤
花に身のねたしとて世を化粧す　加
　天下繡糊の香に過　谷
二
僧正に御私ありし終夜ラ　八
　郭公武士しのび音に召ス　山
かくれ蓑垣間卯の花窄かりて　下
　いづれ眼善悪のなきはなきかに　巴
興そげて三野に下ォ笙鼓　狐
　日東ノ東施何倣袖　天

加賀笠の雪の白キに菊もこそ　柚
　有らんの雪ながし目を引ク　友
髭黑の雁妹がりにあざる月　八
　ひぞりを力ム錦島臺　人
他語をもどき風流者の梅の名に　野
　籠城茶旗の美をほだしつる　雄
ウ
質掠や粉首ちくなほれて見ん　尤
　蛩あまざかる鄙びこゝろね　如
髩織入ル羅繻血を致ォ　谷
　天神護ニ戀ノ卷ヲ　八
花咲リ人鶯の舌なきや　巴
　第五の御輦むつの山吹　狐
あさがほや何を眞葢の非をてらひ　物赤
　早吹かさのみ心は秋にあらぬ　社藤
松虫のはつ夜まだきに小風そふ　女 久遊
　蜩の日をいたづらのうき世かは　雨調

けふを世にうき朝良の淺クみん　六童

なでおもふ身をや朝顏の花の露　池水

稲妻を見ば眵をとぢて見よ　梨京

思ふ事あり。

星やいかに去年の七夕扨近し　やさと

乘ず龍の鳴ルてふ天の河祝ヒ　素仁

おもなるやおさなばたのうながせる玉の五ッ丸のはや戀心ね申けるに

戀ノ字引

やよ願ふ糸よく言(コト)をメ(シム)こゝろ　一草亭素蓮

偶意

いつの日の求めし芭蕉欺か　吳侯

むつかしの世を朝顏の花笑(ヱ)まん　巨卯

稲妻をかろんずる世の斛哉　白烏

よき日なり芙蓉の庭の尼法師　おなじく

孟過や寐火に切籠を燈し捨　八水

三(ツ)四(ヨ)山を茸の僕と狂ひけん　不尤

雁しば〳〵寐覺や夢を裂(サク)刀　委仙

武さしのや日ぶたに餘ル月滿夜　漁好

明月のあゆみ我齡さこそ經め　友巴

背に耽る人のうとみし鯛よ　婦人清嵐

あはれ荅えじ世と我と秋の風立し　馬蘭

芙蓉吹ヶ胸に古今の勾(カドヒ)見む　卓五

人並ミの飯や朝良を見に起て　馬丈

山の尾故(モト)村の平吾がもとへ、鹿の鳴を聞に行て

人も訪ふ訪よ神(コウミ)の鹿の聲　子皐

やすかたの秋を居に見ん月かたし　二翠

意やあらみ世を苅萱の鄙手經る　巫山

廿日あまり聲干ン虫の如是聞ん　呂宙

狂はしき人にな合ン風の律　南畝

扨し魂換(カユ)や小鹿のやどの暮　十卄

感懐

鮎よ鮎日の蹉跎くれし雨早風　仝
秋月髪にかゝる身を照ル　麥水
窓盖ふ九尺の紫苑香に闌て　女成
はたゝ藥の理を忘れつる　卄
世をうたふ腹海を作ス響ぞや　水
やは木枯の年波をみる　成
神撫ル恨ミ淺茅生朝日影　卄
待従心の後家さだむかに　水
をかしみの得こそは戀を衣にかへ　成
足柄の酒松風吹り　卄
幻シの伊豆の小島ぞ多かめる　水
所作幾春の臼剛ル劍　八日
朱あらむ眼天漢の月はかる　卄
五丁丈秋飛孤鴉の聲　、
あなかまし修羅王祭ル房薄　目
露置かたの夕陰を迫　水
梓の歌みそぢの花の儀を緣に　成
めつら耻たる呉下のきさらぎ　仝
日や昏に干よくまねき返せしは　卄
堀の座頭へ落し上古　水
今や日怪異を肴ものとせん　日

郊外

杖も折レよよし此命此花野　布卩
月やむかし志賀に酒造のなき世有リ　有貢
いとせめて風さかしみの下紅葉　梨京

越後ノ行路難　駒返リにて

老馬いつ烁且夕に往來臥や　車萩
秋の蝶こゝろも低う成ぬるや　奥州聖浦 里桂
拙さの此身鳴らさん聲鰍　（了カ）う曉
蝶ぞよき心の秋雨戰ひし　浣古
老てちから又耻かしさ衣がへ　浪華 鳥和
何をなんのかれ鳴秋月夜鹿　嶺花
朝暮に露適哀レ艸の莖　雲和
草の實の露を幾世の罪なるか　花尺

身をつめばおくれやはせじ綿-取女　瓜云
秋の野を食へばぞ人の哀ならん　里山
世の戯レ人やは紅-葉廿日なる　湖山
柿-澁ク夕日にのこる市女哉　琴市
濁-酒一-器已レあはれむ隣かな　三九
時-來るや水のさすらふさび鮎ぞ　里笑
鳴-鹿にこやたのしるべ舍リける　之丸
うき我に礁うて今は又（原注）休やみね　蕪村

題詠　擣衣三句　秋中五句

擣-衣音なし半-窓娥-媚の月に寐ず　李康
礁小-夜更て魂は故-郷の閨に臥ス　直墨
夜々夫に凝レル涙を今や礁セリ　水稜
𥿻-去らんとして艸々露の珠を泣　乔琢
草-秋更て歌-舞の地露を夢に置ク　生佛
蝶しばし叢-菊の一夜をくねるらん　杜虹
艸花をして此虫周ガ魂を嬌　魯文
桑-木軒に朽て草-徒ラに錦なす　魚波

夜望

高燈-籠彼-南誰家を泣すらん　東門
黄ム一葉殘リも落ン世は斯カクぞ　朱ツル絃キ

山中醫王密寺に蟠龍石と傳ふ水盤あり。いさあやしむに絶タヘたり。まことや深山大澤龍蛇を生ずと。

龍臥石臥雲曳起る幾-秋ぞ　漁臼

おなじ心な

雲分雨分いづれ蟠-龍の秋に遇アフ　八水
洞臥-猪うかれ出けめ花-野床　大聖寺女友子
小夜ゆかし青-柿落て杳の音　、歌夕
いざや刀トツ-士芙-蓉の日-陰なるべけれ　呉天
無-下の媚徒タヽ-空-藤を吹-薄キ　史雄
意不レ倦ウマ絲-瓜のひとつ長フトリ哉　何山
竹-裏遷サノレ道ツ秋-風我を泣-更し　如水
沾ウルレ舊ツみの虫が家の月-夜哉　野水
うき女メ夜の月畑うたん婆かは　蘢文
歸ル雁何ぞと見てし物-聞はん　鴉邨
聲-雁や我美ミ-目メを鳴ク窓の竹　蕪市

月けふや僞りの風情過たらん　南畝

月艸や是非を岩手の山しのぶ　巫三

中秋無月

十六夜に天晴月とも露命　宙存

菊　三吟

菊よ〳〵人白玉を盡さんに　呉天

たばこにと思ひつかれて痩菊ぞ　二杣

菊が申ス酒の日に着せ綿所か　趙人

美濃柿の澁な喰らひそ俳門　几董

長崎に遊びし日、故ありて紅毛館に入ル。出島ノ塞に、ヘトルノ役アルメナチルト　と宴する事ありし。其日は文月の十五日也。宵の月甚ダ明カなりし。

いざたまへ家名月と興ずべき　樗庵

太宰府ノ聖廟

神寂や秋蟬我にいしばりす　仝

菊萱の關のあさ

秋霜の威や今さらにはつかなる　仝

聲なきを蜻蛉無念に見ゆる哉　可昌

おもひ入レば夜の白菊我魂か　蘭杜

蓼の穗の色づくもあるを紫蘇の秋　道立

倣ニ老杜破屋歌ニ

野分の夕べ盜人我を欺くや　晋明

所思

宗祇我を繼ふ夜眉毛に月の露を貫　蕪村

自得

他に慕らず秋風我に瞎勇ル　元浦連　文睡

芦毎に慕ルあらしや捨澤邊　元吉古艸洞　子敬

鹿追ん薄月凄キ世中なる　芝水

徒に鳴ル猿や霜夜北の海　歌汀

雲飛で黄艸穿ツ雁の聲　芝青

誰かあらぬ目かれん菊の露に起　女　いへ

浮雲のうしや玉垣忍ぶ艸　なへ

斐すらん雁やよすがのうら心　いよ

さもふるゝ身に見するかは月明し　素宿

裏枯のうらなまだきに化世咲ク　夏靜
露けしやよく聞ば蟬の聲なりし　露頂
是も布是も布なる夜寒哉　夜不閑
夕なく否言喰ふ稻舟や　梅三
二星疎しが忍妻に樣見む　梅筎
一葉落人情の巧ミ我やなす　徒丸

歌僊

唐がらし秋の一味をつのる我　龜選
向上爰に小路なき月　楞庵
今や入鹿聲に臺築キぬる　文睡
離宦いとこの綸を好ム常　和佼
笑ふべし囊中酒に敵せざる　左京
冬ざれやすく湖を歷ス　梅筎
誰をまつ何がしのさま何に似ツ　徒丸
戀夕ぐるま下習夢を臥ス　選
臥柴の樵木叮なる文惡に　庵

楞したゝる愛あらしせり　睡
宗をなじる老尼の小舌果せしや　佼
いづれ寐ぬ夜半無下の一燈　京
世を憤る昨日の離情略空し　丸
秋風手船鈎敲ク興　庵
石暑し西施や月の眉ならん　選
止事なき胤雫に孕る　佼
開ケなん華山の陰の笠に　筎
火焚ぬ今日を巣の鴻や知る　庵
流寄ル木に眦妻遮那を畫ク朧　睡
布衣七十の寂鬚を震リ　京
亢言や傾里の假事是になせる　筎
弦斷しかば化醒る醉　選
五月雨に千珠投入レて拳張ル　佼
豪氣をふるひ筆を染む誰ソ　丸
愴むべし配所の御所地木摸リ能　庵
百畝熱して長初メ笑ム　睡
月吹や天地五日の夕されば　京

馬蹄ぞかろき小鷹狩召ス　丸
こもよ君柴結ひし年若ク　選
雅僧つかれてかへりみるふさ　睡
塩ウ粥の幾野のやどりから風呂に　佼
思ひはなさじ知已したし逢　丸
祕事蒙り歌舞一流のかたぎ也　筎
故郷かはれり七年の春　京
鳥トリありとのみやは花の向上路　庵
東トウ行西カウ行する日意味慕る蝶　選

上冬

僧は歸るさらへの道や初しぐれ　麥林

手づからしぐれの傘取て、塔頭を
みめぐりし

病僧よ誰が誠より小重箱　僧 無笛
木がらしや身は消がての乞食ども　女成
面なしや落葉見ゆ日の命ある　東門

しぐるゝを盜まれ行か猫の聲　如芳
雲計る世やはしぐれを人になせ　世卿
雪はものゝ年や蹉跎たり世の哀レ　竟胡
しぐるゝ夜さなさまよはん孤ッ鳥　漁好
名の立し火燵侘しき世捨衣　如水
黑鴨のあなかつ世とは成にけん　姿仙
鳴千鳥夜更し水のこゝろ哉　之丸
落葉かく賤の心や深からめ　女 左柳
むかし其佛が原や雪滿る　、雨調
鷺のさま心の戀をだまく夜　、梨黄
衣手に蕎麥湯杓たるあらし哉　白烏
町しぐれ洛中にいたれば故人なし　大魯
夢飛で魂埋む夜の雪　道立
客舶無レ酒風人を見る堤　洛 美角

舟行

夢を裂ク淡路の千鳥紀の月夜　二柳

宮怨

輦路生レ艸ノいつしか氷る轍ワダチ哉　八水

山茶花や院の籠に咲ひてし　甘谷
落-葉見て枯-果し身の安キ哉　柳下
あじろ守彼やは一ッに夜-明なん　世卿
かん苦鳥吾に向ふてな鳴ともへば　樂水
狐叩ク雪の曙戸や借さむ　良明
風-寒し鳥-啼ク原の雪の雲　史雄
笠白し十夜に見せる心なん　不尤
雪惱ミ駒よ肥-滿の年籠リ　友巴
甲斐の雨-雪猿-叫曉のしらみ聲　加水
我-朝々善-悪糺すべし雪の情　柳下
何となく幾-夜重ねて此師走　宙存
氷なん夜-明の女君ふみかねし　山中 祖竹

瓢箪菴之唫

翩-々タリ似菩-薩どもが袖の雪　浪華 玉東
寒-苦-鳥越の山-路の人やさぞ　佳花
貧-苦-鳥徳-利の起ル日こそなき　丁囿
鈍苦鳥先キをとゝひの事を鳴ク　把木
ほいなくも雪見初たるあした哉　鶴來 四水

失はぬ色や落葉の朝ぼらけ　蛙吹
踞り鶴や旭に霜を解　城南 九郎
火-桶抱ク世にあだものゝ已かも　近江 江涯
不二の雪頤氷るまで望む　蘭杜
曉の爐に深-山木の榾-柮哉　晋明

霜中ノ人

心-迫ル旅-山の鐘よ時-雨降ル　呂宙
木がらしや我世經る軒鷲の鳴ク　杜呂
心-只何-是一ッ節-季候よ　社藤
雲-井人に知らせてき哉冬-籠リ　市川
君やこし君は物かは年忘れ　女 歌風
雲を見つゝ雪-車巧ム世の哀レ哉　柴原
うき命柑の身あてゝくどもるや　魚發

寒夜

鐘老聲-微て鼠樒を食こぼす　蕪村
十月十夜梁に動ク蹴-上ゲ砂　洛 亞岱
雪を煮て呉天の雪を興じけり　志慶
尼-君の火-桶つゞらせ給ひけり　魚波

何虫ぞあはれ火桶の花にすがる　亀友
致仕の夕三椀を増スふぐと哉　大魯

六ニ行

大魯

霜に嘆ず韓髭を捻りけり
薗の錦の艸かれを栽　几董
丁ゝと古院に斧を手はじめて　ゝ
身のしろ衣陽炎を着ル　魯
魚餌に飽て波間に月おぼろ　ゝ
柳に富て漕ぐ孤リ舟　董

ウ
阿爺が呑うつほ木に足をさし下す　蕪村
孝子厨に河豚を調ズ　ゝ
まぼろしの晴夜に雪をうつ礫　董
うきは五尺の身をしのぶ山　魯
三十經る次郎が胤を姫ミけん　董
茶にうたかたの粥すくひ喰ふ　村
犂（カラスキ）を書にかへて貧にあき足らず　魯

嫦娥戸に入るを影盗む屋（イヘ）　董
水辛クおのれ濁酒を醸すらん　村
腹を皷すあら田年あり　魯
妻子見るつばくら花に溺ずや　董
春を胡（エビス）の紅粉に泣ク　村
劍を磨す二月の雪を掬しけり　魯
舊悪化して蝮を狩ル　董
虱老ふ綴に香を眠らせむ　村
艸の扉へ夫迎ひ駕　魯
夕ぐれを六位の僕（ヤツコ）たをやかに　董
閑ある雲や矢に文を射ル　村
日をめづら五月雨鳥浴ミして　魯
芥を富士の夏草が原　董
歌の聖酒に賢者の名を喚（エヌ）リ　村
舞入あやにせまりたる聲　魯
銀燭の月露欄干にのぼるかも　董
秋を感ずる永郷の郎　村

ウ
綠毛を梳（ケヅ）る野分のあだし波　魯

旅行万里の雨を占フ　董
羅を乞ふ新羅(シラギ)の使わびぬらし　村
音文を織ル八葉の家　道立
花の壽南山に風をいとふ也　仝
心をしおくきさらぎの郷　仝

煮ル二河豚一ヲ　四章

磯馴鰒君子の釣(ツリ)にかゝらざれ　二柳
腹を鼓して罵らく河豚我をいかに　雙魚
衆已に飽ぬ馬塊に捨ン河豚の骨　李康
河豚人を不レ毒セ人中〳〵に鰒を毒ス　見道

雪夜唫　六句

雪を灯ス窻宗鑑が世捨筒　魯文
雪の狂夜深し馬に酒飼ん　二柳
酒夜闌て夢は呉天の雪にたつ　百非
竹しば〳〵起て更行雪に口ごもる　弄哦
誰心輕舟と成らむ夜半の雪　志慶

雪風を吹て鐘寒山の漢(ヲノコ)を送ル　李康

送別

離歌幾(イク)回(タビ)缶しらけく雪を打　亀友
河梁霜寒し亂レおよ君が履のあと　百非
東籬菊かれて君待熟(ウマ)ンしらね酒　魯文
柳下ニ相別ル雪セバ馬に瓢せよ　李康
袖上(シウシヤウ)雪芳し田鶴に鞭ッ人去ル日　有鳳
日南の珠なすや兎離別の袖　弄哦
雪満レ天やよやや越路に歸ル人　三暁
我句不レ盡レ趣白鶴とみに雪にひいる　楮冠

再(ビ)送ニ梧蔭(ヲ)帰レ郷ニ

酒なからんや鞍上詩腸氷らまく　生佛

去年は君に送られて南し、今は君が北するを送る。

夢に入リ來レ雪路をおもふ夜は　二柳

北地雪景

雪かくや面ぶせせし妹が宿　女成
老ぬるや乳母に逢にし年の市　桐衣

世を擧て風きく夜心すめ　虚堂
落葉干ス尋常くるし人心　里布
樓に眠ル傾客の月穿レ雪　湖山
望ミ足ル頭は哀の冬ざくら　鬼笑
樵夫哀レ擔頭の雪年頻リ　仙夫
物は只等閑に世なちから艸　桐江
大方の夜をやねたしき雪あらし　丁黄
冬の艸いつおこたりの日を知るか　呉候
紅葉散ル嵐や書ん俟らし　車萩
是非いまだ人に佗らん冬の梅　枰鵬
人や斯魚の目ねたき冬の月　八何
冬牡丹いみじく世にぞ媚わたる　魚列
花盡て松よ化し野しぐる世ぞ　杜乙
茶山花を斗に得る心世に足るも　渡雪
火燵かく物のゆるひは起リ皃　驢堯
木がらしの這入ル瓢となりにけり　龜選
惑ふ夜や句に風の我を鳴ル　馬勃
類ひなき野や憂僧都うきしぐれ　芦仙

獏の夜を明なんや夢月時雨　逸山
この類ひ化てふ霜に結ぶ世ぞ　蓬渚
時雨るゝや瀟湘の夜は蕭々タリ　古角
我世をし雪見とこそは成にけり　百夫

年内立春

とし仕舞子が匣春意滿　八水
年わすれ笑嚢と巾に被るらん　几董
霜けぶる菊のてり葉の花なくも　浪華一鼠
月夜只己に烟る炭竈よ　女呉夭
暎ふや渺夜灯の鳴海鳥　友子
北風胸をうつ生涯幾ク鴨子啼　梅三
十里寒し野歌朽蓮を竊らむ　吾角
殘夢漸覺て君が玉笛霙なす　三曉

向田玉壺が文房に飲む

丸雪せよ酔いしぶしの石寐ン　楞庵
わく臺に主の名立し水仙花　社藤
夕けとふ風化寒し稲葉山　酉水
寐なで夢見しや雪野のかつえ鹿　里曲

たつや日は千鮭舟の跡の波　浦秋
臥柴の霜にこほりたる朝日哉　里山
冬火焚ケ石川乙女來らまし　八橋水
霜梨の霜に照ル世の哀レ斯　魚發
化心年忘れんと思ふ哉　立羽
虚夢に世をや被のすり火燧　卓五
月隱レ高城ニ五更の鐘の聲氷る　泊華其林 五晴
よべの雫炭や碎かむ聚や割らん　仝

不盡又不盡

凧や攀盡す名の栗猿　南艸
　冬の日を追ふ人間の舞　丁黄
心痞彼とばかりの月佗て　物赤
　叩は叩ク瓢音知らし　卓五
水みどり自然の色を秋さすや　立羽
　尤袂を我に更富　魚發
絢はん左リ娘の火をかこち　八何

恨を分ッ合歡の下風　吳侯
良忍ぶ雨の中夏明くれぬ　五
　馬賣ル已レ容何某　發
賊ハの字は君に覆はれて　魚列
　世は幾許か松島に月　五
香や凋ム蕊蘭期に後レ　何
　秋の九郎がなの烟たつ　五
蚕は老にけらしな無爲　赤
　奕に負たる騏尾の願ミ　何
悔の花國の杣立夕間暮　赤
　年なる奴春を夢みし　列
二月や嫉妬の魚の日を守リて　赤
　奇魅戀衣うらなさんかは　黄
謂說朝氣の摩尼の寄ル艸に　何
　柯打雪の柯を背なる　發
長柄川名を追フ鳥の惑ひして　黄
　あらしくれ行英雄の月　艸
篠に立猿丸夫惣穆　赤

おのれに是を買て傾城　艸
戯レ打礫に水の音や何　黄
松岐して白々し霜　艸
聲立て産の常陸の身をくねる　發
祇の守のあはもりの酒　黄
仰なりや殿の亮のすじり舞　何
鳩曙の雨を晉おろす　芻
佗もよひ陶が摺木の摺心地　赤
嘲りを賣伯樂の花　黄
おぼろげや眇三十日の鼾引　發
何を顯形の陽に向へる　梨京

無味風流

往昔、祖翁、栗集を跋するに、是晉子が寶にして後の盜人を待テと遺言ありし。而して八十餘年、未曾テ後盜を不レ聞。忽我樗先生なるもの起ッて、狐白裘ノ手、よく其意を盜ミ得、再ビ栗といふ一書又世に鳴ル。其味は不レ算ヘ心炙意鱠豈常ならむや。其語震動支門・乙戸の卑風を破リ、色墨、浮世の路々を洗ふ。既に北海の水を一口に汲盡し、出て眞寶を十方に吐與す。是が爲に龍泉家々に涌ク。快なる哉、々々。爰に於て予八水還ッて師を難じて曰、栗新古なし。あらば美味ならむ。此書外題を見るに、俗風に倣ッて新ノ字を以て衆を引ク。舊毒を猶一喫するや。再ビ卷中を閱するに、句濃多ク毌栗に習ふて、題意舊を假ル物に似たり。又世間の泥水を喰たぐひならずや。師、うなだれて詞なし。依ッて又おもふ。是高致を盡せば、衆人別本の看をなさん事を憂へて、是が爲に新みなし栗と題し、句格前に比して第二義を甘ンじ、罪を自ラに取リ、見ン人の爰より超奪せむ事を欲するや。呵々。予八水術中に有ッて不レ知ラ。終に下ッて拜ス。猶後盜となる事あたはず。

予も又前件に擬し、摸して此に漫りに記す。

安永丙申季秋月　　　垂菊洞八水鼓舞書

嘲ニ俳交行之趣ヲ吐テ而戯序ス

翻レバ手ヲ成リ作トシ覆レバ手ヲ愚ナリ
紛々タル俳書何ゾ須ン數ヲ
君不ヤ見蕉門七部集
栗ニ盡シテ糟粕ヲ有ニ虚栗
拾ひ得て世をとふあらしみなし栗

屈麥水書

附言 みなし栗の譯

○新虚栗集就り。不才の小子諸君子を欺くに似たり。多罪々々。但し此の書此風を説て、一遍の意を連ねむとにはあらず。只諸家の吟を拾ひ盗ッで、漫りに新虚栗と題して何を並ぶ。故に格調相違も亦多し。元來予が志ッ海内の俳士是を嘲ッて、重而玉を吐キ、珠を唾せん事を希ふて也。

○予先年蕉門一夜口授といふを版に梓す。虚栗集を見ざらん人を勸メて此高致を記ス。今ヤ諸君よく虚栗集の趣を知り、高情を得て遙ク栗風をなす。予が口舌泥に落たるを知ル。しかれども本懐也。もし初メて此書を見ン人は、願ハくば先年出したる蕉門一夜口授を合せて見給はん事を乞フ。

○書肆五明曰、世上猶虚栗を見、甘ンぜぬ人甚多し。愈詞を添へて栗を進むべし。予常に云フ、栗調は夫形なくして意のみあり、意も亦無意ならむ事を欲すと。然らば句ノ上ヘ理の聞べきはなしといへども、餘りに其理を辨ぜざるときは、人を引に詮なし。せめて一端を云給へ。みなし栗末ノ兩吟ノ發句、

詩商人年を貪る酒債哉

是何事ぞ。ついでに一卷の意趣をも解し給へ。予曰是蕉翁・其角に俳諧を許すの一卷、虚栗集の眼目也。翁則跋に龍泉大阿を以て比して稱する所、聞ッずんば有べからず。元來晋子懶惰にして、翁ノ氣に不レ應ゼ事

は、蓼螢の吟に對して、翁の〽朝顔に我は飯くふ男哉と教宗ありし趣にも知らるゝ也。晋子晝夜三野に遊で家を不理。故に酒債尋常往所に有、詩に所思ありて、題に取って此詩商人の吟あり。趣意翁の心に叶ふ。依って翁、我俳諧を以て角に附屬す。〽詩商人年を貪る酒債哉　此意は今ノ世學者文人と罵り、先王ノ道我に有と十面作る人、愚に諛ひ痴に腰を折って、只今年の三十日を越ん、來年の糧を求ッと、文華を賣って生を求る詩商人のみ也と云。翁も常に俳門の宗匠とて、傳授らしき事を唱へ、口腹を養ふに耻ッ。角が腹内を云出るに感じて、終に江戸の宗匠を其角に讓り、世を遁中に遁れて幾閑に去らんとす。故に此脇あり。

冬湖日くれて乘馬に鯉　翁

是冬湖は湖海也。江戸に風遊する我身を云ふ。日くれては行も詮なき世、况や多病の我、勞して功なき日を知ってなり。彼琴高世を避んとして、鯉に乘って棄弟子に謝して去ルと聞こゆ。我をして爰の門弟子に謝して去らしむる者は汝歟。いでや、赤鯉の乘物とせん。馬に乘するといふに、よく味ひて試み給へ。

第三

干鈍き夷に關をゆるすらん　翁

風格一タビ廢すれば、才なきもの高名からむ事を欲す。是又俳情の常ながら、是より汝が風調虛事に崩ンかと、干鈍に關をゆるすかの歎あり。干は人才をいふ。鈍キは新俳未練の上に對す。是より句々教諭をふくみ、終りの花に、

詩商人花を貪る酒債哉

とは、花美風流に淫をいふ。擧句、

春湖日ぐれて駕レ興ニ吟

格絶えて興漫ならんをいふ。ワキは乘スルト云、爰に乘ルといふ、よく考へ明すべし。廿五ケ條に云フ、春秋獲麟ノ事有ト云モ是ニ同ジ。都而虛栗ノ卷々は、贈答併釋皆心あり。然レども強て是にかゝはるにあらず。栗調を得て後さとるべし。されば貞享の其頃にても、此意の通ぜぬ輩や多かりし。貞德槌といふ一冊子に、明石居士がみなし栗集を難ぜしを見るに、意皆違ひ理皆背ク。貞德門を以て蕉門を論ず

るは、道路東西し、木に依って魚を求る也といへども、こは又あまりなる相違なれば、世人も不レ見。答シにも不レ及。只みなし栗の見難キ、むかしより如レ斯ノとはみえたり。

○書肆五晴曰、兩吟ノ卷、意深キ事聞えぬ。然らば他の常の卷にも又々如レ此ノ深意あるか。予曰、其角にしては多ク如レ此ノ。上卷ノ中ノ附句にも、

婆䩦にわたる島おろし舟　　角

鳥葬にけふある明日の身ぞつらき　　仝

是婆䩦は南洋万里ノ遠キ、則今ノジャガタラの屬ゾク、鳥葬ハ火葬ノ惣名。南洋異島に鳥あり、自ラ死期ノ知て枯技を集メ、此上ニ居テ已が羽を摺合セ火を發シテ燒死スとかや。洋溟の附句を一字ニテ、近ク鳥部野のあはれに比して次の變化を快クす。妙に力を用ゐたるにあらずや。又下卷ノ中に

土船ニ颯ッ棹ヲ月はすめ身は濁レとや　　楓興

浮生ははぜを放す盞　　其角

土船は久しく水上ルあらず。人間の歡欲、幕上の燕に同じ。故ニワキに小魚の盃中に跳ルを比ス。衆ニ示ス一棒如レ此。意淺しとはいふべからず。書肆五晴服して、虚栗を解せん事を云。予不才いかんぞあたらむ。不佞麥水若うして北國に俳句を習ふ。美濃ノ支考を仰ギ、中ッ比伊勢の麥林に依ル。終に麥水の號あり。其後美濃・伊勢皆卑風の吟多よなるを覺え、蕉翁の意に隔ルヿ遠しとして、諸家の風を尋ね、つとめて東西す。岐路紛然たりといへども、只蕉翁の意通ずる方を以て直道とす。故に七部集を味ふて泝り見るに、蕉風初て起ル天和・貞享の頃、武藏曲・虚栗集ノ類、甚ク蕉翁の句意を解するに安しとす。たとへばおなじ旅情にも、

櫓聲波を打て腸氷ル夜や泪　　貞享初年吟

あら海や佐渡に横たふ天の河　　元祿二年吟

いづれも同調の高吟ながら、浪を打ての吟ニハ、腸氷リ泪凝ルの躰まで顯れて客情さとり安し。佐渡に横たふ天の川と斗りやすらかにのべたるのみは、愚意急にさとり難し。故にみなし栗、甚蕉翁の意を求ル道なりとして尊ミ信ず。故ニ予強て句風を換るとしは思はねども、調

替るに似たり。又古人には自ら此調あり。今ノ人探さずして調替ルをのみ難ずるは委しからざる也。今や世には句風を變へ、俳名を改ムル人多し。予がいつまでも麥林下に受得たる名になし居るものは、只替ルに不性にして人の呼に任する故也。是又形を取らず、心を取ルの趣意にも依ルか。今の新みなし栗と題するものも、人の呼に任せて別に心なし。予が不性の抑及ぶ成ルべし。依て記ス。餘ハ諸君見ゆるすべし。

金澤　樗庵麥水賛

安永六丁酉四月

攝陽書林

大野木市兵衛

石原茂兵衛

其雪影

首尾 几董

(其雪影　巻首)

序

今や上侯伯より下漁樵におよぶまで、俳諧せざるものなし。それが中に一家をもて、世に稱せらるゝことはきはめてかたし。京攝の際、三四指を屈するだにもいたらず。そも〳〵三四者は誰、几圭其大指を領せり。圭、はじめ巴人菴の門に遊びて、その眞卒に倣はず。かたはら半時菴の徒に交りて、其聱牙に化せられず。ひとり俗談平話をもてたくみに姿情を盡せり。たとはゞ小説の奇なることばは、諸史のめでたき文よりも興あるがごとし。圭去りて又圭なるもの出ず。人或たま〳〵人情世態のおかしき句を得れば則云、圭流也と。こゝにおいて一家の論盡ぬ。ことし十三回、其子几董、小冊子を編て父の魂を祭る。世の追善集つくれるにはやうかはりて、あながち紫雲青蓮の句をもとめず。ひとへに弄花醉月の吟を拾ふ。魚肉・蘋蘩雑俎にして供するものゝごとし。余曰、さはよし、又父が意也。かの闇室にこもり、せうしいとまめやかに、手念珠をはなたず。稱名こと〳〵しく、尼法師にこび仕へて、あやしく着ふくれたらんよりは、雞骨床を支ゅれどもかたちかじけ、眼うちくぼみたるかたにこそ、もろこしの識者は與ミし侍れ。几董之此篇其幾乎。

明和壬辰秋　　夜半亭蕪村書

むかし父が在世に吐し附句幾計ぞや。其が中にも世のをかしき情を探、花鳥のさびしき姿を見出たる句ゝを集、今はた百句を並べて百韵に綴れり。こゝに一字一點の私をくはへず。ありのまゝに出せるを本意とす。さはそれ、てにはのさし合・一巻の變化も覺束なし。まいて有心會釋の法にも背け、七名八体などいへる論にも叶はねば、まことに竹をもて木に繼るがごとく成べし。しかはあれど折にふれ端にいたり、余が句を繋ぎて前後を抱、月花の足

ざるは門流の人〳〵に譲て、一卷の首尾をなし、父が十三回の追福とし、且知音の諸好士へ披露し侍るものならし。

高子舍儿董述

霧になるつらだたしいや松の風　先人儿圭
　その霧かげに古ことを見　儿董
よき人を皆相口の友として　、
　ざつと騒だまでの田樂　圭
雨も又呵るばかりのものならず
　この町筋のくれて賑か
新月にせはしや初夜は夏になれ
　繋でもどす下駄にかうろぎ
刺鯖の塩冷じく秋ふけて　董
　糞にふたしてけふは朔　圭
忘んと芝居へ行ばそれをする
　連て走るを見せたふもよい　董
物喰ねばひだるう成ぞわりなけれ
　發起した日に死ねばよいのに　圭
黒谷にちらと高野の山おろし
　廣き板間に居れば身に入　董
大船の鼻のささなる朝の月　圭
　東國方の新米でゆ　董
骨脇のやうにのろりといで來たい　圭
　上下は禮下袴欲
闇がしや酒に遣はる花の頭　青映
　麥あを〳〵と菜種まばゆき　董
御影供に帷子ふつとゆき違　圭
　繼ぞつもりて淵は瀬となる　董
添とげて居るとの便手も下り　圭
　枯れし葵の出るはな帋　董
播磨まで行脚と連の轉(博)奕打　圭
　小便待て降はせまい歟
おも〳〵と芭蕉の風の革羽織

亥中の月の澄のぼるかげ　為拾
崩るゝが躍に成のあゆみ也　圭
捨た草履のさても丁寧
拍掌は源家の紋のおはゝ樣
納所ひとりは本弓へ行
瘦立た帯は左リへ廻り過
悋氣の段歎反吐の介抱
二ウ
引まくる巨燵にけぶる炭がしら　董
かてゝくはへて雨がふり出す　、
新参は旦那の鉄で逃て去　圭
又追立る寄麗好どの
木枕の傍に口から巻た文
通さん辨慶おやま笑はせ
袖摺レて律を調べる琴のいと　董
何所ぞ吹雲暮て蜻蛉　圭
月の舟薪の上に暑ごろも
小島が崎や浮しまが原　董
見かへれば花の中から一里がね　圭

春やむかしの野邊の新建
襲の蹲ふごく凡巾蓄て
愚をかくす手代それ〳〵
三
數千艘みな大坂の人通
湯屋でいやがる出山の釋伽( )
明星や曉起の師走空　董
荷を取ちらけ獨うなづく　圭
ごら〳〵といつ子寶になる事ぞ
いで按摩して屁をこかせましよ
神酒あげてあるのはどふで無理な方
借さぬ〳〵と返事投出す
紙屑と成てはうき世移り行
振そで結ぶ春は来にけり　董
及なき人を見初る松の内　圭
そなたの客や朧夜の月　斗淵
あのやうな蝶蛾を丹波がこしらへて　圭
中よき禪の擦つうたれつ
ウ
しん〳〵とよやり目やりに連は咲

裏から寄るおしかけの客
蕎麦切を二階へ捨に行やふな
けふも涙で埒明て來た
見返り〳〵よいとしをして跌つまづき
呑さはみぢん程も酔ゃせぬ
京の水目の輕うなる留主居達
うんといはせる棒の弟子入
古すだれ破れて晝のかつら影　牙川
臨終を待ッはたに鬼灯　圭
降山も間に有て野分吹
次良よちやと出よちかづきの牛
道のべに一木の花の散そめて　孤舟
ながき日あしの藪に横たふ　董
五千石せしめる寺は雉子が啼　圭
心中へはしる帶とけて有
傘は彌がうへにて側で見た
つとんと生かはる風俗
どこへやら夏は煙管がのらに成
煩ふうちが女夫なりけり
蝿ひとつ障子を叩く雪明リ　董
ともし燈細くいとゞ寒き夜　圭
いとしほや大小差ていとま乞
運は他國に置て狀通
歌まくら今道成寺が有たけな
月夜も闇も戀の世の中　百步
乳母も去ニ行燈仕舞松茸屋　圭
秋にあはれを添るむらさめ　董
さかやきを半分剃て悔ミうけ　圭
脫だ浴衣へ茶椀うしなふ
湖をまづ泉水にぞしたりける
獵船二艘廓にてすき
我伇(役)はとしに五六度駕に乘
遙拜の方鷄のなく
なつかしや在がごき花の雪　子曳
實其頃の春の草〳〵　李林

遺句 七十四句　几董 十八句

子曳　為拾
青呟　百歩
孤舟　牙川
斗洲　李林
各一句

好人のひがめる道にんめ見哉
　瓢に酒や春風春水
ともすれば小鮎商ふ此窓に
　うつゝながらの答へ一聲
講尺も葬の巻にあり明て
　白粥に置く塩の露じも
ウ
やゝ寒みあだにふり行伊與簾
　狐が退て戀となりぬる
父上のお江戸詞を笑ふ也
　勝手の違ふ余所の招子木
蛭子講されば小春のさくら鯛
　月を殘してけさの初雪
先陣は二八に足ぬ美少人

几董

淀過伏見墨染の里

門徒衆ひとついふては諸なみだ
　遠い縁者に隣遣はれ
閙がしいかた手に搔は花鰹
　四季おり〳〵に疝氣寸白
ナ
追從に己が威勢をとり交て
　廓あたりの堤崩るゝ
ほとゝぎすかばかり腹の立時に
　今撞かねや是生滅法
小便のいそげば廻る山おろし
　草葉の露にそほつ雁瘡
あはれさもいとゞ月夜のむしの聲
　秋かたり合桓楚周蘭
饅頭を九十九喰ふて明にけり
　變化屋敷の障子百枚(夜)
椋も枯榎もかれてむら烏
　土ばしの長さ水ところ〴〵
ウ
のう〳〵旦那御刀が鴛にゅ也

淺黃のきぬのよごれ安くも
長次郎の赤質物を見せに來て
旅宿のかもゐ皆あたま打
立いでゝ都は花の雲井より
ひがしは長閑西は霞か

ゆく〳〵の澁はづかしや柿の花　子曳
隣つゞきに茂る生垣　几董
あき人のよき絹買に通ふらん　丶
時分ならねど飯の相伴　曳
御坐船の碇おろせば月いなか　丶
かしこの隅にうすきいな妻　董
ウ
負腹に角力の故事をいふて居　董
藏屋しきにも足ぬ勘定　曳
三日ほど廓を見ねば煩ふて　董
心ひとつに惑ふ占かた　曳
此冬はこちの椿も咲そふな　董
手張の綴ひづみがち也　曳
長尻が借りに來た物置て行　董
翌の年忌の佛擧られ　曳
朧月おかしいといふ天氣にて　董
笠の内なる娵の初花　曳
出かはりを惜しまれおしむ道草に　董
（祇）祇園清水ゑひもせず京　曳
ナ
此比は宗盛殿をもてあまし　丶
我等が假名二合半平　董
眠たさの間に褌をわすれ來て　曳
盥の水をかける石菖　董
狗のなじみてどれも捨られず　曳
供に出ぬ日は米舂ている　董
ちら〳〵と雪になり行八ッさがり　曳
好の道なりやわせそふなもの　董
生醉の良へかけたる蜘の糸　曳
かくしたふりをさし足で見た　董
ふるされて月も恨る後の朝　曳

うら枯ながら蕣はさく　董
ゆく秋に鶏の手疵を憐て　董
庄屋が息子いつも十八　叟
宮領へなだれし谷の白妙に　董
草の中より水氣たつ見ゆ　叟
枝高き松をむかしの花二木　董
巣を出る鳥の觜の長き日　執筆

欠〳〵て月もなく成夜寒哉　蕪村
秋しづかさに謡一番　几董
やへ葎酴醾瀧費も見かぎりて　竹護
遠ー山高く遠ー山低し　村
朝凪に水主ゝ烏帽子を着たりけり　董
日記も扇に書てことたる　護
究竟のこのした陰よ藤若葉　村
魚荷の蛸を所望して見る　董
逗留もののらりくらりの惟然坊　護

よい葬禮に大津八町　村
冬空の七ツも聞ず夕ぐれて　董
なれ衣濯ぐ波のうね〳〵　護
纖くさの何をたねにや云よらん　村
ともし火消へて春の夜の月　董
憎まるゝ鳥も花の森へゆく　護
獨活の苦みも大原三唫　村
用の有時は童（ワツパ）の見へぬ也　董
疱瘡神の小言はじまる　護
土佐駒に光輝く鞍鐙　村
五日の風のわたる葉ざくら　董
かはらけの干間うつくし狭莚に　護
書記も典司も放参の体　村
狸とはしりつゝも文恭を聞　董
身は人質のとしも去ヌめり　護
一奏わすれぬ我を憐て　村
戀哥と見ゆる盞の裏　董
ゆく水に月洩れとてや竹床几　護

貧乏村に鹿を追ふ聲　村
肌寒う和尚の疝氣揉で居る　董
けふは街が二人まで來た　護
ウ長家中晝飯時と成にけり　村

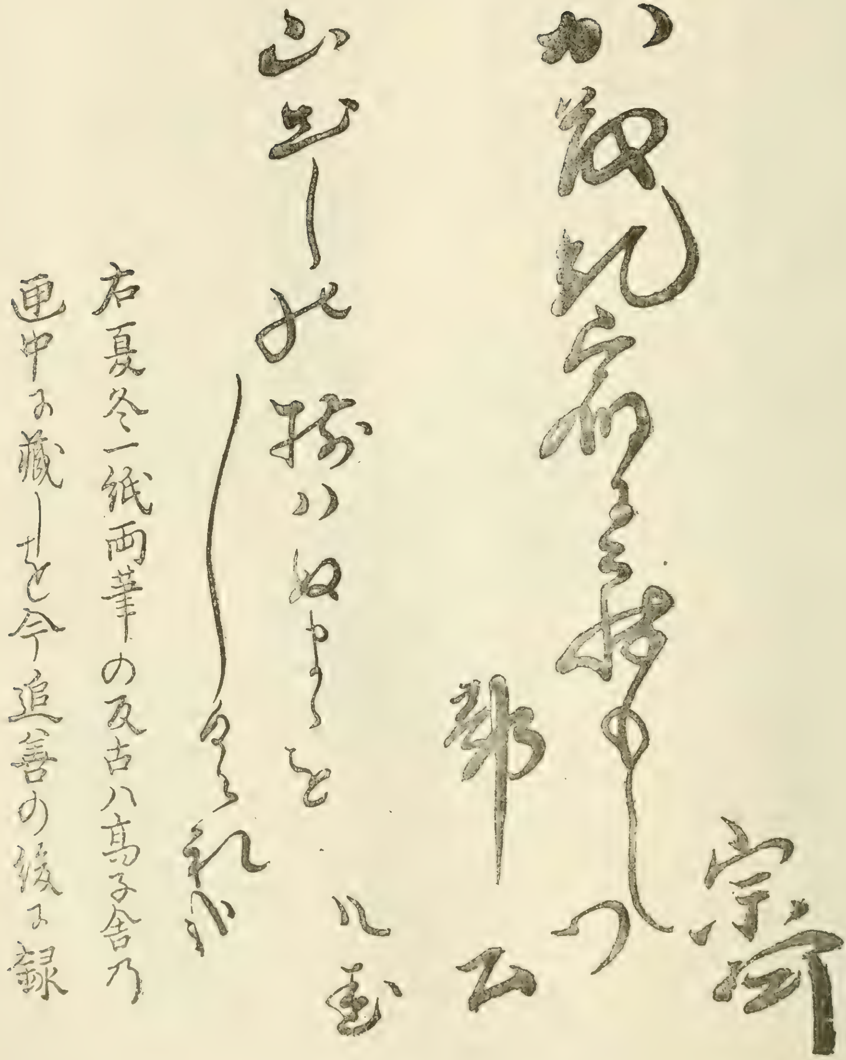
降そゝくれて仕舞八專　董
綻びも男の縫ふた旅ごろも　護
今に懇意を捨ぬ大音　村
花二代またく色香のおとろへず　馬南
すぐな流にみつ桒川荳　執筆

巴叟十三回懐旧

うつゝ也の
曉寝をよおこしか

明和壬辰之冬

小子高几董拜書


右夏冬一紙両筆の反古ハ高子舎乃
匣中ニ蔵しせしを今追善の後ニ録

（そのゆき影　巻尾）

晋子・雪中は蕉翁の羽翼なり。晋子・雪中は巴人菴宋阿の左右の師也。阿叟は又先人が師也。されば其系譜の正しきをもて、師夜半翁の筆を煩はして、おの／＼肖像を寫て道の栄とし、はた先人が舊知、あるは今我相しれる諸子の句〻を拾ひ、父が志を継て、父が靈を慰する事しかり。

几董

（校訂者曰、原本こゝに書像あれど便宜次の頁に挿入したり。）

春夏の部

春のうみ終日のたり／＼かな　蕪村
朝がすみたつや夜舟の枕上　几董
千金の雨夜見捨てかへる鴈　子曳
山吹や庁に覗く隣あり　爲拾

伏見南山眺望

鳥寒し生駒につゞく春の水　移竹
五器皿を洗ふ我世や春の水　几董
爪かくす日比わすれて猫の戀　且兩
莟は花に殘して梅のすはえ哉　一房
最前に起てもよきに春の雨　召波
出かはりの疊へおとすなみだ哉　太祇

暮春

ゆく水にもの書春の日數哉　五律
日のあしを洗ふてのばせ春の雨　斗文
うたゝ寐に使三度や春の雨　几董
物申やうぐひす答ふまばら垣　朱英
へた／＼と笑て下手な薺哉　壺角
人はまだ嵯峨に遊ばず梅きゞす　牛行
ゆく春や竹の伏見と成にけり　鳥西
鶯や木に竹継で行もどり　百池
苗代やある夜見初し稲の妻　几董

臥龍梅を見にまかりて

んめ屋敷京なら梅が屋しき哉　竹護
なには女や京を寒がる御忌詣　蕪村


稲妻やきのふハ東けふハ西
晋其角
古池や蛙とひこむ水の音
芭蕉翁
黄きく白菊その外の名はなくもかな
雪中庵嵐雪


郢月泉巴人後以巴人爲菴号
更名宋阿別
号夜半亭
夜半亭蕪村画
門人高几董書

山かげや菜の花咲ぬ春過ぬ　馬南
痩んめや酢藏のかげに二三りん　几董
詩に歌に口も酢くなるんめの花　九湖
水門を柳の叩く月夜哉　南雅
いとゆふや垰にしらむ町の松　皷舌
水に添ふて橋たづぬるや朧月　三峡
一里ゆき二里行深山ざくら哉　三ゞ(カ)門坊
川波の梢にとゞく柳かな　郢里
我影を捜す老木の柳哉　乙仙
麓には水のつめたきはつ日哉　一〆(アヲメ)鼠
七夕のうたがひはるゝ汐干かな　姫(ナニハ)州
春の風濁らぬ川はなかりけり　如ゞ(カ)本
枯たかと鳥のおれば梅の花　子鳳
雪はみな地へしみこんでんめの花　李完
春風にいつまで栗の枯葉かな　蝶夢

むかし几圭、行脚の志ありし時

都方よりと聞ば諸国の地虫出ん　羅江
松伐たあとの日なたや山ざくら　几董

よし野出て虻のはなれぬ袂かな　宋屋
花さくや見て置べきは因果經　武然
元日や非をあらたむる非のはじめ　紹(ナニハ)廉
朝霜や鶏のつく若菜貢　舞雪
野鳥の腹に蹴てゆく春の水　祇空
菜の花や黄昏時の經の聲　管鳥
土くれに何の花ぞも春の雨　德圃
洗足の盥も漏りてゆく春や　蕪村
旅に寐て古郷の春を惜しみけり　春武
朧夜やおり居の御所の月の松　晋才
桃おれば皮むくれけり花ながら　土髪
雨そぼつ春の名殘や茶一椀　几董
青柳や二すじ三筋老木より　柳(エド)居
盃もさゝば衛ん牡丹かな　嘯山

致仕

蛇の見かへりもせぬはかま哉　杜口
人ならば上戸なるらん夏の月　鳥門
寐たらぬはうき世の人ぞ一夜漬　和流

川下に難波もある歟眞菰賣　光甫
毎年の長逗留やさ月雨　三角
青んめを見付出したる旭哉　春海
雪にせば何丈積ん五月雨　十拾
春喰ふた草にてあつき垣根哉　兎足
酢をもつて可也とやせん初鰹　沙月（フクハラ）
かやり火の燃えてかくるゝ二人哉　、水翁
明やすき夜を朝がほの二葉哉　田福
暁の一言ぬしやほとゝぎす　召波
時鳥きのふ聞しがかんこ鳥　維駒
蓮もまだうき世をわたる水の上　羅雲
干網に一聲かゝれ郭公　（東武）泰里
梅の木や實はむすべども郭公　五律
桑畑に喰ひつぶしの毛虫哉　、
小豆餅賣そゝくれし暑哉　青眏
撞がねの供養も果て合歡花　子曳
ほとゝぎす月輪かけて白雲寺　自笑
郭公工藤のかり屋寐入けり　鉄僧

湖の水かたぶけて田うへ哉　几董
雨覆ひの廿日ふり行牡丹哉　馬南
朝日より先へ開きし蓮哉　來雨
あり明の月も浮葉や蓮の上　曲室
手も足も口も只居ぬ田植かな　九湖
灰汁桶の輪も入かへん更衣　魚赤
五斗俵の地をはなるゝやころもがへ　几董
山ひとつあなた丹波や雲の峯　百池
夕顔や秋は狂哥の種瓢　うせる
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音闇し　蕪村
古妻を厘に置ばやひと夜鮓　竹護
夕風にあとなくなりぬ雲峯　鶴英
河骨は肥たり水はやせる時　如本
寺の庭をぬけて道なし蟬の聲　奇嵐
みじか夜や寐かへる窓の朝ぼらけ　明五
草まくらかやり火焚て寐入けり　文皮
笘の香の船に飽けり皐月雨　德野
魨に此命のがれてはつがつを　渡牛

日盛や蟬は眠りて瀧の音　釘丈
穢多村のうらを逆行清水哉　几董
柴垣のさはると折れる暑さ哉　ナニハ 周禾
ゆふ立やしが傘のひとつ松　エド 栢延

閨怨

とぶ螢あれといはんも獨かな　太祇

書窓懶眠

學問は尻からぬけるほたる哉　蕪村
こがれたる雨を握て田うた哉　几圭
ほとゝぎす啼や木曾路の初ざくら　素山
螢見や此宵闇に舟早し　峨眉
ながれ來てたつや螢の水はなれ　孤桐
夜通しに壁塗あける蚊遣哉　几董
ともし火の命の長き凉かな　李琳
心なき石とも見へぬあつさ哉　五始
今聞て直に戀しや子規　風狀

象の登りけるさしに

今や幸富士の裾のゝ蝸牛　仙鶴

秋冬の部

踏脱だ足にて着るやけさの秋　ハリマ 瓢水
とろ〳〵と寐る鳥あり十三夜　杜口
啼鹿や畫見た形のわすれたき　梅貫
清光の日をあゆませる木の間哉　五友
さむしろに機織虫の夜なべ哉　菊溪
光るほど夜はしづか也露の玉　古梁
島原も龍の都歟霧の海　有響
白つゆののぼる力や草の丈　ナニハ 万翁
曉の雷晴れてけさの秋　几董
手にさはる金の莖や今朝の秋　斗文
ゆきくれて案山子を草の枕上　子曳
棚經や出て氣のつく門違　自笑
双六の石もまばらや菊の宴　佐雨

市中

いなづまや隣の藏も修覆時　几董
秋の暮毎日あつて淋しけれ　嘯山

秋風の人の心に立にけり　雅因
魂棚や鼠もつかずあはれ也　雨遠
いなづまや梟の臥ところまで　季遊
草花の屏風を疊むのわき哉　也好
兀山に角を木影や鹿の聲　且爾
花鳥の灶売もゆる紅葉哉　エド訥子
酒買に千里の外やけふの月　几董
名月や落るものとは思はれず　竹護
萩の花追〳〵こけて盛かな　孤舟
花を葉へしばし授て露時雨　青畋
名月や野ずへの雲に人の聲　南雅
揚屋出て大門を出て秋のくれ　エド樓川
明六ツをしゞまの鐘歟虫の聲　田女
名月や下戸の建たる藏引ん　多少
明月やうつむく物は稲ばかり　宗專
物かはは上京にありけふの月　嘯山
名月や實の山は鼻の先　婪夫
粟めしもゆかしき色や菊の宿　白麻

名月やをの〳〵當坐なかりけり　依雨
我かげの替になるまで月見哉　二貞
菱ものゝ花咲にけりけさの秋　春爾
天地の心を分ん今朝の秋　舞閑
かゞしから苗一すじや秋の雨　几董
雨乞の小町が果やをとし水　蕪村
ゆきの日や近江の鐘も聞ゆなる　羅人
しぐるゝや誠の暮は鳥さはぐ　几圭
見足ぬをはつ雪とこそ申なれ　雅因
詑禪師闘も咎めぬ頭巾哉　ユフキ雁宕
鶯を出て寒月高し己が門　太祇
煮凍へともに箸さす女夫哉　召波
朝めしのうき世になりぬ鉢叩　田福
ゆふがほのそれは髑髏歟鉢たゝき　蕪村
河豚汁や倍火をともしよく見れば　子曳
枯木からしぼり出したる時雨哉　斗文

旅行快天

あけぼのやあかねの中の冬木立　几董

氷より先へ碎し手桶哉　馬南
夜のほどの風の手際や薄氷　爲拾
水鳥の朝日に眠る霜夜かな　五律
うぐひすのしのび歩行や夕しぐれ　太祇（祇）
天津風名もしれぬ葉の落にけり　虹竹
御秡や春はかならずと配けり　山竺
有て過て背戸の水仙咲にけり　之房
夏痩のもどらぬ㒵や鉢たゝき　蓮月
はつ雪やふり〳〵歸る牛車　三貫
行としやかはらで積る韮の石　女 とく
けふばかり人遣ひよし河豚汁　白麻
柳にもかへり花あり初しぐれ　羅雲

鰒の毒にあたりて、漸まぬかれたる友のもとへ申やりて、猶もいましむ。

それ見た歟全鰒の蝶の夢　呑獅
煠拂て障子張日や梅一枝　、
小角力が物荷ひ賣師走哉　丑二

人心いく度河豚を洗けん　太祇
寒空に皮を剝るゝふぐと哉　必化
ふぐ汁の我活ている寐ざめ哉　蕪村
暫くはあたり隣の巨燵哉　漆翁
鉢叩の着たはあかつき衣かな　波光
毛氈に寐たる心の小春かな　桃序

冬夜

星月夜空にはぐれし時雨哉　孤舟
虚無僧の物いゝかける枯野哉　瓜流
しぐるゝや置かへて行にはたずみ　斗洲
零露て關寺諷ふ頭巾哉　几董
老夫婦世を住よしの巨燵哉　竹裡
竪戸樋の中は旱のしぐれ哉　士丸
鰒汁や鍋のかたぶく古疊　猫悵
ふぐ汁や喰ぬ程だにあはれなる　斗文
生花にこと欠く頃や枇杷の花　、フシミ 賀瑞
隱し子のとし負へいる火燵哉　、柳女
雪折や雪を湯にたく釜の下　霞吹

戸に犬の寐がへる音や冬籠　蕪村
初雪や道がわるいとぬかしおる　東武 龍眠
暦手の茶碗もとしの古び哉　泰里
思ひやる時雨の中や筏さし　阿誰
水底の海鼠にあたるなまこ哉　買明
大刀持は雪にころんで見えぬ也　旨原
四布五布身のかくれ家のふとん哉　存義
百敷やさくらの枝を煤はらひ　大坂 三蝶
雲淋し冬はあらはに北の山　漁焉
賣〱てひとつ凍へる海鼠哉　來雨(雨)
ほふかぶりして懐手して暦うり　曲室
竹は寐て雪またゆきの里續　芦官
海棠の又寐の夢醒かへり花　來之
としの根も洗ふて流せ芹根水　盛住
なで廻す山のあたまや遠しぐれ　閑々
白んめや雪の中にもをしへ道　嫩草
豆腐挽寐ざめの友や寒念佛　有種
一渡しおくれた人にしぐれ哉　サヌキ 暮牛

かれ草の根ほり葉ほりや雪轉　麗白
時雨た歟今朝は綠の麥門冬　隨古

遠くてちかきもの、さいへる當坐題に

夜噺の寒き田舍の隣哉　必化
忍ばしよはやり頭巾の主ならば　多少
なつかしき月の栖や大みそか　移竹
迯てゆくとしやるまいぞ〱　竹護

雪　時雨

早打の先へはれ行しぐれ哉　子曳
夙に起てみそかの月や草の雪　几董

、

ぬれて照柳には未だしぐれ哉　宋是
初鴈と同じ道來て松の雪
旣に來るあし音よ所へ小夜時雨　宋阿
はつゆきや雪にもならで星月夜

跋

几圭は心をもて師として、よく俳諧の世情を得たり。壯なりし比より、洛に難波に名をひゞかしめ、他をば外國のごと思へる事、人みなしれり。さるを晩年にいたりて、[illegible]やをら古調にも意をよせ、音(昔カ)しれるどち三五人、鼻つき合せて次句せし事も度ゝ也しに、やゝもすれば半過るころ、空嘯き手まさぐりて、早らうじにたれば、あが辭の出るぞとよなど、云けんことの今も耳に殘れり。此叟が自得せるには、いとすせうに無我なる心成けらし。今年董子が其句もてつゞりなせる卷を見るに、近頃世にもてはやすなる梅路・希因が輩の逸也といふめる句の調、またく阿堵の中に具せり。實も〳〵一作家なりけりと、且よみ且舊きを懷ふて筆をとれば、折から軒端にちかき荻・芭蕉に吹わたる風の、おのれ〳〵が音をなして、其世の月のたそがれの窻にさし入彿ゝ亦、みづのえたつ中の烁の十三夜、友人嘯山書。

葎亭

明(あけ)がらす

几董

(明がらす)

俳諧に不易流行の沙汰は、古への書に譲って、暫くさしおく。今や世の風流漸變化して、其流行にとゞまる有、前ゝあり、又後るゝあり。しかりといへども、都、蕉翁の光をたとぶの一に止れり。夜半の叟、常に我にいへらく、今遠つ國〳〵のもはら蕉門といひもてはやす、やゝ翁の皮肉を察して、其粉骨をしらざるもの也。たとはゞ附句に、敵よせ來るむら松の聲　有明のなし打烏帽子着たりけり　是等の意を味ふの徒希也と。今や不易の正風に、眼を開るの時至れるならんかし。既、尾張は五哥仙に冬の日の光を挑んとす。神風やいせの翁とももてはやせし麥林の一格も、今は其地にして信ぜざるの徒多し。加賀州中に、天和・延寶の調に髣髴たる一派あり。平安・浪華のあいだにも、まことの蕉風に志者少からず。爰に同志月下菴馬南、去年の秋西海の邊りを行脚し、とし夏のはじめ洛にかへりて再會す。其流行を語るに、余が方寸に察ゝに違す。一夜、我庵中に今古を討論し、夜闌に臥かとすれば、忽然として一聲の初音をきく。とみに起出て、今ひとこゑの聞まほし顔なるに、はや曉雲東嶺に横ふて、人の面も白〳〵と、古き夜明のけしき哉　と打誦しければ、月下、頂を敲て歎じて曰、汝早くも流行をしれるもの哉。古き夜明のあるじならめと、言下に花橘のワキを次るよりして、終に六ゝの首尾をなしぬ。是を櫻木にちりばめんはいかにと、ひそかに師が閲を窺ひ侍りけるに、打點頭て、汝子規の一聲に發明せるがごとし。惟ふに汝が信ずるや晋子也。

それよりして夜明烏や子規

この句の心によりて、此集の題號を明烏などよばんも可なるべし、と申されしより、例の拙き筆に任せ、より〳〵聞へたる發句ども、且、我門に遊べる徒が卷〳〵までもつゞりそへて、めづらしからぬ小冊となし侍るのみ。

安永癸巳之秋　　高几董書

ほとゝぎす古き夜明のけしき哉　几董
橘にほふ窓の南　馬南
貴人より精米一俵たまはりて　ヽ
秋は來れども筆ぶせう也　董
殘る蚊に薬柴ふすべる月夕　ヽ
木槿の垣の隣したしき　南
ウ
そとしたる佛吊（弔）ふ小重箱　董
傘かるほどの雨にてもなし　南
曉の戸を腹あしく引立て　董
きぬ被き居るふるざれの君　南
神無月それさへ人のまこと也　董
春見のこしたかへり花さく　南
阿彌〳〵が水ながれこす魚の骨　董
けさ殺されし蛇のさま　南
足輕の辛く作れるとうがらし　董
魂棚の灯の消なんとする　南
軒のつま月さしかゝる風落て　董
しらべあはさる笛の一聲　南

〔ナ〕オ
海士人の蛸打敲く砂の上　ヽ
小錢とらせて道の案内　董
大雪の跡さりげなく晴わたり　南
肌足に成て見たる傾城　董
川の瀬の浪のうきくさ浪荒き　南
七日に滿る暮のおこなひ　董
桑の弓蓬の矢聲響く也　南
身をなく狐秋やしるらん　董
かり枕雨の更科月ふけて　南
酒の機嫌に澁柿を喰　董
いつの間に冠者は男となりけらし　南
とし經し公事のさら〳〵と濟　董
ウ
翠植ん門田の早苗風わたる　南
何におどろく一群の鷺　ヽ
この宮も正八幡と聞からに　董
海の朝日の蔀もれ來る　ヽ
さくら咲あたりの花に培ん　ヽ
名利薄らぐ長安の春　南

春三月於高子舎興行

山吹の縄ゆるされて盛かな　九湖
掃ちぎりたる庭の春風　キ董
よき人の晰の答へうらゝかに　路曳
杉の器の匂ひゆかしき　萬容
銀に川の流るゝ夏の月　嵐甲
團持手をうしろにてくむ　蘆角
ウ
小草生ふ軒の瓦の落かゝり　雄尙
晝から晴れて行違ふ雲　湖
大津まで廓の駕を飛す也　キ
うつり香に泣くものゝふの袖　甲
つれ〲と硯に墨を摺ためて　容
かゝぐる燭し一葉散り來る　曳
長き夜に鳥もねまどふ月の下　角
身はゞも狹き菅蓑の露　尙
栗栖野や竹田を右手に醍醐山　湖
腹を減しにうそ〱と出る　キ
暮のこる花を盗んとぞ思ふ　尙
オ
燈かけ朧に神主の窓　容
春の雨他人まぜずの連哥して　曳
是ははな香のぬけた一森　甲
厠借ッし禮に本尊を拜みけり　キ
夕凪にいざ明石まで出ん　角
むら衛耳の邊りを筋違に　甲
かはつた物を捜す妙薬　湖
大小の鐺も兀し世に住て　角
橋に日をいとふ椽先　曳
姑と中の能過てこまる也　湖
洒落に染た盃のかたびら　尙
黄昏や月のちらめく雨の跡　容
築地の屋根に草の花さく　角
倶せられし從者は外面に打眠　曳
袖に拂へる膝突の塵　甲
鷄の小高く飛し朝日影　尙
橋かけさせて通る大名　キ
めし櫃を抱へてもどる花の主　容

しぼり戸をこす蝶のふるまひ　角

夏四月朔臨時會

灰汁桶の輪も入かへんころもがへ　魚赤
垣のあなたに咲る卯花　几董
しのゝめの駒牽つるゝ旅に出て　梁（土九更）瓜
角力に呼で見たき山の名　竹裡
中秋も十日あまりの晝の月　春蛙
障子明れば蘭の匂へる　桃牛
ウ
勅定の撰集半成就して　布立
眶にかゝる白髮ひとすじ　赤
枕あげて宿酒の料理好ミけり　董
雨した〳〵と夕ぐれる空　瓜
差つけぬ刀の重き長堤　裡
我かげながら我におかしき　春
養性のけふも麥めし喰過し　牛
裏は隱居へ行ぬけの町　立

梵論呼て鶴の巣籠簫せばや　赤
裾に亂してしまふついまつ　裡
とかくして月も出たり花の宴　立
あふみや人よ我國の海苔　瓜
オ〔ヲ〕
滯留を降こめられし春の雨　春
假名にて書ば長ふなる名じや　牛
目じるしの橋は普請に行過て　瓜
干鰯の市を吹送る風　董
帷子の糊も立たる雲の峰　裡
ふだん下駄はく女有けり　赤
さるほどに面目もなき戀の闇　董
調べもゆるむ斷食の中　裡
狹くても居り馴たる四疊敷　立
薬ごしに見ゆる翌の葬　瓜
客僧の小便しげき夜半の月　牛
首筋寒く雁わたる聲　春
船玉の神酒をしづかに下ゲる也　赤
腕へかけて疝氣引つる　立

軒の雪打しめりたる炭俵　春
孕雀の餌を搜すらん　牛
散いそぐ花を散らして花盛　裡
うれしき道に出る春の日　瓜

四季混雜

不二ひとつ埋みのこして若葉哉　蕪村
蜂の巣に蛇の訪よる若葉哉　九湖
あけぼのや乞捨て行猫の聲　魚赤
ともし火の千鳥に動く凉川　竹裡
瀨にかはるよしなしごとや門凉　萬容
うぐひすの隣へ迯てはつ音哉　キ董
異國の僧もおはして蓮見哉　嵐甲
鶯やもどりかゝりし垣の內　路曳
醉ふて寢た日のかず／＼や古曆　キ董
寒梅や念者を見舞ふ枕上　芦角
ゆく春の裾をからげよ藤の花　布立

投られて酒債飛散ゝ門角力　龜公
古幮のほころび口やけさの秋　雄尙
蝙蝠に人商人の噂かな　梁瓜
一頻春しづまつて藤の花　馬南

納凉

三ッふたつ星まだ暑し夕凉　子曳
酒ゆるすくすしも見へて夕すゞみ　几董
かはほりや風に吹るゝ洗髮　桃牛
萩の戸の馬のゆく衛やけさの秋　春蛙

もろこしの詩客に一刻の宵をおしみ、我朝の哥人にむらさきのあけぼのを賞せり。

春の夜や宵あけぼのゝ其中に　蕪村
春の夜や皷しらべる誰が家　キ董
つばくらや朝起なれし八軒屋　鳥西
冬がれや姨捨に月も捨て有　自笑
いなづまやされば夜來る杉の間　百池
山吹や金のすたる水の底　我則

むら雨のまだ干ぬ町におどり哉　田福

白憐

沈酔に夢も夏野のしかいふな　多少

月花を軒へ寐に來る燕かな　五雲

市中

朝霧の安も涌はや魚の店　孤舟

野行

朝露や膝より下の小松原　几董

夏冬

旅なれて見ゆる馬上の闇かな　大坂　萬翁

忽に餅の生ル木は柳哉　〃

峡中歸

餓の面ヲ世上の人を白眼ム哉　蕪村

老樹枝たれて行道暗しかんこ鳥　五律

古寺や月の今宵も經の聲　斗文

無住にてとしくく萩の盛哉　子曳

纔ゝとして柳遠のく船路哉　キ董

つばくらや御堂の太鼓かへり打　也好

動くとも見へぬ田螺のあゆみかな　維駒

朝霧や二人起たる臺所　几董

ゆく春や又この頃のとし忘　東武　西羊

嵯峨行の揚屋出けりけさの秋　越後　一音

竹酔日

たゞたのし竹植る日もひとり坊　仙臺　丈芝

笠の露も杉の匂ひや霧の朝　信夫　呑溟

其中のひとつは落よ八巾　大坂　舊國

夜をかけて青キにかへる柳哉　伊勢　宗居

纔こめて妹が手傳ふ粽かな　〃　青白

いなづまや風情を亂す月の雲　〃　花紅

鳥も啼ず時雨ながらに日のくれぬ　〃　故雀

露深く蕣の花の丼び哉　〃　聞詩

初蝶の寄もかよはき笹あらし　〃　素後

けふの月空に心のすゝめる哉　〃　桂舟

閑さや花にそふたる庭の月　〃　茶州

竹に見て野をなつかしむ深雪哉　〃　羅父

題閑居

梅がかにおどろく梅の散日哉　いせ 樗良
んめ咲て十日に足らぬ月夜哉　名古屋 曉臺

蓬萊に聞ばや　さは翁の歲旦也

行春やいせの便もあまたゝび　几董
松の月それさへ春の名殘かな　馬南
春の夜や杖曳たらぬかもの町　嵐山
苗代や鞍馬の櫻ちりにけり　蕪村
若竹や暗がりはしる水の音　甘地 鳳背
口の洩ラで里守神の新樹哉　帒布

あゝ僧、石味因果に何ありや。と問に

あさましや谺も同じ雉の聲　加古川 半捨
さしわたし六尺ばかり梅の月　洪園
鴈もまた鳴や沼田の朧月　五橋
遲櫻なしに交りて咲にけり　高砂 布舟
(原註)梨

尾上鐘

冴けるは此鐘なりし夜下の霜　馬南
山清水轂左りへまはりけり　結城 雁宕

關の戸に秋風はやし麥畠　江戸 泰里
今朝秋としらで門掃男哉、　存義

同性俳なたしみ、此頃改名して羅音といふといへり。余曰、藤羅もさ音なし。いがなればさ、それこそ俳いさびしみなれさ、此一句に

鶯きて

我のみの身にしむ風や蘿の音　娼吏
五加木垣隣に酒を買せけり　蘿音
家主の摘にわせたるうごき哉　キ董
力入て鐘つきにけり朧月　生野 素由
散てさへうきに椿の落にけり　五丸
蝶の來てこの山ざとの春邊哉　跨仙
山吹や鍋炭流す人は誰　竹也
和らぎし水より出て芦の角　京秀
菜の花の一反ばかり盛かな　豊岡 東走
谷河の幅廣〳〵と夕がすみ　髭風
烏帽子着た人の影あり夜の梅　翠樹

桃の花一條殿の覺かな　嘯山

名月や源ちかき御溝水　武然

洛より嵯峨へかへるとて、人〴〵に申のこす。

別路に露はあれども雪駄がけ　雅因

日に逃てむしの啼ねや艸の露　秀遊

白萩や露ふる庭の草の中　南雅

白露の命はありて枯木哉　來雨

達磨忌を壁のなごりやきり〴〵す　嵐山

凩に負ぬは松の力かな　湖柳

やぶ入の藪かきならす蕗臺　二貞

櫻〴〵本尊覗は釋迦如來　キ董

我魂と人や見るらめ鵜の篝　いせ 賜馬

蠅打をのがるゝ蠅の命哉　淵李

溜り水股かけてや雲の峯　宜路

ほとゝぎす舟さし向し淀の端　蘆隱

岡に出てあらはに鹿の啼夜哉　自在

朧月淀のわたりの水の音　德野

唐音も少しいひたき牡丹哉　管鳥

萍や風にゆらるゝ葉も花も　文皮

白雨にしばらく土の匂哉　德圃

獨り出てかたぶくまでや夏の月　舞閣

客僧よ宵に申せし鹿の聲　明五

題禰宜扇

香禰宜の畫も蚊を打あふぎ哉　呑獅

春夏秋

帆をはるとまでは見えしかおぼろ月　浪花 一鼠

暑き日や野邊行人の見へてなを　丶

竹深しいなづま薄き夜明がた　几董

九月十三夜

後シテの面や月の痩男　丶

牡丹散て打かさなりぬ二三片　蕪村

木槿にも松にも露の一夜哉　浪花 米園

よき友のくすし見へけり日の盛　馬南更 大魯

秋惜しと一聲むしの鳴音哉　浪花 大魯

七種の花の夜明やわたり鳥　女 ため

朝露や是も案内の不調法　雄山
白髪にもならで戻〻や鉢の兒　羅川
孫の手をかふとて老の踊かな　樵風
押わけて他宗の通る十夜哉　一鼠
動かねばとんとうごかぬ柳かな　石(カ)漱
蟬の音に人も喘ぐや鳥羽繩手　寸馬
月と水の中を隔る落葉哉　亀友
旅人の互に名乘夜寒かな　呀我
入相はかねて覺悟や三井の秋　入江
やぶ入の兒に馳走や釣小ぶね　魯文
山吹や谷一筋の春の色　五帛
風折〳〵ともし火見する若葉哉　生佛
花散て今やつゝじのよしの山　魚波
澁柿にけふも暮行鳥かな　二柳
蕣の咲ほど咲てあれにけり　一鼠
しらぬ間にまはりし舟や夕霞　赤羽
傘さしてけさも花見の幾群か　雄山
降うちに降出す音や五月雨　玉東

てゝら干す竿ひや〳〵と秋の梅　見道
大佛のはしら潜るや春の風　浪花 二柳
みじか夜に敵の後を通ッけり　儿董
秋の夜や母につかふる琵琶法師　丶
大風のあとの月夜や鹿の聲　但馬 寒秀
しほたれし我太布の暑かな　越中 直生
松一里歸路暑き日を荷ふ哉　加賀 麥水

四天王寺

未來記にありや彌生の時鳥　三四

浪華眺望

若葉こし甍こしてや西の海　一音
果なしや今朝となりても啼蛙　曉臺
中〳〵にしらでもよきに秋の暮　樗良
我ものに手折はさびし女郎花　東武 蓼太

ことし岡崎の春夏を訪ひて、此二句を聞。

濱道や砂の中より綠たつ　蝶夢
三條へ出てこそ見たれ初茄子

ひがし山の秋なつかしく出て、例のてふむ庵に立よりしに、寒卿(マヽ)といへる題を探りて

何急ぐ家ぞ燈ともす秋の暮　几董

折から涙花より文のはしに

霧雨に小室うたふは誰が馬　舊國

澁柿や街道中へ枝をたれ　蝶夢

ちかき世の頃まで、ともに風流をかたり合、あるは席を同うせしも、今は世になき人のかたみとなれる、二ふし四章をかひつけ侍る。

降とのみ思ひし春も一夜哉　移竹

おもいもの人にくれし夜時鳥　太祇

耕に馬持し身の嬉しさよ　召波

我宿の其又やどや蝸の内　達布

はたとせばかりむかし、亡父が歳暮に

牛馬には師走のありて寶哉　几圭

於夜半亭雨唫　三十六句

頭へやかけん裾へや古衾　蕪村

霜に聲あり我床の下　几董

ふしゝげき竹を簀(アジカ)に組わびて　ヽ

口頭の狸來ずなりにけり　村

いざよひの心地更たり宵ながら　ヽ

風ひや／＼と漕かへる舟　董

穢(ウ)多村に續(キ)て秋の帘　ヽ

施行のあとの箒塵取　村

告子に才ある聟や撰らん　ヽ

三たび迷へる哥の占かた　董

燈盞を鐘鳴方へかたぶけて　ヽ

此夜樂天江州の司馬　村

隣から雪折竹を起しつゝ　ヽ

立小便の答へ高／＼　董

京橋や河内路かすむ昏の月　董

花落鳥啼開帳の損　村

とろゝ招〃音春深く聞ゆなる　ヽ

ナ

山をはなれて坂にとりつく　董

鑓持の痂氣いたはる艸枕　ゝ

冬の日なたを見失ふたり　村

古家のひづみ直しぬ兎角して　ゝ

小社のぬしの付ィて狂へる　董

みじか夜を倒臥たる禿ども　ゝ

釣瓶に魚のあがる曉　村

奈良の鹿物くるゝやと待貞に　ゝ

なきあと訪ふて露にイム　董

椎の木も月洩秋と成にけり　ゝ

離宮尊とく守護申つる　村

いでさらばひさげ〔(原註)提器〕の酒を盡べし　ゝ

もし此處にちか道や有　ゝ

ウ

たゞ獨り法師なる身の田を植て　村

翌も降べく雲かゝる峯　董

關札に蔦居させじとおもふらん　ゝ

上下着たる百性(姓)の顔　、

ありふれた鯛の料理も花の時　、

せみの小川の水ぬるむ春　執筆

洛北書林　橘仙堂夜

續明烏（ぞくあけがらす）

甲・乙　几董

崑岡玉採之有餘、いづみの杣しげき宮木は、ひくともたゆることなしと、風雲の吟猶かくのごとく、花の春・月の秋、をりにふれことにのぞみて、むなしくすぐしがたきこゝろより、風に歎き鳥を憐む。其情・そのすがた、やまと・唐土のうた、我筑羽(波)の一体に及ぶまでもかはらざるをや。ひと日客来りて、俳諧の虚實を論ずるのつゐで、世に詩哥の虚實あるは花實配當など、ひとつに混じとくものありといふ。おもはざるの甚しき。周子が虚實は境趣をのべ、紀氏が花實は心詞をいふか。支考が所謂はいかいの虚實は我いまだしらず。後鳥羽の上皇の勅問に、定家の卿の答させ給へる、花山の僧正が哥のまことすくなき、其誠すくなきが哥也とかや。向上の一路こゝろわきがたし。しかはあれど詩や哥や聲の教にして、教戒の端といへれば、此境に遊ばんこそ風雅正第一義蹄(諦)とやいはむか。李白が白髪三千丈といひ、素性が血の涙落てぞ瀧津白河はといへるたぐひなるべくや。たとへば酒に酔るものゝ道路幾筋にも見え、燭のみつにも、ふたつにも見ゆるがごとき、酔中の誠とやいふべき。憂にせまり喜にたへずしては、しかならんかし。客またいふ。蕉翁の正調は俗談平話にありと。そも風流の一体なるを俗談平話にありとはいかにぞや。既、白氏も白俗の名あり、老妻畫レ紙(テ)成ニ棋局ーといひ、神垣にくちなし色の衣きてもみぢにまじるなど撰集のうた、老杜といへども、後世卑俗のそしりをまぬかれず。雅中に俗あり俗中に雅あり。詞の雅俗、ことの雅俗あることを思ふべくや。又翁の句に、枯枝に鳥のとまりけり、といふを難じて、無味淡泊(泊)也といふものありと。海を語り氷を語るは其人によるべし、富士の高根に雪がふるとは、襁褓の孩兒もいふことを得べし。鸚鵡啄餘香稻粒とあらば何の感もあるまじ。一句の精神一二字の字眼あることをしらずや。前村深雪裏昨夜一枝開、ものゝふのやなみつくらふ小手のうへに霰たばしるなどにて、推しるべきか。

こゝに我友几董、さきに明がらす集をえらびて、諸哥の流行變化を論ず。そも流行變化とは何ぞ。氣運に隨ひて遷遷するをいふか。今や蕉翁の教化、人々えたりとする

も、また氣運のしからしむるか。今はた其續集をえらびて、これが序あらんことをもとむ。其撰することのかたき、裁するよりもかたし。猶、鴛鴦は可縫金針難度とやいはん。其句〻はみな鄧林の良材、いせの海清き緒の玉をえらぶ。其撰るおりにふれ乞ふにまかせ、いなみの〻いなみがたく、はゞかりの關の名もはゞからず、來客にこたふることばをもて、これが序とすといふ。

丙申之秋　　平安阮道立誌

續明烏集（甲）

春之部

名の高き遊女聞えず御代の春　宋阿

大雪のもの靜さや明の春　几圭

日を明て開て居る也四方の春　太祇

等持院寓居

元日や艸の戸ごしの麥畠　召波

元日や鶯もなかでしづか也　浪速 舊國

春なれて二日の門の樂しけれ　伏水 柳女

二日たつ春や禮者の酒きげむ　龜郷

宿直して迎へ侍りぬ君が春　月居

海老のつらにいせの初日や門かざり　白砧

小男に似あはぬ春の羽織哉　美角

年禮にすこしの野路氣はれたり　名古屋 子東

離落

鶯のあちこちするや小家がち　蕪村
うぐひすや障子に透る春の色　万容
うぐひすや門掃人の朝きげん　山石乙總
鶯の初ねや高雄むめが畑　道立
うぐひすの卯の時あめに高ね哉　几董
鶯にしのぶ帋衣の立居かな　蓼太

長安春色

いかのぼり都の空の曇かな　浪華霞東
どちらへもはしる麗や凡巾　、一鼠
里坊に兒やおはしていかのぼり　召波
耕や鳥さへ啼ぬ山かげに　蕪村
耕や世を捨人の軒端迄　大魯
古くさき梅の蒔繪や高臺寺　嵐山
いばら野や乏しき梅のあり所　移竹
梅の花あたら苔の閑きけり　定雅
折とらば憂人出ん垣のんめ　高砂布舟
火ともせばうら梅がちに見ゆる也　曉臺

卽心卽佛

いふて見よ口に酢を持梅花　几圭
院〳〵の梅ほころびぬ大般若　九湖
此比やむめ咲ほどの日の力　大石士喬
暮るゝ日や庭の隅より梅の影　楞良

畫讃

夜半の梅清女が局敲きけり　几董
梅がゝや必人の來るあらん　道立
八ッ晴に柳が青ふなりにけり　浪速正名
青柳やおもふにけさの長短　百池
つく〳〵と雨の柳を見る日かな　ナニハ梅
若柳枝そらさまにみどり哉　キ董
何となく二月になりし柳哉　乙兒
わりなしや海苔に纒ふうつせ貝　二柳
家遠し海苔干す女何諷ふ　移竹
白魚に思へばからき潮かな　浪花羅川
かしましく啼て寂しき蛙かな　、志慶
あとへ飛心は持ぬかはづ哉　、見道
啼蛙神もはじめて鳴ル夜哉　几董

橋の實は猶照ッて餘寒かな　伏水賀瑞
松風も春のものとて暖に　伊丹福丸
裏町や聲見失ふ田にし賣　、文雅
小晝時霞が中の鷄の聲　名古屋五周
山もとや歸らんとすれば夕霞　、白圖

奈良にとまりて
町ありく鹿の脊高し朧月　雷夫
一条と二條の間やおぼろ月　優方
春の夜も傾く月や連歌町　召波
夜を春に伏見の芝居ともしけり　田福
芝居出て吹るゝ人や春の風　季遊
𦾔賣の來ぬを恨みや春の雨　キ董
春の水草臥あしでわたりけり　百池
魚ふたつ試みがほや春の水　菊尹
我庭にあらばやと思ふ春の水　春蛙
春の野や水より續く里の數　大石家足
春深し松の花ちる城の堀　伏水車蟻
清瀧や夕月かけて小鮎とぶ　浪速弄我

茶はつまで身を宇治川の小鮎汲　、芙蓉花
人の失語は咎ずともあれな。
枕にもならふもの也春の水　無腸

春日晩望
日は落て増かとぞ見ゆる春の水　几董
梅おぼろなる野はづれの家　万容
田螺賣ル童が翁燒火して　白砧
小瓶の酒の雫つれなき　鼂鄉
北風に秋を催す夜半の月　九湖
蚯蚓音を鳴く門のせゝらぎ　竹裡
鶺鴒にしろがねくれて侍せ置　路曳
意地になりたる傾城の戀　春蛙
甥のとの世を捨んとは若氣哉　左繍
神谷の宿に一夜あかして　湖
ましら啼度〱寒く木の葉降　容
卅日わびしき社司の冬ざれ　砧

傳へ來し平民の公の太刀鎧　鄉
　集に洩たる哥惜むらし　董
道づれの御僧と語る花の陰　瓢子
　溫泉効なくつらき身の春　優方
出かはりの名殘も月の薄曇　嵐甲
　轍に窪ム立賣の町　石友
時人に諂ひかざる臺の物　雷夫
　醉ふて下部の刄拔けん　曳
漸暮て祭の神輿過る也　裡
　ゆふだち晴るゝ森の凉風　繡
鳥狩も世わたる種の醫師にて　蛙
　たゞ憂とに年子産ム妻　容
よそに聞砧も響く枕上　砧
　離あれたる朝顏の月　鄉
里に出て粮乞ふ露の身なりけり　董
　車迎へて院に召るゝ　夫
夜はいとゞ汗もしとゞに惱(腦)らん　湖
　梳らぬ髮の眉にかゝれる　その
しぐれ來る二階の下の夕凪　方
　木賃ねぎりて風呂いそぐ也　裡
淨留りを美濃商人の聲だみて　曳
　糊の力をたのむ山ぎぬ　砧
いかめしく烏帽子着て出る花の時　容
　暮閑に鋼のやきもの　夫

二月十四日さみのもふけ事して

長閑さは障子のそなたこなた哉　月居
　塩の水の日にぬるむ影　キ董
竹輿たてる榎が本の藤咲て　、
　どびろくといふ名さへおかしき　月
月の爲にうかれて人や呼ふらん　ゝ
　獵船見えぬ濱の秋風　キ
芒刈て假りに安置す彌陀如來　ゝ
　國司の情哥に聞ゆる　月
起臥も媿なくせし涙にて　ゝ

祭の車門過る也　キ
わか楓見こす旭のうつくしき　月
畫工をとめてけふも去ナさず　キ
麥飯に老のむら氣の茶の湯して　ヽ
遠き井を汲月の黄昏　月
垣間見し小姓を露の物思ひ　月
永き暇の御恩身にしむ　キ
花曇あゆみ勞るゝばかり也　ヽ
雉子ほろ〳〵と泊瀬の山越　月
兒の脩に逢たり春の暮　ヽ
馬塊の哀れ語るびんなさ　キ
添ましと伽羅をいろりに打くべて　ヽ
アと叫びつゝ孤さるらん　月
曉はとに尊き提婆品　ヽ
塩木を拾ふ佐渡の浦住　キ
一人の母持てゆからき世に　ヽ
公事に勝しを誰も悦ぶ　月
冷酒をあらぬ器に吞過し　ヽ
やりてが聲や月凄きまで　キ
十にたらぬ小判つれなきとしの暮　ヽ
是非出る舟の便もとめむ　月
雲すこし摩爺(耶)が高根にはれかゝり　キ
二聲ばかりほとゝぎすかも　ヽ
燭剪て獨り更ゆく窓の下　月
花と紐とく白氏文集　ヽ
櫻陰小町が姨の名をとはん　キ
あさぢが原に春の手枕　ヽ

我寺の鐘と思はず夕がすみ　蝶夢
鰐口の音暮るゝまで春日かな　松任 白烏

春行

古草に陽炎を踏山路かな　大魯
あだし野に春も更行土筆哉　浪速 白堂
燒寺も春來て萩のわか葉哉　キ菫
はしちかく涅槃かけたる野寺かな　敦賀浦 附鳳

ねはん會や上野の鐘の市に入　浪速 守一
網入ぬ海の凪見る彼岸哉　出石 霞夫
十ばかり班女が閨の蠶かな　浪華 龜友
傾城ゝ廓邊りのすみれ哉　竹裡
火のたへて鼠のはしる燒野哉　出石 長圃
わりなしや瘦て餌運ぶ親雀　伏水 御風
窓の月戀する猫の影ほうし　石友
轉び落し音して止ミぬ猫の戀　几董

重三

家〱や雛としもなく小豆飯　移竹
初雛や老の後なる娘の子　左繡
出代や燈はありながら手暗リ　眉山
出かはりや朝めし居る胸ふくれ　太祇(祇)

浪花より京に出るとて、伏見桃山に眺望す。

漕れ來し舟かへる見ュ桃のひま　一音
脊戸門のわからぬ家やもゝの花　半化

感偶

咲をさへ驚くに散初ざくら　几董
又とし待人にちる櫻かな　出石 士川
出て見れば夜も散なる櫻哉　呑溪
夜櫻や從者つれたる芝居もの　伏水 雨谷
三線に散も櫻の夕かな　浪速 老山
さくらかけ出れば暮のうき世哉　出石 馬麟
うき旅の我にはおかし櫻どき　月居
陰に寐て寐ぬ夜也けり山櫻　浪速 殘夢
櫻〱散て佳人の夢に入　無腸

はじめてよし野の山踏せし時

二日見ていかさま花のよし野山　几董
芳野よく見つれど花のあらし山　一音
あらし山おもふ日花に後れたり　嵐甲
山ざくら丹波の風はまだ寒し　雅因
見つれて花見にまかり帽子哉　太祇(祇)
花を見る人の袂に墨付ん　移竹
慰にうき世捨ばや花の山　風律

暮春

花ながら春のくるゝぞたよりなき　樗良
仁和寺の邊ッにくるゝ春もあらん　我則
行春や撰者をうらむ哥の主　蕪村
ゆく春は麥にかくれてしまひけり　ハリマ青蘿
惜しや春旅せで過し我は猶　伏水鷺喬
園の戸に鎖をろす春のなごり哉　几董
うら垣やしらざれ李日や倦る　麥水

丹波市といふ所の酒店にやすらひて

こちら向ヶ海老賣女藤白し　白笑
藤棚や酒賣家のとはれ良　キ董
花白き躑躅や蝶の色かろし　正白
つゝじ咲ぬ土に乏しき岩の間　集馬
菜の花に雨の近づくにほひ哉　大石士巧
菜の花やよし野下り來る向ふ山　太祇(祇)

春興廿六句　蕪村

菜の花や月は東に日は西に　蕪村
山もと遠く鷺かすみ行　樗良
渉し舟酒債貧しく春くれて　几董
御國がへとはあらぬそらごと　村
脇差をこしらへたればはや倦し　良
簑着て出る雪の明ぼの　董
仁和寺を小松の里と誰かいふ　村
戀しき人の馬繫ぎたり　良
葺わたす菖蒲が軒をしのぶらん　董
雨にもならずやがて燈ともす　村
尺八の稽古くるりと並び居て　良
賊とらへよと公の觸　董
早稲刈て晩稲も得たる心也　村
天氣の續くあふみ路の秋　良
門前の舟とき出す月の昏　董
弟子の僧都はよき衣着て　村
花の中家中の衆に行あひぬ　良

歌舞妓のまねのはやる此春　董
永き日や蒔繪の調度いとはしき　村
御法の道に心よせつゝ　良
古郷の妻に文かくさよふけて　董
若大將に顏まれし身の　村
酒一斗牡丹の園にそゝぎけり　良
日は赫奕と佳墨を摺ル　董
翌ははや普陀落山を立出ん　村
豆腐に飽て喰ふものもなく　良

續明がらす

夏之部

郭公待や都の空だのめ　蕪村
ほとゝぎす山は女松の景色哉　名古屋 士朗
山寺や門を出てゆく子規　イセ 坡仄

長安万戸子規一聲

ほとゝぎす南さかりに鄙曇　曉臺

詩仙堂の邊にて

ほとゝぎす鴨河越ぬ恨かな　几董
物がたき老の化粧や更衣　太祇
あらためた手は膝に有更衣　可重
花守のけふ申上るほたん哉　正名
ねたまるゝ人の園生の牡丹哉　キ董
園ふりてよもきが中の牡丹かな　士川
花過てわか葉に安き軒端哉　浪速 双魚
卯花の滿たり月は廿日頃　月居
卯花に山鶯の谺かな　五雲
おほかたに樹ゝの名しるき若葉哉　一音
若葉山國にめでたき一つかな　名古屋 騏六
夏の山たゞ峰まろく成にけり　、宰馬
あなかまと青梅ぬすむきぬの音　無腸

孤峰

夏山や登りて向ふ峰ひとつ　道立
うれしさは我丈過しあかざ哉　宗足
常にうき隣越す茨花最中　舞閣

菴を崩す音閑也夏木立　嵐山

かんこどりあすはひの木の枝に啼　二柳

おぼろ月も闇とかはりて短夜や　維駒

短夜や朝めし出來て物しづか　フシミ斗唫

短夜や淀の御茶屋の朝日影　大坂雄山

みじかよの香をなつかしみ一夜莖　キ菫

不樂閻浮提濁惡世

此里の住居いぶせし麥埃　蝶夢

麥うたや誰とあかしてねむた聲　移竹

わかたけや橋本の遊女ありやなし　蕪村

若竹は月にやしなふ景色哉　曉臺

簀にうつす桑の中より蝸牛　霞夫

でゞむしや蛙の後の雨つゞき　伏水山肆

花鳥もきのふと過てはつ鰹　芙蓉花

旅行

蚊やり火やよき宿を取後れたり　路叟

暗ッへうかと這入ばかやりかな　普立

かやり火の蚊に連出るあるじ哉　管鳥

蚊遣火や勤はじまる國分寺　浪速五晴

背戸へ出れば門へ出れば蚊の鳴音哉　正名

端午

誰が子ぞ太刀よく似合菖の日　大魯

あやめ葺て往來の人を詠けり　乙總

海近き榎が下の幟かな　南雅

とく時の心安さよ笹ちまき　ナニハ袖

月出て手縄もつるゝ鵜舟哉　鳴鳳

飢鵜の篝かき消ス早瀬哉　李康

上手ほど罪恐しき鵜縄かな　多少

川風や鵜縄繕ふ小手の上に　キ菫

住吉御田植

早乙女やこれらも神の遣はしめ　伊丹東瓦

早乙女や朝澄ム小田の水鏡　瓢子

とく〳〵小雨をふくむ杜鵑花哉　志慶

夕殿螢飛思悄然

あるじなき几帳にとまる螢かな　几董

あさましや晝の螢の寐もやらず　月溪

軒遠く手をはなれたる螢哉　李溪
竹むらや降出し雨にとぶ螢　車蟻
玉あらば玉洗ひたき清水かな　江涯
立去れば岩にかくるゝ清水哉　士喬
後から馬の面出すしみづ哉　一鼠

白骨觀

夏痩の我骨探る寐覺かな　蓼太
みどり子の墨かひ付しさらし哉　、
蝿うつていさゝか穢す團かな　几董
うき人の日影をかざす扇哉　士巧
扇かへて君があだ書見るのみぞ　白砧

夏日い長きを愛して對酌の卽興

おもふほど風なき君が園かな　百池
へだてゝ語るうすものゝ帳　キ董
木立ふる月半輪に傾きて　、
そなた下りに雁わたる也　池
暮の秋愛する瓢からびたり　、
貧を諷ふて獨リ座し居る　キ
獲（エモノ）して家路に歸る夷ども　キ
雪や降べき嵐なるらむ　池
いつとなく沙汰も止ミたる彗星　キ
無縁寺といふ寺の建けり　池
御忍ひの車物見ゆるきのふけふ　キ
二度の返哥に心置るゝ　池
ひそみ住世は蘗の花の陰　キ
暁あたりの月ありやなし　池
狼の旅人なやます秋更て　キ
弓矢をたしむ古き宮守　池
花咲て庭の紅梅うつろへり　キ
奥ある春の景ならまし　池
遲キ日を頭重しとかこちける　、
身は便なき室のうきふし　キ
別路の酒に兜のゆるぐらん　池
燭をてらして燃す一卷　キ

夜は既明がた近き坊の窓　池
慈悲心と啼鳥やなつかし　キ
薬艸に親の親をも慰つ　池
高札たてゝ稲を施し　キ
堀池の水まく門の夕月に　池
棺を送る桃灯の露　キ
黒髪を無下に曲ゲたるにほひなき　池
温泉の舎に戀をしつゝも　キ
限ある日數も積るみじか夜や　丶
事淸めたる鍛冶が注連縄　池
按察使は才ある人と聞えつる　丶
利根に入間に雪解の水　キ
山つら／＼暮ゆく花のおぼろ也　同
書屋に惜しむ客中の春　筆

我宿は下手の建たる暑かな　田福
肌隱す女の罪のあつさ哉　江戸　田女

あら暑し油しめ木の叫音　伏水　呉郷
暑キ日に飽し茄子の煮物哉　定雅
ぬしのない膳あけてゆく暑かな　几圭

河合森にて

ごほ／＼となる神遠し蟬の聲　几董
夏川や流るゝものゝうつくしき　宋阿
川風に烏帽子かゝへて御秡（禊）哉　既白
筆のもの忌日ながらや虫拂　召波
飾足らぬ女ごゝろや土用干　鷺喬
施米する日を違へずやどこの僧　白笑

納涼

涼しさや晝見し門に月の影　美角
夜涼や念佛申て居るもあり　出石　左彦
うか／＼と南草に醉や朝涼　召波
涼しさやよき碁に勝て肱枕　雨谷
すゞしさや旅に出る日の朝朗　樗良
夕立や草葉を摑むむら雀　蕪村
ゆふだちの露の間また照日かな　道立

夕立や下京は艸の露もなし　附鳳
白雨や膳最中の大書院　太祇
ゆふだちに跡かたもなし雲の峰　正白
土さへわるゝ暑き日に
龍の落し畑見に行や雲峰　几董
涌かへる田毎の水や雲のみね　子曳
雨遠し入日に向ふ雲峰　我則
雲の峰高觀音をはなれたり　八田氏 龜友
さ聞へけるに對して
しづかさや湖水にうつる雲峰　霞東
森ある方に聲遠き蟬　几董
乘物の鸚鵡に餌をや與ふらん　大魯
くすしの刀さす隙もなし　東
適〳〵の一夜を雨の月見して　魯
踊る鱸を調す舟ばた　東
おしてるや難波の相撲弓とりて　東
夏は度〳〵着かへるがよし　魯
貴人の消るばかりに孕みつゝ　東
けふは横川の返事聞えむ　魯
雨となり風となりたる雲いづこ　東
珠數かけ鳩の松に來て鳴　魯
柴の戸も百日あまり住なれて　董
我身の春の遲き明ほの　東
怠らず佛に花を奉り　董
むかしあだ名の蝶を憐ム　東
戀せじと思ひし日より御所の月　董
ならす扇にかよふ秋風　東
露重くゆふべの小萩ちりにけり　魯
憐わびしき雪隱の壁　董
兄弟が國を出たる其後は　東
三年ふりゆく老の蹇　魯
史記講ず博士に酒を勸ム也　董
かゝげて廻る雨のともし火　東
さよ中に一聲鳶のあやしけれ　魯
紺屋が背戸の桃の茂葉　董
此頃の日さへせはしき節句前　東

只よそながら娘見せ置　魯
拾がての園も人のあいしらひ　董
宗旨の僧に月の宿かす　東
芋喰ふていもの狂哥を詠れたり　董
村の祭の道造り居る　魯
いく世經て形おかしき行基燒　東
物好ミめす君が明くれ　董
辟其角花見の庭に侍坐すらん　魯
一斗百篇英雄の春　執筆

今はむかし、ひさ日几圭老人とゝもに、嵯峨野に分入つゝ、雅因亭に遊び侍るに、終日芝を談じて漸暮に及びぬ。あるじは例の客を愛して厨にたもさなり、さすがに柚の花のにほひも昔しのばしきに、堂上いまだ燈もさらで、いさおぼつかなくも只ふたりのみ向ひ居たるに、山ほとゝぎすしばしば過て、三つよつふたつ螢の飛こふなど、見すてがたくやありけん。

涼しさや闇の野づらも詠られ　几圭

茲にこの頃、几董が春夜樓に遊びて、かゝるむかしもありけるなど語り出るほどに、心早きあるじ耳さがめて、いでそはなつかしさて、すなはちワキの韵を次るより、はからずも兩吟六くの行なんぬ。されば老翁無爲境裏に在て、嘸わらはんなさ、故人二柳庵哭て其笑を和す。

二柳庵のむかし語に、老父が嵯峨のゝ吟を聞侍りて、すゞろ懷古の情にたえず。いく度も吟じ返して、終に句を次とにはなりぬ。

共さまおもふ柿のかたびら　几董
盆の市人のとだへはなかりけり　二柳
皆蕣に起そろひつゝ　、
梨壺はいかなる月に更ぬらん　董
ざれ繪書たる扇拾へり　、
大德の御法もけふを限りなる　柳

雨もや降とかざすきぬがさ　、
乞食なき国に遊女の零露て　董
起臥しげくかるゝ黒髪　、
白妙の巫殿に物申　柳
かへり花咲非手の山吹　、
冬は鶺鴒の尾のいそがはし　董
手人まじりに藏普請して　、
月朧よれや甕の酒漉ん　柳
はじめて得たる一寸の鮒　、
仁和寺の櫻はまだし花の嵯峨　董
雛まつれる田家やさしき　、
宿かりていづこに鑓隠すべき　柳
路に後れし妹や晴る　、

下略

續あけ烏（乙）

秋之部

闇となりて猶おもしろや星の客　道立
篠の葉の露にも星の一夜哉　八田氏 亀友
君見よや只一筋にあまの河　万容
たらちねを夫婦と見るやほし祭　その
はし立や曉かけて天の川　志慶
いもの葉の露や銀河のこぼれ水　自笑
見へそめて今宵になれり天の河　鷺喬
露の間をめでたきほしの契哉　亀郷
ほし合のそれにはあらじよばひ星　左綿
船に寝て古郷百里あまの河　白砧
鵲の長柄もかけよほし一夜　大魯

浮儿渡香のつまあはは、誰もすなるゆふべ、例のくるはしうてやみぬるぞ、いさむくつけきや。

梶の葉に硯はづかし墨の糞　無腸

あさがほがまいりて星の別哉　二柳
よみ哥をひそかに星の手向哉　几董

六日も常の夜には似ず　とロずさみつゝ、美角・定雅の二子を訪へば

六日たつ秋のこゝろやほし祭　美角
うすき影踏ム月の宵過　キ董
車押廣野ゝ薄かき分て　定雅
借もて佩る太刀の重たき　角
餅買ふて酒のむ人をわらふ也　キ
雨を見あはす市のかたはら　定
よこさまに轉んでおはす石佛　角
腕のきぬの血に汚つゝ　キ
憂事の數〱せまる筆とりて　ヽ
あり明の灯のもゆる土器　角
しみ〲と竹に時雨の音す也　ヽ
鳥羽田の沼に鴨の下リ居ル　キ

百姓の心に染ヌ家出して　ヽ
只きろ〱と齒の白き顔　定
うたかたのあはぬむかしの懐かしく　角
園そのまゝに朝戸出の花　キ
月かすむそなたや鈴鹿坂の下　定
大名通る春も過がて　角
子供等に着せる木綿を織仕舞　キ
義理ある人の年忌弔ふ　定
卯花の盛の家に宿かへて　角
世はかくもこそいせが詠うた　キ
翠のなき醫師の娘哀なる　キ
たそがれ暗く雛の眉かく　角
此比や木葉落しの吹募リ　定
武者六七騎門にイ　キ
釣鐘を夜半にまぎれて盗らん　角
月を南にかくす村雲　定
後れては舟の入來る初汐に　キ
秋うそ寒き旅の水風呂　角

ひだるさを女なる身のしのび居て　定
　御能三番時うつりけり　キ
蠟燭の風に流るゝ夜の花　角
　聲なき蝶のねはぐれて飛　定
春の野に乞食僧の連哥聞　キ
　他の國なる伯夷叔齊　筆

遊相國寺　大魯

花ながら秋となりけり池の蓮　菫
　篳篥聞ゆ風のひやゝか　几
月の夜にわかき人〱宿直して　、
　ぜうじの間に鼠かくるゝ　大
地黄煮る酒の匂ひのしたゝるし　、
　曇ればいとゞ暮安き冬　几
一群に一向宗の京のぼり　、
　かほよき女ちんばかくして　大
住荒し傾城町の夕日影　几
　たへて久しき祭いとなむ　大
田哥すら君めでたしと諷ふらん　几
　むら雨はれて山ちかく見ゆ　大
やばせ舟喧嘩を乘せて漕出す　几
　錢ぬすまれて呵るゝ僧　大
とある時嘘の諷文わすれたり　几
　月やいづこに元日の晨　大
若水を野に汲宿の花の春　几
　着ならし衣冴かへる袖　大
飛脚來て父なきよしを語ッける　、
　世をも知ります座主の御心　几
墨氷る寒夜の外面靜にて　大
　鏡に恥よそら泣の顏　几
夫持ぬみそじの浮名立けらし　大
　長者をにくむ人のさかしら　几
信濃路や里にあまれる牛の數　大
　荊をみだす山かげの秋　几
入月に出る日かはる雫ながら　大

わきて露けき二位殿の舟　几
土器を殘すくなにあやまちて　大
　としゆくばかり阿房也けり　几
白雪に水風呂流す夜半過　大
　前の圓司の明日は立るゝ　ゝ
病中を中わけなる哥よみて　几
　菓子の甘みにしめる水引　ゝ
雨の花晴なば咲ん粧ひに　大
　二番鳥の友さそふ春　几

立秋

秋たつやきのふのむかしありのまゝ　千代尼
雨ふるやことに秋たつ日也けり　名古屋 斗拙
かたびらの身に冷じき假寐哉　舞閣
船頭のかたびら着たり墓まいり　斗唫
鼠尾草や身にかゝらざる露もなし　曉臺
あはれ世や麻木のはしの長みじか　也有

朝比奈さ鬼の首引したる繪に

あさがほに引勝れたるしをに哉　二柳
蕣の聖は見ゆれと人の上　一鼠
蕣や明星すめる罘罳　龜友
蘿落て朝がほ淸し蚊屋の外　キ董
朝顏に島原ものゝ茶の湯哉　無腸
島原や踊に月のむかし顏　几董
ひたと犬の鳴町過て躍かな　蕪村

松が崎にて

手に袖にはね題目の踊哉　斗文
うき人に手拍子のあふ躍哉　百池
一夜づゝ闇になりゆく踊かな　伏水 李收
踊見る人のうしろや秋の闇　定雅

自適

三十を老のはじめやすまひ取　道立
踏ンばつて四十を越えぬ相撲取　羅川
引組で猶分別やすまひとり　太祇
餘所心やたけにはやる角力哉　士喬

やはらかに人分ゆくや勝相撲　几董
乗かけの角力に逢りうつの山　舊國
負まじき角力を寐物がたり哉　蕪村
おく露のこぼれてひらく桔更(梗)哉　出石 有橘
すゝき吹中にも立りをみなへし　、雪弓
雨の日やもたれ合たる女郎花　九湖

憶鬼貫

さびしさの終に穂に出る薄哉　芙蓉花
待るゝと思ふ夕のすゝきかな　霞東
なでしこやをばなが袖に咲殘　家足

剃髪の人に

花ならぬ身とな思ひそ薄の穂　賀瑞
秋萩のうつろひて風人を吹　樗良
夕月に誰やら戀し萩の原　美角
鳥濡てたつや朝日の小萩はら　ナニハ 稀聲
小車の花立伸て秋曇り　ナゴヤ 東壺
寐覺して虫聞秋となりにけり　イセ 茶州
更る夜や艸をはなるゝむしの聲　イガ 桐雨

一日の榮といへる中に

生垣にはさまれて咲木槿かな　正白
發心の人見送るや木槿垣　路曳
やぶれ箕やいさゝかながらとし綿　竹裡
木綿とる大和河内の日和かな　霞夫
秋の客淋たるまゝに日暮たり　名古ヤ 亞滿
鳥は草は何やらかやら秋の野ら　眉山

河邊逍遙

エミたる限り散ゆく花火哉　士川
花火ちるやしのびの君の見ゆるほど　白堂
花火盡て美人は酒に身投けん　キ董
物焚で花火に遠きかゝり舟　蕪村
利酒に醉ふてもどるや秋の市　ナゴヤ 臥央
父が隣家の新酒のうれしさに　召波
入日さす鱸の口や魚の店　サガ 喜水
紫のひしこに勝やとうがらし　舊國

郊外

牛蝿は手をたのみつあきの風　移竹

振上た我手詠めつあきの蠅　桃喬
網をすくともし火あをつ秋の風　乙總
秋の風芙蓉に皺を見付たり　蓼太
舟待て脊戸もさゝれず秋の暮　一鼠
戸口より人影さしぬ秋の暮　青蘿
とにふれ日にもよる也秋のくれ　雨谷
大寺や僧にも逢ずあきの雨　山肆

清光

嵐吹草の中よりけふの月　樗良
名月や君かねてより寢ぬ病　太祗（祇）
けふの月關守人もさぶらはず　我則
夜鳥や曉かけてけふの月　万容

良夜訪ふ方もなく、訪來る人もなければ

中〳〵に獨なればぞ月を友　蕪村
月の秋や二日とほかのはつかのと　無暘
月は秋は物思へとのなんのかの　道立

湘上眺望

名月や辛崎の松せたのはし　几董
十六夜やしばし黑谷眞如堂　廣島 青雨
黑谷の初夜聞月の野川哉　キ董
風かなし夜ゝに欠ゆく月の形　曉臺
物毎の滿るはいやし十三夜　宋阿
後の月翌は秋なき思あり　仙臺 白居
鳴鹿や月夜ながらに小雨降　士巧
聲かれて松に背を摺小鹿哉　守一
啼度に草の露ちる鶉かな　浪花 魯文
松むしやともし火青き西の對　、弄我
二ッ置く人の心や種ふくべ　、生佛
かたはらにかぼちや花咲く野菊哉　召波
雨にぬれ風に吹るゝかゝし哉　田原 野菊
二三尺秋の響きや落し水　月溪
からうじて山田實のりぬ落し水　几董

旅中佳節

馬の背の高きに登り蕎麥の花　移竹
盆ほどになるてふ菊の蕾かな　、

手折拾る山路の菊のにほひ哉　几董
其中に白菊の名を問れけり　月居
佛壇に十日の菊のにほひ哉　蝶夢
鷄頭に鼠のつくや持佛堂　御風
けいとうは始終を花の盛かな　德野
はなれ家や門田のわきの鷄頭花　文皮

倣老杜擣衣

よその夜に我夜後るゝ砧かな　大魯
片〳〵は月夜の暗のきぬた哉　菊尹
雨そふて悲しさつるゝきぬた哉　鳴鳳
小夜砧隣の少年戻りけり　春蛙
うき人を心にこめてきぬた哉　正白
ひとの國に漸馴るゝ夜の砧哉　キ董
憂我にきぬたうて今は又止ミチ　蕪村

秋聲

逢坂の町や針研ぐ夜半の秋　几董
昏に露置夜半となりにけり　我則
朝寒や背戸の芋畑佛の口　嵐甲

あたらしい綿入着たる夜寒哉　月居
稚子のともしけちたる夜長哉　士川
秋の戸に倚ル袖乞の皷かな　鐵僧
秋もはやはつかに殘る蟲の聲　松宗

於金福寺興行

ともし火にしたしくなりし夜寒哉　正白
　書をよむ窓に雨間の月　松宗
籠の中の鶉おもひを鳴ならん　道立
　旅はめさむる業ぞ多かる　白
塩竈に鯛の濱焼所望して　几董
　若殿ばらの朝狩に出　立
春風にかろき衣紋を吹れける　白
　ちやうちん霞む島原の口　董
うき戀の果や乞食の物狂ひ　立
　誰か佛の道に入らむ　白
世につれていく秋五位の身を經りし　董

車に月の影しらむまで　立
鈴虫の聲ふりかはす淺茅生に　白
平家語りし人消えにけり　董
武者修業我國遠く過來つゝ　立
聟撰ム館に年を迎へて　白
花鳥にわか菜を祝ふ賀振舞　宗
春の夜深く和琴聞ゆる　立
おもしろや加茂の川瀨を歩わたり　白
市の奴とやつす法の身　董
松の戸に妙なる歌をらく書し　立
葎に埋ム二筋の路　白
さみだれに草鞋を重く履わびて　董
つらさあまりに飲習ふ酒　立
來ぬ人を梓の弓にかけて見む　白
同じ隣に中のよしあし　董
煤はらひ雪の降日に取かゝり　立
癩疵いたがる顏のきたなき　白
たそがれをねだれ込れし十三夜　董
としは菊の出來榮もなし　立
秋過て鶯見たるあたゝかさ　白
田舍歌舞妓の華のよすがに　宗
こゝろにもあらぬ戀する哀也　董
鼻に袖置くすゑ摘の君　白
入日さす過りけうとき花の陰　立
長柄の傘をひらくかけろふ　董

曾久安計可夏壽

冬之部

ともし火に竹の葉ずゑのしぐれ哉　蘭臺
朝淨うれし夜の間の初時雨　正白
聟入の宵月細し初しぐれ　鐵僧
野風吹室町かしら初時雨　几董
宵〳〵の砧もうとし初しぐれ　我則
天地をしばらくたもつ時雨哉　几圭
一夜づゝ淋しさかはるしぐれ哉　宋阿

嵯峨の小春都に近き心かな　霞夫
初冬や兵庫の魚荷何〳〵ぞ　召波
似た事の三つよつはなし小六月　千代尼

遠景

冬ざれやきたなき川の夕烏　定雅
舟慕ふ淀野ゝ犬や枯をばな　几董
斧の音深くも入らず冬の山　名古屋 事紅
一むしろ芋ほす寺の冬構へ　万岱
御影講の花のあるじや女形　太祇
姑の鬼もこもれる十夜かな　下総 隣鶯
姑の出た跡ぬくき火燵哉　ハリマ 半拾

夜坐

四つに折ていたゞく小夜の頭巾哉　無腸
我頭巾うき世のさまに似ずも哉　蕪村
紅閨の足につめたき頭巾かな　キ董
關守のゆふべかしこき頭巾哉　出石 東季
牛買のにくゝも着たるづきん哉　乙總
罪深き小袖の下の紙衣かな　管鳥
紙子着てとのやう聞老女哉　山肆
着て見てはとしも止メる紙衣哉　一鼠

無心無佛

こがらしも人の付たる名也けり　几圭
こがらしや川吹もどすさゝら波　百池
凩のしきりに慕る入日かな　志慶
凩や松一本あれば松のかぜ　殘夢
こがらしや油からびし石地藏　龜郷
凩や日も照ッ雪も吹散らず　楞良

ある方にまねかれて

炉開や紅裏見ゆる老のさび　几董
炉びらきや炭の香守る人の良　霞夫
もの思ふときれや炭の發ル音　鷺喬
埋火や助炭に殘る凩の音　十二八 百非
炭を挽下ㇸゆがまぬ心かな　召波

十月既望

とばさへなくて月見ル寒かな　子曳
一夜ふた夜降ものかはる寒哉　東瓦

麥時の火繩に寒きけぶり哉　九湖
かへり花散日は知らずなりにけり　ナニハ守大
さし向ひ噺の消る霜夜哉　瓢子

老懐

うか〳〵と生てしも夜や蟋蟀　二柳
甘なうて薪に霜のきり〳〵す　霞夫
笘撫て見るや霜夜の山かづら　山翁
霜の月漁村は地ツチに沈みけり　一音
霜に歎ず蝉髭を握りけり　大魯

洛東の正阿彌が樓上に會して

日の筋や落葉つらうつ夕眺　曉臺
人にもよらず冬の蚊柱　几董
よき酒を賣肆の軒ふりて　我則
胡の國へ書もとめ去　蕪村
牧を出ていく秋駒の月にあふ　一音
露明らかに草高き原　則

夢に見し地藏を拜ム肌寒き　村
世になき夫の氏ぞ口惜し　臺
小ぶくさにさめぬ薫りをしのぶらん　音
はし居そゞろにたそがるゝ空　則
月にぬれて葬の莚秋ちかく　董
加持の奇特の帛を地にさす　音
筑羽なる萱ぶき二人屈ばや　則
罪もうれしき有職の身は　村
荏煎といふもの焦しぬる雨の日に　臺
法の因ミの一大事聞　董
花の客横川の寮に雛持て　音
すみれ摘なる透垣の下　則

巻半なる比、風雨はげしく、時ならぬ神のおどろ〳〵しうとゞろき鳴にぞ、俗打驚て筆をさし置ぬ。

冬夜興

彳ば猶ふる雪の夜路哉　几董
我あとへ來る人の聲寒　樗良

世に深く隠せし名をや尋らん　北野
百には過ぬ家居也けり　嵐甲
鯡切ル鍬にかゞやく宵の月　良
裸身を吹秋のはつ風　董

下略

はつ雪や消ればぞ又艸の露　蕪村
初雪やすゑの玄猪の荒ついで　斗文
降とけぬ雪におかしや簑と笠　太祇
修行者に此杖やらん夜の雪　んめ
夢とんで魂うづむよるの雪　道立

或時文のはしに聞ゆ。

雪にゆきまたけの股にたんまれり　大雅堂
積る後は只散までの小雪かな　美角
鮮き魚拾ひけり雪の中　几董
ゆりあはす簑のひまうつ霰哉　弄我
冬の情月明らかにあられ降　曉臺
雪に出て雪の見所いづち哉　一音
雪のくれ馬もひとつはほしきもの　蝶夢

遊龍安寺

鴛ゆくや夕日江に入水のあや　几董
水鳥のかしら並べし朝日哉　布舟
磯ちどり足をぬらして遊びけり　蕪村
冬の日やとけては氷るわすれ水　一鼠
切ためや花の根に添ふ薄氷　白笑
光るめり糙粏の中の薄氷　浪華 三曉
用水の用にもたゝで氷かな　霞東

夜行

松明消えて江の音寒し鴨の聲　雷夫
野の池や氷らぬ方にかいつぶり　几董
皮剝の業見て過る枯野哉　、
よは〴〵と日のゆきとゞく枯野哉　麥水
たのみなき若草生ふる冬田かな　太祇
冬かれや芥しづまる川の底　移竹
内海の櫂にちらりと落葉哉　几圭

西吹ばひがしにたまる落葉哉　蕪村

病後

から鮭をしはぶりて我皮肉かな　曉臺

乾鮭や琴に斧うつ響あり　蕪村

雪國へ歸る人あり冬ごもり　田福

夜を好ム我に癖あり冬籠　定雅

煮凍りや格子のひまを洩月夜　結城 雁宕

煮凍りや精進落る鐘の聲　キ董

月雪の身を香に匂ふ海鼠哉　士巧

ひたぶるに旅僧とめけり納豆汁　月居

鰒喰ふて酒呑ム下戸の思かな　太祇

鰒喰し妹が住居もあれにけり　嵐山

對僧

佛燻てさらに葱を煮夜哉　道立

鉢たゝき物に狂はであはれ也　家足

紛るべき物音たへて鉢扣　樗良

鉢たゝきうかれめに名を問れけり　可重

四辻にうどん焚火や冬の月　石友

冬木立月骨髓に入夜哉　几董

野行

ぬく／＼と師走日和や麥の丈　集馬

水仙にたまる師走の埃かな　キ董

寒梅や雪ひるがへる花のうへ　蓼太

寒梅や文覺行におとろへず　優方

うき人に年積りけりよそながら　百池

家の子に酒ゆるしけり年忘　士喬

醉李白師走の市に見たりけり　キ董

寺からも買に出けりとしの市　正名

年內立春の日禁庭を拜して

としの內に來にけり春の日の御門　袖女

としの夜や梅を探ッに花屋まで　田女

除夜

年ひとつ老ゆく宵の化粧かな　几董

とし守夜老は尊く見られけり　蕪村

一とをだも敎へを得しは、やがて師なめりとて、秋ごにあしの丸屋に魂むかへいとなまれしは、五十余人にみてるよしを、物のたまふ始に先いひ出られしぞ、いと有がたき例に人はいふめり。今はや廿とせのむかしとなりにき。几圭のおぢ、適、難波に來たらるゝごに、連歌のあそび夜となく晝となく、人〳〵らあつまりて、すゝけたる耳をかたぶけ、句ごにめでむるものにもてはやせし。吾、其席にあれば必しも打えまひつゝ、若き人よ、さる句はかうぞつくるものなりなど、まめだちて敎へられしがうれしうて、ひたすら阿彌陀ほとけに崇まへしより、いつかなじまれて、さや〳〵しき古家をとひもし、やどりもして、かたらはれしものから、此句作るわざには、やがて師にてぞますを、このあそびわすれゆくめるまゝ、おぢにもうと〳〵しうてわかれぬ。さるをこの四とせがほどのゐなか住に、むかしのすさび稀〳〵いひ出るに、几董ぞ今の世にたぐひなきと聞て、をり〳〵文のいきかひして言かたらふも、おぢがむかしの契の末むなしからぬになん。ことし十まりなゝとせの手むけすと聞に、ありし世の俤、まづおもひいでられて胸つぶれ、何ごもえいはずなむなりぬ。

無腸隱士書

諸ともに記念としのぶ紙衣哉　芳馬

この句は亡父が追悼に、せうとの人の申出し也。今是に十七句の員を次、一折の俳諧となし侍りて、正當の日誦經の後、牌前に備へ、懷書の意を述るものならし。

十七年を鬢のはつしも　几董
月うつくしく御溝ゆく水
此夜誰秋風樂を籟やらん
藥艸履露の重〻を覺えけり
豆腐煮て黄山もとの家
這廻る兒を祖父のかしづきて
降らぬ五月の蚤多きとし
乘かけにいせ路の早苗見て過る
國替つらしし〻らぬひの果
移る世の遊女が心あさからず

讃佛乘の因みなるらし
禮いふてふせやを出る有明に
身はぬれ鹿のふたつ連ゆく
霧けぶる岸に米搗水車
はつせ詣と聞もうれしき
春やむかし斬相人も花の時
梧桐の几長閑也けり

安永丙申歳九月廿三日　　几董書

校合　　万容
　　　　白砧
彫工　　九湖
書林　　橘仙堂善兵衛
　　　　吉田九郎右衛門

寫經社集

蕪村

（寫經社集）

洛東芭蕉菴再興記

四明山下の西南一乘寺村に禪房あり。金福寺といふ。土人口稱して芭蕉菴と呼。階前より翠微に入ること二十歩、一塊の丘あり、すなはちばせを庵の遺蹟也とぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔やゝ百年の人跡をうづむといへども、幽篁なを一炉の茶煙をふくむがごとし。水行雲とゞまり、樹老烏睡りて、しきりに懷古の情に堪ず。やうやく長安名利の境を離る(るゝ)といへども、ひたぶるに俗塵をいとふとしもあらず。雞犬の聲籬をへだて、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家もちかく、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詞人吟客の相往來して、半日の閑を貪るたよりもよく、飢をふせぐもふけも自在なるべし。抑いつの比よりさはとなへ來りけるにや。草かる童・蓑うつ女にも芭蕉庵を問へば、かならずかしこを指す。むべ古き名也けらし。さるを人其ゆへをしらず。竊に聞、いにしゑ鉄舟といへる大德、此寺に住たまひけるが、別に一室を此ところに構へ、手自雪炊の貧をたのしみ、客を謝してふかくかきこもりおはしけるが、蕉翁の句を聞ては泪うちこほしつゝ、あなたうと、忘機逃禪の郷を得たりとて、つねに口すさみ給ひけるとぞ。其比や蕉翁、山城の東西に吟行して、湍瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に寒夜獨行の鉢たゝきを憐み、あるは、蔦を着てたれ人います　とうちうめかれしより、きのふや鶴をぬすまれし　と孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳ては、廊のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して湖水一望のうちに杜甫が眥を決(サキ)、つゐに辛崎の松の朧ゝたるに一世の妙境を極め給ひけん、されば都徑徊のたよりよければとて、おりおり此岩阿に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野ゝ夢のあとなくなりたまひしのち、かの大德ふかくなげきて、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なを翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨をよろこほひて亭に名いふなど、異くにる

ゝもさるためしは多かるとぞ。しかはあれど、此ところにて蕉翁の口號也と世にきこゆるもあらず。ましてかい給へるものゝ、筆のかたみになければ、いちじるくあらそひはつべくも覺えね。住侶松宗師の曰、さりや、うき我をさびしがらせよ　とわび申されたるかんこどりのおぼつかなきは、此山寺に入おはしてのすさみなるよし。此ころまで世にありし耆老の、ふみのみちにも心かしこきがものがたりし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく年月流去、水くきの跡などかのこらざるべき。さるを、無功德の宗風こゝろ猛く、不立字の見解まなこきらめき、佛經聖典もすてゝ長物とす。いかでさばかりのものたくはへ藏むべきなんと、いとさう／＼しき狂漢のために、いたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりとほろびにけむ、びんなきわざ也などかなしみ聞ゆ。よしやさは追ふべくもあらず。たゞかゝる勝地にかゝるたとき名ののこりたるを、あいなくうちすてをかんこと、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人ゝをかたらひ、かたのごとくの一艸屋を再興して、ほとゝぎす待卯月のはじめ、をじか啼長月のすゑ、かならず此寺に會して、翁の高風を仰ぐことゝはなりぬ。再興發起の魁首は自在菴道立子なり。道立子の大祖父坦菴先生は蕉翁のもろこしのふみ學びたまへりける師にておはしけるとぞ。されば道立子の今此擧にあづかり給ふも、大かたならぬすぐせのちぎりなりかし。

安永丙申五月望前二日　　平安　夜半亭蕪村愼記

山にかくれて淨土を修するにもあらず、酒をゆるして社にまれくにもあらず。蕉翁の風流をしたふ諸子とゝもに志を同うして、ことし卯月あらたに社をむすび、洛東一乘寺邑金福寺の殘照亭に會することゝはなりぬ。

植かゝるはじめはひくき田うたかな　　道立

夏もおくあるしほり戸の道　　松宗

茶のにほひかしこき人やおはすらん　蕉村
　車の用意いとしづかなり　田福
中河のわたりに三日の月を見て　几董
　鴈かあらぬか風遠き聲　瓢子
この比の秋に買置雜穀（三）物　美角
　火ともし時に客つどひ來　定雅
かりそめの雪ふりかゝる草の庵　春載
　おほつかなくも早咲の梅　春面
にしきどもけふを限りと立ぬらん　方蜀
　うき身に重き刀さしたる　我則
鷄も啼鐘も聞えて月は西　大魯
　今や解脫の時いたる秋　眉山
文正が宿をし露のゆかりにて　月溪
　わらぢ履たる兄弟の人　自笑
朝日さす花の峠にさしかゝり　正白
　あぶり餠賣あづまやの春　龜鄉
老の身の夏を隣に風ぬぎて　米園
　みづから刻む歸依の御佛　守一
水晶のすだれに風の色移レ　志慶
　橫顏見せて行違ふ船　鳴鳳
しのぶ名も今はかひなきさかしらに　霞東
　靜がなみだ囉泣して　白砧
夜や霜の嵐身にしむばかり也　龜友
　篝火たくなる里の神業　石友
今すこし辛き酒をと橋さげて　東瓦
　西國船の怪我もきこへず　稀聲
月清く豊の暑さを忘れけり　維駒
　寐ほれ聲にて明る門の戸　乙總
碁に負て何くれとなく腹あしき　霞夫
　硯に筆の多き揃さ　執筆

自在庵主、杜鵑・布穀の二題を出して、いづれ一題に發句せよとあり。されば雲井にはしりて、王侯にまじはらんよりは、鶉衣被髮にして山中に名利ないさはんには。

狂居士の首にかけたか鶻鼓鳥　蕪村
郭公二羽啼雨後の月夜かな　大魯
ねむの木のその花鳥やかんこどり　几董
尼にする子に示す夜や時鳥　方蜀
聞かたり鳴つるものをほとゝぎす　美角
はつ音聞人ぞ誰なる郭公　定雅
ほとゝぎす鳴くや山田のむら鳥　春載
時鳥園恭に負たるかへり道　自笑
春惜むきのふやいづこ子規　我則
續なきに鳴ても淋しかんこどり　春面
ほとゝぎす煙しらけし狐塚　月溪
なか〳〵に雨の日は啼し閑古鳥　但出石 霞夫
しのぶ夜の已奪しほとゝぎす　、乙總
郭公晝聞人ぞあはれなる　大坂 芙蓉花
山を出て里にもなれず時鳥　、守一
なれも音に待人に鳴か子規　、霞東
明やすき夜となおもひそ郭公　、志慶
なま中に折〻鳴てかんこどり　、鳴鳳

鳴てしばし庵しづまらぬ郭公　稀聲
關守の我夜ゆるすや時鳥　田福
ほとゝぎすよい風もある月夜哉　葉雨改 眉山
郭公なくや卯月の枕かみ　瓢子
ほとゝぎすひとり聞夜の覺束な　八田氏 鶴友
啼すつるあと追ふてゆかん時鳥　正白
蜀魂骨にて人を送る夜に　道立

ひさ〳〵に訪はれて

諌鼓鳥こゝぞ翁の庵の跡　住侶 松宗

席上探題　戀川　祠祇　雨風　山野　旅　述懷

人を待あきの枕や夏の戀　田福
商人の越ばにごりぬ夏の川　春載
神〻と拍掌ふかきわか葉哉　方蜀
まださめぬ眠りや雨の花樗　瓢子
風絶てひそかに風の薫りけり　春面
夏山やえもしらぬ花の香に匂ふ　几董
山畑の藍よい出て夏野かな　道立

むら雨やひとへにぬれて夏の旅　松宗
椎の花人もすさめぬにほひ哉　蕪村

附録

西吹やゆふだちせまる野路の人　大魯
さみだれや續かぬ鳥羽の牛車　龜友
みじか夜や小舟の棹の濡ながら　鳴鳳
はやき瀬に洗と見えて螢かな　霞東
冠者がひく猿にもきせる袷かな　志慶
神崎やうき君まちて蚊やりたく　守一
雨雲の餘所に照日や夏木立　稀聲
ことごとく去年の枝なし花樗　芙蓉花
はつ蟬のかしましからぬひとつ哉　美角
夏の日の落るゝを人の力かな　定雅
五月雨や半日はれておもしろき　眉山
雨露の世こゝろしらじ今年竹　正白
嫁入の翌日に出る田うへ哉　瓢子
麥わらに乘りていかめし初茄子　白砧
ころもがへ歩行て見たき心哉　龜郷
瓦ふくもの先かくせはな樗　石友
白蓮や中々に水の陰暗き　白笑
短夜やはしりの隅の水の月　春載
等閑に花と見て過るあつさ哉　月溪
みじか夜や門に踏消す宵の松明　方蜀
遠く見て過る鵜河の篝かな　春面
誰を戀て戸に身をよせつ蝸牛　維駒
みじか夜や淺井に柿の花を汲　我則
川竹の短夜といふ人憎し　田福
早乙女やむかしながらの加茂堤　几董
牡丹切て氣の衰ひしゆふべ哉　蕪村
芍藥は菩薩牡丹は佛かな　丙申夏社會當季　道立

右寫經社中

室町中立賣上東側
俳諧書林　平野屋善兵衛

五車反古（しやほんご）

首・尾

維駒

（五車反古　巻首）

維駒、父の十三回忌をまつるに、集ゑらみて五車反古といふ。ふかき謂あるにあらず。父の冬ごもりの句によりて號けたる成べし。はた父の筆まめに書あつめたるものを、よゝとねぢこみたる俳の紐ときて見れば、贈答の詩の稿有。或は花に來たれといふ天狗のふみあり。今宵の雪をいかにやなどそゝのかす高陽の徒の手紙有。又は云すてたる哥仙の半ばばかりにして、ところ〳〵墨引たるあり。其裏には多く人の句も、みづからの句もかいつけたり。それをとかく爪揃して、今の世の人の句も打まじへ、ならべもてゆくほどに上下二冊子となりぬ。序を余にもとむ。余病ひにふして、月を越れども起ことあたはず。筆硯の業を廢することひさし。故をもて其ことを不果。これこま、忌日のせまりちかづくをかなしみ、しば〳〵來りもとむ。余曰明日を待チて稿を脱せむ。明日すなはち來る。病ます〳〵おもし。又曰、明日を待て稿を脱せむ。維こま、終に卒業の期なきを悟て、竊に草稿を乞ひ去。余も又追はず。他日そのことを書して序とす。

病夜半題

鷄起俳諧　春　　春泥舎召波

曲水や江家の作者誰〳〵ぞ
　唐士使かへり來し春　　維駒
のこる月山なき空に霞らん　　蕪村
　時の鼓を打しまふたり　　田福
藻舟漕ぐ男の髪もみだれたる　　駒
　三日の粮の用意かしこき　　村
仙-之のしるべも今は跡なくて　　福
　鵲巣くふみんなみの松　　駒
まどゐして深き軒端の傘さよ　　村
　祈の僧の眼とぢたる　　、
あらぬ戀中〳〵人に語らまし　　駒

吾妻ぶりなる哥ぞかはゆき　福
花かつみ刈とるほどもなかりけり　村
夕日斜に葬の行見ゆ　駒
珠數挽の二間間口を仕なして　〃
丹(ニ)をべた〳〵と大津繪の鬼　福
かへり花ひくき梢のにほふらん　〃
小春の月の雨暗き夜に　村
亡妻(ナキ)の子を懷に通ひ來し　〃
けぶりたえぬる香の名はそも　駒
ひか〳〵と室の揚屋の銅盥　〃
響(キ)くほかに枕(セ)うつ音　福
胡蘿蔔の花は咲ずもありぬべし　福
下福島の鮓なるゝ比　村
入口に人妨の晝寐して　駒
隣に耻よしうとめの聲　福
齋料の米こぼしたる苦しさに　村
おもたき傘を返す日もなき　駒
月の宵狐や僕を匂引(サソヒ)〔一〇〕けむ　〃

露踏しだく艸の裏門　執筆
菊合兩六波羅のほのめきて　福
頭(ラ)童(カムロニ)齒豁(アラハナリ)　村
夢三夜犧をやめよと御詫宣〔宣〕　駒
二十年來洪水もなし　福
うたげして花の日なたに老夫婦　村
遠ききゞすに近き雉子鳴　駒

鵲起俳諧　夏

卯花や茶俵つくる宇治の里
山ほとゝぎす晝も啼過　維駒
操返し馬上に古詩を打誦して　道立
名に聞えたる酒たうべけり　我則
磯浪の籬こし來る月の宿　几董
うら吹葛のおもてなつかし　執筆
かくうとく隔る中の秋更て　駒
聞もつらしや尼が呼　立

次の間のともし火既消かゝり　則
　狸を射んと小弓はり置　董
一ト谷はみな維盛の子孫にて　立
　こゝら埃にむせぶ麥秋　駒
午時さがる大師廻りのほだれ足　董
　微雨降こむ豆麩屋の軒　則
なか〳〵に賢く見ゆる新参　駒
　木綿合羽をかろく打着て　立
月の夜に花を尋る艸枕　則
　いく田の邊り春衙啼く　董
をちこちと石きる音の霞むらん　立
　再造る重源がてら　則
やせ馬に笄一駄おくり來て　駒
　とり落したる双六の賽　立
はらからに物や思ふと問れたり　董
　夕月かゝる蕣の垣　駒
猫の子の頬を塞がる秋の風　則
　白川祭雨に淋しき　董
餅米にふませし麥の打交り　立
　雇れ人の腹をいためる　則
脇能の笛も聞ゆる中の口　駒
　はや五ッ目の御祝儀もすむ　立
喑かりし夜のしら雪とふりかはり　董
　八幡へあがる乘合の僧　駒
しらぬひの咄びんなく聞さして　則
　かたみとならん香や炷べき　董
花の名の今はた殘る嶺の雲　立
　鶯老ぬ春やくれゆく　則

春之部

蓬萊の山まつりせん老の春　蕪村
とかくして松一對のあした哉　移竹
鰒喰し我にもあらぬ雜煮かな　太祇
闇がりにのどけき春や城の六ッ　儿圭
古頭巾烏帽子に捻よ花の春　江戸 青蛾

聖廟よりかへさに

鶯や藪をへだてゝ朝日寺　召波
うぐひすの庭をありくや雨の後　雨遠
東風吹や雨のにほひの夕曇　伏見　鶴英
人目なき宿は巨燵に子日かな　竹渓
粥杖や梨壺の五人打はづし　浪華　羅川
みのむしの古巣に添ふて梅二輪　蕪村

幽徑

埒もなき荊が中の野梅哉　几董
梅さくや馬の糞道江の南　浪華　無腸
咲かゝる梅に余寒の日數かな　春爾
百姓のたばこは臭し梅花　嵐山
墨よしや千鳥こぼるゝ朧月　、
雨ちかき温泉のけぶりや朧月　召波
おぼろ月放下の親子戻りけり　維駒
晴天に暮てまもなし朧月　成文

旅中吟

貝塚の町へ道入ばおぼろ月　道立
過て匂ふ酢屋の門邊や朧月　春坡
十五夜とかた〳〵よらず朧月　百池
春の月雛裂ヶバ曇けり　南部　素郷

京に在し比

北山の餘寒を見るや窓の內　江戸　泰里
底叩く音や余寒の炭俵　召波
鼠追ふや椿生ヶたる枕上　田福

西の京にばけもの栖て、久しく荒はてたる家ありけり。今はそのさたなくて

春雨や人住て煙壁を洩る　蕪村
鷄の子の觜よごしけり春の雨　維駒
春雨や簑の下なる戀ごろも　几董

行旅

馬借てかはる〳〵にかすみけり　江戸　蓼太
放馬終に野末の春がすみ　臥央
うしろより雨の追來る燒野哉　阿波　大魯
囀りや野は薄月のさしながら　嘯山

嵯峨にて

垣の芽の袖口どもゝ出されたる　竿秋

蝶〳〵や左を追ば右に在　我則

日うつりや高瀬八分ッ春の水　也好

しづかさや雨の後なる春の水　召波

磯山や小松が中を春の水　几董

初午二句

はつ午や鳥羽四塚の雞の聲　蕪村

初むまや柳はみどり小豆めし　尾張 也有

二月堂

けしからぬ冴返ッたる沓の音　蝶夢

大佛の柱くゞるや春の風　浪華 二柳

濱の子が風の名呼ぶや几巾　江戸 旨原

いかのほり月も出てある三笠山　維駒

漁舟見えて吹也はるのかぜ　浪花 舊國

遠國より何なさはれて

難波女の懐寒し春の風　女 うめ

春風の吹出したる筏哉　佳棠

夕ぐれに申合せて蛙かな　文皮

流木にしり聲寒き蛙哉　移竹

春の夜や老雉子うちし氣の弱り　太祇

雉打て歸る家路の日は高し　蕪村

かげろふや同じたけなる小松原　塘雨

きり芝の野芝にもどる菫かな　江戸 浙江

大日枝や菫踏分る路もあり　湖嵒

海苔の香やまだ見ぬ海のなつかしき　舞閣

双岡に先師晩山のしるしあり。

乾海苔やおぼろ〳〵と海人が家　川越 麥鴉

其枝にのこんの雪の翁かな　杜口

所思

五年見ぬ古郷のさまや桃の花　維駒

石をきる山の峯や桃のはな　湖柳

雨にひらく老木の桃や花あまた　大石 士巧

桃山懐古

見おろせばいはんとすれば桃の花　道立

淺き瀬に若鮎走る夕哉　徳野

鮎汲ミや喜撰ヶ嶽に雲かゝる　几董

柴の戸にあけくれかゝるしら雲を
いつむらさきの雲に見なさむ

法然の珠數もかゝるや松の藤　蕪村

上巳

たらちねの抓までありや雛の鼻　蕪村

雪信が屛風も見えつ雛祭　几董

雛の宴五十の內侍醉れけり　召波

雨意

白妙に十方くれのさくら哉　旨原

分入ば川上寒し花に鳥　さが 重厚

身をすほめ行や櫻の散木の間　江戸 陽子

櫻三日四日を花也あらし山　仙臺 完山

山里の人美しや遲ざくら　維駒

南部

花の露に鹿や目さます山かづら　自笑

棒突に盃をさす花見哉　太祇(祇)

つまみ喰一日花の乞食かな　青峨

四十以後の人三里に灸すべしと

二日灸花見る命大事也　几董

誰ためぞ築地を垂るゝ花櫻　僧 雉庵

添て來し野川いづ地へ山ざくら　作者不知

咲日より今も散かとやま櫻　江戸 一音

貞つきや花にやはらぐ小役人　臥央

けふ限に垣を仕まへば落花哉　大石 佐則

つばくらや花なくなりし三軒屋　百池

誰園ぞ月夜春の夜梨の花　鉄僧

平調の糸や切けむ夜半の春　正巳

十九日と廿一日の晴雨、さし〳〵
わきがたし。

婆かゝの肩ぬぐ空や御身拭　キ董

御影供や老て見まがふ角力取　田原 毛條

爐塞であるじは旅へ出られけり　自珍

春の暮かり寐の枕はづれけり　雪居

春在溪間人未識

行春を鏡にうらむひとり哉　江戸 成美

春くれぬ醉中の詩に墨ぬらん　几董

ゆく春やおもたき琵琶の抱ごゝろ　蕪村

春惜しむ人や落花を行もどり　召波

花下に聯句して春を惜む。

祇也鑑也髭に落花を捻けり　蕪村

夏之部

ころもがへ一先居ゝる心かな　移竹

酒のみの膝書過ぬ更衣　尾陽 曉臺

白がさね惜き背中に物書ん　蓼太

春を惜む心の外に更衣　いせ 樗良

紀路まで花の旅して更衣　百池

鳴つる方を詠れば

古哥の月今に殘れり子規　旨原

おもひもの人にくれし夜杜鵑　太祇（歿）

ほとゝぎす通夜の枕は扇哉　青峩

山吹も散らで貴布禰の子規　維駒

曉の遊女が吐血ほとゝぎす　召波

數ならぬ身はきゝ侍らず。

岩倉の狂女戀せよほとゝぎす　蕪村

ほとゝぎす啼歟と待テば蜘の糸　几董

ふつゝかな我手悔みて夏書哉　大石 士川

袷着て雨に寒がる僕かな　菱湖

待宵の身にしむ戀や絹袷　定雅

短夜やいとま給るしら拍子　蕪村

みじか夜や鐘聞ヶば又かねが鳴　之分

題後朝

短夜や伽羅の匂ひの胸ふくれ　キ董

寐いそぎの幮を後に啁かな　銀獅

一夜二夜蚊屋めづらしきにほひ哉　江戸 春武

淺ましや幮に透たる夜のもの　召波

橘や幮に菓をうつ老二人　田福

蚊屋を出て物爭へる翁かな　大魯

提て行牡丹おもたき風情哉　春坡

懷舊

牡丹折し父が怒ぞなつかしき　大魯
廣庭のぼたんや天の一方に　蕪村
　鳥散餘花落
かきつばた魚や過けむ葉の動き　几董
檜扇の葉に洩ル貝や燕子花　嵐山
蛇落て驚く崖のわか葉哉　維駒
嵐山松の四月となりにけり　松島 白居
道芝にあふひ祭の薗哉　隨古
よく見れば朝露持ぬ夏の草　江戸 登舟
ゆりの花人もねぶたき盛かな　成文
こがれたる雨を握て田うた哉　几圭
　佐屋のわたりにて、ひとり小舟たやり、早苗さるを見て
つまなしがさす手ひく手や田植舟　曉臺
芥子散や脱の衣のひとかさね　也好
よは〱と蔓も生へたる淺瀬哉　季遊 寄節
野ゝ宮や笹の古葉の落る音　來之
夕暮や野に聲殘る麥の秋　楚秋
麥秋の草臥聲や念佛講　几董
　方丈石
持ありく家はいづくへ蝸牛　蝶夢
怠らぬあゆみ恐しかたつぶり　太祇
蝸牛君がかたへともゝすじり　結城 雁宕
點滴にうたれて籠る蝸牛　蕪村
　洛東芭蕉庵にて
蕎麥あしき京をかくして穂麥哉　、
むしり來し園のさゝげや長短　鶴英
夢の間や茄子大キく成にけり　旨原
　有感
生キて世にひとの年忌や初茄子　几董
笋に鋤かゝりに來る庵主哉　維駒
萍や樋を越ス水にさそはるゝ　呑獅
我家のうしろを過て田植哉　雷夫
早乙女や先ひいやりと庭の土　江戸 超波
　郊外
都邊はいつともなしに青田哉　雁宕
物問へば出て答ふる蚊やり哉　如瑟

宿借サねあるじつれなき蚊遣哉　伏水 湖陸
青梅や女のすなる飯の菜　太祇
青梅に眉あつめたる美人かな　蕪村
烟雨に青カッシが、已に黄にナンヌさいへるに
青かつし色ともなき煮梅哉　几董
夏の月平陽の妓の水衣　召波
遠浅に兵舟や夏の月　蕪村
さみだれや三線かゝるすまひ取　大魯
みさだれや我宿ながらかゝり舟　竿秋
通宵待戀といふことを
古かたは戯にあらで水雞哉　道立
田の水を庭に引せてほたる哉　維駒
飛ぶ螢蠅につけても可愛けれ　移竹
飼うつ水により来るほたるかな　管鳥
瀬田夜泊
飛螢闇の長はしかけてけり　明學
船頭の艀を逃るほたる哉　在江戸 燕史

風薫る森の木陰や弓の音　文波
背戸口に蜆汁流るゝ菖蒲哉　大津 互洲
かの東皐にのぼれば
花いばら古郷の路に似たる哉　蕪村
東武に在てすみだ川に遊ぶ
都おもふ時や卯浪の薄曇リ　義仲寺僧 沂風
正宗が及をわたるしみづ哉　正巴
かけ出の髭をしぼりて清水哉　召波
祇園會や胡瓜花さく所迄　超波
闇がりに座頭忘れて涼哉　也有
涼居て闇に髪干す女かな　召波
弟子僧と寺住かへて避暑哉　維駒
人皆苦炎熱
涼しさや花屋が鄙の秋の帥　几董
飈のおし動かすや雲峯　、
桐の木の梢にちかし雲峯　是岩
蓮に誰小舟滑来るけふも又　如菊
卷葉より浮葉にこぼせ蓮の雨　杉月

とく起よ花の君子を訪日なら　召波
釣舟に御僧を乘せて蓮見哉　維駒
　讀李斯傳
厠なる扇も喰らふ鼠かな　几董
鄙びたる細工ゆかしき團哉　熊三
　納涼　二句
汗入レて身を佛体としる夜哉　我則
床凉笠着連哥のもどりかな　蕪村
葛水や顋に玉の音す也　道立
葛水やうかべる塵を爪はじき　几董
　相國禪寺なる維明和尙の許にて、等美をもてなし給ふに
簟心の塵もはらひけり　〻
　郊外
夏のくれたばこの虫の啼し聞　重厚
　みそぎの夜、鴨川にて
むすぶ手に翌の秋しる淸水哉　五雲

（五車反古　卷尾）

　臨起俳諧　秋　春泥舍召波
栗に飽て鬮に付く鼠とらへけり　維駒
　三度ビ起出し庵の永キ夜　几董
遠からぬ海の音聞有明に　〻
　畠の中を駕の近道　駒
鷹狩の御先みゆるとほのめきて　〻
　初雪ふれり師走ついたち　董
朝込に針屋が茶のゆおもしろや　駒
　もの心得し從者持けり　董
うち臑む同車の君をかき抱き　駒
　しのびし宵の月は細くて　董
片里はまだ蚊遣する秋の風　駒
　古葉とゝもに裹こぼるゝ　董
𦊆丸見よと楷子のもとによりかゝり　駒
　法師をなぶる仁和寺の兒　董

弦切し倭琴代ゝ經る虫拂　董
　眞午時の鼓徐にうつ　駒
花ひとひら老杜が春やうつろはむ　董
　雁ゆく比を松しまの旅　駒
右に見し山は左にうちかすみ　、
　糧とりめしを喰こぼしつゝ　董
轉寐を起よ〱とよばる也　駒
　沈香灶て懼る神鳴　董
願ひある女心のひたすらに　駒
　廓の月日はてしなの身や　董
いざよひの鐘も冴來る萩の庭　駒
　露にひそみて哭ク翁丸　董
朝寒くとのゐの皮籠脊負行　駒
　水ばなたれる年ぞつれなき　董
納戸から京酒出して振舞れ　駒
　寺の跡目の公事に骨折ル　董
さみだれにひとの足駄の履にくき　董
　はやふ芝居の果し古市　駒
紫にうこんの絹を打かづき　、
　宦位たべよと狐狂はす　董
別殿を花の林に移し來て　、
　きさらぎ寒く遅き日を待　駒

其二

白馬寺に如來うつして今朝の秋
　千草の花の露も甘ねき　維駒
ひよどりの毛衣ふるふ月更て　百池
　我ひとり乘舟を待けり　鐵僧
古郷の便うれしきとしの暮　駒
　屬サクヘンにすゝむ烏帽子かりぎぬ　池
朔日の空となり行山かづら　僧
　松より高き市の葉柳　駒
盗人を女心に追かけて　池
　熱き病をふと忘たり　僧
聲だみて仁王經を誦シぬらん　駒
　日毎の雨の中に氷ヒ降フリす　池

うたかたの阿波の小島に船破りて　僧
　塀の住居三とせふりぬる　駒
商ヒを夫婦がなかに仕覺えつ　池
　髮をはらける春の宵月　僧
風もなくてうつろふ花の薫來る　駒
　巾の口の出入のどけき　池
さま／＼の事を鸚鵡のいふ日哉　僧
　高麗[コマ]人の薬や齊となるべき　駒
うつゝなふ抱[イダキ]よせたる膝がしら　池
　めかれぬ戀の責る身の秋　僧
琵琶うちの爺いたはる雨の月　駒
　もみぢの陰を下す川舟　池
三聲啼ていづち猿[マシラ]の去ぬらん　僧
　宿ゆるされし竹溪の坊　駒
見苦しき物おし包小風呂敷　池
　養君のこと葉給はる　僧
盃に匂ひしたゝるあやめの日　駒
　横座と付し牛を遊ばす　池
天王の鳥居のあたり土肥て　僧
　雨の後なる日和うつくし　駒
なつかしきかますご賣のとがり聲　池
　入口の戸の埃けうとき　駒
花守が春いそがしとゆふ櫻　僧
　足洗ふなる水のあたゝか　池

秋之部

起よ今朝桔梗の雫ふりかけむ　青蘿
水無月のからきめを見て今朝の秋　江戸 存義
水底に青砥が錢やけさの秋　召波
朝貞や星のわかれをあちら向　かゞ 千代尼
我屋根をはづれてゆかし天河　超波
露更て淀に落るや天川　道立

　病起

幮ごしに鬼を笞うつ今朝の秋　蕪村
角力取の身をひそめてや魂迎　也好

盆二日過て出來たる燈籠哉　一茶
彩（イロドラ）ぬ切籠の總にあきの風　几董
傾城に腕見せけり相撲取　松化

市中

羅子や夕間ぐれして狂はしき　大魯
うかと出て家路に遠き躍哉　召波
細腰の法師すゞろに踊かな　蕪村
魂まつり八千代謳ひし一座也　舊國
咲てうれし墓の邊ッの草の花　菱湖
おみなへし雨にうたれて老にけり　潮柳

由井の濱づたひして

朝露や浪やはらかに磯の艸　太祇
帘屋川花野に橋をわたしけり　田椿
穂に出て山田に交る薄哉　二貞
落日の潜ッて染る蕎麥の莖　蕪村

宮城野、野外、武藏野に似たり。

萩原やかたしの鐘こゝにあり　雁宕
雁鳴や御殿〳〵のとざし比　白笑
紀路にも下ッず夜を行雁孤ッ　蕪村

旅中

川霧や馬打入るゝ水の音　太祇
霧こめて道ゆく先や馬の尻　几董
わかたばこ丹波の鮎の片荷哉　維駒
衣うつ片手に酒の小買かな　（大石）士喬
城跡の一段高し蕎麥の花　雅因
大名をとめて蘇鉄の月夜哉　田福
名月や下戸の建たる藏引ん　（江戸）多少

三井寺にて

院〳〵の古き硯やけふの月　雁宕
名月や黿の糞のあからさま　超波
名月の明る朝日やいせの海　百池
今落す水に影さす月夜哉　管鳥
うらめしきまでに月澄夜明哉　楞良

良夜

名月や落るものとは思はれず　嵐山
家賣た金なくなりぬ秋の暮　鶴英

合点して傾城買ふやあきの夕　田原 也竺
いつも來る乞食の聲や秋の暮　春坡

老懷

去年より又淋しひぞ秋のくれ　蕪村
雜炊に月の明ッの榮花かな　ハリマ 青蘿
野人皆もどりて後の月見哉　維駒
飛雁の影や几に十三夜　成文
きり〳〵す行燈にあり後の月　二柳

いなりに詣る道のほど

稻の葉の靑かりしよりかゝし哉　月溪
月雪や花にもよらず鳥おどし　臥央
拾ひあけて扇にはさむ落穗哉　女 まさ
喰かゝり殘すべからずとうがらし　來雨
とうがらしつれなき人にまいらせん　百池

雨中九日病起

試に下駄の高きにのぼりけり　鉄僧
鼻たれる朝のはじめやけふの菊　几圭
白菊やしづかに時のうつり行　浪花 江涯
茄子引て菊に苔の見ゆる哉　高砂 布舟
柿紅葉遠く竹割ひゞきかな　佳棠
ながらへて野分にあへる胡蝶哉　伏水 鹿ト
市小家に火ぶせの札や秋の風　維駒
叟を宗と造れば庵に野分哉　也有

遊仁和寺

君知るや花のはやしを紅葉狩　キ董
掃音も聞えて淋し夕もみぢ　蓼太
白川も黑谷もみなもみぢかな　嵐山
谷紅葉夕日をわたる寺の犬　烏西
あながちにくれなゐならぬ紅葉哉　橘仙
高雄やまあはれに深きもみぢかな　瓦全
高雄山杉にうつれば日も寒し　曉臺

探題を得て

撰出して淋しき色や靑(蜜)橘柑　蛺舌
酒になり餅に成稻の穗並哉　左海 呉逸
から〳〵と刈田に殘る鳴子かな　芭蕉庵下 松宗
明ヶばまた夜寒の雨戸つくろはむ　召波

稚子の二人親しき夜寒哉　旨原
雨風の(原註)和口よりおさまる夜寒哉　大魯
岡雨の襟かき合す夜寒かな　魚官
夜を寒み小冠者臥たり北枕　蕪村

蕪翠を幻住庵にとめて

曉の寐すがた寒し九月蚵　曉臺
暮の秋むま子ひゝ子俵積中に　臥央
四五反のきぬ裁殘す昏の秋　湖邑
行秋や蹴抜の塔を散木葉　加賀 麥水
椎柴のはづれ〱やあきの霜　維駒

故人にわかる。

木曾路行ていざとしよらん秋ひとり　蕪村

九月三十日須磨の浦づたひして

はる〴〵と來て別るゝや須磨の秋　キ董
古寺に狂言會や九月盡　雁宕

閑居

小鍋買て冬の夜を待數寄心　几董

冬之部

鶯のしのびありきや夕しぐれ　太祇
初時雨風もぬれずに通りけり　千代尼
はつしぐれ濡て淋しき羽織哉　琴堂
ともかくも時雨次第の高雄かな　歸厚
しぐるゝや甫に低き雲峯　几董

茅舘

初冬や空へ吹るゝ蜘の糸　召波
傘に相違あらざる十夜哉　素文
我戀は婆になりたる十夜哉　蓼太
門前の家は寐てゐる十夜かな　月居
鹿喰へと人はいふ也冬ごもり　道立
旅をする春の思案や冬ごもり　正巴
冬籠燈-光虱の眼を射る　蕪村

頁郭

四ッ谷から馬糞のつゞくかれ野哉　青裘
又或日扇遣ひゆく枯野かな　曉臺

冬ざれや北の家陰の韮を刈　蕪村
落葉かき若きも老と見られけり　雪屋
茶の花や隱者がむかし女形　鐵僧
黄昏や花落かゝる茶の木はら　維駒

水落石出

冬川にむさきもの啄ム烏かな　几董
降ものに數ある冬の日より哉　渡牛
こがらしや後ロの山も遠からず　社燕
石蕗の葉をうちも破らぬ霰哉　熊三
小坂殿のはり縄朽てあられ哉　鶴汀
一兎まじろがぬ鷹のけしき哉　也好
初霜や茶碗を握る掌　仙臺 秋來

法隆寺

もろこしの鐘も聞えぬ霜の夜半　蝶夢
鐘氷る俊惠が寺の寐ざめ哉　白石 乙二
道連に別れて浦のちどり哉　伊丹 東瓦
四五羽立てたちもどりけり洲の衛　道立
闇を鳴く沖の千鳥や飛ぶは星　几董
さよちどり加茂川越る貸蒲團　無腸
宵の間は虱もなくて古蒲團　百池
うづみ火を無下に乞るゝ隣かな　我則
撫る手も一葉に似たり桐火桶　心頭

尼になりし時

髪をゆふ手の隙明て巨燵哉　千代尼
山もとの里と申てこたつかな　廣嶋 風律
冬の日やとけては氷るわすれ水　浪華 一鼠
凍やしぬ人轉びつる夜の音　伏水 鷺喬
馬蹄今さりとは雪の酒屋哉　成文
雪まろげ大キなものに成にけり　市尺
はつゆきや大名通る四ツさがり　越前 梨一
ところ〴〵雪の中より夕けぶり　闌更
したゝかに炭こぼしけり雪の上　銀獅
「貴人」としらでまいらす雪の宿　之兮
雪の戸に立かけて置箒かな　加賀 佛仙
はつ雪にしるしの竿は立しかど
そことも見えぬこしのしら山

初雪のしるしのさほや艸の葉　几董
いざ雪見容す蓑と笠　蕪村
古枝を鵜喰折賦雪の暮　其成
凍る夜や地より蹴放す馬盥　信壹 似宮
ともし火に氷れる筆を焦しけり　大魯

古硯銘

鈍きもの先氷るなる硯かな　几董

王羲之

物書て鴨にかへけり夜の雪　笹山 嵐堂
かさゝぎや葱洗ふ川を蹈わたる　古貫
水鳥の水にしたしき古江哉　、暮蓼
水の面に入日残りて鴛の聲　春香
鴨うちに城下出るや小殿原　魚赤
羽を干すや小島の松にはなれ鴛　斗文

古丘

水仙に狐遊ぶや宵月夜　蕪村
寒月にすまひが宿の稽古哉　子曳
病る身の蒲團を替る小春哉　大石 守明

南宗の貧しき寺や冬木だち　月渓
門見えて爪上りなり冬木立　丹波 仙魯
辻君に衣借れなはちたゝき　舊國
づきん着て尊くなりぬ鉢敲　宮津 路景
旅人に笠もらひけり鉢たゝき　佳棠
寐て聞ば西へ過けりはち扣　佳則
しのゝめや水に雪ふる網代守　士川

雪中

ゆきゝせで年くるゝ雪の山家哉　通助
家中衆の忍び／＼やとし忘　召波
年わすれ昔念者と若衆かな　青峨
臘八や和尚漸くねびまさり　雁宕
としぐ／＼や二人い親の煤ごもり　信州 米屋
行としや又訪ふ家もすゝ拂　維駒
爭はで行來ふ年ぞ鵙牛　文梁
剃こかす若衆のもめや年の暮　太祇
ゆく年の女歌舞妓や夜の梅　蕪村

除夜遊青樓

年かくすやりてが豆を奪ひけり　几董

なつかしき月の栖や大三十日　移竹

略起俳諧　冬

冬ごもり五車の反古のあるじ哉

　ひとり寒夜に砧うつ月　維駒

郊外何焚やらん煙して　鐵僧

　流のすゑの水はふたすぢ　臥央

枝伐て一のまぶしを定むらし　蕪村

　甥の太郎が先口を利ク　百池

新宅の夏を住よきはしら組　也好

　水打そゝぐ進物の鯛　春坡

裂やすき糸のみだれの古袴　正巳

　妻を奪ひ行夜半の暗きに　之兮

ちらちらと雪降ル竹の伏見道　道立

　小荷駄返して馬嘶ふらん　我則

なくなくも棺を出す暮の月　自笑

　よからぬ酒に胸を病ム秋　佳棠

小商ひ露のいく野ゝ旅なれや　湖柳

　燕來る日の長閑也けり　湖邑

反古ならぬ五車の主よ花の時　几董

　春やむかしの山吹の庵　田福

右一巡歳暮

鏡とらばふたつの鬢や枯尾花　さ

父が病中の吟を見て、往事をおもふ。

父が世にかはらぬ色や枯をばな　維駒

長和・治安のむかし、關白道長公、法成寺の御堂造らせ給ひしに、國〱の受領より、竹木瓦石の類ひ、舟車に積て持運びつゝ、金銀珠玉の七寶をもて玉の臺調ひしかば、千万の僧威儀具足して、梵音錫杖の聲を唱て讃を誦し、舞人樂人糸竹管弦の曲を盡し、種〱の名香天に薫じ、花ふり風やはらかに、艸木すら皆のりをとくと聞ゆ。かゝる供養の結構は、昔も今もためしなきめでたき事にいひあへりとかや。爰に此編は、古春泥居士の遺訓を追ふて、息維駒志願を發し、國〱の俳諧者流の句を拾ひ、居士が舊識知音の吟をあつめ、或は當時の詞友に句を乞などして、かの良材金石をもて一集を供養せんとなり。予みづから筆を採て此行に微力を添、撰成てこれを先人の牌前に供す。その功徳、見佛聞法の結縁なるべし。且、太祇・移竹・嵐山の徒をはじめ、數輩の古人再集中に出現して、風月花鳥の吟を諷誦す。さは是自他平等の追善、おほかたならぬ利益ならずや。

春夜樓晋明書

天明三歳卯十一月

續一夜松前集

元・亨
几董

（續一夜松前集　元）

松は千とせの調をつたへ、鐘は鯨音の響を殘す。されば几董の師その師宗阿居士は、若かりし時巴人といひて、其・嵐の兩門に遊び、ひとたび都に住ところもとめて、北野ゝ聖廟を深く敬し奉るのあまり、一夜松といへる集をつくりて奉納す。やゝいそぢも過ける比、故園のありさまやなつかしかりけむ。ふたゝび東武に杖を曳しを、舊友露月などとりつくろひ、石丁の鐘樓下にかたのごとくのいほりを結び、諸行無常の聲には我世の中のふり行を觀じ、夜半亭となづけ、こゝにかくれてめでたき終をとりぬ。會て門人蕪村、又京師にのぼりて阿師が活風を弘るに、その風姿を慕ふ者攝播かけて少からず。あゝ惜べし。病隱にしておとゝしの冬みまかりぬ。村ちか頃續一夜松をあらはさんとを、思ひたつといへども事ならず。ことしこの秋、其志を次で弟子几董武江に下向し、淺草なる成美亭に草鞋をとき、芭蕉庵に假寐し、或は修多羅閣に遊び、あるは河上庵に移、所さだめぬ友がきの交も、やゝ時雨降比になりぬ。すみつかぬ旅のこゝろを暫くのどめてと、さらに阿師が舊草の鐘樓下に空菴の侍けるにぞ、嚢をかけたり。余かしこに一夜あそびて兩吟しける時、かの樓上の一聲耳を貫くものから、未應不是先已應不是後としきりにすゝめて、後ゝ夜半亭と呼初ける。そのあらましのわたくしならぬも、此集の濫觴とゝもにしるしえさせよと乞ふにまかせて、冬の夜の長物がたりを、たゞありのまゝにかいつけ侍る。

東都　雪中庵蓼太誌

天明五乙巳冬

於東武石街旅舍兩吟

此道に夜半おぼえよ霜の聲　蓼太
　火桶わびあふ假の我宿　几董
白梅の青き眼に咲出て　〻
　田畑春めくかすみ千町　太
夕月の綱曳分てとよむらん　〻
　兄より丈のたかき弟　董
世をしばし博多邊にかくれ住　董
　ひそかに來ては泣て數珠キル　太
人妻の袖挑灯もなつかしき　董
　廓は闇きとしの松風　太
片隅に古く成たる雪まろげ　董
　鎗をこゝろむ老の手の裏チ　太
追返す菊池が武士に酒くれて　董
　帆に打はらむ曉の秋　太
殘月の入かたなくて澄る哉　董
　野守に問へば鶉さま〴〵　太
駒とめよ貧しき花のやどりせん　董
　茶はくゝだちの甘き此ごろ　太
山笑ふ今や利休を落し穴　〻
　睡れる眉を焦すはしり火　董
嵐吹皇居もかりの名面謌　太
　狐が訴詔(訟)二夜かさなる　董
病ム鳥を小袖に佗阿のかいくるみ　太
　雉も得入ぬ雨の麥秋　董
おもはくの橋隔てたる戀をして　太
　みちのく紙に筆も染うき　董
洩ル月の通ひて氷る油皿　太
　軒の鼠の落る木がらし　董
籌とるきねが頭の古烏帽子　太
　ざれつゝ狂ふ里のうなゐら　董
うきくさの瀨はさだまらぬたかの河　〻
　みどりこぼるゝいかづちの後　太
蒲燒のゆふ暮かけていざさらば　〻
　大脇差の語齋永閑　董
元祿の御普請盛花ざかり　太

俳諧盛世盛の春　執筆

於深川臨水亭興行

口切のこゝろいそぎや散松葉　天府
日影うかゞふ冬のうぐひす　几董
此殿の槍はだめでたう年ふりて　蓼太
稽古に通ふ笛竹の友　白麻
月はれてまた傘の雨そゝぎ　完來
魚馬（マグロ）うち込秋汐の岸　執筆
旅宿に肘傾ふすまひ取　董
堅地も摺レし長門印籠　府
初夜後夜と夜市の燈吹すがれ　麻
欠たら〳〵箯輿はひ出る　太
生白き飛子上リの見あげ皺　来
鏡を倒す板敷の音　董
松風も拂ふ北野ゝ牒拂　府
奪とり勝の西瓜一切　麻
肌脱ゲば灸だらけの月に星　太
千曳の石も舟で來る庭　府
植添し八重にひとへに花の奥　董
霞くませぬ禪の旦夕　麻
行春に鞠の相人を撰らむ　府
伊丹の葩を打やぶり出て　董
幡旗に深山おろしをさゞめかし　府
神事の具足とりかへて着ん　董
鯛洗ふ片手に釣瓶持ながら　麻
海の旭のむかふから出る　府
女氣の關越までをものおもひ　董
梳らねど髪のつやゝか　麻
そろ〳〵と噺和らぐ月の客　府
鱸の聲寒きいほ崎の秋　來
白菊の菊屋敷とも名に立リ　麻
旅僧に妖て狐貧しき　董
時かたり世語いつか夜の明て　來
檻ちかく車よせたり　府

ほとゝぎすまたゝら在ば三聲啼　董
ゆり輪をおろす晝餉とり／＼　麻
包齊が念佛に狂ふ花ごゝろ　太
千草に蝶のとまりさだめず　來

於信中夜雨亭興行

咲せりて梅の莟のこぼるゝ歟　路人
春にほこりて砂浴る鳥　几董
古き畫に灰汁打そゝぐ永キ日や　丶
見かはす貞に落る淸涕　人
有明に短き髪を茶せんして　丶
半弓とりて秋山に入　董
櫨の葉の危き迄にもみぢせり　董
庵もかたけと横に吹風　人
客僧のしりへに在て般若よむ　董
なれたる衣をつゞり果さず　人
よれば唯くやみ言いふ女ども　董
夜半に走ッて六波羅の奏　人
蠟燭の火にぱち／＼と時雨降　董
鳥らおりずあだし野ゝ冬　人
犬死の武士に蓮を打かけて　董
阿闍利の數珠に花開ク時　人
花ひらく時に月落鐘かすみ　董
舟ひとつなき春の水海　人
我を呼鳥あり爰に酒なくて　丶
切韻の詩もわざくれの族　董
兒達のちから業するびんなさに　人
法師頭を蚊に喰れけり　董
ものゝ氣の去ルよと見れば鼾して　人
日も當ざりし琴の塵掃　董
與あれや大晦日のとし忘　人
河豚の腮に寒菊をさす　董
ひたぶるに室のうかれ女雛面も　人
軍の中に情ある月　董
ひそみ音に小松がはらのきゝ／＼す　人

よき草鞋得し朝露の道　董
忝名の万菊丸は男にて　、
二人飯喰ふ衛立の陰　人
我先に太々打て歸る也　、
花片ゝと虱這ふころ　董
春の夜を遲く着たる伏見舟　、
朝氣のどかに出る傀儡　人

於信陽古松亭興行

松風の月吹入るゝ蚊帳哉　柳荘
夜は明やすき四間の半部　几董
老が身のうれしと頓舞踏して　、
禁酒やぶれと人にすゝめる　荘
乘捨し馬もいく日をふる雪に　、
椙の下より冬のこうろぎ　董
父母のなき子あはれに畏り　、
服紗ながらに髑髏(［illegible］)裁く　荘
川竹の世を淺ましく錦着て　董
ひそかに來ます醫師尊とき　荘
音なせそ信濃の眞嵜麥うつべかり　董
筧くむなるよこまどの月　荘
西行を討も殺さず寺の秋　董
鬚にも風のわたるやゝ寒　荘
とかくして一斗の米を搗仕舞　董
神馬牽出すむら雨の空　荘
道ぬかる花の山口初ざくら　董
里あたゝかに土の鑵ねる　荘
蚤搦る罪かさねつゝ行春や　、
けふ明く川を纔の限りぞ　董
暑き日の二戸へわたる芝居者　荘
瘡ふるふてまだちからなき　董
南無薬師青錢の雨よねの壁　荘
逃よと赦す酒の盗人　董
檻に冬としもなき白牡丹　荘
長きいのちの胡蝶隱れり　董

路傍に糊ひく絹を干置て　荘
　腰かけながら髪はらけるる　董
月に屆く伊丹の狀を忘たり　荘
　乞食行脚とこなさるゝ秋　董
見通しに門を咎めぬ菊の宿　董
　丁々として碁にくるゝ音　荘
我戀にけふやあふみの源五郎　ゝ
　北風か酢の口ほどくらし　董
一日は花にしのびの御大名　ゝ
　爪上りなる道のかげろふ　荘

於閑鷗亭興行

古としも見はみたれどもうめの花　登舟
　日はのんどりとしけ地踏道　几董
やぶ入の便に手帋ことづけて　佐知女
　十粒に足らぬ二十匁の銀　泰里
ともし火に風を覆ば薄月夜　董
　鹿のなくねもたしか此あて　舟
誰もかも木子は取ず酒ばかり　里
　丈ころ伸し娘あぶなき　知
神〱に無理な願を昔から　舟
　あかつき毎の霜の菜畠　董
數多くよれば雀のいさかふて　古友尼
　しばし机を退て氣はらし　里
ア、儘よ疊の施主はつかいでも　ち
　人を寐させぬ夏の夜の月　友
加茂川を流るゝ瓜のかぶりさし　董
　盥ひとつにみなよごれ物　舟
結構な花見日よりといふたまゝ　里
　御立の觸を待かねる春　知
家〱の鏡びらきも君が代に　春峨
　あぶらをさせばはしる井車　董
脫肌に灸の痕（アト）もなかりけり　舟
　あの詑には戀もさめ行　峨
雨風に三國のひと夜明かねて　知

遠き千鳥のそれ歟あらぬ歟　里
流矢に袖ぬはれたる危ぶさよ　菫
唯彌陀佛に任す境界　舟
芋粥の爐にこと〳〵と煮て居　峨
山はかくれて仕舞朝ぎり　知
影ほそき月をうしろに出商ひ　舟
うらやましくもおもふよ所の子　菫
花田なる麻上下に熨斗包　里
墨も乾かぬ繪襖の松　峨
物いらつ主をひそかに議合　ち
今朝から駕に附て膳所迄　舟
花の比撰置れしひさご集　菫
よき種下す戊辰のとし　里

於淺草道昨舍興行

梅が香を袂に入てそら寐哉　成美
拂へば蝶の鬢に化粧す　几董
家造る人影かすむ岡野邊に　麥宇
小舟にむさと積る土器　美
昏の月酒の價をあらそひて　菫
天井寒き雨の秋風　宇
露あるゝよし野の坊を子に讓　美
人にも問ず腰をれをよむ　菫
短夜にうれしき夢をかさね見し　宇
鐙片しをつゝむ衣の香　美
つかうどにいわれて旅の渡し乗　菫
眞向ふ山に虹しばしたつ　宇
西窓の阿彌陀に頭かたぶけて　美
落花吹入長明が菴　菫
矢の先に雉子は立たる跡の空　宇
雫めづらしう子の日する袖　美
わらはは女が切そぎ髪のひやゝかに　菫
閨に相圖の有明を待　宇
熊突に苧よりの簑を引かぶり　美
辷松とや誰號けん　菫

夕時雨加茂の社の拜まれて　宇
血刀ふりしその日發心　美
かたみなる陰の瘤もなつかしく　董
火に取おとす奇楠の匂ふ也　宇
庚申に人見そめたる現なき　美
鼠の尿にくもる小鏡　董
賣家の秋も更ゆく五(便)油の宿　宇
門の土橋に落穗干ころ　美
琵琶打の音煩ふ月の宵　董
未練の狐叩かれて去ル　宇
瀝ゝと楚竹を碎く粥の鍋　美
かろく帶たる一休の太刀　董
鶯の羽うちならす朝の霜　宇
何の神ます洞のともし灯　美
翌くるゝ春にかほそき花咲て　董
虎杖ばかり殘る片里　宇

於氷松庵興行

何ともな野分のあとの松一木　古友尼
鷺のうしろに有明の月　几董
秋寒み客は茶粥をねだられて　泰里
胡坐をかけば横に成也　登舟
かゆがりに草の葉を摺こゝろよさ　董
水しよろ〳〵と山のきりぎし　里
御佛はいかにも古うおはします　舟
願ひのまゝに奈良へ引込ム　友
みな人に春の綻びを笑はれて　里
ゆふ日ながらにわたる凉風　董
盃に肴にせまき舟の中　友
髭を直してたもる伯母様　舟
見もなれぬ雲井にのぼるはづかしさ　董
軒端に續く花の白妙　里
うき〳〵とこまの高音も時分から　舟
灸仕舞た氣はのどか也　友
向ふでも虹を見て居る昏の月　眉尤

木屋町筋の御ちる比　董
時の間に濁りてはやき秋の水　里
　方丈記をよみて髪剃　充
むづかしき調度はひとに打くれて　友
　既師走も十三日たつ　舟
庭鳥を遠く遊ばす市の中　董
　通る座頭に片よつてやる　里
腕立を好たもわかい時の事　舟
　さま〳〵の物出たる虫ほし　友
萱中もほのかに蓮の匂ひ來て　里
　伏見の遊女聲はしたなき　董
わかれ路の約束は又後の月　友
　蕎麥も豆腐もすべて初もの　舟
菊作る寺もゆかしきねつみ宿　董
　菅笠脱で状を投こむ　里
ひだるさにすべない事も腹の立　充
　基盤のあしの取やすき也　友
きさらぎの末まで花の咲おくれ　舟
　鼓脊負ふてもどる万歳　董

於深川芭蕉庵興行

鷹の眼の外に物なし雪の松　上總 射隼
　曉ちかく海に入星　几董
眞がねふくまさごの吹積上て　宪來
　醉て爽の猶ゑびす也　夢太
漸董の月見ぬ烏帽子うちゆがみ　董
　駒牽つゞく粕毛ひばり毛　隼
秋暑き岩間の淸水汲ほして　太
　味噌つけてうる餅のひとつ家　來
追っては茶毘のけぶりをふり返り　隼
　女をたすけ乘せる駕　董
入道のあだしごゝろや恨むらん　來
　園の笑ひの竹を隔て　太
水そゝぐ虫籠の總のくれなゐに　董
　兒の手譽る七夕のうた　隼

朽やらぬ千葉のむかしを袖の月　太
伽羅の佛を守る艸の戸　董
車から其一枝と花所望　隼
あたまかゝへて蜂に追るゝ　來
とかくして卷おさめたる涅槃像　董
くつ〳〵あたら豆麩煮過す　太
械立てけふからは又宿の妻　來
妬も戀もたゞ鮃のみ　隼
ほとゝぎす樗の花の落る時　太
兜をとりて三島明神　董
何が故我としふたつ隱しけむ　隼
虚勞に胞衣の藥すゝむる　來
雨の日を草鞋もとかず上り端　董
奧は弦うつ綿弓の月　太
さくら咲いせの白子も秋ふりて　來
網逃れたる鳴の夕昏　隼
鬢はつと酒債に盡し古布子　太
もへぬ榾木を手して引割ク　董
供觸のひましら〳〵ともの音　隼
かいつくろひぬ高麗のまらう人　來
誰が子ぞにほひ類へぬ花の眉　董
簾にかゝる馬場の青柳　太

於新川眉充亭興行

紅梅にいよ〳〵古し神樂堂　眉充
春の日閑て又うたふ鶏　几董
東風ゝのわたりて醉や醒ぬらむ　古友
遣ふにはよき小僧也けり　泰里
うそ闇き袖挑灯に雨の月　登舟
冬の近さに鐘冴る聲　友
岡崎は今籾磨の最中なる　董
伯母をたらしてしのびあふ戀　充
三線も何彈たやらうつゝなき　里
節句の翌もせつく同前　舟
あそこ爰吹落したる軒菖蒲　友

よつてたかつて縛るどろ坊　董
宵闇とおもふたにはや月の出て　充
さきの袖みそに又酒を呑　里
おもやとは違ふて秋の淋しさも　舟
籠の小鳥のからころと啼　充
どちとなふ花の盛は人の出る　董
山にわらわれさうな重テ着　舟
十日ほど二日灸がのびてある　充
疊を上ゲて置し雨漏　友
だゞくさに廣いばかりの田舎寺　里
玄古た葉こを冬かけて干　董
遠退の女夫はあれと指され　舟
哥舞妓崩れの暮ちかき比　充
舟着はづらりととほる掛行燈　友
かほどの背柳はみなさらし也　里
老が身のうたてがられて世話をやき　董
三里ゆくとはどんな汁講　舟
袷きてふるひあがりし有明に　里
椽にほた〳〵傘の露　友
筆にすさむサヽ菩薩まで法の秋　充
衣もぬらさず越る河の瀬　董
御奉行の代りてものゝ自由也　舟
人のきげんも春はわさ〳〵　里
咲たりやきのふにけふの花の山　友
蝶の睡れば雉子の羽たゝき　菊雅

淺艸梅若氏興行

松原や馬につもりて暮る雪　寸來
頭巾に笠に眉おもき天　几董
百貫の酒のおいめに家うりて　成美
綾の小裂に書し笛の譜　麥宇
月の萩うすむらさきににほふらん　董
殘る蚊はたく旅のあけほの　來
板戸もる雫に瘧をわすれかね　宇
長が娘の情わりなき　董

櫛入るとこゝろ短き男髮　來
　山吹ちらす夏川のすゐ　宇
はなれ鵜の糞してたちぬ石寂し　菫
　甲を捨て唱ふ彌陀佛　來
五十年身は洛陽の栗をはみ　う
　狗賓の門に入かたの月　菫
秋の海古杯かたし浮びたり　美
　例の翁のけふは見えなく　宇
掃出す山さくら戸の花の雪　來
　名越の橋につばなとる頃　美
暖にひとへからげし摺鹿子　菫
　曲撥うちの戀にかしこき　來
としの暮買得し鰒を命にて　宇
　裸小判を時の賭　菫
夜嵐に厠の手燭代り持　美
　鐘も聞えず靜原の雨　う
生首に誰脫捨し白小袖　來
　名やしのばしき灶売の香　美
朝がほのやどりに下る初瀨籠　菫
　瓶子に分る新酒ひと升　來
栗がもとの連哥も今や月の秋　う
　狂ふ時斗を鳴らさじとする　菫
病臥る枕に肥後の狀を聞　美
　法師が母のはてぬ醉哭　う
山畑に鶴二羽しろく夕時雨　來
　草臥牛の口を塞ぎつゝ　美
戯に花盜む奴ッ驚かし　菫
　さゝ川早き岸の春風　來

於太乙館中興行

閨の梅香をもらさじと逆夜哉　不蕉
　膚におほゆるきさらぎの雪　几董
鶯の初音の玉や碎くらむ　蓼太
　十歩に景のかはる岨道　馬耳
狩衣に都の月をかざし見て　一鷺

繪も秋されし宿の盃　巴人
温泉近く竹も柏も霧雫　完來
馬かた迯て馬嘶ふ也　木奴
あたまもる筑紫訛に明しらみ　嵐亭
やゝ見ぬ戀の橋のわたどの　鶱
雨の鳩伽羅きゝ入て睡らし　人
一刀づゝにはてぬ三禮　太
瓜喰の裸に成て宵の月　奴
勝てもどりし舁車の白波　驚
立臼も打かさなりて長がかど　耳
明てくやしき外艮の内　來
散いそぐ花見に刀自が出からかひ　董
春のくもりのよし曇とも　亭
こだま飛いまや薪の亂拍子　驚
按摩とらせて老の夜語　人
詩作の遊女が無垢に書せけり　耳
としの嚢のふるは泪歟　奴
流ゆく芦の鵜どのゝもどり舟　鶱
呼ば荅ふる藪かげの家　董
盗人と存もよらぬ友三人　太
金貝鞍の駒なべて乗　亭
白幣立て御幸の道すがら　奴
野分しほつて晴る紅葉　董
暮かけてしきりに月のもろ鶉　來
棊盤に向ふ髭の秋霜　人
客僧はゆきのみじかき衣かりて　董
干菓子に躍る池の鯉鮒　耳
この里に疣の咒觸ながし　鶱
いつもの顔で元日のそら　驚
花笑ふ万歳ゑぼし古つゞみ　亭
富士と筑(波)羽を橋上の春　來

(續一夜松前集　亨)

武の吟江が風流を聞事さし有。かの才子不幸にして世を早うし、我不幸にして筇を曳こと遲く、三とせの後このかみ成美にあふて、其時をおなじうせざるのうらみ、かたみにつきず。終に遺稿を探り、暮春の一句を拾ひて客舍の硯に向ふ。

脇起

花のゝちまた有春が五日ある　古人陽子
其花見ざる袖の春雨　几董
朝がすみ文の乞食と身を下て　成美
門の潜りに山のかげさす　〃
むく／＼と鹿の起ゆく宵月に　董
二反ばかりの蕎麥作り置　〃
あきの風九十の祖父何を泣　美

夷の城を落すあかつき　董
引連て淺川こゆる古鼠　美
うすくれなゐに撫子の花　董
保輔が戀する暮を待ぞとて　美
かとりのきぬにくるむうたゝ寐　董
しぐるれば北野の松もおもかげに　美
神無月の十五夜の影　董
はら／＼と輿燒音にむせかへり　美
三位給はる世にふがひなき　董
ひやゝかに梅の蓆の小土器　美
聯句に狂ふゆふぐれの春　董
黄檗の寺奥深く雉子鳴て　董
破ほうろくを捨る竹むら　美
無性さに傘腐る皐月雨　董
いせの哥舞妓をとめて語らむ　美
櫛占のあはぬ子待のまさな事　董
雪を盛來るから櫃の蓋　美
ふとりたるとものみやつこ轉びたり　董

僧跡うづむ住吉の浦　美
ちゝり灶けぶりに霧の結れて　董
飢し兎の荻にたほるゝ　美
月明て見ればよしある家のさま　董
子うむ騒ぎのとかくして止　美
五斗米に我身はむさき革袴　、
醉ふて師走の市に隠れん　董
生憎や吹矢くわへて飛鴉　、
屋根葺まいる徳大寺どの　美
巳の刻を棒突觸る花の雲　美
かげろふわたる橋の擬寶珠　董

先達の人〻の意を追ふて、續一夜松の撰集ある。今の夜半亭をさゝめて、亡弟が在世の執を補ひ侍る。

東武　淺草夏成美誌

於曲直庵興行

秋深しかはらぬ松のめづらしき　桂阿
稍すがれ啼鹿の此ごろ　几董
夜半の月客もあるじも酒さめて　舩文
雁を良へ吹あつるなり　有時
一ト本に百輪ばかりさくぼたん　子丈
洲の出來しより通ふ船着　山雨
とにかくにつけて哥よむ旅の僧　竹瓦
いひふくむればわらべおとなし　阿
きりわかつ片身の鶴の脚と觜　董
井筒溢るゝ水いさぎよし　文
うたてある神いますなる古社　時
被をとりてまづ直す髪　丈
待るゝを我待戀に思ひしり　雨
雲にかくれてをり〳〵の月　瓦
利根河を逆ふて鮭の登る也　文
すまひに撰ぶ兄弟のもの　董
ありがたや七十の賀をけふの花　阿
畵にうつしたる竹の鶯　時
春ながら土の濕りしうしろ堂　丈

未さがりに傾ぐ日の影　雨
今果し鸚鵡小町をとよむらん　董
棒さし入ておろす大鍋　文
凪なりに木葉吹よる山の裾　瓦
いくつともなく狂ひ出す駒　阿
孝行の聞えを召て纏頭　時
若き命婦の笑ひこらへず　董
池の舟身をうきくさの遊びにて　文
田舎の町の眞中の寺　丈
澄月をおどろき負になく鴉　雨
肌寒しとてかぶるふろしき　瓦
新嘗麥の兵四人まいりたり　阿
飛損ふて猫落る曲突　時
此雨のけふも一日漏暮し　瓦
車きしらす三輪の山本　丈
こりずまの須磨も戀しき花の旅　董
はやくも扇つかふあたゝか　雨

於上田麥二亭興行

うき草や松吹かぜのわたる見ゆ　如毛
鯉のつら出すゆふだちの後　几董
冠者ばらがおなじ粧ひに弓提て　麥二
物くださるゝ御意はるか也　雲帶
銀燭を消せば月さす菊の間に　董
こうろぎひとつ何に紛れて　毛
川舟の舫とき出す秋の水　帶
人のまことを泣うかれ君　二
氷る夜を立わづらへる影ほうし　毛
壁に物書續松（ツイマツ）の炭　董
里去て太郎坊とや時行神　三机
むごく伐たる山の片つら　帶
高く行あるは低きも月の雲　二
臼の茶かする窓の露寒　毛
任口の輕口聞ん秋の興　董
從者赦して居睡せおく　机
ちら／＼とさくら涼しき花の陰　帶

網打習ふ春の川づら　董
年長し冶遊が顔ののどけくて　毛
只矢一筋人の記念に　二
あらかじめ千里を隔みちのおく　机
鳥の聲も雨繁き空　帶
目をとぢて無理に飲込鬼ころし　董
世に繋がれてとしは昏行　毛
もろこしの湊に春の哥よみて　二
をのづからなる梅に鶯　机
遲き日を桶の輪ゆひが小蓙に　帶
打ひそみつゝ何語るらし　董
有明の戸をこぢ放す長局　机
露にかくれて見えぬへんぐゐ　二
をれもやらず芦の穗綿の吹すがれ　毛
悟らぬ僧の愚をや爭ふ　帶
ひともじの雜炊喰て熱追ん　董
江戸の家居の皆瓦ぶき　机
凪なき日花を帶たる花の雲　二
西も東も菜種咲比　玉馬

於四谷修多羅閣興行

しら梅の春も衞を聞夜哉　竺蘭
木香冴返る水門の月　几董
室明て雪解の鞠はこぶらむ　完來
どつと笑ふて濟すいさかひ　蘭
入日さす驛のはづれの古手市　董
朸にかけて鰹一本　來
來ルたびに醫師の留主を打かこち　蘭
こけて女の逆る戸襖　董
みだれ髪蝶の薄衣引かづき　來
手に〳〵箸を鷄の羹　蘭
詩作リて物しらぬ人懼さばや　董
梢をしぼる雨の松しま　來
弓張も廿七夜の照射狩　蘭
老と呼るゝ老の無念さ　董

あらためて盃飛す敷居越　來
かろ〳〵しくも納ム官金　蘭
下京はいやしく匂ふ花の風　董
ふだらく諷ふふしも長キ日　來
糸あそびながら瘢疹の肥立際　蘭
菓かくす襲の裙　董
かりそめのなれ〳〵しさも古遊女　來
人だのめなるカピタンが顏　蘭
霰ふり神鳴日さへ暮かゝり　董
もみぢ散しく中禪寺道　來
物とへばうなづく啞のこざかしさ　蘭
盗人ひとりしのぶ梁　董
月更て哭こと多き琵琶の曲　來
露けき石に履重ネ置　蘭
蕣にそばかす見ゆる源内侍　董
柏掌打て何祈るらん　來
七曲に岩非あまりて埜まで　蘭
南そよ吹青田めでたき　董
起〳〵の孫慰るかた車　來
血忌もよしや實二日灸　蘭
なつかしき花の西山ひがし山　女 沙橋
燕のゆきゝのどか也けり　執筆

於雪菅廬興行

かくれたると更になし月と梅　月守
披講の聲の長閑なる暮　儿董
古き名を年あたらしうあらためて　方壺
黄金ひさしき山守る也　老鳥
二把解て一把たしなむさゝ粽　遙知
阜浪過してうけ前の船　蓼太
裁縫の男ではてぬしたて物　烏
熊野三社を起臥の夢　守
霜荒て春のまたるゝ桑畠　太
樋口へ捨る酢のくされ糟　知
おろかさを人にしられて身の安さ　董

醉ふた丸寐にそつと艀釣　壺
月に泣遊女のこゝろ冷じき　知
鴈にも傳の文の薄墨　鳥
下さるゝ例はかゝさぬ茱萸袋　守
あたま打たる小御門の瘤　太
掃よせて黄昏おしむ花の雪　董
大師の迁座春も過ゆく　壺
諸手して籠拔の雲雀追廻し　知
けふあらはれむ小屋從の戀　守
揚弓の左右に女列シたり　太
甕に寒き酒湛えおく　鳥
散もみぢ山神祭る暮のほど　壺
百濟の城を先遠く見る　董
片腕とたのみし弟貰はれて　守
毛いろ〱記す馬市　知
草の香に唯夏深き軒並び　壺
醫師添ふたる左迁の君　太
夕月にかごとばかりの星迎　鳥
柳落そむるさらし井の水　董
味ひの爐はしらぬ鈴木殿　守
古錢合せの氈にをの〱　壺
たら〱と鼠の尿おどろかし　董
御燈幽に掻立に行　鳥
白妙の夜散花に傘さして　太
苗代めぐる堰の水音　知

於伴關興行

小松野や木のこの匂ふ薄月夜　沙羅
遲き泊の鴛籠いそぐ秋　儿董
袷から布子かりがね鳴つれて　文足
門に市日の口は酸く成　蓼太
臑たるき骨正月と也にけり　故流
はこべら崩る畑の陽炎　完來
水框に鳥遠うしてこぼれ梅　董
日裸(課カ)つまぐる日參の數珠　流

其むかし味をやりたる彌三五郎　來
　巨燵へ膳をはこぶふは〳〵　羅
降出しもかたびら雪の輕井澤　太
　眼を煩ふて紅絹切に泣　足
みそなはすすまひの番定むらん　流
　月も雫なき寅の一天　董
我からと身は瘦骨に菊の虫　羅
　花のよし野も仕倦て又　太
おしくだす川舟春も箭のごとし　足
　かすみはる〳〵樽茶飯櫃　來
あの娘迄に力のたへやせん　流
　おほとなぶらの下に篇突　足
返し去ル十年あとのぬすみ金　羅
　紫衣の袂のはさむ輿の戸　董
打水も氷て莪〻と安藝黑田　來
　いとなみたつる仏の朝凪　太
あやにくに寧丸はづるゝ犢鼻褌　董
　拍子にかゝる鞨鼓ほうろく　羅
翠簾ごしに阿子の笑のさへ〳〵し　太
　おもてうらなき蕣の露　足
沼津から原よし原を月の旅　流
　虱かく夜の砧身にしむ　董
簗守をりかけ竹の小家かけて　來
　ことしは國に八十の君　流
柏掌に向ふ旭のさしこぼれ　足
　千舟うごかぬ海越の町　羅
珂比磨利のつくばね買て花戻　來
　菅笠かろき春のそほ降　執筆

於駿府時雨窓興行

いつはりは人にこそあれ梅に鳥　文母
　雪の山家も空ははつ春　几董
笠縫の菅うちしめす糸遊に　郎娥
　在番なれてつれ〴〵もなし　葛人
あつき日も秋はさすがに草の月　梧泉

湯ぶねのけぶり霧にまぎるゝ　母
追かけて下駄はき替る露ながら　董
禿の中も四海兄弟　娥
明やすう幮に旭のうらみなる　人
百里の旅も半過ゆく　泉
ぬしを守懐中箸の一角　母
煤はく宵の調度おほかる　董
月影もひだり勝手の谷の坊　娥
落かゝるまでくだものゝ秋　人
口笛にほあかの囮提ありき　泉
鑓さらひなる鎗の家がら　母
打そよぐしりくめ縄に花の春　居逸
柳磯なるゝ龍神の宮　娥
魁の母衣武者一騎かすみ来て　董
水に砂糖のこゝろきゝ哉　泉
筆硯西日に乾くおしまづき　母
横河の寮に物思ひゐる　董
袖に魂こめて歳暮の贈もの　人
かたびら雪のたゞはてしなき　逸
反橋を笑ひ上戸の三人まで　泉
已待崩れの肩に琵琶箱　人
居風呂も定宿ぶりにけぶし立　娥
宮津の町も殘どころ也　母
着かざりて月に吹るゝ娵披露　人
胸ひやゝかにわびる鞘あて　泉
照こぼす紅葉の庭の津輕石　逸
御能しばらく今を中入　母
童の無禮も時の興にこそ　娥
やす〳〵越て淺瀬見かへる　逸
不二少し花も七日の散がてに　董
番ひ〳〵の鶴のどかなる　執筆

於高崎平花庵興行

雨しのぐ武士は誰ソ冬の松　雨什
操しるけきはし鷹の面　几董

聲傳ふ鐘をちこちに夕暮て　舊　國
　かゝる栖を月のみぞ訪ふ　什
たしみ置霞くまばや折からに　、
　名も古めきし千壽万歳　國
ほころびる花も八條針小路　國
　をの〳〵被く傘の僕　什
唐獅子に似たよと佗阿をほめ申　國
　木の間をもれて西日さしこむ　什
ぬし問ん又にしきゞの異樣に　國
　今こそ合点親し避れば　什
雪を踏でおなじくたどる馬の跡　國
　幽にけぶる山もとの關　什
疱瘡神の殘せし太刀を持傳え　國
　かしこ顔なる姥にく氣也　什
掛て又影あたらしき橋の月　國
　雁鳴かたに古寺の塔　什
手を袖によしあしはかる四方の秋　、
　何がし殿と西鶴が筆　國

緣チ兀ヲと成りてゆかしき銀屛風　什
　稻左おろしの梅雨晴を吹　國
我戀は見ぬもろこしの神かけて　國
　きぬ〳〵破る荒武者の聲　什
釜ぶりも强にめしの出來上り　國
　棺のともし風にまたゝく　什
みどり子のにこ〳〵わたる膝のうへ　國
　やはた祭のねぶき曉　、
十六夜の月を待るゝをみなへし　什
　幾野ゝ露をちらす猪　、
寸白と人な咎めそ鎚の手を　國
　あはれむかしは辰之介とて　什
船遲き松戸樋の口漕はなれ　國
　何囀るぞ名もしれぬ鳥　、
我ものに花見せありく御庭守　什
　水をくさぎる苗代の丈　國

於深川八幡興行

松一木あとさき遠き花野哉　在江戸 楚山
節おもしろの月の古道　几董
新酒くむ宿のあるじと連哥して　、
雨そほ降ば傘の沙汰　山
ほとゝぎす今ひと聲は飛ながら　、
樗の盛咲としもなき　董
そこ／＼に景を見て置塔の上　、
南の京に早三とせすむ　山
添臥もめは毫安き世也けり　董
もの爭はじ神祈る日に　山
露深きとば田の畦の朝の月　董
鳴子をよ所に鴈の立行　山
秋の風長押の弓にわたる也　董
皷をうてばなみだこぼるゝ　山
痩こけし我身をたのむ兒二人　董
花の盛に岐蘇の旅して　山
立ながら櫻うぐひのあぶり喰　董
軒からころぶ春の戀猫　山

閑鷗舍卽興短哥行

まだ宵じや／＼とて亘燵かな　登舟
遠いより來て衞門女　几董
手入せぬ松にも風や通ふらむ　、
降ほどふれば最う雨もなし　舟
月見前米の相庭(場)を咄し合　、
ありあふ物で酒を出す秋　董
二階からそこに御室も鳴瀧も　舟
尼宮樣としるき乘もの　董
風俗も古代な女うち揃ひ　舟
日待もやがて明る淨るり　董
ちら／＼としろいは花の梢やら　舟
手にもどり來よ迯し雀子　董
泣た目を灸の賃にほめらるゝ　、
こちの和尚のたゞおどけ人　舟

暖いとしも十夜の置頭巾　董
　野わたしなれば二艘ないはづ　舟
瓦焼けぶりと誰もこゝろえて　董
　君戀しさを哥によみても　舟
月は秋の世はいつわらぬ物ながら　董
　いづくのうらも芋が拂底　舟
愛相のよさに飛脚も腰かけて　、
　祭の宵の暖簾ぬひゐる　董
おとゝひの風が吹かずば花盛　、
　盛つゞいて藤に山吹　舟

於四季庵興行

花に添紅葉にそふて雪の松　在江戸　如瑟
　月子規としわすれ草　几董
酒瓶のいくつ轉ける曉に　、
　舞臺は笛のしらべ聞ふる　瑟
よきゝぬの身に余る迄めでたくて　、
　だみたる聲に倣ふ國ぶり　董
門の戸をこぶしわれよと叩く也　、
　世にゆるされぬほだしわりなき　瑟
すゞろなる雛立たるまくら上　董
　雨の柳の雫ふかるゝ　瑟
ひろがらぬ網もて遊ぶ春の水　董
　太郎なりける冠者の大兵　瑟
おかしくも狐仇する棒縛り　董
　瓜の蔓さへ焦る炎天　瑟
宿次の駕にゆらるゝわらは病　董
　遊行の數珠の音も尊とき　瑟
月の露瓦もしほる風情也　董
　十寸穂のすゝきくづ折るゝまで　瑟
はらばふて餅腹寒き秋祭　、
　木幡の醫者の謠さびしき　董
强弓の用なくいく世ふりぬらん　瑟
　虫干さなか神の鳴出す　董
豆腐酒まずいながらにほろ酔て　瑟

山猫といふ君がかよひ路　董
錢湯のともし火氷る雪の夜に　瑟
　狂哥の点を賭にして待　董
油斷して扇に物を書れたり　瑟
　寐てゐてしらぬ舟の絶景　董
つる〳〵と月さしのぼる暮の山　瑟
　尭鉄砲の響くあきの野　董
霧深きかたへ闘路を追れ來て　瑟
　十と十二の娘つれつゝ　董
果の日に見るかけもなき齋の料　、
　ひとあめごとに世は春に成　瑟
照覧はたふた巻も神の花　、
　龜戸北野ゝみどりたつ頃　董

去年の秋冬東國に遊歷して、續一夜松を撰集し侍るは、先師が遺意を補ふの志願にして、句を勸進すに松梅の題をもてすは、その原流の信を追ふて　聖廟に納奉らんのれう也。しかのみならず、俳諧の連哥を興行し、家々の風調を試侍るに、哥仙の行はたふた巻、奉納の短冊もゝにあまり千ひらに及ぶ。猶はた是に、闕より西の句〳〵巻〳〵を加へんとすれば、その稿つくえにこぼれ、嚢にあふる。是を一編の集につかねんとせば、唯見る人の目を煩はしむのみならむかし。さればまづ闕の東の俳諧二十二巻を前集として梓行せしめ、かさねて東西の發句を合せ、且難波や都の手ぶりなる巻〳〵をもかいならべて後集となし、日あらずして　神にも奉り、世にも披露し侍らんといふことを、こゝにことわり聞ゆものならし。

天明六丙午年五月

夜半亭几董書

續一夜松後集

利・貞

几董

（續一夜松後集　利）

後集序

ふりにし年をかぞへ見れば、十づゝ五ッあまりの昔、宗阿老人京師にいたり、一夜松集を撰ぶの功終て、俳諧の業を高弟なる几圭にゆづりて東に歸、石町の鐘樓のもとに卜居し、みづから夜半亭と號す。そのころ蕪村壯年にして隨仕し、門人のひとりたり。宗阿老人身まかるの後、村東都を退き、花洛に住し、漢畫を産とす。或とき人有て此道の宗匠たらん事を勸む。村いへらく、余が師の俳諧を前に繼る几圭が男几董、我門に在て永く先師の敎を守らば、勸に應ずべしと。爰においてその人、重に告て此詞に隨はしむ。よて明和の比、村師の夜半亭を都に移し、且師意に倣ひて、續一夜松を揖（輯）集せん事を欲すといへども、其志を果さで沒せる後三年ありて、重東武に赴き、かの鐘樓の下に旅亭を設、師が志を追ふて、再續一夜松集を撰ぶ。

その因・其緣ひとかたならざるによりて、親友雪中庵すゝめて、重を夜半亭と呼しむ。其よし前集に委しければ、一爰に書もらす。此編、前後の集を全うして見ざれば、一部の意さとしがたし。必この集を見る人、前集を合して其趣をはかり、且前集を見たる人、此集をひらきて、前後一部のこゝろをしるべしと書並べて、とはる者は、栗田口のほとり袖の川原の重　厚也。

天明六丙午秋九月重陽日

享保十八年癸丑春正月

一夜松集巻頭

天津香も殘りて雪の一夜松　宗阿

太刀持を犬や嗅らむ梅花　几圭

明和八年辛卯春三月

京師に夜半亭を移して、文臺なひらく日

花守の身は弓矢なきかゝし哉　蕪村

續一夜松　本納發句混雜

朝霧や晴て羽たゝく松の鶴　東都 不騫

誰人の孝にめでゝや雪の梅　、天府

唉習ふ千本やはやき神の梅　、鹿文

瑞籬や彌生の梅の木下闇　ナニハ 龜友

いと遊や松のけぶりに騎合　スルガ 梧泉

頭巾着て見參したり冬のうめ　、荷裳

茱萸酒やもたれ心も岳の櫻　エド 沙羅

鉢植の梅のかほりや枕上　ナダ 千溪

秋ちかき松の葉ごしをほたる哉　、桃合

寒梅や二寸あまりの麥の丈　、月丘

初鴈のわたりそめけり小松ばら　、祇一

寒梅や旅人イ日のおもて　、佳七

神垣や冷じき明の松の風　サガ 里隣

白梅は美人の眉に力かな　奥 東皐

秋風は松にしみてや初時雨　カヅサ 射隼

たのもしき梅の莟や冬の雨　春香

冬のうめ榾のけぶりにかゝる也　楚山

二三輪白梅さくや雪の中　ナニハ 魚三

うめが香や手も付られぬ神の花　エド 古友尼

風過る日とおもへども梅見哉　、寛我

見そなはせ給へ時えし松の花　、眉充

立よれば匂ひも高き野梅哉　、呂英

ぬかづくや天窓のうへに梅のはな　、季流

實まこと小春也けりうめのはな　、呉中

痩枝もかくてはうれし梅花　、桃牛

片降のゆふだち雲や松の月　、
秋深し易らぬ松のめづらしき　、桂阿
梅さくや野邊はちらちら人通　、盛巴
枯枝ははさみてとりぬ床の梅　、披雲
御寵愛猶深からめ冬のうめ　、古塊
だんだんに梅さく春と成にけり　、英峨
梅がゝや今尙慕ふ鳥の跡　、餘梁
朶折らで伸次第也神の梅　、阿陽流化
冬の梅ひとしほ深き匂哉　、吾伯
異樹よりことに凉しや松の陰　、一我
秋來てもかはらぬ色や松の枝　、
ことに東風のしげきを梅の盛哉　、東籬
面白のはつ神鳴やうめ曇　、善光寺柳莊
蟬なくや錢かけ松の葉がくれに　、
すたすたと雲助とぶや秋の松　、呂吹
越年の乞食去けり梅が下　、文兆
松は富士はいつの昔の一夜鮓　、路人
いたいけや小蝶のなるゝ秋の松　、エド寸來

梅寒し笠ぬふ里のうす月夜　、一成
一木寒し石きる山のうめのはな　、麥宇
梅が香を袂に入てそら寐哉　、成美
近道の松へ落けり夏の月　、三阿
白梅や足らねば雪の置あはせ　、默我
ひと盛風にぬしあり梅のはな　、竹奴
下露に松虫産んまつの聲　、星衣
しら梅の襲姫やあまの河　、三駱
凉しさや松に奥ある朝日寺　、秋杵
悠然と松の一木やぎやうぎやうし　、エド京考
梅活て水次過すにほひ哉　、逸賀
松の月更々て又月の松　、葉沙
梅が香や神の瓶子を給ふ時　、斑象
芦の灰梅のこのもにかゝりけり　、雨蕭
うめがゝや今誰立し桐火桶　、白麻
松を出て便船中あふぎ哉　、ムサシノ甘谷
梅守の鐵もはたさぬ達かな　、一巣
鳥影のこぼれぬ日なし窓の梅　、府中有兎

名月や変も位の一夜まつ　（アハ）文瓜

梅咲て唐茶の袈はたきけり　（シマダ）洛棋

鵯にあぶらのりけり梅のはな　不騫

凌霄や赤松山のうらおもて

さへ返る七星高しうめの花　（ブンゴ）一鷺

松風のふるき音也わか葉山

鉢たゝき來ぬ夜ほど有梅の門　、巴人

松陰に魚の隨ふ暑かな

梅がゝや千鳥なく夜の寒からす　、馬耳

さみだれや松に鳥の羽ぬけ鳥　（ブンゴ）馬耳

棋咲てまこと也けり太郎月　、木奴

啼々きかむ松の雫のほとゝぎす

白梅や尾根の人家の夕烟　春香

月涼し宮居に松の影清き　（タジマ）雪亭

夜の梅にほひをしぼる雫哉　、鷺橋

梅が香や袖にちり來る朝の月　、南花

卯花に捨松明のけぶり哉　（シナノ）雲帯

古株や木瓜は小松の下滴　、如毛

まつ風や鹿子うまれて鴉啼　、麦二

打水や月さしかゝる庭の松　（ノジヲカ）花既

五月雨に猶色そひぬ宮の松　春曉

一木の鉢植を養たてゝ

たしなきをひとしほ花よ冬の梅　桃牛

照そふや有が中にも松の月

奉納

初茸も一夜に千ゝや神の松　（江戸）可因

涼しさや寄て綱うつ松の陰　、龜文

朝晴や雫を梅のかゝえ咲　（エド）兀子

諸人の梅見はじめや神の庭　、楼仙

斯は繪にも書とられまじ月の松　、子丈

さくやこの白きを梅の心かな　、竹瓦

闇の夜や先それとしる梅のはな　、山雨

かつ咲て春迄長しうめの花　、有時

ちり初る梅に定る天氣哉　（タカシマ）圓丈

並松のさはりて月の氣色あり　、瑳雀

あらはれし松ぞ北野ゝ五月晴　（タジマ）和旦

秋しぐれ入日の松に見せにけり　垂翅
むすぶ手に松風落る清水哉　ナニハ 靜觀
春の雨御溝に梅の匂ひあり　雲我
秋風の骨やあり〳〵岡の松　龍江
春もまだ北野は寒しうめのはな　峨眉山
柏掌を愛でもうつや雪の梅　右撰
梅が香を浴むよるべの水鏡　春江
雪ながら梅さきにけり神の庭　守明
色かへぬ操あらはせ岡の松　三保純
吹送るきねが皷や梅の風　ナニハ 菊十
冬のうめ八分ひらきて夜は深し　茂世女
冬一夜眼を閉て梅のあるじ哉　几雪

聖廟にて
古宮や蔦這かゝる神の松　虎風
梅がゝのしみ入や身に腸に　二村

舞子濱
松風に扇吹るゝ濱邊かな　さと女
人しれずよし野ゝ梅の咲にけり　鬼彥

古園やわすれて居りし梅匂ふ　タカサゴ 布舟
いろ替ぬ松にあだなれ秋の風　習之
松植て風きく秋と成にけり　巴川
梅のはな扇をかざす日となりぬ　只言
楪の春かくす事なき空の色　瓦全
岡野邊や雪は斑に梅白し　巴陵
空見れば十一月やうめの花　南 素郷
美しき松の落葉や齢ごろも　、
初雷梅一りんのきほひ哉　エド 蓼二
松の雪松の白瀧夜明たり　エド 完來
夜ざくらや一木の松に鴉啼　奥 谷水
尾上から秋を告けり松の聲　木奴
寒梅や霜に煮たる蕪大根　馬耳
伐口に吹あまりけり松の露　一鷺
寒梅やさす枝に白き比良嶽　巴人
秋の空松吹あれて星高し　春香
難波女や日向の梅も冬ごもり　和旦
石高な道まだ寒し梅のはな　ナニハ 甘三

水滔ゝとして日の影沈む梅の花　　鶴雄
干菜釣し枝もある也うめのはな　　素陵
影向の松の栄えやせみの聲　　呼山
寒梅や日影吹こむやれせうじ　　京甫
梅植て梅を拜してかへりけり　　南湖
凉しさや名も吹上の松のかぜ　　牧馬
うめ咲や下行水に星の影　　歸耕
梅さくや旦の幣もとりあへず　　仙興
ゆく水に香を盗れそ梅花　　里隱
さかづきに松の落葉やゆふ凉　　ナニハ峨眉山
小壹町夏には遠し松の陰　　雲我
夕かぜの松に引るゝ鳴子かな　　巴人
寒梅や土牛を造る花の下　　一鷺
名月や松の太夫も此ゆふべ　　馬耳
寒梅や孤ならず春の藪隣　　木奴
九月廿日過て月夜の松の風　　春香
梅咲て閣の迯たる宮居哉　　ナニハ龜遊
宵の雨寐た間に晴て梅薫る　　甘雨
掛講の普茶はじまりぬ梅のはな　　吾立
梅咲て麥の徑のくづれかな　　嘯風
引付て置たやう也うめの花　　麥光
野分せし跡に一筆墨の松　　龍江

辛崎に遊ぶ

月凉し松三尺の下すゞみ　　几雪
梅が香の宵の曙を命かな　　荷屋
来るさへ唯一夜也松の蔦　　鹿文
千とせふる神垣凉し松の陰　　イタミ東瓦
しら梅に匂ひ余るや雨隣　　東瓦
紅梅や宮司の睡る顔の照　　雨石
皷うつ障子のかげや夜の梅　　タハラ毛條
こゝろすむ松のあらしの四月哉　　ガヽ佛仙
花見ても物うき秋を庭の松　　布舟
有明にせまりて白し寒の梅　　義仲寺沂風

檐前

風鈴や馴て凉しき軒の松　　天府
寒梅や動かぬ水とはなびらと　　不騫

山風やあら吹ながら梅にほふ　大津 菊二
行秋や干瀉(潟)に苔ふ松の濤　荷屋
待となき秋の初日や庭の松　紫曉

夜半宗匠、一夜松撰集のなりから、
鶯や梅にさまるはむかしから　と
聞えける伊丹の風調をおもひ出て

とりあはす物のはじめや松の月　管鳥
うしろざまに松を抱て涼かな　舞閣
松高し其うへに見る花火哉　社燕
梅がゝに動きそめけり虫のから　成美
よそならぬ梅の匂ひや雪の中　東瓦
色替ぬ松はめでたし秋の昏　、
梅が香の夜深く通ふ關屋哉　紫曉

題冬至

朔旦や春咲うめも只ならね　夏田
蓮ありと香ににほはせて松の聲　橘仙
うぐひすの口ほど梅の解たり　自珍
かびらきに伴へ梅の咲加減　歸樂
梅に見る月も二日の苔哉　五雲
あつき日や古葉引つく松の脂　大っ 五來
吹おとす松の古葉や夏神樂　イケダ 星府
やぶ入の鏡のおくや窓の梅　、竹外
野のうめに中山寺の連哥哉　、東籬
健に山は老けりあきの松　、蕙洲
鵁鶄の火ともす松のはやし哉　、朶雪
梅の木にほのめき出ぬ冬の月　、机月
しら梅や扨は今咲夜の匂ひ　田福
神の梅烏帽子に似たる鳥かな　月溪
纔づゝ松がえゆりて雪あかる　菊二
牛馬の沓ふむ梅の徑かな　夏田
松風や爰こそ加茂の夕凉　歸樂
梅がゝの戸叩く園の朝氣哉　芦江
松かぜに調べあふたり鹿の聲　正巴

驛路

みじか夜や明のこりたる松の聲　夏田
香に匂ふ末白雲やうめの花　歸樂

小松野の脂にからまるあつさ哉　松洞
扇もて尺とる松の下すゞみ　春坡
寒梅や下枝は雪の足して咲　木姿
梅を得て駕に乗んと思ひけり　買山
松原をゆく秋の日のあゆみ哉　之兮
澄月の北野ゝ松にかゝりけり　龜兮
暁に雪をこほすや冬の梅　松洞
白梅に春の情やふくみけむ　五來
梅が香やおもふ事なき朝朗　闌更
明る夜の霞を梅のはなれたり　臥央
名月は闇もうつくし松の陰　定雅
松の戸の朝日に眠る男鹿かな　夏田
寒梅に明ゆく空や散は雪　春坡
蔦紅葉松にかさねよ秋の色　歸樂
草のとの春にあふてふうめのはな　松洞
やよ杜鵑さみだれ晴し松の月　紫芳
梅寒し冬木の中のむらすゞめ　圃良
夏の夜の松をながめて更にけり　葵

世やたのし松の風聞冬籠　木姿
遥拜や梅にむかへば日のにほひ　春坡
朝風や松の下ゑに萩の塵　湖柳
冬の梅しぐれわすれし二三日　湖邑
梅にほへ右近の馬場の朝ぼらけ　媒之
涼しさよ池に散うく松の塵　、
梅散や草堂に燈もとし行　暁臺
踏ばつて色替ぬ也峯の松　蓼太
明ゆくや一夜の松に梅花　重厚
松苗やいさご流るゝ清水かげ　米松
ひらくより香はいちじるし梅の花　花毫
紅梅のかしこ過たり寒の中　万容
世の中は松の四月に藤の花　其遊
北谷や南の渓の梅にほふ　杉月
秋涼し富士を見こしに庭の松　志逸
春の月梅見るほどのひかり哉　うめ
行秋や暁松に月にほふ　松洞
、
梅咲て朝寐の横に日影哉　定雅

小松野や高く吹るゝ花すゝき　女 万佐
梅咲てひたいのあつき日なた哉　来雨
茯苓を穿つそこらに松露かな　二貞
神の梅一輪見たり雪の中　熊三
秋風や松吹落て小松ふく　如菊
斧よりも梅につれなきはしご哉　呉明
杜深し社頭の松に蟬の聲　くま三
松原の切戸賑はし海雲市　杜口
御意に入らむ北野ゝ森の梅紅葉　十三八 旧國
ことに松の常盤といはむ四月哉　フル國
おぼろ夜の影も匂ふや月の梅　熊三
月を乗せて影のあゆみや池の松　、
寒梅や琴の糸よるあれ邑　佳棠
折くるゝ辨慶どのやうめのはな　芙雀
むつかしき毛見の衆たちて松の月　、。
梅さくやよき墨曬ふ兒法師　銀獅
初冬の日よりつゞきや軒の松　維駒
月含む松より暮て秋の空　春坡

東山高臥已多時

梅散て誰ッや祇園の畑を打　道立
松風も通ひて凉し夏神樂　菱湖
よき松の隣にありて月凉し　佳棠
あけぼのは冬の意味なし梅花　ミチノク 蘭峨
名月や汀に高き松ひと木　圃良
朝戸出や庭の東に梅かほる　ナダ 椰楡
うめさくや一群づゝの信心者　圖牛
松かぜに闇をさらして棋花　呂蛉
寐て聞んわか葉の中の松の音　シナノ里 蘭峨
ふり返り〳〵見る冬のうめ　南呂
すみよしは松より暮て月夜哉　其汀
梅撰て梅折うめのあるじ哉　、
片山や星のこぼるゝ闇の梅　十三八 丁江
梅さくや先糸はゆる京の町　、 弄我
舟よせてそよや鳥たつ岸の梅　ナダ 士川
うすいたに鼠のあとや觀[illegible]うめ　、 士喬
宵月や梅のうしろの山おろし　、 士巧

まだ寒き二月の梅のかほり哉　ナニハ　東羊
松の戸を甕の敲くや月の下　、蜂友
更ゆくや梅をはなれて梅の月　百池
雨の月今はどちらの松の上　ナゴヤ　士朗
松ばらや風に添ゆく稲の音　、岳輅
見付たり浦の笘屋のとしのうめ　、沙莫
吹革場や窓さきの梅ちよいと散　、紀鳳
蚊の中へ松葉こぼるゝ月夜哉　、岱青
鶯も室に入ばや梅のはな　ナニハ　二柳
四五輪の香やはびこりて梅見月　ナニハ　百堂
吸殻のうまきにほひや野路の梅　、石田
朝寐する戸を叩ばや軒のうめ　、芦雪
梅くるゝ伏水の野邊や下ッ月　、里曉
紅梅やつい彼是とはつ三十日　、郁洞
榮えます松の葉並を世ゝの秋　桃李
冥加あれや描き筆も梅の幹　雷夫
濱道や砂の中よりみどりたつ　蝶夢
咲かねる梅と嵐の日數かな　蓼太

春夜廬几董のうし、風雅にもはら祖翁の跡を慕ひ、書ざまは晉子の筆意を寫す。實に京師の一豪傑也。こぞし墨水に腸を洗はんと、はる〴〵來られけるで先うれしき。余も都の旅寐に面を合してより、いくばくのほどゝ、およびをかゞめて算ふるに、やがて二十年の舊識なれば、互の無事をさひ、かつ長途の恙なきをよろこぶ。一日我草庵にとゞめて、夜すがらの對話に時をうつし侍る。

氷るとも先こゝろ見よ江戸の水　泰里

田舍住せし時

梅咲や馬のくそ道江の南　無腸

此句はひとゝせ五車反古集えらびし時、はし書をはぶきて加えたり。今ふたゝび爰に拾ふて、其あやまちを謝す。

諸好士の短册を乞得て、聖廟におさめ奉るとて

墨の香の朽ずもあれよよゝの梅　几董

（續一夜松後集　貞）

百韵之俳諧　一順

月雪に朶榮えます一夜松　几董
神の連哥の筆も朽らず　春坡
兒達の粥持はこぶ白妙に　湖柳
旭しづけく海をはなるゝ　熊三
船底に暹羅の鷄や諷ふらし　之兮
手して物いふ市のますら男　湖嵒
酒ありと杉のしるしも春めきて　正巴
淡き曇に梅の初花　桃李
貫之を餘寒の宿に泊申　志逸
倚が書きし屛風見せばや　自珍
一碗に茶入のかぎり打あけぬ　春香
傾城二代意地は劣らず　其汀
駕（ノリモノ）に髮切られたる身を忍び　紫芳
ゆふだち霽て暑キ夜の月　芦江
くさらした鱸を川へ投ふる也　松洞
今歸らるゝ肥後の屋敷衆　菱湖
よい比に中でいはせる返詞來て　橘仙
卷おさめたる王羲之の蹟　其遊
草庵の鼠狩出すとしの暮　花毫
なまめく尼の脊に刀疵　歸樂
何者ぞけうがる花の無禮講　維駒
もろこの鮓の底たゝきけり　姝之
春雨に大津の驛のせきあふて　夏田
奴ヨといへば腹たてる武士　飛晴
死るとも君が酌なら吞ほさん　如菊
かりの契に菊盞みやる　文貫
片〱に下駄と草履を露の月　荷屋
翠簾も蔀も野分せし後　雷夫

於運日亭興行

紅梅を折ル手見ゆなる塀の内　春坡

馬上にありて聲かはす春　几董
留川の人せく月のおぼろ夜に　買山
小店の酒を沽きらしたり　坡
かけ捨の簾にひそむ冬の蝿　董
しぐれの傘を投込でゆく　山
名のよめぬ狀たのまるゝ日暮がた　坡
堉つむ舟に美人乘せつゝ　董
ざれ哥に戀のこゝろをふくませて　山
終には曇る庚申の空　坡
夜を暑く高津邊りの門涼　董
ちの足らぬ子をすかす爺親　山
花の比花屋が聲もねぶた氣に　坡
閏二月へ彼岸またげる　董
紅毛に春を訪るゝ寺なれや　山
古き襖に太閤の文　坡
有明の晝ほどあかき草まくら　董
木ずゑの露をこぼす野鳥　山
いとし兒の墓に落ちる栗の毬　坡
又ふら／＼と起る血暈　董
本艸のひらがな付を覺へ居て　山
妖ぬ狐の仇を恐るゝ　坡
井ひとつを十畝の畠に配けり　董
横河を上る松明の數　山
鳴神にかさなりかゝる雲のあし　坡
さはぐを聞ば傾城の反吐　ゝ
硯あり閨の屛風に物書ん　山
雨よくはれて三更の月　董
養ひし貴舟の河鹿啼そめて　坡
難波の客を蓮阿彌が秋　山
君知や薄くれなゐの塩小鯛　董
黃金に換へぬ一振の太刀　坡
何をして世をわたらるゝ隣哉　山
節句の宵の雛を見に行　坡
散にさへめでたき花の喾がち　董
鳥居木ぶかく霞こめたる　山

於八仙窓興行

松一木遠きを秋のながめ哉　之兮
鴈におくれて鳥わたる空　几董
昏の月仕舞普請をいそぐらむ　、
革の袴に茶漬こぼるゝ　兮
助郷に向ひの馬を借にゆき　、
戸板はづして道の雪かく　董
門徒衆は立も居にも南無阿彌陀　、
廣い京にも捜す壻なき　兮
病ムかほを親に見せじと化粧して　董
朝から暑き土藏の白壁　兮
蜻蛉のつるみながらに飛あるき　董
いんげん豆のこける秋風　兮
野荒しを月の夜すがら縛リ置　董
近衛やうにて落首書けり　兮
清涕を直衣の袖に拭ふらん　董
たゞのら〳〵と頭は如月　兮
初午の花に水茶を振舞れ　董
うらの隱居の墟を塞つゝ　兮
うつくしい皃はむかしの小紫　、
百目のかけを壹歩にてけす　董
此ごろの噺御堂の敵討　兮
髭剃かゝる腋臭うたてき　董
雲の峯羊頭の風に崩れたり　兮
鳶の凧を震ふ葉柳　董
摺違ふ駕うつゝなき戀なれや　兮
用ある文をとび〳〵によむ　董
行燈を消せばあかるき窓の月　兮
秋は旅籠の安い大和路　董
眞赤に照リて淋しき柿紅葉　兮
垣を隔てあつさ聞る　董
脹ル乳を心かなしくしぼり捨　董
晴で有たが又雨が降　兮
積で置俵のうへに猫の來て　、
あたいそがしい門へ虚無僧　董
堀川もこもくに交る花の雪　兮

巣だち鳥のかしましく鳴　董

於昨非菴興行

いつも照松間の紅葉見えにけり　正巴
うまや路近く秋告る鐘　几董
肌寒く酒賣家に月待て　桃李
六年あはぬ人に出會し　其遊
やゝ暫し綱ゆるし置春の駒　董
遠山かすむ浪しづか也　巴
日長さに海苔採に出る女ども　遊
勅使の君を見ざる悔しさ　李
時ならぬ神鳴ひとつ魂消さし　巴
もとの圃に菓子並べる　董
盛限の蕎麥切の汁とぼしくて　李
追風下ゞぬと呼る船頭　遊
月弓の輝こゝろよき西の空　董
芒ほのかに兀山の峯　巴
人氣なき邊ｯは蜚も轡虫　遊
羽黒道者の何地ゆきけん　李
花散て雨に成たるきのふけふ　巴
燕をねらふつしのくちなは　董
春ごの娘が病いたはりぬ　李
三とせかくせし文の封キル　巴
占かたのあふも合ぬも世也けり　董
夜は淋しき兩國の橋　遊
衛鳴かたに篩の影見ゆる　巴
枚を銜で來ル敵を待　李
よき酒のほとぼり遠くさめぬ也　遊
木辻の鶯を三輪の山本　董
負まじき博奕にまけしたそがれは　李
横頬はりて月詠むらん　巴
啄ばらひいづくもおなじ秋なれや　董
榲桲を煮ル良遲が宿　遊
おもしろう乞食をせばや哥枕　巴
伽羅へし折て指をいためる　李

川竹にまこと泣せる生別れ　遊
　あけぼのいそぐ鑵挟箱　董
花の雲關門高くとざしたり　李
　百千が中の呼子鳥ぞも　遊

鶯宿社興行

朝風や禰宜が烏帽子に梅の塵　蘆江
　うぐひす遠く答ふ柏掌　几董
豆腐やく籬がこひも春なれや　松洞
　しめりし草履うら返しおく　春坡
韓の髭さへ見ゆるけふの月　歸樂
　白き芙蓉の花しぼみたる　買山
世は露と念珠はなさぬ明暮に　董
　膝に睡れる猫を我友　江
立ながら咄もかるき小商人　坡
　川隔たる戀をとりもつ　洞
蚊やり火のそゞろ燃たつ月の宵　山
　扇の要はしる雲ゆき　樂
足早に往てはとゞまる酒の酔　洞
　修覆にむきし本町の橋　董
鳥さへ飛も得やらず霙して　江
　坐行乞食のたつ時も有　坡
夜に入れど花にとざゝぬ片扉　樂
　盃に乘せたる蕨山獨活　山
炭賣の翁御慶にまいりたり　董
　笑ひを告る奥のさゞめき　江
繪合を無理にかゝせて品定　坡
　雨夜の松にうつる燭の火　洞
ことさらに憎き聲する女鵠　山
　あはたゞしくも叩く孤家　樂
物かげに妙なる童子顯はれて　江
　三たび吟ずる星合の哥　董
ふりさけて掉(棹)さす月の入かたに　洞
　洲をたつ鴈の行衞うしなふ　坡
きぬぎぬも加田の旅寐のかけ流し　樂

守わすれて恨られけり　山
煤掃のせはしき中へいもの神　董
寒きに向ふ汗の手拭　江
出て見れば日あしの八ッに地震ふりて　坡
二疋の馳左右へわかるゝ　洞
散花もむかし良なる鶴が岡　山
菅笠もちて暮かねる空　欒

於塩山亭興行

盃に梅一陽や冬至の日　菱湖
爐の火にほへる窓の南　几董
雲遠く鳥の羽影やうつるらむ　白珍
水増田井に瓜の蔓這ふ　湖
短夜の月の光に鎌研て　董
厩を出るとものみやつこ　珍
催馬樂のかたすじ少覺へたり　湖
筑紫の船に廿日風待　董
ちぎりにし遊女を夢に寐ざめツゝ　珍
太刀取おとす霜の曉　湖
鳴動く宇佐の神がき冷じや　董
松にかゝれる蘿のくれなゐ　珍
乘捨し車に月のさし入て　湖
怪しや誰が鞨鼓うつらん　董
欺きて酒に醉せし夷ども　珍
晩霞あかくて海しづか也　湖
畑打の山を下れば花に鐘　董
拾ひし雉を肩に打かけ　珍
時ならぬ雷にあふ旅の空　湖
ゐなか法師と連哥して見ル　董
たまはりし領地涼しく家建て　珍
二夜つゞけてほとゝぎす鳴　湖
氣遂とはやせば人のはしる也　董
こゝろに祈る泊瀬の觀音　珍
熱さめてへがれし髮のかこたるゝ　湖
朝日まばゆくもるゝみかうし　董

白萩のおもくたふるゝ夜ℸの雨　珍
　霧踏馬に鞍試みん　湖
秋深く月に見あぐる摩爺(塞)ヶ坂　董
　小松もひたす八分の汐　珍
凪に名ばかり殘る鍛冶が跡　湖
　みのぶ参に施しの風呂　董
纔なる懐銀の置ところ　珍
　天氣うらなふ雞の聲　湖
散花の宮もわら家も里ふりて　董
　蕨つくしを童ℸが市　珍

於田原埜刈亭興行

蟬の音にこぼるゝ松の古葉哉　毛條
　凉しきかたへ運ぶ狭莚　几董
詩なくんば酒飲さじとからかひて　ゝ
　ひとりの童又見えぬなり　條
夜はの鐘さすがに月の秋なれや　ゝ
　露の宿にも寐ざるともし火　董
病ムひとのあるに野分の吹募リ　ゝ
　牛を賣たる價三貫　條
暮るゝ日を呼かけて乘ルわたし舟　董
　假に契りし橋本の君　條
きぬ〴〵にゑぼしを捜す暗の褥　董
　ほとゝぎすなく月の入がて　條
又ひとつ旱地震のゆり返し　董
　鯨弔ふ百人の僧　條
草枕乞食嚢に筆とりて　董
　弓矢を捨し春もふたとせ　條
住江の神の初花咲にけり　董
　鼓のしらべとに長閑き　條
白綾の袂ひかるゝ翠簾のひま　ゝ
　丹後の使ほのめかし問ふ　董
遠山は時雨〴〵るゝたそがれに　條
　駒車のしりに野がらす　董
喧嘩にはあらできのふの喞し也　條

隣の醫者とちかづきに成ル　董
祕藏せし瓶を我手に過て　條
けふの暑さを腹あしくいふ　董
世をうしと隱れ住たる曾我ノ里　條
鼠の通ふ天井の鎗　董
博奕して廿日の月も更ぬらん　條
茶粥に塩を入過す秋　董
菊の香も鼻に付たる醍　董
身を横になす玉や新兵へ　條
風呂敷をまろめて渡す揚リ口　、
はら〳〵雨の晴てあとなき　董
おほかたにひとへの花は盛にて　、
袷羽折を着ながしの春　筆

古夜半翁いまぞかりける比、三吟の表あり。今一夜松の時にあひて、佳棠さゝもに首尾し侍る。

國を去て三月花に故人有　百池
春ものうしと布衣を脱らん　蕪村
雨雲の降もさだめぬとまり狩　几董
川音響く闇の十六夜　池
歸さの童子に秋を諷はせて　村
紅葉手折つ擔ふ酒甕　董
棟上のあとは烏帽子も蹴ちらかし　佳棠
源家榮えて奈良の賑ひ　池
遊女すら手の書ざまにしのばしく　董
戀のよすがに絹五百疋　棠
玉といふ椿咲たる雪の中　池
傦ひれふせる一棒の下　董
入唐のおもひ堪べくあらぬ哉　棠
荒盡したる海の新月　池
蕎麥切の外は物なき秋の宿　董
露の垣穂に茶を啜つゝ　棠
ゆつたりと人日ごろの人心　池
袖よりかすむ放下師が舞　董

鋪のこんとうなるや春の風　棠
馬の灸を居へしまふたり　池
勾引さる旅の女を助ばや　菫
雨の小笠に身を細うして　棠
影うつる障子をしばしふし拜ミ　池
土器めぐる陣のあかつき　菫
おくれじと巴陵の栗を運ぶらん　棠
風に向ふて鳥さはぐ秋　池
參リなき彼岸の談義月かけて　菫
火ともすかたに砧うち出す　棠
はだしにて歩行せらるゝ舟上リ　池
命はかなき康頼の母　菫
朝夕のけぶりにふるゝ古屛風　棠
うき世小路にとしは暮ゆく　池
飲明てまた口を切菰かぶり　菫
去てもよきと睡る强盜　池
老夫婦あるじいまさぬ花守て　棠
戀させじとや猫繫ぎ置　執筆

於佛大含興行

雪に哭花神やおらむ梅の園　棠芳
鶴を火桶に抱く有明　几菫
市に出る隣の人もしはぶきて　、
波しづまりし此ごろの海　芳
落ル日にしらぎの城や見えぬらん　、
ふたつの瓶の酒盡したり　菫
盜たる牡丹に衣を被せおく　、
燭の光を反す金屛　芳
初戀の我にもあらぬ戰慄　菫
いくそたび見しけふの櫛占　芳
夕風の朱雀は鐘の聲もなし　菫
月を隔てわたる白雁　芳
凱哥も一手〳〵の秋なれや　、
酌メよと藏をひらく酴醿漉　菫
人間の七十稀に頭巾着て　芳

御機嫌とりの碁は負に成　董
散そむる夜を夜櫻と申べし　、
春の願ひに籠るすみよし　芳

右一折

吳郷山川氏與行

花の旅もどれば梅の青葉哉　星府
雀の卯をひらふ草の戸　几董
寒食の日も夕暮と成にけり　田福
ほそきひかりに弓張の影　月溪
橋通る人の中なる角力取　董
ならしもてゆく扇露けき　府
逢ぬ戀死といふまでしつくして　溪
ふるきなみだの乳人可愛き　董
纏頭たる垢つき衣そゝぎかね　府
風も誘はぬ卯花の雨　溪
暮かけて靜原馬や歸るらん　董
ミづかり來し足机十枚(衣)　府
諸磨居の脊戸へ押出す雪まろげ　溪
日ごろの憎さ棒くわせける　董
春の夜の月さすかたに轉寐て　府
さくらを喫る百貫の五器　溪
鰹うる國はかすみに隔ちたり　董
薄むらさきに明わたる空　府
車押す六婆羅武者の情なく　溪
世はしら波の音も恐ろし　董
千軒の家もあとなく秋經て　府
咏に狐としりて身にしむ　溪
綾のきぬ幾夜かなれし閨の月　董
給の橋のにほひめでたき　府
淺くして水は蜘手に流けり　溪
雜炊の菜を刻む日の昏　董
老が身に瘤の褌を笑はれて　府
遊行の札のけふばかり出る　溪
築山の石につゝじのかへり咲　董

重りあふて龜の甲干す　府
隱居る大工の緒に墨付ん　溪
はたち過ゆく三井寺の兒　董
調伏の兜をうつむ花の陰　府
五位の火消えて暗き春雨　溪
蛙啼鳥羽の離宮は翠簾垂て　董
瓦に生ふる菫なつかし　府

同郷於杜閑樓興行

名月や小松のひまに蜘の糸　竹外
秋の氣はれて雨わすれ水　九董
篠うなる露のやどりに住馴て　月溪
ふたとせごしの劍打也　外
荻の花あかつき近く匂ふらむ　董
乳をのむ馬の親にはぐるゝ　溪
古郷に遠く佛を擔ひつゝ　外
物具着ざる國はなつかし　董
兄弟が孝のいとまに耕して　溪
溫泉のすゑに花の流るゝ　外
落ちりしよしなし文も恭なれや　董
椀筒を包む里下りの春　溪
老まさる驗者の祈たのもしく　外
さしも照日の打曇り來て　董
青鷺の觜さし入るゝ藻刈舟　溪
茶樽をあけて酒買に行　外
あれ月は冠ヶ嶽にかゝる也　董
こがね堀べく秋の夜語　溪
彼岸から博奕やめんと誓ひてし　外
おろかにもどる御城の鶯　董
今更に眉剃おとす目になみだ　溪
簾に近き白罌子の花　外
山寺の昔を閑ヵにほとゝぎす　董
深手の疵にすたく強盜　溪
眞ごゝろを爽ぶりなる哥よみし　外
千賀の汐家に一夜ねなゝむ　董

旅の月越の菅笠うちかさね　渓
逢見ぬ人の魂祭る比　外
きちかうにゆかりの色の藤ばかま　董
朝しばらくに引し川水　渓
宗因に手輕い傘をまいらせて　外
世俗睡りをさます誹諧　董
長閑さをとに冬至の日影哉　渓
わたり心のよき丸木ばし　外
見よや今呉服の郷の花に鳥　山福
機のにしきの糸に春風　執筆

敏馬浦五仙窓興行

松陰やよむほど梅の花盛　士川
誰乘捨の駒繋ぐ春　几董
天目に酒賣錢のかけろふて　丶
聟同士がわらひつゝゆく　川
離宮より翁召るゝ月の秋　丶

紅葉まださきといへる兼題　董
閑さにほじろ頬赤も來鳴らん　董
產の餅つく雨の曉　川
とはなれし乞兒が家居富貴にて　董
海賊どもに女奪はれ　川
文臺何きぬに書たるあてやかさ　董
法事終ると車引出す　川
唉殘る藤のこずゑの二日月　董
筧の水の音しばしやむ　川
北條が武士等うまくも欺かれ　董
つめたき瓶によはの宴　川
うつゝなく落花を握る虚勞病　董
飛火の野邊の春斜也　川
おそき日に能の稽古の音たえず　丶
男撰びやおのがじゝなる　董
新店の風呂屋は若き夫婦にて　川
耳になれたる淺草の鐘　董
露はけて菊の虫とる朝の月　川

としの酒を五斗の拾扶持　董
行秋や三度負たる公事に勝　川
　頭の霜を人に見らるゝ　董
けふも又竹の掉(棹)さす横わたし　川
　鳥羽田の早苗雨にふしたつ　董
よごれたるわた入出す暮かゝこ　川
　したゝか粥をまいる僧正　董
もののけに魂もけぬべき御かたち　、
　伽羅炷盡す船の屋かたに　川
鶴一羽淡路の雲にかくれけり　ゝ
　虹蜺あらはるゝひんがしの方　董
窓に居て折よとゆるす菴の花　、
　机に殘る榧と掲(搗)栗　筆

於浪花文鳥舍興行

梅が香やたそがれ月の入て後　銀獅
　雨氣の風のあたゝかに吹　几董
行春に枕きたなきやどりして　ゝ
　車大工のせまき脊戸口　獅
小盥の水に割木の凍つきし　、
　烏に投ふる礫萬たり　董
穢多邑に藪ひとへなる眞言寺　、
　鞠沓を干す入梅の夕榮　獅
下駄はいて女と丈を競べけり　董
　伏見の風呂ののれんなまめく　獅
夜芝居の太鼓打出す月かけて　董
　茸守る火のきえて又見ゆ　獅
水論の濟でことしの酒匂ふ　董
　蕪の俵をつるす梁　獅
二牧(枚)ある秋葉の札の尊とさよ　董
　老てふとりの付し村長　獅
初花を根ながら舟に移すらん　董
　江口のあたり雁かすみゆく　獅
獚犬の暮かぬる日を横に成　、
　去レよと門を掃ふ弱法師　董

たれこめて疱瘡の兒をいとほしみ　獅
ふるされし身の操うつくし　菫
おもひある文を猿に引裂れ　獅
松に吹るゝ鉄線のはな　菫
川添の杙ぜに綱を打かけて　獅
蛇握りたるあとの物うき　菫
あやまちてないら藥をこぼしたり　獅
念佛講の料理最中　菫
椋の樹の高きそなたに四日の月　獅
秋風はしろ宵のむら雲　菫
うそ寒う篝焚るる敵の陣　獅
あたまのうへをざぶと越浪　、
群鶴に鶴もまじりて見ゆる也　、
津島熱田の宮居なつかし　菫
草鞋にも花の香しむる雨の道　、
茅針の穗より春も閑行　筆

於高崎平花庵興行　ふる國

時人に語はず梅咲にけり　雨什
影まだ寒き弓張の月　、
さゞめくは白馬なるらん牽連て　菫
おほかた若き男どもかな　肉
拾鍬にせかれてよどむいさら川　、

此卷いまだ表も成ざりしを、草のまゝ上毛より持歸りて、余が難波の旅寐に詞を次しめ、遂く雨什に對せよと也。

切府の菜の薹をもよほす　几菫
ひとりして煤掃ゞ寺の臺所　、
人ならぬ身を人にしられて　旧國
十とせたつ月日の鼠きしる也　菫
傘てぞ植し桐の下闇　國
還俗の宮買くもおはすらむ　菫
菜のいさかひのきのふともなし　國
色しらぬむくつけ酒を盛殺せ　菫
ゆふくれならにいづゝ一力　國
寒からぬ風吹そめる松のうち　菫

芽漬もて來て花の約束　園
山里へ挑灯からんおぼろ月　董
しばなく鳥の雨ちかしとや　因
ゐてまいる河越の者居並びて　、
御鷹の餌さし二日後るゝ　董
ゆくりなく霰たばしる雪の上　園
今朝は朽たる門のにしきゞ　董
斷戀とおもふも親の胸あはず　園
うつる鏡にまみ重く見ゆ　董
軒の松遣水の水それながら　園
むかし山口松兵衛が宿　董
漂へる身を世の外にかくれかね　、
月に新酒の品定めせむ　園
鱸荷の筥崎祭いそぐなる　、
田中の清水金氣たつころ　董
弓杖に落にし城をふり返り　、
塩つきなくも弱をすゝむる　園
明ぬとて三ツ四ツふたつ群鴉　、
檳榔の梢さびしき　董
旅寐せよ秋を花なる須磨の里　、
戀に鹿啼葉月長月　園

脇起 於餘白追

散梅や春の行衛のはじめなる　古人 大魯
ともにゆくゑをなつかしむ春　几董
苴の葉の雜炊すゝる圓居して　士川
あぶらの糟の直を呼り來ル　、
陰がちに六日の月の照らす也　几董
ひとも盜まず枝のまるめろ　、
歸らるゝ醫師の節の清衰し　士川
似氣なき姿あはれ也けり　几董
上り渭巣やいなの笹原うちみつゝ　士川
鶺鴒替られてあたまつかへる　几董
夕立につぶと卒たる弟子坊主　士川
秋をさだむる于蘭盆の月　几董

獨住、家のとなりは新酒時　士川
　身にしめて書禁足の旅記　几董
寺の鐘聞ずながらに日が暮た　士川
　やつと俵にしたる芋種　几董
咲花の大和はふるき國なれや　士川
　みぬめの浦は今も春なる　几董

此一折は同門大徳がために、五仙窓のあるじが催せるところ也。

於浪華春蘿庵興行

寒いほどたそがれ白き野梅哉　二郁
　鐘さへ返るにしの山本　几董
傀儡が窓の明りに髭剃て　、
　二年預ケし行李紐とく　郁
新絹の相庭(場)聞あふ宵の月　、
　きのふもけふもならひ吹秋　董
舟を出て岡の南瓜を盗む也　董
　かな聾の早合点かな　郁

戀しりの我戀ならぬ君つれて　董
　雛奉るあはしまの神　郁
晝の燈につかと油を次過し　董
　かた違する宿のむら雨　郁
うもれ江につくも隠の杜若　董
　螢もとばず夏更る月　郁
老が身のうさんな哥をよみ習ひ　董
　日楽し路を國替の旅　郁
ほの赤石蛸の煮うりも花曇　董
　隣よからぬ中の長き日　、
かげろふに烏帽子塗たる漆負　几雪
　能登と呼るゝ良つきでなし　董
嘘してしのぶかひなき古後達　雪
　袖口焦す香爐つれなや　董
たゞならね秋の芝居の夕暮は　雪
　唐柜まねく北のうら道　董
亡骸をひそかに送る雨の月　雪
　もののふの子の四ツに成たる　董

島守が情に博奕許されし　雪
　魚を和るに味噌にとぼしき　董
庚申に夜明し目疣いたむなる　雪
　いせ代參のかたな借ッ、　、
あやにくにつきまとはるゝおもひもの　董
　物いむくせに只死ヌといふ　、
醫師にもうとまれし身のたのみなき　雪
　淺葱ざくらの花に春ゆく　、
拜ませの佛とざして暮遲き　董
　京とあふみのかすみ(紛)扮るゝ　、

於春泥舍興行

鶯の來しかとも見ゆれ冬の松　維駒
　朝日の筋をけぶる初霜　几董
よねはたく水碓の音とめて　、
　痛き时を括る手拭　駒
眞夜半も過るに月のあか／＼と　、
　宿直どころに狐啼秋　董
稍寒くよそじの老といわれけり　、
　しのび／＼にとらす小遣　駒
指櫛に匂ひこぼるゝ桃のはな　董
　ほろ醉良を耻る雛客　駒
春の夜を先おどろかす初夜のかね　董
　長(柄)栖の渡雨にぬれツゝ　駒
誰人ぞ宗祇追ゆる馬馳て　董
　脫で袂へ入るゝ風折　駒
山莊わか葉が奥の花見せん　董
　ひとゝぬしの神も戀しき　駒
欠殘る月を三十日の明晴に　董
　露に旅だつ兄弟の者　駒
御謀反も終にやぶるゝ秋の風　、
　おのれ背をなすから國の琵琶　董
一寸の佛ねんずるおもひもの　駒
　閨の外面の冬菊を折　董
ませ垣にしづ心なき鶺鴒　駒

千わすれては足らぬ染糸　董
銅山の願ひかなひしうはさ有　駒
質屋が藏に落首うちけり　董
うさるほど生りし林檎に朝の月　駒
病鴉に小髪嚙るゝ　董
太郎なる身を三郎と呼れ居し　駒
迎酒せん神奈川の臺　董
ちる雪に藻屑さへなき網曳て　董
灸のかぶれに風わたる也　駒
二位殿の御立待るゝ人溜り　丶
笛のひしぎのゆふべ霞める　董
むざ〱と鯛切碎く花盛　丶
干支の祭の春ぞうれしき　駒

於柴庵興行

蔦ふりてつれなき松も紅葉哉　道立
凮に雨添ふこれ秋の天　几董
ねんじ居し尿やりはなつ有明に　丶
代りをいそぐ假の關守　立
隣まで蠶煩ふこのごろや　丶
自然栝蔞に鳶尾の花咲　董
誰塚ぞ仁和四年の文字見ゆる　董
三日つゞきし夢かたりあふ　立
いたづらに賣しろなせし十寸鏡　董
背ける中へ雪の古鄉　立
頼つる乳人もけふや討れけん　董
如意もて碎く卓の珊瑚珠　立
一山に箭吹出す秋の聲　董
月もひづみて陶器燒見ゆ　立
夜寒しと筥引合す繫り船　董
砂糖をつくる人の交加　立
しら雲の遠より花のいせ詣　董
奥のあじろにもゆる陽炎　立
寄鷄に勝丸と名を給りて　丶
三ッ日の槐にたぶと盛酒　董

芹仕まふ屋根も市松後家なれや　立
新瀉(?)迯の博奕駈るゝ　董
墓はらに鋼のあら巻取みだし　立
狐神去ルあかつきの鐘　董
隠す人ふたり持たる物思ひ　立
とのゐ袋にさみだれの漏　董
北にたつうつほ柱を入替て　立
あなおそろしの蜘蛛の行方　董
おぼろにはあらでうるみし廿日月　立
秋咲梅の木だちふりたる　董
帷子の今朝は身にしむ白書院　、
われ鼻ひれば他も嚔る　立
いや呑の薄酒に酔やさますらん　、
凸凹多き太秦の町　董
暮〳〵て星あらはるゝ花曇　、
此篇前後東西の春　執筆

天暦のむかし、久かたの天満るおほん神、比良社禰宜良種僧最珍法師に詫宣ましまして、吾棲所於一夜可生千松矣。将生。世にこれを一夜松といふ。其松なを残りて、一木二樹はそれと、さだかにしるしとめしもありとかや。木綿だすきかけまくもかしこしや、いのらずとても正直のいたゞきをてらすべしと、かく刺し給ふみいきほひをたうとみ申て、ます〳〵こゝろをすがしき心に、神ノ威をたうとみ申すことのよしを、よゝの夜半亭の主うけつぎて、今の夜半亭几董此集を撰び、續一夜松とよび、猶松梅の二木に題せるほくを、みあらかに納奉るとなん。くれ竹のふしてこひねがへらく、家の風吹つたへ、俳諧てふ道の名ながくさかへて、古へにたちおよばんことをまつと、今の夜半亭が志の、せちなる此集の名の縁ある猶、この集の名の世にたちいでんと、此集の名の一夜より幾ちよをかぞへて、松梅のくちぬいさをしたるべしといふとしかなり。

道立誌

何得書

骨書（ほねがき）

乾・坤

青蘿

とを。

西播林田のさと竹裡舍におゐて 李雨 しるす

天明六丙むまの仲春日

いづれのとしにやありけむ。神風やいせの國はま荻の音高き無爲菴樗良主、はりまがた鹿兒のわたりなる吾師の栗のもとにやどりて、兩吟の俳諧あり。三四五の卷數をつみておかしかりけるに、兩師の友どちなにがしの老醫、序をつくりて、骨書の小集と名づけ給ひける也。其頃その儘梓の切屑にもせんやと聞へけるが、又わが師の思ふ事ありとて、かい捨られしを、予がぬすみ置てけるが、去年の冬すゝ拂ふついで、壁のもとより帋魚の巣となりて出しを、うちひらきて見るに、廿とせ近きむかしなる月花の詠にして、已に無爲菴のあるじはなき人の數となりて、なゝとせの星霜夢まぼろしと過行ぬ。かゝる世のありさま、明日は又誰が身のうへならん事を思へば、いとゞくさ〴〵の卷のなつかしく、ふたゝび絞るなみだの雫に筆をあらため、無爲庵の靈に備へ、交りふかゝりし人にも見せまほしく、書林玄駒にゆづり、梓にえらばむこ



ほねがきは、やき筆のむらぎへなるまゝに、いさをしをいろどりにはぶきて、兩師行脚の奇遇をものし侍るなりけり。もとより骨折てほね書せるにもあらねど、その位置の二なふきよらなる、氣韵の高くからびたる、などかはかのはたとせのほね折なからむ。もてあそぶもの、このほねをもてあそびて、おのづから千里の駿足なることを見ん。予も骨折て序つくらず。

俳諧骨書　上卷

世に遠ざかるほどの
　花にもあらねど

雪の日やをり／＼たゆる人通り　樗良
　歳暮使の樽に大根　青蘿
暫して茶漬ふるまふ夜の間に　、
　ひざをならべて予が時宜に出る　良
あたらしき房もちたり朝の月　、
　馬場の若葉に馬せめる也　蘿
二三枚土手のなだれに莚敷て　、
　日和うれしく御向に寐る　良
あの鳶を射て薬さうと思ひつく　蘿
　かなはぬ戀に歌もよまれず　良
だまされて履隱さるゝおかしさは　蘿
　糸かけわたす七夕の庭　良
舞の莚のはづれに月細し　蘿

かへらぬ人をおくる秋かぜ　良
我思ひともに鳴戸の波の上　蘿
うきぬ沈ぬとし暮にけり　良
咲けば散りちれば又咲花の雲　蘿
山ぶしどのゝ顔もかすみて　良
春の末麥たのもしをもらはるゝ　蘿
小部屋をつくる脊戸の地境　良
細引をひかへて松を伐り倒し　、
狐惑やみふす熱のそら言　蘿
うちかづく京染衣の色よくも　良
しのびて二人岩倉を出る　蘿
笹の葉の雫淋しき雨のくれ　良
ともし火あかく匂ふ菖蒲湯　蘿
いにしへの繪を見るやうな住居也　良
五百に足らぬかねの番する　蘿
翌の夜の船の名月さそへども　良
中〱鹿の秋にはまさらじ　蘿
かぶりたる頭巾にからむ蔦紅葉　良
琵琶の祕曲を聞てぬすむ歟　、
ほろ〱といたく更行しぐれの夜　蘿
海づら白うしほの引かた　、
花の頃山へあがりて見れば扱　良
春風さぶく向より吹　蘿

・

世のうきはうきさもしらでうきは
わかれの雪こかし、さうたひけり。

青蘿

たはれ女の頬先あかし雪の朝
立るすがたは冬の芍藥　樗良
植かへし百合も牡丹も花咲て　、
つかひの人を呼てあはるゝ　蘿
こけかゝる襖のうへに宵の月　、
狸子をうむ露のあき家　良
買込し蒟蒻いもを見にゆけば　良
天滿の市の果口になる　蘿
あたま一ッはられた事のすまぬ也　、

道心坊の脊のたかさよ　良
すゝ掃て千疊敷の朝日影　蘿
酒飲せばや寒のうぐひす　、
金ゆへに治郎髪きる世の中ぞ　良
にきび絶よと神いのるらん　蘿
夜着ふとん積し二階の小くらがり　良
かりたる猫に鼠とらする　蘿
米つきを二日休みし月と花　良
壬生の念佛の鉦が聞へる　蘿
嶋原は右につらなる夕がすみ　、
醉ふたる男脇指をぬく　良
熊坂の謠のきりをうたひつゝ　蘿
よく寐入しを起されにけり　良
火のとほる大江の岸に船つけて　蘿
相圖の扇たてゝ君まつ　良
白黑の碁いしを蒔て占にせん　蘿
さびしくなりし吸物の後　良
ちら／＼と亂菊匂ふ薄月夜　蘿

秋のうちより初しぐれして　良
とめられて栗はかり喰ふ木曾のおく　蘿
三味線ひけば皆きゝに來る　良
倒れたる癲癇やみをかき出し　蘿
加茂の河原の白き日ざかり　、
鳶の羽に水をたゝきて尙暑し　良
繭焚さして晝のこしらへ　、
乳をせがむ瘦子に花を折もたせ　蘿
蝶よこひといふこゝろなり　良

奈良茶三石のはら　三日閉戸

油斷してさかりとなりし櫻かな　樗良
水にも狂ふ蝶のひまなき　青蘿
板椽の陽炎にほふ雨はれて　、
ひとり酒飲む朝比奈が月　良
食焚の老女をしかるやゝ寒に　、
薄はからじ荻は手折らじ　蘿

年を經し御廟の崩れ哀なり　丶
　緣ある人の骨を燒すつ　良
しら衣を引さく指のいと細く　蘿
　夢かとばかりものゝいゝたき　良
涼しさは老はづかしの森のかげ　蘿
　たゞ寄麗なる水の流るゝ　良
王孫が歸らぬ春も已にくれ　蘿
　雉子啼く方に凶を告る歟　良
風もなくしきりに散し窓の花　蘿
　獨活あへて喰ふ寺の夕月　良
うちむれて若菜に腹をたゝせたり　蘿
　戀のこゝろを帶にたんざく　良
朝風呂に花橘の香をかげば　蘿
　車ひゞきて夢はあふたる　丶
瘤おとこうき世に鬼はなきやらん　良
　そゝいでのませ愛染の札　蘿
たか（はか）ふれて刀ぬすむもしのぶ草　良
　祝言うたふ聲に明ゆく　蘿
門前の馬にも粥を喰せたり　良
　花さきみだる宗鑑が庭　蘿
風病て春のくるゝを惜み居る　良
　いとのしるしの燕なれ來て　蘿
此ごろの露にしらけし朝の月　良
　あからみかゝる田の中の柿　蘿
水の出たあとは淋しき西近江　良
　氣比の禰宜どの今に立れぬ　蘿
旅ごろもきぬやの娘うき名して　良
　冷の藥やちぎり置らむ　蘿
波風の荒きをわたる歲の暮　良
　海士の小舟のいのち定めず　蘿

詠水上花　青蘿

盃のながるゝ花の絕間かな
　光りを添ふる岸の山吹　樗良
錦着て古鄉へかへる春の日に　丶

人喰ひちらす虎を射て取　蘿
群てあらしの筋に鳴からす　、
　軒端やぶれて月幽なり　良
菰敷て僧に宿かす秋の暮　良
　むかしをとへば出羽の鮭つき　蘿
紅花をつむ最上の哥のおかしさよ　良
　まさる暑のくもりがちにて　蘿
猿の來て食次あくるかゝり船　良
　ふつと起たる古郷のゆめ　蘿
袖にある小判をないと思ふたり　良
　禿に負しはれの双六　蘿
萩垣のみだれも戀の風やらん　良
　朔日ごろの月の薄しも　蘿
死をいそぐ鎧に露を打はらひ　良
　からき潮を酒に酌なす　蘿
一羽なき二羽なき鷗飛さりて　、
　纔に見ゆる富士のいたゞき　良
ねむきやと老たる母をなぐさむる　蘿

　六ツになる子の剃髪の夜に　良
實方の涙の雀庭になき　蘿
　落馬のあとや薄生ふらん　良
朝の月狩の竹鑓手束弓　蘿
　來かゝるものが燒芋を喰ふ　良
ひそ〳〵と向の後家をそしり出し　蘿
　地獄の沙汰もかねの世の中　良
消る燈に油くはふる光なり　蘿
　腹立まゝに夜半のきぬ〳〵　良
人の呼ぶ我名を仇に返事して　、
　筵引むすぶ柚が雪隱　蘿
うしろなる巖に花を吹おろし　良
　裸の行の滿るきさらぎ　蘿
俗縁のものに逢ふたる長閑さよ　、
　先うぐひすの事を尋る　良

戀

樗良

二人見し月を涙のかたみかな

おもひよるべも秋のうき雲　青蘿

荒磯やたよりを波に鴈鳴て　、

芦火焚つゝ海老を焼くふ　良

切剝の手下になりしおかしさよ　、

白銀五斤年を越べし　蘿

積雪に福知の便うちたえて　、

坊主の兄の名をわすれたり　良

錦着る戀のやつこの身のうさに　蘿

閨によせ來る夢のしらなみ　良

曉のなく音せはしきほとゝぎす　蘿

淀のわたりに豆植るころ　良

弟は生鰤うりに取つきて　蘿

内の喧嘩の挨拶もせぬ　良

あたらしき鍋蓋寒く朝日さし　蘿

くれなゐこほす井のもとの花　良

石なごにふりわけ髪の妻さだめ　蘿

はま弓張のかけをしのびて　良

白兎根笹をわけて行衛なき　蘿

岡にふりたる塚の百年　、

いまさらに父のうらみの猶まさり　良

奉公する身の無筆かなしき　蘿

似もつかぬ祭のことをくらべたり　良

くれてしづまる月のさめがゐ　蘿

馬洗ふ盥に軒の柳ちる　良

踞ひかねし草かれの瘡　蘿

のぞまるゝ居合の刀三四尺　良

水をたゝへし鉢と盃　蘿

朝良の花は凉しき六月や　良

垣根にうづむ得道の髪　蘿

白綾のやぶれ袴の裾引て　良

牛の價をせがまれて居る　蘿

御宿した御朱印五石五斗五升　良

大黑棚に風のふくをと　、

手際よき春なぐさみのつくり花　蘿

けふは菫にふたりうかるゝ　、

雪

はつ雪や火桶まいらす母のまへ　播林田 暮蛉
火桶抱く我影あやし夜の雪　、 野上

夜坐線香三尺、雪肉に入。

やゝありて鳥啼けり夜の雪　、 雨人
茶の烹て明はなしけり雪の菴　、加古川 宗保
押分て芥子の葉出る春の雪　、 共良
初雪や清女がふみの薄ぐもり　但立脇 渡江
僧とめて後世にいりけり夜の雪　、雪谷 桃如
しら雪や牛牽まはす門の口　、大養父 至峰
寐鳥射る人のゆくへや夜の雪　、生野 文綱
くるゝ日や畑に染る屋根の雪　、 梅夕
水もともに色こそうつれ夜の雪　播室津 立季
薄雪や又なつかしきあらし山　、福崎 五草
降うちに梅は花なり春の雪　、明石 麻圃
音もなく香もなく雪の夜と成ぬ　淡路 二春
かれ萩につもれる穂やけさの雪　林田 畫佛
淡雪や柳にさはる夜のをと　、(忍刀) 怒卿
雪の日やゆきをつくねし淡路嶋　播備後 竹圃
水菜より青みさしけり春の雪　、千本 青塲
とく起るくすしの門や春の雪　、 布舟

さくら

櫻咲てかくれ家もなき都かな　播姫路 雪巾
駕籠かきの起して見する櫻かな　、 雨人
櫻待やものふた月をくらしかね　浪華 芦住
折てかつぐ人をうづむや山ざくら　、 素扇
夜ざくらや衛士が焼火の遠あかり　但出石 李天
雨の櫻二日かけたる酒宴かな　、生野 凉秀
宿引の馬たゆまする櫻かな　高砂 共鐘
山ざくら散てのこるや筆の先　播三木 芦紅
尋佗てくだる麓の初ざくら　、明石 五齢
さくらとはうしろあはせや草の菴　淡 綠翁
あぢきなや木を伐る岨の初櫻　、 暮蛉
死るまであづかる菴のさくら哉　、 野上
山ざくら世に交はらぬひとへかな　播上郡 圭舟

山櫻ちるや薬ごしの走り舟　青蘿

花

花見ればこゝろひとつの憂世哉　林田 李雨
夜の花宿直の人もさむらはず　出石 梧堂
もち搗て國師の寺の花見哉　、梅國
花は根にかへる都もうき世哉　、方訳
曇りては倚さりがたし花の陰　浪速 好籛
ちか付を茶屋から名のる花見哉　生野 松童
花の山ちりにまじはる不動かな　、諸香
花くれし山人いはふ哥賃かな　文綱
花守を人に醉するゆふべ哉　播垂水 子逸
上品に肴もくはぬ花見かな　姫路 双居
花の香や衣桁にかけし薄小袖　淡路 玉屑
はなの香の鏡にうつるくもり哉　、梧秋
ちる花になき父母ぞ戀しけれ　作土右 有磯
蝶ひとつ寐残る花の月夜哉　播上月 馬肝
花ふかしいくつもかへる山がらす　播魚崎 洸洲
峰の花雲よりうへの曇かな　圭舟
ちる花にはじめて惜む一日かな　明石 蝸國

閑居

世は花の咲にまかせて竹の奥　曾根 令茶
花のとき道見付るや山のおく　播佐用 鶯里

戀

しのび路にむねうつ傘の霰かな　浪速 美ち女
思ひかへてうきを袂にぬくめ鳥　洛女 紫蘭
我戀や長卿が筆の花もなき　高砂 李冠
いもが宿は宵あかつきを鳴水鶏　但湯嶋 母山
世の中はいろにこそあれ紅の花　、廣谷 逸馬
化なれや妹がりゆけば種瓢　桃如
身ひとつは照らぬ思ひの月見哉　生野 巨山

智あるも愚なるも

つたなさや逢ふ夜ふり行露の道　松童
萩は袖にこぼれていとゞ君はうき　播新野部 脱負
うかれ女のつらなるうへやわたる鴈　姫路 耳香

螢ひとつとめて占ふ扇かな　木水

我にうき人や待らむほとゝぎす　梧堂

出かはりや戀渡る身と思はるゝ　魚崎 玄駒

我戀やほそ谷川の合歡の花　播赤穂 鰕交

良見えて君うき晝の砧かな　靑塢

寄鮑戀

かた思ひ歯にもあはざる鮑かな　靑蘿

俳諧ほねがき　下巻

即興歌仙

節の日やあらかたひらく梅の花　靑蘿

鰕から光る背戸の春風　樗良

暖さ溝に杭うつ肌ぬぎて

又來て嘶す組頭どの　蘿

やう／＼と蚊のへる比の宵の月　、

萩に琵琶ひくおとゝの(わカ)いたりや　良

蟬丸の白き衣に野分して　良

童うちより車引する　蘿

石高き(天カ)失洲の川原の夕間暮　良

茨の花にぬぐふ血刀　蘿

かた糸のほそきこゝろに身を恨み　良

蚕を見る目も我なみだなる　蘿

木がらしや伊勢のあらしま吹あるゝ　良

戸に菰をはる曲突のさき　蘿

子なければ近所ほとりにうとまれて　良
　ひがん賑ふ月のゆふ照り　蘿
かつら結ふ桶屋が門の花紅葉　良
　棒の稽古も秋はうすらぐ　蘿
江戸を見てそれから後はうはの空　、
　妙義の若衆元服をして　良
撫子のちるにもひとり驚かれ　蘿
　素湯をのみては又ねぶる也　良
なぶられて五祖の眞似する菴の僧　蘿
　岸より雪を吹おろす日に　良
矢を負し狩の兎の逃うせて　蘿
　客のたえざる武衛が館　良
繼哥に一斗の酒を飲ほこり　蘿
　舟の障子の川に流るゝ　良
秋もはや千鳥聲する風の月　蘿
　筋頬ふて稲もかられず　良
わた畑にしのびし戀をおもひ居る　良
　犬に追れし去年のきぬ〳〵　蘿

上下を着て見ゆる日は若やぎて　、
　論一番所望するなり　良
行先も過たるかたも花の中　蘿
　瀧にかゝれば雉子に鶯　良

すかし見て星に淋しき柳哉　樗良
　舟にねぶれる江のうへの春　靑蘿
塩鳥の苞に別れの鴈啼て　、
　使のものが飯を手つだふ　良
算用に店はせはしき暮の月　、
　數の染地に露ひかる也　蘿
風ほそく岸の一葉の散そひて　、
　入水の僧を尊くも見る　良
空中へ字をかゝれたる杖の先　蘿
　二升の酒をついと呑ほし　良
死にさへ人目をしのぶうき身にて　蘿
　蒲黄の蚊帳のもゆる思ひよ　良

とらへ來て宇治の螢を放けり　蘿
　遊びにわせし聟の母親　良
すがいとの把のおもみを持くらべ　蘿
　花の最中もしらぬ商ひ　良
朝の月軒端に霞む小田原や　蘿
　大磯過る春の鶯鴫　良
二年ごし新田おこす世話をやき　、
　もどせといへど女房もどさぬ　蘿
平膳の汁ふみこぼす上り口　良
　わけたる魚の籠をはねきる　蘿
水無月の水をふれくる風すゞし　良
　袖の浦こぐ舟の薄くれ　蘿
傘さして通る娘に聲をかけ　良
　梅のつぼみの散れといのる歟　蘿
花すこし咲かゝりたる不動堂　良
　片道付し坂のいてとけ　蘿
三日月に石積くるま引かけて　良
　銀に露をく信長の採幣　蘿
菊の香の鱠をいはふ朔日に　蘿
　言ひそこなひを哥に詠けり　良
居風呂にかくれし戀を見咎て　蘿
　脇ざしぬすむ闇のくらがり　良
卯の花の雨吹こぼす窓のおと　蘿
　初ほとゝぎす山をいづらむ　良

春

先母にうれしがらせつきそ初　播大才 寫竹
萬歳やいつをむかしの男ぶり　四石 湖月
芹つみや笑ひを流す川むかひ　、梅舍
あさ〳〵と香にたついろや芹薺　作土居 蛙聰
一夜にも足らぬをいはふ若菜哉　、有磯
しら魚や尾にふり分る雪の水　林田 錢氏
白魚のゆられいづるや春の海　、茶木
しら梅はあしたゆふ日の紅梅や　浪花川口 雨稲

むめがゝや小藪かすかに闇のいろ　、茂梅
明る夜のうや〳〵しさよ梅の花　摂尼崎 葭笛
梅咲て栁にいろを持せけり　明石 菊布
こぼれ梅衣干そむる垣根かな　曾根 宇竹
見かへれば藺原遠しうらの梅　魚崎 洗洲
嶋ひとつ舟ひとつヅゝ朝がすみ　、玄駒
水見ゆる冬田のはてやはつ霞　姫路 孤春
一わたしこえて菜種の花見哉　高砂 思間
雪とけや放してしまふ冬の鮒　、瓜凉
雀らや竹の餘寒をふみくだき　播尼崎 芳川
玉なして雨に落るや白椿　千本 龜鏡
鳥啼て朝寐もさせぬ椿かな　淡路 柴山
うぐひすの遠音にかはく田面哉　、此道
鶯をあとにきゝけり渡し舟　李雨
待合に鶯きくや夜こめの茶　木水
夜の雨に土筆のびけり麥の縁　江戸 湖香
春の夜や雨をしらべる琴のうへ　、寸蘿
待かねて折しも覗く木の芽哉　三木 芦仲

燕や背戸門しれぬ一軒家　、蓬聴
きさらぎや雨夜に重きよせ豆腐　林田 瓜朗
春風やまだつくり得ぬ鳥の巣　魚崎 素功
瀧壺へ咲こぼれたるつゝじ哉　、春雄
涅槃會や死うとことの思ひそめ　、迂陵
蝶〳〵のねぶり吹るゝや春の風　曾根 桃圃
雉子なくや畑うつ人の鍬の先　、捲雨
しら梅に神代も近き山家哉　廣谷 馬北
春の山蕨わすれて戻りけり　但西下 尙古
かくれ家や花咲かゝるいけ大根　城崎 鶴市
若鮎や春をかつらの水のいろ　出石 左彦
はる雨や廻れば遠きうら隣　生野 菜花
うしみつやされど杉間の朧月　浪花 巴凉
四ッ辻の四もうちけりおぼろ月　姫路 双居
石橋([illegible])を舞ふて下たる(胡)蝶哉　、路秋
長閑さに黄昏しらぬこてふ哉　、五川
蝶〳〵のなるゝや店の小人形　雪巾
きのふ見しもけふは歸るか天津鴈　赤穂 白岐

ゆく鴈の涙歟麥にのこる霜　明石 麻園
行鴈や越路の深雪きえぬべき　江戸 戸菊
菜の花や闇にちらつく蝶の影　、素山
なの花の中に月さす小川かな　加古川 五喬
沖津帆の雲間に見ゆる汐干哉　、歸木
ゆふ暮も果なき春の海邊哉　、耳毛
尼寺や椿さくらも咲ばかり　淡路 狐項

夏

宵闇に傘さしかけむ栗粟(罌粟)の花　姫路 耳香
河骨の花かい出る家鴨かな　麥茂
葛の葉に吹かへさるゝ螢かな　梨青
いま一聲老わすれ草よほとゝぎす　播 新野邊 風虎
羅の肌にも入梅のくもりかな　生野 蘭秀
鵜ぶねゆくから櫓の音や闇の中　、百慮
月雪と庭ふりかはる納涼哉　、我直
すゞしさや松倒れ居る水のうへ　、弄花
たゝき立る藥罐屋町の暑かな　、諸香
夏の月闇にもなるゝ石のうへ　伴山
月は松に上りて門の田植かな　廣谷 大路
水めぐる柳がもとや夕すゞみ　大蓼交 古盤
すゞしさや火をうちこぼす川向ひ　明石 化麥
舟をぬすみて江を漕廻る納涼哉　麻園
一人ふたり住ほど菴の清水哉　白岐
山寺の馳走や鳴をひやしもの　素功
萍やうき巣のかゝる花一ツ　播 曾根 臥菊
藻の花の波にゆられて流れけり　共良
日ごと日ぐれ里あるかたに啼水鷄　鰕交
共むかし我にもかゝれ火取虫　淡路 之梅
菖蒲咲り芽い岩遣す水の先　曾根 松溪
朝市や夢かとおもふ初茄子　三木 成章
葉ざくらに一重はかけん土用干　、右香
蕾がほやゝが実立し竹の枝　瓜朗
朝の間はすゞしく聞ゆ蟬の聲　播 今市 愚寒

啼絶る蟬に淋しき山路かな　龜鏡

秋

初秋の香や一片の柚のにほひ　赤穗 笙洲
をく露も手をくだきけり萩の上　三木 如鏡
かたわ子のひとり踊るや宵のほど　、箕外
手仕舞や筵かけたる盆こゝろ　瓜凉
角力取もうちに居るなり魂祭　恕卿
いそがしや兩手の雫たままつり　姫路 桃岐
しづかさや誰もさはらぬ女良花　、紫硯
崩れては秋の夜となる踊かな　出石 湧太
露しもにくづれもはてぬ案山子哉　、月波
かまきりの落ていかるや秋の暮　、如瓜
雨の日は散どころなき薄かな　鶯里
蘭の鉢の欠もひゞきも匂ひ哉　五川
蘭の香を小雨に圍ふ小窓かな　立季

淺黄にもならで秋ふる故(胡)蝶哉　孤春
朝の月翅にさしぬあきの蝶　路秋
蚯蚓なく溝すぢ晴し三日の月　姫路 花瓦
待宵はやさしき月の化名かな　二蛙
初鴈や待宵の月の月の前　五草
見まくほり一處不住の明月を　魚崎 常和
出しほや峯にあまれるけふの月　蛙聰
萩咲や細一すじのかりがこひ　江戸 吹石
朝風をこなしかねたり秋の蝶　林田 土塋
牛糞の中にはにくしきり〳〵す　播 勿坂 五嶺
細みちやひとあしぬきに虫の聲　、佐用 雨耕
虫の聲の老に親しき寐覺かな　生野 袴仙
うか〳〵と蝶のとしよる花野哉　馬肝
一ツ家は米洗ふ水も花野かな　脫負
漁火を妻の出て見る夜寒哉　浪華 桃溪
朝寒や小菜賣乗しわたし舟　淡路 添杜
露すゞし一葉〳〵にあけの鐘　之梅
秋もはやくれはあやはの祭かな　、寫凉

世を捨し我に菊つくる病かな　加古川 青角
町並や背戸へ見通すきく畑　大養父 春江
あらしのみ我に残りて秋くれぬ　廣谷 李邦
松風やもみぢを崩す夜のおと　赤穂 嵐外

冬

にほひけり茶の木畑の初しぐれ　播赤穂 白畫
橋のうへ我身の空やはつ時雨　淡路 物橋
雨戸越に咲てはたすや枇杷の花　玉屑
藻くず焼窓にかげさす千鳥かな　狐項
目を閉て聞けば人なり鉢たゝき　、雀空
鉢たゝき名利の地にも似ぬものぞ　生野 戸外
はち叩ふしも拍子も瓢かな　芦江
山里や見て居るうちに行しぐれ　土莖
顔見世のもどりに通るかれ野哉　布舟
かげろふのたなびき初る枯野哉　明石 起蝶

篗にせん我愚さのくすり喰　蝸園
あさ凪や炭竃のけぶり立のぼり　子逸
白装も暁ゆかしふゆごもり　浪速 好從
松杉にとはる聲やかたしぐれ　宗保
物おもふひまに手をやく火桶かな　高砂 百男
切だめに牡丹くづれてとし暮ぬ　李冠

文通　四季發句

芹ひけば薫る菖蒲の古根かな　洛 蝶夢
比良の雪大津の柳かすみけり　几董
鳥はなき水は流るゝ若葉かな　定雅
ゆく春や観世が家の散し文　紫暁
鴨なくや底たでさぶき水の月　春坡
金もちの隣は寝たりおぼろ月　浪速 牛桂
鉢たゝき過ゆく聲のほそりかな　伊勢 宗居
起ふしやどこぞのほどに梅にほふ　坡仄
木偶のほうの脚を分る扇子かな　江戸 成美

舞の手の工夫は寒し冬ごもり　加賀 風逸
泥すゝる家鴨のうへや舞ふ(胡)蝶　下總 尺艾
萩にかくれ萩のうへゆく野川哉　信濃 如毛
くれなゐをにぎりつめたり冬の梅　雲帶
きり〴〵す鳴や米なき布ぶくろ　洛 重厚
雪どけや深山ぐもりを啼からす　尾張 曉臺
かけろふの秋にもあへり花薄　士朗
鳴鹿の顔の下まで月夜かな　東壺
ロ〆て誰かすておく春ふくろ　備後 古壁
夜と共に花ながすや夏の月　近江 沂風
から船に木がらし落るみぎは哉　菊二
門さきに鶴見る鳥羽の青田かな　肥後 文曉
早蕨や兒馴染するみねの寺　讃岐 楚畔
紃(あざなへ)る縄やほつるゝ春のあめ(糾カ)　洛 臥央
木がらしや川吹もどすさゝら波　百池
鴈啼や三隅ははれてさよしぐれ　佳棠
しら魚にみだれ初にし玉子かな　菱湖
御影供やことにしづけき比叡の山　之兮

白梅の世にかくれなきにほひかな　瓦全
狭むしろは宵のまゝなりわかれ霜　茂林
花踏んで雛にかくるゝ鼠かな　月溪
夕ざくら鷄に寝てゆく覺悟哉　洛 閑更
しぐれつゝあとは日暮の淡路しま　あふひ
西ひがし何を日あてぞ春の人　有庸
梅咲て雪ちる谷の日かげかな　千尺
きは墨の暑くろしさよ夏神樂　其成
水音や八重山ぶきの花ごもり　伊勢 龍石
水とりて妹が糸瓜は荒にけり　江戸 蓼太

骨書跋

いまはとゝせあまり三ツふたつとかゞなふむかし、無爲庵のあるじ、須磨・明石より天の橋立を渡たるかへさ、城崎に杖をひき、手ヶ浴の旅寢に、ほね書とかいへる小冊を懷にして訪ひたまひぬるを、かげろふのありやなしやもこゝろの底にとゞまりぬるが、これなん藻しほ草の露ときえつゝ、其まゝ反古ともなりゆきなんと思ふをりから、はからざるに今年おなじ栗の本の門にありける李雨、その金玉流水の卷〳〵を梓にちりばめんと聞ゆるに、其夢のあとゆかしく、筆をとりて跋のこゝろとなさむは、其ありし世にかはらず、今もほねがきの骨をくだき、風雅の道に遊べることを、なき無爲菴の主に告まほしく、亦います栗の本の師の命もいなみ難く、但馬のくに養父の郡なる廣谷てふ山かげの竹窓をわけて、

桃如書

跋者栗の本門人
同播林世
竹荷舎　李雨

天明七丁未歳

蕉門書林

京三條通御幸町
菊舎太　兵衛

播州魚崎
明屋喜右衛門

春秋稿

天・地

白雄撰

（春秋稿　天）

わが春秋稿、年ゝ歳ゝことふりにたれど、蓬莱つくし菊枯てのちは、御冬のおもひ老にせまりて、旅好とよばるゝ身の旅をさへよ、弊廬に埋火かきうがち、薄酒兩三杯髭をつまばさみ、醉中ほのかなる夜や行かひしぐれ、ものいふごとく、孤鴈聲を落して、たゞに友をぞ戀はじむ。隔山の烟、籬外の角、更に何ぞをちこちの別ある。ゆへに乾坤のふた卷、撰となく不撰となきは、則この集の趣なるべし。

天明五年冬

艸庵

かはる〲人もしぐるゝかたおり戸　江都 曲城
しづかさや雪まつ菴の丸柱　斑雀
むぎの粥薄みぞれともなづけたり　詩紡
冬をこもる心市中にあそぶかな　昆明
しぐれきや酒いれ瓢風さはぐ　莞爾
家ぶりはつくらし庵のひとしぐれ　秋日
撰集は夜のものかや時雨降　伏龜
艸の戸やしぐれわけたる松榭　千鳥
年〲や菴にことたる張火鉢　古由
雪の蓑寂栞とふすがたかや　燕羽
葉蘭風に凍しや何と風さゆる　釣雪
時雨せば雪ふらばとてちぎるかな　東來
雪霜やへがす口ごろの不藩（審）紙　我睨
いくしぐれ酒とぼしくも見えぬ也　此君
さか手出す茶はのちむかし夕時雨　紫居
かたる夜の朱は朱に氷る硯かな　春鴻
くちおしや寒夜にくぢくすて心　白雄

おなじく

木槲や市中にふかき霜を見る　南總寒生 灞陵

こほる夜や筆のさやわる菴の閑　古川 雨律

深坐冬寒うしてそく飯ひき行取哉　北總曾我野 眉尺

此間いねたり窓うつ霜の聲をきく　寒川 重雪

茶の花に茶がらをかしき寐覺哉　武村山 あき良

閑にたへて月に犬うつ子等寒し　八王子 喚之

興盡せで埋火ちぎる亥中哉　北野 慶山

さかづきにすくひてもがな窓の雪　長澤 楚石

水僊の花たひたけに書の小くち　吹上 橋驪

菴の竹霜の降べき夜なりけり　相中大山 宜頂

庵をとふおりこそよけれゆふ時雨　椿澤 智邑

訪我を興じたまへや雪の簑　上毛新田 烏毛

庵の閑炭はねて夜の閑わたる　白井 龜曉

松かぜや庵は帑子のかさね衣　信戸倉 篠雨

冬をこもる庵主の眉の長き哉　仙臺 みち彦

艸の戸や銘を時雨の火吹竹　武木曾 百雉

蕉翁正當日

月は花はけふは時雨の翁哉　白雄

終は雲しぐれてものゝなき野哉　古帳

むら杉の日たゞしぐれてくるゝ也　江都 莞爾

すくも火の門にしぐるゝ縣かな　武府町屋 棣花

しぐるゝや鳶のをりたる捨桴　相中掘澤 智邑

たが獵矢岩根にたつて時雨降　淵邊 志計

何がし寺院にあそびて

しぐるゝや漁村つゞきの寺林　南部 一艸

ひとつらの鳥かいくらみ行しぐれ　南總引田 藤歩

淵明の鵩・莊之の鶏、いづれか是非はしらず。

八重垣や籠に鶴啼さよしぐれ　我脫

羽ぶしこく鳥に時雨のはこびかな　上毛遊川 朝蘭

松のほど時雨をあます岬かな　武村山 詩友

いなむらの小鳥しぐるゝ野口かな　、楚江

志卷日を狹蓑つりたるふせ家哉　、葵洲

しまく日を雨のかゝしのかばねかな　、吐燕

風の若葉いたらずといふところなき　武吹上 橋驪

川舟や木の葉がくれに行もあり　信戸倉 可明
礒山のこの葉に曇る出舟哉　長井 洗耳
日かけ薄く落葉ふみゆく古城哉　南總上總 素交
海に飛木の葉の行方われ寒し　上毛尾高 丹霞
冬の雨風どちらともさだまらず　江都 雨和
こがらしやほとりの菴のやれ障子　信上田 和水
こがらしや竹のきりくちきそひ鳴　上毛上白井 分虹

母のなくなりし秋もきのふに過て

こがらしやあら墓にうき杉の枝　遠川 桴仙
合器木履引しほのちどり流れ飛　江都 山城
朝あらしちどりの翅凍をれん　信戸倉 丈馬
菴の朝寐ちどりに夜を寐ぬ人か　相中金手 桃嶺
つねながら引舟たゆむ川ちどり　江戸 文鯉
鴛鴦啼て我に寒をゆづりけり　加賀 くれゆき
通夜こゝにおしの羽音も聞にけり　相中用田 楚雀
水鳥や落る門田の水ひゞく　、青扇
水鳥の土ふむ雨の山田かな　葵洲
みづとりや離れたちし湖の月　戸塚 鶏父

夜の聲ぬくめ鳥啼て覺たり　上毛師田 鳥毛
礒馴てや神門をくゞる鷦鷯　沼田 蝶城
芦ふして見こしに野鴨の頭かな　し川 憑河
ゆふかぜや野鴨はかしこの岩の間　布施 山郭
血にうみし鳥の羽凍し獵場哉　師田 青志
獵にもれて桉木にすくむきゞすかな　遠川 雲和
おそろしう世はなりぬるにかへり花　江都 春岐
薄すみれ咲かへりたる芝生哉　下總安川 重雪
影氷る水くれなゐに寒つばき　南總木沼 泥龜
山茶花に鳩居ぬくもる古院哉　坂田 竹歩
風荒てかけ菜をかこむ寡婦哉　上毛師田 晋水
かれ芦の風吹おくる夜舟かな　相中大山 宜眺
かれ芦の葉わけにくちし卒都婆哉　烏毛
枯芦の月にをれ逢ふ夜風かな　信上田 文下
寒菊に風をへだての穂垣かな　上毛いかほ 花明
茶の花のしら〳〵のぼる月夜哉　江都 不雪
松みどりに葛のうら葉の枯てける　南總米生 釣楓
なき人のしるし負ゆく枯野かな　信戸倉 麥雨

里遠く鳥のわたるかれ野哉　上毛白井 鳥路

むき〳〵の栖あらはにのぞかれぬ　上白井 蒼雨

骨柴に春なつかしき小春かな　上毛しぶ川 米太

むぎ蒔や女火をこふたにの奈　植栗 夜光

冬川や白浪おこす組いかだ　沼田 近市

寒き夜やあてどもあらず鵆啼　信戸倉 玉路

きゝ馴ぬ鐘ひゞき殊に夜の寒き　相中厚木 洪水

おもはずよ鵆しば啼ふゆの月　青雨

寒月やすさまじきもの水車　信上田 雲帶

寒月や川こす牛の水けぶり　三州岡崎 柳水

まてしばし筑波に晴し冬の空　江戸 冠戎

憎さもにくし、あはれさも又

子をすてし奴なにと見んけさの霜　信中村 鳥瀾

そばかりの心の亂り霜白し　仙臺 寸梁

野の霜や篝火はるかに風たえし　上毛沼田 如布

蠣からや霜にくづるゝ浪の音　瀧川 半路

みどり兒の痲肌にものを霜夜哉　桴仙

明星や兀山の霜ひかりさす　白井 一頂

澁柿の落てあてたし庭の霜　下總登戸 六帥

くり舟やものゝかなしき明の霜　信德間 帥居

江にうかむ藻屑を霜の見どころ歟　江戸 秋曰

薄ぐれや俵をもるゝ炭寒し　下總曽我野 眉尺

炭折て瓢にいるゝひとりかな　武宮寺 東居

花紅楓はてもあらんに炭のをれ　むらやま 仙衣

炭がまやさとは楮むす薄けぶり　藤田 蓬壺

居風呂によばれて出しこたつ哉　信戸倉 鳥奴

うづみ火に蘭の香きくは疑し　上毛上洋 春城

榾の火におちはぬむしの羽ぶきかな　武箕田 湖光

星まれに雲飛あられ降夜哉　信上穂 文斯

馬つけの板戸をかしや薄あられ　戸倉 丈馬

朝市や橋に霓の蓑ふるふ　武吹上 雨后

行雲やかへすあらしに霓ふる　上毛白井 礎卜

きのふうちしこほりの礫氷けり　下總寒川 素行

夜をともに岩間の苔も氷ける　江都 史明

あつ氷芦根の小蜷いかならん　上毛白井 淇竹

うすらひやもろき柄杓のはなれ際　相中海還 素明

こほりとぢし江に松風の落すなり　武大谷 祇室
筆凍てうつばり裂し深夜かな　上毛沼田 大楞
君が代や馬もきぬ着よるの雪　江都 千鳥
雪三日人たえて鶏の聲遠し　信稲部 菊兒
月に花に友とひせしを雪の旅　上總 梅士
あてもなき雪見に出て笠重し　上毛白井 路長
町裏の雪にながるゝ砥水かな　あきら
社家町や雪の扉に歌うたふ　上毛沼田 春都
あみのきれ網代に寒き月夜かな　武八王子 冬扇
非のもとに花膾魚洗ふはゝき哉　智邑
似あはしやから鮭賣の茶せん髮　秋曰

うめに題す。

梅ちるや日はかはくかにさしもぐさ　眉尺
かへるさやうめにものいふ人の門　北野 慶山
梅に笛あなにくの夜やさえかへる　大楞
太刀かけしためしも梅の木ぶり哉　白雄

たく縄やまたぎ越たる浦の梅　我眺
小人の衣重きかなうめに月　武榎戸 舊河
驛路やふとゝのおもふうめの花　甲町墨 鳥曉
梅さくやさくらはいまだすさまじき　上毛河田 五溪
接わけの匂ふはうめのひとへかな　しぶ川 三遥
市中や風の梅が香ふりかへる　、 吟之
かしらあかき雀もきなけ梅の花　沼田 含来
雨後のうめたもちては軒に雫せり　村上 線桐
ゆふ汐やかほりわけたるうらの梅　かづさ今富 千鷗
風を追て野末のうめのかほりけり　信いなり山 冬翠
梅はれぬ下枝の雨にぬれやせん　下野間中 百尺
おほかたの梅かうへたる二月かな　武熊谷 雪江
控木の梅もかほりはわかきかな　、 萬中
紅梅のひがきくづれておほろづき　尾瑒 曉臺
春の夜をかつら男のねむり哉　信上田 眠石
艸木匂ふはるの月夜ぞつぎ〳〵し　鼠宿 鳥鼠
妹が門おほろとなりて月欠る　上毛小野子 楚岸

信地の旅もよひせしころ

月朧に猶嫉すてのおもひけり　高崎 榮木
やす〳〵と土堤行春の月夜哉　遊川 聽雪
朧氣や白魚とりがよるの聲　釣雪
氷わけてあくた流るゝ外川かな　相中金田 雉扇
魚の尾に裂て氷のながれゆく　眉尺
雪とけておもへうき世の松の風　江戸 昆明
雪とけて落かゝをほる鳥かな　、河漣
雪とけて木の根を越る小龜かな　武木曾 巴阜
ゆき解てものあたらしき家陰かな　上毛上白井 蓬雨
雪どけや惹めぐめる石だゝみ　信戸倉 篠雨
雪解て野澤の水のいさみ哉　上毛上白井 犀光
春の雪遠ごちの雪に映じたり　遊川 如籟
さゝがきにひねもす雪のあはき哉　江戸 都由
むら竹や夜は音ある春の雪　仙臺 風坡
野も山も何とはなさではるの雪　高崎 龍牙
いづれ野山はるのゆきとけて斑なる　、亦醉
四十年おもへばつよき柳かな　信松代 麥語
野の雨を柳に見すくまくら哉　上田 井ゝ

屐かけし柳は穢多がかまへかな　柴居
青柳やもの忌に入雨の人　百雉
淺澤やこぼれしなづなみどりたつ　備中笠岡 湖嵐
のきの雪ちつて薺に囃しけり　信上田 玉馬
家のつまやくれ行椽のたばね芹　相中飯田 奚道

輪臺晩眺

霞吹なだれ大海ながるゝ夕かな　江都 鴟哉
うぐひすや檜のかつらの雨になく　蓬壺
黄鳥にさかしや子等がみゝはやき　八王子 星布
朝かぜにうぐひすはさとき羽ぶき哉　柳志
鶯や書をまなぶ兒のきゝすます　上毛植栗 遠洲
うぐひすの脛にかゝるやかれかづら　京 几董
かぞへても見ん鶯に園の竹　信上田 三桃
うぐひすや笠ぬふさゝの朝げしき　、素菊
黄鳥に風なき篠のかこみかな　碓氷嶺 徐萊
道の井みひばりにのぞく野かげかな　兩總生 濁陵
ゆふかげの鬬にかざす手房かな　上毛澁川 葉英
かいきゆる雉子にみじかき芝生哉　斑雀

山梁の雌雄おなじ山邊に日をかさぬ　分虹
山篠にけうときさじの羽ぶし哉　高崎 桂雪
いぎたなき人の軒端やむら燕　大家 瓢舟
小すだれのうごく玄鳥の羽かぜかな　信高遠 和興
うつる日や囀る鳥の背うごく　信上原 友志
鳥の巣や員矢かよへるのき端にも　戸倉 東峨
巣鳥塵を落して鬣を振ふ門の駒　、 鵬羽
竹をきる人に巣鳥のいかりかな　上毛前川 季如
諸鳥啼て春の夜明のまくら哉　邉 保年
雲に鳥餌をしわする丶時節哉　井ゞ
すて鶏や河原にうたふはるの時　加賀 佛仙

柳營の御會に、はじめてまかり出し家嗣を、こゝほぎよろこび侍りて

ましてこの春ははるなる男ぶり　好文軒 青牛
柴はしや樽たゝきゆくはるの人　江戸 三千竹
春の水どう流てもしづかなり　上毛前川 可梁
はるの野にほとけつくりも交りけり　南部盛岡 素郷

古寺の鐘おろ〳〵とはるの艸　武むら山 挑酔
わか艸や土も匂へる朝しめり　上毛小野子 三巴
新草や雨のはれ間のくづれ土　雄武州 連鳥
艸春のいろわけもなき二葉かな　古慊
うつくしや菫まばらに里ちかき　江戸 榮路
華はたがすてし孤村の薄すみれ　羽兒
しめしつる馬脊ふりきる薄すみれ　翁何

暖室

萵の小菜つみのこされて花のさく　鳥毛
せどの小菜にはさまりて薺花さきぬ　雲和

しなの丶國わたらひせしころ

はるの雲雀田のみどりにうつる哉　高崎 和榮
風ぬるしゆふづく丘のむぎのいろ　相中中村 馬門
鑄あげたる鐘の下艸もゆるかな　飯田 寓虹
芦錐にほそき流の水さびかな　武我野 玉瓜
くゝたちや市のうら道小雨ふる　柏原 百碩
川海苔は鶉水のむあたりかな　むら山 あきら
さし杉の下てる道やほけの花　冬扇

染井にひさ日あそびて

ひばし雨のつぎ穂に心うつす哉　此君

いとゆふに眇眼をかしき野杉かな　武飯能 呉明

鶴なくやいとゆふ空のかぎりなき　上毛藤岡 戸葉

糸遊や終はけぶりに軒のつま　沼須 呑鳥

岩わたや陽炎もゆる瀧の末　信上穂 其篁

かげろふやあたりほのめく柊かき　さくら 金馬

陽炎や染屋が門の鉄氣水　南總下郷 梅下

川ぞひやかげろふつたふすて桴　大豆沼 九皐

かげろふやもゆるが中のうつせ貝　信いなべ 鷺岡

干網にかげろふは地のしめり哉　江戸 葛羅

ひとり武野中こてさし原にあそぶ。

のどかさや弓長にけぶる捨火縄　呉明

長き日のいかほど汐を焼事ぞ　上毛上白井 春波

春の日の机しづかにくるゝかな　原川 城下

我道芝小登山

引かけや何をひがんの鉢敲　兎水

鳳巾天地の間の籟歟　武吹上 橋驅

きれ几巾も鳶も嵐の行方哉　上毛澁川 玉羽

切鳴老を奪とり勝の野末かな　植栗 蔵江

我を興じ几巾に糸くるめくら哉　河漣

つばき落て風地にくるふやま邊かな　信戸倉 玄ゝ

かざしゆけば葉裏の椿見よき哉　雨石

うつくしう掃のこしけり落海石榴　上田 子俊

風なくば雨なくばまた花つばき　上毛岩井 輕絮

花椿なかば落しをさかりかな　雨和

雨うつくしく土にまみれし落つばき　沼田 尚春

咲つ落つ椿に眼いとまなき　相中依田 砧坡

とこ闇の葉がくれ海石榴咲にけり　碓氷 峰鳥

つゝじ咲てゆふかげふかき嶺かな　武扇丁屋 兎庵

躑躅よりつゝじに見やる端山かな　村山 有梅

夜の雨や朝日にもゆる木のめかな　飯能 巘之

青き迄に梨の花ふさ白きかな　上野澁川 観志

箕輪の郷に居をトして

蛙啼て閑をこゝろむあみ戸哉　信伊奈 伯先

わすれ井を徒啼ふるす蛙かな　馬門
我やどは蝶さへとばず雨二日　信山寺 春兒
あやまつて蜂に追るゝ餌さしかな　蔑郷
から家やはしらをのぼる雨の蜂　岬居
つの落て男鹿もわかずなりにけり　上毛上津 淡水
ふり落しおのれも見しや鹿の角　江戸 虎女

刀根川を逍遥して

わが影に小鰷疾かなはやき哉　上毛倉谷 界香
海苔の香に酒たしみたる坊主かな　此君
芦がきや東風ふく窓の海匂ふ　信濃井澤 何鳥
はるかぜや腕かぶるゝぬりづくえ　春鴻
春風に楠とおて居る山邊かな　呉水
はる風や丘の篠根をかりまくら　江都 風和
春風やいかに野守が古すだれ　、伏龜
はるさめや石にながるゝ鳥の糞　上毛北牧 帶川
春雨や友を翌の韻塞　植栗 石鯨
暮ぬとてはる雨を見る雛かな　兎耄

春もやゝかぞへ日なるを、信地よ
り師が歸杖いまださきゝて

山ざとや何をたよりに櫻さく　蒼雨

やよひ半なりけり、虎杖菴に滯留
せしころ

薄屐やものゝついでの朝ざくら　白雄

その夜雪いたく降けるを

白雪やさかりの櫻夢にせし　、
はつ櫻嘘のあとの寒さ哉　信戸倉 呂秋
さびしさやさくらの花に雨二日　中村 桑衣
船路經て櫻かひある湊かな　上田 麥二
いづこ月夜のさくらの影くらき　、茶園
花にめくら心すつる歟朝杖をひく　中村 路一
山ざとやさくら見にきて酒苦し　松代 振雨
世の花はちりしともいふ山ざくら　文斯
櫻〳〵小柴居りしく花のもと　戸倉 雲古
引ゆけばさくらあかなく曇るかな　、羽舟
花ちり〳〵小艸に配るこゝろかな　山之篠 馬十
顏に露落かとばかり朝ざくら　南総鶴ヶ崎 鳳毛

世やはるやかゝる山にもさくら人　相中海老名 龜遊
磯寺の鐘きゝにいざはつざくら　雲和
しづかさや行幸櫻に人をとむ　北雄
時ぞとて花折そへし薪かな　上毛小野子 釆花
朝日にもふるゝこよひのさくら哉　かひの臺が原 黑澤

らくにて

北嵯峨や櫻吹こむけぶり出し　浪花 不朽
炭がまやちりしくまゝの花に風　伏龜
薄みのにさくらちるひぞおもしろき　轍之
さくもちるも夢にくるふ歟さくら人　武栗原 風驅
薄ぐれや花に放下の人くづれ　仙臺 圖南
ちりそめていよ〳〵桃のひよりかな　信櫻井 和柳
落せしは貧女が櫛歟もゝのかげ　上毛上津 羽皐
桃咲て松おぼろなる垣間かな　相州根府川 釆羽
葩や牛の脊にちるもゝのはな　品川 芦雪
ひなだなや手燭をかざすをり屛風　浪花 花夕

むかしべはさくらな花さいはずな
ごゝ人のかたりけるまゝに

さくら何と萬葉の花雛のはな　江都 大來
玉籤に山吹むすぶあらしかな　上毛澁川 蒼尾
あさら井に棣棠うつる夜明かな　仙臺 蟻則
川ぞひの宮山吹にうつしけり　信とくら 素風
魚燈されば寐ぐるしき夜をかへる雁　滄烏
かへる鴈啼て見やれば霞けり　仙衣
馬上眠くうつゝなき雁の別哉　上毛いかほ 睆烏

雨後のしたゝり、いまだなるな

けさ晴し雨ひとしほに藤の花　江都 巨計
山姫のやま藤たぐるみやび哉　蓮沙
引寄てきるにはてなしや藤の花　米太
岩に身をよせて藤折手ふさ哉　上毛澁川 振羽
垣間見の袖にしかるゝ里の藤　かづさ權現堂 夜白
藤の花末のつぼみぞたのもしき　如柳
藤だなやあま酒醸す宵の月　滄烏
咲くだす藤七尺に春闌し　信上田 三机
加茂川になの花流るやよひかな　不朽
霜のわかれ花樒の葉に見ゆる哉　武妻沼 五渡

蝶あした地を這霜の別かな　上毛藤川　箕明
ゆくはるや羽蟻飛かふ橋ばしら　前橋　素舊
行春やおもかげ霞むとのぐもり　相州酒匂　大梁

ころもがへ

衣がへ身の垢をだにすてごゝろ　甲斐暮地　琴水
ゆふめしやものゝうちはをる衣がへ　仙臺　似宮
身をまゝにあそぶ卯月の衣かな　上毛艸津　鷺白
噎るやいもがあはせの木賊色　嵯峨　重厚

かひの國わたらひして、此佛眼禪
刹にあそぶ。

かひが根やさくら盛に佛生會　春鴻
花御堂牡丹は庭にうつろひぬ　兎菴

舊居三四にかへりて

杜鵑緣山ふかくやどるかな　江都　如貝
ほとゝぎす啼や卒都婆にいもの蔓　莞爾
蜀天子啼や丸屋のかりまくら　かひのくれち　墐井

ひと聲は梭をなくるのほとゝぎす　友志
ほとゝぎす啼やゆふべの葱賣　文斯
やすらひの聲うつろ木やほとゝぎす　星布
宵の間やくゞつが琴に杜宇　舊河
松ひと木茜さす間をほとゝぎす　上毛尻高　丹霞
朝霧の山杜鵑やま遠し　常陸臺方　一巢
おもへたどこのみじか夜をほとゝぎす　勢南　斗墨
みじか夜やはや瀨がしらに月のいろ　信下平　左龍
みじか夜やされど夜拆の九たび　武むら山　楚江

ちゝぶ詣せしころ、あけち寺にや
どりて

短夜やされば明智が法の夢　上毛堀桑　夜光
衣の香や風かりそめの青簾　遠沙
てりこむや雨のましたの青すだれ　下總そがつ　兒石
かけそめて海かすか也青すだれ　相中曾我　風醉
匂はしや青葉のすだれ風そよぐ　信輕井澤　柯香
うらおもて貝多羅わかぬわか葉かな　東叡上　東阿
かつら這むしや新葉の山社　桂下

ものに倦顔にわか葉の嵐かな　信とくら　汀鵝
朝の雨あまんのわか葉そよぐ哉　上田　風臼
随意やわか葉ふく日の風あたり　上毛沼田　五調
花はきのふ心にふれし礒新葉　棣花
うの花や蛄蟖の蠹にちりこもる　羽揚　左什
卯の花や伏屋ふじなみけぶりたつ　友志
古園や牡丹こぼるゝ蟾のつら　武妻沼　桂雨
鐘鳴て牡丹その口をねぶるかな　北雄
葉にかゝりあるは其根にぼたんちる　和柳
燕子花咲かはりたる花のやせ　南総刈谷　山輝
嗜や蛹をへだてのかきつばた　いせ内宮　兄守
ひし咲や日にむかふ池のむもれ杉　柴居
瞿麦に杉のあだ露落るかな　武大谷　梅夫
おもへ人罌粟のともずれともにちる　葵道
花けしをふみ落したる小蛇かな　上毛澁川　練水
酒かもす浅茅さだめんゆりの花　江戸　くれみ
紫陽花に誰歟わびしら想夫憐　南総細屋敷　千種
なつ艸や牛かたひとり敷寐なす　信本新町　祇因

夏籠や僧にみやびのつりしのぶ　上毛上津　鷺石
うき艸や筧のあらし吹かへす　武花川　東鳥
蘋の中たつ暮の嵐かな　楚楓
萍のゆふべながるゝ江尻かな　上毛上白井　禹川
ねぐらとや麻にこもれるゆふすゞめ　呑鳥
南天のはな穂のごとき盛哉　巨計
栗の花ちれとあふるゝ岩井哉　信ふく岡　梅雅
蔦の羽風青梅ひとつ零しかな　求魚
しづかさや酢藏をへだつ桐の花　墐井
風ひと夜明の井にくむきりのはな　相中葛原　麻三
合歓咲て花のみたりや涼　信松下　奐市
汐風に盧橘のかほり似ざる哉　上毛岩井　仁量
礎や花たちばなにひと夜寐ん　くれゆき
盧橘や弦なき琴をかりまくら　千種
日最中や楝がもとの空車　武黒須　鳥臺
かくれ家にいやわか竹の覆見よ　信櫻井　渉岡
おもはじや葉がくれ瓜の蔓ばなれ　青峨
みだれ髪ゆはせもうきや麥の秋　武原丁屋　素練

行や野のいろなる艸もかぶるゝ歟　棣花
しばらくは聖とかたる木下やみ　相山厚木 玉珂
軒あやめ花たちばなの風やそふ　蓬壺
軒ひくき菖蒲にきえし帋燭哉　武□須 玉裳
けふにあふあやめのたけの肩過ぬ　信上山 如毛
篶の篠屋菖蒲一すぢあはれなり　伯先
井の末や駒もかくれんあやめ艸　上穂 露翠
ふくやあやめ並て鶺鴒の尾のごとく　櫻井 楓里
朝かぜや葺手にあやめむすぼるゝ　石鯨
あやめふき菖蒲の襷かけし哉　峰鳥
杉の中川ほたる髻にいりしかな　武黒須 雄山
手にとればあはきほたるの匂ひ哉　南總屋形 玉疊
艸の葉や燿燿さかりに礫傳ひ　青雨
櫂にちつて舷を道ほたる哉　洪水
雨の宵燭野守が額てらす哉　上毛[illegible] 水光
礒松やかぜ徐にせみの啼　南總[illegible]田 夜松
嵐盡て又わすれ啼夜のせみ　相中田嶋 蛙聲
空蟬のもぬけすゞしき木下かな　[illegible] 素流

葉がくれて聲のみしげき小蟬哉　挑兒
猿滑啼たつ蟬にうごきけり　[illegible] 梁水
つながれし牛も嗅ぐよ樹〳〵の蟬　相中[illegible] 萬路
むら〳〵と夏のむし雜木小屋かな　玄々
泥に這ば田螺のたぐひかたつぶり　[illegible]三
むら竹やはゝきのさきのかたつぶり　ひたち鹿嶋 村江
江を近み夜すがらに啼雨蛙　信戸くら 和夕
かやり火やその夜つもりて眉かれん　春鴻
留守の戸に蚊も痩なんとおもひけり　祇因
蚊の螢やかひ種ひろふゆびの股　白雄
夜啼かば我友にせんかんこどり　求魚
鳴[illegible]聲松の戸にへだつかな　古檪
かむこ鳥楢木に来ても雨を啼　素流
ひるのくるな方むねわけにはしる哉　麥二
雨そ[illegible]ち[illegible]鳥にくるゝ桃かな　玄々
けり啼や明なん空のひとくらみ　重雫
[illegible]裏やくれの水鶏啼はこび雨　信上穂 桃亭
鳰の巣にかゝるは浪のあまりかな　上田 木二

くれかゝる淵さしのぞく翡翠哉　相中ねぶ川 一啄

銚子江

のぼる日や葭割鳥はよしに潮滿る　上毛引間 臺路

むぎ秋や臥より出しきじのかほ　玉疊

おもはずもなぐりしは風ひるの蚊屋　上毛岩井 仁量

夏の月幮にうけては風もあり　曲城

あをむけに日をさみだるゝ髑髏哉　我脱

さみだれやひねつても見たる首の骨　斗墨

植女等を見に行も君が世なる哉　上毛前橋 素輪

城うらや殿原はやす田うへうた　五渡

笠の端の三日月を見よ田植人　相中ねぶ川 仙露

雲かへせ青田がうへの日でりあめ　琴水

ひをむしやはや瀬の鯈の水はぢく　玉瓜

石はしる水面に銀口魚のあはき哉　相中金手 桃嶺

つり落す葛魚に月のひかり哉　一巣

松明に堰鼠おどろく夜川哉　あきら

川獵に卒都婆焚奴もうき世かな　栢樹

齒朶蕊鹿の子の脛にそよぐかな　上毛白井 栢圖

おなじ世をいかなる人ぞ火串とは　湯上 臨水

樒ふくや清水にひたす居士が合器　宜眺

ひむろ田の卯月の櫻咲そむる　寸梁

ふみてしる氷室の山の朝あらし　うひの 兎園

捧ぐ氷やなつをやせたる貢人　武榎戸 一馬

まじらふや夏酒盛のそら寐いり　圖南

七つ子がほしの名をとふたかむしろ　南總中村 夜月

簟 腕 枕 に 夜 の 露　貝塚 蘭岡

みなづきやおもふに人はつよきもの　古慊

蝶芝に落てくるへる日ぞあつき　武長瀞 岷江

岩回に葛の蔓ふむ暑かな　臺路

刀自がいふそのかみもなき暑き夜と　輕絮

めぐる日のかざしもあつきのき端かな　相中根府川 笑語

いはでやみなんとおもへど暑き此日かな　玉珂

すゞしさや匪かすりて松葉ちる　信上穗 士貞

くるしくも小松すゞしき山路かな　勢州神戸 瓜筋

わら葺のうら門傾ぐゆふすゞみ　文郷

凉しさや繒繳の鳥の江に落し　舊河

凉しさや蔓の露の髮にちる　簾雨

望鶴湖

浪すゞし千尺のこほりおもふにぞ　春鴻
礒やまや艸の葉かへす風すゞし　武井上 鳳五
つりの糸凉しき木陰見たてけり　信輕井澤 柳巴
凉しさや眞蔦のうごく浪のあや　奥州若柳 春艸
凉風や河原乞食が別世界　奥南田九 山曉
雲の峰白馬映してはしる哉　江都 詩舫
母老ぬ憂雲の峰けふもたつ　南總細屋敷 市香

雨降山にて

杖をならす御山ふかしや雲のみね　岷江
水音や檜原のこみち風かほる　信トクラ 欄二
風かほれあみ戸にちかき艸のつる　武めぬま 角浪

鎌都鶴岡山にて

道すぐにはま風かほる檀かづら　楚石
ゆふだちや庭におぼるゝ蝘蝦　和榮
夕だちに松ひと時の落葉かな　上毛白井 龜曉
ゆふだちに簀流るゝ野川かな　武扇町屋 灞橋
白雨の降わく風の標野かな　雄山
ゆふだちや艸根にうきしわすれ鎌　吳明
ゆふだちや馬騎くだす九折阪　信上田 曉川
ゆふだちや松に晴たる艸の原　相州ねぶ川 機星
夕だちのはげしくぞある桝やま　信輕井澤 柯香
ゆふだちに見すく野艸の白根かな　一巣
ひるがほに川ぞひ蓬枯てける　信下平 左龍
旋花ややけたる石に履うすき　琴水
ひるがほやあら砂かゝる龜の甲　滄鳥
たち葉うき葉雫ひまなや雨の蓮　笑語
月にかふ簾にかげを御秡川　信戸倉 東峨
行水も潔き夏のわかれかな　江戸 金臺

はつ秋

帆をまじえて今滿秋の潮かな　白雄
秋たつて匪をわたる間風かな　南總貝塚 樂只
楸葉やかざしのはまに秋のたつ　片貝 露杏

うき雲や秋たつ山の眞篶がり　信戸倉 麥雨
山の手やくるゝ棟に秋のたつ　、四皐
秋たつや水艸がうへの蟬のから　江戸 鸞雨
山の井や蚊をくみあぐるけさの秋　尾陽 完川
烋たつておもひ見る空の高き哉　信上穗 花公

金龜山頭

風かはるおもひや嶋に秋のたつ　禹川

おなじ旅して、ちがさきさかやいへるあたりを過る。

茅崎やふしくれ松に秋のたつ　曉雨
ちる柳ひと葉ふた葉は氣もつかず　祖明
落桐のひと葉にけづる心かな　昆明
影見えてすゞしき桐の下井かな　信中村 路一
淺き井に曉きりのひと葉かな　何鳥
ひと葉ちりて星もる桐の梢かな　上毛こ塚 瓢舟

うす墨すりこぼちしこさき空にものいふさて

ふたつ星雨もつ空をしのぶ夜歟　此君
星の夜に隣る緜夫のいびき哉　江戸 至岡
ほしの夜や瓦にくだる槻の露　上毛 界香
天川門にたつひと夜ふた夜かな　こかちかしま 車董
叢や郡のむかひ火まことしき　楚石
故里や門にものくふ靈まつり　風駟
攝待の我もやすらふ人の中　桃虎

おさなきものなくせし盂蘭盆會に

七つ子の靈まつ涙あやしみそ　和棠
たゞひとつ雨の野塚のとうろかな　上毛藤岡 芦葉
ちり際や花火見くだす水のうへ　上白井 桃雨
置露や花火のからも宵のゆめ　橋駟
雨雲のしどろにのこる暑かな　越いしも崎 以南
いなづまの終はしらず寐しかな　三机
負し子に稻妻落す野道かな　武吉見 丘路
いなづまに鞭うつ駒はめくら哉　むら山 靑山
竹露を帶て琴瑟くもるゆふべかな　同 吐燕
荆蕀野やしづかに見れば露のぼる　樂只
市中や篠に露見る魚のたな　田村酒田 河道

朝寐する人には何の白露ぞ　秋日
むら露に朝日をうけし寄藻かな　相中津久井縣 長松
艸の戸や露になやめるみこ艸履　信とくら 地遊
江嶋にて
浪の露眼にいたき嵓かな　大樗
ゆふ露やすえものつくる地のしめり　栖樹
闇夜行炬火に山邊の露を見ん　青扇
ときは木の花もみだ哉明の露　東都 闘香
露くだるけしきも霧の山路哉　莞爾
汐いりの米くふ浦や霧ふかき　呉水
霧の山路日は蝕に似て哀なり　百雉
朝の間や霧の外に見る角やぐら　鳳五
杉たちや霧のうへなるはこひあめ　信とくら 楚明
孤松群を出て霧を帯たるゆふべかな　灞陵
後夜の時計花開くかに蘭かほる　五渡
蘭の香や風のほどしる敷かわら　杵秋
めでたしや朝がほにたつ翁さび　呉雪・
こゝろあらば牽牛花見せよ山の兒　武花 松鳥

あさがほのまことを見たり山かづら　信櫻井 娟石
牽牛花に咲まとはるゝかれ木かな　萬路
ひらかんとせし朝がほに星遠し　南總屋形 瓜洲
雨こまかにあさがほのしぼむ見えん哉　露英
引すての車にしほむ芙蓉かな　祖明
鶏のすな水かけしふやうかな　勢南松坂 竹父
女身をかこつ芙蓉のひとへ哉　松鳥
萩さくやおなじかこみの眞柴かき　武[illegible]川 東鳥
いと萩のみだれてもたゞひと株ぞ　鷺石
閑の散枝花習の小障子ぬれにけり　信上田 角茂
秋萩やをりとる女ふかく入　卿巴
野やしろの芒八隅を覆ふかな　士貞
目におよぶ礒のすゝきの十寸穂哉　丘路
さる牽の猿あそばせよ花すゝき　獻江
こぬか雨穂なす芒にしづくちる　上毛高崎 菊圃
かざし行幗のおばなや星のちる　長松
ひと株の尾花とやいはん鬢の霜　濃水
入月のおばなにわたる野風かな　相中七木 桃郷

府中六處社頭

むさし野や尾花聰を神ごゝろ　武ほどがや 書龍
風かへすあみ戸に蔦のうら葉かな　斑雀
風あらきくれをあやなる松の蔦　むら山 管城
岩に生杉のくねりやつたかづら　桃雨
そのまゝにうつし植得ん竹のつた　艸居
鷄頭に啼終りたるやぶ蚊かな　呉水
女へし野山奥あるあたりかな　信とくら 三雨
院のくれむくげしづかにしほみけり　むら山 桃徑
つら〳〵と明行墻の花むくげ　いせ松坂 坐船
雷にほぐれ雷にやぶるゝばせをかな　如籟
鐘䧟しこやたにやれし芭蕉かな　冬扇
芭蕉風盡てひとり葉をしく夕かな　籬雨
とうがらし花さく中に赤きかな　曉雨
掃よせし芥が末の穂蓼かな　武高根 雲耕
大蓼や穂に出るころむぐらもち　勢南松坂 笠㕧
倒れ木は丘にくちしよ蔓珠沙花　蓬戸
蓬飛けしきを見する宿の秋　北總寒川 東葵

つもる日の風にしほるゝ秋の艸　路雄
月に杖露わけ衣花野ゆく　武八王子 呑光
花野行人川ありとしらせばや　信いなり山 眉丈
長ふくべ尺蠖のをかしさよ　いせ松坂 柴雪
市たちの瓢うる女あはれ也　武むら山 波道
秋聲をなさぬものとてはなき野かな　北野 揮月
老る故とおもへよしなきすまひとり　可明

力士が醉泣しけるを

相撲取四十の秋をかこつ哉　喚之
あら礒や浪にもいらでむしの啼　如毛
門の月何をよるべに虫のなく　如布
暮さびし虫籠をむしのめぐり啼　重雪
むしなくや鷄は八聲になりぬれど　百尺
日ぐれなん柴舟にきく虫の聲　信上田 曾屋
何むしぞ汐木抱てしのび啼　澧水
むし啼や何をよるべの㕧艸　戸倉 犀河
むしどものわび音が中の荷鞍哉　玉瓜
虫の音のさえて地にしむ月夜かな　鳥奴

夜の爐の竈馬露にうつしけり　有梅
麻がらの中にいとゞの命かな　梅夫
露の香や遥の螽顔に飛　兕雪
日にぬれて螽飛けり芝の露　信上田 松志
丘の家の喰ものに入いなごかな　武川越 釆雪
螽やく山ぶし村のわらはかな　慶山
秋の蟬あらしの葛に聲たえし　圖南
おもはずよ魚わかつ市に秋の蝶　上毛高崎 桐井
金鐘虫や露ふる宵のかつらかげ　鷺白
みのむしの地にすむたくみなき事歟　管城
落枝やあはれ木蝶のながれ行　箕明
蟋蟀汝と穴をおなじうせん　信善光寺 路人
やむ僧のものこふ夜半やきり〲す　上毛白井 一禹
隣る家の旅だち過ぬきり〲す　路一
きり〲す啼や遥にひと戀し　信下平 玉蟾
たがうきを啼や岬野の蛩　武見須 鳥臺
いざひと穂母に見せばやいねのたけ　高根 戒車
世を捨し人何と見る稲の花　左龍

ほのかなる匂ひもうれしいな莚　相中明田 鶴舟
世にすたるものをかゝしの身に纒ふ　素行
なるこづなちぎれてきれて夕かな　角茂
袖ずりにをかしきひるの鹿驚哉　武北野 蘭水
たれとはねおどろが中の捨かゝし　南總福俵 醉考
竹二本ほねと成たる案山子かな　烏瀾

（春秋稿　地）

もちの夜

月と人晴くもり居るひと夜哉　百雉

雲のあや居かはりて見る月の容　雨律

すでに行犬の子をこふ月こよひ　我脱

月の扁むかしの人をなげく哉　燕羽

名月や建さしてある家のむき　白雄

鶏鐘にいそがるゝ夜歟月こよひ　山城

名月や屑家見こしのむしろせん　玉裳

へだてたる障子も可也松の月　鳴珂

名月やしづかに山の離れ際　藤歩

むら竹や月に老女の琴をきく　九皐

月にたつや艪におくれてあまが軒　江戸　里水

名月の明がたゆかし人通り　京　蝶夢

かへらんと月にそむけば影五尺　粟津　沂風

旅中ふみのおくに

瀟として旅を筑紫の月見哉　加賀　一羽

出城零時て月水上に満る哉　揮月

沖をゆく帆のうら表月こよひ　雲耕

江にそふておもひをひと夜月こよひ　武川崎　祇竃

さやまにて

はつ月の艸にはいらで木の間哉　丘路

釣たれしあとや玉藻に月うかぶ　南総片貝　老石

いざともにはつ汐ふまん礒の月　臥星

刀根川にて

行雲やながめ入時水の月　舊虎

まつよひは夕やけ雲を出しほ哉　慶山

待よひやうき木をこゆる汐のほど　文郷

ある人を饗るさて

賓客よ月かなぐりし月こよひ　界香

既望や茶道をかたる人ふるし　桃醉

いねぬ夜を鶴鷄の啼后月　武門戸　五流

しらず人いくたり死で後の月　百雉

水霜にはてなき月のかづら哉　風瓢

年ごろの願みちて、母のゆるしあ
きらかに薙髪せしこの秋な

あさ衣かいつくろひぬのちの月　臺路
とく出るものをまちつゝ后月　桃扇
のちの月蟬てふせみの死譯せけん　星布
朝蟋蟀や啼すてゝいづこ旅うづら　戉車
門くらみ夢のみなかに鶉啼　江都 山水
鴫たつやあとは野守がよるの雨　信上田 志仙
啄木鳥の古木にいりぬ松ばやし　千鶴
とまり餌に飢てやあらん鴫の啼　藤歩
月あかく夜をあゆむ見ゆ小田の鴈　求魚
千町田やわかれてはあふ雁のつら　素行
夙に起て雁追人も世也けり　飄舟
月に雁わたるやこよひ雲もなし　信碓氷 連鳥
沖津よりわたれる鴨の羽なみ哉　江戸 桃蓭
雁がねや背の根そゝぐ水はやき　素輪
下ぶしや桐だにうきを雨の雁　東居
たそがれや出城を過る雨の鴈　青山

漁夫沖に聞とめてよりはつ雁獣　燕羽
代かゆる鴫に堂守が又寐かな　澧水
うら枯に浮鳥の離ちからあり　鳳毛
末枯もひとしからざる草木かな　北越 徐舟
ゆふづゝや椎柴おろす牛の聲　梅雅
ひとり居れば木賊にあたるあきのかぜ　詩舫
網の露ちるからに江の秋の風　東峨
秋かぜやとかん間もなき畏の鳥　泊先
あきかぜに栗鼠の落せしくるみ哉　左什
秋の風しだり柳のから〳〵と　上毛高崎 六龜
あら簾の鬢若にこたふる秋の風　鳴珂
音たてゝ厚朴の葉をさく旅の風　仙鳥
秋の風蛼をやむ兒をとひてけり　長松
いざや人黄葉のながめ初嵐　村江
こゞしさの岩間けうとき暴風哉　與門
落る日や女郎に淺き秋の聲　鷺園
野わけ催ひて雲わづらへるけしき哉　夜月
埴土や暴風のゆふべ蓬飛　千種

艸のかれ葉吹きりもせで暴風ふく　武八王子 栢子
秋の雨松かさたけば人のとふ　江戸 烏桂
むね艸やたのめがひなき秋の雨　雨律
降からに心くらしやあきの雨　信とくら 如柳
かれ松やものゝ香もなき秌の雨　柴居
落鰷やひるの人目を藻にしのぶ　昆明
落銀口魚や月白ゝと簗のうへ　花公
雨の夜や川風袖にかじか啼　靑牛
へだてなの簗に落たる經木かな　可明
新酒船湊の乞食涎せり　求魚

春秋菴にあそびて、聖賢ともによろしといひあへるのゆふべ

濁り酒おしむあるじの淸き哉　江都 車來
雨だれの音きぬたやすめばしきりなる　和柳
木がくれてきぬたひるうつ孀哉　素輪
長き夜のさだかならずも明にけり　路雒
我は衣着て鴉をおもふ夜寒かな　松烏
うきに醉さめて夜寒のひとり哉　江都 双鷺

かひの國わたらひして

艸まくら夜寒盡ざるおもひあり　古由
かさね着や人秋ことに身の重き　麥雨
あら鷹のつかみすてたる標かな　眉尺
栢くぬぎ雨後のくさびら紛はし　祇室
菌がりひと木のもとをめぐる哉　半路
風の椎おりにあふむく笠をうつ　東烏
木の實あだに落黑みたる野川哉　南總堀上 鶴洲
椎の實やひろひ入たる艸の中　波道
露しぐれ樵夫つく〴〵とまもり居る　乙艸
馬嘶て露のしぐるゝ荏からかな　玉峨
宴闌て風にむかふや露しぐれ　千鷺
實生の菊變じて人に似ざるかな　栢樹
古詩の心解す時園の菊句ふ　あきら
花の蝶菊の胡叟とうたはゞや　喚之
とへばかたる菊のあるじと酒喫す　鳴珂

傷寨懷舊

荒園の菊や雀にまつはるゝ　燕羽

菊の香に隠者かぞへる市中哉　信上田 里彦
こきすてし菊も九日の匂ひかな　江都 暮原
ながめ入て紅楓にむねのすきし哉　呉水
世の紅楓きのふにかへる色ぞなき　柳志
やれ芭蕉門は紅楓の人通り　灞陵
櫻紅葉して春をし想ひ秋をわぶ　五流
瀧津瀬や古城の閑をちる紅葉　呉雪
秋ふかみ土橋を中にちるもみぢ　上毛いかほ 芦侪
月の暈紅楓がうへをてらすかな　相中あつぎ 雨桂
風雲や見あぐる峰のゆふもみぢ　麻三
里もみぢ杉のひと枝黄みせり　仙臺 良祇
鹿笛を鹿のふみわるいまはかな　曲城
行鹿や茜さす野の露を負　甲州臺原 臺珉
風ひと吹馬骨しらけて鹿の啼　斑雀
峰の嵐家孺に落てしかのなく　淡水
啼うせて夜は明にけり峰の鹿　兎水
ひとつ鹿妻こがれ啼としられたり　上總引田 互常
山中や鹿の身よりの白かんば　丈馬

うかび雲消て松の下道しかのゆく　青牛
まもりなき院の萩園鹿の啼　酔考
戀る聲すくなきは鹿のわかき哉　星布
人心おなじおもひを秋のくれ　士貞
入し歯のすわり心よあきのくれ　季因
蜘蛛の這もたればしらや秋の暮　柳絮
圃守や己があはれを秋のくれ　楚石
花も實も過行秋に何またん　寸梁
音すみて暮秋にわれし茶碗哉　鳳毛
行あきに茨の實つかむましら哉　露翠
ゆく秋やものにたとはゞすて小舟　麥語
すて郭七日芝居も行あきぞ　喚之

見ぬ戀つくる玉すだれ、ふたゝび
感じけるあした　あき良
紅梅に憎き雁のはつれかな
いはでくるしき琵巴(琶)のはる風　呉水

啼ときくふけだの田螺賣にきて　、
門のむら竹こぬかかゝれる　良
降晴て月のひかりのさればこそ　、
船子が振ふ纜の露　水

ウ
鐘へだつ砂利山の紅楓あか〱と　水
荒てあらぶる神の馬つなぎ　良
おふも事ふくめて龜を放ちける　水
あだしごゝろの君がむら雨　良
ちる木の葉鳥羽もふし見もたそがれて　水
世をつれ〲と普化寺の閑　良
阮とる業をし月のかへるさに　水
主なき車萩にくちたる　良
わすれ水送火たけば風のたつ　水
子を負てゆく乞兒醉りや　良
咲花にうこん茜のしんしはり　水
春の鳥が音舞もさだめず　良

二
糸鹿山霞こめたる里遠く　、
まなこを洗ふ岩のしたゝり　水
風蘭にひるのほたるのあはれ也　良
琴をおしゆるきり髪の嫗　水
ものゝひまくひ裂帋のかぜに飛　良
松は海手に馬ほこりの月　水
箕づくりが宿の葭簾秋あれて　良
河漏湯をわかす脊戸の露霜　水
御廟もる巨勢野にかたる古戀や　良
身をうつぶせに人のおもかげ　水
うめ漬のおもしゆるみてさみだるゝ　良
子をうむ牛にたてあかしゝて　水

二ウ
さすらへの佐喜丸どのもふくる夜賊　良
ふたゝび風のあられ降出す　水
鶯つりて驛にちかき御阪こへ　良
啼松むしりやよひわびしく　水
ちる花に鎖さで過る地藏堂　良
はるのあけぼの潮まきにゆく　水

道にたてたてばあゆめとおもふにぞ。人の親の心は暴風のあしたも、きさらぎのいまも

呉水

うらふくむ兒の齒ぐきや春の風　吐燕
薄くつしばし陽炎をふむ　皿明
口に馴し枝のうぐひす啼さして　青山
つるべ繩うつ藻つみてけり　有梅
秋の霜隣あはせのかたおり戸　千鶴
楸梓のちりつくす月　あき良
ウ
故鬼の實を嗣ぐ男の便なくて　水
寐ざめを何と刀うつ鍛冶　燕
我いのり水にものかくほそ流れ　明
うきはとめたる袖ののこれる　山
つるべき人のおもかけ薄雪に　梅
白髮遠くよするさゞなみ　鶴
牛の子の鼻通されて月に行　良
蜂ひく[illegible]の露やおもたき　水
白紙に身の秋を泣ものぐるひ

二

[illegible]にちかくかねはひゞきて　燕
雲ひとむら花をわかるゝ鳥の聲　明
つみくらはるゝ狗杞(枸)ほのかなり　山
あはせ着て一里を春のはまづたひ　梅
不二をひだりにかわらやく町　鶴
古歌の心ことゝはん哉此あたり　良
鰺にたで酢の夏は來にけり　水
かやりたく女の面ふすほりて　燕
竹のあぶらのにじむいた椽　明
双六を芒鞋もぬがでさしのぞき　山
むし齒かゝへるあきのゆふ風　梅
つながれてうきをましらの月に啼　鶴
寺は眞萩に[illegible]をへだてて　良
華の香に身のいたつらを[illegible]てける　水
雨ほち〳〵と[illegible]きむかふころ　燕
端の間に琴の緒をよる靜さは　明
はへとり[illegible]も日は羽なる　山
手斧の音瘧まぎるゝよしあらん　梅

水はながれて霞む裏やま　鵜

うすざくら挿頭の花もさきにけり　良

盃うちうつ樓上のはる　執筆

このふた卷は、武のむらやまより贈れりけり。

隱室閑　星布

榲の實の落る露だにひとつ哉　星布

鼓弓みだるゝ秋風の月　喚之

すがれ啼籠の松むしうつす日に　吳水

小ざかし男道すゝむなり　兎水

陽炎のもえて蓑ほす石のうへ　冬扇

巣つくる鳥のあたり日のてる　布

機の音柳にかよふ春の來て　之

妻見にありく人のさかりや　水

いのるかひ朝觀音にゆふ藥師　兎

暑わすれん階の蔓艸　扇

かるの子の船かいくゞるをかしさは　布

矢摺の飴屋沙にまみるゝ　之

歯のぬけし木履を月のあかり口　水

古きすだれを秋の蚊火種　兎

飛うせて啼うせてける蟋蟀　扇

宜禰がしら髮歌によまれん　布

およびなき錄(綠)えて花の綾にしき　之

天津ひばりよさかづきに影　水

春もいまみす〳〵丘のわかれ霜　兎

古人いくばく履ずれの石　扇

忍びきて松をやどりの夜ひと時　布

ひまもる灯おもひせむる歟　之

闢の外や蛇を蟄蚊の嵩荒て　水

法師にすゝむ麥粉わびしき　兎

すてし子の年をかぞへる窓の竹　扇

戯臺のならし霜白き哉　布

世を旅に我はかゝりそめ名もなさで　之

六の玉川六の秋經し　水

さま〳〵に出て吹るゝ月の雲　兎

もゝ鳥わたりむら雨の降　扇
宮奴の梓きゝゐるたばね髪　布
芹生の里にふるき戀して　之
犬の子に札をつけたるゆふ間ぐれ　水
ひとつの井戸をあたりしてくむ　兎
峰は花かわら屋ひとつぬきんでて　扇
鴫またやさえかへるはる　執筆

星布 六句　喚之 七句　呉水、
兎水、　冬扇、　執筆 一句

春夜

おぼろ夜や朧に岩のたゝずまゐ　界香
みゝづく羽うち櫻さびしき　呉水
人の春ほそどのに簾ふきいれて　香
うしろ髪にぞ風落すなる　水
炭薪馬のいばへる濱の市　香
沙くひあてし蕪汁かな　水
から櫃のうるし厚くも世をふりて　香
寺に遊女の操かなしき　水
活〱と水かけんわが惡艸　香
琴柱くだきし日はきのふにて　水
君が富車に酒を雨の陳　香
佛龕たる松のふしくれ　水
菅生し小田に荒たる月のかげ　香
露をちからのかはらけをやく　水
さかしまに絲瓜のかはくかた庇　香
室津のかねは七つなりけり　水
花に牛心に遲しかち路せん　香
蝶にも翅かた〱の神　水
夢よ人わづらふ宿の陽炎に　、
鏡うらみん雨後のすゝたれ　香
鶏の啼〱くるゝうらの山　水
堤の松は我とねびたる　香
玄賓のあとをとむらふ髪薙て　水
ひさごひとつに水をたしなみ　香

嵐だに吹ねば秋の世はやすく　水
　豐良の宮居霧籠せり　香
薄もみぢころしも月の敷むしろ　水
　からうた吟ずむつまじの聲　香
昇すゆる棺に雪をふみ崩し　水
　葽くひ折からす飢しや　香
十烈の武者くれなゐにうち鎧ひ　水
　まなこにしみる瀧にむかひて　香
花を泣身に執着の雲寒く　水
　すみれに落しつけのあら櫛　香
ものゝ音家つまの蜂の巣だちして　水
　むらさき海苔の賣るはる風　香

旅中　呉水

おくり荷や椎はさまりしひのきもの
　埃しづまる三日月の露　蒼尾
笛の聲雁をかざしの雲はれて　桴仙
　棚なし小舟ひとりこがるゝ　如籟
ほろ／＼と淺黄櫻のちるを見ん　憑河
　糸遊うすし酒のさめ際　覌志
巣立鳥のこぼるゝばかり口あきて　菊英
　塵うちはらふ木曾の宿駕　三逕
我おもひ行なる水にたゝへてき　朝蘭
　なさけをこゝろ蘋のはな　練水
鍬の刃に風こそ起れすな圃　玉羽
　佛たてたるしら髮の秋　呉水
つゆ／＼と槐に月の滿るなり　如籟
　むしの音そへよ樓の籟　蒼尾
ものゝふの矢なみを隔つ二瀬川　覌志
　勿越へわかる道はわすれね　憑河
薪つむ家孀の老木花咲て　三逕
　人うか／＼と蜂にさゝれし　桴仙
長き日のおのれわびしも啼鳥　練水
　雨ほち／＼と眞鉄ほるやま　菊英
花棟ちるや聖の笠のうへ　玉羽

ものおもふころ人のとへかし　朝蘭
まくら香の夜の薫うつゝなく　呉水
ちかひの衣の長くみじかく　杼仙
雪ちら〳〵辻うらなひの歸るかた　蒼尾
くち木のうつろ鷄しばなく　如籟
瑞籬に隣りて菊のすてつくり　憑河
淵水霧あへてよぶ聲はたれ　觀志
影となる孤村の月の落かたに　菊英
椿榜くろみ秋もいぬめり　玉羽
猿の聲遠近びとの老やせん　朝蘭
雨の簀がきに籠るわびしく　三逕
瓶に酒たえて日をふる小町寺　呉水
篠うち覆ひすて鷄の啼　練水
染爐も花にゆかりの薄ぐもり　雲和
春日斜に車にくなり　執筆

くだゝ野のあはれさに、身をこそ
透せてる月かげも　五調
枯はてて刀も芒も名なき哉　呉水
きつねつり居る霜の夜嵐　大椿
かはる瀬のかりの關屋に酒くみて　調
ならのひろ葉に歌書てけり　水
瀧口の袖うちなへしなつごろも　椿
くるはしの猫間はしらをかむ　水
白ゆふや鼓はさらにひるの聲　調
傾城戀にものもくらはず　水
きり髮をときてはむすぶふた薬艸　椿
忌のあら墓ゆかりなき身に　調
秋をわぶ林はづれの琵巴つくり　水
佃に月の露をくだせる　椿
雲に鳥暴風は佐渡にしづまりて　調
祖師百年の世にもあひける　水
ますら雄がまさる心の橋ばしら　椿
花に呰をたくむ宮かた　調
まよひきし孕兎の春寒く　水

去年見し夢に似たる陽炎　樗
垢つきてかたみともなき藤衣　調
　合歡のはなぶさゆふつきにけり　水
御獵野のきのふは過て鴟なく　樗
　庄司がむすめ嶋めぐりする　調
しほ〱とみゝ根の瘤に身を痩て　水
　葛のくち葉のわれとしぐるゝ　樗
山かづらこがれのあきの松の聲　調
　鷹うちにゆく武士の秋　水
勅勘の筑紫の月に歸きて　樗
　央過たる欄の菊　調
連管はまさに美童が懸想也　水
　けふりの眉にかざす絲扇　樗
ニウ
髻かむ競ひの驄結鬣して　調
　捧し御衣は弓長なりけり　水
冴かへる潮のしづくはこび捨　樗
　春のみやびをふりかはる雁　調
花のころ中門の額あらたまり　水
　柳にいりし鸎ののどかなり　樗

君子のたゝへ、其花にのみかは。
葉おもてを面に蓮の浮葉哉　柳志
　白雲を啼鴉の巣はなれ　呉水
駒のあとすさおくれじと太刀佩て　烏毛
　並て富たるかた〱の家　志
燒鮒の骨をすてたる松の月　水
　やよわすれ衣秋の風たつ　毛
忍ぶ夜の木幡にうきを蟋蟀　志
　爪根に霜のしみるつらしや　水
世の中は枯し蓬の直ならず　毛
　水のながれを曉のゆめ　志
鷺の子の人に馴たる關の前　水
　ちからためしに出しゆふかぜ　毛
むら萩やあかるき月を心にて　志
　露となしたる一樽の酒　水

須兒が秋土器くらふ起ふしに　毛
　灯かゝさぬ駒形の堂　志
舟かけて袖に落花をおしつゝみ　水
　和銅とよびし春をこそなけ　毛
陽炎の市に見てきし筆のあと　志
　いかに晩衣の僧ふたりゆく　水
濁川鹿の子の皮をふりそゝぎ　毛
　あすは檜に入梅のゆふばへ　志
まつ戀のいまきが丘に歌もなく　水
　髮あげぬ日のおもひさびしき　毛
から姓を蓑に捲こむ薄あられ　志
　阡陌の石のわれとひらみて　水
ゐのしゝの艸根かむなる露の音　毛
　芦の假廬に君こもる月　志
ふけ〳〵と霧の外にきく一節截　水
　こゝ葛餝の入江めぐらん　毛

二ウ

蛇の衣ふりすてし藪かきや　志
　かた輪車の蟻にくづれし　水
長き日を呃まぎれに出ありきて　毛
　ねはんのくれの鐘かぞへける　志
今むかし鑑ともなる人の花　水
　篭にさえづる鶯鷰はなちやる　毛

おくれて聞えたるくさ〳〵

いなづまに鞴の炎凝るかな　武長澤 玉扇
むぎ蒔の鳶袖すりに落すかな　、
水鳥の波を飛きる朝氣かな　起積
石膓や石のはざまの薄ごほり　、
雨の月しのびてきけば爪琴す　牧野 在陽
ゆふぐれやかけ茶にふかき軒すゞめ　、
蝶飛やくるゝもおしきこの日和　信諏訪 交何
窓にかげうめ三尺の匂ひかな　毛呂 碩布
菊の香の院にこぼるゝあした哉　、
月くれて戀をしくちく寒苦鳥　、
鷹飛て柘植に身を啼雀かな　女 其水

つまにわかれし此秋を

むさし野に住かひもなやけふの月　女 凡秋

うめの雫落て蘇鉄に匂ひけり　今井 柳古

舷へこぼすかた帆のあられかな　、

艸がれやのきの老母艸に啼鳥　川崎 祇董

吹はれし梅やうす雪薄月夜　上毛不二丘 言志

杜鵑花ちりてのちの賜ぞ　、

凧ちら〳〵柳ちら〳〵日もゆふづきし　、

青田つら〳〵見さだむるほど陸奥や　あかつま舍 一貫

しづかさや柳がもとに野曲突ぬる　沼田 會水

夜や寒みおゝく火のあるたばこぼん　前橋 輪賀

雪吞や越路の女いかめしき　桐生 茂松

長き日やおなじ事きくわたしもり　素陰

艸かれの野や雨の音風の聲　白井 圭之

はつ雪は朝降ものと覺たり　信諏訪 白得

梅に箒けふを子の日のしるし哉　松本 雲浪

高杉に白雨落す夢かな　上田 牛古

鈴の音や驛路にちかき合歡の花　上穂 雨三

竹の子のかかりに撓る嵐かな　最上 雪暉

あら磯に船やすらはん春日かな　、

はま庇くづれてちどり啼日哉　本新町 鳥天

静さはかゝる春日を雨ひと日　了破

桃に千ゝの媚あるを花の色香なる　さくら井 波文

いざ行て蔵ん門歟雪の寺　かづさ坂田 元林

たれしのぶ山ぶきの亂り月薄し　相中七木 鳳四

見しよけふ虎落がうらの燕子花　小田原 綵鳥

あだちが原にて

古塚や鬼すみしあとの野なでしこ　下野間中 百尺

野にまよひて蚊火のけぶりを栞哉　ひたちかしま 木公

くれちかく鳩吹て山にこたふ哉　武關戸 古月

ある時は琴をまくらに冬ごもり　江戸 宇多都

三日月や篠ひとたばね霙降　相中戸塚 桑曰

あはれさの鵜舟に酒を賜けり　江都 一音

芒野や風吹すさむ薄月夜　卜全

相中

さがみ川わたらば秋のいなんかな　奥州もと宮 冥ゝ

何系かの葉はとうたてど小田の雁　上毛瀧沼 似鳩
覇王樹の露にうときを姿かな　武藏町屋 昳牧
むら遊雨見に出る匂ひかな　上毛花輪 五岳
うづくまりけし炭おこす夜ごろ哉　詩舫妻
しるべ行巷の松や朧月　江戸 青藍
闌て飛埋火の白灰しづか也　帷景
かへるさやよべにふみたる薄菫　翠雨
まぼろしや曉ごろを啼きどす　漣和
口に啼はちかき命數きり〳〵す　みち彦
鹿啼て酒屋の蒲團かりてけり　、
風の蠡寒きぬたにうたれける　相中大山 雨朧
獲なりさくらの筵もる月夜　春嚶
わすれ水たへ〳〵に見えてほたる飛　瓜歩
やがうへの白雲ぞたつ峰の雪　簾水
柑なるや居士が外面に夜を光る　叮來
桐ひと葉落なんとして先うごく　吳溟
こちらむけいつか落たる鹿の角　大梁
山國やすて経火に拾かゝし　風打

波の文汐干の沙にのこりけり　思紘
人ざとのきぬたにたよる聖哉　、
山ぶきによみ歌流すみやび哉　楚來
冬のはへ莚戸の口あしあらそひぬ　、

書肆　江都本石町一町目　岡村權右衛門
梓工　筋違御見附仲町　小林左耕

秋(あき)の日(ひ)

五哥仙　尾張

曉臺

り、龍證方に集る比もあひに逢ふ冬の日のみじかき筆を
しぬらして、聊責をふさぐ事しかり。

張州老隱　也有選

（秋の日）

序

蕉翁生前の七部の集とて、世にあがむるが中に、冬の日の集は尾張五歌仙ともいふなりけり。然るに暮雨巷の門人、騏六なる者の家に傳えとゞめる一卷の歌仙あり。是は往昔竹葉軒のあるじの翁をまねきて、其日になれるものにして、其坐の荷兮が筆したるまゝに遺せる也。いづれの集に出たりとも見えず。されば暮雨巷曉臺氏、是をおしみこれをたふとみて、社中をかたらひ、四卷の哥僊をつらね、再び尾張五歌仙を繼んとす。稿なりて閲するに、誰かは狗の尾を以て、貂を續たりといふべき。祖翁の魂もし歸り來るとも、青眼にして賞し給はん。いま人なしといふべからず。實に本州の面起すともいふべし。淨寫に臨んで、予に一語をそへよと請はる。嗟乎これまた蕉門の盛事也。なんぞ口を噤んやと。としは明和の五めぐ

貞享五戊辰七月廿日
於竹葉軒長虹興行

栗稗にとぼしくもあらず草の菴　芭蕉
藪の中より見ゆる青柿　長虹
秋の雨歩行鵜に出る暮かけて　荷兮
月なき岨をまがる山あひ　一井
ひだるしと人の中はひだるさよ　越人
藁もちよりて屋根葺にけり　胡及
木の葉ちる榎の末も神無月　鼠弾
つて待かぬる島のくひ物　蕉
蓮着て蚊の啼聲に睡られず　虹
われに狂ふや妾がおとろへ　兮
水つけず立たる髪の冷じく　井
死て間もなき玉まつるなり　人
石籠もあらはれ出る夜の月　及
簑をくむとて寐ぬわたし守　弾
火ぶりして歸るおのこは何者ぞ　蕉
白きたもとの見ゆる輿かき　井
雨乞にすは〱華のうるおひて　兮
竹ゆひそゆる軒の連翹　虹
日和（ノドカ）さよけふは氣あいの少しよく　兮
木馬直して子ゞのせにけり　及
色黒き下阝つまけてかしこまり　弾
切篭おりかけすごき夕ぐれ　井
さま〲の香かほりけり月の影　人
人一代の戀をとふ秋　蕉
捨し世はくずのうらみも引むしり　虹
きたなくなれどかほも洗はず　人
懐に脇指さしてまた出る　及
下戸をにくめる雪の夜の亭　兮
早咲のむめをわが身にたとへたり　蕉
嫁せぬむすめの眉かゝでおる　弾
しのび音にすがゞきならす垣の奥　及
ふみきやさせる松のともし火　人
明やすき夜をますらが腹立て　兮
なにを啼行ほとゝぎすやら　蕉

花によるすゞりのふたに物かきぬ　彈
簾はり出すはるの夕ぐれ　虹

芭蕉六　長虹五　荷兮六
一井四　越人五　胡及五
鼠彈五

明和五戊子九月山莊に宿して

鹿老て妻なしと啼夜もあらむ　支朗
月やゝ寒くむかごやく柴　曉臺
華木槿すへ一輪も見盡して　斗拙
烏帽子つくろい人に伴ふ　萬岱
曲物の老海鼠ホヤの糟漬鄙ぶりし　亞滿
北なる小庭はる粉雪ふる　他郎
胸合ぬ袖にも竈あたゝめて　臺
母のゆづりは雛一對　朗
年號も世に廣がらぬ吉野方　岱
日裏は杉の雫とく／＼　拙
皮剝のこゝろ尖に淺ましき　杉六

盆はわすれず魂かえり來ん　五周
荒海もしくらき月の宵あらし　郎
刈穗しまひし鎌を龍除ヶ　滿
小盲を呼んで三弦彈せける　朗
扇をとつて見ればばさら繪　岱
ほんのりと瑞籬のあたり花靜　周
根笹かくれに卯割カイの雉　六
東風におもく戻出る柱賣　拙
嫁入かと見て葬にあきれる　郎
濱暮て闇に猶啼犬の聲　滿
瓶破るほど冰やはする　朗
憎さげに切て捨たる河豚の面ラ　岱
留守居仲まに窮屈はなし　周
松の末とめて筑羽を見せにけり　六
鵜の嘴ならすゆふ泙　拙
我先キと桶提て出る網子女ども　郎
彿ひろふて名をさだめかね　滿
今宵又若ヤ粥シユクに更て月寒し　朗

壁みの虫の霜に死ぬべく　岱
後妻(ウハナリ)をうてと心が責るぞや　周
木幡の里は山に隔て　六
初華にすは塩鯛のさばけ出し　滿
萬歲殿が羽織着て來る　臺
春毎に無住國師の忌日弔ふ　拙
柄杓ながるゝ砂川の水　郎

支朗五　曉臺三　斗拙五
萬岱五　亞滿五　他郎五
杉六四　五周四

烁八月騏六亭興行

駒牽に干瓢賣の馴染かな　寸馬
月夜の門の杉葉尋る　騏六
秋ふかく大竹原に霜さへて　琴宇
鳥の羽白くむしり捨たり　曉臺
肌つきも着ず山賤の革袴　東壺
南の風は吹ぬとしにや　帆路
松魚干す尾鷲の里の怖(アド)し弓　六
あやしき六部送り出しけり　馬
今わたる神輿の先へ猿田彦　臺
雲はやし叉むら雨やせん　宇
閨の月寐みだれ髪に太刀佩て　路
芙蓉の華をもぐ思ひなる　壺
ちよろ〳〵と水際低ふ秋の聲　馬
あれにし後は闕さへもなし　六
何茱も貧で續し五六代　宇
一軸にして伊達の感狀　臺
薄曇りけにゆつたりと四方の花　壺
内外の春に勢ふ御(ヲ)材(キ)引　路
酒の友ぬるむ流に浸り見る　六
尻目にかけて狐しよろつく　馬
とく〳〵と雨の朝明の鐘遠し　臺
船の上りは白粥のさた　宇
進み出て先唐僧にものをいふ　路
冬扇さす腰をじろ〳〵　壺

頃日の天ラ美しく寒に入る　馬
　廁の燈し木の間隠れに　六
盆山のあまりほしうて盗む也　宇
　梅干喰ふて醒し茶の醉ひ　臺
夕顔に月の夕影猶遲し　壺
　繭(マユ)の匂ひの引盛るころ　路
乳腫物かゝへて因果泣て居る　六
　荒武者ながら下知のやさしき　馬
御格子の外面遥に火を焚て　臺
　有明櫻華はかつ散る　宇
長〳〵とうぐゐに延す釣の糸　路
　日にかげろふのついて眩(マジロ)く　壺

寸馬六　麟六六　琴宇六
曉臺六　東壺六　帆路六

九月十二日於鳴巣興行

今幾日ありて又來んむら紅葉　白圖
月な荒しそ天ラ低き雲　都貢

秋の水冷じき鯉抱(タキ)出て　曉臺
　たゞきろ〳〵と赤き眼の中　宰馬
石の火を猶焚そゆる曉に　子東
　枯篠さはぎ雨しばし降　是誰
懸鳥に猿皮靱わきばさみ　貢
　龍頭ちぎれし鐘の銘見る　圖
唐土の種蔓(ハビコ)れるもみ茶時　馬
　酸(スユ)き酒の小賣はじめて　臺
くり言に舊き家來の泣せける　誰
　竹におさまる宵の木がらし　東
寂々として矢作川邊の冬の月　圖
　わが顔だけに丸き窓あけ　貢
壺の金ちよつちよと堀て遣ふ也　臺
　暮うそ〳〵と遠き人聲　馬
時ならぬ電(イナツマ)見せて華の上　東
　埋木も浮け雪解の水　誰
埴(ハニ)土をことしも二畝打ひらき　貢
　盲の親の猶哀れなる　圖

せんすべも知らで買置鹿の股（モヽ）　馬
落殘る葉のおのづから鳴　臺
ひそやかに告文をよむ宇佐の宮　誰
(稚)雅（ヲサナ）き人に召さす白綾　東
客振りは寶かぞふる外もなし　圖
冰うれしき陸奥の夏　貢
岩角に柱杖のあとや殘るらん　臺
心の一字を書てたびける　馬
既望のとばかりありて月出る　東
分こし檜原露の萱原　誰
肌寒み契りしは扨亡キ人か　貢
しきりに啼て鼬ふりむく　圖
足利や聖の堂に雨が漏ル　馬
嚢に持し丸硯出す　臺
夏來ても押花にして香をおしみ　誰
青きすだれの風みどり也　東

白圖六　都貢六　曉臺六
宰馬六　子東六　是誰六

初秋十字廬月次滿興

蛇のきぬかけし薄のみだれ哉　曉臺
据かいなぐる芝摺の露　臥央
有明にことり使の進むらん　羅城
富たる家のふつとなき里　桂五
氏の一字古く傳へし刀打チ　一桑
さも慇懃に醉ふて狂へる　磨三
歯を見せて手白の猿の怒ける　央
明り細目に蔀おろせり　臺
夜のころも返して夢に君待む　五
胸病ていとちからなの秋　城
撫子の種蒔付し庭畠　三
月に對して古寺の鐘　央
たゞ一騎老たる武者に逢ざるや　臺
下枝たはめて青梅を嚙ム　桑
別座敷華ほとゝぎす明暮は　城
木曾なる筏よせよ春の江　五
東風に初て神のとゞろ鳴ル　桑

枕さびしき盗人のつま　三
憂は有る父をも知らで二十年　央
　元の家並に岡へ引ヶたり　臺
吹たへてひそかに竹の夕雫　五
　破戒の僧の喰捨し骨　城
一度は弘徽殿へも召れしか　三
　窓は卯月も梨子の花ちる　桑
珍しと甲州判を買て行　臺
　一日がはり侍になる　央
船庫の扉ひつしと蟹の這ふ　城
　爐とも見へず爐枯し冬　五
聲寒く神うた諷ふ月の前　桑
　氣あらき駒の綱をひかへて　三
名取川そばは淵なす片瀬川　央
　道きりしたる春男も戀つゝ　臺
白銀をすこし賄ひ驗者まつ　五
　雞の尾に又も雨ふる　城
誰笛ぞ落華を恨む如くにて　三
　朧氣なる夜城守り居る　桑

曉臺六　風央六　羅城六
桂五六　一桑六　磨三六

白圖
騏六　仝校
支朗

書肆
張府　風月堂孫助
平安　橘屋治兵衛梓

幣(ぬさ)ふくろ

士朗
都貢

幣ふくろ

夜もすがらつら〱臥て思ふ事の起出ては、みなことざまになる物也。夜明なば潮もかなひなん。熱田のわたりに船乗らんと、卯月も六日なる曉の窓のしらむを待つゝぬるに、はや明烏のかう〱と啼て、三ッより二ッゆくにそゝなかされ、朝戸おしひらきて、うち見わたせば、西に東に雲おほひて・ほろ〱と降雨の根篠のもとに音つのりたり。かくては熱田の船は出さじ。佐屋の渡にいそぐべき也。都貢は女の童など具しつ。家の子をも二人三たりひきゐたれば、かどでのよそひ、おもふよりやうやくひまどりて、城の鐘の巳を告るころになん、琵琶の古橋はわたりき。妙音の佛まします鳳凰山に立寄、しばしとていこへるあひだに、女の童が戯に法師のさまの形代に、紙衣(カミキヌ)きざみ着せたるを、松の上枝に引かけ、下枝に切りかけたるまねして、君いまのほどに雨をやめてば、もとの御座(オマシ)にかへしまつらん。さらずばおろさじをと、いふなるうしろのたかむら風そよぎ、遠の山根はれわたりて、たゞちに日のさし出る。みな人いふ、時にもあひたる祈りかなとかつ祝ひ、かつあやしみ、是までおくりせし人ゝにも、ねもごろにことをふくめてかへしやれば、はじめて旅心せられて、珍らしくも物かなしくも思ひなしぬ。ゆく〱船つどふ津島の川づたひ、水鶏なく佐屋の驛に入て、爰に芭蕉翁の墳を拜す。あたりなる老法師の立向ひて、そこたちはいかいてふ事すき給へるな。發句いひ出たまはゞ、里の長(ヲサ)吟山が家にいきてとゞめよとか、いひをしへけるが、わたし守はやわめき來て、日や入なんいそぎ乗り給へとかいつかみ行。船の行事一里ばかり、四方のけはいもやゝしづまりて、つか短かき筆をなんとり出して、

水鶏きけとみちびける僧もなつかしき　士朗

水際やくひな晝ゆく日のくもり　都貢

書て船人に附しぬれば、今宵なん吟山のもとへとゞけまゐらせんと、おのがてゝのあはひにはさみておきぬ。

桑名の城白く、松の木立は烟の中にみえ隱て、物象歸ニ餘

清二林樹分ニ夕霞一といひけむも、頓て水上くらくなりて、蜑の焚く火のおぼつかなく、犬の遠吼ほの聞えてうら寒く、情しづみてこがれゆく程、船つきぬといふ。手近きものだにとりもあへず、舎りの者が迎ふるにまかせて入りぬ。都貢曰、予東がうまのはなむけに、

歸り見せよ歸日記のふたおもて

海のむかひの貢月を訪ふ夏朗

そも古郷の門出より、こなたたゞ伊勢の神宮(マヽ)へとこそおもひしが、爰に來りてゆくりなく都見まほしき心のおこり、ひたすらなつかしみ思へば、いざや、まづみやこへ馬の鼻ひきむけんはいかに、日にかぎりある祭をも拜みまゐらんといふを、おなじ心にうなづきて、またさらに旅立る心地して臥ぬ。

よべの雨きよくはれて、朝明の川の邊にいたりぬ。

朝日みえて菜種の露の光り哉　都貢

富田の茶店にて、よき酒のゆぞや。いざ〳〵一盃こしめせとほのめかしけるに、ふたつも三ッもかさねたり。

蛤をやく女みなけしのはな　士朗

今宵は關の驛にやどる。根ごし山ごし吹風に板戸をならすおと、みじか夜のよもすがら、たゞいねがてにのみあかしつ。

けふは鈴鹿の山ぶみするなればとて、とく起て行ほど、共わたり家ごとに、藤につゝじに折かけて、軒のかざしとなしおける。ためしある事にやと里人に問ひ侍れば、けふは佛生會の花つみにあなりと答ふるに、ゆびを折てかぞふれば、まことにしかり。まだいく程もすぎざる旅ながら、はや其日をさへに忘れたり。

灌佛やけふは花なき里もなし　都貢

山過る日にあひにけり佛生會　士朗

頂ちかく登りすゝみて、

岩かどや日ざしにうとき夏菫　都貢

石部山きた(マヽ)〳〵と兀ならぶ中に、獨蒼ゝたる物を望む。

三上山のみ夏しれるすがた哉　士朗

石山にまふでんと思ふ人〳〵は、船かりてみなのりあへり。予もとく〳〵此舟にのりうつらむと、舷をつたひに行に船ゆりのきて、あはやまろび落るよと、乘合る人の肩を

ちからに身をからみつ。からうじておぼれず。さて船のしりべ、ものあらゝかにのゝしるものあり。そはさきの男の、うは衣垂るばかりに破裂(ヤリサキ)つと、いきまきしてのり(マヽ)はらだつなり。吾従者ひたすらにことうちし、吾もやがて立よりにつゝ、とざまかくざまいひなだむれば、こわづくらいつゝ面うちとけて、さなんわびごとのたまへるにぞ、心はうちなぎぬといひつゝ、船ゆあがりていぬ。されど心のうちいかばかりかも恨みいかりつらんを、いざや、衣ひとへをしおくらんをとおひいきけれど、いづちいにけん見えずなんなりにける。いとほいなかりき。いでや、いにしへにいへらずや。旅行人の古郷にあやまちあれば、必旅にても事ありとぞ。かれが古郷にけちにてもありしや。わぎへにもけちなきやとまどひつゝ、其寺の御佛にねぎまゐらせて、すこしは心もやすき方に成はべる。

石の肌花さく苔もみえざりき　都貢

兼てきく、此寺の石うちかきなとりそ。といへるいましめありときく。さるを肝ふとき男のみみそかに打かきて、文のしづめにせよとあたへたるを、其志のもだしがたくて、心ならずも懐にせしなりけり。夢の浮橋とかいへる所を歸り過て、瀬田の橋とゞろふみならして、斜陽の中にたつ。さきにみちのくにの丈芝、此ところをすぐるとて、

青嵐瀬田一方へふき落ぬ

となんいへるほ句を、玉章の便して聞えたり。此句のまことあるにめでられて、こゝに口をつぐみてやみぬ。今宵は宵の月あかく、くまなき影を此所にして見過さじをと、しひて夜泊す。

ほとゝぎす聲のゆくへや鳰の月　都貢

木曾寺に行て、故翁の墳前に跪きぬ。

椎の花扇に落るなみだかな　都貢

生はせじと小草ぬきよる塚の夏　士朗

三井寺にまふづ。

茂り葉や三井の佛の光りさし　士朗

女の童は都べのはやくみまほしとて、一里〳〵にゆび折ゆくなり。鬼貫がいへる、たびにして道の程たづねたる

に、遠きさまにいひなしをしへたるこそいとにくけれと。まことにしかなりかし。扨こゝろのごとく洛につきて、

鴨川の水に目のつく四月哉　都貢

今宵は紐とくやどりなれば、こゝろゆたけく、翌日は又共あすはなど、とり〴〵見どころのこゝろくばりを、けふのつかれをしもうちわすれつゝいひどよむ。扨はしの間よりする〴〵と宰馬出來りぬ。こはいかに〴〵といふに、有馬の温泉(イデユ)より、よべ愛まで歸り來ぬとなり。此寓(ヤドリ)は我國がたの人々をしるべして、年比たづきなすあるじなれば、かゝる小緣(オホロケ)ならぬ故もいできぬめり。さておのれ〴〵が道すがら、おかしきふるまひなど語り合て、酒多くたうべ夜をふかしたり。ともに國のともどちなれば、旅のやどりとしもおもはずなりぬ。折から門あらゝかに叩きて來ますれは、吾師、蓑雨巷の阿叟のかの丈芝を供したまへるなり。むかへいれまゐらせて、又旅のゆく手のさま〴〵み互にかたらひつる事となりぬ。こは吾徒の洛にきたるを、宿の主が師のやどりへ告やりたれば、いねもつかず日をまたでとひ給へるなりけり。つばらに語らば、夜やあけなんとて歸り玉ふ。

明れば丈芝とく來りて、我徒の此に出合侍る事、あらかじめうけひていひ合すゝとも、よもかゝるかたらひのまたうあらんやと、泪を落して悦びあへり。けふよりの興は師とはかりて、都の友がきをぐし出んといふまゝ、たれかれともに、東山あさく見めぐり、地主にまうでゝ、

あらしふけ地主の櫻の實や落ん　都貢

藤つゝじおもへば夏のはじめ哉　京 定雅

あやしくもあらず人聲の山若葉　、美角

夏陰や鐘に石うつ田舍びと　ミチノク 丈芝

ゆふべむなしく、曉猶むなし。たゞ一聲を待に日あり。

ほとゝぎす加茂は越すじと誓ひしが　宰馬

長安万戸子規一聲

杜宇南下りにひなぐもり　曉臺

嵯峨吟行

みじか夜の闇より出て大井川　京 蕪村

筏踏て鮓桶あらふ女かな　几董

雅因が苑在樓に眺望して

みどり深く夕雨めぐる嵐山　曉臺
夏の山たゞ峯丸く成にけり　宰馬
小倉山鹿の子やわたる路の欠　士朗
桐咲て嵯峨にあてなる色香哉　仝

夜行

落る葉やあやに竹洩る月の嵯峨　都貢
白罌粟に焚火うつろふや嵯峨の町　曉臺

落柿舎にて、

茄子植る人に尋てさがの菴　士朗

十まり四の日は、おもひかけたる祭りなれば、加茂にまうで侍り。人おしあへる松のもとに、あとへ〳〵とおしひざらせて、いまや御車のわたらせ給ふとて、しかりひしめくに猶もうごめきぬれば、宮人のとほり給へる道さへにふたがりぬ。

大宮人の袖にすれあふ祭り哉　士朗

國のたより、亞滿・万岱が書のはしに、

古さとやけふ岐蘇川に更衣　白圖
緯絡の聲引いる計りねむき哉　臥央

夏草の眞すぐに立し晝かな　子東
凉しやとあるしを問ば夜戸出哉　羅城
草の根を立得ぬ雨の螢かな　何大
月いらば我は歸らん川すゞみ　万岱
日最中の牡丹にほめく幌哉　亞滿

双林寺西行庵懷舊

人去てあたら櫻のわか葉哉　ナニハ大魯
晝は若葉夜は望月のいほり哉　士朗
麥わらに破れたる笛の聲もがな　曉臺

門阿彌亭にて、はいかいの連歌すとて、

歌仙行

夕風や水青鷺の脛をうつ　蕪村
蒲二三反凄〳〵と生ふ　宰馬
きるべしと思ふ節より節をれて　大魯
十日余りもおなじやどかる　士朗
一しきり雨吹はれて月の雲　几董
つらなる山にたゞ秋の聲　都貢
かくばかり荻刈とりし人いづち　美角

鎖あづかる貫之の門　曉臺
星落る方に小細き水の音　丈芝
馬勞れしと松につなぎて　嵐甲
此邊り劒磨べき石ありや　都貢
怪しき童よくものをいふ　几董
月寒く折〳〵雲丹を焚そへる　宰馬
笈の佛のこけてましす　燕村
いかにせん野渡に人なく船もみず　士朗
世にある夫(ツマ)をたづね佗つゝ　大魯
古き緒の調べたゆべく花の前　曉臺
春の夜やすく明てくもりし　丈芝
雉鳴て山もと近く成にけり　嵐甲
小家ふえたる小栗街道　宰馬
放ちやりし盜人恩を報い來て　燕村
吾歸依僧の兄なりといふ　士朗
浪あらくけふも暮行船のうへ　大魯
闇の小雨のちどりかなしき　美角
イムはせちに戀する人やらん　几董
ほう堪がたのうすものゝ香ぞ　曉臺
供御の水あらしき布に打透し　丈芝
有明しらむ南の庭　都貢
忍びつゝ菊折音の聞えける　美角
みじかき衣の裾寒き秋　嵐甲
象(キサ)の遺ふ潟の汀の美しき　曉臺
笘ほす暮のゆたかなりけり　大魯
苦き酒のよくもさばけて富し家　士朗
しばし狐の宮をあづかる　燕村
櫻さく岡より望む峰の花　几董
日影のどけきむら雨の中　都貢

其あしたは大魯法師にいざなはれて、阿叟も丈芝も難波に下りぬ。宰馬もおのが尾張の國に歸りよそひす。それより三夜二夜洛にとゞまりゐて、いざや、浪花に跡おひ參らせんと、伏水は葦の船乘出るも又おかし。うち日さすみやこの空もふりさかり、ひえの高根も一片の雲に立かくれぬ。舷に肥もたせて、狐川のわたりも過るほど、かつぎするなる水とりを見て、船子等手とりにせんすべ

もありけに、竿とりなほし、水のもにらまへて立てり。

竿うつや鵜の入あとの水の隈　士朗

をとこやままぢかく見ゆ。

夏山や雲盡るところ松多し　都貢

雨そぼふり出、日さへ暮て、苫葺渡しものゝあいろもわかで、夜ふかく難波の岸に舟よせ侍る。あくるあした大魯法師がいほりへ、從者はしらせて事とふに、師もかはらでとかへしいひこされたり。往てといふとばかりもなく、丈芝旅の調度負ひ來りて、けふより伊勢の方に面向るやときこゆ。おのれらも難波ゆ伊勢の國に行なれば、馬なめてと申侍れば、師は祖翁の舊草のなつかしければ、伊賀をかけて日をふるなれば、そはかなふまじきよし也。かゝる事のまた有べしとも覺えず。はじめあとを都に追ひ、こゝにもあひ、またもいせの方におはんやはとて、とくと笑ひつゝ浪花にわかる。

あられうつあらゝ松原、墨の江にあそび、松の間〳〵に吟歩す。

凉風のあられ打なり浪がしら　士朗

夏の夜の夢まふさばや幣所ろ　都貢

女の童の意に任せて、絃哥戯場の興ひと日ふたひあり。

今日は難波の余波なりとて、高津の臺に登れば、一眺十萬家、北に一河を帶て支流百十字をなす。

むかし誰水を治めて川凉し　都貢

ふたゞひ伏水に舟返して、都邊のおほおひきちがへ、大津に出づ。時に雷雨あらけ暫時陰晴す。

鳴神や幾度比良へ歸る雲　士朗

此あたりはあちきのみち、みなれたる方〳〵なれば、筆さしぬらす日も多かり。明神を拜してゆく〳〵田むら川を渡る。

鮎の脊に朝日さすなり田村川　士朗

猪のはな峠といふ名のをかしければ、

猪の鼻吹かへせ青あらし　都貢

是より高く低く山つらなりて、泉あや敷石妙なり。老鶯みだれ啼て、谷も嶺もさらに余鳥の聲をきかず。朗云、あは一聲の杜宇ならずや。貢曰、夫も黄鳥の戯れ啼なりと。

あやまりて鶯やきく郭公　都貢

これ、吾ともがら烟霞の痼疾なり。とかくして雲外一聲すぐ。

安永甲午年五月

尾張　枇杷園士朗
鷗巣都貢

ほとゝぎす山は女松のけしき哉　士朗

關の驛をはし折出て、しるしの鳥居より南に向ふ。去にてもきのふまでみし、いきかひぢとは、しなもことざまもことなるよ。まだおのが手には帶も得とらじと、みゆるうなゐらのうちむれつゝ、祓の五十串かきおひ、笛吹ならしさゝめき行めり。此邊リ雨ふらずとて、神にいのらん事をねぎまつるよし。安濃津の里ちかくみゆるほど、雨しきりにくだりねれば、しばらく田家にさく。

むら立や茨に啼入雲雀の子　都貢

ふる雨に女夫田植の笑顔哉　士朗

卯月もかぎりの日、おほん神の宮所にまうでぬ。まづ御裳濯川に垢離して遙拜す。

かけ波は我に卯月の祓哉　士朗

杉に風心(タマ)に銘する薫り哉　都貢

七柏集

蓼太

題俳諧七柏首

江東有一叟角巾野服哦於孤蘆中聽其所哦則非詩非賦又非和歌風調可以寓意滑稽可以解紛者蓋我知之矣是非世之所謂俳諧者耶吾聞以俳諧鳴一世者前有貞德後有芭蕉自蕉葉之敗也不知經幾霜露也其間一二題名字者亦寥ゝ不耐秋矣是編也可謂輞川芭蕉獨存雪中矣上下百年比擬七體種ゝ極變句ゝ過耳猶夢筆生探古詩施無畏者現三十三身也耶譬諸戲也詩似末和歌似旦俳諧似丑淨今拚身一大場上色ゝ皆演者誰居叟耶非耶叟者爲誰見童誦蓼太走卒知雪中菴固不待吾言矣

天明改元夏五　　南畝子撰 〔太田覃〕〔南畝〕

七柏集序

いにしへ行今來りて、俳諧のさま世ゝにかはれり。あがりたる世はしらず。慶長三の年にや花咲翁、誹林一道宗匠の免許を蒙てより、都鄙共風を仰ぐ。寛永・正保の頃に至てます〱盛なり。しかはあれども其頃はざれたる詞をのみいひ興じて、念ごろなる志をば述ざると見えたり。芭蕉翁、元祿年中に至て花實ともに備り、ことはり隈なく發すなほにして、やうやく古い風を忘れ(マヽ)似たり。されば世こぞつて中興一流の祖とす。万人の心は一人を追てうつればや。夫より百年のけふに及て、大和島根はいさしら雲の遠つもろこし人もめでけんかし。かゝれば古より傳はり來たるやう、今は知れる人もまれ〱にや。慶長以來このごろやうまでは、おほよそ七度の變化なるべし。爰に三世雪中庵蓼居士、菅の根の長き夜すがら、つくばねいつく〲と寐覺なぐさむ獨吟の歌仙七ッの卷に滿り。いさゝ川いさゝかも古をへつらえるにはあらず。あしがきの間ぢかき今の世の若き輩に、流行のあらましをも知らしめむとなり。もとより志を述、耳をよろこばしむるわざなれば、時の人の翫び好まんに過たる事やはあるべき。同じ志の人ゝより〱の卷を附錄して、やをら百によつゝをあませり。題して七柏集といふ。變化亦不易なる事を思ひよれるにやあらん。さはあれども此道をまね

ぶには、唐國・日の本の廣き文の道をもうかゞひ、鹿の苑・鶴の林の深き御法をも悟り、又は遠き雲井の梵莚にまじはり、知らぬ浦邊の僧家に遊び、木樵・商人のしげきとわざをさへ、花見二郎のはなやかに、小まん柳のこまやかなるとぐさをもいひもらさねば、玉くしげ明くれに心を用ひざらんには、いかで呉竹のをかしきふしあるとをば言出べき。さは底もなく際もなき道なれば、いにしへ今の堪能の人々の深き志を、一筋にうかゞひ知るべきにこそ。只かた糸のひき／＼にあらそひにくみて、念もなきとぐせをのみ學ぶべからずとぞ。古とてもよきはよく、今とてもわろきはわろかるべし。月をあかしといひ雪を白しとほめん事は、何かはかたからん。姿五尺のあやめとのびらかに、詞彌生の鶯とまどらかに、低きを語りて高きに遊び、愚かなるやうにてかしこきをきわむるにこそあれ。心の泉は淺くとも、口になめ腹に味はゞ、世々の人々と膝を同して遊ばざらめやも。是をことばのつまとなして、この集のあらましを筆に染るものから、よし野川よしといひ、芦邊の田鶴のあしざまにいひわたる人ありとも、まさに／＼葉守の神の御恵深く、此道の散うせずして、千々の星霜をかさねんとを願ふも、ことわりむべもありけらし。時天明元辛丑夏　月　巣　序。

凡例

一　獨吟なゝつの哥仙は、くはしく其趣を附言に述てしらしむといへども、此うち貞德・宗因・次員・みなし栗の類は、初心の社中これに遊び給ふ事なかれ。かならずや異端の道に入ぬべし。

一　各もゝの哥仙は、西に東に一坐／＼の方寰にして、百卷百席其人を同じうせざれば、等類・同意の附句等あらんは、見む人思ひゆるし給へ。

一　さしあひは長頭丸、あるひは嘘艸等に從ふといへども、例に數／＼の見落しやあらん。しかしそのさし合繰といはれんよりは、作者といはれまほしと、古人の言種にとりつき、句の好惡を先にして、差合を後に用捨せられしもあるぞかし。

一　四季の前後さだめなく亂雜したるは、一卷調ひし折／＼彫工の手に投ずれば也。

一　倭漢の聯句は、いにしへをもどき、倭は元祿の正風をいひ、詩は芙蓉子古樂府歌行の押韻にならひて、開元の盛調をなす。蓉子は南郭先生の徒、京極高明子なり。

一　三十六哥仙の一卷は、唯其哥あるじのことばをつみていへるなれば、詠人の名を句のかしらにあらはしてしらしむ。

一　員外の發句は、哥仙連中の餘興、又もれたる人の本意なきを補ふといへども、其十が一をも掲る事を得ず。のこれるひと／＼親疎を思ふべからず。

右の條々は、師の命によつて、玉藻かく補づたひに濱千鳥の跡をたどり、言葉の園のその數にもいらん事のかたじけなさ。鹿のあら毛のあら／＼しきをもいとはず。卯の華の雪に窓を照して、かく述る事とはなりぬ。

振ゝ亭三駱

指合歌十首

明心居士貞德

俳諧は式目ぞなきおほかたは
　和漢のごとく去嫌ふべし

和漢には季戀述懷旅同字
　連哥の如くきらふとぞ聞

はいかいは右の五色をしこめて
　七句をば五句五句は三句ぞ

水邊や又山類の躰用は
　連哥のごとくしかるべき哉

名所國神祇釋教戀無常
　述懷懷舊表にぞせぬ

鬼女虎狼の千句もの
　面にすれば一坐一句ぞ

新式の一坐一句は二句すべし
　二句の物をば三句有べし

三句あるものは四句あり四句物は
　面をかへて五句も有べし

新式に裏と表を嫌ふ物
　はいかいにては七句去べし

連哥にはせぬ物の名や古事詞
　けやけき分は一坐一句ぞ

附言

師、擬古七變の歌仙は、慶長より元祿迄おほむねの流行を顯す。是業を高ぶり己を擧むとにはあらずかし。唯社裏のわらはべに、新古の差別をしらしめんがためなりけり。夫風雅頌既亡一變而爲騷騷再變而爲西漢五言三變而爲歌行雜體四變而爲沈宋律詩 とぞ。花を實にあらため、實を花に和らげたるも、和哥廿一代のかはりめといふべきにや。又いにしへ俳諧の連歌といはゞ、

　あしもてかへる難波津の浪　　源頼義朝臣
みだれ藻はすまひ草にぞ似たりける
むめ水さても酸もあらはなり　　從二位家隆
　なにとてかたて湯の辛なかるらん
馬の背にいかなる淵のあるやらん　　前大納言爲家
　ちからかはなものぼる鯉かな
　ひくき空にもすばる星哉　　西行法師
ふかき海にかゞまる海老いあるからに
　ともしびはたきものにこそ似たりけれ
丁子がしらの香やにほふらん　　待賢門院堀川

斯一句二句を弄び、百韻・歌仙といふこともなく、宗祇・宗長、懸川の城にをいて、灰書の俳諧も發句・擧句もなく言捨のみなり。附は連哥の趣にて俳言を專とし、ひらめなる句のみありて、親子兄弟の前に讀がたきたぐひ多く、只連哥の後坐を興じたりとぞ。其后守武神靈・宗鑑法師など、飛梅の獨吟千句・犬筑波集等を撰むといへども、いまだ一座の準繩もあら〳〵しけるを、松永氏貞德老人、かたじけなくもひとたび玉敷に這昇てより、都鄙をのづから俳諧花の本と賞をもつて、御傘を著し法式を定む。是より已前も俳諧の名はありながら此翁より式定たればもつて俳祖といひつべし。

その色のしろいや北の叟草
　新酒をのみて長生ぞせん
　　又
珠の名の三五の月にしくはなし
　むしろをしいてひける三弦
連歌師にわるくいはるゝ坐頭の坊
　宮司が妻に夜這するらし

又其后、難波津の宗因、古風を踏破し新風を起し、一句の晒（洒）落に人を絶倒せしめ、俳諧一劇場をなし、世に檀林風と稱す。誠に天下に俳諧の名人といふもの、宗因・芭蕉の外なしと聞ゆ。

おどろけや念佛衆生節季ゆ
　罪障懺悔峯の白雪
飲酒戒破れ菅笠引かけて

又

下手談義聲ばかりをやからすらん
　蟬の衣のかろき上人
藤澤を只一飛にとびこされ

など隠をとかしむといへども、只狂言綺語を弄び、四ッ手とりなしの附のみにして、次第に句作むづかしく長短漢字の句を專とす。ばせをもいまだ宗房といひし頃より此風体に遊びて、上手の聞へありしが、いまだ二句の間に余意を殘す事更になかりければ、いさゝか眼を開て次韻集を撰す。是は洛の信徳が七百五十韻に二百五十句を次で千句とす。よつて次韻の名あり。されど詞こはく歟、附意もむづかし。わづかに談林の風体をはなれんとす根ざし見えたり。

鷲の足雉脛長く繼添て
　這一句以テ荘子ノ可レシ見ツ矣
禪骨の力たはゝに成までに

又

烋に對して所帶堂の記
白キ親仁紅葉村に迯ル聟ノ
　漁の火影鯛を射ユミル

再變して虚栗を著す。されや爰に白氏が歎を假名にやつし、檀林の俗語を飜す。

月を見て東坡は雪に身投けむ
　河魨に貴妑（妃）の佛を戀
遊の代の小哥を琴にわざくれて

又

盃は私の盃をのむ
椰人ぬ影は六十の剰にて
　御所に胡坐（アグラ）かく世を夷（ウツ）也

そが時の花のはなやかなるに倦き、終の花のあだならぬ姿にきのふの我を省て、畫中に何ある事を續空(虛)栗にして得たり。

旅人と我名よばれん初しぐれ
　又山茶花を宿〳〵にして
鶺鴒(ウイクキ)の心ほど世のたのしきに

又

　齢とをしれ君が若松
酒のみにさをとめ達の並ビ居て
　卯月の雪を握る筑波根

既に杜律の風骨を探り、山家集の寂をたどり、幽艶の附かたに人情の理屈を解す。たとはゞ堅き氷の春にあふて、海原に流れ出るが如くにして、雄しき姿とぞなれりける。時に元祿六年にや。翁としどしの衰老に、我はいかいの風味を殘したまへたく、潜に其角・嵐雪三吟未來記の撰あり。

草菴に桃櫻あり、門人に其角・嵐
雪をもてり。

雨の手に桃とさくらや草の餅
　翁になれし蝶鳥の兒
野屋敷の火縄もゆるす陽炎に

又

　高田の喧嘩はやむかし也
夏寒き關の孫六ぬきはなし
　たしなき風の石菖へ來る

炭俵集は元祿七年孤屋・利牛・野坡等が勸によつて撰あり。未來記より一段あはし。されば俳諧は淺き砂河の流るゝ如くせよと敎給ふとぞ。吾雪門には未來記・炭俵をまじへて規矩とす。

むめがゝにのつと日の出る山路哉
　處〳〵に雉子の啼たつ
家普請を春の手透にとり付て

又

上をきの干葉刻むもうはの空
　馬に出ぬ日は内で戀する
絹(カセ)買の七ッさがりを音づれて

流行日ゝ夜〳〵向上にすりあげ、終に正風成就して、天下擧て俳諧中興の開祖と稱す。彼古風のひらめなるを、かくまで幽玄になし給ふ道に切なる事、かけまくも佛の薪をこり水を荷ひ、仙蹕にして大乘の法を得て、衆生をみちびき給ふにひとし。さるを元祿七年戌十月十二日、難波津の舍にして津梁の疲に臥、ついに夜臺の客となり給ひてよりこのかた、其・嵐をはじめ蕉門の古老やゝちりうせ、正風の花凋て、都鄙の騷客邪蹊に走り、荊棘にさまよひ、あらぬさかひにもてゆき、此道絶たるに似たり。爰に先翁吏登、ひとり松柏のみさほをたもち、嵐雪の寂をつたふといへども、梢高うしてよれる人もまれ〳〵になん。しかるを我師蓼太、登翁の命をうけ、雪門の棟梁として門葉をみちびくこと、四時晝夜倦事なし。旅は風雅のやつれ多しと、波に枕し雲にまたがり、意馬に鞭をかなでゝ乾坤獨歩の伊達ものとうかれて、玉くしげ箱根の關の戸を過るも二十年度にをよべりとぞ。其志四方にわたり、既にむかし三千の門葉に榮返て、七柏のとこしなへにひろごり、其蔭によれる人〳〵の言種ども、春秋積てもゝの卷になん過侍にけり。やつがれ此一集につたなき筆を採るも、此師によりこのことの時にあへるめいぼくといふべし。はた七變の歌仙流行の趣を首にしるせよと、是を他に讓らんことをしきりにいなめども、其ゆるしあらざれば、をしまづきちかう這寄て、師の口よりまろびいづるまゝにかいつけたり。もとよりたくめる詞のあやめもしらざれば、いさゝかもわたくしのこゝろをもちひず。附言のをもむきを述、附句のうち聞書の鈔物一卷を副るは、初心の一助とせんがため也。我同門に遊ぶ人も廣くはゞかりの關の戸をゆるして、唯師の粉骨にいにしへいまをうかゞひ、あふがざらめやも。

牛歌坊沙羅佛

貞徳の頃

　　　　　　　　　　　　　　　蓼太

契をきし連理に接ん貴妃櫻
　鳥は比翼に巣くふ此ごろ
見せ物師春何がなと立出て
　そこにやすらひ爰に休らひ
行月の梢にかゝり葉に隱れ
　しきりに霧の降くらむらん
ウ
盆前の思案さまぐ胸のうち
　身は投られぬ借錢の淵
赤そぶの水かとばかり古疊
　畠を煤に先かりの宿
うはばりにおしむ君かな袖たもと
　旅の傀儡の始末つたなき
朝ゆふに文ほど萬おほえ書
　雨風月夜ほとゝぎすまで
天地は四季をこめたる大佾
　神は針手も利たまひけん
花の蔭に冷虫なをる伊勢參
　やまぶき色の早腹帥はら
ナ
佐保姫も伽羅や炷らん陽炎に
　霞の裳裾雲の振袖
へんぐゑは十丈あまり飛さりて
　御佾は九字を切かけぐ
西東北みんなみもふし拜み
　磁石ばかりを船のしをりに
商は天竺かけて浪まくら
　廣い世界を見たは德兵衛
二階からおはつは一期下のぼり
　人まつ戀の山路くらしつ
鹿聞に月の細道分かねて
　いろ葉散埋む秋は悲しき
ナウ
龍田縫露古寺のうち敷に
　けにぐむかし小袖なるらん
捨ものに訴出る五人組
　口利どのをまつひとり武者
酒もれば花に和らぐ鬼が城

瀧は血しほに春の夕陽

檀林の頃　　蓼太

折ることはならぬ都や八重櫻
けふ爰もとにぬるむ水茶屋
醉醒に春なき井戸を捜らん
裸で起し闇の手さぐり
ぎしつくは月の鼠か盗人歟
藏はたしかな稲妻の鍵
ウ 天帝へ進む五色のことし米
乙女の管弦雲に朝夕
甚五郎が欄間に惚てうかりひよん
江戸は案内にこれはくれます
寺御幸麩屋富などゝ覺ゆれど
雪の夜中はどれがどれやら
鉢の木をあへなく鉈でほつき〱
すは疳積の發る眼の玉
大蟹の泡を吹ことやゝしばし
石鹼（シャボン）の舟やくつがえしけん
月花の影洗ひ粉の波寄て
砂は眞白に東風やみんなみ
ナ 春四五度中山蒟蒻といふ醫を召れ
しもつふさから親父が吹擧
乳母が兒の里扶持とりの折〱に
手作の小角豆あるひは茄子
町はづれ三分ン坪を買をきて
頓てそもじと隱居樂〱
五十男四十女のさゝめごと
水ももらさぬ積やかいまき
山蔭に古き獸の革分限
熊とる下部かゝえられけり
請狀に月の輪ほどの判突て
當寺旦那に露まぎれなく
ナウ すいくはんとはねたる首を貰ふ也　（原註）西瓜
軍なかばを風呂敷包

お招のあなたへざらり白拍子
ひかれて靡く舞の袖かな
あらけなき吾妻遊びの花莚
喧嘩も賣れる春の賑ひ

次韻の頌　蓼太

白頭翁少年に示して日ちる櫻
顔色惜ども春はかへらず
三弦の銘を高ぶる呼子鳥
來いよ／＼と御意なさる月
秋の雲に不死の藥を偸さり
裾は幾瀬に分る瀧霧
狒々の寵美女三聲を叫らし
うらみの矢の根牛房燒ばや
葫蘿の緋威蘿蔔の卯花威
元服いはふ臺の數／＼
老後達尻はをの／＼十貫目
牛頭馬頭秤罪覺帳
あれ迄にうしと見し世の月涼し
瓜の寐冷も眞夜中の露
岫を出る雲介は皂狗と成て走る
耳に一文道端の錢
山田礒邊奥なを花に神寂在ス
綠青がちに見ゆる春ぞも
異國へ屏風を送る八重霞
武烈の君に震ひて仕ふ
爼板に孕る鯉のこゝろしれや
身を索ふて鱣鳴なり
万葉に疲たる男まで詠り
達摩膝行と化して出けん
斧いれぬ深山木とこそ江戸の人
雪片々たる八朔の吉原
鴈と呼き又鷺と物思ひ
不堪の田面月に奏して
髮髯を筆に結たる訴狀かな

うい親父めと召かへさるゝ
ナウ
池の御遊龜盃を捧ヶ來ぬ
仙家の千とせ饅頭を蒸せり
孫どもにうたゝ枕を起されて
七箇もかれと寶曳の聲
白馬より地下には花の白鼠
雨たゝえたる種室の水

虚栗の頃

蓼太

千ゝに削る櫻や君が歌大工
月あたゝかに簾外の三寸
戀衣百夜の猫の繋れて
風こゝろあれ史送る船
髯よきを明ン使の供に撰らん
鳳ともてなす芹に初鶴
ウ
銀の釜中の調べ琴を煮て
眞に高尾が咲る夜を見す
あな狹の細眉男いやらしや
高館落し獄門の數
聲七日血染の經と讀からす
椎尉と化して椎の實を進む
毀ン朽て月の光もあはれなる
土佐守にて此秋もまた
頭老ぬ吳天の雪を鏡見て
世を蜜人と思ひ捨ばや
花ありて酒なき里はなかりけり
山を穿て幾春の庫
ナ
盗賊（ヌスビト）の芸寐の夢や蜂ならん
炭で文書うきことの妻
流來し櫛さす嶋のもくづ髮
人とる地神住甲斐ぞなき
篩暗うして星こぼれ鐘氷る
ふりちうふぐり振て寒がる
それ杓子豆腐に刀用んや
百鬼荷ふて參る棺（ハヤヲケ）

憎れし里の長者が人遣ひ
　野石に戻る礎の露
入月や薄は招き葛は恨む
　秋に僧都と捨られし身は
ナウ
人絶をこゝろの水のわたし守
　小晝にしづむ早乙女の唄
雨誘ふ百千返鳥の啼なべに
　廬山とわぶる草菴のうち
是非齋が是非をほつ／＼花の友
　食ふてはこして實永き日ぞ

續虚栗の頃　　蓼太

散うくや纜も手足も櫻川
　うない等遊ぶ春の片岡
陽炎の晝餉にふせ屋借わびて
　御名つゝましき車立つゝ
月暗き秋は猶蚊のいぶせきに
　浦さびわたる風のむら荻
ウ
托鉢は挽割がちの露に霜
　下宿貫ふて大名につく
初夜過の居風呂ぬるき入からし
　あたりへ雪の切通しあり
むかし泣兼平屋敷樋口畑
　姿は女の白きやま水
飛入に踊のあかぬ戀の月
　もゆる思ひの雲に稻妻
霧遠み流され君の御供して
　八幡ぬかづく氏の神垣
連歌やゝ匂ひの花のかほるらん
　初春馴し刀自が膳立
ナ
冬よりもものみな氷る朝ほらけ
　亂杭殘る宇治の戰ひ
無慙なる佛の首（ミクシ）拾ひ得て
　非時いとなめる貧の菜刀
大地震に此町ひけて幾年ぞ

うき身を捜す旅のつれ〴〵
若黨は御物あがりと見ゆるなり
人面瘡を酒になごめる
夏凌ぐみとりの障子岩間水
京おもはるゝ祇園會の月
賤笛の遠音さびしく小夜更て
ふたり喘せば又ひとり來る
ナウ
出溫泉の香もわするゝ迄に入馴し
黑星つける日記の雨次
經にける宿直どころの長圍炉裏
齒ぬけをわらふ時守が聲
一銚子ありつく花の燗ざまし
曇艶なるいやよいのやま

未來記の頃

白雲の櫻吐出す箕かな　蓼太
聳て笑ふ山蔭の宿

陶(スエモノ)の土舂(ウスツ)けば蝶の來て
押あてがひに雜魚置て行
管(菅)簑に朝嵐凌ぐ袖の月
霧に込あふ箯輿(アンダ)寄せ馬
ウ
例幣の泊〴〵も注連かけて
上ゝ吉と風呂譽て出る
おとゝひの囃子の龜相笑ひ合
嵐雪の句の四谷はる〴〵
正宗のありとばかりに年暮て
またしのび音に後家の爪琴
片戀の蚫を作る井戸の端
鳶くる〳〵と町の半空
むら雨の跡は笑止な人通り
一えだ土産の花やちるらん
宵の月雛の御膳すべるなり
醉たる僧の黑きてふ〴〵
ナ
おぼつかな芦分舟のあゆみ板
燈籠と替てむづかしの松

脇息に客もあるじも肘かけて
　小判ばいあふしら雪の中
三嶋なる酉の市小屋たゝむらん
　手とゞくばかり宵の明星
夕顔のつめたき君を押つゝみ
　うきことちらす太刀の鍔打、
木隠れて山は薪伐音のみぞ
　看主持なるさし萱の寺
蹴習ひの古鞠ひとつ月かけて
　汗冷〱とゆふ暮の秋
ナウ
稲塚に八束の苅穂うちかさね
　みなぎり落る堰の水音
挑灯は目ざすもしらず吹消され
　傘さしかけて醫者を伴ふ
碁に遊ぶ網戸を花の不老門
　もの賣る聲の長閑也けり

炭俵の頭

古道にめぐり逢たりはつ櫻　　蓼太
　折も盡さぬわらび虎杖
春の風曲突焚尻戸あけ捨て
　夜に入る駕の足らぬ片棒
薄〱と雨になるべき三日の月
　小鳥のわたる海靜なり
ウ
なりはひを稲こきながら咄あひ
　かりやす染の竿に干あがる
西落に八專次郎こち直し
　荷取のはしる髪のざんばら
いつぞやの借を投込はした錢
　夕鯵作る門のまな板
月夜よし世よしと所化の夏念佛
　あほう娘に母のはなれぬ
おもふことありげに綿の摘おくれ
　干葉の鍋の煮る飯前
咲花の日永に桃とたてあひて

久能の御山のうち霞けり
ナ
捨賣に三月鯛の取さかり
連まつ宿の緣に出て居る
二ッみつ髮月代に若やぎて
絣の油篭に結納時めく
近まさる伊勢の伊澤の町づくり
飾しまへば雪のちら〳〵
醴に清涕すゝるたちながら
馬に嚙れた肩の膏藥
菊の日の禮帳かけて門さして
月やむかしの根來一組
澁帋に茶仕わける秋の風
隱居わすれて只罷出る
ナウ
泥足に船場の喧嘩押歩行
御鎗の見ほる枝のさきおひ
へつたりとおぼつかなくも朝曇
餈(シトギ)こぼるゝ臼の庭鳥
襯(シックス)に僧衆の擲ふ花ごろも

まだ居の氷るきさらぎ

四山

一瓢重泰山　自咲稱箕山
莫習首陽山　這中飯顆山

葛飾隱士 素堂書

芭蕉艸

顏公のちまたにおへるかたみにもあらず。惠子つたふたねにしもあらす。我垣根にふたば生いでゝより、軒端はいまとはりて、終に花さき實をむすぶ。大さ五升ばかり也。これをたくみにつけて、花入るうつはにせんとすればそのりにあたらす。さゝえに作りてさけをもらむとすれば、かたちみる所なし。ある人のいはく、草の戸のいみじきかて入べき物なりと、かしこくもいひけむ。みづからよもぎのこゝろあるかな。やがてもちゐて。隱士素翁にこふてこれが名を得さしむ。其言ばは右にあり。その

句みな山をもて送るゝがゆへに四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜のすめる地にして、李白がたはぶれの句有。素翁、李白にかはりて我が貧をきよくせむとす。かつむなしき時はちりのうつはとなれ、得時は一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせむとしかり。

贈蓼太先生

つたへ聞、往昔祖翁ばせを菴にまします頃、瓢をしてもの入になんし給ひける。されば其瓢のいかなる所にか朽なんことを思したまひてや、畫にうつしをき給ひけり。其畫はふくべにをみなへし活たる風情にて、

　米のなき時は瓢にをみなへし

かの蒸る粟の如くといへる心をとりて、米のなき時のあしらひ、たへなる作といふべし。時うつり世かはりて、その畫・文章ともに埋れありしを、おもひきや予が手に到らんとは。又予がもとに破なんとすれば、いつかばせを菴のうつはとなさんことを。然るに今の菴主の高名をしたふこと、數子の慈母をおもふが如くなりといへども、野俳の無名子なにくれと君につかへていとまあらず。むなしく光陰をおくること年あり。これを人して申さしめんもおこがましく、みづからかたりて師の門に入事を許し給へと、ひたすらにふたつの願をひとつにしかいふ。

　來る秋に戻れ瓢にをみなへし　菊太

菊太老人、右に出せる所の奇蹟を袖にし來て、予にあたへらる。こは世に希なるものなれば珍藏し給ふべきよしをいひて、ふたゝびみたび辭すれども、老人おもふ所をかたりて草菴にとゞめんと也。其志あだにやはと芭蕉菴七物に加て、

　翁自畫讚二見文臺　同杜國兩筆須磨日記
　同一行物　同難波遺狀
　嵐雪手澤如意　同夢想開表八章
　同黒茶碗銘　翁米入瓢文章并瓢畫

斯八品とす。將これを謝するに、歌仙一帖をもつて此集の卷首にをき、長く老人の風流を同志の人にしらしめんと也。

草の戸や我に言葉の種瓢　蓼太
むかしながらに古池の月　菊太
人聲のまだ秋暑き後夜かけて　吐月
馬ほく〱と連におくるゝ　文母
けむらする三ぷくづめの大火皿　魚文
木の葉交にとぶさひらめく　牛飲
ウ
水縄に霜の古寺とりはらひ　虚舟
池田伊丹の罫で千兩　一兆
老らくに伴ふ鶴の放し飼　三駱
幣飛〱に青田見はらす　吏中
廓から風薫かと揚すだれ　子興
内を配所に欠びしてゐる　沙羅
西行の勸にわせる草まくら　菊
世は的からも覇矢折ふし　太
干わたす皮剝町の一かまへ　母
花に鳥い何喰らん　舟
夕やけのそなたに月の浮連り　中
雪解の水をくだる乘合　興
ウ
斑鳩(イカルガ)に維摩の讀める年稀に　太
漬梅三斗地子に納る　文
ふたりとは旦那とらねば身の安さ　飮
嫁入るほどは葛籠長持　駱
錦木の跡もとつゞかぬ戀ばかり　兆
風夜たしなきみぞれこがらし　菊
送られた唐土船の物がたり　羅
一文足らぬ嘉祥通寶　母
此度と將魚うちふるふ古手形　舟
尼ながらへて家は下さじ　中
月影が谷とも見えず降くらし　興
羽かく鴫のくらき菰艸　兆
ナウ
釣もまたかつちるほどの紅葉鮒　駱
くたびれ足を洗ふなまぬる　太
五年見ぬ宿のあるじもあらたまり　羅
三絃彈て奥は夜すがら　飮
節分の春へまたぎし花心　文

海うら〳〵と霞こめたり　執筆

はじめて大乙舘にめされける頃

文このむ香あり弓あり月と梅　蓼太
春たつ窓の二日みか四日　不騫
旅人の笠あたらしき陽炎に　仝
鍬勸進の道つくるなり　太
此あたり太布より外の袖もなし　仝
蕪あたゝかに煮える赤味噌　騫

ウ

宗鑑が茶に雇るゝ小才覺　仝
前髪とつて親の名で來る　太
いまはやる柘植の木櫛の屋敷かた　騫
放生川の橋を押るゝ　太
秋風にひと汗入る袖の月　騫
居合稽古の宵の稻妻　太
畑つくる足輕町の裏通　騫
狐の穴をまつる午の日　太

古爵金ながらも婆ゝの局折て　騫
芝居の金のとれぬ物前　太
雨がちに花の閭とけふばかり　騫
衆徒ふるまひの木の牙(芽)でんがく　太

ナ

石ひとつ力所望の春の風　仝
緣組ふるき里のならはし　騫
誓言(チカコト)に耳疾神のましまして　太
いたゞいて唯まはす盃　騫
斯ばかりの浦に扇の風ばかり　太
果しら雲にためす大筒　騫
ひとり歩に老も交て竹箒　太
雪の厚さの二尺あるらん　騫
常齋のこゝろ安さは何もなし　太
しかも大きな耳で聞えず　騫
待がほに月も吹るゝわたし船　太
鳩もさそふて鳴の夕ぐれ　騫

ナウ

只ひとり新蕎麥二合打かゝり　太
鵜殿たよりに蘆葉の舌　騫

小御門は簑着た儘に通ゝ也　仝
まだほのくらきあけぼのゝ顔　太
若水にそゝいで人の花七日　仝
辻寶史も千ゝの糸ゆふ　執筆

環流亭興行

石川や水を尋て夏の月　蓼太
網追ありく里の撫子　飛驒なか羅
漿(コンズ)水かと銀の瓶子の口切て　速丈
折から雨に留守のつれ〴〵　一兆
山遠く翠焚桴に斧の音　羅
旅して錢の尊さも知る　太
(ウ)人中で齋喰ふまでの墨衣　兆
世なれ種にと早哥すゝめる　丈
條組の堺は都はづかしき　太
伽羅と經たる背柱なり　羅
ゐぎたなし枕返しも知らぬ迄　丈
蒔繪額てこり須磨の浦　兆
荻咲て君が月見も遠からず　羅
此野を守て六十の秋　太
露霜に遣ぬ棒の反かへり　兆
内靈寶に玉のかんざし　丈
片衽に帶の觧たる花衣　太
醉ぬ〳〵と口はかけろふ　羅
(ナ)わたる瀬も雪消の水の坂落し　兆
身延を戀の山に見あげて　太
元政の形に影の母ひとり　丈
もの裁よしと暦にもけふ　羅
通し矢の足を射かと打重ね　太
蔓に響く子規の曙　兆
我に憂筑摩の祭見に行ん　羅
鍛冶が思ひの燃ぬ日もなし　丈
さし出て榎にかゝる賣草鞋　兆
よろぼひをりる駕の草臥　太
待受て月下の門の藥取　丈

ナウ

熨斗結そえし菊の花筒　兆
帆に十里隣たゝきの秋の風　羅
膝をはたけば骨牌こぼるゝ　丈
閒しらむ一むら雀揚豆腐　太
いつか亭主に成すましたり　羅
扇指すそなたに花の位山　兆
此交の鳥に胡蝶に　丈

芭花菴興行

蓮の葉や水無月ならぬ雨の音　蓼太
蝸吹あけて青き曙　東舎
助郷の傳馬揃る聲〳〵に　揚江
硯ひとつの間にあはゞこそ　萬都
名月の影汲頓のめぐり水　舎
ひじきものには薄なるべし　江

ウ

負れて來て妹は音に鳴きり〳〵す　都
膳突出して喰はぬ身じろぎ　太
今打し熊のあら皮張わたし　江
まだ雪ながら松の夕照　舎
無垢汐のふた見をかけて年籠　太
五挺の駕の四挺御相手　都
振出しを腹中知ッの取あへず　舎
夜半の案内の狸ではなし　江
淋しうも終焉の薪の燃しさり　太
川ふね下る花の三弦　都
冴返る借着に月の夕嵐　江
鑑功者に伯母の逗留　太

ナ

清書の褒美ねだりて打もたれ　舎
猶砦こもる五月雨の町　都
日暮ては千人切と聞からに　太
帯隠されて手を合す戀　舎
一理屈遊女の口は鉧なり　江
から竹寒き鶯の關　都
陶からかはる〳〵に忍び酒　舎
襷かけたる衆徒の掃除日　太

着て見れば轉ぶ斗の大鐙　江
いたゞくべきはしるよしの米　都
容といふ客にもあらで宵の月　太
ならし蹴てをく七夕の鞠　舍

ナウ
燕の余波がましう散柳　都
國振わけて堤一すじ　江
松明を上手がとつてよみがへり　舍
鯛百枚は翌の献立　太
さきくさの皆あたらしき花の宿　江
大黑舞の常盤也けり　都

寄巢菴興行

賓引や小野ゝ小町に七もかり　蓼太
狂ふて夢も見せぬ春の夜　鳳宿
雨催ひ藤もれ出る月影に　虛舟
斧禁斷の山そびえたり　蘭室
しぼりては夏旗衣うちそゝぎ　宿

ウ
御座ゝへと嗅ほどの飯　太
かばかりの朝寢は奈良に珍らしき　室
誰いたづらぞ壁に戯れ繪　舟
使者なれて待草臥ぬ鼻毛拔　太
祝詞濟たる幣洗米　宿
松明にあらそふ雪の山をろし　舟
まづ安堵する連の言傳　室
懷も秋さびわたる借坐敷　宿
菊過後の月もほどなく　太
いとねびて四手うつ髮の耳はさみ　室
おとこすくなに淺妻の里　舟
鶯の外はゆるさぬ花に垣　宿
ひかり長閑に行幸またるゝ　室

ナ
老の目に訴書のかすめども　太
いまに崩さぬ河内侍　宿
積上て藏は三年の麥俵　舟
見えねど蚫の餅折〳〵　室
帶とかぬ太夫に無名立たがり　宿

仇酒吐てまた二日醉　太
留守遣ふ隱家ひとつ四疊半　室
　あれは甍のをれた音なり　舟
相合に氷柱の下る傘さして　太
　白朮(オケラ)焚夜の匂ひたのもし　宿
西へ入筋もまがらぬ京の月　舟
　風の狹原殿と問ひ〳〵　太
ナウ
釣合ぬ棒に芋莖と熊の皮　宿
　斯る小舟へ何と便船　室
鹿嶋から香取も星に振わかれ　舟
　とりはやしたる樽に提重　太
笠脱て花に落合ふ古朋輩　室
　風あたゝかに茶宇や羅脊板　舟

雪梁館興行

突兀と大入道の紙衣哉　蓼太
　茶に友待の霜の手箒　松隣

白雲に鶴の機嫌や舞つらん　富屋
　岩うち越さぬ波のさは〳〵　茂林
折からと出買の月の芋俵　野莊
　けふは袷をかさねてもよし　故流
ウ
身の秋の片瀨詣に老夫婦　隣
　鹽ふむ甥におあし二筋　太
村雨に狹莚かけて炭團臼　林
　横に一艘五大力船　屋
耻しう假の契の明はなれ　莊
　綻いざとおだまきに針　流
狂ふとも罒はかぶるとなかれ　太
　片尻かけて雪の長陣　隣
方丈は願ふにやすき奉加帳　莊
　頭巾をくすと冴返る月　林
初花の枝をらせじと山めぐり　流
　丹波へ歸る鹿哀なり　莊
ナ
思ひ出て平家の亂怖しき　屋
　御緣に連て斯る牡丹餅　太

指貸て糸屋に向ふ上り端　林
赤前垂のさめる冬枯　流
玉章はかけねど通ふ川衛　隣
我さへ笛の祕曲感る　屋
宿直まで皆更がたの高鼾　莊
高麗荷に狹き寺の三間四間　林
吹上て馬蹄にくらむ土ほこり　流
片手はかぢる柿の最中　隣
市懸て月住吉をふし拜　太
いとまたま〱撰集の秋　屋
ナウ
田樂の味噌も三色の客みたり　林
屛風にかゝる羽織編綴　流
逗留の都見せじと降くらし　屋
覺束なくも爲替またるゝ　太
小筵敷手帋に花の交肴　隣
櫻〱とさくら咲頃　莊

蓬萊菴興行

散うかぶ櫻うぐひの日和哉　蓼太
山湧出る春の旅人　龜二
先隣る夏をむねとの家建て　鱗江
風鈴の音を寢てこゝろみん　李桃
松蔭に亥中の月の薄明り　文雅
薪の燃かねる舟の露霜　太
ウ
膝寄せて相撲の居所讓あひ　桃
千部の後坐があの放し鳥　江
香の名も立舞ふ袖の笈らまで　二
媒ッ衛士へ錫と土器　雅
雫せぬ垂氷の鈎夜もすがら　太
年の内外の注連に東風吹　桃
浴して各ほどく柳筺裏　江
互に探る市のきれもの　二
此君に唐土船もかゝるなり　雅
霞にうごく常燈の月　太
三弦に倦かで裏うつ花戻　桃

甘露と春の水をがぶ〳〵　江
ナ　朱に染野太刀の曲りため直し　雅
夜あけぬ間にと女乗物　二
御晨鐘の素顔の見合偽らず　太
冬の扇に飯さますらん　桃
呼つぎの浦浪かゝる宮の宿　江
人相書はよい男なり　雅
獨立ふたりたゝずむ夕すゞみ　二
馴て狐の菓子喰に出る　太
斧入ぬ杉にふり行神の場　桃
雨かと霧の雫はら〳〵　江
月の中までもと夜半の薬取　二
震ふ袷の寒さこらえる　雅
ナウ　いまひとつ〳〵と鯊の喰盛　太
人おどろかぬ城下の鶴　桃
音頭とる千曳の石の朝嵐　雅
物に馴たる親仁なりけり　二
駒留て薄茶の花の紅和巾　江
先けふ限に年始百軒　執筆

修多羅閣興行

白露の秋より深き櫻かな　蓼太
月むらさきにかすむ曙　竺蘭
春の風水主の艪拍子踏つれて　全
づらりと並ぶ日見百姓　太
土器に昇なめてむかふ也　全
翦鷹もどる雪の夕榮　蘭
ウ　日の影の横ふ梅津桂川　全
名をや替けん尋あたらず　太
さばかりの家出は戀にあるならひ　蘭
蒲團ふるへば文が一本　太
我先に旅籠の膳を喰ちらし　蘭
日和は眞帆にかはる地あらし　太
さればこそ大赦に月の晴わたり　蘭
死なぬばかりの白頭の秋　太

露霜の御身も武士に成おほせ　蘭
遠路を無事に瀬戸のわれもの　太
曲水をふたゝび花の散ぬ間と　蘭
すみれの庵のいつ來ても留主　仝
ナ 糸遊の機子も下すあいしらひ　太
旣まつ夜の日も斜也　蘭
霖に上る鷄もそゞろに百羽かき　太
津波も寄せず元の住吉　蘭
二日程大工の通ふ鉋屑　太
横に柔術の指南くたびれ　蘭
佗人の花になぐさむみぞれ酒　太
去年とやいはん入院濟む寺　蘭
繫馬絕ず山縣馬場甘利　太
給仕も乘て舞のたをやめ　蘭
中垣の襖はづして月の宿　太
後夜から秋の風と覺る　仝
ナウ 刈萱と勞れ〳〵て初發心　蘭
手は鍋炭に斯の仕合　太
投出して納の日利たのむ也　仝
七ッ下りの暖簾捲る　蘭
飼馴て井手の蛙も花の奥　太
黄鳥の巣も乙鳥の巣も　蘭

虫二亭興行

霧しのぐ鐘遙なる霖覺哉　蓼太
窓をひらけば山の端の月　犬鷹
鱸釣る門の友舟漕よせて　可候
茶もひと包わするべからず　知足
鯉口をこゝろみてをく旅刀　素好
みだるゝ鷄の二番三番　夫水
ウ 年も漸元日草の花催ひ　宜麥
勤(鈎カ)ぬ酒をけふはたま〳〵　太
脫かえて里居にしのぶ町被　鷹
うき四花よりと初瀨踏する　好
樗咲朝むらさきの寒からず　足

あやめ葺たる長の茅門　麥
非相手の征(シチャウ)にかゝる假枕　候
　頭痛は古い遊句なれども　水
晝舟の外山秋篠暮かねて　太
　月細〳〵と雲雀囀る　好
散入れてまだ機ながら花衣　足
　ふかせも果ず蝶に御無用　候
ナ
海尊は長雪隱のおくればせ　水
　鉢の氷室の半たちまち　麿
朝まだきつまみて文の走り書　麥
　かいくるまりて積に傾城　足
ひと十能餅搗の火の冬牡丹　好
　二代つゞいて眞野の白壁　太
口洗ふ入江にしばし駒留て　候
　獲かけたる弓の末筈　水
うれしさの煩ふ床を起直り　足
　玉かとばかり紅葉の對　麿
初夜になり後夜に成行月の前　麥
　梅はるかに鷗のよこたふ　好
ナウ
盃になぐさめかねつ舟ぎらひ　麿
　入子枕のまづ五人まへ　候
持寄にまんまと草の菴一ッ　水
　都の時の皷折ふし　麥
花に風冬より寒き日も有て　太
　酢の利過し細魚防風　執筆

夜柱菴興行

椎柴や上京までは矢脊の霜　蓼太
　打水氷る町の朝風　一得
蒙求に論語の讀書居代りて　桃長
　袴さばきも對のはらから　盤中
月懸て菊見の案内果やらず　得
　紅葉に猿戸竹に枝折戸　長
ウ
扨こそと籠ぬけの鷄聞すまし　中
　二領かさねて羽織あづかる　太

晝からは押て水木が鎗躍　長
　佛間を借て寐せる嬰兒　得
灸(灸)点の願ひも絶ずかしこまり　太
　むすべる熨斗の盆に初瓜　中
月涼し村雨晉て暮さかひ　長
　戀に伏見の出船おくるゝ　得
醉ざめの茶碗に誘ふ水一ッ　中
　疊の上に散て桃の口　太
燭臺も千本の花の姿かしこ　得
　しんと頓寫に餘寒覺る　中
ナ
次信の母ととはでも生うつし　太
　墨色見せる紙も忍ばし　長
飼鳩の伽羅に馴たる青簾　得
　卯月くもりの楓梅檀　中
口たゝく三嶋の鴽の尻ッほきり　太
　數珠つまぐりて立臼に帶　長
三夕にもれじと空を打ながめ　中
　留守にしてをく門の素戻　得

時雨降るまだ初瘦のきのふけふ　太
　手帋披て腹筋をよる　長
我ながら實るぎたなき朝月日　中
　曲突ひやゝかに火はなかりけり　太
ウ
勞れ鵜を塒にやすむる秋の風　長
　鉢日覺て聾あしなへ　得
時めける君が大路の廣からず　太
　一度にとぼす行燈の晝　長
花に湧水とく／＼と若狹より　中
　袖衣更着の冴返る頃　得

魚半亭興行

ゆふぐれは鯛にかちたる小鯵哉　蓼太
　暖簾たゝむ町の凉風　龍舎
御互とどちらも笠に手を懸て　方壺
　弓弦はづせば友はちり／＼　彭壽
照月の霜かとばかり下河原　巽橋

近道細き穗蓼露艸　太
ウ　竈注連の紅葉衣に挾箱　舎
吸もの辛き長女塩梅　壺
研立て讓る鏡の熨斗包　壽
殘すくなに暦はたらく　橋
撫ふるす在番部屋の中柱　太
すき〻はたきぬ網の日ぐらし　壽
風薫る裸に月と唯ふたり　壺
志渡寺祭の跡ぶきの樽　舎
薄縁を引ては通る磯の波　橋
行幸車はまだ遙なり　太
嘘もさはらば花の散やせん　舎
つぶねと成て日永苦しき　壺
ナ　打まじる澤菴番の春の雨　壽
あな音高し揚麩三ッ四ッ　橋
松柏ふかき夜込の星あかり　太
すぐに旅だつ小具足の儘　壽
是聞てをけと屁ひとつ驚し　壺
何ンにも言ず只逢ぬ戀　舎
橋場から憂聲通ふ寒念佛　橋
挑灯動くしら雪の中　壺
碁佐はまだか〳〵と墨摺て　舎
大俎板に鯉の眼かくし　壽
御座船の幕吹月の飜り　太
霧に出むかふ我國の山　橋
ナウ　やう〳〵と傳授の藥掘あたり　壺
正しく宵の夢は氏神　舎
機嫌よう飪の茶釜煮あがり　橋
あの婆ゝ兼て百とこそきけ　太
後風土記の花いざ問ん關ヶ原　壽
夜は殊更人むつみ月　執筆

芙蓉園興行　和漢聯句

長閑さは夜にこそあれ花盛　蓼太
春ー暖ニシテ月開レク樓ヲ　芙蓉

鴨の香にはなかむ鱘の時を得て　太
相逢説舊游　蓉
腰かける石もさいはひ道の邊に　太
披襟傍松樹　蓉
ウ
一はしり壹歩くづして參るべし　太
驪歌杯酒愁　蓉
貫之の御舟つれなく帆を上て　太
渉丘欲極月　蓉
寒聲の耳はちぎれて落るとも　太
霜華散履頭　蓉
朝〳〵のともすれば憂さらば垣　太
袖攜錦衾香　蓉
白銀の猫うちくれてあみだ笠　太
雲水共悠々　蓉
よしや月まんまと二百十日まで　太
青楓入悲秋　蓉
ナ
君不見宋玉作賦年　仝
錢なしふたり寐て語なり　太
短褐渾員當壚邊　蓉
松魚にさそふ玉川の水　太
願以歌舞答聖代　蓉
細の小家も松かざる見ゆ　太
積雪當含是春烟　蓉
しかも其夜は暗き組討　太
慷慨撫劍明月下　蓉
・秋になり行城崎の友　太
張柿梁梨園中連　蓉
鞠すら〳〵と澄登る暮　太
ナウ
乘酣馬上抱琵琶　蓉
あくまで送る湖の緣　太
千山遙控指掌前　蓉
蒔餌に馴て鶴遊ぶ也　太
珠樹花開蓬萊上　蓉
春たつ宿や實寶船　太

芭蕉菴興行

秋來ぬとけふ三日月の光かな　蓼太
夕ぐれ初る荻のうはかぜ　舊國
相撲とり軒につかえる宿かりて　魚文
さあと鯰の鍋提て出る　太
代かいたまゝに干あがるつかれ牛　國
右とはよめて傍示きえ〲　文
ウ
松明に家越おはえて掛財布　太
御酒は御免と銚子とらする　國
武庫はれて風は出船に吹かはり　文
伊勢荷ときけば神在らん　太
女にはたゞはづかしき事ばかり　國
梳る間と翠簾屋またせる　文
前栽の衣かえよと花ちりて　太
おもひは旅の雲に入鳥　國
うしろ見とほだしうたれて此春も　文
鄭にふとしき柱一本　太
名月の芋とりかはす懸和巾　國
友さま〲に溫泉の山の秋　仝
いろ鳥に投壺の矢先飜り　文
位牌知行の只くすり筥　太
舟長の口もさがなき狐川　國
二貫で足らぬ葬のまき錢　文
汗拭ふばかりまことに小六月　太
數寄屋に十日泥鰌の柳葉　國
耳かゆうまだ習出の富貴自在　文
こゝろながくも高尾仕立る　太
御秘すと噓なき年を書附て　國
はなかむのみに離宮寂しき　文
曉の櫻にしぐるゝ秋の月　太
葛蔦くたる僧の讀經　國
ナウ
新蕎麥のふるまひ續く里ゝに　文
やゝおさまりし甲斐の一亂　太
笠取て飛脚の咄たちながら　國
浪こゝもとに出茶屋みつよつ　文
降らずとも空は巳の日の花曇　太

仰むく雁も歸去來　國

雪音廬興行

もたれたいあの山遠し秋の暮　蓼太
筌もうごかず滿汐の月　月もり
禿髮(原註)兒せなを尋に露わけて　あや足
うちかむりたる簑の上風　太
關札に旅屋の厠ものたらず　守
覆盆子まじりに匂ふ花茨　足
ウ
照つけてひと日〳〵に奈良晒　太
飯時見ればみな女なり　守
大太郎戀する体に前わたり　足
わなゝき聲に雪の投節　太
魚店の燈蓋ばかりうれのこり　守
濟で立るゝ御寄講中　足
とりかえてあまり損なき黒羽織　太
月に六日の鎗の稽古日　守
竹原の裏は長吏の別世界　足
鳥居に花の何を祭し　太
雁風呂の機嫌吹るゝ朧影　守
角力の腹もかく老の春　足
ナ
腰かけて塩辛酒の三年ぶり　守
繋つゞけて牧のあら馬　太
或ときは八十瀬にわかるいさら川　足
又こりずまに冬のきぬ〳〵　守
空灶に車の火桶かいいだき　太
野ざらし喰ふ烏群ゐて　足
箭喚のきのふにかはる松の聲　守
宇治へ移轉の茶には富ゆ　太
さしかけて晝餉に向ふ廣將棊　足
月をむねとの青田はる〳〵　太
すがるよぶ照射も白う見え隱れ　足
草鞋を打て泊わかるゝ　守
ナウ
言傳の三ッにひとつは闇なぐり　太
へんと酢をまつぬたの皿鉢　足

どこぞでは垣に鞠を踏ふるし　守
入日もらさぬ楠の葉がくれ　太
散うづむ乞食の孤も花衣　足
蝶あたゝかにひるがへる頃　守

御雨吟の發句、たてまつるべきよし、松城の君の仰ごとありければ、むかし其國に行脚せし古事をおもひいでゝ

ひとつづゝ月見た痩を日毎かな　蓼太
ひじきものには岩の葛蔦　菊貫
牛に汗霧間の棟木行やらで　仝
樽に柄杓の醉次第也　太
髪結て浦人遊ぶ麻羽織　仝
菖蒲戰で入梅の夕晴　貫
ウ
天台の山時めける寺〳〵に　仝
茶にも顔出す袴あきなひ　太

駕かりて歸れば妻にうたがはれ　貫
あたり隣は夢の眞夜中　太
當時先鎌倉一のとし忘れ　貫
尺を揃へる鯛のもの指　太
髻にいそがし振の筆さして　貫
後夜もごほ〳〵宿の居風呂　太
川風に難越の皷聞ゆなり　貫
日傘で歩行醫者のめりやす　太
はゞかりの月花なれども附おくれ　貫
燈籠とぼる池の藤浪　太
御影供に引づりそめる衣被　貫
あの藥子も十とせ立らむ　太
更方を咄て衞士の打こぞり　仝
雪にもならず靈霹扱こそ　貫
音もなく香もなくいつか陳拂　太
續けとのぼる天の香久山　貫
面白の坐頭に刀かつがせて　太
見付ぬものを耋吼る犬　貫

竹の子になよ竹垣のそれながら　太
寡婦暮しの膝に三弦　貫
夜もすがら寐ぬ月の友戀の友　太
花火みだるゝ秌の草〳〵　仝
ナウ
初汐の波爰もとに藏屋敷　貫
跡目披露の養子連だつ　太
傘を取にやらずば叶ふまじ　貫
耳うとけれど五則始る　太
ぢゝめきに放雀も花の蔭　貫
霞の中に國豊なり　太

雪文窓興行

蚊遣火や灶さしの香は藤ばかま　蓼太
夏をむねとの月の欄　逸賀
眞弓とる衛士には下戸のなかりけり　仝
ことたらぬをや旅といふらむ　太
雪道のまだ白妙に明はなれ　仝
豆腐のふねの氷うち割る　賀
ウ
瓦葺ものも屑家に建まぢり　太
服あらたむる包もたせて　賀
使者振もおづらをもつて堅からず　太
盃しほに近まさるなり　賀
晴かゝるけふの曇の占出山　太
群つゝ人の橋をわするゝ　賀
馬に醫者いそぎと見ゆる秌の風　太
小便三度扨長き夜ぞ　賀
不破洩て月のひかりも荒庇　太
されば多少の花落る事　賀
足曳の脚氣にいつか春暮て　太
いとあそぶ日を所化の手習　仝
ナ
問に來る青精飯の水加減　賀
車戻して御泊になる　太
雨しとゞ貫ぬきしまる戀の門　賀
あはれおほかる年のよし原　太
舌打に酒のむ老の草鞋がけ　賀

葛の葉ながら谷の岩茸　太
上町は朝寒早き城の月　賀
生鮨（スシ）で通す鉞立の烌　太
肝煎に抱えて主馬の二幅對　賀
唯喰たをす臺どころむき　太
失もの〻互に身贖言つのり　賀
荷は積仕舞うけまへの船　仝
ナウ
夕晴の猫うつくしき口和山　太
うは敷まくる寺の一客　仝
ぬけたがる碁盤の足の續飯粘　賀
けふはたま〳〵晝寐忘る〻　仝
おもしろの乞食しなれて花の旅　太
わたり瀬ぬるむ鮎の淺川　執筆

俳圃興行　蓼太

人丸　ほの〴〵とあかしの君や青簾
貫之　空にしられぬ白かさねかな　沙羅

躬恒　いづくとも御下手の碁盤わかなくに　仝
伊勢　うまい夜食もあらじと思へば　太
家持　鹿の音のをのがありかを風の月　仝
ウ
赤人　あしべをさして觸ひく秋　羅
業平　露の世に絶て親子のなかりせば　太
遍昭　か〻れとてしも女庭訓　羅
素性　結納すむ柳さくらの衣くばり　太
友則　對客過のをときこゆ也　羅
猿丸太夫　疱病に小砂利踏分なくばかり　太
小町　ぬれいろ見えて晴る江の島　羅
兼輔　月に鶴心は闇にあらねども　太
朝忠　人をも身をも馴し駒牽　羅
敦忠　秋はなをむかしは物を喰過て　太
高光　うらやましくも石はあがらず　羅
公忠　權現の山路くらしつ花の蔭　太
忠岑　つれなく見えし春の鐘撞　仝
ナ
齋宮女御　寶曳のいづれの緒よりもかりけん　羅
頼基　理屈はつきじ最う水にせよ　太

鐵行　秋來ぬと目にも妻（ツマ）にも麥埃　羅
重之　風をいたみし物思ひ顏　太
宗于　色まさる四位の願ひの通夜明て　羅
信明　こゝろしれらん盃もがな　太
清正　五六枚吹井の浦に繪具皿　羅
順　ことしも十日算ればげに　太
興風　契けむ竹とさゝ啼うぐひすと　羅
元輔　人の泪は嘘もおり〱　太
是則　傾城のふるさと寒く月を見て　羅
元眞　しげりにけりな尾花雞頭　仝
ナウ
小大君　秋雨のかくては道も絕ぬべし　太
仲文　爲替便をまつほどにたゞ　羅
能宣　けふよりは用人並にかしこまり　太
忠見　我名は我も今にわするゝ　仝
兼盛　元結の霜こくをとも花日和　羅
中務　吹につけても風光る也　仝

雪中菴興行

むらさきの雨そゝぎてや菫艸　蓼太
春も奥ある牧の馬木戸　和水
蝶鳥の人歩も御酒を下されて　仝
簔の丸寐の所きらはず　太
さばかりの野分凪たる後夜の月　仝
すがれの虫の壁に來て啼　水
ウ
糊たちのてゝらに砧十ばかり　太
さそふて通る濱の友船　水
城築石は湧かとおもはれて　太
片目か人のふたつにはます　水
天よりや降けんされば御內義は　太
ものならなくに糸のとし玉　水
松とれば花の朧月も矢のごとし　太
高輪かすむ伊勢の旅立　水
賑に朝商ひのあいしらひ　太
世なれ親仁に甥もくる〱　水
どこもかゝ大豆引そむる月見前　太

迫るゝ猿に紅葉かつちる　水
ナ
文學(覺)の杖かちく\と岩の露　仝
瘦ても叱る院の門守　太
ついまつに年の夜あらし吹なぐり　水
和布刈濟だるもとの白浪　太
寄添ふて行を口ゝあてこすり　水
さてはやり手と戀をするよな　太
燗つけて寐しなに忍ぶ一銚子　水
表家へだてる松の透垣　太
和泉には肩をならぶる藏もなし　水
駕でかきこむ毛見の甚五兵衛　太
よしや世の月の光も秋日照　水
鮎落盛る簗の水をと　太
ナウ
江戸にない山を馳走に客連て　太
汗の臑半を寺かりて干す　水
庭訓のあぶらじみたる古表紙　仝
五位啼捨て夜のつれ〴〵　太
六七里狩くらしたる花戻り　水
みどり縮し柳ひと枝　太

芭蕉菴興行

戸ざしても分入眉の霜夜かな　蓼太
我影法師とふたり埋火　兀つら
斧あてぬ私領ざかひの松込て　仝
一吹風の鷲わたるらし　太
夕月に獲の鱠ふりかつぎ　仝
留守かとたゝく蔦の門口　つら
ウ
町裏のそゞろにこなき蓼の花　太
水ざぶ〳〵と雨のあくる日　つら
髻にさして土産の風ぐるま　太
是はあまりと蚊遣おさえる　つら
ゆふ顔の宿の隣も寐せぬ也　太
御より添のものに移香　つら
岩根ふむ遍路に不思儀needs合　太
飯は仕廻ふて茶も播磨鍋　つら

起よとも寐よとも鐘は聞次第　太
　田螺鳴夜の月の雨氣　つら
棺にも肩貸あふて花の友　太
　賓蜂の巣の大工一むれ　仝

二
湧初る温泉に行幸の遠からず　つら
　しら雪かゝる山の朝夕　太
洗濯に衆徒の冬もの解ちらし　つら
　むかしはよほど小町なりしが　太
何とやらかとやら酒を逃て行　つら
　ひそ〳〵幕のしぶる狂言　太
さまでなき痞に醫者のむかひ駕　つら
　大津で用の足りる山科　太
祭まつ欒の鯉やおどるらん　つら
　雜巾かけて走る高欄　太
ほの〴〵と十方暮もあけの月　つら
　駒牽ふれる法螺の遠聲　仝

ナウ
忘るなよ秋まだ暑き香需散　太
　木履の母をあぶながれども　仝
門〻はみな板橋の組屋敷　つら
　田へもわかるゝ關の山水　太
ふき飛す笠も登に華車　つら
　鷂を遁れて雲に入鳥　仝

芭蕉菴興行

吹上て汐くもりゆく千鳥かな　蓼太
　平砂にたてる松の冬枯　越前 春江
にぎり飯ひさごの酒に取替て　米汁
　ふたりでやつと狂哥にはなる　山奴
更やすき雨の月見の片明り　江
　寐よとの砧いつか擣やむ　汁

ウ
ふしおがむ行衣にたるゝ秋の水　奴
　やたらこぼれて錢も塊　太
ひと世界雯にはなれて歌舞妓町　汁
　五條へよぎる旅立の駕　江
人に倦墨の袂を振ちぎり　太

互にしいて蕎麥をかむかな　奴
とし越にけふは廓の水いらず　江
いつ降出して外の相傘　汁
提て行竹青〱と夕藥師　奴
花の彌生の夏にたちまち　太
糸遊に物ぬふ月のしらうちわ　汁
みたりにひとり眠る春の日　江
ナ
安濃の津に乘くたびれる馬の上　太
ひらに一夜と狀を見ながら　奴
二番蠶に庭も疊も桑の露　江
己が皐月と墓も鳴也　汁
記念にとそいで包める鬢の髮　奴
出船告てひましらむ戀　太
餡の足からき牛房や殘らん　汁
かぞえるうちも千兩の金　江
盗人の晝はかくるゝ花すゝき　太
檀にかゝる安達太良の月　奴
定まらぬ溫泉場の寒の貸小袖　江
狩野とはいはで名も繪そらごと　太
ナウ
前うしろ寄そひやすき子煩惱　奴
口の六月を瓜のぬれ色　汁
あらにこの夕べすゞしう吹はらひ　太
眼にかぎりある淡路島山　江
内舍人の硯をひらく花の陰　奴
落てもきよき玄鳥の塵　汁

雪瓜閣興行

君が代や二百十日も物わすれ　蓼太
小家の門も八束穗の月　みつれ
うは毛吹拳の兄鶺（コノリ）ゆふぐれて　雪瓜
何噺てやなにわらふらん　魚文
笘かけて雪にむもるゝかゞり舟　れ
としの余波の鐘いたる也　太
ウ
着て立て猶大紋の仕立ばえ　文
こゝろも魚と水の兄弟　瓜

淺妻の綴鞁つたへる里習ひ　太
垣間見させぬ窓の枳穀　れ
手帳繰る國家の使者の立ながら　瓜
さきが秤で無事な鞘あて　文
鏑流馬のとつとはやしてくづれ口　れ
霽ても雨のまたすべり莧　瓜
今さらに宗祇と聞ていかゞせん　文
つかふた留主の出所もなし　太
煮つまる月のうしほ煮花の葛　瓜
あそびもたらぬ雛の三日四日　れ
ナ
陽炎に鍬くたびれを踏のばし　太
鳥の礫鷺に鶚たり　文
立盡す刹竿頭の罔兩　れ
宇治に一日都わするゝ　瓜
そほ舟に我もうきたる唐瓶子　文
脛しろ〳〵と賤めづらなる　太
引ちらす時雨の中の土蘿蔔　瓜
釣行燈に照す廣庭　れ
いくるから雞塒に月更て　太
賀も若やかに七十の秋　文
裁縫も足利染の下もみぢ　れ
とらえて猫の泥拭てやる　瓜
ナウ
辻番にひさしき顔の西日うけ　文
四五兩づゝは金も貸ける　太
鯨よる迄は〳〵と米の飯　瓜
朔日毎に神樂かゝさず　れ
拜領の甍とゝのふ花の宿　文
柳さくらを馬場のもの好　執筆

老鶯興行

幟たつ都はしろき茂かな　蓼太
ひと汗いるゝ峰の松蔭　あき良
菓子箱の生姜ばかりに摘あれて　七樓
おとこ住居のこゝろやすさは　祇川
月くらき夜干の小袖おどろかれ　良

冬近ければしぐれ折ふし　太
ウ乗物のねぶたさましに鷄籠　川
不二見るうちを冠召るゝ　樓
ざぶ／＼と呼れて田から馳あがり　太
夢かとばかりこは一の富　良
押あふて人に春たつ年のうち　樓
越後屋の燈の綾よにしきよ　川
蒲鉾に烏芋もふるき硯ぶた　良
御客のやうにすはる釣もの　樓
振向てまづとる袖の帽子針　川
陀羅尼仕舞て加持は四ッから　太
月の瀧明ては花のたきつなみ　樓
はつほとゝぎす巣やこぼれけん　良
ナ躓て琴の柱ひとつ飛胡蝶　太
兜片手に傾のきぬ／＼　川
薫の帆にひるがへる船やかた　良
入院むかふるからくにの僧　樓
誘れて夜深の茶漬かいなぐり　川
玉とあざむく蓮の孕句　太
すみよしの神は鏡に照覽　樓
たえず翁の篝朝ゆふ　良
馬上から三度みやけの黒丸子　太
看板一把かれ藤の錢　樓
そよ／＼と切籠の塔手に風の月　川
寐ぬ裸子と角力とる爺　太
ナウ新酒吐く歩鵜戻の玉だすき　良
弓と弦なる畔の近道　川
建すてゝ並よき疱の赤幣　樓
先さく／＼と白髪大根　良
あの座頭日明まさりの花心　太
淡雪はれし橋の糸ゆふ　川

芭蕉翁興行

眞夜中や氷のうへの捨小舟　蓼太
鏡に冴る月のひとつ家　栃木 梅雨

若者の三弦かちる忍び音に　青雨
　いづれも袴脱ちらしたり　斗麥
追ふて來た夕立雲の降こぢれ　石菖
　土手かき上し宿の入口　太
ウ　囑託に古う傳る法度書　梅
　連まつ僧の拱てたつ　青
綻に頓の針業五六寸　麥
　廊こと葉に茶屋の愛相　菖
根を押はまだ見ぬ伊勢の鬼ながら　太
　惣を齒朶に流行正月　梅
燈に來社〳〵もかつら影　麥
　牽て貢の駒こゝろみる　菖
四十迄かけず三ッ子のむつまじき　梅
　寄合書の御畫はともあれ　青
福曳に夜はほの〴〵と花の春　菖
　直段を聞ば實金衣鳥　麥
ナ　駕立て若黨戻す遠霞　太
　一客たらぬ茶にさそふ水　梅
奥ふかき寺は桂の橋ばしら　麥
　綯竿しごく卯の花の雨　菖
淺黑き三男顏のをとし差　青
　諏訪の温泉の寒き町中　太
躰言に願ふた手鍋提習ひ　梅
　下駄うつ縫の裾を引ずる　麥
初夜後夜もわかず夜市の立さかり　菖
　空は淋しき片われの月　青
尿ひよくる樺梁の秋の風　太
　小粒摑で博奕すさまじ　菖
ナウ　みどり子に羊羹くれて歸す也　青
　翠簾捲をろす能の中入　梅
薄緣に假屋の蟻を打振ひ　麥
　山あたゝかに花の隱口　太
春は猶若むらさきの朝ぼらけ　青
　はやしをくれの七種も今　執筆

芭蕉菴興行

鶯の音をいれてをく花は何　蓼太
蜘の圍拂ふ菌の朝ヾ　杉羽
ほんのりと麥湯の加減まいらせて　蘭秀
立ふるまひも小太刀也けり　水谷
月かけて賭弓ちかき下矢數　羽
梅しろ〲と散もはじめず　太
ウ
生田から壽永の春に袖ぬれて　谷
味淋酎はと尼にすゝむる　秀
御腹とるうちは屛風を引まはし　太
眞紅こぼるゝ雪の文箱　羽
おもへども師走は氷る金の事　秀
寐燈ちら〲と油ありたけ　谷
谷汲の山風誘ふ松の聲　羽
鮎うちに行雨の晴ぎは　太
端折ばいとゞ引ずる摑ざし　秀
まるい最中の月も踊も　谷
ひやゝかな茶漬に菴の棚さがし　羽
誰を啼らん簑のみの虫　秀
ナ
棺まで連歌の骨に燒盡し　太
直に打立旅のあらまし　羽
戀敵あまたの中を身請して　谷
湯殿をつなぐ閨の造作　太
藥師から忽そよぐ豐後竹　秀
光すゞしき鯵の夕ぐれ　谷
序の舞を合て貰ふ古鼓　羽
只着の儘に老の紅絹うら　秀
此寺の二世に立べき人撰み　太
槇にしくらむ山のふところ　羽
月細う霧降連をふり返り　秀
あやはの醉のまた呉服まで　谷
ナウ
色かへぬ薄茶のみどり今ひとつ　羽
枝折はさみて素問しばらく　太
乘ものに何かはしらず召使　谷
夜も霞の關は其まゝ　秀
かざり吹風さへ倦ぬ花ごゝろ　太

古事ながら千壽万歳　谷

朱紘亭興行

蓼太

ほとゝぎす一聲夏をさだめけり
卯月へかゝる藤の山里　群人
撰集に砂金遥〳〵使者のべて　大橋
早速ながら茶漬すゝめる　白花
立待の影まつ程のざんざ降　人
橋入かねる秋汐のふね　太
ウ
五三十施餓鬼の施主の打こぞり　花
今にむかしのまゝの四の黨　橋
取かはす玄猪の餅の懸和巾　太
男世帯の德は何〳〵　人
月代に近い湯屋から一手桶　橋
はや婚禮の門も色めく　花
紅るに老女房も遠まさり　人
愛宕のほれば海の夕凪　太

うちこぼす蟬の時雨の愛かしこ文　母
みな古渡と見ゆるさら鉢　橋
書初の側から貰ふ月に花　花
まだ春寒き十德の袖　人
ナ
くちなはの穴ほど老の出からかひ　橋
塩あんばいも姿ならでは　花
茶歌舞妓の後坐は涼しき舟踏香(マヽ)　母
浮世の外の實醍醐なり　太
呼捨て天日貴の跡もなし　人
刀さしたる顏や耻らん　母
賭物に氣根競のたうがらし　太
鼠の落る蓬生の月　橋
晝過は巽(タツミ)になりし秋の凪　花
いつか除福も啣さるゝまで　人
五寸裁一尺裁て拂ひ切レ　橋
文箱行かふ堺浪速津　花
ナウ
はらからを(原註)兄弟いつれ菖蒲と母心　母
ふたつに折ればみづにあるへい　太

唐鳥の衝立越に桐火桶　花
ほろ〳〵落て雨かあらぬか　人
浄瑠璃の路々余る花もどり　母
遠近の燈の眠る春の夜　橋

雪中庵興行

櫻木を折らじと雪を守夜哉　蓼太
箒かいこむ帋衣の袖　出羽 蓼雨
行騰(ムカバキ)に山問ふ道の駒とめて　投茶
釣臺一荷破籠なりけり　撰盧
眼通へ松引亭の月催ひ　雨
按摩とらする夕暮の秋　茶
ウ
籾糠に千疋牛の手附金　盧
米澤酒の五升かたぶく　太
女房から去状裂て打わらひ　雨
呼屋使に野良追るゝ　盧
白雪にまぎれて傘の取かはり　茶
十挺ものゝ續く町駕　雨
案の如願ひの舎利になられたり　太
伐らせぬ松の手山すゞしき　茶
客連て鉄炮かつぐ竹火縄　盧
刀望の江戸をひたすら　雨
月花の百社には日の永からず　茶
(恋)嗚呼とばかりに鐘かすむ也　太
ナ
扇折手に春風はたちながら　雨
御卽位濟で仁和元年　盧
藥園は皆佗人の草まくら　太
なよ竹祝ふ煤の朝風　茶
見苦しき文抑もみて仕舞けり　盧
京見物も夢五十日　雨
ためつけて逢ねばならぬ人斗　茶
門にぎ〳〵と扶持の積初　太
堀割に船の白山の城下まで　雨
月見次郎と又よばればや　盧
白露の銀に小粒にひと財布　太

まだ住つかぬ秋の荒壁　　茶
ナウ
夜食迄あなたまかせの御寄講　　廬
挑灯焦す佐保の川風　　太
五位鷺のいたづら鳥も有ときく　　茶
古家買ふて見せる番匠　　雨
これまでと吸筒したむ花の蔭　　太
入口の筋に蝶いそぐ也　　執筆

貫もの奉ける序、八丈の風宜、予が草扉を訪らはれけるに、近友遠客添あひて、かの顯基の卿のふもの好よりはと、すみだ川に棹さしける折から

行かで見ん配所を語れ江戸の月　　寥太
罪なくわらふ秋の夜の酒　　八丈 風宜
鴛に菊香もうるはしく結付て　　小田原 石髪
御望なれば近道もあり　　江戸 古音

こゝろみの居湯をまはす片肱　　全 文来
みぞれ催ひの風も殊さら　　南部 東芽
ウ
痩竹の漸そだつ此あたり　　上総 石意
後住に成て寺も赫奕　　江戸 完来
乗物に長居の女中しられたり　　宜
大口たゝく釣のわざくれ　　髪
むら雨に首を出したるてしま蓙　　音
鐘鑄終れば余所の晩鐘　　文
三日月を一葉殘してちる紅葉　　宜
籃のわたりに霙霜の聲　　意
雜炊の鍋焚ながら圍居して　　文
まだ齒はたゝず宋由詩には　　太
花は根に歸らんとする風の音　　来
紅毛わたる駄荷の朝駒　　宜
ナ
拾物の鎗かけてある横がすみ　　音
法事過たる寺の椀家具　　芽
綻ばす綸子の膝のはねあぶら　　来
飛子の戀のさめる關聲　　意

遠まさり又近まさる薹狩　芽
瀬田によこたふ橋の梁　文
百と聞年の棺のうらやまれ　意
誰か打べき一貫目筒　晉
松に幕濃紫をひるがへし　芽
菌に賣れる山の有明　髪
この矢立腰に扇は忘るとも　晉
碁は兎もかくもこは鶉たち　來
ナウ
繰上る自在の五架茶煮こぼれ　意
人をちからに冬の蟀　髪
黄櫱の太鼓聞ゆる山颪　芽
暮ぬうちにと小河なれども　宜
故郷へこの濡婆も花の袖　文
榾火傳る宿のあたゝか　來

鍋渡櫻興行

けふ菴はほだしとしりぬ更衣　蓼太
我を呼子の山ほとゝぎす　武貞
雲くるふ空にほろ〱雨落て　仝
舟場込あふ舘に月弓　太
汁かけて飯かいなぐる烁の風　仝
三番うちに相撲はじまる　貞
ウ
何ぞかぞ只すれ〱の日枝横川　貞
冬を春部の献立が出る　太
暮かゝる霜の袴にかしこまり　貞
さかまく水に十嶋の關　太
あきらめて歸る迷ひ子の鉦太鼓　貞
殘り少なに百匹の錢　太
小寺には過た蓮見のつなぎ馬　貞
月もまだ干ぬみじか夜の雨　太
たまさかの連理の夢を破れとは　貞
提子に白き肱つらるゝ　太
投入るばかりに花と青柳と　貞
明ちらかして留主の陽炎　仝
ナ
鱒網を雁にあがる舟着て　太

ねがひおほせる入札の段　貞
身帶も木曾より出て朝日山　太
斯うよと見えて色〳〵の醫者　貞
托鉢のうき世に烏藤突ならし　太
雪吹をわたる橋ふたつみつ　貞
翌春の來るとはさらに人ごゝろ　太
實大内裡繪圖も中〳〵　貞
膝つきにまじなふ燭の片流れ　太
媒なれたる御内儀の顔　貞
爰らはと被とりたる花の奥　太
はざまを走る岩に若鮎　仝
ナウ
鈎(鈎)殿はまだ春ながら青簾　貞
りんと將棊にむかふ檢校　太
さるにても能は生たるあはた哉　貞
半季がはりもむづかしの世や　太
爰しめよかしこかけよと月更て　貞
夜寒のきぬたうち仕廻ふたり　執筆

老鶯集興行

春風や酢にはせかへる生いはし　蓼太
梅にことしの端居たま〳〵　辰風
かけろふに石屋が石を歩行せて　仝
汐さしかゝる山の裾川　太
芦田鶴の影踏む月のきのふけふ　仝
夜は這出て毛見の碁相手　風
ウ
垣こしに柚味噌と知れる割ばさみ　風
大破仲間の地家も七ヶ寺　太
田樂の興行もまだ沙汰ばかり　風
御湯はめさせぬ醫者の相談　太
灶こめて衣桁にかゝる白がさね　風
別れの跡のあさるおどろく　太
音信る簑輪あたりの豆腐うり　風
とゞけ手紙をはさむ笠の端　太
伐出しのまだ皮ながら宮柱　風
舟こゝろよき花の追風　太

暖に奉公仕舞ふた袖の月　風
　堅い雑煮にわざと箸とる　仝
ナ
身帶もむかしづくりの古土藏　太
　結納とゝのふ先も高田派　風
ものの思ふ空煩を引起し　太
　水仙提て雪の見參　風
小御門はひそかに夜も通す也　太
　ひとつ巴に茄蛸のあし　風
岡釣の五人まどふて草むしろ　太
　消毒はたいて活かへる顏　風
荷は關のあちらにありて六の鐘　太
　とぼし火しんと細き松風　風
影遠き十六夜の記に筆とりて　太
　けふもまたるゝ新米の腹　仝
ナウ
酔覺にたゞ水村のまつり客　風
　二階の手燭誰とゞがむる　太
雨漏にふきあはせずの茅ほこり　風
　早してかへす馬の借物　太
花ぐるみ田螺あへたる根來椀　風
　旅おもしろき春の只中　執筆

奥八町日社中

雲絶て衢のかゝる月夜かな　蓼太
　松も塩屋も雪のしろたへ　嵐宇
三弦に十年捨た撥とりて　絶階
　來ては寐ころび〳〵　野牛
酒藏の七つ下りを風かほる　不貫
　青莎ながらに餕の魁　都龍
ウ
ほめてやる脊中に灸の跡もなし　東圃
　さし矢始る幕の小莚　古梅
杉苗にまた此頃の榧かつら　北州
　普請願ひの亡八連だつ　里夕
我ひとり若やぎ顏の黑油　如洲
　けふ牽わけの桐原の駒　雨后
鷄啼ておし明がたの關の月　牛飲

海より晴る霧のきれ〴〵　春山
染草の下焚ながら糊摺て　進馬
まづ手のあるゝ梵論の今入　岨雲
此春は花も笑ず冴かへり　南溟
船つみたへて二月いつぱい　所好
ナ
白魚に寄る骨牌の落こぼれ　孤秀
借て羽織にはをりかさねる　松夫
說歩行祖師の御難の泣男　市童
冬あたゝかに東金の町　淂明
絕〴〵に油〆木の槌のをと　古郎
鞍とらまえて覺つ眠つ　可求
琉球の若衆も遠き旅やつれ　巴龍
鐸に惚たる翠簾のさゝめき　保雪
折からとかつちる紅葉うつくしき　女 松花
灑る水に弓張の月　玉杵
鳥狩の安き隙なき秋の聲　茂竹
只露霜のしら髮吹るゝ　素朴
ナウ
板繪圖の儘にふり行宮柱　春町
伊奈海道の萱も暖　金馬
移香を小柄に側る洗ひ箸　花馬
着替て輕き瀧のぬれ衣　淂十
七日には見はてぬ花の奥ならん　曇花
春の行衛の小がら山雀　忩耳

芭蕉菴興行

佳人も物貯ぬ泉かな　蓼太
案内答ふる聲すゞしき　牛輪
城取の稽古はじめに樽提て　南居
袴ひろげる茶宇の面ゝ　有繼
おもしろき俄寒の菊に月　輪
日馴ぬ鳥の秋はおりふし　居
ウ
白露のたま〴〵撓るうしろ堂　繼
親仁〴〵と左官老にき　太
腰抱も我等にまかせたまふべし　居
他生の緣の棟の行あひ　輪

學寮の灯しづかに初瀨やま　太
狀からへがす小粒十四五　繼
わざはいも三とせの今は關角力　輪
妻は留主して朝臭の宿　居
緣日の挑灯ひとつ月一ッ　繼
夜深にそよぐ揚土の四手　太
福原の京とも花の定まらで　居
まだ賣きらぬ萓の片脊　輪
ナ
永き日の茶漬に祖父をいたはられ　太
癬(タムシ)に筆の何を書かは　繼
まん中に笈を取まく草枕　輪
冬あたゝかに安房の夕風　居
をのづからもたれ柱の緣かづら　繼
乳人潜に戀人を問ふ　太
句へども名のなき文を繰ひろけ　居
調度しらべる仇し野の留主　輪
薄暗う伊予簾垂たる槇柏　太
しぐれこぼるゝ長月の影　繼

籠の鮓狐が付て道すがら　輪
振ば燃たつ烟のあき風　居
ナウ
町並の出水にさはぐ人とよみ　繼
やつとつりこむ駕の塞　太
時を得てけふを傳授の精絕　居
神も納受の日和なるべし　輪
松蔭をくばりて花の荷ひ茶屋　太
芝うつくしうこまかへりけり　繼

予が結び捨し仙府の嘉定菴は、十とせ余八とせの霧に朽、霜にかたぶきしを、ことし又其地の人〳〵ちからをあはせ、二間の草庵清らかに營建て、月〳〵の雅莚もおこたらずと聞へければ

新月や遙に思ふまるばしら　蓼太
ふた度懸ん笠の露霜　蓼房

秋茄子わさしの粕に貯て　麥車
　寄麗に管の簾からつく　水長
朔日の卯の時雨に晴あがり　蓼素
　ちるともいでや紅葉踏ばや　青蚨
ウ
それしきの頭痛と蒲團引まくり　羽冠
　坊中首をひねる廻状　古道
唐土の使を奈良にとゞめをき　綠水
　はち〳〵はねる胡麻の揚もの　梅堂
細帯をひとへかけたる夏ごろも　夏雲
　おほこのおどる汐先の月　太江
夕晴の夫婦出揃ふ筑波やま　房
　物見みかへるうはの空灶　車
畚振のからき世噺す道すがら　長
　吹るゝ簑の雫はら〳〵　江
椴杉も花の蕚に翠ならう　道
　のとろに廣き社地の古芝　太
ナ
此春の相撲願ひに侍着て　蚨
　爰はひとつと手をうつて置　冠
請狀の苦界十年もけふばかり　堂
　藥にあたら伽羅五卜づゝ　水
燭臺は高し手燭をまいらせん　雲
　師走の風の鐘いれて來る　江
梅が香の雪かゝる日も怠らず　水
　人をちからに駈る御百度　房
いつしかに從弟も老のうしろ付　太
　今に鹿相の扇わするゝ　車
（前カ）
千栽の虫から暮て荻に月　堂
　しづか過たる杯の野の宮　長
ナウ
草鞋の序に覆子しめ直し　素
　老たる馬を二里下りてやる　道
田樂の匂ひほのめく違園扇　蚨
　日がな一日揚弓のをと　冠
吹よせて颷にめぐる花の渦　雲
　春の行衛のをしき山ゝ　執筆

雪中庵興行

身ひとつのさう〱しさよ紙衾　蓼太
浪替りては月もしぐれも　甘谷
吹おろす鯨の聲の山風に　以文
船場へ走る笠の追〱　其牛
殿はまだちいさけれども青山椒　谷
(楊)揚弓しばし夏の日ぐらし　太
ウ
打ひらく門前町の八百よろづ　牛
流行咳氣に雁陸尺　文
時ならぬ追焚五舛炊かゝり　太
ある三弦を貸てことかく　谷
へつたりと舟着く軒の宮戸河　牛
今や隱居と梅の咲らん　文
使者達て時服を花の都から　谷
霞も汲ずまだ若衆皃　文
戀せじと夜ゝの誓の順の峰　太
鼠きしりてくらきともし火　牛
ひつそりと浮世の月見しづまりて　文
いまだ歸帆とそよぐ秋かぜ　谷
ナ
打群て一字の恩の袖に露　牛
となり知らずにいつかほた餅　文
起されて晝寐の皃を押拭ひ　谷
たゞ忙然と御預の君　太
霜みぞれ其後雪とつもれども　牛
博奕ざかりに鷄鐘もなし　文
ねだり込む妻のたけりを打笑ひ　太
鵜坂の杖も喰ふた尻つき　谷
もらひ湯のはてなき菊の夕月夜　牛
新藁踏で場の廣さは　文
小鼓の賃いとまある與ゆかし　太
雨しと〱とふりみふらずみ　牛
ナウ
朝みどり青物市の冬ながら　谷
眼醫者がよひもはや獨づゝ　太
たもとから土産も笑ふ小人形　牛
日和も大慈大悲なりけり　谷
やす〱と花の上濡竹生嶋　太

水鳥もいま百のさへづり　文

雪中菴興行

百草の野にめぐる時むめの花　蓼太
牛ども遊ぶ駒の陽炎　龍枝
番甕片荷に財布わいかけて　仝
一年ぶりの顔をさし出す　太
町並に月見の門を明わたし　仝
けふの相撲の皆噂なり　枝
ウ
廣ぶたに足利染の草の花　枝
先粥餅にお箸すゝむる　太
老尼のわすれた襷取ながら　枝
大晦日の温泉の入こみ　太
明ちかきはら〳〵鶏の星しらみ　枝
さめつ眠りつ駕に早打　太
岩端に小桐探ればはねかへり　枝
彌生の海に松魚一本　太
此神のあたりに花の七不思議　枝
月に戸さゝぬ春の夜がたり　太
朝鮮の矢疵玉疵かすり疵　枝
簑と笠とに癖はかゝさず　太
ナ
たつたいま拭ば汚るゝ上り端　仝
琴のゆるしの三日此かた　枝
眸は絶べし吉野を發べし　太
駕出もやらずまだ泣て居る　枝
分捕の物こと〳〵く書つらね　太
飯守山に朝餉ならべる　枝
早苗振も先千石の青嵐　太
いづこへ消て神の蛇　枝
覆面に備る供御の岩づたひ　太
朔日寒きしのゝめの秋　枝
枝折してまた片破の名月記　太
遣はぬ鍋へ這ふて蔦の家　枝
ナウ
せつかるゝ深草焼の下細工　枝
難波の狀を讀で間する　太

三人産腹も然ば嘘ならず　枝
捨扶持附る中荷一俵　仝
裏門の見越に花の殿つくり　太
けふこの頃の蝶やふるらん　仝

雪中巷興行
里神樂酒一樽のきはひかな　蓼太
蕪引仕舞ふ權太五郎八　雪守
さゞれ河大宮人を屓越して　仝
打かさねたる明荷跡つけ　太
軒はまだ雫ながらに雨の月　仝
秋の螢の空にたえ〴〵　守
ウ　鈹額のわさゝ吹るゝ後手に　守
説法過の寺の寂莫　太
鷺群て山はさながら雪の松　守
八景たくむ集のをもむき　太
ある時は緞子に延すつかれ足　守
今めでたう室に入船　太
珠櫛に祭の夕日さしこぼれ　守
歌見えかねて扇ゆかしき　太
しとやかに灯のとぼりたる釣(鈎)簾ひとへ　守
うぐひす暮て空に月星　太
花いまだ唉もはじめず冴かへり　守
涅槃まいりの留守も手枕　太
ナ　きれ〴〵にうたふて古き小六節　仝
たんだくだりの比丘尼ころばし　守
野ざらしに霜美う置わたし　太
胡簶仕懸に旭いたゞく　守
ものあらき甲斐侍の裄みじか　太
土器震ふ娵のまる綿　守
ふた間三間伽羅打薫る風斗　太
開帳佛に幸の本陣　守
篭に竈乗せて男ども　太
野は飛〴〵に秋の七艸　守
夕月に子を呼ぶ牛のふり返り　太

やゝさむ風に市の道づれ　守
ナウ 我等もと灸点貰ふふる硯　守
たま〱庵の戸が明て居る　太
横に降叉竪にふる雨そゝぎ　守
提て鎗うつ陸持の，　仝
御跡から洩じと花に走まいり　太
いとゆふたれて暮のとろ凪　仝

左古庵興行

裏見ればうらふりかへる櫻かな　蓼太
春は簾の屆くくま〱　物我
蟹目たつ木地の爐縁に釜かけて　吐論
町はづらりとみな格子也　秋杵
まだみたりよたり踊も薄月夜　彩之
くれなゐにこそ扇わすれね　杜芳
ウ 野ゝ宮の別に竹も立つくし　貞重
まばゆき迄に閑る朝影　李溪
物懸てきのふの儘の繪具皿　東水
互にすねて夫婦さびしき　海曉
ひたすらに祈る片瀬の片時雨　素雪
汁は狸のつまみ蒟蒻　五明
かつら男の立派な織部殿なれば　我
一夜とまりの星のかし襟　太
ひやゝかに石六ッ七つ土藏迄　之
肥立に桑の枝もたのまず　論
苗代もこゝろの水の花日和　杵
追鳥狩の配符飛らん　重
ナ 挑灯もおぼろ〱と消へかゝり　芳
長引導にみなそゞろ立　水
御祕藏の御腹もいはた帶らしい　溪
釣簾もる風の物見折ふし　雪
雨しばし蓮の白玉打こぼし　曉
鍋にたちまち唯今の鯉　我
ゆり起す駢四五人旅しらず　明
桐大藏の名も七口ツゝ　之

案の如焦して戻す貸釜　太
　喧嘩の沙汰も泣寐入也　論
葭芦にそよいで殘る月ひとり　重
　笠とりあへず襟に烋しる　芳
ナウ
暖簾から宿借るほどはことし米　水
　機音ふかき福島の丁　溪
牽連て野髪のまゝの鹿毛糟毛　雪
　夏遠からぬ小蝿むらがる　曉
木枕に手枕交て花の友　之
　世は淺〳〵と酢獨活防風　明

雪中庵興行

鳥と見え帆と見え果は烋の暮　蓼太
　螺の遠音に澄のぼる月　一鳳
荻萩の三郎次郎袖揃て　柳苔
　廣蓋かゝふけふの繪合　北司
たふ〳〵と午時になりぬる水土圭　鳳
　時雨をしぼる蟬の初聲　太
ウ
畑中にきられぬ榎注連懸て　司
　先駕立る下駄の才覺　苔
鄭かとおもひ違の九十九髪　太
　戀にも夜の杜一本　鳳
きり〳〵す難面霜と啼やらん　苔
　瓦つくりの篭に世わたる　司
初日の膳にいはふて島干物　鳳
　伊香保の温泉になるゝ三廻り　太
半弓の座にまじはる家ゆかし　司
　臼結つけて子を遣せをく　苔
月花も余所に蠶の眞盛　太
　臺にたちたる蕨いつしか　鳳
ナ
行燈もおぼろ〳〵の旅の宿　苔
　そつと覗けば爺はものよし　司
耳につくしはがれ聲の普門品　鳳
　裏は殊更川添ひの町　太
錠おろす簗の鯉の夢一夜　司

御遊の芸荷翌ときだまる　苔
古されし髪も梳ずうちかぶり　太
人にしのぶの願書ほつ〳〵　凰
今川の織田のと諸國立わかれ　苔
あら木造にわたくしの關　司
猿啼てそゞろさびしき槇の月　凰
吹れて醒る非時の中汲　太
ナウ
立されば跡なき霧の巷いさかひ　司
市の七日に手搭七度　苔
馬繫ぐ捨石ひとつ軒の下　太
先繰遣ふ味噌の搗入　凰
參勤の是から續く花靱　苔
山悠然と霞こめたり　執筆

芭蕉庵興行

筋違に吹あげらるゝ雲雀哉　蓼太
春まだ寒き麥のむら生　周夫
鞦韆の戯れ習ふ綱かけて　時中
よぼろながらも御側なれたり　むつみ
片われてさびしき月の宵すがら　丘車
すかれてたゝむ躍装束　竹城
ウ
烁風に吹ちる文を追廻し　吏仙
都便の夢にそのまゝ　意長
ともしたら背に鳴さうな鳥兜　夫
月に六日を神の掃除日　太
供奉で見た時とは違ふ男ぶり　車
時雨を笑ふ窓のつれ〳〵　中
盃の影に團居て丸火鉢　城
恭にも附はる獨鈷鎌首　み
慕かゝる舟路の大堰桂川　仙
紫おしむ虹のきえ〳〵　夫
葬禮を花の臺と譽そやし　み
けふは夏かと下着輕める　長
ナ
もみ手して木地の燻緣にかしこまり　車
御金つまりに泪こぼるゝ　城

琴の音のあたら松風伐たをし　仙
寺に勝たる鞠場なるべし　中
唇のたちまちうごく油烟齋　夫
借てみたりにたらぬ相傘　仙
螢では無理な見合の時はづれ　城
床机ならべて頓の八ッ橋　中
君まさで檜皮透垣荒にけり　太
泥濡ながら土師のひかへる　み
月影も蝕の空とて僞らず　長
焚火にふるふ山室の坏　夫
ナウ
霧遠き江戸なつかしう語合　車
知る人多き俳諧の集　城
帋魚飛蟻犄なぐる日の古葛籠　み
鶏おどろかぬ畫の內藏寮　長
誰やらの植てをかれし花一木　仙
殘ンの注連のうちそよぐ春　夫

世中菴興行

藤髯とうつむく春の別かな　蓼太
夕暮かすむ松の嶋山　茶鶴
雲雀笛しるよしめぐる駒留て　素琴
麦そよと風わたる也　布泉
新酒に影澄月の十三夜　鶴
おとこをみなの花も荒つゝ　太
ウ
香に匂ふ御筆すさみの捨扇　泉
おほとなぶらのくらききぬ〴〵　琴
夏蔭の思はぬ臺に飛上り　太
施主と名のみの卒都婆一本　鶴
茶釜にもならぬ兜の鉢ばかり　琴
世間ひつそと雪の九ッ　泉
煮加減もいつかおぼゆる膃肭臍　鶴
立居も啞の庭子老にき　太
宿かりてそこらあたりを三歸戒　泉
後風土記かたる春雨の月　琴
花の江戸花の都にことならず　太

青精飯に暖簾若やぐ　鶴
ナ つと入て晦日〳〵の竈ばらひ　琴
あれも余らずあばたなれども　泉
呉れて立温泉の移香の染浴衣　鶴
翌來る烁の桐に驚く　太
とく〳〵と須磨の皇居の精鉋　泉
沸うちかみて泣ぬ顔つき　琴
受狀を聞ばはるかに十五年　太
冬の牡丹と火鉢かゞやく　鶴
四ッ二つ鼓のしまり爪はぢき　琴
かゝる日和を亡魂もさぞ　泉
面白の月こそ出れ宇治の里　鶴
客の噓に給すゝめる　太
ナウ 三弦の砧も倦ぬ相手柄　泉
あの坂越て町へ折〳〵　琴
そのかみの殘るものには石こつば　太
御詫宜にも宮の建立　鶴
謹であなたに花の使者ひとり　泉
鶯青やかに梅も椿も　琴

雪映舍興行

末枯や國によこたふ最上川　蓼太
鏡にかゝる半天の月　有止
露霜にくるしき酒を吐捨て　芦洲
垣をまはれば背戸の篁　芳里
五羽十羽端山の尾長群歩行　等々
糸ぐちとけて時雨ほろ〳〵　扇笠
ウ 挽立の薄茶に頭痛紛かし　湖遊
後世にもよらぬ書寫のなぐさみ　五柳
墨染にかへて久離の壁訴訟　春光
瓜ころ〳〵とほどく風呂敷　如行
闘の戸に掟の外の物とがめ　止
待せた駕に百呉れてやる　洲
手枕と思ひあふては鶏が啼　里
又こり須磨の波の夜嵐　太

詫宜にたゞ形式の人ばしら　笠
御座さだめをく褥脇息　笑
花めぐる月影が谷藤が谷　柳
爰も五山の都うぐひす　遊
ナ
とし玉に俎板提て大工也　行
跳踆笑ふて袴とらする　光
交代の遠見の櫓掃をろし　洲
人にも怖ず白きくちなは　止
索麪も氷る斗の苔清水　里
ひそかに祝ふ金の初蕚　笠
着通して黒羽二重の黒からず　等
病中ながら清書見てやる　柳
高尾から求肥一重こゝろいれ　太
揚り坐敷の水ももらさず　遊
菊の香に月も嗅るゝ宵のほど　柳
はる〳〵来ぬる唐土の烋　行
ナウ
駒牽る祠堂の賽ふりかへり　光
ひとり起れば又泣るなり　洲

權藏も疊のうへの履習ひ　止
ふれ〳〵小雪灯のとぼる迄　里
涅槃會の頃も花まつ姿ぞや　笠
木の芽揃ふてよしや世中　等

雪且舍興行

此うへはあらしの苗のみどりかな　蓼太
虹引わたす梅雨の夕晴　司丸
獨足に蹼の新沓試て　心武
茶漬支度の昆爐急火燒　似鏡
四ッ限に掃出す月の夜講釋　戲遊
下駄から〳〵と通るやゝ寒　太
ウ
江戸橋を紀の川波の蜜柑舟　丸
柄抄でたゝく硯みつゝつ　遊
人しれず先髻を切拂ひ　鏡
酒過したる妹が寐姿　武
いなゝきにひまうちしらむ輕井澤　太

卯月ばかりの霙しみ〳〵　鏡
廻状の点も飛ゝ遠歩行　遊
造營濟て法樂の的　丸
煮染もる檜の廣葉を洗あげ　鏡
廿あまりの花の若もの　武
あれ〳〵と月の雪消の助船　太
やまふきをろす風の衣更着　遊
ナ
門院の摘もならはぬ切樒　武
かはる〳〵に藥すゝめる　太
蹴に蚊の燒かとすればひと二ッ　丸
國に久しき十符の菅守　鏡
覺書我のみ讀る繪を入て　武
御次で笑ふけふの對決　丸
素湯たぎる圍爐裏の鑵子打圍る　遊
枕かへしも三夜さつゞけば　武
異妻を妻にもらさぬ傘さして　太
はなして通る辻占の神　遊
灯とほして黄昏月の八軒屋　鏡
笹もそよがず器き七夕　丸
ナウ
露打て撰い虫籠さま〳〵に　遊
こは何してと典侍のまたるゝ　鏡
八講の鐘も聞えて朝まだき　武
さわたる鳥老や鳴らん　太
花に髭旅粧ひの伽羅留て　丸
身やげにことし去年を古ど　執筆

奥宮野連中

栗うつや一睡の子は蘢に有　蓼太
自在に鍋のにえる秋風　不賈
月高し鵜鳥いそぐ山の端に　澄江
帶のうへからゝる打違　麟趾
算盤をかうかと竪に取直し　曉鳥
舟もかよはずこほる川〳〵　江
ウ
百里とはまた國ぶりのむかし道　賈
御夕餉の此魚は何　太

惜るゝ本艸知のさし出口　趾
見へつかくれつ深野案内　烏
なつかしう吊ふ氏の五十年　江
こは白菊を誰が窑灶　賣
辛じて室に暴風のかゝり船　太
いろめく雲は月や出らん　趾
舞立に千秋樂を諷ふなり　烏
疊こがしてせんかたもなし　江
釣鐘はまだ繪圖板の花の寺　賣
瀧のぬるみを茶にも飯にも　烏
ナ
鰭祭獺の童も折〱は　趾
おれるばかりに寐たふりの肘　太
拾ふかと拾て心の鍵ひとつ　江
庭に忍ぶの山の下みち　寶
行かよふ四町の重の雪見廻　太
人笑せて老のわさ〱　趾
什物の網とてゝれは悴ども　烏
浮世は藏も賴むべからず　江
月ひとり只高館の躰たらく　寶
橙三弦に更る秋の夜　太
置露の下駄履かはる散分れ　趾
良は新酒のすはすつはぬき　烏
ナウ
茶宇平も半季勤の古袴　江
稻荷に隣る鄽も片そぎ　賣
掃なぐる夕汐まちの塵芥　太
奴〱と可愛がらるゝ　趾
ことづかる馬のかざしの花一枝　烏
宮古つゞきの菫虎杖　江

朱弦亭興行

只二本髭さへさびしきり〲す　蓼太
榾ちよろ〱と燃る蔦の葉　良和
歸る帆の千舟百船月懸て　鹿文
八專明の廣き世の中　キ國
ひかいすな肩に枴を置ならひ　和

梁調ふ霜のつけ芝　太
ウ
この冬は替地に寒き川衛　國
中風の爺をふたりして釣　文
摘綿の弟子あつかひも女業　太
べたと浮名を壁に樂書　和
駒込の不二の往來の夜もすがら　文
膝行車の他力まちては　國
照降を算木もいらず請こたへ　和
寺の馳走は鳩の海づら　太
遊ぶには鳥に成たい時もあり　國
只一日を花の藪入　文
曉削る月の朧の鏡餅　太
夜は雪消の雨と聞るゝ　和
ナ
捕れの心はとくに袈裟ごろも　文
十ゥ若くばと刀白の戯るゝ　國
腰かけて有松染の品さだめ　和
水の所望の盃にたふ〳〵　太
馳参る供御の鰹の立烏帽子　國
星うちしらむ松の東雲　文
捨石も織部好ミと聞からに　太
はかま序に申入たり　和
ふところのしとゞ重たき金財布　文
秋もみどりの疊講中　國
蕎麥一斗打草臥し暮の月　和
大坂風呂を出たる漸寒　太
ナウ
しはぶきに獺落る芦の中　國
小家も建ずまた傍示杭　文
ちと足らぬ大宮司殿にうしろ指　太
酒べん〳〵と八聲告たり　和
しめやかに三月盡の花の雨　文
山吹わけて瀧の白糸　執筆

芭蕉菴興行

新藁の簑の青みや初時雨　蓼太
大根洗ふ堰の岩橋　歩丈

白壁の長者一軒岡の邊に　仝
序の舞らしう桶か鼓歟　太
世中の月見を笑ふふたりして　仝
脊ふり殘るきのこ落鮎　丈
ウ
溫泉煙に霧立つゞく町はづれ　丈
坐頭の感に驚かれぬる　太
とぼし火に阿彌陀の光打まとひ　丈
からくれなゐの襟にいたつき　太
髮いはでむかへば雪に耻しき　丈
巴と召て鴨の賭鳥　太
明しらむ波の打出の濱づたひ　丈
うれたつ餅も杵のならはせ　太
折釘にかけて輪袈裟のわすれもの　丈
抑碁二番にちとせかれけん　太
弓手馬手みな月の友花の友　丈
薪に照らす能の夕暮　太
ナ
四ッ五つ凧に鳥のさえかへり　仝
捨にひま行駒の尸　丈

御供して明惠の泪感じ入　太
太夫が給仕香に匂ふ也　丈
鍵かけて水ももらさぬ四疊半　太
散ものさがす椎の風　丈
行合て殺雄の火縄驚かれ　太
佐介を戻る苞の葛蘿　丈
門井戸の泉涼しう波こぼし　太
晦日あらたに白き幣　丈
葉月から影長月も矢のごとく　太
葛蔦踏て果ぬ熊野路　仝
ナウ
赤味噌で是をと思ふ餘汁　丈
親子に挾(夾)き請狀の宿　太
まいらせん柄漏のいたす傘ながら　丈
暮ては殊に橋ふたつ三ツ　太
地車にこぼるゝばかり花一木　丈
かはるぐ\に霞波らん　執筆

名月庵興行

魚見れば花よ紅葉よ浦の秌　蓼太
　鐘うたぬく一樽の月　深松
夜もすがら韈の露やぬぐふらん　吐月
　草鞋ながらのづぶ寐して居　太
盒飛野越の小春あたゝかに　松
　たま〳〵二里の鐘聞ゆ也　月

ウ

ひとりづゝ筆とる關のおしまづき　太
　坊官添て數の長櫃　松
青〳〵と瓜を土用の忘艸　月
　瀧見の枕肘ををの〳〵　太
かくれ家に居つかぬ身請連歩行　松
　罔五郎ほれた髷形もなし　月
とぼし火と一度にさえて暮の月　太
　玄猪に榮る下馬のとゝ立　松
手を打ていろはの昔ものがたり　月
　雨のやどりの脩に鳥さし　太
動して櫻おしまず散したり　松
　ぬるめる水に鞠は流るゝ　太

ナ

遠かすむ奥見て來よと仰ごと　月
　足のとゞかぬ鐙ちゞめて　松
美しう振袖もるゝ雪の襲　太
　泪ながらに質や置らん　松
時ならぬ鯨はとても沖の雲　太
　任も牛の歸洛もてなす　松
萵葉の銘を是非にと硯筥　太
　夕凉かけて口ゝに奈良坂　松
子供迯狂女の念佛聞覺へ　太
　鄙は挽茶の臼に新籟　松
ひまもりて月の光も冬近み　太
　秋霧くらき御燈見廻る　仝

ナウ

をだまきの裏からさがる葛袴　松
　あはたゞしくもさし身只今　太
旅籠にはてぬ送の別ぎは　松
　人の頭巾をかぶらんとする　太
夢ひとつゆり起されて花に蝶　松

春あたゝかにあざらしの皮　　太

吐月がいたつきおもりて、吟半にしてやみぬるを、死後の手向艸にもと跡を繼て一卷なりぬ。

爰に玉あり。形七曲にして內又融通たり。ひと筋の糸をもて、屈曲を貫くこと難し。七曲は何ぞ。いはゆる貞德風より炭俵の風調に至て、其節〱を滞りよく糸を通して、連綿たるもの、蟻の工を借らず。なをその糸の餘れる百まきに過て集なれり。全部のあらましは同門の誰かれ、いとぐちを解ば、只其終りに糸尻をむすんで。しかいふ而已。

玄峰　魚文

俳諧てふものゝ、いはとがしはひらけそめて、硯のうみにはつ日さす朝より、ならの廣葉ちかうせずかき集め、あから柏のあさからず、一むらしぐれ代ゝに染なし、をりふしの變化に效ひたることぐさのみつのかしは、よつい つゝ六七まきと數つもりつるを、さくら木にのぼせて、身のなき跡のかたみにも遺さまほしきおもむきを、玉かしはのたま〱この時に過て、それが後に筆をとることかくのごとし。

嵐亭　晴助

俳諧書肆　本石町二丁目　西村源六

氷餅集

二柳

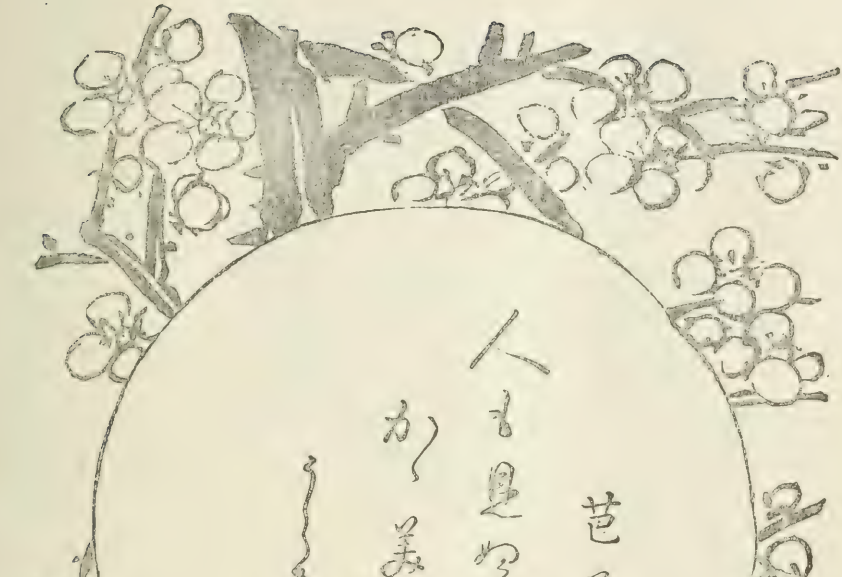
(氷餅集)

いちはやきみやびを好めるは、少年場の尋常なり。祭り過ての葵かつら、六日のあやめ十日の菊、などゆかしさ無らめや。青葉につゝむ夏木だち、遲櫻のこりし深山のすがたにくからず。なにがし大納言の御遊に遲參して、三のふねをゐらびあへぬぞ、名譽を千歲につとふときく。二柳庵の主、韶陽の引付を閲して、病牀を忍び是を撰す。驛柳驕鶯の艶態とはいへども、九春の日數たけ、人のあやしみものうしとせるを解嘲して一語を加ふ。詞海に船を艤ひ、文峯に蟫を按ずるは、韻人墨士の風流にして、江紀二賢のむかしをおもふ。

安永三のとし皐月のなかば

景泉の隱士　與ゝ軒題

【廣川化壬】　【與ゝ軒】


芭蕉翁
人も見ぬ春や
かゞ美の
うらの梅

甲午聖節

我生甞窶なれども米くるゝ友あり。
我身多病なれども屠蘇くるゝ友あり。
我性頑骨なれども智を假す友あり。
我此三つのものゝたすけを得て、
やゝ半世のよはひは過ぬ。

いねづまむ又邯鄲のひと餅　二柳菴

歳旦三ツ物

其一

春や華まづ曙の始見舞　麁友
風大ぶくの釜に入来ゝる　呼我
鶯に障子とざゝぬ世となりて　入江

其二

おもかげのかはらぬ花や福壽草　入江
美人ほのかに蓬莱の陰　麁友
なまめける霞酌んと推かけて　呼我

其三

あちらむく人は通らじ御代の春　呼我
松こそたてれ文六が門　入江
鉢たゝき春はひそかに羽織着て　麁友

癸巳年抄

けふ惜むとしも待にし春の果　呼我
春をうりはなを買ふ夜や年の市　入江
梅生て炭して春を待夜かな　麁友

巣つくらふ鳥の書は物わすれつゝ

出買ふて隠れんとおもふ師走哉　二柳菴

立春在臘

春たちてまだ拾がたき暦かな　、

歳旦

はるたつやもろ〳〵の花さくや姫　見道

、

初空やひとつ飛だる鳥は何　有椎翁 老山

年尾

長明が庵うらやまし柴拂　老山

賑はしや年の梢の柿密(蜜)柑　見道

歳旦

金城のほとりにて

城高し百万石のはつ日かげ　芙蓉花

年のうちに春たつ日、庭に初音なきゝて

うぐひすに障子明けり冬ごもり　〃

歳暮

塩鯛の天窓ならべてとし暮ぬ　〃

社中春興

鶯にほろりと落る枯葉かな　玉東

かづらきの外に山なし朝がすみ　湖東 琶州

うぐひすの朝日がくれに初音哉　李郷

貧學のともし火きえつ窓の梅　魚波

若鮎や花に追るゝ吉野川　金馬

鶯の聲まだ氷るはる邊かな　龜友

おしわけて見れば身木ある柳哉　入江

遠山の重りそめし春日かな　嘯我

七草やひろひあつめし春の色　魯文

下枝はへだての垣やむめの花　五昂

梅が香のこえて春なり堀江川　艮山

馬繋ぐきのふの杭や市の梅　竹雨

鶯や竹をはつ音のちから草　朱鳳

うぐひすに飛脚も覗く木の間哉　芦卿

青柳や幾入そめて雨のいろ　女 小五勢

菜の花にかぜ一すじの匂ひ哉　芥舟

白魚や月のしたゝるあみのつゆ　琶州

足おとに蝶の出違ふ庵かな　玉東

寐た牛のあとにねて居る菫哉　女 錦芝

鶯のたつ跡寒き梢かな　秋屋

まだ風の添ふ日も有て春の雨　魯文

うぐひすはとしも訪ぬ崩れ窓　生佛
三絃に散もさくらのゆふべ哉　老山
あとへ飛こゝろはもたぬかわづかな　見道
火おこさぬ炬燵となりぬむめの花　女 哥僕
きのふより小川ながるゝ野梅哉　呼我
岩はしのつぎめ〳〵や春の草　魚波
うぐひすやつゝみ錢おく渡し舟　琶州
連翹やいつ尋ても留主の庵　李鄉
鶯はきかねどはるの日影哉　入江
白壁にかゝるを蝶の行衛哉　五帛
かげろふや馬も空見る長堤　龜友
雪消て後の月夜や梅花　生佈
朧月むかしの京の水のおと　老山
それ〳〵におのが世を經る寄居虫哉　芥舟
梅さくや日に〳〵うとき鐘の聲　朱雁
ちりがたは僧も見に來る野梅哉　魯文
ふところの寒うなるまで若菜哉　入江
鷄の又おりにけりはるのあめ　李卿

うぐひすや梅を籠桶のおのがまゝ　魚波
拾ふては捨もやられぬ椿かな　呼我
狂へども其道もどる柳かな　五帛
三日月に猶おどろかぬ雲雀哉　龜友
霞けり河原の院の海のあと　芥舟
冬木せぬ雫は闇し春の雨　竹雨
欸冬や瀧に奥ある水けぶり　秋屋
船たてる浦の木間や藤の花　、
行春や日ゝに色なす吉野川　学蘿
やまぶきや岩根に咽ぶ水の音　萬屛
櫻ほのみゆる山の間〳〵哉　楮冠
逃水の足まだ遲し朧月　見道
雨晴てまづ一ッ飛胡蝶かな　生佛

、　絲岐菴社中

梅に解く共したひもの初音哉　有我
梅さくや名は覺ざる人に逢ひ　耳得
うぐひすやこゝろも春に成にけり　、
鳥よりさきへ夜明ぬ梅の花　有掌

鶯のはつ音にきしむ障子哉　丶

春雨や節用の書も讀盡し　丶

丶

雨の庵拂子を蝶のやどり哉　絲岐菴 見道

丶

有椎菴社中

降る中にかたち定る柳かな　芦友

佳人の庵へ遠きかすみかな　松花

ふところへ隠るゝ風の櫻かな　桂水

鶯やこの庵室も花のもと　南枝

曙になりたきほどの花見哉　好古

犬起す籬に霜の名殘かな　馬眠

丶

牛や喰む生駒が谷の蕗の臺　老山

春興三吟

江は春のみどりの中をおぼろ舟　二柳菴

柳ある里まづ望む野づら哉　丶

山陰や小齒朶に交る蕗の臺　丶

丶

蘆陰舍社中

陽炎や僧の指す遠のさと　龜友

梅の花さらにたくまぬ匂ひかな　青彦

隠るゝと我はおもふや雉子の聲　芙蓉花

丶

山の端に月は殘て霞かな　芦陰舍 大魯

丶

眞髪個櫛田にそよぐ柳哉　匏瓜

歳暮

牛部屋も光柏や大三十日　丶

春興

梅が香や野川の水に二三輪　荷葎

入相に何の苦もなし梅の花　桓水

隣から吹れて遊ぶ柳かな　松舟

余の事に誘はれし日をはつ櫻　玉東

丶

うれしさを老もつまゝし眞菜若菜　紫江坊 栢舟

丶

七草の垣根に揃ふ菘かな　雪江

欵冬や宇治の川瀬の榾模様　楚流

歳暮

行としやこちで聞たる松の風　三甫

春興

酢き味はほのかにもなし梅花　無畏坊 十叟

、

長閑さや水の浅瀬に日の移り　樵風

聲ほしきさまや胡蝶の狂ひやう　雄山

、

樫にちかき二木や鶏あはせ　呼見

蝶〳〵や日ざまし草は有ながら　石漱

白魚におもへば辛き潮かな　羅川

陽炎や底へ日の透く水の上　五晴

白梅や覗く雪消の水の隈　露桂

みどり子の窓へ手を出す柳哉　、

笈の灯に夜は残けり雛子の聲　江左

舞臺の晩鐘といふ題を探りて

日は華に入てあやなし鳥兜　、

枯葛に隠かねたり猫の妻　舊国

花咲て人にはうとき大根哉　、

憂世を過る業の哀は彼もおなじ

猿曳の肩をまくらやおぼろ月　有鳳

年内立春

立といふ春紛るゝやとしの市　梅尼

歳暮

鶴舞ふや空にしられぬ大三十日　水棱

春興

一畝もつ尼が畑やわか菜つみ　蘇生菴 麦鱗

歳旦

梅は今笑て初日のひかりかな　雫篁

春興

夕風やむめふきよする琴のうへ　東鳳

、

いとゆふをほどく風情や嫁菜摘　杉丸

歳暮



蝶の夜やつれなき人を塁守　如菜

旅中睑

正月にはや皺のよる氷かな　一吹菴 万翁

皇都

歳旦

初ものはみな来し春の土産哉　含山公

歳晩

花なくばあらまじ春のまち力　同

春興　紫狐菴社中

立よればやはり流れり春の水　百池

日すがらや霞の中に斧のおと　我則

鳳巾見するや虹の絶間より　月溪

、

梅が香やかくれ家捜す西の京　几董

、

つゝじ野やあらぬ所に麥畑　紫狐菴 蕪村

、

欵冬や己が花とてもちこたへ　尼 諸九

、

雪解や眞直に着し渡し舟　二柳菴社中 盧鳳

賀茂川の水に嘘なしおぼろ月　女 玉芝

一粒もすたらぬものや春の雨　二柳菴

、

桃咲や引残したる種蘿蔔　湖南 五州

川岸にとつと横たふ柳哉　、松笙

分入や鼻のさきなる山ざくら　長濱 桃舍

歳旦

我國もこれあらたなり梅の春　南都古梅園 鷺溪

歳暮

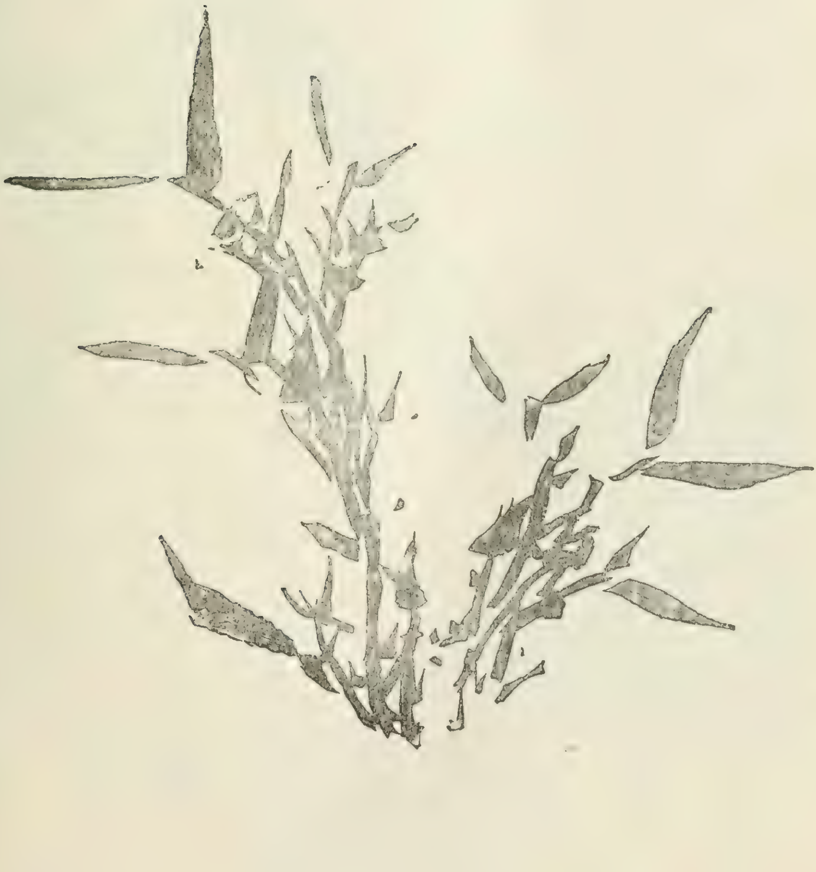
五湖の舟としの風波はなかりけり　、

春興

むづかしき枝とつるゝや梅花　伊勢 二日坊

彼岸から七日の後をはるの山　尾州ナルミ 鉄水

三の間の水さへ重し朧月　蝶羅



人間一生は旅客のごとし。

又もとの大路へ出たり松の春　白尼

梅小路よりは南家ざくら　（堺）呉逸

東都

春興

ひとへづゝ淡路へだつる霞かな　天府子

淡雪や月にも解る夜もすがら　恣心子

とまられて道おくれけり笠の蝶　米什

妻戸からひそかに来たり朧月　山幸

春風や一度に超（迎う）る雪の竹　（雪中庵）蓼太

角落て鹿しづかなる尾上哉　（上州藤岡）迂生

山陰や鶯来なく真木のうへ　（仝高崎）雨什

にはとりの臼にねぶるや春の雨　（仝渋川）柳几

落椿ながら繋ぐは誰が子ぞ　（津軽）里桂

阿州

聖朔

書の中へのつと薫るや初日影　圃南

年尾　前書略之

足る事を知らで鬧し年の市

春興

春の日のみじかき人や花の兄　泉奎

歳旦

万水の一路に流す水若し　魯風

年杪

としの瀬やからくり的の人心

春興

鶯に氷は水と根なし草　桃下

魁る梅は難波の模様かな　得我

吹風の底に動や垂柳　（信）支蛩

鶯やひとり言いふかた山家　、
いとまなき人もかざすや花の枝　、子善
花咲て空にしられぬ曇かな　、

發句四季

美しい形で蛇喰ふきゞす哉　買山

採蓮曲

手折る手の蓮より白し池の面　、
露なめてけふさを鹿の初音哉　、

雪中行舟

興盡て猪牙で歸るや雪の旦　、

歳旦

元日や誰あしはらの人ごゝろ　全林崎 冠李
おもて白き岩戸も斯や日の始　、千秋

老父に南山の壽を献す。

八十の親をかざりや家のはる　、李四
初空やまづうち向ふ淡路島　、粟嶼
書初や墨から匂ふ八重ざくら　、暮十
渾沌のむかしを今朝や初霞　、五芝

天地のまとみせけり福壽草　、魯泗

歳晩

大名も馬駕籠はなし年の坂　冠李
分別の外か師走のふところ手　千秋
鶺鴒の尾もいとけなき師走哉　粟嶼
飛つれて鳥もとしの餘波哉　李四
世の塵はかゝらぬ色や除夜の梅　魯泗
栗柿もむかししのぶや年の市　五芝
行としや汲てはこぼす水車　暮十

元旦

初そらや松ひとしほの男ぶり　敦賀邑 太山

暦終

梅椿師走の色はなかりけり　、

春興

鶏のかたなも入らで干鱈かな　德嶋府 白之
梅咲やふけば日のさす藪の奥　二柳菴

讃州　高松連中

春興

梅はともこたへず鯔かゝげけり　風斜

撃べしの羯鼓をまくら梅華　五蹄

歳旦

いろかへぬ竹の林や千代の春　三千尺

春興

風捨てとなりをもどる柳かな　舞石

淡雪や尻のすはらぬ松の上　蚪斗

酒賣の嵯峨をもどるや暮の春　北柳

梅が香や行過る人とまる人　女　家童

おもしろき春には成ぬ梅若菜　徐夕

都から哥聞に出る蛙かな　湖柳

山はまだ春の色なし若菜畑　有柳

年甫　香西連中

つくろはぬ顔は久しき初日哉　芝仙

歳暮

覗くものみな寶なり年の垣　、

春興

やねふきの挟んで捨る柳かな　、

雪消へて山を枝折や歸る雁　勝山

しり人の門をたづぬる燕かな　斗南

峯の寺もどる支度や夕雲雀　串山

歳旦

あたひなき寶は鏡かゞみ餅　小町庵　東阿

歳暮

左の方むめの勝なり年の内　、

春興

梅さくや札に窓の北明り　由佐　杜州

、

かけなをす橋の工夫や朧月　蓬右舎　竹路

、

鶯や聲はしたなき女の童　二柳菴

、

撫られて櫛へ手の行柳かな　三殿連中　好道

梅が香に蒸れて庭の雪消哉　梅烏
けふもまた畑はふさがれぬ春の雨　芦舟
梅ありて春なり谷の家一つ　艸湖
水茶屋に虎の客や初ざくら　（與出山）桐谷

、　三本松連中

宵より娃(姪)にもよりて野梅哉　柳江
山里は生れのまゝや雉子の聲　芦經
若草や吸売もゆる宇津の山　紫芝
吹あけた裾で凪おふ柳かな　藍水

、

筏さす聲はながれて霞哉　（垂水）峰艸
ぬるみあふ入江の波や春の色　（高藤）白柳

、　金毘羅連中

その原も今若草やおぼろ月　丕周
灯火は舟の中なりおぼろ月　六亭
あたらしい花によごれや朧月　（女）把菊
おぼろ夜や庭に更行桂川　日左
塩竈を空に移すや朧月　里雪
寐轉んで都の富士やおぼろ月　壁人

、　丸亀連中

ゆふぐれの梢にかゝる柳かな　麥冬
科はまだ人に有けり初ざくら　和翠
梟の聲ちからなし朧月　玉浦
又爰に家の出來たり山ざくら　長松
日に見えて日のながふなる柳哉　半醉
往還を横に別るゝ蛙かな　玉童
夕雲や鞘を抱て藤のはな　廬山
春風に袖はかざせど雉子の聲　魯文
唯居れば影さへながき柳かな　（幼女）たい
とく／＼と玉水くれて蛙哉　三富
この頃は木曾路もはるや百千鳥　梅曉
紅梅に思染きはまる朝日哉　三江
何の花咲てや籔に蛇の聲　麥川
毛氈の肌おぼえけり春の草　丹桐
春も今山もとくらき雪消哉　一呂
いとゆふの日先に狂ふ朝日哉　秋山

梅が香を没や野中の枯槹　冬畝
あれ籔に魂いれて椿かな　保丈
雉子の聲名古曽の瀧のひゞきけり　平疇
青柳や野川の水の高う行　馬周

、

我ものに風をして居る柳かな　ツノモリ江艸
己が名をなのり顔なり春の草　中村觀宇
梅が香や入江の鶴も朝日むき　タカセ一峯

廻文

苦さ楽さ世はとことはよ桜さく　二柳菴

但州

春興　生野連中

かぎりなき野を惜まるゝ春過哉　素山
春の蚊の行燈にとまる雨夜哉　倚仙
活ながら鮒賣里やはるの雨　竹雨
日のさして瀬ゝにうつろふ小鮎哉　寐父
釣干菜おろせばむめの莟かな　件山

とさらに曉眠し春のあめ　其風
春たつや須磨の女のみだれ髮　京秀
白梅や晝も野中の風寒し　幽花

浪華の公務果て、我古鄕の道にさしかゝれば

梅咲てちら〳〵雪の山路かな　五丸

、

鶯や尾を動かして身を潜む　越中直生

春興

紅梅の香に分別はなかりけり　岡山松後
万歳の歯に洩る聲ぞめでたけれ　、松宇

、

駒鳥や水いれてやる小がわらけ　廣嶋風律
梅さくや關札みれば三四月　、青雨
梂ほどはまだ住馴ず今朝の春　、凡十

、

行春や吉野を出る鳥の聲　柞原南里
花ざかり身にこたへたる嵐かな　、一幹

開帳の札にたはるゝ胡蝶かな　長崎　紫郷
よし春の寒さに梅の白き程　枕山

越前

敦賀連中

難波の春に御移のよし致安堵ゆ

あしからぬ便りや浦も三つの朝　琴路

春興

若鳥や鳰をこゝろのはたち山　雨柳
ものもふも幾十かへりや門の松　其雪
かけ鯛やこれも花まつ二葉也　琴河
歯固やむかしながらの花がつを　楚因
大ぶくはたてゝ波なし四つの海　風子
塵はみな掃すましてやかざり藁　其江
書初やまだ薄墨の空のいろ　文枝
年玉や橘の香のたもとより　曳尾
酒盛のひらき初や屠蘇の朝　桂葉

加州

聖節

梅の華天晴春をもてはやす　嵐鶴子

仝

今朝よりは花鳥のいろ香あらそはむ　梧閣子

春興

朧夜をおもひくらべん鶏のなく　麥水
春の日や梢とおもふ雪の山　尼　素園
心こめて巣作る鳥や溪の奥　半化坊

一順

とし木樵音に眼覺す庵哉　生佛
いとなき琴に冬の梅が香　二柳
綾錦車に積める使者みえて　琶州
長雨晴しあとみどりなり　入江
魚わかつ聲か漁村の朝あらし　嗙我
頬杖つきつ竹のおばしま　魯文
隨分によめば古哥ある秋の月　見道



こゝろの友の露もたがはず　亀友
ひよろ〳〵と徑の菊の咲たふれ　李鄕
嗅にも飽し藥百日　五帛
錦木の里の掟のいまさらに　魚波
蚕屋にあまる夏の桑畑　秋屋
司得し人とみへたる供まはり　金馬
さてこそ宜禰が鼓しらぶる　芥舟
月落て明る間しばしくらき江に　玉東
（網カ）綱引はへてはつ鴨を待　負山
見わたせば長者の秋の渺々と　葛扉
主従七騎かくまわれける　竹雨
酌やいざ甕のそこの出るまで　楮冠
わづかにしらむ星のあけ方　朱雁
花の香に馬上の殘夢おどろかれ　老山
足洗はばややまぶきの水　芦鄕
春雨に志賀の築地の崩れ行　莩蘿
何かはしらず鍬にがつしり　執筆

下略

この撰なかばなる頃より、病にそみて起とあたはず。されば困倦じてかるも棄つべかりしを、近きあたりのひと〴〵は、見るにゆるし聞にもだしもしつらんに、遠境より贈れる句々もまた少からず。かつやごなきおほんかたより惠ませ給ふる芳唫もあなれば、今是をつと〳〵にことはりこたえんも、中〳〵にいたつがはしからんをと、やまふのおこたれるいとま〳〵に、かろうじて硯にむかへれば、頓て華とび蝶おどろきて、人は愁のなをも數そひぬ。さて卯の花の空の鳥もしば〳〵過行ほどに、さ月はことに雨がちにて、こゝろのはるゝくまさへもあらず。漸みな月の朔になむ。松のとの葉かきおさめぬ。さりや氷室もるてふ深山には、いまもなを梅さくらのさかりなるをと、それを心のかたふにして、すなはちこの小册子を氷室所と題す。さるは全篇の欠ヶ多からんも、罪をこと〴〵く病にゆづりて、聊諸君子の責をふさぐのみ。

安永甲午夏

二柳菴

通　說

元祿七年、芭蕉が歿してからの俳壇は、一部的に貞門の末流や檀林の殘黨が其根を張つてゐたには違ひないが、大體として蕉門の天下となつてをり、其門葉は門葉を生じて、ます／＼繁茂盛昌に赴きつゝあつたが、其は外面的の勢數に於ける殷賑であつて、芭蕉が俳諧藝術の精神といふものはいつしか見失はれ、其內面的の生命が大分に稀薄なものとなつてゐた。當時、芭蕉の遺弟として、俳壇的に名聲のあつた者は、其角、嵐雪、支考、やゝ後れて乙由の四人である。其角は芭蕉の生前と雖も必ずしも師風の模倣者ではなかつたが、師を喪うてからは嘗て「伊達」とも云はれた華薄な趣味に深入りしてゆき、其が都會人の好尙と通ずる所があつた爲に、江戸の俳壇ではもてはやされ、遂に江戸座といふ名稱をさへ生ずるに至つた。又、彼の多才と博識とは何でもかでも俳諧化しようとし、そこに衒ふ氣持もある所から、理智的な而も難解な、一人よがりな風に墮ちて行つてしまつた。嵐雪は彼の溫厚朴實な氣質から師風を守つて違へまいと考へてゐたが、保守は卽ち沈滯とならざるを得ない、又、彼の句風は元來、平易にして解しやすいものだつたが、寧ろ平俗にして一般むきと云つた方がいゝやうに移りゆき、それだけ門弟も多くあり、雪門としての門戶はかなり大きかつたものゝ、活氣は乏しいものであつた。支考は美濃派と稱して自黨の勢力を張ることに成功はしたが、其俳風は甚だ低級であつた。乙由は凉莵の後を承け、伊勢風と稱して地方の俳壇を卷席したけれども、其句調はきはめて卑俗であつた。其他に、芭蕉の遺弟としての去來、丈草は師風の頹廢を嘆きながらも、自ら陣頭に立つて刷新の大纛を揭ける程の意氣はなく、たゞ自らを淸くしてゐるに過ぎなかつた。寶永元年（芭蕉歿後十年）には、その去來と丈草と

が共に歿し、寶永四年には其角と嵐雪とが共に歿してしまひ、俳壇は其實質に於て甚だ索漠たるものとなつた。芭蕉十七回忌の營まれた翌年、正德元年には、支考が故らに跡を晦まして俳壇の形勢をうかゞふといふやうな一芝居を打ち、乙由は麥林の中に庵を構へて風雅を衒ひながら花柳の巷に通うて耽溺することを恥ぢず、其が俳諧者流として當然と考へられるやうな有樣ともなつた。嘗て芭蕉が自然の閑寂を心とし人情の眞實に淚をおとしたやうな心持とは炭と雪ほどの相違となつてしまつたのである。

本卷收むる所、祇空の「みかへり松」は俳壇が右のやうな有樣にある正德五年に上梓されたものとして、當時の頽ぶれが見わたされる、祇空は宗祇を慕うて剃髮隱遁を志した、之は其の賀吟を集めたもの。祇空の句「初御膳波の入日を朝日かな」は夕日が岡に於ける家隆卿の歌を引いたものとしても佳吟とは云ひ難いが、兎も角、世間の俳人が俳壇意識にのみ趨つて俳諧の精神を忘れてゐる時に、超然として己が獨りの姿に戾り、其行履に於て宗祇芭蕉の高風を模倣しようとしたゞけでも、一つの貴い回顧を暗示したものといふべく、祇空の門下が後に江戶に於て所謂、四時觀とて俗流に對する反抗を聲明した事や、祇空の系統を引いて太祇の出たことなども故ある次第である。

淡々の「花月六百韻」の成つた享保四年頃からしばらくは俳壇の墮落をきはめた頂上であつて、淡々は其頃の俗惡なる宗匠の代表的なるものと云つてもよからう。其角の傳流なる江戶座の後に洒落風、化鳥風などゝ稱する輕佻なる風體を以て喝采を博してゐるのに對して、浪華ぶりといふ一派を以て關西に名聲を得ようとしたのは此淡々である。一體、當時の俳諧に遊ぶ人々が藝術などゝいふ氣持をもつてゐるのではなく、好い點を取つて鼻をうごめかしたいといふ程度の娯樂心理なのであるから、其を裁く宗匠が點料をとつて己が利養の手段とするのも當然、又色々の新奇な點式などを案出して初心者を喜ばし門下を殖やさうとするのも當然である。而して斯うした雰圍氣から佳い作品の出

る譯がないのも素より當然である。

斯樣な俳壇の現狀に甚だあきたらずして、芭蕉の正しい傳流を復古しようといふ最初の企てをなしたものは所謂「五色墨」の徒である。宗瑞、蓮之、咫尺（寥和）、素丸（馬光）、長水（柳居）等が連吟を互に判じ合つた「五色墨」が開版されたのは享保十六年。彼等が時流を慨した言葉は其序言に「俳道日ニ盛ニシテ但シ作者ノ心ヲ用フル者ナシ、或ハ腹藁ヲ以テシ或ハ糟粕ヲ甜リ、點ノ勝負ヲ爭ヒ以テ當日ノ判者ニ媚ブ、雪月花ヲ甘ニ意ナシ、其ノ席ニ臨ムヤ前句未ダ喰ジ了ラザルニ競テ自己ノ句ヲ唱フ、其ノ豫スル所ヲ以テスル也」と云つてゐるのでも解る。彼等五子は點者を職としないでもいゝ生活をしてゐるので、自由な立場から先づ正しき一矢を放ちえたのである。けれども彼等自身も互ニ難陳シテ以テ相娯シム也と云ふ如く、復古運動として新しいムーヴメントを起こすといふ程の眞劍味はなかつたやうである。然し、それから後二十年を經た寬延四年（寶曆元年）に彼等の志を繼いだ若い人々が「續五色墨」を出してをり其中には二十一二歲の蓼太が雪中庵門下として名を列ねてゐる。斯うした青年者の自由な研究がやがて此後に來る所の俳諧中興の大勢に何等かを寄與したとすれば、五色墨一流はたしかに新時代の烽火だつたと云へるのである。

高點取らうの連中と點料取らうの宗匠等とが俳壇を俗了し去つた享保の末から元文の頃、江戶石町の鐘樓の下に小庵を構へて、時流に染まらない一俳士があつた。それは早野巴人、初め其角の門に學び、後嵐雪に就き、（雁宕の云ふ所によれば）寶永の初めに既に著名であつたが、元來名利を好まない爲か京洛の地に放浪して靜かに吟腸を養つたりした。此人こそ夜半亭第一世であつて、蕪村の師なのである。「夜半亭發句帖」は寶曆五年、其第十三回忌の供養に雁宕が編んだもので、蕪村は跋を書いてゐる。

宿引の宿をさすさくら哉　　巴人

肩ぬぐは女道者か藤の花　同

挑灯の三つ四つ別れほとゝぎす　同

飛ほたる淋しき闇の遊びかな　同

新樹高く吉田の橋もすぐる也　同

鳴ながら川とぶ蟬の日影かな　同

伊勢近し尾花がうへの鰯雲　同

ひぐらしのふいと一聲月夜かな　同

木がらしに塔は鎧ふて立ちにけり　同

刀もつ女子の供や小夜ちどり　同

後に、蕪村の俳風を論ずる上の參考としても、之を爰に擧げておくべき意義がある。

巴人を擧げるにつけて、當時の俳壇に於て同じやうに、獨り靜かに己を樂しませてゐた俳人として、千代尼と也有とに言及せねばならない。本卷には「千代尼句集」（寶曆十三年刊）と也有の「蟻つか」（明和七年刊）とが收錄されてゐる。千代尼は支考からも乙由からも教へられたが、其先生が惡い爲であらう、作品全體としては決して佳いとは云へない。但し非常に才氣のあつた女と見え、三界唯心といふ事を發句にせよと云はれて卽座に

百生や蔓一すぢの心より　千代

と答へたといふごとき話の方から名高くなつてゐる。尤も、女らしいしつとりした句として、

蝶ゝや何を夢見て羽づかひ　千代

とぼし灯の用意や雛の臺所　同

ゆふがほや物のかくれてうつくしき　同

牽牛花やまだ灯火の影もあり　同

月の夜や石に出てなくきりぎりす　同

音添うて雨にしづまる碪かな　同

などは愛誦するに足りる。

男さへきかれぬものをほとゝぎす　千代

白菊や紅さいた手のおそろしき　同

朝顔に釣瓶とられてもらひ水　同

何着てもうつくしうなる月見かな　同

の如き句は、如何に女らしい氣持と見ても、其女らしさを誇張した所がイヤミである。剃髮した時「髮をゆふ手の隙明て炬燵かな」といふ吟は多くの人の知る所である。

也有は尾州侯の重臣にして千三百石を食んでゐた。「蟻づか」の序に「昇平ノ良臣風月ノ長者ナリ」とあり、温厚沖和ノ氣粹と云はれてゐる。少壯ヨリ書劍ノ餘力ニ俳諧是レ嗜ムといふ通り、早くから俳道にたづさはつてゐたのだが、俳諧を業とする必要がなく、又、之を以て名をなす野心もなかつた爲に、俗流をぬくことが出來たのである。尤も彼の氣質に洒脫味がありすぎた爲か、其句は高雅とは云ひ得ないのである。

風は今斯うかはつたと柳哉　也有

乞食にも手をつく噂の蛙かな　同
水を出て蚌に流るゝ螢かな　同
長雨にみじかく成りぬかきつばた　同
木つゝきや桶屋は飯に休む間も　同
錢出してぬれる渡しの時雨哉　同

斯うした趣味はユーモアといふべくも理智が勝ちすぎる。之はどうも俳句ではいけない。その同じ趣味が彼の俳文に於て初めて生きたといふべきであらう。その有名な「鶉衣」に就ては追て說論しよう。尤も集中から稍佳なるものを拾はうとすれば、

張物に足袋ぬぐ日あり梅の花　也有
二つ三つ星見出すや啼く蛙　同
畠から珠取りえたり初茄子　同
風鈴は鳴らで時計の暑さ哉　同
雨の日や夕飯ごろのきりぎりす　同
飯粒で障子はりけり秋の暮　同
聞きつゝも糊摺る軒のしぐれかな　同
草枯や少し野守が大根畑　同

其他まだ拾はれぬ事もないのである。而して千代尼にしても也有にしても、たとへ是等の少數の稍勝れた作が、其角

座や浪華ぶりなどの人々には思ひもつかぬ所なのだから、是亦、俳壇中興の勢に脈絡の通ずるものと見ることも出來るのである。

阿誰の「反古衾」を繙てはじめて、

柳ちり清水かれ石ところ〴〵　蕪村

此蕪村の發句に逢着するのはうれしい。而かも、李井、百萬、阿誰との歌仙になつてゐる。之は寶曆二年の梓行になるもので、其時代の其角系統の人達が、

くるしみて竹のもてなす雪見かな　平砂

松風をこまかにもみて紙子かな　湖十

などゝ、非詩を興じてゐるひまに、蕪村が既に眼のつけ所を異にしてゐた點などもうかゞはれるのである。

さて、俳諧中興の趨勢が漸く熟して來たのは寶曆を過ぎて明和年間に入つてからであるが、其中心は京都だつたのである。明和三年から四年にかけて太祇、隨古、嘯山の三吟、二十卷を重ねた「平安二十歌仙」は丁度彼等の脂の乘りかけて來た時である。蕪村は此書に「其角が月に嘯く體にも倣はず、嵐雪が花にうらめる姿にも擬せず、まいて今の世にもてはやす蕉門とやらむ質をもはらにするにもあらず、たゞ己が心のさま〴〵に思ひ邪なきをのみたうとぶ成べし」と序してゐる。彼等は共に正しい意味に於ける芭蕉時代の俳諧の精神を復興しようと志してゐるのではあるが、たゞ昔の句風を其まゝ今に口眞似しようといふのではない、其では無意味である。そこに新しい時代の色彩と彼等の個性とを出さうとする。又、彼等は支考や乙由の俗臭紛々たる句調を嫌つて之を蕩掃しようとする意氣に燃えてゐたに違ひないが、かの淡々等の如く俳壇を占領しようといふ風な野心はなく、自分達は靜かに自分達の道を開くといふ

心持であつた。彼等は悪く戰闘的な態度に出ない、さりとて遊戯的にノホヽンとやつてゐるのでもない、即ち其の創作的の熱情も研究的の態度もすべて藝術に向ふ心であつた事が佳いのである。其は彼等が當時の所謂俳人タイプではなくて、ほんとうの詩人的の氣質をもつてゐたからである。而して、所謂俳人によつて俗了された俳壇を廓淸する者として、蕪村太祇を待たねばならなかつた譯もうなづかれるのである。「平安二十歌仙」の行き方は

雪しつほりと古き家作り　　嘯山
この頃は主の機嫌も取にくし　　隨古
假名の付たを貰ふ句雙紙　　太祇

かういふ風である(句雙紙とは禪語の美辭を抜粹したもの)。世態風俗を寫すにしても好く其機微に入つてゐる。之を湖十一派の「延享廿歌仙」(延享二年)中のものと比較して見れば

三味線の音のわるき深川
十五からはたちの間の其長さ
中が見たさに漏刻を買

之では尋常の連想にすぎない。太祇等はなか〳〵大膽に人間の世相を俳諧眼を以て料理して行つたのである。

あとで暦を見ても吉日　　太祇
看病人のはらむをかしさ　　同
はた〳〵と嫁になりけり娘ども　　同

太祇の發句も此連句の調子から得て來たのであらう。

妾人にくれし夜ほとゝぎす　太祇

芝居みる後さびしや秋の雨　同

嘯山の付句は、それほどでもないが、

いつとなく小說物をはやらかし　嘯山

俳諧師無理な熟字を遣ひゐて　同

など微笑すべきものもある。

安永六年（明和九年）上梓の「其雪影」は蕪村門下の几董が其父几圭の第十三回忌の追福として出したもので、此中には蕪村の發句も付句も見える。

欠〳〵て月もなくなる夜寒かな　蕪村

秋しづかさに謠一番　几董

やへ葎どびろく賣も見かぎりて　竹護

遠山高く遠山低し　村

蕪村一黨の發句も卷尾に出てゐる。

春のうみ終日のたり〳〵かな　蕪村

なには女や京をさむがる御忌詣　同

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし　同

出かはりの疊へおとすなみだかな　太祇

うぐひすのしのびあるきや夕しぐれ　同

うたゝねに使三度や春の雨　几董

湖の水かたぶけて田植かな　同

曉の雷晴れてけさの秋　同

山かげや菜の花咲きぬ春すぎぬ　馬南

山一つあなた丹波や雲の峯　百池

にこゞりへ共に簪さす女夫かな　召波

支考乙由淡々などの理屈と技巧とでこねあげた低俗な句を見た眼で、是等の句に對すれば、闇夜を過ぎて太陽を迎へ得た如き觀がある。自然の靜かなる姿に觀入し、又、人情のまことなる美しさ、あはれさに感じ入る、之は是れ蕉門俳風の正しい道である。而も句材を取ることは芭蕉時代よりもずつと廣くなり、表現の手法に於ても遙に能くこなれてゐる。例へば春の雨にうたゝねをしたといふ事は芭蕉時代でも云ひ得たらうが、「使三度」といふ事までは思ひ及ばなかつた趣向である。「曉の雷晴れて」の一讀後爽快を覺えるやうなリズムも新しい此の中興時代の特色として出て來たものである。

安永二年梓行の「明がらす」の中には更に諸子の佳い句を擧げることが出來る。

牡丹散て打かさなりぬ二三片　蕪村

苗代や鞍馬のさくらちりにけり　同

不二ひとつうづみのこして若葉かな　同

戀々として柳遠のく野路かな　几董
秋の夜や母につかふる虔法師　同
うごくとも見えぬ田螺の歩みかな　維駒
よき友のくすし見えけり日の盛　馬南改 大魯

越えて安永五年の「續明烏」を見れば、

元日や草の戸ごしの麦畑　召波
鶯のあちこちとするや小家がち　蕪村
耕や鳥さへ啼かぬ山かげに　同
夜を春に伏見の芝居ともしけり　田福
日は落て増かとぞ見ゆる春の水　几董
行春や選者をうらむ歌の主　蕪村
菜の花やよし野下りくる向ふ山　太祇
菜の花や月は東に日は西に　蕪村
わか竹や橋本の遊女ありやなし　同
碁を崩す音幽かなり夏木立　嵐山
夕風や草葉をつかむむら雀　蕪村
蕣や明星すめるすそ盛　嘯友

負まじき角力を寐物がたりかな　蕪村
物たいて花火に遠きかゝり舟　同
からうじて山田みのりぬ落し水　几董
初冬や兵庫の魚荷何々ぞ　召波

佳句を拔いて行けば限りもない位である。安永年間に入つて、彼等の句境が更に一段の進歩をなしたことは明白である、尤も太祇召波は既に寶暦末年に歿してはゐるが、句作の上の進歩は選句の上の進歩でもあり、從て故人の佳吟が改めて取上げられたとも見られるのである。又、此集には樗良、曉臺、青蘿、麥水、二柳、千代の如き他門名家の句も收錄されてゐるが、蕪村一黨の句に較べれば、ずつと見劣りされると思ふ。兎も角、俳諧中興の新風は蕪村一黨に依て擧げられ、動かすべからざる業績を殘したものと云ふべきである。

發句即ち俳句が、斯樣にすばらしい飛躍をなしたのと較べれば、俳諧即ち連句は思ふほどの躍進をしてゐない、たゞ佳いといふにとゞまるやうである。

紺屋が背戸の桃の茂り葉　几董
此比の日さへせはしき節句前　霞東
只よそながら娘見せおく　大魯

むしろ、芭蕉時代の「炭俵」の方に團扇をあげたいとさへ思はれる。之は、發句と連句に對する作者の意氣込の差から來てゐるのではあるまいか。芭蕉時代に於ては、同人が集つて練磨するといふのは連句だつた、創作的に力を注ぐものは連句だつたのだが、蕪村の社中に於ては、會合の席上、兼題に探題に發句のみを作るといふ事が多かつた、連

句も勿論作つたけれども、之はどちらかといふと交遊唱和の爲で、創作的に肝膽を碎くのは發句の方だつた。發句が此時代に於て劃世的の新境を開きえたのは其爲だと思ふ。此事はずつと下つて明治の俳壇を考へる時にも當然氣付かれる事である。明治に於ける所謂新派の人達は全然、連句を放擲して發句のみに精魂を傾けた、それが再び發句として革新的のものを産み出す動機となつたのではないか。

几圭の子に几董があつた如く、召波の子に維駒があつた。而して几董が「其雪影」を編した如く、維駒は亡父の十三回忌追福として天明三年、「五車反古」を編んでゐる。追善の意味で召波の發句を立てた脇起の歌仙四卷を形式上の主にしてあるけれども、此集の大部分は發句であり、蕪村一黨の發句は殆ど爰に大輯されてゐる觀がある。

鶯や藪をへだてゝ朝日寺　　召波
春雨や人住て烟壁を洩る　　蕪村
囀や野は薄月のさしながら　　嘯山
鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる　　几董
いかのぼり月も出てある三笠山　　維駒
ゆく春やおもたき琵琶の抱き心　　蕪村
短夜やいとまたまはる白拍子　　同
白馬寺に如來うつしてけさの秋　　召波
大名をとめて蘇鐵の月夜かな　　田福
剃りこかす若衆のもめや年の暮　　太祇

是等の句を見て氣が付く事は、一句の取材が季題を中心にして見ると、かなり離れてゐて、それで付いてゐるといふ味である。「鮎汲や」といへば其下に小鮎を漁る者の描寫が出てくるのが芭蕉時代の普通の行き方だが、「喜撰が嶽に雲かゝる」と眼を轉じて其の背景を叙してゐる。これは連句の中で鮎汲の一句に「喜撰が嶽に雲かゝるなり」といふ付句をした其二句を一つに合したやうな味である。蘇鐵の月夜に大名をとめ、年の暮に若菜に就てのもめ事がある、何れも同樣ではないか。つまり、在來連句に注いで來た力を主として發句にあつめた所から、發句の連句化を生じたのだとも見られぬ事はないのである。

「續一夜松前集」は蕪村が歿して後、天明五年、几董が江戸に下つて、蓼太成美等の名家と應酬したる歌仙を輯めたもの、「續一夜松後集」は、關西方面に於ける几董の關係した連句を主にしてある。

病む顏を親に見せじと化粧して　几董
朝から暑き土藏の白壁　之分
蜻蛉のつるみながらに飛あるき　几董

付け味は明快であり且つ卑俗でない、呼吸もよく合つてゐる。芭蕉の出てゐる連句は芭蕉にリードされてゐるといふ風があるが、此中興時代のものは作者が對等的に切り込みあつてゐる。芭蕉のやうに飛びぬけた上手のない代り、大體として各家の腕が揃つてゐるとも見えるのである。又、此「續一夜松」前後兩集に於て几董は多く脇をつけてゐるが、此の脇がなかなかよろしい。几董はいろいろの點に於ても好いワキ師だといふ感じがする。

寳暦安永天明にかけての俳諧中興の事業は蕪村太祇の一黨のみでなしたことではない。伊勢の樗良は早くから俗流を擺でゝ新聲をあげた。名古屋に於ては曉臺が目ざめ、京都に入つて旗幟を立てた。江戸には蓼太があり、又白雄が

居た。加賀には麥水が起り、同じく其地の産の闌更は京都に來て曉臺を嗣いだ。其他、播磨の青蘿の如き大阪の二柳の如きも錚々たるものである。凡て革新的の事の成る時には諸豪傑一時に起るといふ風のあるものだが、其は氣運が熟したとも、時の勢ひだとも見られるのである。又、是等の諸豪傑が其俳系から云へば多くは支考乙由の流をひいてゐながら、主義に於ては全然之に反して、俳諧中興の意義は支考乙由の風を滅盡するにあつたのも面白い現象である。

麥水は「新みなし栗」(安永五年刊)の跋に「若うして北國に俳句を習ふ、美濃の支考を仰ぎ中つ比伊勢の麥林(乙由)に依る、終に麥水の號あり、其後美濃伊勢卑風の吟多々なるを覺え、蕉翁の意に隔ること遠しとして諸家の風を尋ね、つとめて東西す、岐路紛然たりといへども、只蕉翁の意通ずる方を以て直道とす」といつてゐる。而して蕉風起る初めの武藏曲、虛栗時代の句の方が芭蕉が晩年のものよりも解り易い、それで虛栗の調より入て芭蕉の意を求めるのが捷徑だと彼は考へたのである。「新みなし栗」はさうした虛栗調の復興である。蕉風を復興する道程として、芭蕉の出發した所から出發するといふ事も惡くないけれども、其時代の行き方としては捷徑ではなく、矢張り道だと私は思ふ。

はつ音皆心に對ふ是春か　　麥水

此集は諸家の吟を多く集めてあるが虛栗趣味をもつて貫柱としたので、

宗祇我を戀ふ夜眉毛に月の露を貫　　蕪村

鐘老聲餓て鼠樒を食こぼす　　同

といふ調子である。

樗良と青蘿とは、其住む所がやゝ偏してゐたので、中興の實際運動に於ては遊軍の位置におかれたやうだが、其力

量はかなり確かである。此二人の兩吟を錄した「骨書」（天明六年刊）には

嘶して茶漬ふるまふ板の間に　青蘿

ひざをならべて子が時宜に出る　樗良

曉臺は蕪村を除いては最も、いや蕪村と力を併せて、中興の業に功の多い人である。蕪村はどこまでも詩人風であり、作家肌であり、宣傳的の事はめんどう臭く、寧ろ隱遁的であつたのだが、曉臺は克明であり親切であり、後に花の本宗匠の免許を受けて、世間的にも名聲を博しただけあつて、中興の業を事業として植ゑつける爲には此人がなければならなかつたのである。

わが顏だけに丸き窓あけ　都貢

壺の金ちよつちよつと掘て遣ふ也　曉臺

暮うそ〳〵と遠き人ごゑ　宰馬

之は「秋の日」にある、當時（明和五年）の尾張の俳調として擧げる。都貢、士朗の紀行なる「幣ふくろ」（安永三年）には京都に於ける蕪村、曉臺及び其一味の交遊唱和のさまが窺はれる。

笈の佛のこけてまします　蕪村

いかにせん野渡に人なく船もみず　士朗

世にある夫(ツマ)をたづね侘びつゝ　大魯

古き緒の調べたゆべく花のまへ　曉臺

白雄は信濃から江戸に出て陣を張つた人である。元來、伊勢風の流であるが、蕉風復興の聲に共鳴して、關西の俳壇

と呼應した、又その勢力も大をなした。

名月や建てさしてある家のむき　白雄

帆をまじへて今滿秋の潮かな　同

彼の「春秋稿」(天明五年)からは彼の作としては此二句を採りたい。彼は「寂栞」などいふ俳話を書くには巧みだつたが、作家としては有名程の英傑とは思はれない。

蓼太は嵐雪、李登といふ流をついで、江戸の中興俳壇に新しい勢を定着せしめた人、事業家としてはえらかつたであらうが、作家としては一段と下つたものであらう。蓼太といへば

五月雨やある夜ひそかに松の月　蓼太

を先づ思はせる。まとまつて好く出來てはゐるけれども、三分のなるほど趣味を混じてをり、此のなるほど趣味が此句をして人口に膾炙せしめる所以である。而して彼の句の全體に通ずる所も、やはり此のなるほど趣味の俗耳に入り易い點にあるのであらう。「我師蓼太、登翁の命をうけ、雪門の棟梁として門葉をみちびくこと、四時晝夜倦事なし、旅は風雅のやつれ多しと、波に枕し雲にまたがり……玉くしげ箱根の關の戸を過るも二十年度に及べりとぞ、其志四方にわたり、既にむかし三千の門葉に業返て七柏のとこしなへにひろごり……」といふ如く其一門の人數は多く、俳名は隆々としてゐたのであるが、其は彼の多才明敏から贏ち得た事である。「七柏」(天明元年)に彼は貞德風、檀林風、虚栗風と七樣體の連句を自ら試作して、古來俳諧に七度の變化あることを知らせ、最後の炭俵風に從ふのが正しいと說いてゐる。其例としては

いつぞやの借を投込はした錢

夕　餘　作　る　門　の　ま　な　板

又、「七柏」にあるものから採れば、

さばかりの家出は戀にあるならひ　竺　蘭

蒲　團　ふ　る　へ　ば　文　が　一　本　蓼　太

彼は初心者を教ふるのに上手であり、又、句作にも非常に達者である。それが當時の俳壇を説得し了せたのであらう、凡て蓼太といふ人の才智はあふれるばかりに出てゐるけれども、畢竟、藝術や詩や、才の問題ではなくて魂の問題であり、人間の問題であることは嘗て前卷にも云ふた通りである。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第九卷　終

昭和二年一月五日印刷
昭和二年一月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（9）

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二一二四
二二二四





